5

國譯一切經

大東出版社藏版

LIBRARY
JUN 0 1 1993
UNIVERSITY OF TORONTO

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

本縁部 三

常盤大定
美濃晃順 譯

目次

(本　丁)　(通頁)
佛本行集經解題……〔一—一四〕……一
佛本行集經（全六十卷 自卷第二十八 至卷第六十）……〔四二七—九一六〕……一五
卷の第二十八……〔四二七—四四四〕……一五
魔怖菩薩品第三十一の中……一五
卷の第二十九……〔四四五—四六〇〕……三三
魔怖菩薩品第三十一の下……三三
菩薩降魔品第三十二の上……四四
卷の第三十……〔四六一—四七七〕……四九
菩薩降魔品第三十二の下……四九
成無上道品第三十三……五三
卷の第三十一……〔四七八—四九四〕……六六
昔與魔競品第三十四……六六
二商奉食品第三十五の上……七七

巻の第三十二……〔四九五―五一一〕……八三
二商奉食品第三十五の下……八三
梵天勸請品第三十六の上……九三
巻の第三十三……〔五一二―五二七〕……一〇〇
梵天勸請品第三十六の下……一〇〇
轉妙法輪品第三十七の上……一〇九
巻の第三十四……〔五二八―五四二〕……一一六
轉妙法輪品第三十七の下……一一六
耶輸陀因縁品第三十八の上……一二九
巻の第三十五……〔五四三―五五七〕……一三一
耶輸陀因縁品第三十八の下……一三一
巻の第三十六……〔五五八―五七一〕……一四六
耶輸陀宿縁品第三十九……一四六
巻の第三十七……〔五七二―五八六〕……一六〇
富樓那出家品第四十……一六〇
那羅陀出家品第四十一の上……一六三
巻の第三十八……〔五八七―六〇一〕……一七五

那羅陀出家品第四十の下……一七五
婆毘耶出家品第四十二の上……一八三
卷の第三十九……〔六〇二――六一六〕……一九〇
婆毘耶出家第四十二の下……一九〇
卷の第 四 十……〔六一七――六三一〕……二〇五
教化兵將品第四十三の下……二〇五
迦葉三兄弟品第四十四の上……二一四
卷の第四十一……〔六三二――六四六〕……二二〇
迦葉三兄弟品第四十四の中……二二〇
卷の第四十二……〔六四七――六六一〕……二三五
迦葉三兄弟品第四十四の下……二三五
優波斯那品第四十五の上……二四六
卷の第四十三……〔六六二――六七四〕……二五〇
優波斯那品第四十五の下……二五〇
卷の第四十四……〔六七五――六八九〕……二六三
布施竹園第四十六の上……二六三
卷の第四十五……〔六九〇――七三〇〕……二七八

布施竹園品第四十六の下……二七八
大迦葉因縁品第四十七の上……二八〇
卷の第四十六……〔七〇四——七一七〕……二九二
大迦葉因縁品第四十七の中……二九一
卷の第四十七……〔七一八——七三二〕……三〇六
大迦葉因縁品第四十七の下……三〇六
跋陀羅夫婦因縁品第四十八……三〇八
舍利弗目連因縁品第四十九の上……三一八
卷の第四十八……〔七三三——七四六〕……三二〇
舍利弗目連因縁品第四十九の下……三二〇
卷の第四十九……〔七四七——七六〇〕……三三五
五百比丘因縁品第五十……三三五
斷不信人行品第五十一……三四六
說法儀式品第五十二の上……三四七
卷の第五十……〔七六一——七七五〕……三四九
說法儀式品第五十二の下……三四九
尸棄佛本生品第五十三の上……三六一

巻の第五十一……〔七七六―七八九〕……三六四
尸棄佛本生品第五十三の下……三六四
巻の第五十二……〔七九〇―八〇二〕……三七八
優陀夷因縁第五十四の上……三七八
巻の第五十三……〔八〇三―八一七〕……三九一
優陀夷因縁第五十四の下……三九一
優波離因縁品第五十五の上……四〇一
巻の第五十四……〔八一八―八三二〕……四〇六
優波離因縁品第五十五の中……四〇六
巻の第五十五……〔八三三―八四七〕……四二一
優波離因縁品第五十五の下……四二一
羅睺羅因縁品第五十六の上……四二一
巻の第五十六……〔八四八―八六二〕……四三六
羅睺羅因縁品第五十六の下……四三六
難陀出家因縁品第五十七の上……四四〇
巻の第五十七……〔八六三―八七四〕……四五〇
難陀出家因縁品第五十七の下……四五〇

婆提唎迦等因緣品第五十八の上……………………………………四六〇
卷の第五十八………………〔八七五――八八八〕……………四六三
婆提唎迦等因緣品第五十八の中……………………………………四六三
卷の第五十九………………〔八八九――九〇二〕……………四七七
婆提唎迦等因緣品第五十八の下……………………………………四七七
摩尼婁陀品第五十九の上……………………………………………四八八
卷の第六十………………〔九〇三――九一六〕……………四九一
摩尼婁陀品第五十九の下……………………………………………四九一
阿難因緣品第六十……………………………………………………四九七

◇　　　　◇

索　引……………………………………………………………………卷末

佛本行集經解題

一

本經は、六十卷に分たれ、北天竺の沙門闍那崛多(Jñānagupta)が、隋の開皇七年—十一年(又は十二年。A.D. 587–591 or -592) の間に、沙門僧曇・學士費長房(「歴代三寶紀」の撰者)・劉憑等の筆受によつて譯出せられたもので、譯文に修辭上の文飾少く、往々句節に位置の倒錯を見る所に、甚だ注意すべきものがある。之を Lalitavistara に比するに、その一致部分中には、極めて逐字的契當が見られ、譯文の親切なる點に於て、漢譯「方廣大莊嚴經」に比して、直譯的には寧ろ上位にあるを思はしめられる。よつて、その譯風が極めて叮重なる逐字的直譯であることが知られる(時に省譯せる場合には、梵本にはこれを三度いふ、等と註記せるも注意せられる)。無數阿僧祇劫の修行說に應ずる遙遠なる過去佛の佛統譜と、大衆平章王と甘蔗王との兩古傳を綜合一聯して考案したる賢劫王統の叙述を先行として、兜率上生・托胎・誕生より、諸釋出家に至るまでの佛傳を、極めて豐富なる修飾と本生文學とを以て補綴し、これに所々異部の傳說を參照しつゝ記述した、佛傳文學中の最浩瀚なる輯錄である事が見られる。唯、本經には、梵本並に西藏譯を缺逸するを遺憾とするが、含有する固有名詞並びに音寫語の如きは、Mahāvastu, Dīpavaṃsa, Mahāvaṃsa, Jātaka, Jātakanidāna, Lalitavistara, Buddhacarita, Divyāvadāna, etc. によつて、その大部分が還梵せられるし、本生話及び阿含より引用せられるもの等は、Mahāvastu, Nikāya, Jātaka 等によつて、その原文が、逐字的又は梗概的に想定せられ、Lalitavistara の如きは、殆んどその全卷が利用せらるゝ外、往々逐字的一致を見得るもの三四章あり、Buddhacarita の引文も亦五三散見し得る。從つて文學的或は言語學的研究の點に就いても、多大の便宜が惠まれて居る。これらの詳細に就いては、特殊的傳說なる限り、可能的に註記しておいたから參照せられたい。

二

本經の譯者闍那崛多は、揵陀羅國富留沙富羅城(GandharePuruṣapura)に生れ、二十七歲にして師弟十人と共に東征の途に上り、三年の後、北魏に入つたが、周武の廢佛に遭會して一旦歸西し、隋代になつて再び迎へられて入支し、譯經に從事すること十有五年、この間に、大集・寶

積の部分、諸種の陀羅尼・添品法華、及び本經等を譯出してゐるが、その晩年は餘り幸福ではなかつた。その思想の如きは、何れの教系に屬するものか、譯經種別の多端なるため決定し難いが、本卷の卷首に存する「歸命大智海毘盧遮那佛」の歸敬語を、若し彼の記入とすれば、如來藏系の學者とすべきか。他の譯經に例なき點を考へると、これとても、原本に存したものと見るべきであらう。

三

本經の梵題は、次の經跋より推定して

Śākyamuni buddhacarita

若しは

Buddacaritasaṃgraha

と解せられ、又法藏部の傳本なることも知られる。（これは尚、法藏部傳の四分律に記する佛傳中に、本經のみに傳へらるゝ雲童子本生の引用せられて居ることも、傍證の一つに供し得る。）跋記に曰く、

○或問曰、當何名此經。答曰

(1) 摩訶僧祇師(Mahāsāṅghika) 名爲大事(Mahā-vastu).

(2) 薩婆多師 (Sarvāstivādin) 名此經爲大莊嚴(Mahāvyūha or Lalitavistara ?).

(3) 迦葉維師(Kāśyapiyas)名爲佛生因緣(Jātaka-nidāna).

(4) 曇無德師(Dharmagupta) 名爲釋迦牟尼佛本行 (Śākyamuni-buddhacarita).

(5) 尼沙塞師(Mahīśāsaka) 名爲毘尼藏根本(Vinayapiṭaka-mūlaṃ).

四

右跋記に示さるゝ五個の部派名は、「大集經」、「舍利弗問經」、「比丘三千威儀」、「毘婆沙」、「出三藏記」、「三論玄義」等に指示せらるゝ律本傳持の五部派に相當することは、此の際尤も注意を要する點である。佛滅後遺教に分裂を見、十八派二十部等の對立を見たるは事實とするも、これらの諸部派が、悉く經律の異傳を有したものとは考へられぬ。恐らくは義淨も暗示してゐるやうに、その中の數派のみが、特有の聖典を存したものと想定せられる。而して律書の限りに於ては、印度大陸傳として支那に聞えしものは、右記五部派に關するものであり、律本の支那・西藏の譯傳、亦この外に出てゐない。たゞこゝに存本としては、巴利傳の律及び本生が、この五部の外にありや、又その何れより發展せりやの問題が存するが、これに就いては、多少の卑見もないではないが、今かりに五部傳の外と決定するも、部派的にはその何れかゝと姉妹關係の繫在すべきは、毫も疑ふ餘地なしと信ずる。

さて、律藏の異部的傳承が、五部若し

くは六部を存したとして、それに伴つて、各部派共に、本經に類する佛傳を有したであらうことは、これ又上記の本經の跋文と、巴利傳に Jātakaを存することゝによつて決定してよい。然らば、それらの佛傳が果して現存するや否や、又存せぬとしたなら、如何なる樣式のものであつたらうか、これが考究も亦徒事ではない。しかしそれを論ずるに先達つて、今少しく律藏と佛傳、若しくは本生文學との關係を究めておく必要がある。これに就いて、「智度論」卷百に次の如き記事がある。

　毘尼名比丘作罪、佛結戒應行是不應行是、作是事得是罪、略說有八十部、亦有二分、一者摩偸維國毘尼、含阿波陀那本生有八十部、二者罽賓國毘尼、除却本生阿波陀那但取要用作十部(誦?)
　有八十部毘婆沙解釋。

この文によれば、少くとも龍樹の依用した律には、廣略二本あり、廣本には多數の本生 Jātaka や、阿波陀那 Avadāna (Pali, Apadāna, 譬喩)が含まれて居り、略本にはそれを除去したものであるといふ。而して松本文三郎博士によれば、略本は漢譯存本の「十誦律」に正しく相當し、廣本は義淨が譯出した「根本說一切有部毘奈耶」(譯出通卷百五六十卷となる)の類かと想定せられるが、略本の推定は、決定的なものとなすべく、廣本の推定は、多數の本生阿波陀那を含む點等より見て(Divyāvadāna の傳中一致するもの最も多し)、大いに首肯し得るものがある。これによつて思ふに、原初の律藏は、時代の推移と共に幾多の註釋的記錄を竄入しつゝ、遲くとも西紀二世紀の頃までには、極めて浩瀚たる量を持つことゝなり、日常の敎團生活を淸規する律藏としては、その運用が頗る不便なものになつたと思はるゝ。それが「智度論」にいふ摩偸羅國本(廣本)であり、その竄入の大部分が、本生阿波陀那であつたのである。よつてこれらを抄出して律藏の簡易化を計ると共に、一方には抄出せられたる本生阿波陀那をば、何等かの形に於て纒めて保存するの必要を生じ、それが各部派全般の流行となつたと共に、部派によつてその纒め方に異りを生じたゝめに、本經の跋記にいふ如き、五部の佛傳となつたものと思はれる。

五

五部の佛傳中、現在明かにし得るものは、法藏部の所傳「たる釋迦牟尼佛本行」卽ち本經と、摩訶僧祇師の「大事」の二であり、多少の推定を加へ得るのは、迦葉維部の「佛生因緣」である。他の二に就いては、想定の途がないではないが、今こゝでは控へることゝする。

摩訶僧祇師の傳たる「大事」に就いては、近代左の叙記並に奧書を有する梵本

Mahāvastu が發見せられ、題號は譯すれば大事となるし、內容亦、「本行集經」に類するからして、この梵本と跋記の大事とが同一本たることは、寸毫も疑ふを要せぬ。

Āryamahāsāṃgikānāṃ Lokkottaravādināṃ madhyadeśikānāṃ pāṭhena Vinayapiṭakasya mahāvastuye ādi (vol. I p.2.)

Iti Āryamahāsāṃgikānāṃ Lokkottaravādināṃ pāṭhena iti Śrī-mahāvastu Avadānaṃ samāptaṃ. (vol III p. 461)

(譯、聖大衆部の說出世部の說中敎師の讀誦せる毘尼藏の大事の首。
かく聖大衆部の說出世部の讀誦せる吉祥大事阿婆陀那は完結せり。)

而してこの經尾の題號より見る時は、「佛本行集經」が佛傳そのものを主とする編輯方針なるに對して、これはいかにも阿波陀那を以て編輯樣式の主體とするやうに思はれる。この題稱によつて直觀せらるゝ兩本の相違點は、內容の比較に於ても亦注意せらるゝことで、從來學界は兩本の一書異傳を唱へるけれども、それは決して、漢譯に於ていはるゝ異本とか異譯とかの類ではない。もし兩者に比較的に一致文獻があり得るとすれば、それは共に佛傳に關係する書としての偶然的契合であるか、乃至は何れか一本が他の一本を參照して作製したゝめである。蓋し、兩書に就いて逐字的の一致を求めるとすれば、恐らくは皆無といつて然るべく、稍一致に近き部分を擧ぐるとしても、全體の三分の一程度のことである。その他單に記事項目の一致を求むれば、量からいつて相互にその三分の二以上を擧げ得るとしても、その一致は今いふ如き意味での偶然性であり、猶それを一致部として認めるとしても、その餘に全量の三割弱は全然相互に相當部を缺くものである。故にこれを以て、單純に異傳と稱するは正しくない。更にその不同點を檢覈すると、甲(本行)にあつて乙(大事)にない部分は、主として佛傳に關する鑽仰的部分であり、乙に存して甲に缺く部分は、殆んどその全部が、本生阿波陀那の類に屬する文學(第一卷に存する十地の記事をも含めて)である。こゝに一方が佛傳を主として本生を縱に編纂し、一方が本生文學を主にして佛傳を敘述しようとした編輯方針上の特色が、明かに見得るのであつて、以て兩者は別部別傳の同趣の書といふに止まるを知り得る。(但し、實際は本行集經は、佛傳書として律藏中の資料を整理し系統付けた完成品であり、大事は、單に律藏中より佛傳資料を律藏記入の順次のまゝに抽出したるに止まる、未完成佛傳であるかも知れない)。

次に迦葉維部の「佛生因緣」、これに相當するものは缺逸して傳はらない。從つ

て果して如何なる様式の佛傳であるかは不明であるが、佛生は正しくJātaka なるべく、この點より推定を試むる時は、それが少くとも編輯様式上では、本生文學を主體とし、それに佛傳を加味したものか、或は本生輯錄の序說として、佛傳を登載したものではないかと想像される。而してこの推定に對して最も類接した佛傳文學は、巴利傳の本生因緣 (Jātaka-nidāna)である。この書は、漢譯には傳はらなかつたが、西藏には Skye-pa-rabs-kyi Gleṅ-gshi (梵題 Jātaka-nidāna) として傳はつて居り、(錫崙渡來の跋あり) 內容はほゞ一致するも、巴利本に比して稍古き面影を存する。(この點、かの漢譯「善見律毘婆沙」と Samantapāsādikā との如き關係を見る。これ巴利聖典の或るものが、或る時代に於て大改訂の加へられて居ることを證するものである)。而してその內容は四篇よりなり、第一遠因緣には然燈佛世より兜率上生期までの菩薩の修行を叙述し、第二中因緣には兜率降臨より成道までの佛傳を、第三近因緣には祇園精舍の建立までと、滅後の舍利塔建立に關する件とを擧げて居り、第四本生叙說は、この書と本生經との聯絡を計つた短章である。要するに、本生譚を纂輯するに就いての全體的序說として、佛傳の一般を利用したものと言つてよい。これに對して、迦葉維部の佛傳なるものは、纔かに「本行集經」中に引用せらるゝ部分的記錄しか傳はらない爲め、今直ちに兩書の一致を速斷することは出來ないが、しかし兩者の間には、何等かの因緣關係が存するものと思はれる。少くとも編輯様式に於ては、その題稱の類似するが如くに、類似するものがあり得るやうに思はるゝのである。

六

次に本經の特色に就いて考察して見ると、凡そ他の佛傳文學に異る著しい特色として、左の四點を擧げ得る。

一、最初に佛統譜を掲げ

二、次に王統譜を出し

三、多數の本生譚を含有し

四、各種の異傳を雜糅す

佛統譜は、四類の異傳を雜糅してゐる。その第一類は、目連の質疑に應ずるもので、三十億の釋迦如來を第一群とし、次下同名多佛の十數群を經て、第十七位に示誨幢如來を擧ぐるもので、別行異本と認め得るとのに、宋施護譯の「諸佛經」(Bahubuddhaka-s.)一卷があり、Mahāvastu の卷一、五七頁より六一頁に亙つて出るものである。第二類は、阿難の問に答ふるもので、帝釋幢如來より求脫如來に至る一百二十世の各佛次第授記の佛統を擧ぐるもので、これまた Mahāvastu の中に見ゆるけれども、(卷三、一三三頁以下)、

記錄の目的は本經と異つて、かの佛歸鄉の際に次第行乞せられたる時、父淨飯王がこれを以てわが王統を辱かしむるものといへるに對し、佛はわが傳統は世俗的王統には非ず、然燈佛以來の佛統なりと答へられたとする古傳と、その規を一にするもので、たゞその佛統を示すに、多佛經(Bahubuddha S.)なるものを利用したものに外ならない。こゝに同一の材料を使用しながら、兩書の編輯方針の異る所以を明かに擧示してゐる。而してこれは、恐らくは兩書が共通素材を依用したものなることは、Mahāvastu のこの記事の見出しが、Bahubuddhasutta となつてゐることで知られる。第三類は、然燈佛の本生に始まり、以下過去七佛に連絡せしむる十五世の諸佛供養の經歷に、更に彌勒菩薩の下に修行までを出すを見れば、こは明かに未來佛までを含めるものであり、巴利傳の二十四佛(或は二十八佛)の傳統の類の佛統譜を用ひたものと見られる。而して Mahāvastu では、然燈佛の本生に關することのみが、迦葉が目連に對して說く形式で、出て來るけれども、その餘の諸佛に就いては言及するなく、別に Maṅgala 佛に關することを記せど、この方は却つて本經に缺けてゐる。その然燈本生も、本經では寶體・能作光二佛の下で、然燈比丘の修行發心授記を得たるを記すが、Mahāvastu には之を缺く。(これも本經の中に、こゝの記事を然燈菩薩本行經と呼んでゐるから、その援引の材料が推知せられる)。よつて思ふに、この第三類のみは、全然 Mahāvastu に缺くものとなすべく、然燈本生の如きは、偶然の一致に近いものとも見られ、記述の目的にも挿入の場所にも、各々異りがある。而してこれに近き佛統譜を求むれば、可なり出沒は存するけれども、巴利傳の二十八佛說(明かに十五佛は一致する)が、最も近いと考へられる。第四類は、雲本生に始まり、然燈佛より中間佛を前と異にして過去七佛並に彌勒に連絡する十八世の佛統で、この方は Mahāvastu は二分せられて、雲本生は前記然燈本生の下に、十八世の佛統は第二類に記したものゝ續文に繼出してゐる。これを以て見るに、本經と Mahāvastu との佛統譜には、可なり共通點は存するけれども、共に、共通素材を持つてゐたといふに止まり、その間に異本的關係があるものとはいひ難く、かつその素材としては、本經に依る限り、四種若しくは五種を數ふることが出來るのである。(猶この他に、本經は迦葉維部・摩訶僧祇部・尼沙塞部等、薩婆多部の異說を參照してゐる)。而してこれを、更に餘他の佛傳に就いて考察する時は、然燈授記のことや、過去七佛等の下に修行せること、乃至「大莊嚴經」の如く單に過去佛の名を列擧せるもの等

あるにはあるが、未だ本經の如く、一つの組織的大系の下に、佛統譜として揭ぐるものは、前記巴利傳(Jātakanidāna)とMahāvastu 以外に存しない。

次に王統譜に就いて見るに、本經では、大衆平章王と、甘蔗王との二種の傳統をば、巧みに一連として記載してゐる。これが元來二個の別傳たることは、前者が「長阿含」小緣經(D. 27 Aggañña S.)の中に、この世の起原を說明する爲に記述せられ(釋迦族の王統に關係なし)、後者は「長阿含」阿摩晝經(D. 3 Ambaṭṭha S.)の中に、釋迦族の祖先として記入せらるゝことによつても知られるが、後にこの兩個の傳說を利用して、釋迦族の王統を假作する風を生ずるに至つたもので、(兩傳を結合するに、「中阿含」大天㮈林經(M. 83 Makhadeva S.)の傳說を利用する。)而もその假作に當つては、古印度の各種の王統傳說が利用せられた爲に、作者を異にする各部派の間では、利用せる材料の異るに從つて、その間著しい相違を來す結果となつた。試みに甘蔗王より淨飯王に至る間を調べても、極端に期間の延長を計つたものは、記名十四世、無記名八萬二千世を擧ぐる說(巴利傳)と、四五世しか數へるもの(大部分)との如き、大差異を持つてゐる。從つて本經所記の王統の如きは、殆んど全同的な他の傳書を見ることは困難で、Mahāvastu の如きは最も差の大なる傳に屬する。今之を强ひて他に類傳を求むれば、大衆平章王より甘蔗王に至るまでのものは、(嚴密にはこの間も二期的發達を持つてゐる)巴利傳(Dīpavaṃsa. Mahāvaṃsa)「衆許摩訶帝經」・「起世經」・「起世因本經」、「有部破僧事」の五を擧ぐべく、Mahāvastu の如きは、前半二十九王に對して、五王を數ふるに過ぎない。次に甘蔗王以下に就いては、殆んど他傳との一致を決しがたい。而して、上記の一致を見るものといへども、佛傳として記載するものは、本經と衆許摩訶帝經のみであり、(その點では Mahāvastu も同趣)、他の佛傳では、殆んど例のないことであるから、これ亦本經の特色としてよい。

第三に本生を含有すること。この特色は、一般佛傳では發見し得ず、たゞ Mahāvastu と Jātakanidāna とがあるのみである。

第四、各種の異傳を含有すること。これも Mahāvastu に見らるゝ特色ではあるが、到底本經のそれに及ぶものでない。本經に於ては、明かにその主張者の名(摩訶僧祇・迦葉維・薩婆多・尼沙塞)の名を指示する場合と、單に別師の說といふものとある外、何等の指定は存しないけれども、どうしても異部の傳說を取り入れたと思はるゝものが、全經の處々に散在してゐる。例へば、一方には摩訶波闍波提

を以て佛の生母の如く擬しつゝ、次下には摩耶夫人を生母とせること、或は出家處を一方に羅摩としつゝ、後には阿尼彌迦とするの類などである。この二地の同異について、考證の可能はあると思ふが、そはこゝに言ふを要せぬ、兎もあれ、この記事を含む兩文が、明かに異傳である事を認めざるを得ぬ。殊にその最も著しい引用として注意せらるゝものは、殆んど、全經に近い引用又は參酌を見る Lalitavistara との關係である。實にかくの如きの內容は、その名稱に「集」字を置くに適ふと共に、又他に類例少き特色とすべきものであらう。

七

次に本經の內容を檢するに、全經別れて六十品となるが、大別して、前生期（佛傳前期）、今生期（佛傳本期）、弟子列傳の三部と爲すべく、前生期は、更に別つて佛統譜・俗統譜・託胎傳の三となり、今生期は在俗期・出家期・成道期の三となる。而して弟子列傳は、實際には佛陀の傳道生涯を記すのを目的とするから、配列もほゞ敎化の順位を取り、かつ弟子傳以外の事を記す品目も五品ある。而して諸弟子の傳記は、多く出家因緣を主項目と爲し、これに前生譚を附するを常とするから、品名に因緣（avadāna）の語が附してある。この各項は、更に細別し得るけれども、ほゞ六十品の品名に盡きると思ふ。而して品名はそれ自體その內容を示唆してゐるから、此に解說を要せぬことゝ思ふ。次下內容の詳解に代へて、品題に科圖を與へておかう。

第一部　佛傳前紀

第一　佛統譜
　發心供養品第一
　受決定記品第二
第二　俗統譜
　賢劫王種品第三
第三　託胎傳
　上託兜率品第四
　俯降王宮品第五

第二部　佛傳本紀

第一　在俗期
（イ）誕生
　樹下誕生品第六
　從園還城品第七
　相師占看品第八
　阿私陀問瑞品第九
（ロ）習學
　姨母養育品第十
　習學技藝品第十一
　遊戲觀矚品第十二
（ハ）結婚
　捔術爭婚品第十三
　常飾納妃品第十四
（ニ）厭世（思想生活）
　空聲勸厭品第十五

出逢老人品第十六
淨飯王夢品第十七
道見病人品第十八
路逢死屍品第十九
耶輸陀羅夢品第二十

第二　出家期

(イ)出　家
捨宮出家品第二十一
剃髮染衣品第二十二
車匿等還品第二十三

(ロ)訪　仙
觀諸異道品第二十四
王使往還品第二十五
問阿羅邏品第二十六
答羅摩子品第二十七
勸受世利品第二十八

(ハ)苦　行
精進苦行品第二十九

第三　成道期

(イ)成　道
向菩提樹品第三十
魔怖菩薩品第三十一
菩薩降魔品第三十二
成無上道品第三十三

本　生
昔與魔競品第三十四

(ロ)靜　觀
二商奉食品第三十五
梵天勸請品第三十六

(ハ)傳道開始
轉妙法輪品第三十七

第三部　弟子列傳(傳道期)

(一)耶輸陀因緣品第三十八
(一)耶輸陀宿緣品第三十九
(二)富樓那出家品第四十
(三)那羅陀出家品第四十一
(四)婆毘耶出家品第四十二
×　教化兵將品第四十三
(五)迦葉三兄弟品第四十四
(六)優波斯那品第四十五
×　布施竹園品第四十六
(七)大迦葉因緣品第四十七
(八)跋陀羅夫婦因緣品第四十八
(九)舍利目連因緣品第四十九
(九)五百比丘因緣品第五十
×　斷不信人行品第五十一
×　說法儀式品第五十二
×　尸棄佛本生地品第五十三
(一〇)優陀夷因緣品第五十四
(一一)優波離因緣品第五十五
(一二)羅睺羅因緣品第五十六
(一三)難陀出家因緣品第五十七
(一四)婆提唎迦等因緣品第五十八
(一五)摩尼婁陀因緣品第五十九
(一六)阿難因緣品第六十

八

以上、本經の解題を概說し終つたが、こゝに佛傳文學の發達經路を略示して、以て本經の佛傳文學に於ける地位を見る

事とする。

惟ふに、熱帶圏に生活を營んだ古代印度民族が、樹蔭を憙み森林を愛したるは自然といふべく、そこに自ら瞑想的民族性を培ひ、森林哲學を創造するに至つたことは、止みがたい民族史の經路であつたと言つてよい。而して瞑想の世界は、覺夢の兩境相通じ、時空の制約を超越して、特殊の文化を建設して行く。この間にあつて、人文史的記錄の輕視せられることは、まことに餘儀ないことであり、今に至つて歷史なきを特殊性とする印度文化は、史的慣性に育まれて來た他民族の學徒をして、常に昏迷の淵に苦沈せしめつゝある。かゝる思想雰圍氣內にあつて、而も佛傳文學の發達を見たことは、まことに奇蹟的にも考へられるが、またしかし仔細に檢する時は、佛傳文學も、亦、印度民族的特殊性に制約づけられてゐることは、容易に首肯し得ることである。即ち佛傳文學なるものは、本來歷史學的使命の下に發生したるものではなくて、敎團生活者の生活淸規の明確を期するために記錄せられたものである。敎團の淸規としては、具足戒の制定があり、具足戒の性質が、隨犯隨制に基くとすれば、之が實踐は地方的に、時代的に、環境的に、その適用の緩急が要請せられる。こゝに於てか、受戒・制戒の前後事由を精査する必要があり、具足戒の解釋は、いはゆる律藏として大成せられるに至つた。この受戒の因緣こそは、實に佛傳文學の骨骼的原型をなし、制戒の因緣（本生・阿波陀那の類）は、粉飾の資料となつたものである。宜なるかな、古簡なる律藏ほど人間的佛陀を傳へ、前生期を缺いて今生期を寫すといふのが定型であり、その今生期を描くものゝ中にても、巴利律の如く、成道より始むるものも存するのである。實際、受戒因緣を記錄するには、成道以前の佛傳の如きは、何等その必要が存せぬわけである。然るに時代の進展は、敎團生活の複錯を加ふると同時に、敎義的にも異常の發達を伴ふことになつて來たから、一方には律藏解說の多端となつて、阿含所傳の佛傳や、註釋文學所傳の因緣譚などをも、廣く輯集することゝなり、又一方には佛身論的立場から、佛傳を莊嚴する必要にも迫られて來た。これらの事情が、直ちに佛傳文學の上にも反影して來る。その典型的なものは、律藏中の資料をそのまゝ無秩序に抄出纂輯したと思はるゝ Mahâvastu-avadâna と、（この抄纂の狀態は、有部律の出家事・破僧事・雜事・藥事等に含まるゝ佛傳資料と比較することによつて想定せられる）、佛身禮讃を主意とする Lalitavistara とである。今佛傳文學の發達を段階的に示すと、

第一期、律藏包含時代

一、**巴利律大品受戒篇**——成道より舍利弗目連の出家に至る。

二、**五分律第三分受戒法**——前紀として俗統譜を加へ、本紀に厭世（四門出遊）以下を加ふ。但し訪仙・苦行の二項を缺き、文中、如瑞應本起中說の語あり、この語は譯者の補加とも見得るが、寧ろこの成道以下に關する記事が、瑞應本起經成立以後の追加にして、律書本來としては、巴利律の如く成道以後を記すを古形と見るべきであらう。これ、佛傳文學が、本來律藏受戒篇に發源しながら、獨立別行さるゝに當つて、著しき發達を爲し、却つて律藏の母傳にまで影響せしめるに至つた關係を示すものとして、頗る重視すべきもののありと思考せられる。

三、**四分律受戒揵度**。俗統譜——五分律に比して發達あり、本紀に入りて誕生問瑞を詳說し、厭世に四門出遊を言はず、出家期の問仙と苦行とを記入する。以下大體巴利律に比すべきも、唯だ樹下靜觀期の二商奉施に當つて、然燈本生を挿入するが注意せられる。蓋し本行集經の傳と合致するものであるが、恐らくは兩者ともに、本行集經にいふ然燈菩薩本行經を引用して、一は佛傳前紀の佛統譜に備へ、一は二商因緣に註記したものであらう。

四、**有部毘奈耶・出家事・藥事・破僧事・雜事**——正しく巴利律の受戒篇に相當すると見るべきものは、出家事の記事であるが、これには舍利弗・目連の記事を主載するを以て、佛傳としては雜事を中心として他の諸事を配せねばならぬ。これらの記事は、何れも異常なる傳說的發展に富み、資料としては、巴利傳の法句や長老偈等の註釋類に存在するものと匹敵する性質を持つて居り、Divyāvadāna, Mahāvastu-avadāna,佛本行集經等の因緣譚には、同傳、又は類傳と見るべきものが少くない。その文飾に頗る大乘的色彩の豐富さを見ることも、又本律傳の特色と爲すべく、爲に譯者義淨三藏も、本律を以て大乘共許と見てゐる程である。

〇十誦律及び摩訶僧祇律の受戒法を說く部分には、上記諸律の如き佛傳原型と認むべきものが見えず（十誦律の廣本と見るべき有部毘奈耶出家事に、佛傳原型の備はらざるもこれによる）、この事實は、佛傳が本來律藏中に胚胎せりと見るに取つての一大難點たらざるを得ぬ。しかし、これは、第一次的の律藏受戒篇には佛傳原型を有せず、第二次的（巴利律）に至つて始めて之を備へ、それが獨立別行せられて佛傳文學となつたと見得るのである。（卽ち律藏文學からいへば、佛傳文學は第三次的發展であり、この第一・二・三次の各

段階中にも、更に各數段の發展が考へられる。)而して十誦律及び僧祇律は、同じく第二次的發展ながら第一次型を重んじ、他律の如き佛傳原型を構作しなかつたと見るべきであり、從つてこれより發展したる第三次段階の有部律(十誦より)中の佛傳が各所に散在してしまひ、又、Mahāvastu-avadāna (僧祇より)の佛傳が、傳記としてはいかにも不整備なる體裁になり已つたのも、又、當然の成行であつたと思考せられる。

第二期、佛傳別纂時代

一甲、**太子瑞應本起經**——本經が五分律に指示せらるゝこと、前述の如くであるから、その所屬部派を彌沙塞部と決定しても無理がなからう。定光本生・降胎・誕生・試藝・遊觀・納妃・出家・降魔・成道・梵天勸請・度五比丘・度三迦葉までを記す。

一乙、**異出菩薩本起經**——瑞應本起經と同內容にて、極めて簡潔に出來てゐる。蓋し譯者は、瑞應本起の飜譯に關係した人であり、かつ本經が長く失譯として傳へられてゐた等の點より見て、瑞應本起の試譯的略出でないかと思はれる。

二甲、**修行本起經**——現變・菩薩降身・試藝・遊觀・出家の五品より成り、定光本生より降魔成道までを記す。次の中本起と一連して見るべき經である。

二乙、**中本起經**——前經が成道で結ぶに對して、本經がその續傳と見るべき初轉法輪より始ることは、注意すべく、兩經ともにその原本は曇果が迦毘羅衛國より將來したものといはるゝからして、何かの事情によりて兩人に分割譯出されたものであらう。內容は轉法輪・現變(耶舍等敎化)・化迦葉・舍利弗大目連來學・還至父國・須達・本起該容(優塡王敎化)、瞿曇彌來作比丘尼・度波斯匿王・自愛(波斯匿王敎化)・大迦葉始來・度奈女・尼乾問疑・佛食馬麥の十五品より成り、還至父國品以下は、前記律藏佛傳には未だ纒められてなかつたもの。恐らくは經律二藏中より纂輯補綴したものであらう。

三、**過去現在因果經**——本經は善惡因果を知らせんがためにといふ有目的の下に編纂せられて居るが、內容は定光本生より大迦葉出家に至り、佛傳の前期、本期、弟子列傳、共に頗る高揚莊嚴せられ、佛身論上に於て、敎理史上に於て、著しき發展を爲して居り、正しく次の方廣大莊嚴經への發展段階にある。佛傳が單なる經律二藏よりの抄出時代より一轉して、創作的潤飾に移つた劃期的立場を示すものといひ得よう。

四、**方廣大莊嚴經** (梵本 Lalitavistara)

——本經は佛傳を通じて佛德を鑽仰することを主題とする爲に、內容としては託胎降生より初轉法輪に至るまでに止まり、附加的に三迦葉濟度より釋迦族諸王の出家までを簡說し、放光序分と彌勒屬累を經の首尾に附加して、宛然一般大乘經典の形式を整へてゐる。佛身論的立場より見て、佛傳文學の最高峰にあるものといへよう。しかし本經が、佛本行集經中にその大部分を引用せられる點より見て、經の成立が佛本行集經に先立つべきはいふまでもない。

五、Jātakanidāna——思想的には、上述諸經中の古位にあるであらうが、成立年代より見る時は、寧ろ本行集經等と同時前後と見るべきでないかと思ふ。內容は前述(本項第五節)の如くであるが、祇園精舍建立・佛塔建立等、佛陀の全生涯に亙る點が留意せられる。

六、Mahāvastu-avadāna——屢々說けるが如く、佛傳としては極めて不整備にして、順序體裁に缺くる所あり、從つて一般佛傳との對比に於て難澁を極むるが、佛傳の前紀・本紀・弟子列傳に亙るあらゆる資料を具有してゐる。成立的方面より見れば、大衆部說出世系の廣律より雜然抄出せられたるものなることは、前に述べたるが如くである。本經との關係も、方廣大莊嚴經と相並んで深い。

七、衆許摩訶帝經——西藏傳有部律の記事に近い傳說を有するからして、有部律・破僧事・雜事等の傳にも比すべきものがあり、多少の本緣譚等をも混じてゐる點、本行集經や Mahāvastu の佛傳的地位に對列し得るものがあるであらう。本經は佛傳前紀としては俗統譜に詳しく、佛統譜に於て纔かに託胎を記すに止まつてゐる、本紀は、本行集經と大同にて、誕生より釋迦族諸王の出家までを記述してゐる。

八、佛本行集經——上記諸佛傳のあらゆる部門を網羅完成して居り、佛陀譜・俗統譜を併せ備ふる點、方廣大莊嚴經によりて佛身論的端麗を包含せしめたる點、あらゆる因緣文學に資料を求めたる點、長行偈頌併記せる點等、まことに佛傳の集大成たるに背かず、而も資料配置が能く整備して、かの Mahāvastu の如き雜然の弊なきことは、長く佛傳文學の王座を爲すものといつてよからう。唯だ中本起經の後半所記の如き傳說や、Jātaka-nidāna 所記の入涅槃に關する記入を缺くを遺憾とするが、これは前述の如く、佛傳が本來律藏授戒篇に由來したる事情に因由するものである。

第三期、佛傳製作時代

馬鳴の佛所行讃以下、その數枚擧しがたい。又この外に十二遊經・涅槃經等の如き資料的佛傳も少くないが、本經の解題としては、自ら別部門の業となるから、こゝにはすべて之を省略することとする。

昭和九年一月十五日

譯者　常盤大定
　　　美濃晃順　識

魔怖菩薩品第三十一の中[一]

爾の時、彼等諸女輩、善く婦女妖幻の事を解し、更に復別に餘の誑惑の法を爲して、菩薩を媚亂し、偈を說いて言はく、

『初春佳麗の好時節　果木林樹悉く華を開く　此の如きの美景歡娛す可し
仁や色豐盈にして甚だ端正に　現今幼年にして情逸蕩す　正に是れ丈夫行樂の時なり』
菩提を欲求する道甚だ難し　仁、心を廻して世樂を受く可し
宜しく我等天女の輩を觀るべし　喜ぶ可き形貌、柔輭の身　諸ろの瓔珞を以て自ら莊嚴す』
誰か今能く是の如きの體を得んや　仁、感得し已つて何ぞ受けざる
我身の香潔は蓮華の如くなるを　世間是の如き福德の人　何故に之を捨てて用ひざる』
頭髮は光明あり紺青色にして　恒に雜種の香澤を以て熏ぜり
奇異の摩尼を寶鬘と爲し　華を作り持して以て其上に揷す』
我等額廣く頭圓滿に　眉目平正にして甚だ脩揚に
清淨なること彼の青蓮華に等しく　其鼻は皆鸚鵡鳥の如し』
口脣明かに曜く赤朱の色　或は頻婆羅果[二](bimba-phala)の形の如く
赤珊瑚及び　胭脂[三]に似たり
齒は珂貝の如く甚白淨に　舌の薄きは猶蓮華葉の如し』

【一】 次下の結構、前卷終りより引續き、大途、方廣大莊嚴經（Lalitavistara）に一致するも、著しく敷衍せるものなり。

【二】 頻婆が正音、學名 momordica monadelpha, 蔓(ヒユ)の樹の類。その果實の鮮紅色なるを、佛典中に脣の朱きに喩ふる例多し。

【三】 胭脂、燕脂に同じ、べになり。

語言謌詠に妙音を出すこと　猶四緊陀羅女(Kinnari)の聲の如し
兩乳の百媚皆精妙にして　又復猶石榴果の如し』
腰輭かに纖細なるは　弓五弝の如く
脊膂は寛博に潤にして平かなること　猶象王の頭頂額の如し
雙髀耎白にして洪端直なること　其の狀猶象鼻の若く　六膞し
兩脛は正等に纖くして圓く　清淨なること猶鹿王の　六蹲の如し』
足下平滿にして斜凹せず　赤白なること猶蓮華の輝くが如し
我等の身體の喜ぶ可きの容や　是の如き衆相莊嚴具はり　技能一切皆備足す』
快辯して諸種の音聲を作し　復歌舞を巧にして衆心を悅ばす
諸天我を見るや皆歡喜して　悉く各我を羨んで欲意を生ず』
我等是れ仁を樂まざるに非ざるに　仁今我を見て何ぞ貪らざる
又人の金寶藏を覩て　捨離して之を棄てて遠く逃走し
財物の是れ樂因なるを知らざるが如し』
仁の心意も亦復然り　五欲の快樂を識らず　寂定安禪して我を取らず
或は仁者は是れ大癡なる可し　何故に世樂の情を受けざる　涅槃の道路は甚だ懸遠なるを』

爾の時、菩薩諦心もて諸ろの魔女を熟視して、目暫くも捨てず、正念微笑して、諸根を歛攝し、其身體を定めて、愧無く慚なく、急ならず緩ならず、端直安住して猶須彌の如く、心意傾かず。自餘の方便智慧の門もて、往昔已に會て一切の諸煩惱患を攝伏し、哀愍の言音は、梵響に過ぎ、猶迦七羅頻伽鳥(kalaviṅka)の聲の如し。偈を以て彼の諸の魔女に語つて言はく、

【四】緊那羅の女、歌神なり。

【五】弝。ゆづか。

【六】膞。ひとし、又は直し。踹は蹲にてふくらはぎ。

【七】印度神話に雪山に住すとせらるゝ鳥。既に殼中にありて妙音を出すといはる。

『彼の諸世間の五欲等は　苦多く過多くして衆惱纏ふ
煩惱に由るが故に神通を失ひ　無明陷墜して黑闇に墮す』
衆生之を受けて足るを知らざるも　我は久しく諸の煩牢を捨離すること
猛火の坑毒藥の函の如く　往昔已來早く辭避せり』
旣に甘露の智慧水を飮み　自心覺り了りて他を覺らしめんと欲し
當に微密の敎法門を說くべし』
若し今此の穢欲の事を受けなば　終に能く此の道を得可からず
若し人貪愛の心を增長せば　是を則ち名けて大愚癡と爲す』
旣に自ら自利を得る能はず　況んや復能く一切を利せんや　是故に我今心に耽らざるなり』
世間の五欲の衆生を燒くは　猶劫火の萬物を焚くが如し
五欲は猶水の泡沫の如く　亦幻炎の如く一の眞無し
虛假にして凡夫を誑惑するのみ　智者誰か此事を樂しむべき』
猶童蒙小兒輩の　自許の糞穢中に戲るるが如く
迷惑愚癡無智の人は　種種諸の瓔珞を著くるを見て　觀已りて便ち欲心の想を生ず』
[八]頭髮の根本は腦より生じ　臭穢醜陋なること癰瘡よりも劇し
牙齒の增長すること猶飮ぎ出づるがごとく
脣口耳鼻及び眼等　一切皆水上の泡の如し』
腰骼脊背及び尻臀は　臭處不淨にして血に從つて有り
腹肚屎尿の囊袋は　不淨の諸物其間に滿つ』
是の業皆愛より生ずる所　譬へば輪を造つて[九]輾磑と爲すが如し　愚癡の愛樂も亦是の如し

【八】（原文）頭髮根本從腦生、臭穢醜陋劇癰瘡、牙齒增長猶飮出。

【九】輾は一に碾に作る。ひきうすのこと。

若し一切の諸ろの智人有りて　是等衆の患殃を分別せば　此處に斯の如き樂を受けざらん』
身體は日夜常に流血す　臭處は眼を以て看るを喜ばず
兩髀兩脛雙脚趺を　筋骨相縛して立住せしむ』
我汝等を觀ずるに今此の如し幻の如く化の如く夢の爲の如し　一切悉く因緣より生ず
五欲は眞實の德有ること無し　五欲は能く諸の聖道を失ひ　人を牽きて將て惡道中に入る』
五欲は猶大火坑の如し　亦雜毒の諸器に滿つるが如し　瞋虵の頭の如く觸るべからず』
此處の愚癡は多く迷はされ　强ひて淨想を作して橫に貪を生ずるも
五欲は雇を受けて　〔一〇〕客作するが如し　諸ろ婦人の與に奴僕と作る』
彼の淨戒行道の心を捨て　及び智慧寂定の禪を離れて憒亂喧鬧の裏に住まり
諸の妙法を捨てて欲戲を取らば　彼の人地獄に墮つること疑なし』
是等の諸幻を我見來れり　是を以て意中に貪樂せず
畢竟自在の樂を欲求し　亦他人をして共同せしむ』
我彼の世間を解脫するを以て　虛空の風の縛すべからざるが如し
汝等魔女若し此に滿たば　世間の一切の諸衆生を
我心終に之を分別せざれば、暫く汝等と共に五欲を行ぜん』
我は久しく已に瞋恚恨を除きて　愚癡貪欲一切無し
諸佛大智の聖世尊　心に礙有ること無きは空體の如し』

爾の時、魔王波旬の女等、善く女人幻惑の法を解し、更に情態を加へて、益嬌姿を顯はして、其の身を莊嚴し、亦美妙の音辭巧便を現じて、來つて菩薩に媚びぬ。而して偈有つて說くらく、

〔一一〕『魔王波旬に三女有り　可愛(Tṛṣṇā) 可喜(Aratī) 喜見(Ratī)の儔ひ

〔一〇〕客作。人に傭はれて勞働すること。

〔一一〕魔の三女のこと、方廣大莊嚴に見えず。猶この下Mahāvastu, III. PP. 281ff. を參照。

諸の女中に在つて最も尊豪なり」
魔王善く嚴飾せしめて　速疾に菩薩の所に往き詣り　諸の幻惑を現じて嬌姿を作さしむ」
身をして猶弱やかなる樹枝の　婀娜として風に隨つて搖動する如くならしめ
菩薩の前に在つて向ひ立ち　歌舞して口に是の如き言を唱ふ」
『仁、善釋子當に王と作るべきに　云何んぞ彼の大樹下に坐するか
此の盛上の春妙なる時節に、男女合會して喜歡を生ずるは　猶諸鳥の自ら相娯しむが如し」
欲心一び發れば止息し難し　時は至れり且に共に愛樂すべし　何故に守心して我を觀ざる
我等今者復以て來る　宜しく應に同行して心に稱適すべし」
彼の聖は猶日の初めて出るが如し　億劫に諸行を行じて功を積み
其心の不動なること須彌の如く　妙音清く激して猶雷の響くがごとく
行歩安祥として師子の若く　語言の利益成す所多し」
『世間の衆生思量せずして　恒に諸欲の爲に鬪諍を起し　既に鬪諍を起して便ち言ひ訟ふ
是の如き無智等の諸人は　常に此の如き苦惱に煎らる』
智人之を知つて隨順せず　捐棄出家して遠離し　山林に處つて以て自ら娯しむ」
我今、時節已に現前し　常住の甘露法を證せんと欲す
先づ須く彼の魔衆を降伏すべし　然る後に當に十力尊(Dasabala)を成ずべし」
彼の魔波旬の諸女等　更に菩薩に是の如き言を白さく
『仁者の面目は淨華の如し　願はくは我等の諸の語說するを聽きたまへ」
但且く世王の位を受け　自在最勝の上尊豪として
若くは臥し若くは坐し及び起行せんに　妙音聲を作して斷絕することなかれ」

菩提の極果は甚だ得難し　況んや復諸佛の智慧身をや
解脫の正路は行渉ること難し　仁、誰か往いて能く到る有るを見たる』
是の時菩薩復彼に報ふらく　『我當に決定して法王と作り　天人中に於て自在の尊として
妙法輪の上有ること無きを轉じ　十力・四無所畏を具足し　三界に在つて獨り巍巍たるべし』
諸の〔二〕學・無學の弟子群　千億萬數我を圍繞して
口常に是の如きの讃歎を作さん　「大聖出興して世の疑を除く」と』
我當に彼の爲に說法すべきの時　處處を遊行すること心意の隨ならん
是故に我世間內に於て　一切五欲の歡を樂しまず』
魔女復菩薩に白して言く　「仁今少壯甚だ惜むべし
衰朽年老の時未だ至らず　色力强盛なり且らく情を恣にせよ』
必ず其れ羸瘦堪ふる能はずして　乃ち此身の端正を捨つ可し
我等華容あり悉く三五　正に是仁者の好良朋なり』
五欲の喜戲最も〔三〕娫妍たり　何の故に乃ち然かく我を厭離したまふぞ
仁今若し容受せられざるも　我等隨逐して遂に辭せざらん』
菩薩復更に僞に說いて言く　「今日既に人の身體を得たり　努力して諸難を遠離し
勤求して彼の甘露門に入らん　能く世間の苦難を捨つるの時　則ち人天一切の難を離れん』
今老病死未だ至らず　諸惡鬪諍復興らざるに及んで
我等速疾に應に行じて　早く斯の諸難の處を離るべし
常住寂然無畏の所は　是れ彼の眞實涅槃の城なり』
爾の時、魔女復た偈を說いて言はく、

【二】學・無學（śaikṣa, aśaikṣa）。完全に解脫して學ぶべきものなき阿羅漢果を無學といひ、未だ完成に至らざる前三果を學地といふ。

【三】娫妍。美しくしてあでやかなること。

『仁、天中に在つて釋天の如し　左右端正の諸天女炎摩・兜率・及び化樂　他化自在幷びに魔宮
翫好を具足して虧くる所なし　但五欲を受けて寂滅する莫れ』
爾の時、菩薩偈を以て報へて言はく、
『五欲は霜の如くにして久しく住せず　亦秋の雲雨の暫時なるが如し。
汝女の畏る可きは蛇の瞋れるが如し　帝釋・夜摩・兜率等
悉く魔王に屬して自在ならず　欲事の百怨何ぞ貪るべき』
爾の時、魔女復偈を說いて言はく、
『仁は見ざる可けんや　樹木の華に諸蜂諸鳥の雜音の響きあり
地には青色柔輭の草を生じ　復種種諸の妙なる林を出して
〔一四〕緊陀の諸天は妓聲を作す　是の如き妙なる時樂を受くべし』
爾の時、菩薩偈を以て報へて言はく、
『樹木は時に依つて華果を著け　蜂鳥は飢渴して氣香を取り
日炙の至る時地自ら乾くも　昔の佛の甘露は盡く可からず』
爾の時、魔女復偈を說いて言はく、
『仁者の面色は猶初月の如し　我顏貌を觀れば蓮華に似たり
口齒潔白にして清淨の牙あり　此の如き妙なる女は天中にも少なし
況んや復世間にをや、仁已にこれを得たり　身心柔順にして相違せざらん』
爾の時、菩薩偈を以て報へて言はく、
『「我汝の體を觀ずるに不淨流れ　諸蟲千萬孔を周帀す
不牢の諸惡遍身に滿ち、　生老病死恒に相隨ふ

【一四】緊陀は緊那羅に同じ、歌神なり。

我は世間の最上の難たる　眞正不退智人の道を求む」』
彼(一五)六十四種の巧を見はし　手に瓔珞を動かし耳璫を鑠け
欲の箭に射られて微笑して言はく　「聖子云何んぞ顚倒せざる」』
諸有に患を見る大仁者のたまふ
「美はしき五欲を見ること猶毒餅の如く　利刃に蜜を塗りて舌を截り傷るがごとし。
欲は蛇頭・火坑穽の如し　人師子の行くや風動きて　樹木山壁の悉く崩傾するが如けん
我今威德もて欲の中を離る　汝等を棄捨すること猶彼の如し」』
其諸魔女は百伎を出して　菩薩を衒惑すれども動き移らず
菩薩は象師子王の如く　猶須彌の住して動く無きが如し』
彼等誘誑すること既に得ず　心に慚愧を生じて各低頭し
恭敬歡喜して讚歎して言はく「尊の面の淨きこと蓮華の潔きが如く」』
亦(一六)醍醐及び秋月の如く　巍巍として光照すこと金山の若し
心に求願する所は當に成じて　自ら度し他を度する千萬衆なるべし」』

爾の時、波旬の諸の魔女等、力、既に菩薩を幻惑する能はず、心に愧恥を生じ、各自羞慚して、相與に躬を曲げて菩薩の足を禮し、圍繞三帀、辭退して行き、安祥として還つて魔波旬の邊に向ひ、到り已りて即ち父に白して是の如く言ふ、『父王、意を擧げて彼の衆生の所に向ひて、怨讎を造作すべからず。何を以ての故に。我等昔より曾て是の如き衆生有りて、欲界中に在るを見ず。是の姿態媚惑の事を作して、彼に顯示するも、暫くも移動せず。又復、我等欲事を作す時は、必ず一切の人意を枯乾するを得んこと、猶旱時に諸草木等を必ず焦滅せしむるが如く、猶春時に(一七)酥を日下に置けば自然に融消するが如きに、今此丈夫、何に緣つてか獨り爾かる。是の故に父王、唯願はくは彼

【一五】六十四種巧。婦人が男性を誘惑する六十四種の方法なり。

【一六】醍醐 (sarpirmanda)。牛乳を精製して得たる最上の飲料。クリームの如きもの。今はその優れたる光澤ある色を喩に用ふ。

【一七】酥 (takka or navanita)。牛乳を凝らせたるもの。バタの如し。

と怨讎を作す莫れ』。即ち其父に向つて偈を說いて言はく、

『彼の形は[一八]瞻蔔（Campaka）の色に過ぎ　無邊の威德と勝れたる名聞あり
動かざること猶大山王の如し
頂禮し已訖りて今來至す　我當に委具に其事を說くべし』
彼の眼色は[一九]優鉢羅(Utpala)の如し　微笑して我を觀るも心移らず
面貌清淨にして視るに瞬無し
瞋らず恨みず欲想なし　我等を觀ること幻化の爲の如し』
假使須彌倒れ地崩れ　星宿日月悉く墮落し
大海枯涸して水滅盡せんも　彼欲患を見て心廻らず』
訢言微妙にして人を歡ばしめ　我を觀るも慈悲にして欲想なく
我を見るも瞋恚の意有ることなく　我體を思惟するに癡あるに似ず』
我が意行及び身體を察し、審諦に婦女の患を思惟す
是の故に心に五欲を行ぜず　その離欲無欲なるを誰か能く知らん
是れ人天の度量する所に非ず』
我等婦女の諂を現示するとき　彼が心若し欲心有らば　心意消滅して乾柴の如くならん
而るに我等を觀るも心に欲せず　猶山王の安らけく止住するが如し』
百福莊嚴功德の智　[二〇]檀度を具滿して戒行圓かに
千億劫に梵行を行じ來り　清淨の衆生大威德あり
我等彼の金色を頂禮す　決定疑無く我魔を降して　必ず當に正覺菩提を證すべし』
我等は怨結を爲すを願はず　此陣擊ち難く我勝ち難し

【一八】瞻蔔。學名 michelia champaka, 金色の花をつく。今はその花の色を用ふ。

【一九】優鉢羅。青蓮花、今はその花色を喩ふ。

【二〇】檀度。檀那波羅蜜 dāna-pāramitā の略。布施の最上。

彼を降伏せんと欲する亦大いに難し』
父王但虚空中を觀よ　菩薩の多衆他方より至り　種種の瓔珞莊嚴の體もて
恭敬重心に彼尊を禮し　[21]曼荼羅華等の雨雲あり　妙なる偈頌を作して彼を歎ず』
十方諸佛皆使を遣はして　雜種の妙甘露瀀を持し、[22]有識の衆類悉く皆來り
無情の諸山及び雜樹　須彌山神幷びに帝釋　頂禮して[23]功德林に向ふ
是の故に父王是れ時に非ず　我等宜しく應に本處に還るべし』

爾の時、魔王卽ち偈を說いて言はく、

『凡そ人河を渡らば彼岸に到り　物を掘るを得んと欲せば必ず根を斷つ
若し怨結を作さば須く[24]竟頭なるべし　諸の所爲の事は悔ゆべからず』

時に魔波旬、長子商主の勸言を容れず。亦、復、己れの諸女の諸諫の語を受けず。身、卽ち、自ら菩提樹の所に往き、菩薩の邊に到り、到り已るや卽ち菩薩に是の言を白さく、『汝、釋沙門、今、何を求むるが故に、來つて此の多毒の惡龍、雲雨の野獸、畏る可く驚く可き黑夜の處所に在つて、獨り自ら斯の林樹下に入つて坐するか。汝比丘は、彼の一切の諸怨賊盜の人を畏れざる可きか』。時に、菩薩、魔波旬に報へて言く、『魔王波旬、我今、寂滅涅槃――往昔諸佛所行の處、最上無畏諸有盡の處――を求めんと欲す。是を求むるを以ての故に、獨り自ら此の[25]阿蘭若（āraṇya）中の樹下に在りて坐す』と。

爾の時、魔王卽便ち偈を以て菩薩に白して言はく、

『沙門汝獨蘭若に在りて　苦行して希ふ所甚だ難し
具足方便の老仙人も　禪定失せ已りて並に皆退けり
況んや汝年少時盛壯なるに　此の際妙を求むるは何に因由するぞ』

【二一】曼荼羅華。神話に天界に咲く花といはる。
【二二】有識（savijñānaka）。含識ともいひ、生物中の精神作用を有するもの。無情（avijñānaka）。植物と非生物。非常に同じ。
【二三】功德林（Śrīvana）。釋尊成道の林をいふ。
【二四】竟頭は終局までやるの義、今時の徹底なり。頭は接尾辭。
【二五】阿蘭若。森、轉じて閑靜なる修行處をいひ、再轉して寺院をもいふ。

爾の時、菩薩、復、偈を以て魔波旬に報へて言はく、

『往古の諸仙苦行の者は　精進勇猛未だ甚深ならず
彼は福報の善力强からず　我は昔持戒の誓牢固なり
波旬、我若し道を證せずんば　終に此の樹林を捨てじ』

爾の時、魔王、復、偈を説いて言はく、

『我は欲界に於て最も尊たり　帝釋、護世[二六]も皆我に由る
修羅・緊那・龍王等も　阿鼻(Avīci)[二七]以來皆我民なり
汝も亦我が界中に在り　速かに起ち自ら憶うて此の樹を離れよ』

爾の時、菩薩、復、偈を以て魔波旬に報へて言はく、

『汝欲界に於て自由なりと雖も　決定して法界には自在無し
唯地獄・餓鬼等を知るのみ　然るに我は今[二八]三有の人に非ず
得道して必ず汝の魔宮を破り　當に汝をして後に自在を失はしむべし』

時に魔波旬、復、菩薩に語つて是の如き言を作さく、『釋子、汝速かに起つて此の處を離れば、定めて當に必ず轉輪聖王たるを得て、四天下を治め、大地主となり、七寶を具足し、乃至、一切の山川を統領すべし。釋子、汝、往昔の實語せる諸仙の、是の如き言――汝が當に王たるべきを記せる――を憶はざる可けんや。宜しく速かに起つて自在世主と作るべし。若し起つて作さば、所謂、威德最上にして、無比如法に、治化の中に住して、一切國を得、所有人民、皆來つて渴仰し、恭敬し、供養せん。又汝釋子は、身體柔輭なり。小より深宮の中に長養せらる。今此の曠野の林內、人少くして多く諸獸有り、雄猛畏る可し。獨自にして伴無くば、恐らくは汝の身を損ぜんを、我、恆に憂愁す。釋子、汝、今疾く此の處を離れて、本宮に還り向へ。得難きを已に得、五欲の微妙、目を悦

【二六】護世(Lokapāla)。四天王のこと。
【二七】阿鼻。地獄の名。無間。苦を受くるに間斷なきを以てこの名あり。
【二八】三有(trayo bhava)。欲・色・無色の三界の存在、即ち迷界一切の存在を概括していふ。

ばし、心に適ふ。愼んで受けざる勿れ。汝、今彼を欲求すと雖も、無上の道は得難し。釋子、未だ知らず、然も其の菩提は、甚成ずるを得難くして、徒らに疲勞せん耳なるを』と。是の語を作し已りて默然として住す。

時に菩薩、魔波旬に報へて言く、『魔王波旬、汝、今是の如き語を作すべからず。何を以ての故に。我が意、五欲の事を樂しまず。魔王波旬、我、久しく已に五欲の諸患を知れり。一たび五欲に耽らば、足るを知るべからず、暫時樂を受くるも、久しく停るを得ず。無常苦空・無我不固なること、猶草上の露の如し。蛇の舌頭の畏る可くして觸れ難きが如し。猶骨聚疽惡の不淨なるが如し。猶肉片を諸獸の共に貪りて、相爭ひ相殺すが如し。猶樹上成熟の果の久しく枝に著せざるが如し。夢の如く、泡の如く、幻の如く、炎の如く、眞實有ること無し。羊糞中に覆はるゝ火の、忽ち然えて人を燒くが如し。魔王波旬、我、今無爲の處を證せんと欲す。波旬、汝、知るや。我、既に已に四天下中、豐樂の處、及以び七寶を捨てぬ。又魔波旬、譬へば人有り、以て妙饌を食して、還つて復吐却して後、更に食せんと欲すること、是の處有る無きが如し。是の如く、是の如し、我、今已に如上の果報を捨てぬ。此れ是の難事や、彼の人の吐きて、既に更に食せざる如し。我、豈宮に還らんや。魔王波旬、我、今久しからずして、定めて菩提を取らん。當に作佛を得て生老病死等の患を盡すべし。波旬、汝、本來りし處に還れ、此に住まるを用ひざれ。汝、漫言多くして利益の言無し。愚癡の人の言のみ』。

時に魔波旬、復更に是の如く思惟念言すらく『此の人は、五欲の事を以て、之を誑かす可からず。我、今當に更に餘の方便を設け、美言辭を以て、彼の心を慰喩して、其を去らしむるを得可し』と。時に、魔波旬、是の如く念じ已りて、菩薩に白して言く、『仁、甘蔗種沙門釋子、速かに起て、速かに起て。仁は小よりしてこのかた未だ戰鬪を見ず。戰鬪の刀兵は、甚だ怖畏すべし。仁者は、但自

家の王法を行へ。此の陣敵の事は、仁の堪ふる所に非ず。又仁、他と共に怨讐を作す莫れ。若し怨嫌を結ばゞ、長夜の瞋恚欲癡貪等、心識を濁穢して、色・受・想・行・識等の諸陰を解脱すべからず。仁、速疾に此の不善の心、不正見の身を廻せ。沙門釋子、仁、家中に至りて、[29]無遮會を作し、別に王法を以て、世間を降伏し、天下を治化して、[30]金輪位を受け、此を[31]戀嫪して、戰鬪傷を爲す莫かれ。仁、自宮に還らば、是れ大威勢福德の子なり。此の如き王路、喜ぶ可きの端正は、往昔の諸王の共に歎美する所、國土廣大に、四天下を統べ、一切充足して、諸事少けず。仁、既に生れて大王の深宮に在り。今日剃髮して比丘身と作るも、此の如く乞士となる合からず。仁、復何を以て沙門の形と爲りて、貧窮活命する。王種釋子、我、仁を憐愍するが故に、是の語を作すも、亦强ひて起ちて此を離れしめず。但、意、仁をして惡を作さしむるに忍びざるのみ』。而して偈を說いて言はく、

『死命畏る可し刹利の種　　宜しく解脫を捨てゝ本宮に還るべし
　立義の弓箭は世間を治す　　今樂を受けて後天上に生れん』
　此の路遍一切と名くるを得　　往昔の諸王皆共に行へり
　仁今旣に王種中に生る　　沙門の乞活命に合せず』

時に魔波旬、是の如く言ひ已るに、菩薩諦かに視て確然として從はず、旣に身を動かさず、亦坐を移さず、心に自ら是の如く思惟念言すらく、『嗚呼、波旬、汝は自利を覓む、是れ我が爲にするに非ず』と。是の如く念じ已りて、波旬に語りて言く、『魔王波旬、我、今已に坐して金剛牢固に、結跏趺坐す、甚だ破壞し難し、彼の甘露法を證せんと欲するが爲の故に。魔王波旬、汝、所作せんと欲せば、意に隨つて卽ち作せ。能く堪辨せんとする所、意に隨つて卽ち辨ぜよ』。

時に魔波旬、瞋發して懊惱し、菩薩に語つて言ひて謂はく、『釋比丘、汝、今何が故に、獨坐して此の蘭若の樹下に在るか』。魔、是の如き虛吼の聲を出すらく、『汝の意に云何ん、「我安坐す」といふ

【二九】無遮會。道俗貴賤を隔てず、一切に對して平等に財法の二施を爲す大法會。
【三〇】金輪位。四種轉輪聖王中の第一。
【三一】戀嫪。したひおもふこと。

や。或は「猶城内に坐するが如し」と言ふや、「自ら牢防の四壁圍遶す」と言ふや。今汝比丘、見ざるべけんや。我が率領し來る所の四種の兵衆、象・馬・車・歩の諸雜軍等の、幡旗、麾纛[三二]・羽蓋・旗旂[三三]、多くの諸夜叉の悉く人肉を食ひ善く神射を解するが、各鞹弓を把り、利箭・槊・矛・鈎・戟・刀・棒・金剛の鬪輪・斧・鉞・種種の諸仗を執持し、千萬億の象駄馬車に駕し、大吼聲を放ちて虛空に充塞し、其の外、復無量の諸龍有り、各皆大黑雲隊に乘じ、閃電雹を放ちて霈霏亂下するを。

時に魔波旬、其の腰間より、一利劍を拔きて手に執り、速疾かに走つて、菩薩に向ひ、口に是の言を唱へて謂く、『釋比丘、我、今此の劍もて汝の身體を截ること、猶壯士の竹束を斫るが如けん』。而して偈を說いて言はく、

『我が此の寶劍は甚だ剛利なり、今手中に在り汝好く看よ
沙門汝若し急に奔らずんば　當に汝が身を斫ること竹束の如くなるべし』

爾の時、菩薩、魔王に報へて言はく、

『一切の魔王此の地に滿ち、手に悉く刃を執ること須彌の若くなるも
彼等我が一毛だも動かさじ　況んや能く我が身體を割截せんや』
魔王よ汝に若し大力有らんも　今我れ菩提を證取せんと欲せり
汝若し能く障へんも我は聽さじ　速かに作佛して住まる莫からん、汝の意に隨へ』

爾の時菩薩、是の偈を說き已り、復魔王に語つて、是の如き言を作すらく『汝魔波旬、若し諸の衆生、千萬億有り、悉く汝の身の如く、力を盡して此に來つて、我に障礙を作し、菩提を妨げんと欲し、我をして阿耨多羅三藐三菩提の證を取るを得ざらしめんも、我終に此處より起ち離れて、餘樹の下に坐せじ』。

時に魔波旬、菩薩に語つて言はく、『釋種比丘、汝昔優婁頻螺聚落の處所、尼連河邊に在り、精進

【三二】纛。軍中の大旗。
【三三】旂。指揮するはた。

の心を發し、六年苦行して、身命を惜まざりしも、猶阿耨多羅三藐三菩提を證するを得ず、亦復最上の解脱を得ざりき。況んや、乃ち今彼の精進の意を捨て、禪定を退失して、懈怠心を生ぜるに、而も得んを承け望まんや』。

時に菩薩、魔波旬に報へて言はく、『魔王波旬、我昔初めて精進の心を發せしが故に、彼の間の阿蘭若の處に坐して、自心を調伏し、我今精進勇猛を成就しぬ。又昔六年苦行の時、快く疲倦を生ぜしが、今日は然らず。汝魔波旬、今我に是の如きの事を諫むるは、是憐愍にあらず。若し憐愍有らば、豈是の如く言はんや。汝、既に是の如きの心を發せり。我今定めて當に自ら解脱するを得、又他人をして當に解脱するを得しむべし。魔王波旬、我、決んで彼の阿耨多羅三藐三菩提を證せん。決んで當に彼の微妙解脱を得べし』。

時に魔波旬、既に菩薩の是の如く語るを聞き已りて、心大いに憂愁し、悉く一切勤劬の力を捨て、復是の如く念じぬ。『我、今、美言美語もて慰喩するも、此の道樹の下を起たしむ可らず。其の誓を發すや重し。既に好言を以て動かしむ可らず。今宜しく恐怖・訶責・戰鬪・割截を嚴勒して、其の心をして驚き、急に起つて走らしむべし』と。

時に魔波旬、是の如く念じ已り、菩薩に語つて言はく、『汝釋比丘、我、既に汝に眞正の言を語りぬ。汝、我が是の如き好諫を取らず。速かに起ち走つて他方に向はずんば、汝は必ず癡なり。汝は今日必ず不善を見ん』。

時に菩薩、魔波旬に語つて言はく、『魔王波旬、我、昔母胎に在りし時、汝等、猶尚我與に諸の障礙を作す能はざりき。況んや復今日をや。魔王波旬、汝、速かに還り去つて、來れる處に向へ。昔より已來、既に汝を畏れず。今亦畏るゝなし』。爾の時菩薩、魔波旬に向つて、偈を說いて言はく、

『虛空の刀仗我が身に雨りて　　寸寸節節に我が體を割かんも

我若し生死海を渡らずんば　此の菩提樹を終に移らじ』

時に魔波旬、菩薩に語つて言はく『汝釋比丘、今然るが若きは、汝が未だ魔の軍衆を見ざるに由る。所以の者は何ぞ。我が魔軍は、身に牢固剛鞕の鎧甲を著け、手に種種の兵戎器仗を執りて、汝の身上に雨らしめん。其の時に當つて、汝釋比丘、自ら應に速かに此の樹下を起ち離れて、我が所に來り到り、必ず當に口に是の如き言語を唱ふべし「魔王、汝、我に歸依[三四]を與ふべし」と。汝、比丘、我が神通を作すを、未だ覺らず、未だ知らず。是の故に、汝は彼の師子座に坐して、師子吼を作すのみ。汝釋比丘、但早く速かに起て。何ぞ今日、口自ら虚しく唱へて、師子吼を作すを須ひん』。而して偈を說いて言はく、

『我に兵馬象等の軍有り　善く鬪戰を解する諸の神將
身に鎧甲を帶び手に仗を執る　今汝命有り、速かに馳すべし
後に於て我に護りを求めんこと甚だ難し　我救はんと欲すと雖も得べからじ』

爾の時菩薩、波旬に語つて言はく『魔王波旬、四大海水、及び此の大地は、餘處に移す可く、日月星宿は、空中より地に墮落すべく、須彌大山は、百段と作す可く、亦大地及び須彌山は、上天に擧げ將つ可く、亦、大地及び須彌山は、覆して顛倒せしむ可く、乾土を以て恆河の水を塞ぎて、其の流るゝを聽さざるべけんも、我が今の此の心は、遮制すべからず。此の處より移轉し離すべからず。何を以ての故に。魔王波旬、我が往昔 修行を行ぜし時の如き、我が身力・禪定・戒行・種種の諸力の如き、是の如きは、波旬よ、若くは天、若くは龍も、過ぐる者有ることなく、勝る者有ること無し。我、往昔に菩提の行を行じて、億百千劫、成就滿足せるを以てなり』と。時に、菩薩、魔王波旬に向つて、偈を說いて言はく、

『淨居諸天は是れ我が衆なり　智力を箭と爲し方便の弓もて

【三四】歸依。保護などいふに同じ。身を依せる所の意。

我今汝を降伏せんこと難からず　猶酔象の枯竹を蹈むが如けん』。

時に魔波旬、菩薩より是の如き語を聞き已りて、瞋恚増上し、瞋り已り復瞋りて其の體に徧滿し、普ねく夜叉・羅刹等を喚んで言はく、『大善將亂衆赤眼、汝等速かに來り、諸山の石・樹木・弓・箭・刀・劒・金剛杵・棒・槌・矛・槊・戟・鈇鉞・種種の器仗を將つて、刹利釋子の頭上に雨らし、悉く墮落して霰の如くに下らしめよ』。爾の時夜叉大善將等、魔波旬の是の如き言を聞き已りて、即便ち四種の兵衆を莊束し、悉く鎧甲を著け、諸の器仗を將つて、速疾かに來る。無量千萬の夜叉・羅刹・及び毘舍遮・鳩槃茶等の、種種の形容、種種の狀貌、種種の顏色、種種の執持や、變現畏る可し。顚倒せる身首もて、異種に叫呼する、惡む可き聲氣なるあり、或は象面なる有り、或は馬頭なる有り、或は駱駝の首なるあり、牛・及び水牛・或は驢、或は狗、或は羊・猪・狼・師子・虎・豹・豺・熊・羆・兕・犀牛・水獺・犛牛・獮猴・狐・狸・野干・猫・兎・麞鹿、是の如き等の形なるあり。及び諸ろの鳥面なるあり、復[三五]摩竭(makara)・黿・魚等の首なる有り。或は蛇頭諸雜蟲の身なる、象頭馬身なる、馬頭象身なる、駝頭牛身なる、牛頭駝身なる有り。或は水牛頭驢騾の身、或は、復、驢頭水牛の身・狗頭猪身・猪頭狗身、或は羖羊頭豺狼の身、或は豺狼頭羖羊の身、或は師子頭虎豹の身、或は虎豹頭師子の身、或は狸貓頭熊羆の身、或は熊羆頭狸貓の身、或は犀牛頭水獺の身、或は水獺頭犀牛の身、或は犛牛頭獮猴の身、或は獮猴頭犛牛の身、或は猨頭野干の身なる有り、或は野干頭猨猴の身、猫頭鳥身・鳥頭猫身、或は摩竭頭黿鼉の身、或は黿鼉頭摩竭の身・魚頭蛇身・蛇頭魚身・畜頭人身・人頭畜身なるあり。

或は復無頭唯空にして身有るもの、或は半面有るもの、或は復半身なる、或は二頭にして唯止一身有るもの、或は復一身にして三頭有るもの、或は復一身にして多頭有るもの、或は復頭有りて面有るなきもの、或は復頭有りて頭有るなきもの、或は復半頭にして面有るなきもの、或は復半面にし

【三五】摩竭。神話に出づる海中の怪魚。

て頭有るなきもの、或は復二頭にして面有るなきもの、或は復面無くして三頭有るもの、或は復多頭にして全く面無きもの、或は全く眼無きもの、或は唯一眼なる、二眼なる、三眼なる、乃至、多眼なるもの、或は復耳無きもの、或は復一耳なる、二耳なる、三耳なる、乃至、多耳なるもの、或は復手無きもの、或は復臂無きもの、或は復一手なる、二手なる、三手なる、乃至、多手なるもの、或は復脚無きもの、或は唯一脚なる、二脚なる、三脚なる、乃至、多脚なるもの、及び無足なるもの等あり。

或は頭の顚頭せるもの、或は復[三六]挈頭せるもの、或は頭下に向ひて脚の上に向へるもの、手足顚倒して割截して懸れるもの、或は眼の顚倒せるもの、或は眼凸出して青碧畏る可きもの、或は赤眼有るもの、或は眼より光を出すもの、或は眼を轉動するもの、或は耳の[三七]嚲るもの有り、或は復耳の猶山羊の如くなるあり、或は耳の驢の如くなるもの、或は樹を耳と爲るもの、或は獼猴の耳なるもの、或は魚耳有るもの、或は多種の耳にして是人身なるもの、或は鼻[三八]膈膊にして身の麁醜なるもの、或は復懸口なる、或は復懸舌なる、或は舌麁大なる、或は舌の光を放てる、或は復牙齒極甚長大にして身體短促なるもの、或は復牙齒の出入參差せるもの、或は復牙齒猶刀劍の如くなるもの、或は復舌頭刀劍の形の如くなるもの、或は復肚を懸くるもの、或は復肚無きもの、或は復髮を被れるもの、或は復膝無きもの、或は膝の[三九]瓨の如くなるもの、或は髀有るなくして脚の覆鉢の如くなるもの、或は碓臼の如くなるものあり。

【三六】挈頭。挈は携なり。ひつさぐと訓ず。又割符の意に用ひらるゝも、今は前義なるべし。

【三七】嚲。たれさがる。

【三八】膈膊。鼻の正しくないこと。

【三九】瓨。かめ（瓶）なり。

巻の第二十九

魔怖菩薩品第三十一の下

爾の時魔衆、是の如き異形にして、或は、白象に乘り、或は復、馬に騎り、或は駱駝・水牛・犀牛・諸車乘等に乘りて、四面に雲集す。或は修羅に似、迦婁羅に類し、或は復摩睺羅伽・及び鳩槃茶・羅刹・夜叉・幷に毘舍遮・伺命鬼等の如きあり。或は復身體の羸瘦して長大なること、猶餓鬼の如きあり。或は多種の異狀形容あり。――或は面孔の威德甚大なるあり、或は頭の束の如きあり、或は大頭あり、或は小面あり、或は皺面あり。

或は異形あり、人をして見れば、威色を喪失せしめ、或は人の魂魄精神を奪ふを見る。或は面色の青き、或は、復身體の色の赤銅の如き、或は復頭は赤くして身體の青色なる、或は復頭は黃にして身の烟色の如くなる、或は頭は烟に似て其の身は黃色なる、赤頭黑身、黑頭赤身、白頭綠身、綠頭白身なるあり。或は頭の左は白くして右邊の綠なる、或は右邊は白くして左邊の綠なる、或は復、身體と頭面との左右の一切皆然るあり。

或は復全身唯骸骨を現ぜる、或は頭は髑髏にして身體の肥滿せる、或は頭面に肉あるも身に骨骸の露はるゝ、或は人の手足にして畜生の身なる、或は畜生の脚にして人身を作せる、或は身毛の悉く針刺の如きあり、或は身毛の猶猪鬣の如きあり、或は身毛の驢騣に類するあり、或は毛の羆・獼猴・鼠・狼の如きあり、或は身毛より光焰を出すあり、或は毛の亂生するあり、或は毛の逆上するあり、或は頭髻あるあり、或は禿にして髮なきあり、或は赤衣を著けて腰に雜色を帶び、或は復頭上に髑髏の鬘を戴けるもの、或は一頭上の髮は雜灰色にして青 黃赤 白の烟もて之を熏ぜるもの、色ある髑髏を冠と爲せるもの、是の如き形狀、雲集して來る。

或は手に[一]佉吒傍伽(khoṭvāṅga)隋に床、四分之一、取床脞之一幷脚と言ふ。を執持し、或は腰帶に諸鈴を懸け、動けば大聲を作し、而して其の手中に、人の髑髏を執る有り、或は人の骸骨を以て華鬘と爲すあり、或は復手に死人の手足を執り、或は復鈴を執り、手もて搖がして鳴らしめ、或は身體長大にして、猶一[二]多羅樹(tāla)の如きあり、手中に矛・或は劍・或は刀・箭・矟・弓・弩を執り、或は手に戟を執り、或は三叉、或は棒、或は輪・長刀・利斧を把り、或は鐵杵を持ち、頭より猛焰を出し、鐵鎚白棒もて、石の山の如くなるを擎ぐ。

或は青衣、黃赤白黑雜皮の衣を著け、或は赤體にして、蛇を以て身に纏ふ有り、或は眼耳鼻より諸蛇を出し、其の蛇黑色なるを、手を以て執取して、菩薩の前に於て口に噉食し、或は人肉を食ひ、或は血を飲む有り、或は身體の上より熢烶たる烟を出し、口より火炬を出し、或は諸毛孔より一切の火を出し、或は腭より火を出して、迸りて地に散ぜしめ、或は虛空に於て大黑雲を出し、或は虛空の裏に、風を飛し、雨を散じ、大閃電を出し、震動の雷聲とともに、空中より雹を下し、諸山石を雨し、或は下りて石を碎き、大樹に霹靂す。

或は節節、自ら身を支辮するあり、或は復弓を張り、或は、復、手を拍ち、嚇呼して、恐怕を生ぜしめんと欲し、或は大聲を作して、口に叫喚して言ふ『速かに起ちて馳走せよ。此の處に住まる莫れ』と。或は復化して老婦女の身と作り、其の兩手を擧げ、大聲にして哭す『嗚呼我が子よ。嗚呼兄弟よ』と。或は復大に笑ひ、或は復周慞して、東西南北に、急疾かに奔走し、或は復背走して、還つて前に向つて來り、或は忽然として起ち、或は忽然飛んで、虛空中に於て、遊戲すること自在に、或は復樹を攀ぢ、身を懸けて行き、或は劍を舞はして跳り、或は槊を弄し、長刀・三叉・斧・鉞・戟等を戲れて、手脚住まらず、或は盛夏の牛王の如く唱吼し、或は復聲を作すこと[三]尸婆獸(śivā)の如く、或は復空中に是の如き聲を作す、『[四]呵呵呬呬・咻咻・嘶嘶許岐反・唏居初反唎唏唎』と。口に是の

【一】佉吒婆伽。寢臺の脚の如き形狀の棒。

【二】多羅樹。丈高き樹にて「その高さほど」と形容するに用ふ。

【三】尸婆獸。豺の類なり。

【四】呵々等。物凄き怒號を寫せるもの。梵音は haha śiśi huhu hihi kiki kili ?

如く嘯きつ、兼て、復、衣を弄す。
是の如き兵衆、夜叉・羅刹・及び鳩槃茶・毗舍遮等、無量無邊、百千萬億、菩提樹の前に閦塞填壒し、南のかた海に至るまで、魔軍を遍滿し、其の間に針鼻の空地ある無く、變狀畏るべく、菩薩を搦めんと欲し、菩薩を殺さんと欲して、唯魔王波旬の一勅を待ち、其等正しく魔王の面に向つて觀る。諸是の如き等の一切の鬼神、菩提樹に逼り、飢渇疲乏して、意に專ら菩薩を殺害せんと欲す。
其の菩提樹の東西及び北の三面に、無量の淨居諸天、遍滿して停住し、復、無量の色界諸天あり、十指掌を合して、菩薩を頂禮し、口に是の如く言ふ、『諸仁者、看よ、是今應に阿耨多羅三藐三菩提を證すべし』。或は諸天ありて、是の如き唱を作す、『刹利大姓、甘蔗種の子、速かに此の處を離れよ。此の處恐畏らくは是の如き等の種種の器仗あり、汝が身を損害せん』。爾の時菩薩、彼等に報じて言はく、『我今久しからずして、定めて彼輩を破りて、悉く離散せしめんこと、猶風の鬢上の細花を吹くが如けん』。
彼等一切の諸魔鬼衆、是の如く集まる時、其の夜正に半にして、虛空に明なし。復月及以び衆星ありと雖も、光並に現ぜず、甚だ大いに黑闇なり。假令眼あるも、亦覩る所なく、唯大火起り、疾猛の風聲の大いに畏るべく、大地震動し、四海悉く沸くを見るのみ。而して偈を說きて曰はく、

『四大海沸き地震動し　十方に火焰あり惡聲を聞く
虛空の星月翳みて明かならず　夜半黑闇にして見る所なし』

時に彼の衆中に、一龍王あり、名けて持地(Airāvaṇa)といふ。彼の龍、内心に菩薩の勝を欲し、魔王の邊に於て、瞋恨の心を生じ、惡意を以ての故に、其の兩眼を怒らせ、魔波旬を視て、口に惡氣を吐き、魔王の身に偏れて、展轉安んぜざらしむ。爾の時、上界の淨居諸天、菩薩の勝を欲し、魔王の邊に於て、慈愍の心を生じ、漏盡を以ての故に、復瞋心なし。

是の時、彼の處の有ゆる諸天、其の菩薩を信敬するあるもの、菩提樹に在り、是の魔衆の地に遍滿して、菩薩を擾亂するを見、見已りて皆悉く虛空中に在り、口に各唱へて言ふ、『嗚呼嗚呼』と。而して偈ありて說く、

『菩提樹の下に集まれる諸天　魔衆の菩薩を害せんと欲するを見
法を信じ世間の解脫の故に　口に大いに唱へて嗚呼の聲を言ふ』

爾の時菩薩、唯法を思念して、心、擾亂せず、亦復餘の異れる意情を作さず。

時に菩薩、魔波旬に語りて言ふ、『欲界の天子よ、我身は旣に是れ刹利の族姓にして、我が種類は、曾て妄語せず、唯、實誓あるのみ。汝が何の所作か、速疾かに爲すべきぞ。久しく停住する莫れ』。時に魔波旬、菩薩に語りて言ふ、『汝が所語の如く、我、今汝が身を破碎して、百段と作すを得んと欲す。汝は前に在りて、我と共に鬪はんと欲すと爲んや。復我をして前に在りて汝を害せしめんと爲んや』。時に菩薩、魔波旬に語りて言ふ、『我に弓箭及以び刀杖の、汝を斫射すべき無し。其の事然りと雖も、但我は卽今必ず先づ汝を降し訖りて、當に佛と作るべし』。

爾の時、魔王波旬、卽ち自の軍衆に勅して言ふ、『汝等、各自身力の用を盡して勇猛に、恐怖に住する莫く、此の釋種の子に於て、大變動恐怖の事を現ぜよ』。時に其の魔衆、旣に勅を得已りて、魔王に白して言はく、『大天の勅の如く、我等違せじ』。卽便ち各各自の身力を出して、菩薩を畏恐すべきを示現せんが故に、是の魔衆中に、或は諸鬼あり、口に長舌を吐き、頤頷を搖動し、牙齒甚だ利くして、菩薩を噉んと欲す。其の眼團圓、猶師子の如く、其耳卷曲、猶鐵鈎の如く、菩薩を傷けんと欲するの狀、甚だ畏るべく、走つて菩薩に向ひ、是の恐怖を作す。或は口を張り、仰立直視して、菩薩を呑んと欲する有り。而して偈ありて說く。

『魔衆の是の如く畏るべきが來るも　彼の聖卓然として驚動せず

大智の小兒の戯を見るが如く　菩薩の魔を觀るも亦復然り」

時に彼の衆中に、更に一鬼の、瞋恨の心を生じ、一長刀を將つて、菩薩に向つて擲つに、而も、刀、自ら彼が手に粘じて脫せざるあり。或は山を擎げ、及び大石を將つて、菩薩に向つて擲つに、彼の山及び石、還つて其の手に粘じて、皆、地に墮ちざるあり。或は虛空に在りて、山を將ち、石を將ち、樹を將ち、槌・鈇・鉞・戟・戈を將つて、菩薩に向つて擲つに、復虛空に住在して下らざる有り。或は下り來りて自然に碎末し、百段に分散して、餘處に墮つる有り。或は空裏に在りて、猶日天の如きが、大火雨を雨らして、熾然雲下するに、彼の火雨、菩薩の力の故に、卽ち皆變じて、赤き拘勿頭華の雨と成りて下るあり。或は復來りて菩薩の前に在りて、口より諸蛇を吐きて、菩薩を螫さしむるに、彼等の諸蛇、地に至りて癡住し、呪禁せらるるが如くにして、搖動する能はざる有り。或は大雲を作し、閃電を放ち、及び大雷を震はし、雹及び石を雨して、菩提樹の上に在りて放つに、彼等の雨は、菩薩の力を以ての故に、地に至りて、變じて種種の華の雨と成るあり。或は弓箭を持ちて、菩薩に向つて射るに、其箭悉く還つて弦に著きて落ちず、或は、一時に五百の箭を放つに、彼等の箭還つて空に住まりて下らざる有り。或は長刀を執り、菩薩に擧げ向つて疾走して來るに、然るに其の未だ菩薩の邊に至らずして、自ら踣き面覆して地上に倒るるあり。

是の時、一羅刹の女の、其の身黑闇にして、手に髑髏を執れる有り、來り幻惑して菩薩の心を動かさんと欲し、疾走して來り、菩薩に近づかんと欲するに、其の發處より、展轉團圝し、前進して菩薩の邊に到る能はず。或は兩眼より大熾盛の猛焰火光を放つ有り、菩薩を燒かんと欲して、疾走し來りて、菩薩の邊に近づき至るに、忽然として菩薩の身を見ず。或は復鬼あり、重大石を將つて、疾く菩薩に向ふに、彼の來る所の方より、走つて菩提樹の下に至る能はずして、極乏困苦す。而して偈ありて說かく、

『魔軍の身意悉く亂迷し　　種種に方便して聖を害せんと欲するも
　彼の坐處を驚動する能はず　　誓願智力の强き有るを以てなり』

或は復師子吼の聲を作すあり、或は虎・狼・熊・羆・豺・豹・諸野獸の聲を作す有り。而して彼の聲の聲や、若し聞く有れば、無量の衆生、皆悉く恐怖す。或は諸鬼の、是の如き聲を作す有り『誅殺せよ、誅殺せよ、此の釋種の子を』と。或は諸鬼の是の如き聲を作すあり、『擎げ撲て、擎げ撲て、此の刹利の子を』と。或は諸鬼の是の如き聲を作すあり、『打殺せよ、打殺せよ、此の沙門子を』と。或は諸鬼の是の如き聲を作すあり、『傷害せよ、傷害せよ、此の瞿曇種を』と。或は諸鬼の是の如き聲を作すあり、『割截せよ、割截せよ、此の甘蔗種を』と。或は諸鬼の是の如き聲を作すあり、『碎末せよ、碎末せよ、此の刹利種を』と。或は諸鬼の是の如き聲を作すあり、『破散せよ、破散せよ、此の釋種子を』と。或は諸鬼の是の如き聲を作すあり、『摧壞せよ、摧壞せよ、此の刹利子を』と。或は諸鬼の是の如き聲を作すあり、『速滅せよ、速滅せよ、此の沙門子を』と。或は諸鬼の是の如き聲を作すあり、『節解せよ、節解せよ、此の瞿曇子を』と。或は諸鬼の是の如き聲を作すあり、『意の隨に、意の隨にして作す所に逐ひ便へ』と。或は諸鬼の是の如き聲を作すあり、情に任せ、情に任せて速かに作して住まる莫れ』と。此の聲を聞ける時や、空も地に倒るべく、一切の大地も、段段に分るべし。此の聲を聞く時、有ゆる野獸、皆大いに唱喚して、四散馳走し、一切の諸鳥、在所に此の聲吼を聞く時、皆悉く樹より自ら撲つて地に落つ。

時に彼の魔衆の一切の諸鬼、或は哂哂(sisi?)の聲を作す者あり。或は復唏居祁反梨(kili?)の聲を作す者有り。或は嘯聲を作し、或は斫斫と言ひ、或は斷斷と言ひ、或は殺殺と言ひ、或は割割と言ひ、或は破破と言ひ、或は節節と言ひ、或は解解と言ひ、是の如きの惡聲、勝げて數ふ可らず。其の魔波旬、即ち利劍を拔きて、手に執り、前に趍りて、菩薩を嚇やかさんと欲し、疾走して進み、

口中に唱へて言ふ、『汝釋比丘、若し此の座に安じて、敢て起たずば、我、必らず汝を害せん』。而して彼の魔王、東西に交過ぎて、菩薩に近づかんと欲するに、前むことを得る能はず。

是の時、魔王の長子、商主、卽ち兩手を以て、魔王を抱き取り、口に是の如く言ふ、『父王よ父王よ、願はくは莫かれ、願はくは莫かれ、父王は、會ず自ら悉達釋子を殺すことを得る能はじ。亦此の座處を動かす能はじ。兼て無量無邊の過罪を得ん』。時に魔波旬、其の子商主の諫を受けず、菩薩に向つて走り、背へて還反らず。

爾の時、一淨居天子あり、虛空中に在り、身を隱して現ぜず。魔波旬が、散亂の心を以て走りて菩薩を惱ますを見、天、定心を以て、微妙の音を出して、波旬に語りて言ふ、『汝魔波旬は、自ら限量せず。汝は、今、應に此の聖を擾亂すべからず。汝、速疾かに幻惑の惡心を捨てて、本の境界に還れ。汝は終に此の聖を搖動する能はじ。所以は何。猶猛風の、須彌を動かさざる如くなればなり』。時に淨居天、魔波旬に向つて、偈を說きて言ふ。

『寧ろ火をして熱性を失はしめ　水をして潤澤を失ひ住まりて流れざらしめ
地をして牢固を失ひ持するに勝へざらしめ
風をして吹動を失ひ　[五]怙然として靜かならしめんも
此の無量劫に功業を行ぜるもの　終に此の誓願心を捨てじ』
世の困苦厄の衆生の　慳貪、欲癡の重病患なるを見て　慈悲を發して是等を愍むが故に
智藥を以て聖醫を顯はさんと欲するに　汝今何が故に艱難を作すぞ』
一切の人多く邪道に墮するに　彼今正見の眼を開かんと欲す
此は是大聖解脫の王なり　此は是失道の商人を導く』
無明の衆生は黑闇に墮するに　此は智燈を然して照さんと欲す

【五】怙。しづか。

此の聖や、涅槃城に入らんと欲し　炬を秉りて世間の昏を破らんと欲す』
忍辱の枝榦心根鞕く　信念の花葉意の華固く
智の樹能く法果の資を與へん　汝今拔いて傾かしむべからず』
又汝今癡繩に縛せらるるに　彼汝等の結を解脫せんと欲す
豈彼に於て惡心を生ずべけんや
彼解脫を求めて他に敎へんと欲するを　汝障礙を作して徒らに疲乏す』
衆生は大煩惱の海に沒す　世間誰か解して舡師と作らん。
彼大橋梁を建立せんと欲するを　汝今何が故に此の惡を興すぞ』
其れ昔劫に諸の道行を修して　彼等の果の熟するは是今時なり
是の故に是の樹下に結跏すること　猶往昔の諸先聖の如し』

時に魔波旬、彼の淨居諸天の邊より、是の如き語を聞き已るや、増上慢を起して、倍瞋心を生じ、復、速疾に走りて菩薩の所に向ひ、菩薩を害せんと欲す。爾の時、彼處に菩提樹を護る八天神(aṣṭa bodhivṛkṣa-devatā)あり。[六]一は功德と名け、二は增長と名け、三は無畏と名け、四は[七]功習と名け、五は威德と名け、六は大力と名け、七は實語と名け、八は善會と名く。彼等八神、菩薩を仰瞻して、目暫交へず、一時に同じく十六種の相を以て、菩薩を讃歎して、是の如きの言を作す、『仁は今最勝清淨の衆生なり。光明照耀すること、猶、天上の日月の空に在るが如し』。『仁は今挺特清淨の衆生なり。顯赫焰熾なること、猶、空裏に日天の初めて出るが如し』。『仁は今皎潔清淨の衆生なり。衆相の開敷すること、綠池内に紅蓮花の發くが如し。』『仁は今無畏清淨の衆生なり。奮迅自在なること、師子王の大林内に處るが如し』。『仁は今安靜清淨の衆生なり。驚動せざること、須彌山王の、出でて海中に住するが如し』。『仁は今清淨周匝にして、顯現峙立すること、猶、大鐵

【六】方廣大莊嚴經に十六守護神並に四菩提樹神を擧ぐるも、今と同じからず。
【七】習は音義に音辯と爲す、一本には誓に作る。

闍山の、牢固不動なるが如し』。『仁は今沈重審諦の衆生なり。衆德の備具すること、猶、大海に衆寶の充滿するが如し』。『仁は今含容に、意度の寛廣にして、日日に增長すること、猶、虛空に邊際ある無きが如し』。『仁は今敦厚にして、諸の邪曲なく、心意の正定なること、猶、大地の衆生を養育するが如し』。『仁は今心意に垢濁ある無く、具足すること、猶、阿耨達池の清淨の水の、八功德を備ふるが如し』。『仁は今一切の諸結を斷じて、心意の染なきこと、猶、大風の諸世に著せざるが如し』。『仁は今巍巍として、面目を觀覩すべき難きこと、猶、猛火の熾盛にして、一切諸煩惱の熱を遠離するが如し』。『仁は今勇健剛鞕の衆生なり。大力なること、彼の那羅延天の如く、人の能く伏するもの無し』。『仁は今精進にして劫を歴て熏修せる心意の廻らし難きこと、猶、帝釋の金剛杵を放つが如し』。『仁は今已に第一善利を得、最も一切衆生の上首として、十力を具足すと爲す。久しからずして當に無上菩提を成ずべし』。『爾の時に、彼の菩提樹を守護する諸神王の、十六種の相を以て、菩薩を讚歎せる章句、是の如し。本、一讚を闕く。

爾の時、色界の淨居諸天、復、共に同じく、十六種の相を以て、魔王を毀辱し、其の勢力を挫く。何等か十六なる。『波旬、汝、今勢力ある無きこと、猶、儜人の健兒に伏せられて、妄りに我れ勝てりといふが如し』。『波旬、汝、今一身獨自にして、伴侶ある無きこと、猶、曠野に放逐せられたる人の如し』。『波旬、汝、今一切の軍衆の、諸力の摧折するは、重きを負へる羸瘦の老牛の如し』。『波旬、汝、今愚盲穢惡にして、淸淨ある無きこと、夜に射る箭の不淨地に墮つるが如し』。『波旬、汝、今猶、跛驣驢のごとく、東西に浪行し、邪嶮道に落つること、迷商人の如し』。『波旬、汝、今脊膂離散して、身に精光なきこと、猶苦を負へる貧窮の乞兒の如し』。『波旬、汝、今威德實に衰へ、依止するに所無くして、强ひて奸猾を作すこと、猶擬人の、羞恥あること無きが如し』。『波旬、汝、今造業不淨にして、多く垢膩あること、恩義孝德なき人の如し』。『波旬、汝、今他に驅逐せらるる

【八】儜。音ダウ、又はニヤウ、困弱す。

こと、猶野干の師子に逐はれて、自在を得ざるが如し』。『波旬、汝、今一切の軍衆、久しからずして退散せんこと、猶猛風の諸の飛鳥を吹くが如けん』。『波旬、汝、今愚惑昏闇にして、時節を知らざること、死日の到れる孤獨の貧兒の如し』。『波旬、汝、今眷屬退敗せんこと、猶、散藥の疎漏有孔の器より出づるが如けん』。『波旬、汝、今久しからずして當に禁制治罰せらるべきこと、猶辨理の愚人を趂逐するが如けん』。『波旬、汝、今須臾に一切の身力を斷ぜられんこと、猶罪人の他に割截せられて、手足處を異にするが如けん』（本、二相を闕く。）時に首陀會の一切諸天、是の如き等の十六種の相を以て、魔波旬を毀り、其の力を摧き已る。

時に、菩提樹を護れる八神、還復共に十六種の相を以て、重ねて波旬を毀る。何等か十六なる。『波旬、汝、今久しからざる間に、菩薩に降されんこと、猶健兒の他賊に殺さるるが如くならん』。『波旬、汝、今菩薩に撲たれんこと、猶怯弱羸瘦の人の、大力士の爲に槌打せらるるが如くならん』。『波旬、汝、今菩薩の光を被りて覆蔽せられんこと、猶日出でて彼の小螢火蟲を障翳するが如くならん』。『波旬、汝、今菩薩の威に、自然に退散せられんこと、猶一把の碎末の麥䅌の、大風に吹かるるが如くならん』。『波旬、汝、今菩薩に怖されて、失脚し馳走せんこと、猶小獸の師子に追はるるが如くならん』。『波旬、汝、今菩薩に拔かれんこと、猶娑羅樹の、猛風の爲に吹かれて、根を合せて地に倒るゝが如くならん』。『波旬、汝、今菩薩に破られんこと、猶怨賊の城の、大力王の爲に摧滅せらるゝが如くならん』。『波旬、汝、今菩薩に竭くされんこと、猶牛跡の水の、盛旱の日の爲に、乾涸せらるゝが如くならん』。『波旬、汝、今菩薩に退けられて、低頭直走せんこと、罪を得たる人の、他の爲に殺されんとするが、忽然として脫するを得るものゝ如くならん』。『波旬、汝、今菩薩に擭さるゝは、野澤の内に、大猛火に遭へる飛鳥の亂れ驚くが如くならん』。『波旬、汝、今菩薩に伏せられて、心内に憂愁するは、法行無くして忽ち權勢を失ひて、代を下れる國王の如くなら

【九】䅌。むぎわら。

ん』。『波旬、汝、今久しからずして、當に菩薩に剝脫せらるべきこと、猶無翅の老病の鴻鶴の如くならん』。『波旬、汝、今久しからずして當に菩薩に滅削せらるべきこと、曠野を行く粮食なき人の如くならん』。『波旬、汝、今久しからずして當に菩薩に刧奪せらるべきこと、人の船を失ひて大海に沒するが如くならん』。『波旬、汝、今菩薩に燋かれんこと、刧盡くる時、一切の稠林樹木の燼滅するが如くならん』。『波旬、汝、今久しからずして當に菩薩に崩倒せらるべきこと、猶金剛に打壞せらるゝ石山の如くならん』。

是等の天神、十六種を以て、魔波旬を毀る。其の魔波旬、諸天神の、是の如き毀辱勸諫を聞ける時、菩薩に向つて走り、殺害せんと欲するが故に、勸諫に違失し、諸天神に毀辱せられて、猶心を解かず、本宮に還らず、更に復忿を增して、兵衆に勅して言ふ、『汝等、速かに起ちて、急疾かに此の仙を打ち散じ撮み、其に命を與ふる莫かれ。是の人、今既に自ら彼岸に度り、我が界內に於て、復無量無邊の衆生を敎へて、我が境を出でしめん』。『我、汝を放さじ。若し汝、自ら知らば、我が手を脫するを得ん。唯汝沙門、速かに起つて馳走し、此の菩提樹の下を遠離せば、則ち命久しく活きて、困苦に遭はさらん』。爾の時、菩薩、波旬に報じて言ふ、『若し當に此の須彌山王をして、崩れて本處を離れしむべきも、一切衆生、悉く復有る無からんも、一切の星宿及以び日月、墜落して地に墮ちんも、大海乾竭せんも、我が今已に菩提樹の下に坐せるを、移動すべからず』。

魔、復更に瞋りて、麁惡の言を出す、汝等、此の瞿曇釋子を捉へて、擎げ將つて飛行し、且つ綏うして殺す莫く、速疾かに將つて我が微妙宮に向ひ、五縛もて枷鏁し、手に杻械を著けて、我が門を遣守せよ。我をして、數是の如き困苦、多種の厄難を見せしむること、猶惡奴の如くなればなり』。爾の時、菩薩、波旬に報じて言はく、『此の虛空に、妙色を將つて、雜種の形を畫くべからんも、或は復虛空、及び諸星宿、幷に日月天の、地に墮落せんも、汝等三千に滿ち足る諸魔の、我を

恐怖せんこと、乃至、樹下に、魔の我を嚇やかさんと欲すること、是の處あること無けん』。

菩薩降魔品第三十二の上

爾の時、魔衆、其の威力を盡して、菩提樹を脅やかすも、菩薩の一毛をだも、驚動する能はず。

偈ありて說いて言ふ。

『天魔の軍衆忽然として集り　處處に鼓を打ち地を震はして噪ぎ
螺及び貝を吹き諸種の聲にて　唱へて言ふ「子何事をか作さんと欲する」
今此の魔の大軍衆を見て　何ぞ起ち走りて此の中を離れざる
汝今妙色あり鑄金の如く　面目清淨にして天と人と仰ぐも
是の如き身體久しからずして壞れん』
此の大魔衆や當るべき難し　但地上及び虛空を看よ　諸種の變現皆充滿して
必らず共に鬪はんと欲す、　恐くは如かじ　其れ若し瞋忿せば或は身を損ぜん』
菩薩梵音迦羅頻伽の聲にて　諸夜叉・羅刹等に告ぐ
『愚癡なり虛空の體を惱まさんと欲すること　今來りて我を怖すも亦復然り』
能く金剛を以て山王を破らんや　或は口を用つて吹いて大海を竭くさんや
或は猛瞋の龍を手に持ちて執へんや　是の如し彼能く我が心を動かさんとすること』
魔衆憤怒して火山を放ち　樹丼に根を拔きて歷亂して擲ち
鎔銅の赫赤なるを星散して注ぎ　或は手もて惡毒蛇を把るあり
或は駱駝・馬・白象の頭なる　或は猫・野干・獼猴の首なる
或け瞋れる蛇龍の氣舌を吐く　或は復霹靂たる閃電を飛し』

雨に土・石・雹・金剛を雑へ　或は鐵丸・諸器仗・槊・矛・長刀・三叉・戟を注ぎ』

或は金剛歯の毒蛇を現じ　地に落ちて樹の枝條を打ち碎き

種種の兵甲大いに叫吼し　或は百臂にて百箭を射るあり』

蛇口より猛焔の火光を吐き　或は鐵丸の須彌の如きを捧げ

或は畏るべき熾火雨を出し　地に倒れて劈裂して泉下に徹し』

或は身を竄して前後に圍むあり　或は左右及び足邊に在りて

手脚を顚倒して烟火を放ち　忽然として還つて復口に大笑す』

是の如き畏るべき諸魔軍を　菩薩見ること幻化の僞の如し

是の如き魔力の應に命を奪ふべきを　彼見ること猶水中の月の如し』

「亦復眞の男女の形に非ず　我に非ず命に非ず衆生に非ず

眼耳鼻口身意等は　內外の因緣にて各自ら有り　是の諸は法爾として造るに人無し』

我此の如き語を作すこと虛に非ず　信ぜずば當に更に言誓を作すべし

我の今彼等を見るが如くば　我を恐怖せるを得んと欲して來るも

諸法の體性及び我が身は　一切悉く空にして實あること無し』二

是の時、魔軍の夜叉衆等、諸の形貌、種種の身體を以て、是の如く菩薩を恐怖するの時、菩薩、爾の時、驚かず、怖れず、動かず、搖がず。而して彼の魔王波旬、更に復瞋恚を增すも、心內に愁憂を懷き、其の體に遍滿して、自ら安んずる能はず。而して偈ありて說かく、

「魔家の眷屬の大いに畏るべきが　各種種の恐怖の形を作すも

彼の菩薩の驚惶せざるを見て　波旬心に愁へて劇た瞋恨す』

爾の時、菩薩、是の思惟を作す、『此の魔波旬、他の諫を受けずして、種種の事を造して自ら知

らす。我、今如法の語言を以て、其の一切の諸惡法行を斷ずべし』。菩薩、是の如く心に思惟し已りて、魔波旬に語りて、是の如き言を作す、『魔王波旬、汝善く諦聽せよ。我、本此の菩提樹の下に來るや、創初の時に、一把の草を將つて、鋪き已りて坐しぬ。所以は何。後時に魔波旬と共に、怨讎を成し、鬪諍相競ひ、惡口罵詈せんを恐畏してなり。汝魔波旬、諸惡行を造りて、善心あること無し。我、今汝魔波旬の一切の怨讎を斷ぜんと欲す。汝等の一切の惡業を滅せんと欲す。汝魔波旬、若し怨恨の心を生ぜんと欲せば、是の如き念を作せ、「何が故に、菩薩の此の樹下に坐するや、草を將つて鋪と作し、糞掃衣を著くるに、汝が心に、是の如く此の事を妬嫉するか」。汝魔波旬、且らく汝が意を定めよ。我、若し阿耨多羅三藐三菩提を成就せば、後に是の如き等の一切諸事を取りて、汝に付囑せん。願はくば汝廻心して大歡喜を生ぜよ。魔王波旬、汝、今心中に、亦言誓あらん、「我等、必らず當に菩薩を恐怖して、此の座を捨て、起ち走りて停る勿からしむべし」。然るに我復弘大の誓願あり、「我、今此の身此の座に坐し、設ひ因緣ありて、此の坐處に於て、身體碎壞すること、猶微塵の如く、壽命磨滅せんも、若し我阿耨多羅三藐三菩提を得ざらん時は、我が身、終に此の處を起たじ」。魔王波旬、是の如き次第もて、我等當に觀ずべし、『是れ誰が勇猛誓願力强くして、能く先に在りて此の願を成就するもの有らんか。或は我か、或は魔及び汝が軍衆か』。若し、我が福業善根力强くば、我應に此の誓願を成ぜんこと、虛しからざるべし』。

是の時、菩薩、魔波旬に向つて、偈を說きて言ふ、

『汝昔一の無遮會を施せるだも　今是の如き大威權を得たるを
我は無量億僧祇に於て　諸衆生に種種の施を爲せり』。

爾の時、魔王波旬、復菩薩に向つて、偈を說いて言はく、

『我が昔の祭祀無遮會は　汝が今我を驗するごとく既に虛に非ざるも

【一】Pañca-varṣikā-pariṣad。五年大會と譯す。五年每に一回擧行せらる。賢聖・道俗・貴賤・上下を遮することなく、平等に財法二施を爲す法會なるを以てなり。

汝が若干劫の布施行は　誰か此の言を信ぜん　我を降さんと欲するのみ』

魔王波旬、此の偈を說き已るに、是の時、菩薩、不畏不驚、不怯不弱にして、專注亂れず、柔輭の心を以て、諸の恐怖を捨て、身毛和靡し、視瞬安庠たり。其の右手を伸ぶれば、指甲の紅色、猶赤銅の如く、兼ねて種種の諸相を以て、莊嚴具足す。無量千萬億劫の、諸行の功德善根の生ずる所なり。手を擧げて頭を摩し、手もて頭を摩し已りて、復脚趺を摩し、脚趺を摩し已りて、慈愍の心を以て、猶、龍王の如く、視んと欲して頭を擧ぐ。既に頭を擧げ已りて、善く魔衆を視、魔衆を觀已りて、千萬種の功德ある右手を以て、[二]大地を指し、而して偈を說いて言ふ、

『此の地能く一切の物を生じ　相ある無くして平等の行を僞す
此れ我の終に虛しからざるを證明せん　唯願はくは現前に眞實に說け』

爾の時菩薩、手もて此の地を指して、是の言を作し已るや、是の時、此地を負へる地神、諸の珍寶、所謂、上妙の天冠・耳璫・手鐶・臂釧・及び指環等を以て自ら莊校し、種種の瓔珞もて、身を莊嚴し、復、種種の香華を以て、七寶の缾內に滿て盛り、兩手に捧持して、菩薩の坐を去ること、近からず遠からずして、地下より忽然として湧出し、半身を示現し、曲躬恭敬して、菩薩に向ひ、菩薩に白して言ふ、『最大丈夫、我、汝を證明せん。我、汝が往昔世の時、千億萬劫に、無遮會を施せるを知る』。是の語を作し已るや、是の時、其の地、遍ねく三千大千世界に及ぶまで、六種に震動して、大音聲を作すこと、猶摩伽陀國の銅鍾を打つの聲、震ひ、遍ねく吼ゆる等の如く、前の所說の如く、十八相を具しぬ。

爾の時、彼の魔の一切の軍衆、及び魔波旬の、是の如きの集衆、皆悉く退散し、勢屈して如かず。各奔逃して、其の陣場を破り、自然に恐怖して、心を安ずる能はず、失脚して東西南北に馳走す。是の時に當りて、或は復白象頭に躓いて倒れ、或は馬乏臥し、或は車脚折れて、狼藉縱橫し、

【二】指大地。菩薩が右手を以て地を指せるを表せる佛像あり、降魔像といひ、地を指せるを觸地印といふ。

或は軍迷荒して搖動する能はず、或は、復、弩・槊・弓・箭・長刀・羂索・劍・輪・三叉・戟・[三]翣・小斧・鉞鈇・手中よりして。自然に地に落ち、又、復、種種の牢固の鎧甲、自ら碎け摧壞し去りて身を離れ、是の如く、四方に爭競して藏竄し、或は其面を覆ひて、地に踏れて眠り、或は仰いで地に倒れ、乍ち左に乍ち右に、宛轉して屍のごとくに移り、或は走りて山に投じ、或は地穴に入り、或は樹に倚る有り。或は闇林に入り、或は廻心して菩薩に歸依して、『我を救護し養育せよ』と請ひ乞ふあり。其の菩薩に依倚する有る者は、本心を失はず。

時に其の波旬、大地の聲を聞きて、心に大いに恐怖し、悶絶して地に蹈れて、東西を知らず、上空中に於て、唯是の聲を聞くのみ。『[四]某を打ち、某を撮み、某を捉へ、某を斫り、某を殺し、某を斷ちて、某の黑闇の行を、悉く滅盡せしめよ。波旬を放つ莫かれ』。

【三】翣。あふぎ(扇)。おにがしら(纛)。

【四】某は宋元明の三本及聖語藏本に「其」に作らる。

菩薩降魔品第三十二の下

爾の時、彼の處に別に地神あり、一缾の凉冷の水を將つて、魔王の[一]面に灑ぎ、之に告げて言はく、『汝魔波旬、速疾かに急に起ち、走りて自宮に向へ。今汝の僞の故に、當に種種の器仗あり、來りて汝が身を害し、節節汝を解かんと欲すべし』。而して本時に作せる所の、雜類の形容、殊異の身體を變現して來り、種種の兵戈器械を執持せる、彼の魔衆は、是の如く怖れ已りて、形を復する能はず、還是の如くにして歸りて、本來の處に至り、各相迷失して、七日を經由す。後に於て、或は相見るを得る者有り、或は相見ざるあり、其の相見る者、各相借問す。或は復母を哭し、或は復父を哭し、或は兄、或は弟、或は姉、或は妹を哭し、互に相謂つて言はく、『我等、今、此の大厄に値ふ。是我等の殃なり。我等、今、本命を得て還れるは、深く是我等の不可思議なり』。而して偈ありて説かく、

『菩薩の右手百福の嚴あり　諸指の網羅赤紅の甲
掌内の千輻輪相炳かに　閻浮の金光妙色充つ
手を以て安庠として頭と趺を摩し　是の如くして掌の下る雲雹に似たり』
口に言ふ「大地汝我を明かにせよ
往昔無數劫の修行に　有ゆる來り乞ふものに曾て違はざりしを
水・火・風神皆實を驗し　梵天・帝釋并に日月　十方の諸佛悉く鑒知したまふ」
我が如きは苦行もて菩提を求め　布施・持戒・精進・忍
禪定・智慧等の六度及び四無量・諸神通』

【一】面。大正藏。上に作る。

是の如き次第の助道の因もて　一切熏修して盡く作證し　汝魔は萬分に一毫だも無し」と

十方に我は諸功德　般遮于瑟[二]及び檀那[三]を作せるに

是の時手を以て此の地を指すや　其の地の震聲鐘の若くに響き

六種に湧沒し海に波濤あり　魔親て地に倒れ悶えて蘇らず」

[四]或は空の音ありて「縛せよ攝めよ」と唱ふ　降すと雖も面に光色を失し

自ら菩薩の威に及ばざるを知り　智を椎ちて大哭して叫聲を唱へ」

身體疲乏して歸處無く　東西南北に縱横に走り

心迷ひ悶絕して情ある無し　象・馬・車・兵の力悉く摧け」

鳩槃荼・毘舍遮・羅刹　自然に驚怖して悉く星散し

退走に道を求めて各廻遑すること　鳥の澤に在るが、火を被りて飛ぶが如し」

父・母・兄・弟・姉・妹・女　兩兩親相求むれども道を知らず

各「汝今何處に停まるか」と問ひ　設ひ相見るを得るも迭ひに相嫌ひ」

俱に「厄至りぬ恐らくは命を失はん」と云ひ　彼の諸魔衆無億數なるが

忽然消滅して雲を散ずるに似たり」

是の如きの苦七日中を經て　後に偶相逢うて唱へて言ふ

「活きぬ。我等の心今大いに歡喜す」と」

時に彼の菩提樹の大神　慈心より冷水一缾を將て

魔の上に灑ぎて是の說を作す　「速かに起ちて住まる莫く心に隨つて去れ

汝今若し我が言を取らずば　[五]後に厄難に値ふも當に甘を分つべし」と」

夜叉・羅刹・鳩槃荼等　摩睺羅伽及び毘舍遮など　世間の有ゆる畏るべき形を

【二】般遮于瑟は梵語 Pañca-vārṣikā pariṣad の音譯。義譯して、五年大會といふ。或は義によりて無遮會といふ。

【三】檀那。dāna. 布施なり。

【四】(原文)或有空音唱縛攝雖降面失於光色。この文中の雖降の二字解し難し。或は難降の誤ならんか。

魔王率ゐ將て樹下に來り　菩薩を恐怖せんと欲し望めど』
端正の容顏諸相滿ち　功德具はりて千日の光の如く
心の驚動せざること猶須彌のごとく　[五]彼の魔衆を「幻化の如し」と觀じ』
「諸法は異なく分別なし　星の如く露の如く浮雲の如し」
法相を是の如く正思惟して　安心善住結加して坐したまふ』
若し我に心有りて彼を聞見せば　是の如き邪念より則ち貪を生ず
癡人は是の著我を作す時　心念を以ての故に恐怖を見るも』
釋迦牟尼大尊者は　「諸法を平等如なり　十二因緣より相續して生じ
心意の境界は空にして實なし」と觀じたまひ』
諂曲の魔を見て驚動せず　乏頓して利なく身體疲れ
木・石・刀・杖を悉く棄捐し　眷屬馳走して依怙無し』。

爾の時、魔王波旬の長子を、名けて商主と曰ふ。卽ち頭を以て、菩薩の足を頂禮し、懺悔を乞ひ求めて、口に是の言を唱ふ、『大善聖子、願はくは我が父の發露せる辭謝を聽きたまへ。「凡愚殘短にして、猶小兒の如く、智慧あることなし。我、今忽ち來りて、聖子を惱亂し、諸の魔衆を將ゐて、種種の相を現じて、聖子を恐怖せしむ」と。我、已前に於て、忠正の心を以て、曾て父に諮りて言へり、「有智の人の、善く諸術を解するものと雖も、猶尙彼の悉達太子を降伏する能はず。況んや復我等をや」と。但願はくは聖子、我が父を恕亮したまへ。我が父は、無智にして、道理を識らず、是の如く大聖王子を恐怖せり。當に何ぞ生を取るべき。大聖王子、願はくは仁の誓へる所、早く成熟を獲て、速かに阿耨多羅三藐三菩提を證したまへ』。

爾の時、有ゆる一切の諸天の、菩薩に向つて信行を生ぜる者、若しは虚空中なるもの、及び地上

【五】彼。縮刷藏經參照。大正藏に後に作る。

に在るもの、或は復諸方なるもの、彼等悉く大いに歡喜踊躍し、其體に遍滿して、自ら勝ふる能はず、歡喜の心を以て、口に是の言を唱ふ、『唎唎・囉囉・梨梨』と。其の聲、四方の虚空に遍滿して、震吼響徹す、諸の衣服を弄して『嗚呼希有なり、菩薩、今已に諸魔及び魔軍衆を降伏せり』といひ、以て天樂を作し、以て天歌を作して、菩薩を讃歎し、復天化——曼陀羅花・摩訶曼陀羅花・曷殊沙花・摩訶曼殊沙花・優鉢羅花・拘勿頭花・鉢頭摩花・分陀利花を將つて、天の栴檀細末の香を以て、菩薩の上に散じ、散じ已りて、復散じ雨ふらして、更に雨ふらす。偈ありて說いて言ふ、

『菩薩既に魔王を降伏するや　此の大地六種に動き
衆生の無明の暗に沒在せるを　大聖の神光普ねく照明し』
天地開朗日月輝くこと　猶婦女の莊嚴せる面の如し
虚空より種種の花雨を下す　曼陀羅華及び餘花なり』

爾の時、復無量無邊の諸餘天等、千萬億數、娑婆世界主大梵天王、及び天帝釋等あり、皆大いに歡喜し、乃至、體に遍ねくして、自ら勝ふる能はず、十指掌を合して、菩薩を頂禮し、口に是の言を作す、『今此の聖者、必らず阿耨多羅三藐三菩提を證せん』。

是の時、其の處の菩提樹の下を、相去る遠からずして、一龍王あり、名けて迦羅(Kāla)と曰ふ。卽便ち偈を以て、菩薩を歎じて言ふ、

『我が昔佛日の興るを覩し如きは　還此の處の菩提樹の如く
大神通希有の事を作し　善巧の方便もて魔王を降したまへり』
世尊も今亦復然り　草を鋪きて結加し安隱に坐し
心攀緣せず、正意に住して　曾て一念暫時も驚きたまふ無し
是の如く勇猛大精進にまします　決定して最勝の牟尼佛たらん』

而して此の大地六種に動き　其の響震吼して鍾聲の如く
東西南北に湧きて復潜む　久しからずして必らず大勝覺を成ぜん』
百千萬億那由他の　虚空に閎塞せる諸天衆
唱聲微妙にして心喜歡す　仁今必らず大妙聖を作さん』
萬億不可數の諸天　各衣服を弄して虚空に滿つ
是の如きの預相邊りある無し　仁今作佛して大聖と成らん』
千萬那由他の天衆　空に在りて頂禮し合掌恭敬す
此の先應具さに言ひ難し　仁今佛大尊覺を作さん』
億千萬の天の諸童子　喜歡して手に妙天花を執り
仁者の上に於て花雲を雨ふらす　仁今佛世尊勝を作さん』
菩提樹を周匝する林木　枝頭皆尊に向つて屈低し
此の諸の瑞相一條に非ず　仁今佛大尊極を作さん』
仁既に天魔衆を降伏し　畏るべき音響及び殊形を
悉く慈力を以て攝化し周ねし　仁今佛大尊稱を作さん』
迦羅龍王佛を歎じ已りて　心に快樂を生じて大いに喜歡す』

成無上道品第三十三

爾の時、菩薩、既已に一切の魔怨を降伏し、諸の毒刺を抜きて、勝幢を建立し、金剛座に坐し已りて、一切諸世間内の(1)諍闘の心を滅し、諍闘を滅し已りて、内外調伏し、心清淨の行もて、一切世間の衆生をして利益を作さしめんが爲の故に、一切世間の衆生をして安樂を得しめんが爲の故に、

【六】閎。おほし、もろ／＼。元明二本は「閉」に作る。

【一】本品。Mahāvastu, II. p.293ff Avalokitasūtra に相當す。初部、五種心を滅する部分、大いに相違す。

一切の諸惡衆生をして慈心を發さしめんが爲の故に、一切の諸惡衆生の結垢の行を斷ぜんが爲の故に、自ら已に、(2)睡眠の纒蓋を滅除して、心に淸淨を得、光明現前して、正念圓滿に、亦、衆生に敎へて、一切の睡眠の覆障を斷ぜしむ。自ら已に一切の(3)調戲を斷除し、淸淨心を得て、濁亂あること無く、亦、衆生に敎へて、一切の調戲の心を滅せしめ、淸淨を得しむ。自ら一切の(4)疑・(5)悔の心を斷じて、暗弊の行を離れ、諸の善惡の一切法の中に於て、疑滯あること無く、淸淨心を得たまふ。

爾の時、菩薩、是の如き〔三〕五種の心を斷じ已るを得て、煩惱漸く薄し。所以は何。此等の五法は、能く智慧の爲に覆障を作すが故に、能く智慧の爲に、不佐助を作せばなり。涅槃微妙の善路を遮する是の如き一切を、悉く皆棄捨して、諸欲心、及び不善法を離れ、內外を分別し、思惟觀察し、一心寂定にして喜樂を證せんと欲し、初禪に入れる法中に行じぬ。

〔四〕爾の時菩薩、是の如く思惟す『我、今、已に初增上心を證し、現に安樂微妙の法を得て、心放逸ならず、應當に正念に聚落を捨離し、阿蘭若に依りて行ずる所の法を、盡く之を得しむべし』。是の時菩薩、一切の諸分別觀を捨せんと欲し、淸淨の內心に、一として分別なく、三昧より歡喜樂を生じ已りて、第二禪を證せる法中に行じぬ。

爾の時菩薩、復是の如く念ず『我、今已に此の二增心を生じ、乃至、一切の諸惡を捨離す』と。衆行を成じ已りて二禪に入る時、菩薩、歡喜を厭離して、捨行淸淨、正念正慧にして、身に安樂を受け、聖の歎ずる所の如く、諸惡を捨して、已に安樂を得、是の如く增上して、第三禪を證せる法中に行じぬ。

爾の時菩薩、復是の如く念ず『此の我が第三增益の心は、乃至、蘭若に在りて行ずる者』と。是の時菩薩、樂を捨せんと欲し、苦を捨せんと欲し、前に分別苦樂を捨せるが如く、苦無く樂無く、

【二】纒は纒縛の義。煩惱のこと。衆生を纒縛して生死に輪廻せしむるを以てなり。蓋は覆蓋の義。煩惱のこと。善心を覆ふを以てなり。

【三】五種心とは諍鬪心・睡眠心・調戲心・疑心・悔心をいひ、普通「五蓋」と稱す。

【四】この以下、四禪を說く。初禪には喜樂の二受あり、覺觀（新譯尋伺）あり。第二禪には喜捨の二受あつて樂受なく、又覺觀なし。但、意識の麁大なる怡悅あるを以て、經に歡喜樂といふ。第三禪には樂捨の二受あり、意識の怡悅至妙なるを以て樂受といふ。第四禪には捨受あるのみ。四禪につきては、大迦葉因緣品第四十七參照。

悉く捨して、正念清淨に、第四禪を證せる法中に行じぬ。

爾の時菩薩、復更に思惟す『此の我が增心もて、第四現見法安樂行を、已に證知するを得て、心放逸ならず。善男子、應に正念一心にして、阿蘭若に在りて寂靜に行ずべし』と。

五 爾の時菩薩、是の如く、一心清淨無垢にして、障無く翳無く、一切の苦患を、悉く皆除滅し、調和柔輭にして、諸業を作すべし。已に決定に住して、其の夜初更に、身通を成じて、種種の神通境界を受けんと欲したまふ。所謂、一身を能く多身と作し、復、多身を合して、還つて一身と作し、一身と作り已りて、虛空中に於て、上に沒して下に出で、下に沒して上に出で、隱顯自在なること橫遍も亦然り。山崖石壁を穿過して礙なく、念に應じて行き、壁に入りて便ち出で、出で已りて、還、入ること、譬へば霧中に、沒し已りて、卽ち現じ、現じ已りて、還沒するが如し。地に入るや水の如く、水を履むや地の如く、虛空に出沒すること、猶飛鳥の如し。或は烟熏を放ち、或は光焰を出すこと、大火聚の如く、日月の、威德最大巍巍なるを、能く手掌を以て、之を捫摸し、長大身を現じて、乃ち梵天に至る。

譬へば工巧・巧師の弟子が、清淨の金を取りて、諸の器皿を作るに、意に隨つて卽ち成り、亦彼の價の貴賤を分別して知る如し。工瓦師・瓦師の弟子が、泥團を成就して、輪上に置き、作さんと欲する何の器をも、卽便ち成すを得て、亦其の價を知る如し。善木師・木師の弟子が、樹木の腐らず枯れざるを伐り取りて、作さんと欲する何の器をも、卽ち能く成すを得、亦其の價を知る如し。象牙師・牙師の弟子が、好象牙を得て、作さんと欲する何の器をも、卽ち能く成すを得、亦、其の價を知る如し。

是の如く、是の如く、菩薩も、亦然り。是の如く清淨の心・無濁穢の心・無隔礙の心・無患累の心・柔和輭の心・成就業の心・眞寂定の心を成就して、夜の初更に於て、種種の神通を修習し、造作し、

【五】この以下、三明六通を說く。宿命・天眼・漏盡の三通を三明と爲し、これに、他心・天耳・神足の三通を加へて、六通と爲す。

智心を成就して、種種の神通境界を出現しぬ。所謂、一身を多身と作し、略說せんに、乃至、身、梵天に至るなり。菩薩、心に是の如き寂定、是の如き清淨、是の如き無垢、是の如き無翳を得て、一切の煩惱患累を除滅し、諸業を造り已りて、心に寂滅を得たり。

爾の時菩薩、還是の夜初更の中に於て、更に宿命神通成就の心行を證知せんと欲し、自心に他人の心の種種の念數を知らんと欲しぬ。所謂、受身一生の處、二生の處、三・四・五・六・七・八・九・十・二十・三十・四十・五十・一百・二百・一千・一萬・無量億萬・半劫・小劫・中劫・大劫・無量の小劫・中劫・大劫に、我昔某處に、我が名字は某、是の如き姓族、是の如き種類、是の如き飮食、是の如き受樂、是の如き壽命あり。是の如く死し已りて、彼處に生れ、彼に生れて復死せることなり。爾の時、菩薩、是の如き相、是の如き行を以て、種種の宿世を知りぬ。自身既に爾り、他身も亦然り。

又復自ら種種の宿命を知る。譬へば人有り、自らの聚落より出で已りて他の聚落に至るに、其の道路を行くや、何處に坐するかを知り、何處に行くかを知り、何處に眠るかを知り、何處に言ふかを知り、何處に默するかを知り、此の聚落に至るや、彼の聚落の、其の間の近遠、行路の時、何處を行き何處に坐し、乃至、何處に眠臥し言默せるかを知り、彼の聚落に至り、已が聚落に還りて、復、是の如く念じ、思惟して、此の聚落より、若干時を經て、彼の聚落に至り、復、某處に於て、若干時住し、若干時行き、若干時坐し、若時干語り、若干時默し、若干時を過ぎたるかを悉く知り、復、某邑に至り、復、彼の處に若干時行き、坐起し、眠臥し、語默し、停泊せるかを知り、乃至、已が聚落に至り已りて、悉く是の如く知る如し。菩薩も亦然り。是の如き定心・淸淨の心・無垢穢の心、是の如き輭心、無患惱の心、可作業の心もて、彼の初夜初更の中に於て、宿命智を得、正念に心成就行を證知しぬ。

爾の時菩薩、既に思惟して自身の生處、及び他の生處、所謂、一生の國土の處、乃至、無量無邊

億劫の所生の處を知り、是の時菩薩、相の如く敎の如く、次第に聞說して、自身所生の處を知る如く、及以び他身の種種の生處を、亦復、憶念しぬ。菩薩の憶念、是の如く生じ已りて、能く處處の諸衆生類に於て、諸生を受くる中に、慈念の心を得て、『此は我が親舊なり、此は我が外人なり。此の親を捨て已りて、復、某處に生れ、此の世彼の世に、流轉して息まず、猶、風車の如く、猶、芭蕉の如く、決定して實なく、煩惱無常なり』と、此義決定して、心に是の如く知りぬ。

爾の時菩薩、是の如く心を定め、是の如く淸淨に、是の如く無垢に、是の如く無惱に、是の如く柔輭にして、靜業を作すべし。彼の夜半に於て、天耳を成就し證知するを得んと欲して、是の心を發す。

『彼、天耳善淸淨なるを以ての故に、人耳に過ぎて、種種の聲、所謂、或は地獄の聲を聞き、或は畜生の聲・天聲・人聲・遠聲・近聲を聞かん』。

譬へば聚落・城邑・國土、或は、復、市中に、其の間に人有り、高堂、或は復樓上に昇上りて、彼の中に於て住し、復、一人ありて、淸淨の耳を以て、種種の聲、所謂、或は蠡貝を吹く聲、或は大鼓の聲、或は小鼓の聲、細腰鼓の聲、或は箜篌の聲、或は琵琶の聲、簫笛瑟の種種の音聲を聞き、或は歌聲を聞き、或は舞聲を聞き、或は笑聲を聞き、或は哭聲を聞き、或は婦女の聲、或は丈夫の聲、或は童子の聲、或は童女の聲を聞く如し。是の如く是の如く、菩薩是の如く、其の心を寂定にし、淸淨無垢・無惱無濁・柔輭作業にして、彼の夜半に於て、種種の聲、乃至、一切地獄等の聲を聞きぬ。

爾の時菩薩、寂定淸淨・無垢無惱にして、彼の夜半に於て彼の天眼の、時に人眼に過ぎて、遍ねく一切を見るを、成就して證せんと欲す。或は復命終して墮落する衆生、或は生るゝ衆生。上界の衆生、下界の衆生。端正の衆生、醜陋の衆生。或は惡道に墮する一切の衆生、或は善道に生るゝ一切

の衆生。行く者、住する者。或は業を造る者、所造の如き業を、悉く皆眼を以て、通じて能く達見す。

(1)[六]復是の如き衆生は所作の身業不淨・意業不淨にして、師僧を毀謗し、或は邪見に著し、邪見を以ての故に、是の惡業を造り、是の因緣を以て、此の身命を捨てゝ、惡道地獄の中に生れて、諸の苦業を受く。又是の如き衆生は、口業を以ての故に、種種の諸惡道の苦く受く。(2)又是等の衆生は、口業不淨にして、惡口業を造りて、一切具足し、是の因緣を以て、畜生に生れて、諸の苦惱を受く。(3)又是等の衆生、身の惡業を行じ、身の惡業を具し、是の因緣を以て、意の惡業を造り、意の惡業を具し、乃至、一切の諸聖を毀謗し、若干の邪見あり、邪見を以ての故に、邪見の因緣にて、命終捨身して、餓鬼に墮し、餓鬼の苦を受く。(4)又是の如きの衆生は、身の淨業、口の淸淨業を行じて、諸聖の毀らず、正見を行ずるを以て、正見の業を造り、是の因緣を以て、命終捨身して、天上に生る。(5)又若干の衆生は、淸淨の身行口行を造るを以て、一切具足し、不犯不缺にして、諸聖を謗らず、以て正見あり、是の如き正見の業の因緣の故に、命終捨身して、人間に生るゝを知る。

是の如く菩薩、天眼淨のと諸人に過ぐるを以て、諸衆生の、或は墮落する時、或は受生の時、上界の衆生と、中下の衆生と、端正なると醜陋なると、或は身に香あるものと、或は身の臭を患ふるものと、或は惡道に至るものと、或は善道に至るものとを見、所造の如き業を、眞實に皆知ること、譬へば人ありて、國の城邑・聚落・市間喧閙の處に於て、大臺高樓中に昇上して坐し、淨天眼を以て、諸人の、或は東方より來り、或は西方より來り、或は西より東に向ひ、或は東より西に向ひ、或は南より北に向ひ、或は北より南に向ひ、或は南より來り、或は北より來り、或は來り、或は去り、或は住し、或は坐し、其間に展轉して、或は逆行するあり、或は順行するあるを見るが如し。

是の如く是の如く、菩薩是の如く、寂定淸淨・無垢無惱・柔輭に業を作し、彼の夜半に於て、乃至、

【六】以下天眼通を以て將來世五道に生るる衆生の如相を知ることを明す。

諸衆生等の、業に隨つて報を受くる、若しは善、若しは惡なるを見る。而して偈ありて說かく、

『地獄は業苦の極殃を受け　畜生は各相噉食し
餓鬼は恒常に飢渴を患へ　人間は困厄して資財を求め
天上は報盡きて別離を愛しむ　此の苦や最重くして方喩無し
展轉する一切の衆生の類　處處に歡樂の時あること無し』
此を死命鬼の深淵と名く　亦是れ煩惱海の根底なり
衆生沒溺して出るに處なく　此彼に輪轉して來去して行く』
是の如く五道中を觀察して　天眼を以て遍ねく能く見るに
煩惱の始終して實ある無きこと　猶葉葉破るゝ芭蕉の如し』

爾の時菩薩、是の如き寂心、是の如き淨心、無垢の心もて、是の如く一切諸惡を遠離して、心調ひ柔輭にして業を作すべく、已に寂定を得、還、彼の時に於て、後夜將に盡きんとして、心に如意通を證知せんと欲するが故に、自ら發起し、既に知を發し已りて、復他意を知り、何處より生じて何事を思惟するかを、一切に遍ねく至りて、如實に通じて知る。

若しは衆生有りて、[七]欲心を發して、欲事を行ぜんと欲するを、是の如く眞に知り、若しは欲心を離れ、欲を遠離するを、實の如く證知し、若しは瞋恚心より、瞋恚の發起せるを、眞實に通じて知り、若しは瞋心を厭離し、瞋心を遠離するを、實の如く通じて知り、若しは癡心あり、癡心の發起せるを、眞實に通じて知り、癡心を厭離し、癡を厭離し已れるを、實の如く通じて知る。

是の如く略說せんに、愛心と離愛と、乃至、有爲と無爲と、下等と上流と、靜と亂と、廣と狹と、大と小と、有邊と無邊と、有上と無上と、得定と無定と、解脫と無脫とを、實の如く通じて知ること、譬へば丈夫の、或は復婦女の、正に少年の時に、常に喜んで身を嚴り、身を莊嚴し已りて、或

【七】欲・瞋恚心・癡心は三毒なり。

時は淨鏡に、或は淨水中に、自らの面相を觀て、皆見盡すが如し。

是の如く是の如く、菩薩、是の如く寂定に、其の心是の如く淸淨に、是の如く無垢に、是の如く無惱に、柔輭調和にして、業を作すべく、已に寂定を得、還、彼の後夜に於て、淸淨心を以て、宿命智通を證取するを得んと欲し、是の如く自心も他心も亦然り、何より心を發し、何處に心を起せるかを、心心を遍ねく盡して、實の如く通じて知り、若しは有欲の心、若しは離欲の心を、實の如く通じて知り、乃至、解脱と、不解脱心とを、是の如く通じて知る。

而して菩薩、是の如く定心・淸淨の心・無垢穢の心・一切惡を離れたる柔輭の心を得て、業を作すべく、已に寂定を得、還、彼の後夜に於て、(八)漏盡神通を證知するを得んと欲し、內に智心を發して彼、是の如く念ず『此の諸の衆生、煩惱海に沒して、所謂、數生老病死し、此より命終して、彼處に至り、後生を受くる時、還是の如き一切衆苦を得、而も此等の衆苦、所謂、生老病死等の苦を離るゝことを知る能はず』。是の如く思惟して、『我今當に何等の方便を作してか、云何ぞ此等の諸苦を離るゝを得べき。何の業行を作してか、云何ぞ生老病死を捨離して、彼岸に度至せん』と。而して偈を說きて言はく、

『世間は生死して海に沒溺し　數數死し已りて復生を受く
此の老病衆苦に纏はれ　愚迷にして出離を得る能はず』

爾の時菩薩、此の偈を說き已りて、復更に思惟す、(九)『我が老病死は、何より來り、何の因緣にて、此の老病死あるか』。菩薩、是の如く思惟し念ずる時、老病死は生に因るが故に、此の老病死あり、生あるを以ての故に、老病死の隨ふを知る。菩薩、復更に思惟す、『此の生は、何よりしてか有る。何の因緣の故に、是の生あるを得るか』。菩薩、是の如く思惟し念じ已りて、有に因るが故に、故に是の生あるを知る。菩薩、復、更に思惟す、『此の有は何よりしてか有る。何の因緣の故に、此の有あ

【八】漏は煩惱の異名。身口より漏れて、善根をけがすを以てなり。

【九】これより十二緣起（十二因緣、十二緣生）を說く。先づ漏盡を得んが爲には。先づ漏の起る所以を知らざるべからざるを以てなり。

るを得るか』。菩薩、是の如く思惟し念じ已りて、取に因るが故に、故に是の有あるを知る。菩薩、復、更に、思惟す、『是の取は何よりしてか有る。何の因縁の故に、是の取あるを得るか』。菩薩、是の如く思惟し念じ已りて、愛に因るが故に、故に是の取あるを知る。菩薩、復更に、思惟す、『是の愛は何よりしてか有る。何の因縁の故に、是の愛あるを得るか』。菩薩、是の如く、思惟し念じ已りて、受に因るが故に、故に是の愛あるを知る。菩薩、復更に、思惟す、『此の受は何よりしてか有る。何の因縁の故に、此の受あるを得るか』。菩薩、是の如く思惟し念じ已りて、觸に因るが故に、故に此の受あるを知る。菩薩、復更に思惟す、『是の觸は何よりしてか有る。何の因縁の故に、是の觸あるを得るか』。菩薩、是の如く思惟し念じ已りて、六入に因るが故に、此の觸あるを知る。菩薩、復更に是の如く思惟す、『此の六入は、何よりしてか有る。何の因縁の故に、此の六入あるか』。菩薩、是の如く思惟し念じ已りて、名色に因るが故に、六入あるを知る。菩薩、復更に是の如く思惟す、『此の名色は、何の因縁にてか有る。何よりして生ずるか』。菩薩、是の如く思惟し念じ已りて、識に因るが故に、名色あるを知る。菩薩、復更に是の如く思惟す、『此の識は、何の因縁にてか有る。何よりして生ずるか』。菩薩、是の如く思惟し念じ已りて、諸行に因るが故に、此の識あるを知る。菩薩、復更に是の如く思惟す、『此の諸行は、何の因縁にてか有る。何よりして生ずるか』。菩薩、是の如く思惟し念じ已りて、無明に因るが故に、諸行あるを知る。

菩薩、復更に、是の如く思惟す、『[10]無明に縁るが故に、故に諸行あり。諸行に縁るが故に、故に識あり。識に縁るが故に、故に名色あり。名色に縁るが故に、故に六入あり。六入に縁るが故に、故に觸あり。觸に縁るが故に、故に受あり。受に縁るが故に、故に愛あり。愛に縁るが故に、故に取あり。取に縁るが故に、故に有あり。有に縁るが故に、故に生あり。生に縁るが故に、故に老あり。老に縁るが故に、故に病死、及以び憂悲諸苦惱等あり。是の如き諸苦は、各相因りて生ず』と。菩

【一〇】無明より始めて老病死に至るは、十二因縁の順觀なり。

薩、未だ曾て他人より聞かず、未だ曾て自ら見ず。法より眼を生じ、智を生じ、齊を生じ、慧を生じ、明を生じぬ。

菩薩、復更に是の如く思惟す、[一]『何の無き有るが故に、病老死無きか。何の滅あるが故に、老病死を滅するか』。菩薩、是の如く思惟念知す、『生なきを以ての故に、老病死なし。生を滅するを以ての故に、老病死を滅す』。菩薩復更に是の如き思惟す、『何の無きを以ての故に、此生無きか。何の滅を以ての故に、此の生を滅するか』。菩薩、是の如く思惟念知す、[二]『有なきを以ての故に、則ち此の生なく、有を滅するを以ての故に、則ち此の生を滅す』。菩薩、復更に是の如く思惟す、『何の無きを以ての故に、乃至、一切諸行悉く無く、何の滅を以ての故に、乃至、一切諸行悉く滅するか』。菩薩、是の如く思惟念知す、『無明なきを以ての故に、諸行無く、無明を滅するを以ての故に、諸行滅す』。菩薩、復更に是の如く思惟す、『無明を滅するを以ての故に、諸行滅し、諸行滅するが故に識亦隨つて滅し、略說乃至、生死憂悲苦惱皆滅し、是の如く、一切の諸苦、及び集、幷に皆悉く滅す』。菩薩、是の如く、昔未だ曾て聞かざる、是の如き法の中に、眼を生じ、智を生じ、意を生じ、明を生じ、光を生じ、慧を生じぬ。

時に菩薩、是の如き定心、是の如き清淨、是の如き無垢、是の如き一切の諸惱を離るるを得たる柔輭の心、業を作す可き心を得、既に靜心を得て、此は是無明なりと、眞實に知り、亦無明の因の、是の如く生ずるを知り、亦無明の緣の、是の如く滅するを知り、眞實諦了に、此は是無明盡滅の相にして、已に正道を得たりと、眞實に知り、乃至略說せんに、是は識・名色・六入・觸・受・愛・取・有・生・老病死等なりと、如實に知りぬ。

此は是一切老病死の集なり、此は是一切老病死の滅なり、此は是一切の老病死滅し、滅し已りて道を得たるなりと、是の如く悉く知り、此は苦諦の集なりと、如實に知り、此は苦諦の滅なりと、

【一】老病死の滅より無明の滅に結歸するは、十二因緣の逆觀なり。

【二】この下の「以無有無、則無此生、以滅有滅、則滅此生」は、前後に對照するに、必ず「以無有故、則無此生、以滅有故、則滅此生」の誤なるべし。

如實に知り、此は是の苦諦の滅し已りて道を得るなりと、如實に知り、是の如き等は漏なりと眞實に知り、是の如きは漏の集、是の如きは漏の滅、是の如きは漏の滅し已りて道を得るなりと、如實に知り、此れは是れ欲の漏なりと、如實に知り、此れは是れ有の漏、此は無明の漏なりと、如實に知り、此の處の諸漏、悉く滅して餘なく、諸有を斷絕しぬ。

譬へば、郭邑、或は復城傍、或は復聚落の、相去る遠からずして、一水池あり、其の水涼冷、美甘清淨にして、間に穢濁なく、水常に彌滿して、岸と共に齊平なり。又岸の四邊に、多く諸樹ありて、圍遶莊嚴す。池內に、復、種種の諸蟲、或は蚌、或は螺・黿・鼉・龜・鼈などの、多くの諸水性、或は石、或は砂、或は諸魚、鱓・鱒・魴・鯷・鰻及び摩竭魚あり。水內に在りて、東西南北に、交橫に馳走し、飮食を求覓めて、或は住するものあり、或は相趁逐するものあり。而して一人ありて、清淨の眼を以て、岸上に在りて、洞徹分明に、彼等一切の諸蟲の、此は是蚌、是は螺・是は龜、是は鼉、是は鼈、是は砂、是は石、是は魚、是は蟲、摩竭魚等なり、若干は食を求め、若干は蟄眠し、若干は東西南北に馳走し、若干は相趁ふるを見るが如し。

是の如く、是の如く、菩薩、是の如く、心を寂定にし、是の如く清淨、是の如く無垢、是の如く無惱、是の如く柔輭にして、諸業を作すべく、已に寂靜を得て、此は是無明なりと、如實に知り、此は無明の集、此は無明の滅、此は是れ無明の滅し已りて道を得るなりと如實に知り、乃至略說せんに、此の處の諸漏、悉く皆滅盡して、遺餘あること無し。

爾の時菩薩、是の如く時を知り、是の如く時を見、心、欲漏よりして解脫を得、心、有漏よりして解脫を得、無明漏よりして解脫を得、既に解脫し已りて、慧解脫を生じ、生じ已りて卽ち『我が生已に盡き、梵行成立し、所作已に辦じ、畢竟じて更に後世の生を受けず』と知り、其の夜三分已に過ぎて、第四の夜の後分に於て、明星將に初めて出現せんと欲する時、夜、尙、寂靜にして、一切

の衆生、行くと、行かざると、皆未だ覺寤せず。是の時、[一三]婆伽婆(bhagava)卽ち智見を生じて、阿耨多羅三藐三菩提を成じたまふ。而して偈ありて說く、

『是の夜四分の三已に過ぎて　餘の後の一分に明將に現ぜんとす
衆類の行くと不らざると皆未だ動かず　是の時大聖無上尊
衆苦滅し已りて菩提を得たまひ　卽ち世間の一切智と名く』

爾の時婆伽婆、智見を得たまへる時、此の世間に於て、梵宮も・魔宮も・天も・人も・沙門も、及び婆羅門も、世皆大いに明かなり。小鐵圍山、幷に大鐵圍山の、其の間、從來恒常に黑闇にして、未だ會て光を見ず、此の日月は、是の如き大德あり、是の如く光明あり、是の如く威力あるも、遂に彼の處をして光明照耀して、顯赫ならしむる能はざるに、今は自然に、皆大いに開朗して、悉く光明を覩る。其の間の所有の一切衆生、各各相見、各各相知り、各各相語るらく、『此の處に、亦復衆生あるか。此の處に、亦復衆生あるか』と。

一切の樹木、卽ち花果を生じ、熟するに隨つて地に墮つ。世尊の力の故なり。虛空淸淨にして、塵霧あるなく、煙塵あるなきに、忽ち自ら雲を起して、微細の雨を降し、以用て地に灑ぐ。復涼風を起して、冷煖調適、諸方澄淨にして、顯現分明なり。又虛空中の、一切諸天、天の音樂を作し、天の歌讚を作して、種種無量の花雨、所謂、曼陀羅華・摩訶曼陀羅華を雨らし、復、天衣憍奢耶等を雨らし、復、金・銀・瑠璃等の寶を雨らし、復、優鉢羅・拘物頭・分陀利を雨らし、復、種種の末香・塗香を雨らして、佛の上に散じ、散じ已りて復散じ、彼地、周匝して滿一由旬、種種の華雨、末香・塗香、積んで膝に至る。

時に此の大地、六種に震動し、一切の衆生、一向に皆極妙の快樂を受けて、諸苦に惱まず。彼の時に當りて、一衆生の、欲惱あるもの、瞋恚あるもの、貪癡あるものなし。亦復貢高の心、我慢の

【一三】婆伽婆。世尊と譯す。

心を生ぜず、恐怖あるなく、衆罪を作さず、疾病あるなく、衆患皆差えて、更に發動せず。飢渴の衆生は、悉く飽滿を得、酒醉の衆生は、皆醒悟を得て、更に酒を飲まず。顚狂の衆生は、皆本心を得、盲瞑の衆生は、皆色を見るを得、聾者は聲を聞き、身體諸根の完具せざるものは、悉く具足するを得、貧窮の衆生は、皆地藏を得、羸瘦の衆生は、皆肥滿を得、牢獄の繫禁は、悉く皆脫するを得て、枷鎖自然に解散し、地獄の衆生は、悉く苦惱を免れ、畜生の衆生は、恐怖皆滅し、餓鬼の衆生は、飢渴の苦を滅して、悉く飽滿を得たり。而して偈ありて說かく、

『爾の時衆生は瞋等無く　衆苦を滅して大快樂を受け
酒醉狂顚は本性を得　一切怖るるもの皆安きを獲たり』

爾の時世尊、既に阿耨多羅三藐三菩提を成じ已り、即ち是の如き師子音の吼を作して、偈を說いて言まはく、

『往昔造作せる功德の利もて　心の所念の事皆成ずるを得
速疾かに彼の禪定心を證し　又復涅槃の岸に到る』
有ゆる一切の諸怨敵たる　欲界の自在魔波旬も
我を惱ます能はず悉く歸依す　福德智慧力あるを以てなり』
若し能く勇猛に精進を作し　聖智を求めば得んこと難からず
既に得ば即ち諸の苦邊を盡して　一切の衆罪皆除滅せん』

爾の時如來、初めて成佛し已りて、最先に此の口業の偈を說きたまひぬ。

卷の第三十一

昔與魔競品第三十四[一]

爾の時菩薩、彼の初夜に於て、手を以て地を指さし、魔衆波旬の眷屬を降伏す。是の時、此の地六種に震動し、乃至、大震すること、猶ほ銅鐘を打つが如し。是の時、一切の聚落・城邑・國土に所居の諸人衆有り。彼等皆悉く大地の動くを見、震吼の聲を聞き、心に並に疑を生じ、各各自ら往きて、相師の邊、或は卜師の邊、天文師の邊、或は仙人の邊に至り、或は占仰を解する所の師の邊に至りて、悉く皆此の事を借問す『云何ぞ、何が故に大地是の如く震動して、此の大聲を作すか。魔と沙門と、誰れか勝り、誰れか劣れる。汝等各自善能く占仰して、唯願はくは、我が爲めに斯の事を解說せよ』。

爾の時、彼等一切の諸仙・天文師等は、各自、其の問ふ所の人に報じて言はく、『摩伽陀國、伽耶聚落に兩大力あり、相共に捔試しぬ。一は出世最大の法王を求め、一は世間非法の王を求めて、兩者競ひて爭鬪し、而して彼の中に於て、法王を求むる者、彼の非法王を求むるものを撲ち、其の事已に訖りて、後夜中に大法王を成ずるを得て、久しからずして無上法輪を轉ぜんと欲す』。而して偈ありて說かく、

『一切諸人地の動くを聞き　各自占師の邊に往詣し　其の占仰の師に是の言を問ふ』
「仁等世間の聖知者よ　此の大地何が故に動くぞ
唯願はくは諦かに審かに善く觀占して　速かに疾く我等の此の疑を決せよ」
彼等一切諸師報ずらく　「法王と非法王と彼に在り
二人相競ひて威神を鬪はし　各德力の誰を尊しと爲すかを試む』

【一】佛の成道に就いて五箇の降魔本生を說く。

摩伽陀國聚落の內に　　菩薩と天魔と兩相角ひ
法行は彼の魔軍を摧伏し　　既に降伏し已りて菩提を得　　成佛の法王獨り畏無し』

〔二〕爾の時如來、彼の後夜明星の出づる時に於て、阿耨多羅三藐三菩提を成じ已るを得たまふ。時に世間、自然にして最大光明あり。地、六種に動く。時に彼の光明、及び地動あるや、淨飯王宮、睡眠より驚き寤め、諸相師、幷に、婆羅門、天文師等を喚び、之を勅して言はく、『婆羅門の輩よ、此の事はこれ云何、我が爲に解說せよ』と。是の語を作し已る時、諸の占相、天文師等、即ち王に白して言はく、『唯願はくは大王、且く少時忍べ。我等占仰して、然る後王に白さん』。

爾の時佛母摩耶夫人、已に天身を得て、玉女の形を作し、天上より下りて、淨飯王及び羅睺羅の母耶輸陀羅等に告げて、是の如きの言を作す、『大王當に知るべし。今夜、王子悉達多、已に阿耨多羅三藐三菩提を成じたまひぬ。是の相を以ての故に、大地震動す。如來、既に三菩提を成じ已り、衆魔を降伏して、怨敵有ること無く、世間中に於て、畏るべき所なし』と。

是の時、色界の淨居諸天は、心に尙、如來の三菩提を成ずるを得たるや不やを疑惑す。爾の時世尊、彼の諸天の心に念ふ所を知り、虛空を飛騰し、彼の諸天の、疑心を斷ぜんが爲の故に、是の如き師子吼の聲を說きたまふ、『我れ今已に諸欲〔三〕愛結を斷じ、已に欲心を定め、一切諸煩惱の水を乾竭して更に復流さず、後有を受けず、更に轉じて煩惱の內に入らず、苦邊を度し盡して、更に復餘す無し』と。

爾の時、彼等一切の諸天、此の說を聞き已りて、心に各如來の已に三菩提を成ずるを得たまへるを思惟して、歡喜踊躍其の體に遍滿して、自ら勝ふる能はず。天の妙花・塗香・末香・天の栴檀香・牛頭栴檀細末の香・曼陀羅花・摩訶曼陀羅花を將つて、如來の上に散じ、散じ已りて復散ず。其の魔波旬、諸天衆の、是の如き等の供養の具を將つて、如來を供養するを見、見已りて、即ち如來の前に

【二】淨飯王。佛成道の瑞相を感じ、天界の摩耶夫人よりその成道を聞く。

【三】結は煩惱の異名。衆生を迷界に結びつくる絆なるを以てなり。

對し、相去る遠からざる地上に坐して、悵怏として樂しまず。心、大いに憂愁し、一狹片を以て、地に畫きて、復是の如く念ず『世は、實に稀有にして思議す可き難し。諸仙の苦行をば、我れ能く廻轉し、帝釋等の一切諸天には、我れ能く貪欲の心を發さしむ。云何ぞ今此の沙門釋種は、一心三昧にして、暫時を經る間に、我が軍馬をして、皆悉く降服せしむること、是の如きか』。

已後、如來が、佛事說法を密教し、廣行せる時、諸比丘等、卽ち佛に白して言さく『希有なり、世尊。世尊、云何か精進力を以て、三菩提を得、[四]七道分を成じて、法寶を滿足したまひしか』と。是の語を作し已るや、佛卽ち彼の諸比丘に告げて言まはく『汝諸比丘よ、今應當に知るべし。然も我れは、但此の一世の精進力の故に、三菩提及び七道分を得たるに非ず。我れ往昔時の精進力の故に、摩尼寶を得たるなり』。時に、諸比丘、卽ち佛に白して言さく『世尊、此の事云何。願はくは我等が爲めに、分別解說し給へ』。

[五]爾の時佛、諸比丘に告げて言まはく『汝諸比丘よ、至心に諦聽せよ。我れ念ずるに、往昔、一商主(sārthavāha)有り、海に入りて寶を採らんとし、而して海內にて、一の貴重なる摩尼の寶を得たり。其の價は正に百千兩金に直す。得已りて忽然として還た海中に墮つ。時に彼の商主、卽ち一杓を持つて、大精進勇猛の心を發し、大海の水を抒み、乾竭せしめて摩尼寶を求めんと欲しぬ。時に海神天は、彼の人の、杓にて海水を抒み、將て陸地に置くを見、見已りて卽ち是の如き念言を作す、「此の人や愚癡なり、智慧あることなし。大海の水は無量無邊なり。其の人、云何ぞ、杓を以て、抒みて陸地に置かんと欲する」と。而して彼の海神、卽ち偈を說きて言はく、

「世間に多くの衆生輩あり　財利を貪らんが爲めに種種に僞せども
我れ今汝を見るに大愚癡なること　更に人の汝に過ぐる者有る無し」
八萬四千由旬の海を　今杓を以て抒みて乾かさしめんと欲す

【四】七道分とは七菩提分又は七覺支ともいふ。菩提を得るにつきての七件。(一)擇法、(二)精進、(三)喜、(四)除、(五)捨、(六)定、(七)念をいふ。

【五】商主搜海本生。Mahā-vastu, II p. 89-Śri-jātaka を參照。

困乏して徒らに自ら一生を喪ひ　抒む所未だ多からざるに命便ち盡きん』
抒む所の水は毛渧の如く　此の大海は廣くして甚深なり
汝今無智にて思惟せず　耳璫[六]もて須彌[七]を取ることを作さんと欲す』
爾の時、商主、復、海神に向ひて、偈を説きて言はく、
「天神は此く不善の言を爲して　乃ち我の海を乾竭するを遮らんと欲す
神但意を定めて正しく我れを觀よ　久しからずして海を抒みて當に空しからしむべし』
仁此に住して長夜に停まらば　是の故に心應に大いに憂惱すべし
我は誓つて精勤の心退かず　必ず大海を竭して乾かしめん』
我が無價の寶此の中に墮つ　是の故に大海の水を枯らさんを要す
水若し底を盡さば還た寶を獲　得已りて當に廻歸して家に向ふべし』

時に、彼の海神、是の語を聞き已りて、心に恐怖を生じ、是の如き念を作す、「此の人、是の如く、精進勇猛にして、此の海水を抒む、必ず當に竭盡くすべし」。時に彼の海神、是の如く念じ已りて、卽ち商主に無價の寶珠を還し、還し已りて、卽ち是の如きの偈を説きて言はく、

「凡て人は須らく勇猛心を作すべし　苦疲を負擔して惓を辭する莫れ
我れ是の如き精進力を見て　失へる寶を還して歸りて家に向ふを得しむ』」

爾の時世尊、偈を説きて言はく、

『精進は處處に心に稱ふを得　嬾惰は恒常に大苦を見る
是の故に勇猛の意を勸發せよ　知人は此を以て菩提を成ず』

佛、諸比丘に告げたまはく、『爾の時の大商主を知らんと欲せば、卽ち我が身是れなり。時に彼の商主、海に入りて、既に無價の寶珠を得。得て還つて復失ひしも、勇猛心を以て、寶を求めて還た

【六】耳璫とは印度婦人の耳かざり。
【七】須彌 (Sumeru)。妙高山と譯す。

得たり。今日も亦然なり。精進を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提、七覺分の道を得たり』。時に諸比丘、卽ち佛に白して言さく『希有なり、世尊、希有奇特なり、思議す可らず。一人にして、獨り自ら能く是等一切の魔衆を降したまへること』と。此の語を作し已りて、卽ち各默然たり。

[八]爾の時世尊、復更に重ねて諸比丘に告げて言まはく『汝諸比丘、至心に諦聽せよ。我れ但今のみ、獨自にして是の如く衆魔を降伏せるに非ず。過去世の時も、亦曾て是の如く獨自にして、彼等魔衆を降伏せり』。時に諸比丘、卽ち佛に白して言さく『世尊、其の事云何。唯願はくは我が爲に分別解說したまへ』。爾の時佛、諸比丘に告げて言まはく『汝等善く聽け、我れ念ずるに、往昔無量世の時、二兄弟の鸚鵡の鳥あり、一を摩羅祇梨(Mālagiri)(隋に鬘山と言ふ)と名づけ、二を臊陀祇梨(Sādhagiri?)(隋に彼與山と言ふ)と名づけたり。時に二鸚鵡、樹上に在り、忽然として鷹有り、迅疾に來りて、一小者を撮りて、將に空を飛びて行かんとす。爾の時、彼の兄、卽ち其の弟に向ひ、偈を說きて言はく、

「獨自の一人亦苦を得　獨自の一人亦樂を得
汝彼の鷹の要害の處を啄け　其れ若し苦困せば卽ち汝を放たん
汝今身小にして我れ薄力なり　唯汝精勤にして懶惰なる莫れ」と』
其の弟既に兄の語を聞き已り　勇猛の威力事を出さんと欲し
身を盡し力を極めて思量し竟り　卽便ち要處によりて鷹身を啄く』
鷹身體に苦痛の纒ふを患へ　速疾に卽ち鸚鵡鳥を放ち
鷹身體の患痛を以ての故に　疾走して處處に歸依を求む』
その巧みに鸚鵡鳥の脫せる　由は[九]　彼の鷹の最要節を啄けるを以てなり
鷹は避藏する處あるなきに困しみ　嚴熾なる鸚鵡鳥は空を行く
鷹は鸚鵡が後を逐うて飛ぶを見て　捨離遠走して活路を求めぬ』

【八】二鸚鵡本生。Mvst. に無し。

【九】由の字。或は出の誤か。

爾の時鷹を啄ける鸚鵡とは　今卽ち我が身釋迦是なり
彼の鷹は卽ち是れ魔波旬なり』　時に我れは唯獨自の身にして
已に能く彼を降伏し得たるに　況んや復今功德の備はるを
那ぞ彼の魔王を伏せざるを得んや　汝等比丘宜しく此を知るべし』

爾の時、諸の比丘、復佛に白して言さく、『世尊、云何ぞ魔王波旬、數數如來を欺誑けるも、著を得る能はずして、如來は常に彼の厄難を免れたまへる』。是の語を作し已るや、世尊、復諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、至心に諦聽せよ。當に汝が爲に說くべし。我れは但今のみ魔波旬に誑かるるを脫し得たるに非ず。曾て其がために惱亂せられず。過去世の時、魔王波旬、我を誑惑したるも、亦我を嬈亂するを得る能はざりき』。時に諸比丘、卽ち佛に白して言さく、『世尊、其事云何、唯願はくは我が爲めに分別解說したまへ』。

10 爾の時佛、諸の比丘に告げて言はく、『我れ念ずるに、往昔一河有り、波梨耶多(Pāriyātra? Must Pāriyātrikā)(隋に度彼節といふ)といふ。時に彼の河岸に、一人有りき。是れ結花鬘師(Mālākāra)なり。其の人に園有り、彼の河側に在り。彼の河內に、時に一鼈(kacchapa)ありて水より出で、花園の中に至り、食を求めて行き、處處を經歷して、其の花を蹋み壞れり。時に彼の園主、彼の鼈の、處處に食を求めて、其の花を踐み壞るを見、是の時園主、卽ち方便を作して、彼の鼈を捕捉し、捉へ已りて一の筐篋中に置き、將に殺して食はんと欲しぬ。爾の時彼の鼈、是の如きの念を作す、「我れ今云何が此の難を脫するを得ん。何の方便をかなし、何の巧智をか作さん」。卽ち是の心を發しぬ、「我れ今此の園主を誑く可し」と。是の念を作し已りて、卽ち園主に向ひて、偈を說きて言はく、

「我れ水より出で身に泥あり　汝且らく花を置きて我が體を洗へ
我が身既に泥の不淨あり　恐畏らくは汝の篋及び花を汚さん」

【10】鼈本生。Mvst., II. 244 Kacchapajātaka

時に彼の園主、是の如きの念を作す、「善い哉、此の龜。善く言ひて我を敎へぬ。我れ、今其の言を取らざるを得ず。我れ其の身を洗ひ、我の花篋を泥汚せしむるなからん」。是の念を作し已りて、卽ち手に龜を執り、將つて水所に向ひて、龜身を洗はんと欲す。此の時彼の人、卽ち龜を提げて出で、石上に置き、水を抄うて洗はんと欲す。是の時彼の龜、大筋力を出し、忽ち水に投沒す。時に花鬘師、龜の水に沒するを見て、是の如き念をなす、「奇なる哉、是の龜、乃ち能く是の如く我を誑惑す。我れ、今還た是の龜を誘誑して、水を出でしむ可し」。時に花鬘師、卽ち彼の龜に向ひ、偈を說きて言はく、

「賢龜我が作意を諦聽せよ　汝今[一]親舊甚だ衆多なり
我れ花鬘を作りて汝の咽に繫け　汝が家に還りて喜樂を作すに恣さん」

爾の時彼の龜、是の如き念を作す。「此の花鬘師、妄言もて我を誑むく。此の花鬘師の母患みて牀に著き、其の姉花を採りて鬘を造り、賣りて以用つて活命せんと欲す。今是の言を作すは、定めて是れ我を誑き、我を食はんと欲するが故に、我を誘ひ出すのみ」。是の時、彼の龜、花鬘師に向ひて、偈を說きて言はく、

「汝が家酒を作り親を會せんと欲して　廣く種種の諸味の食を作す
汝家內に至りて是の言を作せ　龜肉煮已りて脂[二]糂頭たりと」』

爾の時佛、諸の比丘に告げて言はく『汝等比丘、彼の時の入水龜を知らんと欲せば、我が身是なり。花鬘師とは魔波旬是。其れ、爾の時に、我を誑惑せんと欲して、著する能はず。今復誑かんと欲するも、何に由つてか得可けん』。

[三]時に諸の比丘、復、佛に白して言さく『希有なり、世尊、實に思議し難し。魔王波旬威勢自在にして欲界を統べ、種種に誑惑するも、猶ほ此の坐處を動かす能はざるとは』。是の語を作し已るや、

【一】親舊は親戚故舊。

【二】糂は糝。米と肉とを合せて餌となして煎たるもの。頭は附加の接尾語のみ。

【三】妊虬本生。Markata jātaka (Mvst. II. 246—250)

爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、今當に知るべし。但今日のみ此の魔波旬が、其の力勢を將て、我を誑惑せんと欲せしにあらず、過去にも亦然り。誑惑して、我が便を得る能はざりき』と。時に諸比丘、卽ち佛に白して言さく、『善い哉、世尊、其の事云何。唯願はくは我が爲に分別解說したまへ』。爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『我れ念ずるに、往昔大海の中に一大虬(sisumāra)あり、其の虬に婦有り、身正に懷妊し、忽然として獼猴(markaṭa)の[一四]心を食はんと思欲しぬ。是の因緣を以て、其の身羸瘦して、痿黃宛轉し、戰慄して安からず。時に彼の牡虬、婦の身體の、是の如く羸瘦して、顏色あることなきを見、見已りて問うて言ふ、「賢善なる仁者、汝何の患ふる所ぞ、何の食をか欲思する。我れ、汝が我より食を索むるを聞かず。何が故に是の如きか」。時に、其の牸虬、默然として報ぜず。其の夫、復問ふ、「汝、今何の故に、我に向うて道はざる」。婦、夫に報じて言はく、「汝、若し能く我が心の隨なるを與さば、願はくは我當に之を說くべし。若し能はずんば、我何ぞ說ふを假らん」。夫、復答へて言はく、「汝、但說き看よ。若し得べき理あらば、我當に方便もて會ず覓めて得しめん」。婦、卽ち語りて言ふ、「我、今意に獼猴の心を食はんことを思ふ。汝能く得るや不や」。夫、卽ち報じて言はく、「汝の須むる所のもの、此の事甚だ難し。所以は何。我が居止は大海の水中に在り。獼猴は乃ち山林の樹上に在り。何に由つてか得可き」。婦言はく、「奈何。我、今意に此の如き食を思ふ。若し是の如き物を得る能はずんば、此の胎は必ず墮し、我が身も久しからずして、恐らくは命終を取らん」。是の時其の夫、復婦に語りて言はく、「賢善なる仁者、汝且らく容忍せよ。我れ今求め去ん。若し此の事の、深さ言ふ可らざるを成ぜば、則ち我と汝と並に皆慶快せん」。爾の時彼の虬、卽ち海より出で、岸上に至る、岸を去る遠からずして、一大樹あり優曇婆羅(udumbara)（隋に求願といふ）と名づく。時に彼の樹に一大獼猴あり。樹頭に在りて果子を取りて食ふ。是の時、彼の虬、旣に獼猴の樹上に在りて、坐して樹子を食ふを見、見已りて漸漸に樹下に到り、到

【一四】心は心臟なり。

り已りて卽便ち共に相慰喩し、美き語言を以て、獼猴に問訊す、「善い哉善い哉、[一五]婆私師吒（Vasiṣṭha）よ。此の樹上に在りて、何事をか作す。甚だ辛勤して苦惱を受けずや。食を求むるは得易し、疲惓するなきや不や」。獼猴報じて言はく、「是の如し、仁者よ、我れ今大いに苦惱を受けず」と。虯、復重ねて、更に、獼猴に語りて言はく、「汝、此の處に在りて何をか食噉する所ぞ」。獼猴報じて言ふ、「我れ優曇婆羅樹上に在りて、其の子を食噉す」。是の時、虯、復獼猴に語りて言はく、「我れ今、汝を見て、甚大歡喜、身體に遍滿して、自ら勝ふる能はず。我れ、汝を將つて善友と作し、共に相愛敬せんと欲す。汝、我が語を取らば、何ぞ此に住まるを須ひん。又復此の樹子少にして多からず。云何ぞ乃ち能く此處のみならん。願樂はくは汝、下り來りて我に隨逐す可し。我、當に汝を將て海を渡すべし。彼の岸に、別に大林有り、種種の諸樹、花果豐饒なり。——所謂、菴婆果（āmra）、閻浮果（jambu）、梨拘闍果、頗那婆果（panasa）、鎭頭迦果（tinduka）の無量の樹等なり」。獼猴問うて言はく、「我れ、今云何で彼處に至るを得ん。海水深廣にして甚だ越渡し難し。我れ當に云何で能く浮渡するに堪ふべき」。是の時、彼の虯、獼猴に報じて言はく、「我れ背に汝を負ひ、將つて彼の岸に渡すべし。汝今、但、當に樹より下り來りて、我が背上に騎るべし」と。

爾の時獼猴、心に定なきが故に、狹劣愚癡、少見少知なり。虯の美言を聞きて、心に歡喜を生じ、樹より下りて、虯の背上に上り、虯に隨ひて去らんと欲す。其の虯、內心に是の如きの念を生ず、「善い哉、善い哉、我が願已に成る」。卽ち相將ゐて自らの居處に至らんと欲し、身と及び獼猴と、俱に水に沒す。是の時、獼猴、彼の虯に問うて言はく、「善友、何故に忽ち水に沒するか」。虯、卽ち報じて言はく、「汝は知らざる也」。獼猴問うて言はく、「其の事云何、何の所爲をか欲する」。虯、卽ち報じて言はく、「我が婦、懷妊す。彼れ、是の如く汝の心を食はんと思欲す。是の因緣を以て、我れ汝を將て來る」。爾い時獼猴、是の如き念を作す、「嗚呼、我れ今甚だ吉利ならず、自ら磨滅を取りぬ。

【一五】婆私師吒は有名なる古仙人にして、此名を有するものは、婆羅門學者を代表す。

嗚呼、我れ今何の方便をなしてか、此の急速の厄難を免れて、身命を失はざるを得ん」。復是の如く念ず、「我れ須らく虬を誑くべし」。是の念を作し已りて、虬に語りて言はく、「仁者、善友よ、我が心は、留めて優曇婆羅樹上に在りて寄著し、持して將つて行かず。仁、當時に於て、云何で實に依りて語らざる。我今にして汝の心を須むることを知れり。我れ當時に於て、卽ち將つて相隨ひしものを。善友よ、還廻りて我に心を取るを放さば、得已りて還り來らん」。爾の時、彼の虬、獮猴の是の如き語を聞き已りて、二つながら倶に還り出づ。獮猴、虬の水岸に出でんと欲するを見、是の時、獮猴、努力奮迅して、捷疾かに跳躑し、大筋力を出して、虬の背上より跳下して、彼の優曇婆羅大樹の上に上る。其の虬、下に在りて、少時、停待し、彼の獮猴の、淹遲して下らざるを見、之に語りて言はく、「親密の善友、汝、速に下り來れ。汝と共に相隨ひ、我が家に至らん」。獮猴嘿然として樹を下るを肯んぜず。虬、獮猴の久しきを經て、下らざるを見、偈を說きて言はく、

「善友獮猴よ心を得已らば　願はくは樹上より速かに下り來れ
我當に汝を送りて彼の林に至るべし　多饒なる種種の諸果の處に」

爾の時、獮猴、是の思惟を作す、「此の虬、無智なり」。是の如く、念じ已りて、卽ち彼の虬に向ひて、偈を說きて言はく、

「汝虬、計校能く寛しと雖も　而かも心の智慮甚だ狹劣なり
汝但審諦に自ら思忖せよ　一切の衆類誰れか心なからん
彼の林は復子豐饒にして　及び諸の菴羅等の妙果ありと雖も
我れ今意實に彼に在らず　寧ろ自ら此の優曇婆を食はん」

爾の時佛、諸の比丘に告げて言まはく、『汝諸比丘、當に知るべし、彼の時の大獮猴とは我が身是れ也。彼の時の虬は、魔波旬是れ也。時に猶ほ我れを誑惑して、得る能はず。今復世間の自在五

欲の事を將つて、來りて我れを誘はんと欲するも、豈に能く我が此の坐處を動かさんや』。是の語を作し已りたまひし時、諸の比丘、復、佛に白して言さく、『希有なり、世尊。奇特なるかな、世尊。實に思議し難し。此の事云何。魔王波旬が、此の醜陋異類の軍衆を將ゐて、如來の所に至り、如來復た一一觀知したまひしこと』と。

一六 爾の時、佛、諸比丘に告げて言まはく、『比丘、當に知るべし。但今日のみ魔王波旬が、此の醜形の大魔軍衆を將ゐて、我が邊に至り、我れ亦觀知したるに非ず』。時に諸比丘、卽ち佛に白して言さく、『希有なるかな、世尊。其の事云何。願はくは爲に解說したまへ我等聞かんを樂ふ』。爾の時世尊、諸比丘に告げたまふ、『我れ念ずるに、往昔一獵師(sakuntika)有り、一林に多饒の諸鳥ありて、數彼處に下るを知り、其れ彼に到り已りて草菴を作り、雜樹の枝を將つて、其の上を覆ひ、卽ち其の內に入り、身を隱して坐住す。時に彼の諸鳥、是を樹枝と謂ひ、飛び下り來りて其の菴上に栖む。時にその獵師、鳥の上に栖むを見て、漸漸に或は射、或は搦めて殺す。時に一鳥あり、此の庵を見已りて、是の如き念を作す。「此の菴舍處處に移動し、自餘の諸樹は、安定一住す。此の菴の下、必らず一七空然ならざらん」。是の如く知り已りて、彼の庵を遠離して、獵師に捉搦せられず。而して、偈を說きて言はく、

「我れ一切の林の諸樹を見るに　阿說及び毘醯羅
諸の阿梨羅并に閻浮　無脂の羅波・鎭頭樹は」
安住して一處に停止し　生じてより已來動移せず
此の樹轉易して處處に行く　其の中必ず應に空しく立たざるべし」
若しは當に其の內に惡物あるべし　我れは應に速かに疾く此の林を捨つべし
心裏既に大狐疑を生ずらく

【一六】鳥本生。Śakuntaka jātaka (Mvst., II. 250)。

【一七】不空然。或は不空立の誤りか。

或は是れ悪行にして慈愍無く　恐畏らくは彼の中我を殺害せん』
又我往昔他方にて　已に曾て網を摑裂して走り來れり
智者旣に應に之を捨つべきを知る』

爾の時、佛、諸比丘に告げて言はく、『汝等、當に知る可し。彼の飛鳥は、我が身是なり。其の獵師は魔波旬是なり。其れ、彼の時に於て、畏る可き形を作して、我れを殺害せんと欲せるも、我れ時に觀知せり。今復此の畏る可き醜陋なる魔の軍衆を將ゐて、我が邊に來るも、我れ亦久しく知れり』。

爾の時世尊、偈を說きて言はく、

『世間若し深く思惟せずんば　云何ぞ能く上人の法を得ん
我れ今勝れたる思惟を以ての故に　縛より解脫して〔一八〕無爲を得たり』

〔一〕二商奉食品第三十五の上

〔二〕爾の時世尊、初始めて菩提の道を成ずるを得て、樹下に在りて坐し、七日夜を經るも跏趺して起たず、解脫の快樂を念ずるを以て食となしたまふ。爾の時世尊、七日を過ぎ已りて、一心正念にして、三昧より起ち、師子座に坐して、初夜に、十二因緣を正觀したまふ。下より觀じて上に至り、上より觀じて下に至り、善く念じ善く觀じて、失せず異らず。彼に因りて此を生じ、彼有るに因りて則ち復此有り。――所謂、無明に緣りて諸行有り、諸行に緣りて識有り、識に緣りて名色有り、名色に緣りて六入有り、六入に緣りて觸有り、觸に緣りて受有り、受に緣りて愛有り、愛に緣りて取有り、取に緣りて有有り、有に緣りて生有り、生に緣りて老病死・憂悲惱等の苦を生ず。爾の時、世尊、此の法を知り已りて、偈を說きて言はく、

『若し梵行有りて諸法を觀ずれば　卽ち是の如く法の相生ずるを見る

〔一八〕無爲とは、爲は爲作造作、何ものにも造られざる不生不滅の法、卽ち、涅槃の境地をいふ。

〔一〕佛。成道後七七日間、樹下に端坐して自受法樂したまふ。此經はその間の出來事を記す。（諸傳、或は七七日とし、或は五七日とする等一致せず）。この出來事の中、諸傳に通記さるるは、觀十二因緣、目眞隣陀龍王供養、二商供養の三項のみ。

〔二〕初七日目、初中後三夜に十二因緣を順逆二觀して法樂したまふ。

若し諸法の從つて相生ずるを見れば　即ち諸法の因緣の有なるを知る』

爾の時世尊、還た彼の夜半に、十二の緣を觀じ、始よりして終に至り、逆觀して至心に、善く觀じ善く念じたまひて、失せず亂れず、「彼無きに因るが故に則ち此自ら無く、彼を滅するに因るが故に則ち此自ら滅す。——所謂、無明滅すれば即ち行滅し、行滅すれば、乃至、生老病死・憂悲苦惱、一切悉く滅す」。

爾の時世尊、此の法を知り已りて、偈を說きて言はく、

『若し梵行有りて諸法を觀ずれば　即ち是の如く法の相生ずるを見る
若し諸法の從つて相生ずるを見れば　即ち諸法の因緣の滅するを知る』

爾の時世尊、還た彼の後夜に、十二緣を觀じたまふ。始よりして終を觀じ、終よりして始を觀じ、善く觀じ善く念じたまひて、失せず亂れず——所謂、彼生じ已りて復此を生じ、彼有るに因りて復此有り、彼無きに因りて此亦無く、彼滅し已りて、此亦滅す。——所謂無明に因りて諸行を緣じ、諸行を緣じ已りて、乃至、一切の生老病死、諸の苦惱等、皆悉く相生ず。彼無ければ此亦無く、彼滅すれば此亦滅す」。爾の時世尊、此の義を知り已りて、偈を說きて言はく、

『若し梵行有りて世間を觀ずれば　即ち相生じ乃至滅するを見る
既に諸魔を散じて建立して住すること　彼の日天の虛空に曜くがごとし』

[三] 爾の時世尊、彼の師子座上より起ちて、菩提樹を離れ、相去る遠からず、還た加趺して坐したまふ。七日不動、解脫の行を以て用つて安樂と爲し、七日諦觀し、菩提樹より、目暫くも捨てずして、復此の念を作したまへり、『我れ此處に無邊際の苦を盡し、以て重擔を捨てたり』。爾の時、世尊、七日を過ごしたまへる後、正念正知にして三昧より起ちたまふ。——其の後、人有り、如來の道樹を觀じたまへる處に、塔を立て、名づけて不瞬目塔と曰ふ。——而して偈を說きて言はく、

【三】第二七日不動住、第三七日菩提樹諦觀。

『此の道場にて諸苦を盡し　復斯の坐處にて彼の座を觀じ
已に諸願を渡りて彼岸に至り　我彼處に於て菩提を證す』

[四]爾の時世尊、眼不瞬塔の所より起ち已りて、安庠として漸く、摩梨支(Marici)（隋に陽燄といふ）經行の處に至り向ひ、經行の處に至り已りて跏趺して坐し、復七日を經て、解脫の樂を受けたまふ。爾の時世尊、七日を過ぎ已りて、正念正知にして三昧より起ちたまふ。爾の時迦羅龍王(Kāla)（隋に黑色といふ）佛所に詣り、佛所に到り已りて、佛足を頂禮し、却いて一面に住し、一面に住し已りて、即ち佛に白して言さく、『世尊、我が此の宮殿は、往昔已に曾て過去の一切諸佛に布施し、諸佛受け已りて、各此に住したまへり。我を憐愍したまへるが故に。其の諸佛とは、所謂、拘留孫世尊(Krakucchanda)拘那含牟尼世尊(Kanakamuni)　迦葉世尊(Kāśyapa)なり。今日世尊、善い哉、時を知り、我れを憐愍したまふが故に、少時此に住したまへ。所以は何ぞや。我れ已に此の宮殿を將つて、過去の三佛に布施したり。今日、世尊は、第四に、我が爲に此の宮殿、即ち四佛受我宮殿具足功德と名くるを、受けたまへ』。爾の時世尊、即ち迦羅龍王の宮殿を受け、受け已りて中に入り、跏趺して坐し、復七日を經て、一定にして起たず、解脫の樂を受けたまふ。爾の時世尊、七日を過ぎ已りて、正念正知にして三昧より起ち、彼の迦羅大龍王に告げて言まはく、『汝龍王、來りて我が邊より佛等の三歸、及び五戒を受けよ、汝當に長夜に大安樂を受くべし』。時に迦羅龍、即ち佛に白して言さく『謹しみて佛の敎に隨ひ、心敢て違せずして、世尊の勅の如くせん』。時に迦羅龍、佛語を聞き已りて、合掌して佛に向ひ、即ち佛より[五]三自歸依を受けて、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依し、復[六]五戒を受けて世間中に於て、最初に[七]優婆塞(upāsaka)の名を得たり。畜生中に於て、三歸を[八]稱說し、三歸を受け已れるは、所謂即ち是れ迦羅龍王なり。

[九]爾の時復更に一龍王有り、名づけて目眞隣陀(Mucilinda)といふ。佛所に向ひ、佛所に到り已り

【四】第四七日、迦羅龍王供養。Mahāvastu, III. p. 300參照。

【五】三自歸とは略して三歸といふ、佛法僧の三寶に歸依するなり。

【六】五戒とは殺生、偸盜、邪婬、妄語、飲酒せざるをいふ。

【七】優婆塞、淸信士と譯す。

【八】稱說。元明二本による、他は再說に作る。

【九】第五七日、目眞隣陀龍王供養。Mahāvastu, III. p. 380參照。

て、佛足を頂禮し、却いて一面に住し、一面に住し已るや、是の時龍王、即ち佛に白して言さく、『世尊、我が此の宮殿は、往昔過去に、已に曾て一切諸佛に布施したるに、受けて住したまひき。所謂、拘樓孫世尊・拘那含牟尼世尊・迦葉世尊なり。善い哉、世尊、今、亦我が爲に此の宮殿を受けたまへ。我は、四佛の三藐三佛陀が、此の宮殿を受けたまへるを得て、我れ善利を獲ん』。爾の時世尊、彼の目眞隣陀龍王より、宮殿を受け已り、跏趺して坐し、解脱の樂を受けんと欲するが爲の故に、一たび坐して七日を經て起ちたまはず。時に彼の七日、虚空の中、雲を興し、雨を注ぎ、大冷風を起して、七日の內、雨暫くも停まらず、遂に寒凍を成す。爾の時目眞隣陀龍王、宮殿より出で、其の大身を以て、七重に圍遶して、佛身を擁蔽し、復七頭を以て、世尊の上に垂れ、大蓋を作して、凝然として住し、心に是の如く念ず『世尊の身體をして、寒冷・風濕・塵坌ならしめ、蚊虻の諸蟲をして世尊の體に觸れしむる莫からん』と。爾の時世尊、七日を過ぎ已りて、虚空中を見たまふに、雲霧有ること無く、以て清淨なるを得、正念正知にして、三昧より起ちたまふ。爾の時目眞隣陀龍王も、其の龍身を攝し、七重に遶り已りて、龍形を隱し、化して年少婆羅門の身と作り、佛前に在りて、十指掌を合し、佛足を頂禮して、佛に白して言さく、『世尊、我れ今以て、如來を恐怖し、如來を嬈亂せさらんが故に、龍身を以て佛を遶る七匝、又、七頭を以て、世尊の上を覆ひ、安然として住したり。但世尊の身に寒冷・風塵・土坌・水漿あり、蚊虻の、世尊の體に觸るる有らんを恐れたるのみ。世尊、我れ時に是の如き事を思惟し已りて、世尊の身を覆ひたり』。爾の時世尊、是の因緣を以て、即便ち偈を說きて、自ら讃歎して言はく、

「知足寂定は最も安樂なり　知足にして諸法の甚深なるを觀じ
安樂にして世間を惱まさず　亦復衆類を殺害せず』
若し世間の安樂を得るもの　一切諸の欲貪を遠離し

我慢と自矜高とを捨つれば　　此の樂は最も勝妙樂たり』
人間の所有の諸の欲樂と　　若し能く盡く愛を捨てて悉く無きと
彼の樂と此の樂と等しく校量するに　　十六分中一にだも及ばず』

爾の時世尊、是の偈を說き已りて、目眞隣陀龍王に告げて言まはく、『汝大龍王、來りて三歸を受け、幷に五戒を受けよ。汝當に長夜に安樂を得べきが故に』。時に目眞隣陀、卽ち佛に白して言さく、『世尊の敎の如く、敢て違ふこと有らじ』。其の目眞隣陀、佛の敎を聞き已り、卽ち佛より三自歸依を受け、及び五戒を受けたり。

〔一〇〕爾の時、彼處に牧羊子有り。世尊の菩薩たりし時に當り、彼の苦行六年の中に在りて、以て世尊に向ひて、淨心もて供養し恭敬し尊重し、復乳汁を將つて、以て世尊に奉り、兼ねて復別に尼拘陀の枝を折りて、爲めに蔭涼を作せり。時に彼の樹枝、卽ち大樹と成れり。然るに、其の羊子は、此の多少の信心、福業善根の因緣に隨ひて、命終し已りて後、卽ち〔一一〕三十三天に生ずるを得て、便ち大德威力ある天子と成り、神通自在なり。時に彼の天子、天上に生じ已りて、是の思惟を作す『今此の果報、本何の業に因りてか是の身を得たる』。復是の念を作す『往昔、世尊の菩薩爲りし時、我れ身を以て、是の如き業を造作せり。菩薩の苦行せるとき、我れ乳汁を奉り、菩薩の彼に在るや、我れ尼拘陀樹の一枝を將つて、地上に插し、菩薩の爲に蔭涼を作せるが故に、斯の善業に藉りて、我れ今此の微妙の果報を得たり』。復是の如く念ふ『我れ世尊の菩薩たるとき、身親しく供養せるを以ての故に、此の果報を得たり、彼の樹枝を種ゑて、以て蔭涼を作せり。是の故に我今是の果報を得、兼ねて、是の如き無礙の神通を得たり。況んや復世尊、今已に無上菩提を成ずるを得たまふ。今當に我が爲めに彼の樹下に還り、彼の樹蔭を受くべし』と。時に彼の天子、身より大色の最勝光明を出だし、夜半に、一向に、彼の樹の所を照らし、天の光明を以て、自ら照明し已りて、佛の所に詣

【一〇】第六七日、牧羊子天歸依。（本國譯、前卷三八七頁終以下參照）。
【一一】三十三天とは、忉利天の譯。須彌天の頂上にあり、帝釋その主たり。

り向ひ、彼に到り已りて佛足を頂禮し、却きて一面に住す。時に彼の天子、卽ち佛に白して言さく、『善い哉、世尊、唯願はくは我が爲めに彼の樹を受け、隨意に安樂したまへ。我れを憐愍したまふが故に』。

爾の時世尊、彼の天子を憐愍せんと欲するが爲めの故に、往昔羊子の種ゑたる尼拘陀樹を受け、受け已りて樹下に加趺して坐し、一坐便はち七日を經て、動かず、以て解脫に住したまふ。安樂を受けんが爲めの故に。

爾の時世尊、彼の七日を過ぎたる後を以て、正念正知にして、三昧より起ち、天子に告げて言まはく、『汝天子よ、來りて、我が邊より三自歸、幷及に、五戒を受く可し。汝當に長夜に安樂を得べきが故に』。而して彼の天子、三自歸及び五戒を受け已る。時に、彼の世間に、最初に天中にして優婆塞と成りぬ。佛再過して三歸を說きたまへるを以て、——謂く、羊子が身もて、樹及び乳等を布施せるが故に、——天身を成ずることを得たり。

卷の第三十二

二商奉食品第三十五の下

〔一〕爾の時世尊、羊子種樹林より起ちて、安庠として漸く一樹林の下に至りたまふ。彼の樹林を差梨尼迦(Kṣirikā)(〔隋〕に出乳汁林と言ふ。)と名づく。彼の林に到り已り、結加趺坐して、七日を經たまふ。彼の解脱の樂を受けたまはんが爲めの故に。爾の時世尊、七日を經て後、正念正知にして、三昧より起ちたまふ。是の如くして世尊は、七七日を經て、三昧力を以て、相續して住したまひき。然るに彼の善生村主の女、乳糜を布施せるを、一食し已りて後、更に別食せざるも、今に至りて活命したまふ。

爾の時、彼處に北天竺(Uttarapatha)より來れる二商主あり。一を帝(當梨の反。)梨富娑(Trapuṣa)(〔隋〕に胡瓜と云ふ。)と名づけ、二を跋梨迦(Bhallika)(〔隋〕に金挺と言ふ。)と名づく。彼の二商主、多くの智慧有り。心細かに意正し。彼の二商主、中天竺より、其の土の所出に依る種種の貨物もて、五百車を滿て、大に宜利を得て、中より北天竺國に還らんと欲す。時に彼路差梨尼迦林外を經る遠からずして次第に行く。彼等商主に、別に一具調伏の牛あり、恒に先に在りて行く。若し前所に恐怖の處有るときは、彼の一具調善の牛は、橛を打つて縛せるが如く、斷るも行くを肯んぜず。

爾の時、彼處、差梨尼迦所護の林神(pūrvajñātisālohita-devabhūta taṃ kṣirikā-vaṇakhaṇḍa)あり、彼の神身を隱して、密かに是の〔二〕二調牛を捉持し、住めて前過するを聽さず。彼の二商主、各優鉢羅花の莖を持ちて、二調牛を打つも、猶ほ行くを肯んぜず。其の餘の五百車に駕せる所の牛も、皆動くを肯んぜず。其の諸車輪並に復轉ぜず。其の皮の鞦索、悉く皆自ら斷え、其の餘の轅軛軸轄轂輻箱〔三〕網欄板〔四〕鞅鞍勾心、或は折れ或は破れ、或は碎け或は裂く。是の如き變怪、種種の不祥あり。爾の時帝梨跋梨迦等、心に恐怖を生じ、皆大いに憂惱し、身の諸の毛孔、皆悉く遍ねく竪ち、各相

【一】第七七日、二商の供養を受けたまふ。Mahāvastu, III. pp. 303 他 及び方廣大莊嚴經卷十を參照。今經は後者に近し。

【二】二牛の名。Mvst. Lalit. 共に Sujāta, Kīrti とす。

【三】網。おほわ。

【四】鞅。むながひ。牛馬の喉下に絡ふ羈絆。鞍。さや。

謂ひて言はく、『我等、今何の恠禍にか値ひ、何の災殃にか遇へる』。各各車を去る兩三步の地に、頭に十指を戴き、合掌して一切諸天・一切諸神を頂禮し、心を至して住し、是の如き言を作す、『乞ひ願はくは我等、今、所有の災恠、殃咎恐怖の、早く滅して安隱吉利ならんことを』と。

爾の時、彼の林を守護する所の神、自らの色身を現じ、彼等諸商主を慰勞して言ふ、『汝等商人、恐怖を生ずる勿れ。汝等此處に一の災禍なく、一の諸殃なし。怖畏す須らず。諸商主等よ、此處に唯、如來・世尊・阿羅呵・三藐三佛陀有りて、始めて佛無上菩提を成じ、今日此の林内に在りて住したまふ。但是の如來、得道已來、今に經りて[五]滿足四十九日、未だ曾て食を得たまはず。汝等商主、今若し時を知らば、共に往詣して、彼の世尊・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀の所に向ふ可し。最も宜しく、前に在りて、麨と酪蜜の摶[六]とを彼に奉らば、汝等當に長夜の安隱を得て、安樂大利なるべし』。時に二商主、彼の林神の、是の如き言を聞き已りて、即ち神に白して言はく、『神の教ふる所の如く、我等は違せじ』と。彼の二商、即ち各、麨酪蜜を和せる摶を將て、諸商人と共に、佛所に往詣し、既に彼に到り已る時、二商主、遙かに世尊を見るに、憙ぶべき端正、世間無比にして、乃至、猶ほ虛空の衆星の、身體諸相を莊嚴するが如し。見已りて心大いに敬重し、清淨の信向もて、世尊の前に到る。到り已りて即便ち佛足を頂禮し、却いて一面に住す。時に二商主、共に佛に白して言さく、『世尊、願はくは我等の爲めに此の清淨なる麨酪蜜の摶を受けたまへ。我等を愍みたまふが故に』。

爾の時世尊、是の如く思惟したまふ、『往昔の一切の諸佛・世尊・阿羅呵・三藐三佛陀は、悉く皆、鉢器を受持したまへるや不や』。爾の時、世尊、內に知見を生じ、即ち過去一切の諸佛・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀が、一切盡く皆鉢器を受持せるを知りたまふ。是の時世尊、復是の如く念じたまふ、『我れ今當に何の器を以てか、二商主の食、麨酪蜜の摶を受くべき』。世尊受けんと欲して、此の

【五】成道後食を得るまでの間を二七日とするあり、三七日とするあり。五七日とするあり。本經は七七日とす。後に異說を出す。
【六】摶。まるめたもの。

心を發し已りたまふや時に四天王、各四方より、速疾かに共に四の金鉢器を持して、佛所に往詣し、到り已りて各各佛足を頂禮し、却いて一面に住し、而して四天王、却き住立し已りて、四の金鉢を將つて世尊に奉上し．是の如き言を作す、『唯願はくは世尊、此の鉢器を用つて、二商主の麨酪蜜の摶を受けたまへ。我等を愍みたまふが故に。我等は當に長夜の大利大樂大安を得べし』。世尊受けたまはず。出家人は此を畜ふ可らざるを以てなり。彼の四天王、四の金鉢を捨て、四の銀鉢を將つて世尊に奉上し、是の如き言を作す、『世尊、此の器もて食を受けたまふべし。略說、乃至我れ當に大利大安を得べきが爲めに』。世尊受けたまはず。是の如く、更に、四の頗梨鉢を將つてせるも、亦受けたまはず。是の如く更に四の琉璃鉢を將つてせるも、亦受けたまはず。是の如く更に四の赤珠鉢を將つてせるも、亦受けたまはず。次に復更に四の瑪瑙鉢を將つてせるも、亦受けたまはず。次に復更に、四の車渠鉢を將つて、世尊に奉上せるも、如來、亦復其れを受くることをなしたまはず。爾の時、北方の毘沙門天王、諸餘の三天王に告げて言はく、『我れ念ふに、往昔、青色諸天(Nīlakāyika-devaputra)四石器を將つて、來りて我等に奉り、我等に白して言ふ、「此の石器內に、仁等は用つて食を受けて喫す可し」と。爾の時、別に、一天子有り、毘盧遮耶(Vairocana)と名づく。我等に白して言はく、「仁等天王、愼しみて此の石器內に食を受けて喫する勿れ。仁は、但受持して、相共に供養し、之を比ふること塔の如くせよ。所以は何。當來に一如來の出世有り、其の如來を、釋迦牟尼と號したてまつる。仁等、宜しく此の四石鉢を將つて、彼の如來に奉れと」と。仁等天王、今是の時到れり。石鉢を以て持して世尊に奉るべし』。

　爾の時四鎭の四大天王、各各皆諸親眷屬を將ゐ圍遶せられて、速かに自らの宮殿中に至り、各石鉢を執るに、端正喜ぶべし。其の色、紺青にして、猶ほ雲隊の如し。盛るに天華を以てし、其の內に著け滿てて、一切の香を將つて、用つて彼の鉢に塗り、復一切の諸妙音聲を持つて、彼の鉢を供

養し、速かに佛所に詣り、到り已りて共に四鉢を將つて、佛に奉り、佛に白して言さく、『唯願はくは世尊、此の石鉢を受け、此の鉢內に、二商主の麨酪蜜の摶を受けたまへ。我等を愍みたまふが故に。各我等をして長夜に大利安樂を獲得せしめたまへ』。爾の時世尊、復是の如く念じたまふ、『此の四天王は、信淨の心を以て、我に四鉢を奉るも、我れ亦四鉢を受持す合からず。若し我れ今一人の邊より受けなば、即ち三人の心に、各恨有り、若し二人の邊より、二鉢を受けなば、二人心に恨み、若し三人の邊より、三鉢を受けなば、一人心に恨まん。我れ今總て此の四鉢を受け、神通力を出して、持つて一鉢と作すべし』。爾の時、世尊、〔七〕提頭賴吒天王の邊より、鉢を受け已りて、偈を說きて言まはく、

〔八〕『善逝世尊に好鉢盂を施せり　汝決めて當に妙法の器を成ずべし
既に我が邊に淨鉢を奉る　必ず智慧正念心を增さん』

爾の時世尊、〔九〕毘留勒叉天王の邊より、鉢を受け已りて、偈を說きて言まはく、

〔一〇〕『我れ眞如に鉢を施せる誰を觀るに　彼れ正念增長心を得
能く養育して世を安からしむるありて　速かに妙樂清淨體を成ぜん』

爾の時世尊、〔一一〕毘留博叉天王の邊より、鉢を受け已りて、偈を說きて言まはく、

『汝淨心を以て淨鉢を施し、清淨の實心もて如來に奉れり。
當來速かに清淨心を得　人天世間に意に稱ふを得ん』。

爾の時世尊〔一二〕毘沙門大天王の邊より、鉢を受け已り、偈を說きて言まはく、

〔一三〕『清淨に持戒したまふ佛世尊　能く諸根を伏したまへるに全鉢を施せり。
不缺壞の心より殷重に施す　汝は當來の世に淨田を得ん』

爾の時世尊、四鉢を受け已り、是の如く次第して、相重ねて安置し、左手に受け已り、右手に按

〔七〕提頭賴吒（Dhṛtarāṣṭra）。持國と譯す。四天王中の東方天。

〔八〕以下の四偈。方廣大莊嚴經梵本第二十四章の偈を參照せよ。今偈の善は善逝 Sugata の略の如し。

〔九〕毘留勒叉（Virūḍhaka）。增長と譯す。四天王中の南方天。

〔一〇〕第一句の眞如は tathāgata（如來）の ga を今經梵本に脫しゐたるものの如し。

〔一一〕毘留博叉（Virūpakṣa）。廣目と譯す。四天王中の西方天。

〔一二〕毘沙門（Vaiśravaṇa）。多聞と譯す。四天王中の北方天。

〔一三〕第一句、第二句は Lalit. の梵文を參照して讀めり。第二句の全鉢は無瑕鉢の意。

下し、神通力の故に、合して一鉢と成し、外に四脣有り。而して偈を說きて言はく、

『我が昔の功德の諸果滿ち　以て哀愍清淨心を發す
是の故に今四大天王　清淨牢固に我れに鉢を施す』

而して偈有り說かく、

『時に世尊の食を受けんと欲したまふに當つて　諸天四方より器を持し來り
各以て佛如來に奉施するや　受け已りて神通もて一鉢と作す』

爾の時世尊、新淨潔なる天の施せる鉢內に、彼の北天の帝梨富娑、幷に跋梨迦（前代譯して提謂、波利と稱す、此れ蓋し婆羅門の楚夏か、未だ孰れか是なるを知らず。斯經二商主の名、深失にあらず。）二商主の邊より麨酪蜜を和せる摶を受けたまふ。慈愍の故に受け、如法にして食したまひ、食し已りて即ち彼の二商主、及び諸人に告げて言はく、『汝商主等よ、來りて、我より歸依佛・歸依法・歸依僧を受け、復五戒を受けよ、當に汝等をして長夜に安樂に、大善利を獲しむべし』。其の二商主、及び、諸眷屬は、佛語を聞き已りて、即ち共に白して言さく、『佛の聖敎の如く、我等違ふまじ』。即便ち共に三自歸依を受けぬ。彼の二商主、人世間に於て、最初に三歸・五戒の優婆塞の名を得たり、所謂帝梨富娑の二商主等なり。爾の時世尊、二商主が、隨喜を生ぜるを以ての故に、偈を說きて言はく、

一四『施す所色味具足して圓なり　受け已り方便もて煩惱を離る
其の中多種の物を雜和す　是の故に名づけて麨酪漿となす』
噉し訖りて身體に潤澤の光あり　面色は花と輝き容貌顯はる
氣力充實して益を得　饑渴の惱を除きて心安きを獲たり』
是の如き漿を佛世尊に施し　諸梵行をして飽滿を得しむ
我が今受くる所已に食足る　是の二商主の奉れる麨の摶にて』

【一四】この偈、上の二梵本共缺く。

日種甘蔗族の所生　是の人を讃歎して最上となす
此の布施功德を以ての故に　當に聖智極果中に到るべし』
復諸漏の邊を盡すを得ん　是の如き業行に因るを以ての故に
後更に轉轉して恐怖無く　漸く諸有の纒を脫するを得ん』
旣に無漏に入りて淸涼を得んこと　譬へば良田の善く平正にして
種子穀苗悉く皆好く　風雨潤澤にして復時に隨ひ
禾稼成長して自ら豐饒なるが如き　是の如きは皆多種子に由る』
生じ已りて漸漸に增茂盛し　諸穀充溢して倍多きを加へ
所收の子量る可らざること　亦諸の戒行を成就するが如けん』
能く廣く衆の飮食を布施する　後得の果報は論ずべき難し
昔成ぜる利を以ての故に然らしむ』
若し人後利を求めんと欲し　其の轉饒益の果を得んを望まば
唯仁智尊にのみ供養する有りて　當に果報たる妙菩提を成じ
幷に善逝・世間解たるを得べし』
自己の心に多種の利を得　復能く他に向ひて法を作す饒ねし
彼れ自益を得衆生を利す　是の故に名づけて大智者と爲す』
自利を得一切を利せんと欲し　道を求め得て世間を導かんと欲せば
應に佛法僧の三寶に於て　發心して當に正信の行を生ずべし』
信心を以ての故に果報を得　廣大善く信行の邊に達して
卽ち戒行の思議し難きを得　卽ち最勝無上の道を得ん』

布施能く此の勝報を得て　世界の眞實如を觀見せん
又道智の滿足して充つるを得ん　聖者は能く是の如く正見す』
彼れ此の見を得るを正念と名く　諸の垢結等の[一五]塵勞を散じ
無畏の大涅槃を證得し　世間一切の苦を解脱せん』
是の如く一切法を具足せば　諸聖此の最尊を讃歎せん
生老病死等しく既に無く　悲苦別離皆滅し盡さば
[一六]十力世尊此の樂を歎じ　當に不生死處の常を得べし』

爾の時帝梨富婆の二商主等、及び諸商人、共に佛に白して言さく、『世尊、我等諸人は、今道路に在り。唯願はくは世尊、我等の爲めの故に、吉祥の願を作し、當に我等をして障礙あることなく、速かに疾く自ら所居の國に至らしむべし』。爾の時世尊、二商主及び諸商人の爲めに、吉祥の願を作し、偈を説きて言はく、

『[一七]願はくは二足をして大吉利に　一切の四足も亦大いに安く
行路到る處に吉祥多く　向ふ所の諸方悉く意の如くならしめん』
晝夜の行坐皆慶適に　日中の所在亦多宜に
一切處に於て願心に從ひ　商主商人並に康健なれ』
子を希望するが故に田を種うることを作し　子を散ずること既に竟れば收多からんを望む
一切の商人は利を求めて行き　海に入り艱難して珍寶を採る』
汝等望を承くるが故に路に行く　願はくは獲んを規る所の利速かに成れ
我れ今得道して快く喜歡す　汝が至る方に隨ひ皆願はくは吉なれ』
心の取らんと欲する所は一切利なり　汝等の願の如く、速かに心に稱へよ

【一五】塵勞とは、心をけがし勞するもの、即ち煩惱のこと

【一六】十力は佛陀のみ具有するもの。

【一七】この偈、Mvst. は頗る敷衍して五十三偈とし、Lalit 頗る簡にして四偈、而も Mudhusam-bhava 佛と授記せられしことを附言す。

行向經歷して至る所の方に　悉く願はくは諸障礙有るなからんを』

爾の時商主、同じく佛に白して言さく、『世尊、我等一物の作念せんを願ひ乞ふ。若し本郷に到れば、世尊を見たてまつらず。當に彼の物を以て塔を作り、禮拜して以て大聖世尊を憶念することを表し、我等諸人、供養尊重して今の形壽を盡すべし』。

一八 爾の時世尊、卽ち諸商に供身の髮爪を與へ、以用つて作念とし、之に告げて言まはく、『汝等商主、此の髮爪を、今持ちて汝に與へ、汝をして作念せしめん。若し此の物を見ば、我と異なる無れ。後に當に、更に別に一石有り、空より下りて汝等の處に至るべし。汝等、若し見ば、當に還塔を起て、供養尊重すべし』と。

爾の時帝梨二商主等、佛邊より髮爪を受け已りて、是の如き念をなす、『此の髮爪は、卽ち是れ身上所棄の物なり。法として勝妙に非ず、尊重す合からず』とて、供養の心無し。爾の時世尊、彼の一切商人の心を知り已り、彼等に告げて言まはく、『汝等商主、是の念を作す莫かれ。我れ憶ふに往昔、無量無邊不可計劫に、一世尊有りて世に出現したまふ。名づけて然燈如來(Dīpaṃkara)・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と曰ふ。我れ彼の時に於て、一婆羅門摩那婆と作り、四毘陀論を具足して解せり。我れ爾の時に於て、彼の世尊の一城に入りたまへるを見たり。城を蓮花(Padumâvatī)と名づく。我れ彼の時に於て、五莖の青優鉢羅花を以て、彼の佛の上に散じ、卽便ち菩提の心を發しぬ。時に、彼の世尊、卽ち我れに記を授けたまはく、「汝摩那婆、未來世、數阿僧祇劫を過ぐる時節に於て、當に佛と作るを得て、釋迦牟尼・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と號すべし」と。我れ、時に、彼の世尊の法中に於て、居家を捨離し、鬚髮を剃除して、便ち出家せり。我が出家後、一切の諸天、我が髮を取るに、一髮に卽ち十億の諸天有り、分くることを作して將つて行き、共に供養せり。彼より已來、我れ、今阿耨多羅三藐三菩提

【一八】 髮爪供養のこと。lalit. ん缺く。Mahāvastu(III. p. 310)は次下の然燈佛因緣以下を缺き、髮塔（Keśastūpa)を Keśasthāli に、爪塔(Nakhastūpa)を Vālukṣa 村に、天石(Śilā)を Śilukṣa に安置せる旨を記せり。

を成ずるを得て、佛眼を以て彼等衆生を觀るに、一衆生の、各、佛邊に在りて、丼涅槃を證せざるもの無し。我れ、彼の時に於て、既に未だ貪欲・瞋・癡を免脫せざるに、猶尙ほ我の髮爪を供養する無量の衆生、千萬億數にして、涅槃を得たり。況んや復今日諸の一切煩惱結惑、貪欲・恚・癡を盡し、皆悉く除滅せるをや。汝等、何の故に大いに我が此の淸淨無染の髮爪を尊重せざるぞ』。

爾の時商主、及び諸人等、世尊の、是の往昔の因緣の事を說きたまへるを聞き、卽ち髮爪に於て希有の心を生じ、大尊重恭敬の心を生じ、頭頂もて一心に世尊の足を禮し、圍遶すること三帀して、却歩して行きぬ。偈有り、說きて言ふ。

『衆商人有り諸方を過ぐ　樹神發覺して彼に告げて言ふ
此に自利して世尊を得たるあり　汝等頂禮して食を布施せよ』

是の如く世尊、四十九日飲食を得たまはず。既に始めて彼の商人等の邊に於て、此の食を得たまふ。世尊食後、往昔の業力にて、忽然腹を患へて消化せず。

一九 爾の時、山居の一藥神有り。彼の新出の微妙甘美なる訶梨勒果を將つて、佛所に往詣す。佛所に至り已りて、佛足を頂禮し、却いて一面に住して、白して言さく、『世尊、若し腹を患ふる有らば、此の訶梨勒、最初新出の微妙甘美なるを、我れ今將來して、世尊に奉上す。若し佛、時を知りたまはば、我が爲めに此の訶梨勒を納受し、受けて當に食噉したまふべし。我れを慈愍したまふ故に』。世尊此の訶梨勒を食したまひし後、腹内にある病、卽ち除愈するを得たり。

爾の時世尊、卽便ち彼の藥神の爲めに、慈愍を生ずるが故に、彼の訶梨勒を納取し、受け已りて卽ち彼の藥神に告げて言はく、『來れ、汝藥神、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依し、當に五戒を受くべし。汝當に長夜に大利を作すを得、多く安樂を得べし』。彼の藥神、佛の此の言を聞き已りて、卽ち佛に白して言さく、『善い哉世尊、我れ佛に違はじ』と。卽ち三歸依、丼に五戒を受く。彼

【一九】藥神供養。（上記ニ梵本に無し）。

の時に當り、一切藥神諸女天中、再過して三自歸依、并に、及び、五戒を受けたるを以て、最初に首として、優婆夷となりぬ。所謂、大藥神、彼の所居の山を圍遶せる女天藥神なり。爾の時世尊、彼の藥神女天より、其の所奉の訶梨勒果を受け、即便ち噉食したまふ。食し已りて核を取り、彼の地方に於て、即便ち彼の訶梨勒の核を種ゑたまふに、佛の威神自在力を以ての故に、即日にして即ちに生じ、即ちに根莖、枝條大樹を成し、即ちに葉花を出だし、果實成熟せり。世尊腹內の病即ち除愈して、復患苦したまはず。

梵天勸請品第三十六の上[一]

[二] 爾の時世尊、彼の差梨尼迦林より出でて、安庠として還りて菩提樹下に至りたまふ。時に彼の國內の、若しは男若しは女の困篤著床し萎黃重病して、療治す可らず、差ゆるを得難き者、其の人久しからずして命終を取らんとするや、然し氣未だ斷ぜざるに、即ち林中に送り、之を以て葬を爲せり。菩薩、苦行の時に在りて、彼の林內に一婦女有り。羅婆耶と名づく。氣猶ほ未だ斷ぜざるに、菩提樹に對し、相去る遠からずして、其の眷屬棄捨して地に委しぬ。彼の婦女、遙かに菩薩の道樹の下に在りて、苦行を修行するを見、見已りて內心に大敬信を生じ、敬信を生じ已りて、身より衣を脫して一邊に置き、佛に白して言さく、『大聖尊者、若し仁此の苦行より起ちたまはば、煩惱海の彼岸に度るを得、自らの願を滿足したまはん。彼の時、脫し恐らくは身に衣服の收取すべき無からん、我が此の糞掃衣を、隨意に用ひたまへ。我を慈愍したまはんが故に』。時に彼の婦女、時日を經歷して、其の命始めて終れり。菩薩に向ひ、正信を生じたるを以ての故に、氣の斷じたる後、彼の善根に藉りて、即ち三十三天に上生するを得、天の玉女となりて、威德甚大、光相炳然として天身を成ずるを得、神通自在なり。彼の天に生じ已りて、自ら此の念を發すらく、『我、何の業果ぞ、我れを

【一】本品二段より成る。前段には、佛、修行中に恩を得し諸人を敎化し給ふことを掲げて、七七日默坐中の異說を悉く此に收め、後段は佛の說法躊躇と梵天の說法勸請を掲ぐ。前段は概ね他傳に見えず。後段は諸佛傳に通記せらる。

【二】修行中糞掃衣を寄せたる女の死して生天せるを化し給ふ。次の帝釋天の石を献ぜる物語と合せて Mahāvastu III. pp. 311–313を參照。

して是の如く此の身を成就せしめたる』。彼、思念して、自ら[三]宿命を識りぬ『我、往昔人間に在りし時、婦女身と作り、糞掃衣を以て、世尊に布施し、隨意に用ひしめまつりぬ。彼の善業に藉りて、我、今是の如き果報を成就したり』。彼、復更に念ず『世尊今既に未だ我が糞掃の衣を受けて用ひたまはざるに、我れ猶尙ほ是の如き果報神通の力を得たり。況んや復世尊の我が衣を納めて用ひたまはんには、豈に此の果報に勝るを得ざる可けんや』。

爾の時彼の天、玉女の身を以て、勝光明を放ち、夜半の時に於て、佛所に往詣するや、其の光、遍ねく彼の林樹の間を照し、佛所に到り已りて、佛足を頂禮し、却いて一面に住して、彼の玉女天、佛に白して言さく、『善い哉、世尊、我が所施の糞掃の衣を取り、隨意に用ひたまへ。我れを慈愍したまはんが故に』。世尊、彼の糞掃衣を受けたまふ。玉女天の爲めに慈愍を生じたまへるが故に。如來、受け已りて、彼の天に告げて言まはく、『來れ、玉女天、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依し、復五戒を受けよ。汝、當に、長夜に大利益を得、大安樂を得べし』。彼の玉女天、佛の語を聞き已りて、即ち白して言さく、『世尊の敎の如く、我、敢て違せじ』と。即ち[四]三歸、幷に、及び、五戒を受けたり。時に玉女天、世尊の、其の糞掃衣を受けたまへるを見、此の因緣を以て、心大いに歡喜し、踊躍すること無量、其の體に遍滿して、自ら勝ふる能はず。彼の玉女天、佛足を頂禮し、圍ること三匝し已りて、即ち彼處より身を沒して現れず。

[五]爾の時世尊、是の如き心を發したまふ『我、今此の糞掃の衣を將つて、何處にて洗はんか』。是の心を發し已るや、帝釋天王、如來の爲めの故に、林を去る遠からずして、一河を化出す。其の水清淨にして穢濁有る無し。帝釋天王、河岸の邊に於て、更に、復、三片の大石を化作す。其の第一石は世尊の坐に擬し、其の第二石は、糞掃衣を洗ひたまふにし、帝釋天王、手もて自ら水を澆ぎ、第三石は、衣を洗ひ訖已りて、曝らして乾か使むるに擬す。時に曬衣の石は、佛の威神を以て、虛空

【三】宿命。過去世の生活。

【四】三歸。三歸依の略、即ち佛法僧の三寶に歸依すること。五戒とは、殺生・偸盜・邪婬・妄語・飮酒せざること。

【五】爾の時とは、修行中死屍より糞掃衣を得られたる時。今成道の時にあらず。

より飛びて往きて北天に到り、彼の帝梨富娑商主等、塔を作る。供養を爲さんが故に。

〔六〕摩訶僧祇師は此の説を作し『是の如く次第して七七日』と誦す。或は復師有りて、説きて言はく、『此の事二七日を經』と。或は復師有り説きて言ふ、『此の事三七日を經』と。或は復師有りて、説きて言ふ『此の事四七日を經たり。初一七日には諦心にして菩提樹下に在り。第二七日、漸次に移りて不瞬眼塔に在り。爾の時世尊、彼の不瞬眼塔より起ち、起ち已りて羅闍那(rājāyatana)樹下に至り、樹下に到り已りて、七日を經、加趺して坐し、解脱の樂を受けて安禪して起ちたまはず。爾の時世尊、七日を過ぎ已り、正念正知にして三昧より起ちたまふ。是の時帝梨富娑、并に跋梨迦の二商主等、迦浮吒城(Kabhūta? *Most.* Ukkala) より發して漸く佛所に至る。佛所に至り已り、乃至略説、圍遶して三たび匝り、佛より行けり。爾の時世尊、羅闍那樹下より起ち已り、安庠として漸く目眞隣陀(Mucilinda) 樹下に至りて坐し、到り已り、乃至、當に偈を説きて言ふべし。爾の時世尊、彼の七日を過ぎ、晨朝の時に於て、衣を著け鉢を持し、難提迦(Nandika)村主の家に詣り、彼の家に到り已り、却いて一邊に在り嘿然として立住したまへり。食を求めたまはんが爲めの故なり。其の村主の女、既に世尊の、門の一邊に在り、嘿然立住して、食を乞ひ求めんと欲したまふを見、見已りて卽ち世尊の手内より鉢を擎取り、將つて家裏に至り、好種種百味の飲食を以て、其の中に滿し置き、出でて世尊に奉りて此の言を作す、「唯願はくは世尊、我が此の食を受けたまへ。我を慈愍したまはんが故に」。世尊、善生(Sujātā)なる村主の女人の食を受納し已りて、卽ち女に告げて言まはく、「來れ、汝善生、三歸依、并に、及び五戒を受けよ。汝當に長夜に大利益を得、大安樂を得べし」。其の善生の女、佛の語を聞き已りて、白して言さく、「世尊、世尊の敎の如く、我れ敢て違はじ」と。卽ち三歸并及に五戒を受けたり。是の時善生、最初に人間として、再び三歸を受け、及び

【六】摩訶僧祇師以下、牧牛婦人の供養に至るまで、恐くは註解にして、本文にあらず。

五戒を受けて、優婆夷と作れり。所謂、善生なる村主の女なり。是の時世尊、善生の女より食を受け、食し已りて、彼の菩提樹下に在りて坐し、解脫の樂を受け、復、七日を經たまふ。

爾の時世尊、七日を過ぎ已り、正念正知にして三昧より起ち、衣を著し鉢を持して、安庠として、漸く斯那耶那(Senayāna)、婆羅門の家に至り、到り已りて其の門の一邊に住在し、嘿然として食を求めたまふ。其の斯那耶那既に世尊の門外に在り、立ちて嘿然として食を求めたまふを見、見已りて卽ち世尊より鉢を乞ひ、執り已りて將つて自家に入り、好種種百味の飲食、種種羹臛を以て、滿てて鉢中に和し、持將つて佛に奉り、復佛に白して言さく『唯願はくは世尊、我が此の食を受けたまへ。我を慈愍したまはんが故に』。世尊、斯那耶那婆羅門の邊より食を受得し已りて、卽ち彼に告げて言まはく、『來れ、婆羅門、乃至、應に三歸五戒を受くべし』。彼の婆羅門、佛の言を聞き已り、佛の所敎の如くして、三歸乃至五戒を受けたり。是の時世尊、斯那耶那婆羅門の所より、飯食を得已り、受持して、漸漸安庠として、往きて曼他那塔(Manḍana-stūpa)(〔隋〕に攪酪木塔と言ふ。)に至り、食し訖りて、如法に衣を斂め、還りて菩提樹下に向ひ、加趺して坐し、七日を經て、乃至、解脫の樂を受けたまふ。

爾の時世尊、七日を過ぎ已りて、正念正知にして三昧より起ち、晨朝時に於て、衣を著け鉢を持して、漸漸にして行き、斯那耶那の親里眷族の四姊妹の邊に詣りたまふ。四姊妹とは、一を婆羅(Balā)(〔隋〕に力と言ふ。)と名づけ、二を摩低婆羅(Matibalā)(〔隋〕に極力と言ふ。)と名づけ、三を嵩陀(Sandarī)(〔隋〕に端正女と云ふ。)と名づけ、四を鉗(蒹巖の反。)婆迦梨(Kumbakārī)(〔隋〕に瓦師と言ふ。)と名づく。彼等の家に到り、一面に在りて立ち、嘿然と住したまふ。食を乞はんが爲めの故に。其四姊妹、既に世尊の嘿然立住したまへるを見、見已りて卽ち世尊より、鉢を乞ひて家に入り、百味の飲食を盛り取り、色妙具足せる種種の羹臛を鉢中に滿盛し、持以て、佛に奉りて、復是の言を作す、『唯願

【七】本經は前に波羅と難陀の二女を擧げたり。よつて今は異說たること明かなりとす。

はくは世尊、我が此の食を受けよ、我等を慈愍したまひて』。時に世尊、彼の四姉妹の百種飲食を受けたまふ。慈愍の爲めの故に。受け已りて、卽ち彼の姉妹に告げて言まはく、『來れ、汝姉妹、我より三歸五戒を受持せよ。汝等當に長夜に利益と安隱の樂とを得べきが故に』。彼の四姉妹、佛語を聞き已りて、卽ち佛に白して言さく、『世尊の教の如く、我等違せざらん』。卽便ち共に三歸五戒を受けたり。是の時世尊、彼の姉妹より布施を受け已り、安庠として漸く曼陀那塔に到り、到り已りて隨意如法に飽食し、還りて菩提樹下に向ひて坐し、解脫の樂を受けて、一七日を經たまへり。

爾の時世尊、七日已に過ぎて、正念正知にして三昧より起ち、晨朝時に於て、著衣持鉢し、安庠として漸く羊子所種の尼拘陀樹に至らんとし、未だ樹邊に至りたまはず。菩提樹より、其の間半路にして、一箇の放牛婦人有り、酪を攪して酥を出すを見たまふ。爾の時世尊、漸く彼の放牛婦の所に至り、到り已りて、彼の婦人を去る遠からずして、嘿然として立ちたまふ。食を求めたまはんが爲めの故に。時に彼の婦人、世尊の、其を去る遠からずして、嘿然として立住したまふを見、見已りて、卽ち世尊より鉢を乞ひ、中に滿して酪を盛り、以て世尊に奉り、佛に白して言さく、『大聖尊者、我が此の酪を受けたまへ。慈愍したまはんが爲めの故に』。時に世尊、彼の婦の邊より、酪を受得し已りて、彼の婦に告げて言まはく、『來れ、姉よ、汝、三歸五戒を受けよ。必ず當に長夜に大いに利益を得、安樂を獲べきが故に』。是の時婦人、佛の教に隨ひ、三歸五戒を受けたり。是の時世尊、意に隨ひて飽食し、鉢を洗ひ訖已り、漸く羊子の前に種蒔せる所の尼枸陀樹に至り、其の下に坐し、解脫の樂を受けて、一七日を經たまへり。

[八]爾の時世尊、彼の七日を過ぎて、正念正見にして、三昧より起ちたまふ。是の時、忽ち諂曲にして過を求むる一婆羅門あり。佛所に來詣す。到り已りて、佛と共に慰喩問訊し、種種の語を

【八】この說は巴利律に見ゆ。

說き、却いて一面に住し、佛に白して言さく、『瞿曇沙門、云何が名づけて婆羅門と爲すか。婆羅門は何の法用をか作し、凡そ幾の法かある』と。如來知り已りて、即ち是の如き[九]師子吼音を出し、偈を說きて言はく、

『一切の諸罪業を除滅す　是の故に名づけて婆羅門と爲す
淸淨にして[一〇]諂曲の心有る無く　內外正定して常に安住し
如法に諸梵行を修行し　口言心念亦復然り
能く一切處に於て貪無し　是を婆羅門種姓と名づく』

是の如き間の中、凡そ八七日なり。前三七日は全く食噉せず、自餘の五七に、方に始めて食を求めたまへり』と。[一一]

爾の時世尊、一三昧に坐したまふ。其の三昧を、遍觀世間と名づく。而して世尊は、無上佛眼を以て、世間を觀じたまふ時、世間に、或は衆生の[一二]地獄より出でて還び地獄に墮つるあり、或は衆生の、地獄より出でて畜生身を生ずるあり、或は衆生の、地獄より出でて餓鬼身を受くるあり、或は衆生の、地獄より出でて人身を受くるあり、或は衆生の、地獄より出でて天身を受くるあり。

或は衆生の、畜生より脫して地獄身を受くる有り、或は衆生の、畜生より脫して還び畜生に生るる有り、或は衆生の、畜生より脫して餓鬼身を受くる有り、或は衆生の、畜生より脫して人間に生るる有り、或は衆生の、畜生より脫して天上に生るる有り。

或は衆生の、餓鬼より脫して地獄に墮する有り、或は衆生の、餓鬼より脫して還び餓鬼を受くる有り、或は衆生の、餓鬼より脫して畜生に墮する有り、或は衆生の、餓鬼より脫して人間に生るる有り、或は衆生の、餓鬼より脫して天上に生るる有り。

或は衆生の、人間より死して地獄に墮するあり、或は衆生の、人間より死して畜生中に墮する

【九】師子吼は、佛陀を師子に喩ふるより、佛陀說法の音聲をいふ。

【一〇】諂曲。表面のみ誠なるがごとくにして。中心に邪曲あること、

【一一】以上を以て諸部傳の異說となすべく、以下今經所依部派の正說に入るものの如し。次下諸世間の實相を觀じたまふ。

【一二】地獄・餓鬼・畜生を三惡道といふ。これに人間・天上を加へて五道といひ、猶、修羅を加へて、六道といふ。迷界の衆生、この中に網羅せらる。

あり、或は衆生の、人間より死して餓鬼に墮するあり、或は衆生の、人間より死して還び人身を受くるあり、或は衆生の、人間より死して天上に生るるあり。

或は衆生の、天上より墮して地獄中に生るるあり、或は衆生の、天上より墮して畜生中に落つる有り、或は衆生の、天上より墮して餓鬼身を受くるあり、或は衆生の、天上より下りて人間に生る る有り、或は衆生の、天上より死して還び天中に生るる有るを見たまふ。

爾の時世尊、諸衆生を見たまふに、諸見に著せり。或は衆生有り、欲火を以て其の體を燒然し、或は瞋恚の火、或は愚癡の火もて、其の體を熱燒す。欲事に著すれば、欲事の惱の故に、即ち歡喜を生ず。瞋・恚・癡等、一切も亦然り。而して世尊、諸衆生等の、三毒火に焚燒せらるるを見たまひて、即ち是の如き師子吼の言を說きたまふらく『此の世間中の諸衆生の輩、有の爲めに纒はれ、精勤に業を造りて、是の形を得。身を大患と爲す。處處に念著して、所生の邪意、即ち常に增長し、增長する所の如く、即ち此の有を成ず。有の著を以ての故なり。諸世間に於て、諸衆生有り、有の著を以ての故に、還りて有を思念し、即ち有を成ず。而して、彼等一切衆生所有の所は、即ち彼の有處にして、有苦を受く。若し能く彼の諸有の苦を滅し、此の法に於て入り、梵行を學行するを、是を梵行と名づく。若し沙門及び婆羅門あり、以て有に著するを患へて、諸有を出づるを知らば、彼等を皆、無著諸有を名づく。是の如く知り已りて、能く諸有を出づ。我是の如く說く。若し復沙門及び婆羅門、有を以て說きて、諸有を脫せんと欲するも、彼等は、一切、有を脫すと名づけず。我是の如く說く。是の如き人は、邪道に墮し、大苦を受くと名づく。我是の如く說く。世間一切の邪道を捨て、彼の一切の諸苦、業果を盡さんか、既に諸苦を盡さば即ち無有と名づく。此れ是の世間、衆生の我見、各各皆無明に欺かるるを以て、諸有に樂著す。諸有に著し已りて、即ち諸苦を解脫するを得る能はず。若し復人有り、一切處に於て、諸有を觀察し、一切處に於て、未だ有を遠離せず。

【三】有は存在の意。客觀世界をいふ。

而して一切處は、並に有に在り、既に有に住在する、是を無常と名づく。是を名づけて苦と爲す。
是を無實と名づく。無實の法に於て、是の如く是の如しと、實の如く、正智もて、應に觀知すべし。
若し能く是の如く正智もて觀ずれば、即ち諸有を盡し、及び愛盡き已りて、無有處に於て、亦心念せざるを、是を則ち名づけて滅を得となす。比丘、既に滅を得已れば、即ち更に後世の有を生ぜず、後身を受けず。即ち能く一切衆魔を降伏し、即ち一切鬪陣に勝つを得、即ち一切處に、大利益を得、諸有の處に於て、念ぜず思はざるなり』。

卷の第三十三

梵天勸請品第三十六の下

[一]爾の時世尊、是の如き念を作したまふ、『我が所證の法や、此の法甚深にして、見難く知り難し。微塵等の如きだも、覺察す可らず。思量なき處、不思議の道なり。我に師有る無く、巧智の匠の、能く我をして此の法を證せしむ可き無かりき。但衆生輩は　[二]阿羅耶（ālaya）（〔隋〕に所著處と言ふ。）に著し、阿羅耶を樂しみ、阿羅耶に住して、著處を憙樂す。心、多貪なるが故なり。此の處は見がたし。其の處とは、所謂十二因緣にして、十二因緣たるや、處有りて相生ず。此の處たるや一切衆生の覩見する能はざる所、唯佛のみ能く知る。又一切處の道を疑ひて捨て難きと、一切の邪道とを滅盡して餘無く、愛の染する處盡きて皆慾を離れ、寂滅涅槃す。我、今、是の如き等の法を將つて、他に向ひて說くと雖も、彼の諸衆生は、未だ此の法を證せず、徒らに我を勞して、虛しく言說を費さしめんのみ』と。爾の時世尊、是の如く念じ已りて、此事を昔より未だ曾て聞かず、未だ他より得ず、未だ人の說くあらざること〻爲したまひ、而も心に自ら辨じて、即ち偈を說きて言はく、

[三]『我今辛苦して此の法を證す　輙爾即ち應に宣ぶべからず』
諸の欲・癡・瞋恚の法に纒はる　一切の衆生には此難有り』
[四]唯應に有の流に逆らふ細心の智のみ　微塵の如きをも覩見す可き所なるべし
樂欲貪著するものには見知し難し　彼の無明の闇に覆はるるが爲めの故に』

是の如くなるを以ての故に、如來は此の甚深の事を見已り、其の心に阿蘭若處を欲樂して、他に向ひて此の法を說くことを欲したまはず。偈有り說きて言ふ、

『見よ諸衆生は煩惱重く　邪道邪見にして過患多きを

【一】佛。纒欲の衆生に說法するを躊躇す。若しここに說法せざれば、緣覺（無說法の佛）に墮す。佛としては、成道後第一の危期とす。本品、Mahāvastu, III. p. 313—參照。

【二】阿羅耶。現在の境界をいふ。自己の身を置きつゝある住處・境遇・地位等なり。この下の句、Mvst. に存す。

【三】（原文）我今辛苦證此法、不可輙爾即應宣、諸欲癡瞋恚法纒、一切衆生有此難。

【四】（原文）唯應逆流細心智、所可覩見如微塵、樂欲貪著難見知、爲彼無明闇覆故。

解脱の法は甚深にして難し　　これを知るが故に阿蘭若に住せんと欲す』

五 爾の時娑婆世界の主、大梵天王、梵宮に在りて、遙かに、世尊の是の如き心を發したまへるを見、知り已りて卽ち是の如き思惟を作しぬ。『此の世界中の諸衆生等は、壞多く失多し。今日、如來・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀の、既に是の如き無上の法寶を證して、成辦を獲たまひ已れるに、世間未だ知らざるを以て、心に忽然として阿蘭若を願樂し、說法を欲したまはず』と。時に梵天王、譬へば壯士の臂を屈伸する如き頃に、大梵宮より身を隱して來下し、世尊の前に至りて、佛足を頂禮し、却いて一面に住し、合掌して佛に向ひ、佛に白して言さく『善い哉世尊、今此の世界の一切衆生は、歸依有ることとなく、善、壞して失ひ盡す。今、世尊は既に是の如き無上の法寶眞證を得たまへるに、見已りて心に忽ち阿蘭若に入らんと欲し、說法を樂みたまず。我今無上世尊に勸請せん。諸衆生の爲めに寂靜に住したまふこと莫かれ。唯願はくは世尊、慈悲もて說法したまへ。願はくは六修伽陀(sugata)、憐愍もて說法したまへ。現今多く諸衆生輩あり、塵垢少くして諸根成熟し、結使微薄にして、利根化し易きも、法を聞かざるが故に、自然に損減す。若し當に如來、爲めに法要を說き、世尊の法相を證知するを得しめたまふべし』。爾の時娑婆世界の主、大梵天王、是の語を說き已りて、復更に偈を以て、重ねて佛に請ひて言さく、

『世尊今摩伽國に在りて　衆生の雜種の因を說き
先づ甘露妙法の門を開きて　然る後次第に淸淨說したまへ』
如し人須彌の頂に上らずんば　豈に能く世界の邊を見るを得んや
大聖の菩提の道は已に成じぬ　速かに法堂に上りて智眼もて照らし
群盲を引導して苦を離れしめたまへ』
一切の諸衆生を悲愍して　世尊疾く此の樹間を捨て　遍ねく世に遊行し廣く濟度したまへ』

【五】梵天勸請。佛說法を請ふによつて、梵天爲に說法を請ふといふ。佛敎文學上、最も注意すべきもの。蓋し佛の說法決意の重大性を表象的に描出せるもの。

【六】修伽陀。善逝と譯す。佛陀の一稱號。

自ら己利を得たまへる天人の勝者よ　諸苦盡き已りて清涼を得たまへり
佛不增減なる諸善根もて　清淨法たる彼岸に到りたまへり』
如來は世間に比あるなし　況んや勝上を欲するもの亦復無けん
三界に獨步して世尊と稱したまふ　[七]阿修羅(asura)はこれ　[八]山王の匹にあらず』
苦の世間に於て悲愍を作し　仁今衆生を捨てたまふ可からず
諸德力の具する無畏人よ　唯尊のみ能く諸の　[九]含識を度したまふ』
衆生は久しきよりこのかた毒箭を被る　所謂天人等の世間は
世尊に値遇して應に拔除すべし　願はくは彼の爲めに歸依處と作りたまへ』
諸天及び人は生生の世に　發心して密法門を聽かんと欲す
彼の願を世尊今已に成ぜり　速かに說きて彼等をして退かしめたまふ莫かれ』
世尊我が如きは今見ゆるを得たり　衆生若し當に是の事を知らば
――或は他聞し已り及び自聞して――卽ち來りて世尊の足を頂禮すべく』
假令父母男女等死し已りて骨散じ髮縱橫なるも
而も彼の命終の時を憂へず　亦廻つて彼の人輩を哭せざらん』
彼等は未だ知らず尊清淨の　兜率天より來りて下生したまふを
是の故に我れ今世尊に請ひまつる　多時路を失ひしものを今化して取りたまへ』
正義を聞かざる無量劫なり　羸瘦人の脂腴を得たるが如く
乾ける土地の水澆を得たる如し　唯願はくは世尊法雨を降したまへ』
諸佛に慳惜の法有ることなく　三世の諸聖[一〇]檀を行ずるを樂しむ
過去の諸佛涅槃に入りたまひて　是の正眞の法を說かざる無し』

【七】阿修羅。八部衆の一、阿修羅、常に帝釋と戰鬪を交へつつありと信ぜらる。
【八】山王は須彌山頂の主、帝釋天をいふ。
【九】含識。心識を有するもの。有情のこと。
【一〇】檀は檀那(Dāna)の略、布施と譯す。施に財施・法施の二種あり。

尊は今亦是れ〔一〕祁羅種（Aṅgirasa-vaṃśa）なり　能く無量の諸衆生を度したまはんこと
彼の諸佛と殊有ること無し　衆に善法を敎へたまへ今や時至りぬ
諸の衆生の清淨眼を開き　普ねく正道の途を見るを得しめたまへ』
邪見の荊棘林に入りて　應に純直難險の徑を示したまふべし　此路に乘じ已らば甘露を得ん
世尊よ衆皆は坑に墮せんと欲するも　餘人は悉く濟拔すること能はず』
大險を引導するもの世尊是なり　又能く方便もて發意を敎へたまふ
今時已に至る、願はくは辭したまふ莫かれ』
聖と共たることは多劫にも期すべからず　猶ほ優曇華の値ひ難きが如し
諸佛の出世や旣に遇ひ難きを　今日忽ち大導師に遭ふ』
仁は精進に於て力無邊に　身體莊嚴にして衆相具はる
未だ說かずんば發心者有る無し　金口終に異言を出したまはじ』
三世に是の事を成就し來りて　所以に今日自ら度し訖りたまふ
他を度するには須らく精進力を起したまふべし　眞實の言誓宜しく時に及ぶべし』
世尊よ暗を滅し諸明を然したまへ　佛の大寶幢を願はくは速かに竪てよ
時至れり妙言もて正法を說き　師子吼したまふこと天鼓の鳴るが如かれ』
我れは請ふ如來が法船を造き　來世に無量の衆を導くを得しめたまはんを
世尊已に煩惱海を渡りたまへり　衆生の沒溺せるを須らく之を出したまふべし
譬へば人の伏藏の財を得て　持以て他をも富まして獨にて用ひざる如く
世尊は法の無盡藏を得たまへば　願はくは衆生の爲めに分別して宣べたまはんことを』

〔二〕爾の時世尊、梵天王の勸請の偈を聞き已り、衆生の爲めの故に、慈悲心を起し、佛眼を以て、一

〔一〕祁羅種。鴦祁羅婆の略、印度光明神の名にて、佛の異名として用ひらる。

〔二〕佛、衆生性を再檢して說法決意をなしたまふ。この衆生は、後の本具佛性說に甚大なる關係あり。

切諸世を觀じ給ふ。佛眼もて觀じ已りて、諸衆生を見たまふに、世間に生れて、世間に增長するに、或は利根なる有り、或は鈍根なる有り。諸衆生等の、或は以て成就して、道を證し易きあり。或は衆生の、未來世の一切過患を見て、心に恐怖を生じ、放逸ならざる有り。或は當來世に、亦得道すべきあり。譬へば、青優鉢池・波頭摩池・拘物頭池・分陀利池ありて、其の內の有らゆる一切諸花の如し。或は優鉢羅、及び波頭摩、并に拘物頭・分陀利等、已に地より生じて、未だ水を出でず、其の間に在りて沒して未だ現はれず、應に養育し、四大和合して、然る後に水を出づべし。或は優鉢・分陀利等、池より湧出して、水と齊平なり。或に優鉢羅・分陀利等、水を出でて開敷し、而も水に著せず。是の如く、是の如し。世尊、佛眼もて諸世間の一切衆生を觀じたまふに、世間に生じて、世間に增長し、或は利根なる有り、或は鈍根なる有り、或は化し易き有り、或は得道し易きあり、是の如く知り已りて、梵天王に向ひ、偈を說きて言はく、

『大梵天王よ善く諦かに聽け　我今甘露の門を開かんと欲す
〔一三〕若し聽くあらんもの歡喜し來りて　至心に我が說法味を聽かん』

爾の時梵天、是の語を聞き已りて、是の思惟を作す『如來世尊は、當に此の法を說きたまふべし。須伽陀は、當に此の法を說かんと欲したまふべし。世尊、憐愍して我が爲めに請を受けたまへり。說法せんと欲したまへるが故に』と。是の因緣を以て、心に歡喜を生じ、踴躍充遍して自ら勝ふる能はず。佛足を頂禮し、圍遶する三帀し、佛邊に在りて、身を沒して現ぜざりき。

爾の時世尊、是の如き念を作したまふ『我れ今先初に說法する處を、誰か能く違せずして、一に我が意の如く、我が法體を知り、而して證知し已りて、我を惱さざる』と。

爾の時世尊、是の如き念を作したまふ、〔一四〕『其の優陀羅迦羅摩子は、心巧智に應じて、辦了聰明、長夜に成就し、其の心復少しく塵垢有りと雖も、諸の使結薄く、根は熟し智は利なり。我今應當に優

【一三】若の字。大正藏苦に作る。

【一四】說法の對象を選びたまふ。優陀羅迦羅摩子は、釋尊が成道以前に師事せる二仙人の一。

陀羅迦羅摩子に於て、其の前に對して、先づ說法を爲すべし。我が說く所の法、彼れ能く速かに疾く我が法を證知せん』。世尊、是の如く思惟し、念じ已りたまふや、時に、一天有り、空中に在りて身を隱して現ぜず、佛の所に來向し、聲を出して言さく『迦羅摩子は、其の命終來、已に七日を經たり』と。世尊、更に復內心智もて、優陀摩子を見たまふに、實に命終來已に七日を經たり。世尊、復念じたまふらく『優陀摩子、命終して已後、當に何處に生じたるべき』。世尊、心に復智見を生じたまふに、優陀摩子は、命終して〔一五〕非非想天に生じたり。爾の時世尊、復是の如く念じたまふ。『非非想天の壽命幾許か、邊際有りや不や』と。是の時世尊、心に智見を生じたまふ、『非非想天の壽命、八萬四千大劫なり』と。爾の時世尊、復是の如く念じたまふ、『優陀摩子、非非想に生れ、彼の壽終りて後、復何處に生れん』。爾の時世尊、心に智見を生じて知ろしめす、『優陀羅迦羅摩子、今非想に在るも、彼處に命終して後、還び墮落して、此處に生れ、飛狸身を受けん。彼れ既に飛狸身を得已るや、若し衆生の、水中に生じ、或は陸地に居し、或は空を飛行するものあらんに、常に當に彼の生命を殺害すべし。或は復彼の諸衆生等と共に欲事を行じ、報盡きて後、饑餓して死せん』。爾の時世尊、復心に思惟したまはく『其の優陀迦羅摩子、飛狸身を捨て已りて、復何の生をか受けん』。爾の時世尊、心に智見を生じ、優陀羅迦羅摩子の、飛狸身より命終し已りて後、地獄に生ぜんを知りたまへり。爾の時世尊、心に復是の如く思惟して、念言したまふらく、『嗚呼嗚呼、汝優陀羅迦羅摩子は、卒然人身を受けて大利を失し、人間の妙好の善報を得ず。優陀羅迦羅摩子は、我が是の如きの善法を聞くを得ず。若し優陀羅迦羅摩子にして、是の如き諸善法を聞くを得たらんには、卽ち應に速かに此の法を證するを得たるべし』と。

爾の時世尊、復是の如く念じたまふ、『我れ今誰の爲めにか、初めに此の法を說かん。我の說法せん時、我が法に違せず、我を煩はし惱まさずして、能く速かに疾く我が法を證するものぞ』と。爾

【一五】非非想天は、無色界四天の最高位にあり。

の時世尊、内心に是の如く思惟して、其一六阿羅邏迦羅摩種は、極巧の智慧あり聰明細心にして、長夜に成就し、少しく垢有りと雖も、結薄利根なるを知りたまひ、『我、今應當に彼の間阿羅邏迦羅摩種の邊に詣り、初めて此の法を說くべし。彼若し我が所說の法を聞くを得は、其れ必ず速かに疾く應當に證知すべし』と。世尊、是の如く思惟し念じ已りたまふや、時に一天有り、身を隱して現ぜず、世尊の所に詣りて、聲を出だして言さく、『彼の阿羅邏迦羅摩種姓は、昨日命終したり』と。爾の時世尊、心に智見を生じて、阿羅邏迦羅摩種姓の、昨日命終せるを知りたまひ、爾の時世尊、復是の如く念じたまふ『阿羅邏種は、此より命終して、何處の生を受けたるか』と。爾の時世尊、内心に智を生じて、阿羅邏の、此處に命終して、一七不用處に生れたるを知りたまふ。爾の時世尊、復是の如く念じたまふ『不用處天の壽命の多少限量邊際ありや以不や』。

爾の時世尊、内心の智見もて、不用處の壽命に邊有り、六萬三千大劫の壽命なるを知りたまふ。爾の時世尊、復是の如く念じたまふ『其の阿羅邏は、不用處天に命終して已後、復何處にか生るる』と。爾の時世尊、内心に智見もて、阿羅邏の、不用處より命終して已後、還び此處に墮し、邊地の法を識らざる處に在りて、當に王と作るを得べきを知りたまへり。爾の時世尊、復是の如く念じたまふ、『其の阿羅邏は、法を識らざる邊地の王より、命終せる已後、復何の生を受けん』と。爾の時世尊、内心の智見もて、阿羅邏の、邊地の王より、其の命終せる後、大地獄に墮するを知りたまふ。爾の時世尊、是の如く思惟したまふ『嗚呼嗚呼、汝阿羅邏迦羅摩種姓よ、空しく人身を受けて、大いに失ふ所有り。善利を得ずして、我が是の如き妙法を聞かず。若し彼、我が是の法を聞くを得たらんには、卽ち應に速かに疾く此の法を證するを得たるべきに』と。

轉妙法輪品第三十七の上

【一六】阿羅邏迦羅摩。釋尊が成道以前に師事せる二仙人の一。

【一七】不用處は、無色界四天の第三位、非非想天の下にあり。

[1]爾の時世尊、是の思惟を作したまふ。『諸世間中、何の衆生有りてか、身口清淨にして、少塵少垢に、諸結使薄くして、根熟利智に、我が今初説法の時に、我を惱まさず、而も能く速かに疾く我法を證知して、我の法輪を轉ずるを妨廢せざる』と。爾の時世尊、是の如く思惟したまふ、『五仙人有り。彼の五仙は、昔日、我が與に大いに利益する有り。我が苦行に在るや、我に承事せり。彼等五仙、並に皆清淨にして、少垢少塵、薄使利智なり。彼等は能く我の最初に法輪を轉じて、說く所の妙法を受くるに堪へ、應に我に違はざるべし。我、今應に彼の五仙の邊に詣り、初めて說法すべし』と。爾の時世尊、復是の如く念じたまふ、『彼等五仙、今何處にか在る』と。是の時世尊、淨天眼の、人眼に過ぐるを以て、彼の五仙を觀たまふに、今日彼の波羅㮈城の鹿野苑内（Vārāṇasiyaṃ Mṛgadāve）に在りて、經歷遊行す。

爾の時世尊、菩提樹より多少の時に隨ひて、住し已りて、漸く波羅㮈國に向ひたまふ。偈有りて說きて言ふ、

『世尊、羅摩子に說かんと欲し　發心して其の所生を觀察し
今命終して天に在るを知り　心に五仙を念じて彼に至らんと欲したまふ』

爾の時、魔王波旬、佛の此の菩提樹を捨てて、起たんと欲したまへるを見、心に苦惱を生じ、速かに佛所に詣り、佛所に至り已りて、佛に白して言さく、『善い哉、世尊、唯願はくは、此處を離れたまふ莫れ、安坐して移りたまふ莫かれ。世尊、此に在りて意の所行に隨ひたまへ』と。爾の時、世尊、波旬に告げて言まはく、『魔王波旬、汝は慚愧無く、羞恥を知らず、汝は、先時、我を惱亂せんと欲したり。我、爾の時、具に貪欲・瞋恚・癡等ありて、一切未だ盡きざりしも、汝來りて我を惱亂する能はざりき。況んや、復、今日、我、已に無上至眞平等覺道を證得し、一切の邪徑、悉く皆捨離して、正解脫を得たるをや』。

【一】佛、五比丘を度せんとて、鹿野苑に向ひたまふ。Mahāvastu, III. p. 323—參照。

二爾の時世尊、道樹の下より起ち已り、安庠として、漸漸に行きて、三旃陀羅村(Candharapura)(〔隋〕に嚴熾と言ふ。)に到り、旃陀羅より、安庠として、行きて純四(玉詢の反。)陀私演(他梨の反。)羅聚落(Cundasthilā grama)(〔隋〕に無角堪と言ふ。)中に至り、其の路上に於て、一乞索婆羅門有るを見たまふ。五優波伽摩(Upagama)(〔隋〕に少事と言ふ。)と名づく。兩逆へて相逢ふ。彼、佛を見已りて、卽ち佛に白して言さく、『仁者瞿曇、身體皮膚、快好清淨にして、垢膩有ることなく、仁者の面貌、圓梏莊嚴にして諸根寂定たり。仁者瞿曇、師を是れ誰とか爲す。誰に從つて出家し、意に喜びて樂しみたまふ所ぞ、是誰の法とかする』。爾の時世尊、隨行隨說し、此の偈を以て、彼の乞索婆羅門に答へて言ふ、

『我已に諸世間を降伏し　種種の智を成就具足して　諸法の中に染著せず
永く一切の愛の網羅を脫して　能く他の爲めに諸の神通を說く
是故に名づけて一切智と爲す』
我今世間の供を受くるに堪へ　自在にして無上尊を成じ得たり
一切の天人世界の中　唯我能く諸の魔衆を降せり』
我に師有る無く内に自覺す　世間更に與に等しく雙ぶなく　天人中に唯我のみ獨り尊し』
身心清淨にして解脫を得　一切の通處皆通達し　證す可き所の處已に證知し
安んず可きの處已に安きを得たり　故に我を稱して世の尊上と爲す』
猶は分陀利の水に在り　復水中に處在すと雖も　而も水の沾ほす所とならざる如し
我の世間に在るや亦復爾り　一切世の汚す所と爲らず　是の故に我を稱して佛陀と爲す』

爾の時優波伽摩婆羅門、復佛に白して言さく、『長老瞿曇、今何にか去かんと欲したまふ』。世尊、彼の婆羅門に報じて言はく、『我、今波羅㮈國に向はんと欲す』。彼の婆羅門、復佛に問うて言さく、『長老瞿曇、仁者、彼に至りて何事をか作さんと欲したまふ』。世尊、更に復偈を以て彼の優波伽摩

【二】優波伽摩の敎化。Mahā-vastu, III. p. 325—參照。
【三】旃陀羅村。Mahāvastu は Candapura とし、純陀私演羅聚落より以後に通過せる村とす。
【四】純陀私演羅は、巴利傳 (Petav. A. p.168) の cundatthila に一致するも、Mvst. は Cundadvilā とせり。本經、別に周蘭那娑陀羅とも音寫せり。
【五】優波伽摩。Mvst. と巴利傳は、Upaka, Divyâvadāna は Upagaṇa とす。今は「來事」の譯より見るに、Upagama なるべし。

婆羅門に答へて言まふらく、

『我今妙法輪を轉ぜんと欲す　故に彼の波羅㮈に至り
幽瞑の衆生を悉く曉らしめん　これ甘露鼓を擊敵するの門なり』

爾の時優波伽摩婆羅門、復佛に白して言さく、『我が意見の如くんば、長老瞿曇は、自ら、身に阿羅漢を得て、諸の煩惱を伏すと稱す。其の義云何』と。世尊復更に偈を以て重ねて彼の優波伽摩婆羅門に答へて言はく、

『應當に知るべし我諸怨を伏し　永く一切の諸の有漏を盡し
世間諸の惡法を皆滅せり　故に我稱して眞正尊と爲す』

而して偈有りて說かく、

『[六]何をか怪しむ、利を得て自ら養育するもの　他を增長し利益する能はざらんや
衆の幽瞑を見て慈悲せざらんや　得道他に勝りて共に分用すればなり』
自ら彼岸に度りて沒溺するものを見つつ　若し拔く能はずんば善人に非ず
自ら地藏を得つつ貧窮を見て　而も他に施さざるは是智に非ず』
手に自ら甘露藥を執持するもの　病人有るを見ば與に治せざらんや
畏る可き曠野に路を得て行かんに　彼の迷人を覩ば應に敎示すべし』
大闇に燈の光明を作して　明盛なるも、著して我が心に在らさるが如く
佛も亦是の如く法の光と作り　此の因緣にて亦著したまはず』

爾の時優波伽摩乞婆羅門、口に唱へて『長老瞿曇』と謂ひ、手を以て髀を拍ち、道を下りて、佛を避け、東に向ひて行けり。

爾の時、彼處に一天神(devatā)有り。往昔舊優波伽摩婆羅門と、身曾て親舊たりき。天神、優波

【六】(原文)何怪得利自養育、不能增長利益他、見衆幽瞑不慈悲、得道勝他共分用。

伽摩乞婆羅門の爲めに、利益を作さんと欲するが故に、安樂を作さんと欲するが故に、無畏處に於て解脱を得しめんと欲するが故に、偈を以て彼の優波伽摩婆羅門に告げて言はく、

『今無上天人師に値ひ　　世尊の至眞覺を識らずして
邪見赤體にして何にか去かんと欲する　　汝當に苦を受け未だ期ならずして殃すべし』
若し是の如き調御師に逢ひ　　之を捨てゝ供養を發さずんば
手足は汝が與に何の功德ぞ　　應當に此に於て信心を生ずべし』

七 爾の時世尊、安庠として漸く行きて、周蘭那婆陀羅（Cundaṣthilā）（即ち是、無角堺なり。）より、去りて迦蘭那富羅聚落（Karṇa-pura）（隋に耳城と言ふ。）に至り、迦蘭那富羅聚落より、安庠として去りて漸漸に、娑羅洟聚落(Sāratthipura)（隋に調御城と言ふ。）に至り、娑羅洟聚落より、去りて盧醯多柯蘇兜聚落(Rohitavastuka)（隋に閉塞城と言ふ。）に至り、閉塞城より、恆河(Gaṅgā)の岸に至り、河岸に到り已りて、船師（nāvika）の邊に詣り、至り已りて、即ち彼の船師に語りて言はく、『善い哉、仁者、乞ひ願はくは我を度して彼岸に向はしめよ』。船師報じて言さく、『尊者、若し當に我に度價を給へたまふべくんば、然らば後に、我、當に尊者を度すべし』と。爾の時世尊、船師に報じて言はく、『我、今何處にか度價を有し得ん。但、我一切の財寶を除斷したり。設し復見るも、觀ずること瓦石土塊の如くにして殊なる無けん。若し當に人有りて、我が一臂を割き、又栴檀を以て、我が一臂に塗るとも、此の二人の邊に、我が心平等なり。我是を以ての故に、度價あること無し』。船師、復言さく、『尊者、若し能く我に度價を與へたまはゞ、我、今即ち當に尊者を度すべし。所以は何ぞや。我、唯此に因りて持用つて活命し、婦兒を畜養すればなり』。

爾の時世尊、淨天眼の、人眼に過ぐるを以て、一群五百頭の鴈有りて、彼の恆河の南岸より、空を飛んで來り、北に向ふを見たまふ。世尊、見已りて即ち船師に對し、偈を説きて言はく、

【七】恆河にて船師を敎化したまふ。Mvst. III. p. 328.

『諸鴈の群黨恆河を度るに　　曾て彼の船師に價を問はず
各自身を運ぶに已の力を出し　　空を飛ぶこと自在に之く所に隨ふ』
我今應當に神通を以て　　虚に騰り翺翔すること猶ほ彼の鴈のごとくなるべし
若し恆河水の南岸に至らば　　安隱常住にして須彌の如けん』

時に彼の船師、佛の過ぎたまふを見已り、心に大悔を生じ、是の如く思惟す、『嗚呼嗚呼、我、是の如き大聖の福田を覩て、而かも施し度して彼岸に至らすを知らざりき。嗚呼嗚呼、我大利を失す』。是の如く念じ已りて、悶絶して地に倒る。彼の船師、少時迷荒し、還び酥醒を得るや、地より起ちて、卽便ち馳せて摩伽陀主頻頭王の邊に往き、是の如き事を奏す。爾の時摩伽陀王〔八〕頻頭娑羅、此の事を聞き已りて、是の如き言を作す、『凡夫の人、云何ぞ此に神通有り、此に神通無しと知る可き。是の故に、汝等、今より已去、凡て是く一切出家の人の、來りて度さん事を欲しなば、是非を問ふ莫かれ。但來る有らば、度價を取る勿かれ。意に隨ひて卽ち度せよ』と。

〔九〕爾の時世尊、恆河を飛度して、彼に達到し已り、彼の岸より、復神通を作し、飛騰して波羅捺城に向ひたまふ。是の時、彼處に一龍池有り。時に、其の龍王、名づけて商佉(Saṅkha)（〔隋〕に螺と言ふ。）と曰ふ。世尊彼の池邊に至りて下りたまふ。——世尊の足步を下したまへる處に、龍王、塔を起て、其の塔を、因りて稱して彌遲伽(Medhika)（〔隋〕に土塔と言ふ。）と名づく。——如來、彼に在り、一宿を經由して後、食時を待ちたまふ。——その待時處に、復、一塔を起て、其塔を復、宿待時塔と名づく。——而して、偈有りて說かく、

『諸佛は夜人間に入りたまはず　　要ず齋時を待ちて乞食したまふ
非時の行者には大患有り　　是の故に衆聖は時を俟つ』

爾の時世尊、三摩耶(Samaye社會習慣)に依り、摩伽陀の法によりて(Magadhe)、齋の到らんと欲

〔八〕頻頭娑羅。恐くは頻毘娑羅(Bimbisāra)、或は頻婆娑羅の誤。頻頭娑羅(Bindusāra)は、佛滅一百年出世の阿育大王の父の名。

〔九〕佛、波羅那城に入り、一宿夜して翌日入城乞食したまふ。

する時に、西門より波羅㮈城に入り、次第して乞食したまふ。波羅㮈に於て、乞食し得已りて、城の東門より、安庠として出で、既に城外に出で、一水邊に在りて、端坐して食し、食し訖りて澡洗し、北面して行き、安庠として、漸く至りて鹿苑林に向ひたまふ。偈有りて說かく、

『鳥獸の衆鳴聲ある鹿苑は　　往昔諸聖所居の處なり
世尊の身光明を放ちて耀き　　漸く彼の苑に至りたまふや日天の如し』

〔一〇〕爾の時五仙、遙かに、世尊の、漸く其の邊に至りたまふを見、見已りて、各各共に相謂ひて言はく、『我等、要ず誓はん、諸長老等よ、此の來者は、是れ彼の沙門瞿曇釋種、我が邊に向ひて來る。此の懈怠の人、禪定を喪失し、懈怠を以ての故に、全身纏縛す。我等輩は、須らく彼を敬すべからず、彼を禮すべからず、彼を迎ふべからず、彼に安置の坐處を與ふべからず。然りと雖も、但且らく其の意樂に隨ひ、其の自ら坐するに隨はん』と。唯憍陳如のみ、獨一人心に此の誓に同ぜず。而も口に違せずして卽便ち相對ふ。偈有りて說かく、

『瞿曇懈怠なりしを今忽ち來る　　我等五仙は各相契らん
「詳かに共に敬する莫れ禮拜する莫れ　　此の人違誓す、迎ふ可らず」』と

爾の時世尊、漸漸にして彼の五仙人の邊に近づき、既に逼り近づき已りたまふに、彼の五仙、各各相與に坐安んずる能はず。忽ち自ら誓に違ひ、各各起たんと欲す。譬へば奢拘尼鳥(śakuni)の鐵網內に在り、外に人有りて、大火を放たんに、其の網熱きが故に、安住する能はずして、飛ばんと欲し、跳ねんと欲する如し。是の如し。是の如く、彼の五仙人、世尊を見已りて、覺えず忽然坐より起つ。時に五仙の內、或は鋪き設けて坐を安置する者あり。或は水を持して洗足に擬せんと欲するあり。或は洗足石、及び革屣を將つて來る者あり。或は復た水を盛れる盆を將つて來るあり。或は足を洗ひ已るや木を將ち來りて、安脚に擬する者あり。或は三衣及び鉢を迎接するあり。又口に

【一〇】佛、五比丘を敎化したまふ。Mvst. III. p. 328 以下參照。

唱へて言ふ、『善く來りたまへり。長老瞿曇、此の鋪上に安坐しませ』と。偈有りて說かく、

『或は鉢及び三衣を迎へ取り　或は復佛の足下に頂禮し、
或は預て所坐の處を鋪設し　或は水器及び澡瓶を持てり』。

爾の時世尊、其の鋪設に隨ひて、安庠として坐したまふ。時に佛、坐し已りて此の思惟を作したまふ、『此等一切、皆是れ癡人なり。各各是の如き誓言を發せりと雖も、自ら相違し、依らずして住す』。爾の時五仙、佛の坐したまへるを見已りて、佛に白して言さく、『長老瞿曇、身色皮膚、快好清淨にして面目圓滿す。又、光明足り、諸根寂靜なり。長老瞿曇、必ず當に妙好の甘露に値遇し、或は清淨甘露の聖道を得たまへるなるべし』。

爾の時世尊、即便ち彼の五仙人に告げて言まはく、『汝等仙人、如來を喚んで長老と爲す莫かれ。所以は何。汝等仙人は、當來長夜應に苦患に値ふべし。何を以ての故に。我、今已に甘露の法を證し、我、今已に甘露の道を得たり。汝、我が敎に隨へ。汝、我が言を聽け。我、能く汝等輩に敎示せん。汝、我が語に隨つて乖違するを得ざれ。若しは我が敎に依りて、淸淨にして行ぜよ。若しは善男子及び善女人にして、正信もて家を捨て、鬚髮を剃除し、出家して無上梵行を求めんと欲して、梵行の源を盡し、諸法を現見し、自在神通、證得行行ならば、自ら能く唱へん、「我、已に生死を斷じ、已に梵行に立ち、所作已に辨じて、更に復後世の有を受けず」。汝等各當に是の如く自知すべし』と。而して偈有りて言はく、

『彼等五仙は佛の姓を喚べり　世尊愍して彼に敎へて言はく、
汝等心意に矜高なる莫れ　自慢を捨てゝ我を恭敬せよ
我慢と無慢とに我は平等なるも　我汝等の業因を廻らさんと欲すのみ
我已に佛を得て世尊たり　諸衆生の爲めに利益を作さん』

是語を作し已るや、其の五仙人、卽ち佛に白して言さく、『長老瞿曇は、昔是の行を行じ、昔是の道を求め、昔是の苦を行ぜしも、曾て上人の法を得證せず、諸聖と同智見ならず、增進を得ざりき。況んや復今日嬾惰を成就し、禪定を失して、懈怠身に纏ふをや』。

爾の時世尊、再過して、彼の五仙人に告げて言まはく『汝等仙人、是の言を作す莫かれ。如來はこれ懈怠の行に非ず。これ失禪に非ず。我、亦これ懈怠もて身に纏へるに非ず。汝等仙人、我、今已に阿羅呵三藐三佛陀を成じ、我、今已に彼の甘露を證得し、甘露道を知る。汝等仙人、應に我が教を受け、我が法を聽くべし。汝等、今若し我が教示を受けなば、我、能く汝等輩を教誨せん。汝、我が教に依り、我が教に違ふ莫く、我が教法を行ぜよ、乃至、汝等、未來に當に後有を受けざるを得べし』。

爾の時五仙、復佛に白して言さく、『長老瞿曇、昔は是の如く行じ、是の如く道を求め、是の如き苦を行じて、上法を證せず、諸聖と同智見ならず、乃至、懈怠以て自身に纏へり』。

爾の時世尊、三過して、彼の五仙人に告げて言まはく、『汝等仙人、自知せん、我昔より曾て人の爲に妄言を說けりや以不や』と。五仙人言はく、『不とよ、尊者』。

爾の時世尊、口より舌を出したまふに、二耳孔に至り、二鼻孔に至る。舌を以て、二鼻孔を拄塞し已り、還りて復舌を以て自ら舌を舐めて、遍ねく其の面を覆ひ、覆ひ已りて、還た縮め、舊に依りて還た舌本に置き、居處に安置し已りて、五仙人に告げて言まはく『汝等仙人、曾て自ら眼もて見、或は復耳もて聞けりや。若し人妄語せば、是の如き舌の神通力有りや不やを』。彼等仙人言さく、『不とよ、尊者』。『是の故に汝等、如來を喚んで以て懈怠と爲す莫かれ。如來は亦禪定を失せるに非ず。然も我懈怠を以て身に纏ふに非ず。諸仙當に知るべし、我、今已に阿羅呵三藐三佛陀を成じ、已に甘露を證し、甘露道を知る。汝等、我が教法の示誨を受け、我が教法を聽け。汝等、我が教法

に依りて行じて、若しは違背せざれ。其の善男子及び善女人、解脱を求めんと欲し、捨家し、出家し、乃至、未來に後有を受けじ』。

爾の時世尊、是の如き教を以て、彼の五仙を誨へたまふに、彼の仙の所有の外道の形・外道の意・外道の蔵は、皆悉く滅隱して現ぜず。身上所著の服は、卽ち三衣と成り、手に鉢器を執り、頭髪髭鬚は自然に除落して、猶ほ剃來七日を經たる如し。威儀卽ち成じ、形容、譬へば（二）百夏の比丘の如し。威儀行歩、坐起擧動、是の如くにして住す。

爾の時世尊、卽便ち彼の五比丘に告げて言はく、『汝等比丘、各各分に隨ひて東方を觀察せよ』と。時に五比丘、東方を觀ぜんと欲して西方を見る。世尊復告げたまはく、『汝等比丘、分に隨ひて、各各西方を觀察せよ』と。彼等比丘、西方を觀ぜんと欲して、卽ち東方を見る。世尊復告げたまはく、『汝等比丘、北方を觀察せよ』と。彼等比丘、北方を觀ぜんと欲して、卽ち南方を見る。世尊復告げたまはく、『汝等比丘、南方を觀察せよ』と。卽ち北方見る。世尊復告げたまはく、『汝等比丘、上方を觀察せよ』と。卽ち下方を見る。世尊復告げたまはく、『汝等比丘、下方を觀察せよ』と。彼等比丘、下方を觀ぜんと欲して、卽ち上方を見る。世尊復告げたまはく、『汝等比丘、分に隨つて各各餘方を觀察せよ』と。彼等比丘、餘方を觀ぜんと欲して、卽ち正方を見る。世尊復告げたまはく、『汝等比丘、正方を觀察せよ』と。彼等比丘、正方を觀ぜんと欲して、卽ち餘方を見る。爾の時世尊、善能く彼の五比丘を敎誨し、その內心に各歡悅を生ぜしめ、其れをして證を獲て、正理に隨順し、各各歡喜せしめたまふ。時に五比丘、心開き意解り、世尊に隨順し、世尊に諮承し、世尊の敎を聽き、世尊の心に隨ひ、世尊の所說の敎法に違せず、說を聞きて諦受し、世尊に奉侍して、暫時も捨つる無し。

【二】夏とは法臘に同じ。如法生活の一年をいふ。印度の法、夏期を以て自修の時とす。自修の年限多きもの程、尊貴なり。

卷の第三十四

轉妙法輪品第三十七の下

爾の時世尊、是の思惟をなしたまふ、『往昔の諸佛・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀は、何の方所に在りてか、無上微妙の法輪を轉じたまへる』。時に世尊、是の心を發し已りたまふや、其の地即時に自然に湧出して、餘方に異る。爾の時世尊、復是の如く念じたまふ、『往昔の諸佛・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀は、云何してか無上法輪を轉じたまへる。坐轉すべしと爲んや、臥轉すべしと爲んや』。時に世尊、是の心を發し已りたまふや、彼の地方所に、即ち五百の師子高座を現ず。世尊、此の五百の座を見已り、即ち敬心を發したまふ。過去の諸世尊を敬したまふを以ての故なり。三匝して、三高座を圍遶し已り、第四高座に至りて、即ち其の上に上り、加趺して坐したまふ。譬へば師子の怖畏する所なく、驚動する所無きが如し。時に憍陳如の五比丘等、即ち佛に白して言さく、『希有なるかな、世尊、即ち今悉く如許の佛の、來りて同じく說法したまふ有りや。云何ぞ乃ち若干の高座有る』。爾の時佛、五比丘に告げて言まはく、『汝諸比丘、今應當に知るべし。此の[一]賢劫中に五百佛有りて世に出現まします。三佛已に過ぎて般涅槃に入りたまひ、我、今、第四に世に出現す、餘は、當來に續きて復興顯したまはん。』

爾の時世尊、復是の如く、過去の諸佛・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀を念じたまふらく、『金輪を轉じたまへりと爲すか、銀輪を轉じたまへりと爲すか、頗梨輪を轉じたまへりや、琉璃輪を轉じたまへりや、赤眞珠輪を轉じたまへりとなすや、馬瑙輪を轉じたまへるや、硨磲輪を轉じたまへりや、琥珀輪を轉じたまへりや、珊瑚輪を轉じたまへりや、七寶輪を轉じたまへりや、木輪を轉じたまへりとなすや』。

【一】賢劫（Bhadra-kalpa）。佛教にて現在の時代のこと。

爾の時、世尊、是の如く念じたまへる時、心內に、自らの智見を發して、過去の諸佛・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀が、[二]四聖諦に依りて、次第せる三十二種相の因緣もて、無上法輪を轉じたまひ、而して世間中若しは沙門及び婆羅門、[三]或は天、或は魔、或は梵ある世界に、一衆生として、能く是の如き、自在無畏なる轉輪法を作すものなきを知りたまふ。

爾の時世尊、[四]箕宿月初の十五日の內、十二日の昊、半ば人影を過ぐるころ、是の如き時、——毘闍耶(vijaya)（〔隋〕に難勝と言ふ、）と名く——に當りて、北面して坐し、鬼宿及び房宿に合する時、無上清淨の法輪を轉じたまふ。一切世間の所有の沙門、及び婆羅門・天・魔・梵等の、能く是の如き法輪を轉ずる有ることなし。房宿日を以て輪を轉じ、無礙に說法したまへるは、世に依るが故に、此の日を以てせるなり。

爾の時世尊、五比丘に告ぐるに、是の如き言音もてしたまふ。所謂、如來に此の言音有りて、善能く教授し、善能く喩慰し、能く缺けざらしめ、能く恭敬せしめ、曲ならず諂ならず、麗ならず麁ならず、綺ならず朴ならず、柔順調和にして、善能く作業し、緩ならず急ならず、妨礙有るなく、眞正微妙にして善巧分明に、甘美を[五]流靡し、衆情を悅可し、濁なく垢なく、毀壞すべからず、與に等しき者なく、染を離れて清淨に、久來常に捨し、失せず乏せず、結なく縛なく、解脫して光潔あり、貧ならず吃ならず、亦輭弱ならず。能く一切衆生の爲めに樂を生じ、能く一切衆生の身體の與に、潤澤を作し、能く一切衆生の心を發して、能く欲心を斷じ、瞋恚心を斷じ、愚癡心を斷じ、能く諸魔を攝し、能く諸罪を破し、悉く能く一切外道を降伏す。世尊の音響の、善能く他を敎ふること、猶ほ鼓聲の如く、猶ほ梵聲の如く、猶ほ迦羅頻伽鳥の聲の如く、帝釋の聲の如く、海波の聲の如く、地動の聲・崑崙の震聲・孔雀鳥の聲・拘翅羅の聲・命命鳥の聲の如く、鴈王の聲の如く、猶、鶴の聲の如く、猶ほ師子猛獸王の聲の如く、猶、箜篌・琵琶・五絃の箏・笛等の聲の如く、聞けば能く一切を

【二】四聖諦とは(一)苦、(二)集、(三)滅、(四)道の四個の眞實をいふ。次第三轉の意義は後に見ゆ。

【三】原文。無有沙門……或梵世界、無一衆生云云とあり。始の無有は若有の古寫誤なり。

【四】箕(Pūrvāṣāḍhā)。二十八宿の一、箕月は陰曆四月十六日、至五月十五日にして、陽曆六七月に當るを以て、初十五內十二日は、陰曆二十七日に當る。

【五】靡。連る貌にいふ。

歡喜せしめ、教誨分明にして、意に喜んで聞くを樂み、微妙甚深にして、乏少する處なく、能く衆生をして諸善根を作らしむ。聞けば空しからずして、字體分炳・文句顯了・義業幽邃・法藏眞實にして、時に合し節に合し、[六]三摩耶に合して、時を過して授けず。諸の根情を知り、法句に順じ、諸の種種の[七]布施を以て莊嚴し、持戒淸淨に、忍辱もて含受し、精進勇猛にして、諸禪寂定に、奮迅の神通ありて、智慧もて世間の善惡を分別し、[八]慈もて樂を成就し、悲にして勞勧なく、喜歡して捨離し、[九]三乘を建立して、三寶の種を紹ぎ、[一〇]三聚を分別し、[一一]三脫門を淨くして、實語もて訓誨し、智人の歎ずる所、聖の可愛とする所、無量無邊にして、猶虛空の、一切に遍至して、諸相具足する如し。

世尊は、是の如き聲言もて、諸の五比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、出家の人は、恆常に須らく世間の二事を捨つべし。何等をか二と爲す。一は欲樂を受くることとなり。凡そ行動有るや、聚落に依るは、凡夫の歎ずる所。これ須らく棄捨すべし。第二の捨とは、自身困しめられ、苦を受くる處は、聖の歎ずる所に非ず、自利を得ず、利他を得ず、この法、須らく捨つべし』。而して偈を說きて言はく、

『自身の損處は速かに棄捐せよ　諸根の境界は悉く捨つべし
若し能く此の二種の法を捨てなば　即ち[一二]甘露の正眞道を得ん』

爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝等當に知るべし、我、是の如く彼の二邊を捨て已りて、中路有り、我自ら證知して、開眼の爲の故に、智を生ぜんが爲の故に、寂定の爲の故に、諸通の爲の故に、覺了の爲の故に、沙門の爲の故に、涅槃の爲の故に、成就するを得たるを說かん。汝等比丘、若し出るに中路あるを知るを得んと欲せば、我が所證の如くせよ。開眼の爲めの故に、智を生ぜんが爲めの故に、寂定の爲めの故に、乃至、涅槃のための故に。八正聖道とは、所謂、正見・正分別・正語・正業・正命・正精進・正念・正定なり。汝等比丘、此は是れ中路なり、我、已に證知す。開眼

【六】三摩耶（Samaya）。世の習はせ。
【七】布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を六波羅蜜といふ。
【八】慈・悲・喜・捨を四無量心といふ。
【九】三乘とは、聲聞法・緣覺法・菩薩法をいふ。
【一〇】三聚とは、三聚淨戒の略。
【一一】三脫門とは、空・無相・無願をいふ。
【一二】甘露正眞道とは、非苦非樂の中道をいふ。

い爲めの故に、智を生ぜんが爲めの故に、寂定の爲めの故に、諸通を發せんが爲に、覺了の爲めの故に、沙門の爲めの故に、涅槃の爲めの故に、當に成就を得べきなり』。而して偈を說きて言はく、

『是の如き八種の正路の因は　死生の恐怖を除滅して盡す
旣に諸業を除滅するを得已れば　永く更に一切の生を受けず』

爾の時、諸佛比丘に告げて言はく、『汝等比丘、至心に諦聽せよ。四聖諦あり。何等をか四となす。謂く、苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・得道聖諦なり。此の如きを、名づけて四種聖諦と爲す。諸比丘、何等の相をか、名づけて苦聖諦と爲す。所謂、生苦・老苦・病苦・死*憂悲苦・[一三]愛別離苦・[一四]怨憎會苦・求不得苦なり。此の諸苦の故に、苦聖諦と名づく。諸比丘、何等をか、名づけて苦集聖諦と爲す。所謂此の愛、數數心を動かし、欲事を發思して、處處を思想する、是を則ち名づけて苦集聖諦と爲す。諸比丘、何等をか、名づけて苦滅聖諦となす。所謂、彼の愛を遠離棄捨し、悉く除滅し盡くして、餘殘を留めず、心及び心想の、一切寂定なる、是を則ち名づけて苦滅聖諦と爲す。諸比丘、何等をか名づけて得道聖諦と爲す。此の八正聖路、所謂、正見・正分別・正語・正業・正命・正精進・正念・正定を逮得するなり、此を苦滅得道聖諦と名づく。

此の苦聖諦は、我、往昔來、他より聞かずして、諸法中に於て、自ら眼智を生じ、意を生じ、明を生じ、誓願を生じ、智慧を生じぬ。此の苦聖諦は、須らく是の如く知るべし。乃至、未聞にして、諸法の中に、眼・智・慧を生じて、彼の苦聖諦は、已に照知し竟る。（梵本再疊するも、今略して要を取る。）是の如く苦集聖諦は、他より聞かずして、諸法中に於て、眼及び智を生じぬ。彼の苦集の法は、悉く之を滅すべし。是の如く、乃至、苦集聖諦、已に滅盡し訖る。

是の如く、苦滅聖諦は、他より聞かずして、諸法中に於て、眼及び智を生じぬ。彼の苦滅諦は、今應に證すべし。是の如く、乃至、智慧を生じ已りて、苦滅聖諦を、證智し盡すを得、是の如くして、

※死の下に苦を脫せるならん。
【一三】愛別離苦は、愛するものに別離するの苦なり。
【一四】怨憎會苦は、怨憎のものに會ふの苦なり。

苦集は滅し已れり。得道聖諦は、他より聞かずして、諸法中に於て、眼及び智を生じぬ。彼の苦集滅は、道證を知得す。乃至、智慧を生じて、還、彼の苦滅し、道證を得竟る。（已上四章は、並に皆疊み道ふ。）

諸比丘、乃至、我が此の四種聖諦の、是の如き[一五]三轉十二種相の因緣もて、如實に未だ證せざれば、我、未だ阿耨多羅三藐三菩提を證得せず。未だ我覺了せりと言ふを得可らざるなり。諸比丘、我、此の四聖諦を、三種に轉じ、如實に十二相を證せるを以て、然る後、始めて阿耨多羅三藐三菩提を得たり。是の如くして、我覺了せりと言ふ可きなり。諸比丘、我、爾の時に智を生じ、見を生じ、心を散亂せずして、正しく解脫を得たり。諸比丘、これ我が最後の生にして、更に有を受けざるなり』。

佛、是の如き法相を說きたまへる時、長老憍陳如、卽ち彼の坐に於て、塵垢を遠離し、諸纏縛を除き、諸煩惱を淨め、諸法中に於て、淨眼智を得、所有の集法を、一切皆滅し、法滅を知り已りて、如實に證知せり。譬へば淨衣の、垢穢有ることなく、黑縷有ることなきが、所染の處に隨ひて、其の色を受くるが如し。是の如く、是の如く、彼の憍陳如、卽ち坐處に於て、諸垢皆除こり、煩惱盡く滅し、法眼淨を得て、如實に知りぬ。是の時、彼の會の六萬の天子、遠塵離垢して、亦、諸法に於て淨眼智を得たり。

爾の時世尊、師子吼を作して、是の偈を說きて言はく、

『不可言說の法は甚深なり　眞如は寂靜にして名字無し
最勝の憍陳如先づ證し　我が所求の道は得て空しからず』

而して偈有りて說かく、

『是の如き甚深の法の說かるる時　最勝世尊に慈悲の行あり
憍陳如は淨法眼を得　復諸天は億萬千有り』。

【一五】 三轉十二種相とは、四諦の法を三番に說けるをいふ。前節に見らるる如く、先づ苦集滅道を說き示すを、示轉法輪といふ。次に苦は知れ集は滅せよ滅は證せよ道は修めよと勸むるを、勸轉法輪といふ。次に自己の所證を以て示す、を證轉法輪といふ。四諦に各三番あるを以て、十二種相となるなり。

爾の時、有ゆる地居諸天、世尊の是の如き法相を說きたまへるを聞き、一時に大唱して、是の如き言を作す、『今日、婆伽婆・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀は、波羅捺鹿野苑中、往昔諸仙の居住せる處に在して、無上微妙の法輪を轉じたまふ。若しは沙門あり、若しは婆羅門あり、若しは梵あり、若しは魔あるも、實に是の如き法輪を轉ずる能はず』と。而して偈を說きて言はく、

『善い哉世尊の眞如見もて　衆の爲めに甘露の法輪を轉じたまふや。
持戒と禪定は　[一六]輻輞釭なり　慚愧と精進は　[一七]軸鐧轂なり。
甚深無異正眞の說もて　是の輪を建立したまへる三界の尊は、
今波羅捺城の邊　鹿野苑中に在して是の如く轉じたまふ』。

爾の時彼處の地居の諸天、是の聲を唱へ已るや、其の聲、上、四天王天に徹す。四王聞き已りて、復、唱聲を傳ふ。其の聲中、是の如き言說を作す『今日、世尊・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀は、波羅捺鹿野苑中に在して、無上微妙の法輪を轉じたまふ。一切世間に、若しは沙門あり、及び婆羅門あり、若しは梵あり、若しは魔あるも、實に人の能く然かく轉ずる者有ることなし』。

四天王天の、是の聲を作す時、忉利天に聞え、忉利天王、是の如き聲を作すや、夜摩天に聞え、夜摩の聲を作すや、兜率天に聞え、兜率の聲を作すや、化樂天に聞え、化樂の聲を作すや、他化天に聞え、他化の聲を作すや、梵天王に聞ゆ。時に、梵天王、卽ち是の言を作す、『今日、世尊・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀・波羅捺鹿野苑中に在して、無上微妙の法輪を轉じたまふ。一切世間に若しは沙門あり、及び婆羅門あり、一切の魔と梵とあるも、實に轉ずる能はず』。是の如く、次第して一念の頃を經る時、上の諸天、各各相告げ、其の聲遍滿して、是の如く、乃し大梵天の所に至る。

爾の時、娑婆世界の主、大梵天王、既に聲を聞き已りて、復是の如く梵音を發して唱言すらく、『今日、世尊・佛・婆伽婆・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀、波羅捺鹿野苑中に在して、無上微妙の法

[一六] 輞は車の大輪。釭は車轂の中にある中空の鐵具、かりも。
[一七] 鐧。車軸の鐵、おほひがね。轂はこしき。

輪を轉じたまふ」一切世間に、若しは沙門あり、若しは婆羅門あり、天・人・魔・梵あるも、實に人の能く是の如く如法の轉を作す者有ることなし』と。是の如く、次第して、有頂天に至る。

爾の時世尊、法輪を轉ずるに當り、是の時に、天・人・魔・梵・沙門・及び婆羅門の、一切世間は、大光もて普ねく照され、其の鐵圍山と大鐵圍山とは、その兩山の間、幽冥黑暗にして、有る所の衆生は、極重の苦を受け、而して此の日月の、是の如き光明、是の如き大德、是の如き神通、是の如き威力、是の如き自在も、彼處を照耀する能はず、光らしむる能はざるに、佛の威神の故に、彼處普ねく照され、其の中の衆生、光明を得たるが故に、各各相見、各各相知り、各各相謂ひて言はく、『此處にも、亦復衆生有りしなり』と。（已上の兩句は梵本に再稱す。）

爾の時、世界の土地の、所有の一切の樹木、百卉藥草、悉く皆、時に順じ、其の種類に隨ひて、大小各各、自ら莖葉花果を生じ、生じ已りて、花は自然に來りて佛の上に雨る。供養の爲めの故なり。清淨にして塵霧烟霞有ることなき、其の虛空中に、暫くにして輕雲を起し、微細の雨を降らし、以て地に灑ぐ。雨水淸涼にして、八功德を具す。雨ふり已りて、還りて晴れ、復微風を起し、冷涼調適にして、四方皆淨に、顯現分明にして、塵翳有ることなし。上界の虛空に、諸天聚集して天の音樂を作し、天の妙歌を唱へ、天の種種の曼陀羅花、幷に及び摩訶曼陀羅花を雨し、又、諸天の細妙の衣を雨し、天の金銀瑠璃もて作されたる七寶の蓮花を雨し、復、無量の優鉢羅花・波頭摩花・拘物頭花・分陀利花を雨して、如來の上に下し、復無量種種の雜香・末香・塗香を雨して、如來の上に散じ、散じ已りて、復散じ、如來の坐處の四面に周匝し、方一由旬に、其の種種の花、悉皆遍滿して、間に空缺無し。復此の大地、[一八]六種に震動して、(1)動き・遍ねく動き・等遍に動き、(2)震ひ・遍ねく震ひ・等遍に震ひ、(3)湧き・遍ねく湧き・等遍に湧き、(4)吼え・遍ねく吼え・等遍に吼え、(5)覺し・遍ねく覺し・等遍に覺す。一切衆生、一向に悉く皆大快樂を受け、彼の時中に於て、一の衆生とし

【一八】六種震動とは、動・起・涌（以上三種は形）、震・吼・擊（以上三種は聲）をいひ、形聲各一種を擧げて、震動といふ。六種に各〻三相ありて、十八相を成す。動の三相とは、一方の獨り動くを動と名け、四方の倶に動くを遍動と名け、八方の齊しく動くを普遍動と名く。以下、準じて知るべし。本經、起を脫して五動となり、覺は恐らく攪の意なるべく、擊に當るべし。

て、欲に惱む者・瞋恚に惱む者・愚癡に惱む者・我慢に惱む者・貢高に惱む者有る無く、驚かず、怖れず。一の衆生として、諸罪を造作する無し。若し患へる衆生は、即ち除差を得、饑渴の衆生は、即ち飽滿を得、酒醉の衆生は、即ち醒悟を得、顚狂の衆生は、皆本心を得、盲者は視を得、聾者は聽を得、若し六根の完具せざる有る者は、悉く具足を得、貧凍倮露の諸衆生等は、皆富饒を得、羸瘦せる衆生は、皆肥滿を得、繫閉の衆生は、皆解脫を得、枷鏁杻械の諸衆生等は、自然に出づるを得、地獄の衆生は、即ち滅惱を得、六畜の衆生は、驚怖あることなく、餓鬼の衆生は、飢渴に、定まりを得ぬ。是の如き因緣もて、其の憍陳如は、證智(ājñāna)と名づくるを得たり。

爾の時、長老憍陳如の身、如實に一切諸法を見るを得、如實に一切諸法を知るを得、如實に一切諸法を證するを得、如實に煩惱の險路を度るを得、煩惱の積を度り、無疑の處に度りて、心中決定して、滯礙有ること無く、已に無畏を得て、他より學ばず。時に、憍陳如、彼の法行を知るや、坐より起ちて、佛足を頂禮し、胡跪合掌して、佛に白して言さく、『善い哉、世尊、我佛法に入らん。世尊、我を度して、以て沙門と爲し、具足戒を與へたまへ、願はくは比丘と作らん』。爾の時佛、憍陳如に告げて言はく、『善來比丘、我が法中に入りて、梵行を行ぜよ、苦邊を盡さんが故に』。是の時、長老憍陳如の身、即便ち出家して、具足戒を成ず。餘の四比丘には、各法要を說きて、機に隨ひて敎授す。而して彼の衆中、三比丘あり。食を乞ひて他に行き、唯二比丘のみ、敎誨を稟受す。其の後三人、既に食を將つて來るや、合して六人あり、相共に坐して食す。彼等、已に如來の說法敎化を得て承受す。是の時に當り、次の一長老は跋提梨迦(Bhadrika)(〔隋〕に小賢と言ふ。)、其の次の長老は婆沙波(Vāspa)(〔隋〕に起氣と言ふ。)と名づく。是等の二人、即ち坐中に於て遠塵離垢し、諸の結惑を盡し、煩惱界を淨め、諸法中に於て、法眼淨を得、所有の結惑、一切皆盡き、無常の法を識りて、如實に證知す。譬へば、淨衣の、黑纏有るなく、脂膩有るなきが、染めんと欲する所に隨ひて、正に其の色

を受くるが如く、是の如く是の如し。而して彼の長老跋提梨迦、幷に及び長老婆沙波等、彼の坐に在りて、遠塵離垢し、淨法眼を得、略說、乃至、即ち出家と成りて、具足戒を得たり。是の如く次第に、彼の後に來れる人、乞食せる所の者も、如法に教化し、如法に攝受したまふ。世尊、如法に示現したまへる時、彼の長老摩訶那摩(Mahānāma)(〔隋〕に大名と言ふ。)幷に及び長老阿奢踰時(Aśvajit)(〔隋〕に調馬と言ふ。)は、即ち彼の坐に於て、遠塵離垢し、諸法中に於て、淨法眼を得たり。是の如く、是の如く、長老大名と長老調馬は、即ち彼の坐に於て、煩惱の垢を盡して、如實に證知す。彼等自ら見て、諸法相を得、法相を度し已りて、復疑心なく、無畏地に到る。他より聞かずして、佛法中に於て、知證を得已りて、坐より起ちて、佛足を頂禮し、佛前に在りて、胡跪合掌して、佛に白して言さく、『唯願はくは世尊、我が出家を聽し、我に具戒を與へたまへ』。

爾の時佛、二比丘に告げて言はく、『汝等比丘、善く來りて我が自說の法中に入り、梵行を行じて、正しく苦邊を盡せ』。時に二長老、即ち出家を成じ、具足戒を得たり。偈有りて說かく、

『小賢と起氣と憍陳如　摩訶那摩と及び調馬
彼等初めて此を證し知見しぬ　如來の甘露鼓法門を』

爾の時世尊、即ち彼等五比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、我、日夜恒に正念を行ぜるが故に、正行を行じ已り、無上正眞の解脫を得て、具足證知す。汝等比丘、應に我の是の如き念を作せるを學び、正行を行ずべし。汝等も、亦、當に此の無上正眞の解脫を得べく、當に證知すべきのみ』。

爾の時魔王波旬、佛世尊の所に往詣し、佛所に到り已りて、即ち偈頌を以て、佛に白して言さく、

『瞿曇は欲愛を以て自ら纏はる　一切の天欲と及び人欲となり
今既に此の大纏縛に入る　我決んで汝沙門を放たず』

爾の時世尊、思惟して、是れ魔波旬の說なるを知り、世尊、是の如く思惟して知り已り、即ち還

りて偈を以て、波旬に答へて言はく、

『我以に久しく諸愛の纒を脫し　天欲と人欲と悉く並びに離れたり
大縛を我既に出づるを得訖る　況んや復た汝が先に我に降されたるをや』

爾の時魔王波旬、佛の此の偈を說きたまへるを聞き已り、默然として住し、是の如く思惟す、『沙門瞿曇、我が意行を知る。沙門釋子、我が心情を見る』と。卽ち悵怏を懷き、苦惱して樂しまず、彼の地方に於て、身を沒して現はれず。

爾の時世尊、復更に重ねて五比丘に告げて言はく、『汝等比丘、若し諸色の是れ無我なるを知らば、是の色は則ち惱壞の相を作さず、當に苦を受けざるべし。應に是の如く見るべく、應に是の如く知るべし。是の如く色あり、色に〔一九〕我なきを以て、是の故に、一切の色は、能く惱を生じ、色能く苦を生ず、苦惱を生ずと雖も、亦色の定性を得可らず。色既に不定ならば、亦「色よ、是の如く有れかし」と願ふべからず、亦「是の如く無かれかし」と道ひ願ふべからず。其れ色既に然り。受想行識も、亦復是の如し。汝等比丘、當に識にも亦我有ることなしと知るべし。識にして若し我有らば、此の識は應當に惱を作さず、苦を作さざるべし。識の體は無にして不可得なるを以ての故に、云何ぞ乃ち是の如く有れかしと作すを得ん。亦是の如く無かれかしと道ひ願ふ可らず。識は無我なるを以ての故に。是の故に、識は能く惱を作し、苦を作すなり。識は本、無なるを以て、卽ち識よ、是の如く有れかし、是の如く有らざれ」と願ふべからず』。

復比丘に告げたまはく、『汝の意に於て云何、識は當に常なるべしと爲すか、當に無常なるべしと爲すか』。時に諸比丘、卽ち、佛に白して言さく、『世尊、此の識は無常なり』。佛、復問ひたまはく、『識既に無常ならば、苦と爲すか樂となすか』。諸比丘言さく、『世尊、此の識はこれ苦なり』。佛、復告げて言はく、『識は既に是れ苦にして、無常破壞なり、これ正法に非ず、これ常住に非ず。若し

【一九】我は自在者の意。色が自在主ならば、自ら苦惱を作すべからず、自在主ならざるを以て、苦惱ありといふなり。

能く是の如く識を見んには、乃ち能く是の如きの思惟を作すべきか、彼(五蘊)は是が我なりや。或は我は是彼(五蘊)なりや、或は我見、卽ち我これ我なりとするや』。諸比丘の言さく、『不とよ、世尊』と。佛、諸比丘に告げたまはく、『汝等當に知るべし。あらゆる諸色の、或は過去色・現在・未來、若しくは內・若しくは外・若しくは麁・若しくは細、若しくは上・若しくは下、若しくは近・若しくは遠なるに、一切是の如き念を作す可らず、彼は是我なり、我は是彼なりと。是の如く是の如し。如實正智もて、當に是の如くなるべし。あらゆる一切の受想行識の、過去・未來・現在、內・外・麁・細・上・下、遠・近の諸識に、此の念を作さざれ、我は是彼なり、彼は是我なり、或は我は是我なりと。是の如く是の如く、如實の正見もて、當に是の如く知るべし』。

佛、諸比丘に告げたまはく、『汝等當に知るべし。若し多聞の聲聞の人あり、能く是の如き思惟の見を作さば、當に色受想行識を厭離すべし。既に厭離し已りて、一切に樂はず、既に心樂はずして、解脫を得。既に解脫を得るや、當に是の智を生ずべし。「我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、後有を受けず」と。我是の如く知る』。爾の時世尊、是の法を說き已りたまふや、時に五比丘、有爲中に於て、諸漏滅盡し、心に解脫を得たり。是の時に當りて、此の世間に、六阿羅漢あり。一はこれ世尊、五はこれ五比丘なり。

三〇 而して後時に、如來授記したまふ、『汝等比丘、若し我初めて法輪を轉じて說法せる時、我が教に違はざりし最第一者を知らんとならば、謂はく五仙の首なる、その憍陳如比丘是なり』。時に諸比丘、是の語を聞き已り、卽ち佛に白して言さく、『希有なり、世尊。其の憍陳如長老比丘は、何の善根を作してか、是の因緣を以て、如來初轉の無上法輪に、それ能く違はざる』。是の語をなし已るや、爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝等比丘、至心に諦聽せよ。我念ふに、往昔還りて此處波羅捺城に在りて、一瓦師(bhārgava)有りき。是の時彼に一辟支佛有り、身體患を帶び、病を治せんと欲

【三〇】憍陳如に授記し、且つ其本生を說きたまふ。Mahā-vastu, III. p. 347—348

するが故に、聚落に入る。夏將に至らんとす。其の辟支佛、治病の爲めの故に、瓦師の邊に詣る。既に彼に至り已り、瓦師に語りて言ふ、「仁者瓦師、汝若し辭せずば、我汝の家に寄り、一夏安坐して、乃至、病を治せん。將に息差せんとするが故なり」。時に彼の瓦師、淸淨心を以て、辟支佛に白して、是の如き言を作す、「善い哉大仙、此の語に違せじ。意に隨ひて住せよ。我當に力に稱ひて、大仙に給奉し、四事もて供養すべし」。時に彼の瓦師、辟支佛の爲めに、家を去る遠からずして、一房屋を作り、彼に與へて坐せしめ、臥具・蠅拂・燈脂を安施す。時に辟支佛、卽ち彼の夜に於て、火三昧に入る。時に彼の瓦師、大火光を見て、是の思惟を作す、「何の故に、此の燈、是の如く熾明にして、久しく滅せざる。彼の草屋が火に燒るる莫からんや」と。

爾の時瓦師、安徐輕足にして、草菴の所に至り、密私に伺ひ看て、辟支佛の、結加して坐し、大火聚の如く、熾然として光を放ち、其の身儼然として燒熱せられざるを見、瓦師見已りて、速かに疾く却き看て、急走して還り、後日、信心倍生じて希有なり。而して彼の尊者辟支佛、彼の瓦師の家に住して、是の如く寂靜に、停りて一夏を經、安居して將養ふ。彼の瓦師、所須の四事を、悉く皆供奉して之に供養し、復醫師を將て、遣はして爲に、病を治せしめ、藥療すべき者は、悉く皆之を與へぬ。而かも彼の辟支佛の身病の損差を得る能はず。彼の辟支佛、既に身病に因りて、遂に便ち命終す。爾の時瓦師、彼の尊者辟支佛身の般涅槃に入るを見、見已りて悵怏し、憂愁して樂しまず。啼哭流涙し、嗚呼して寃と稱す。是の時、無量無邊の人民、彼の瓦師の哭泣の聲を聞き已り、彼に詣り借問して言はく、「汝瓦師、何故に是の如く嗚呼して哭するぞ」。時に彼の瓦師、彼の人輩に向ひ、辟支佛の神通因緣を說き、「此の仙人は是の如く精進し、是の如く持戒し、常に妙法を行ぜるに、我、醫師を將て、來りて療治せしむるも、差ゆるを得る能はず」と。

爾る時、別に諸辟支佛有り、唯一人を少きて五百に滿たず。栴檀木を將つて、神通を以て飛び、

空より來り、彼の辟支佛身を闍維[三]し訖りて、彼の瓦師を慰勞して言はく、『仁者瓦師、汝の心當に歡喜を生じ、踴躍して體に遍滿すべし。何を以ての故に。汝、既に此の仙人の身を供養せり。汝は此の功德もて、當に來世に大いに善利を得べし。汝、我等の神通を見已りたるや不や』。瓦師の言はく、『見たり』。爾の時、彼等諸辟支佛、復瓦師に語りて、是の如き言を作す、『今、我等の作せる所の神通の如く、此の仙人の神通、亦、然り。我等の邊に於て、此は最も老大なり』。時に彼の瓦師、即ち彼等辟支佛に問ひて言はく、『尊者、今何處の所に居在したまふ』。諸辟支佛、瓦師に報じて言はく、『此處を去りて、一聚落有り、王舍城(Rājagṛha)と名づく。城を去る遠からずして、一山有り、諸仙居山(Ṛṣi-giri)と名づく。我等彼處に居在して住す』。

爾の時瓦師、即ち彼等辟支佛に白して言さく、『善來諸仙、我が家の食を受け訖り、心に隨つて去りたまへ』と。爾の時彼等諸辟支佛、一切皆彼の飲食を受け、食し訖りて後、瓦師に語りて言はく、『當來の世に於て、佛の出現有らんに、汝、彼の邊に於て、發心乞願せんこと、此の功德清淨の心に藉る』。聞き已りて、即ち彼の諸仙聖辟支佛に白して言さく、『尊者、仙輩、前の我が門師は最老最大なりき。願はくは我も亦然らん。未來世に於て當に釋迦如來に値遇するを得べし。教法の中に出家を得ば、願はくは、我、老大にして、最上座と成らん』。彼等仙の言はく、『願はくは汝の此の誓、決んで成就せんことを』。

爾の時、彼等諸辟支佛、瓦師に此の誓願を與へ已り、即ち彼處より、空に飛びて去る。瓦師、既に辟支佛等の、虛空を飛騰し、神通もて行くを見、淸淨心を以て、彼等の行くを觀じ、十指掌を合して、彼等を頂禮す。爾の時瓦師、彼の尊者辟支佛身の般涅槃に入りたまへるを見、其の舍利を收めて、塔を起し、彼塔を莊嚴して、好相輪を著け、輪内に鈴・繒綵の旛幢を懸け、諸香花・燒香・末香・塗香を將つて以て供養し、誓願を發して言はく、『此の善根に藉りて、當來の世に於て、願はくは彼

【三】闍維。荼毘に同じ。

の釋迦如來に値ひ、彼の所說の法を、願はくは我證知せん。我、彼の邊に於て願はくは最大最老の聲聞と成らん」と。汝等比丘、當に知るべし。爾の時の彼の瓦師は、今の此の長老大憍陳如比丘これ也。其の憍陳如は、往昔彼の辟支佛を供養し、是の善根の因緣力を以ての故に、今我が邊に於て最初の說法に證知を得たり。我、復授記せり。諸僧の內に於て、最初に法を知り、我が心に違せず、先に出家せるは、謂はく憍陳如比丘是なり』。

耶輪陀因緣品第三十八の上 [一]

[二]爾の時、波羅㮈國の、城を去ること遠からず、中に一尼拘陀樹（nyagrodha-vṛkṣa）有り。彼の樹は、扶踈として蓊蔚滋茂す。其の城の內外一切の人民、或は諸王子・宰相百官、皆悉く時を以て彼の樹を祭祀し承事し供養す。所有の人來りて、其樹に乞ひ願ふらく、『願はくは我が此の願、皆稱可を得ん。我が所作あるもの。皆當に成ずるを得べし。若し我れ是の如き事を成就ぜん時、我、當に祭祀して恩福を奉報すべし』と。而して彼等の人、或は復先世の業種清淨に、或は福力强くして、彼の因を成就し、或は現報を逐ひて心念に隨ふや、謂ひて言はく、『此の樹、能く我に願を與ふ』。而して彼人、來りて大供養を作して之に報賽す。復別人有り、來りて願を乞ふや、願に隨ひて亦成ず。若し復人有り、彼の樹間に來りて、男女を乞求し、其の人、先業の福德因緣にて、男女を得るや、彼等の人、各心に念言すらく『彼等の樹、能く我に男女を與へたり』と。彼等の人來りて各大いに祭祀して、大供養を作して、彼の樹に報償す。彼の林樹を、一切の人民は、其の爲めに名を作し、號して乞求所願皆得如是神樹と曰へり。

[三]爾の時、彼の城に、一最大巨富長者有り。名づけて善覺（Suprabuddha?）と曰ふ。彼の長者、多く資財有り、勢力自在にして無量の畜牧あり。所謂、象・馬・牛・羊・駱駝・及び驢騾等なり。乏少する

【一】本品、耶輪陀（Yaśoda）の俗姓、出家因緣、並に兩親の歸佛を敍す。耶輪陀は一般に耶舍（Yaśas）として傳へられ、諸佛傳皆これを揭ぐ。Mahāvastu III pp. 401—412 は之に相當し、Yaśoda とせり。
【二】神樹を明す。
【三】耶輪陀の父、神樹に子を授けんことを求む。長者の名を Mvst. には擧げず。

所なく、豐饒の五穀あり。多く奴婢・音聲・伎妾・估客・作人有り。眞珠・琥珀・琉璃・頗梨・硨磲・瑪瑙・白玉・珂貝・金・銀・銅・錢の衆事具足して、[四]騫缺する所無し。其の長の宅は、猶ほ北方毘沙門天大王の宮殿の如くにして、一種も異なるなし。時に彼の長者に、男女有るなし。所有の親眷來往の者、是の如き言を作して謂はく、「仁長者、若し仁自ら仁の家は巨富にして多く勢力有り、略說、乃至、衆事備悉するも、但仁の家中、子息有ることなきを知らば、此の城外に一神樹有り、名づけて乞求所願皆得と曰ふ。若し男子女人有り、來從して彼樹に乞求せば、男女皆得。長者、何故に彼の樹の邊に往詣し、乞求して男女を索めざる。若し能く乞はば、必ず應に男女を生ずること疑はざるべし。仁の家の種族をして、斷絕せしむる勿かれ』。

時に、彼の長者、其の一切諸親族に報じて言はく、『何ぞ此の事有らん。彼の樹木は、無識無情なり。若し能く人に男女の願を與へんこと、是の處有ることなけん。凡そ男女は、皆父母先業の因緣に由る。或は復福力もて男女を得るのみ』と。彼の人言ふ、『我等自身に、各親しく祈請して、並に彼樹邊に男女を得たり。願を得たるを以ての故に、彼樹の所に至り、大供養を作して、彼樹に報償す』。時に彼の長者の諸親眷屬、再過、三過して、慇懃に彼の長者に勸請して言ふ、『汝大長者、信ぜざる可らず。彼樹は實に能く是の如く願を與ふ。彼已に男を得、彼已に女を得たり。長者但去け。彼樹は能く人の心願を與ふ。男を索めば男を得、女を索めば女を得んこと、決定して疑無し』と。

【四】騫。かくる。

巻の第三十五

耶輪陀因緣品第三十八の下

爾の時善覺大富長者、諸親族が、數數慇懃に共に相曉喩し、乃至、第三に苦切、勸諫せるを以て、彼長者、意中に已まず、卽ち家僮を將ゐて、大斧・簸箕【一】・杴鋤【二】・及び諸鍬钁【三】、種種の刀鋸を齎持して、彼の樹所に詣り、旣に彼に到り已り、樹前に立ちて、是の言を作す、『汝樹、當に知るべし、我、他より聞くに、汝は是神樹にて、所求願一切皆得と名づけ、若し人有り、來りて男女を求乞せんに、悉く皆果遂すと。而るに我に一箇の兒息有る無し。心内に願樂するも、稱可せず。今、汝に從ひて乞はん。若し我をして好男を生むを得しめば、我、當に來りて是の如き供養を作して、是の報答を作すべし。必ず汝、我に子を與ふる能はずんば、我、當に此の大斧・鍬钁を將つて、汝樹を斫掘し、根本・枝條、一切悉く却くるまで、終に汝を放して、乃至、馬藺の根鬚の如きをも、留めて殘著せしめざらん。若しは掘りて地に到り、汝の根莖を取りて段段に斫斷し、汝の枝柯を取りて、片片に剉切し、斫截して割り已り、札札曬乾し訖りて、火を持て汝を燒き灰と作さん。灰塵の如くし已りて、或は汝の灰を將つて、急疾なる河に臨み、水に向つて擲げん。或は汝の灰を將つて、猛大風に對し、吹いて四散せしめん』。爾の時、彼の樹に神有りて之に依る。神此の語を聞き、大恐怖を生じ、憂惱して歡ばず。又是の念を作す、『我、實に他に與へて男女を作さず。但人の來るもの、自ら業因有り、自ら福力有りて、男女を得るのみ。而して、彼等の人、謂ひて言はく、此の樹、能く男女を與ふと。旣に願を得已り、然る後來りて此の樹の恩を報ずるなり』。彼の樹神、悲泣流滂して是の如き言を作す、『此の我が生來所居の樹を、彼の長者、子を得ざるを以ての故に、其れ必ず當に我がこの樹を壞毀すべし』。

【一】簸箕。み。
【二】杴。すき。
【三】鍬。すき。钁。大なるくは。

(四)彼の樹神は、帝釋天に恒常に承事す。爾の時彼の神、速疾かに天主帝釋の忉利天宮に往詣し、到り已り、長跪して帝釋天に白して、『前に長者が、兒子を求め乞ひて得ると不との禍福・善惡の語に依つて、是の如き言を作す、大善天王、唯願はくは大天の巧慧方便もて、早く是の如き精勤を作し、速疾かに彼の長者に端正の男を與へ、我が此の樹をして磨滅せしむる勿れ』。爾の時天主帝釋大王、樹神に告げて曰はく、『汝樹神、是の語を作す勿かれ。所以は云何。今、我も亦復世間の人の爲に、定めて男女を與ふる能はず。但諸人輩は、自ら福因有りて、男女を得るのみ。其の理然りと雖も、汝樹神少しく忍耐して看よ。憂惱を生ずる莫かれ。我れ當に彼の長者に、因緣有りや不やを觀察すべし』。時に忉利天に、一天子有り。五衰の相、現はれ、久しからずして、定めて當に世間に墮落すべし。五衰の相とは何ぞや。一には彼の天の頭上の妙花、忽然として萎黃するなり。二には彼の天自身の腋下より汗汁流出するなり。三には彼の天の所著の衣裳・垢膩不淨となる。四には彼の天の身體の威光、自然に變改するなり。五には彼の天、常に居停する所の微妙の寶床を、忽然樂しまずして、東西に移徙するなり。

(五)爾の時天主釋提桓因、彼の天子に語りて、是の如き言を作す、『善いかな、汝天子、若し時を知らば、汝善緣有り、衆の善本を植ゑ、常に放逸ならず、謹愼して罪を畏れ、諸の過患無く、諸非を造らず。又復未だ曾て重惡の業を作さず。直嫉妬を以て、汝今當に此處を退失して、必ず人間の一善處に生るべし』。

爾の時天子、帝釋に白して言さく、『願はくは其處を聞かん』。帝釋報じて言はく、『今、此の下方閻浮提の地に、一大城有り、波羅捺と名づく。彼の城に、一大長者有り、名づけて善覺と曰ふ。彼の長者の家は、大富饒財にして、多く勢力得り。乃至、一切乏少する所無し。而して彼に子無し。汝今發心して波羅捺に住し、彼の爲めに兒と作れ』。

【四】樹神。帝釋天に長者に授子せんことを請ふ。

【五】天人、長者の妻に托胎す。

時に是の天子は、過去世に於て、天子の身を得、諸の善根を植ゑ、生死解脫の因緣を作し、涅槃に面向して、煩惱に背き、諸有を取らず、一切有爲中に生るるを愛せず、而も彼の一生に漏盡を取らんと欲し、聖道を證せんと欲せり。彼の天子、帝釋に語りて言はく『大善天王、我、今居家に處在し、以て世樂を受けんを欲せず。又復護明(Jyotipāla)菩薩大士、久しからずして彼の兜率天より下り、神を降して迦毘羅城釋種姓內に生れん。淨飯王宮、大夫人の邊の、右脇より入胎し、月滿ちて生れ、生れ已りて王位を棄捨して出家し、當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべく、成じ已りて當に無上法輪を轉ずべし。我が意、彼の菩薩の邊に於て、梵行を修行せんと欲す。彼の長者居家、大いに資財珍寶有り、諸勢力多く、乃至、一切種種豐饒なるも、其の彼の家は放逸の處なれば、我が意、彼に向ひて生れんを願はず』。

爾の時天主帝釋大王、彼の天子に語りて是の如き言を作す『汝、但彼の家に生れんことを乞ひ願ひ求めよ。護明菩薩は、久しからずして當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべく、成じ已りて當に無上法輪を轉ずべし。我、彼の時に自ら當に汝が出家の緣を成就し、亦汝が出家の事を佐助すべし』。時に彼の天子、帝釋に報じて言はく『善い哉天王、若し彼の時に於て、王能く是の如く我が發心の因緣を佐助して、成就を得しめなば、當に彼の家に生るべし』。

爾の時天主帝釋大王、彼の尼拘陀樹神に報じて言はく『汝善樹神、若し時を知らば、汝當に速かに彼の長者に報じて知らしめ、之に語りて言ふべし「善い哉、長者、汝の乞ひ願ふ所、久しからずして當に端正の子を生むべし。生れ已りて久しからずして、捨家出家して、當に沙門と作るべし」と』。

爾の時樹神、帝釋の邊より此の語を聞き已り、心大いに歡喜し、踊躍充滿して、自ら勝ふる能はず。速かに彼の大長者の家に往詣し、到り已りて空に在り、身を隱して現はれず、長者に語りて言

はく、『大善長者、汝は、必ず當に智慧端正福德の子を生むべし。但其の生れ已るや、久しからずして、定めて應に捨家出家して、沙門と作るべし』と。

爾の時長者、樹神に報じて言はく、『善い哉天神、但願はくは我生まんことを。我、當に方便もて捨家して沙門と作らしめざるべし』。時に彼の天子、忉利天より墮落下來し、大長者の與に、婦腹に受胎す。既に受胎し已りて、彼の婦卽ち覺り、長者に語りて言はく、『大善長者、應に須らく歡喜すべし。我已に受胎す』。爾の時長者、是の語を聞き已り、卽ち其の婦の爲めに最上將息の法を立て、最上の敷設・最上の莊嚴・最上の供承・最上の飮食・最上の服飾もて、之に供給して、其を玩弄せしめぬ。

爾の時長者、波羅捺の四城門外に於て、衢道陌頭の多人の處所に、無遮會を立て、來り求むる者有れば、食を求むるには食を與へ、飮を須むるには飮を與へ、鬘を欲するには鬘を與へ、香を索むるには香を與へ、或は塗香を須むるには塗香を與へ、牀敷を須むるには卽ち牀敷を與へ、資生を須むる者には悉く具さに之を與ふ。時に、其の家內の所有の財物は、皆、內庫に收め、一切の酒坊、一切の屠舍を、幷に皆除斷す。

六 時に長者の婦、或は九月を滿じ、或は十月を滿じて、其の胎成熟し、一男兒を產む。極大端正にして喜ぶべきこと雙び少し。身體の色は黃にして猶ほ金柱の如く、頭頂は團圓にして猶ほ傘蓋の如く、鼻は鸚鵡の如く、長臂下垂し、支節端直に、諸根悉く具し、肌肉の柔和なる猶ほ生酥摶の如し。彼の子生れ已るや、其の上に、自然に微妙七寶の蓋を化出す。諸世人、見る所の者、皆大唱して言はく、『希有なるかな。昔來未だ曾て覩見せざるところ』と。

七 爾の時長者、彼の童子の爲めに、四乳母を立つ。一は抱持し、二は洗浴し、三は乳を與へ、四は共に戲るるなり。童子の生後、長者は恒に四城門外及び交道の頭に、無遮會を立つること、前に設

【六】耶輸陀誕生。

【七】耶輸陀の生育。

けたるが如し。又復內外の眷屬を集聚し、之に語りて言はく『我、今已に是の如き兒子を生みぬ。汝等名を立てよ』と。其の眷屬等、相共に平量す『此の子、初めて生るるや、上に寶蓋有りて自然に出現したり。是の因緣を以て、名聞流布して一切に遍ねし。是の故に、此の子は應に上傘と名づくべし』。是より後、人相共に稱喚して、耶輸陀（Yaśoda）（耶輸陀を〔隋〕に上傘と言ふ。）と爲す。其の耶輸陀は、父母の邊に於て、唯止一子のみ。父母愛念して、曾て心を離れず。眼に恒に看んと欲し、目前に養育して、其の增長を覩易くし、畜ひ易からしめたり。偈有りて說かく、

『福德の人は疾く增長す　猶ほ良地に果栽を蒔く如し
薄運少祐無相の人は　道頭に諸樹を種うるに似たり』

彼の童子、漸漸に長成して、既に能く行走す。後、家法に依りて諸の技能を敎へ、作業を學ばしむ。所謂、書・算、及び印記を造る、財を出して他に與ふる、外より受け入る、貿易興販する、諸の色繒を染むる、衣服を裁縫する、諸香類を別つ、五穀に識達する、七珍及び諸寶物を了別する、諸の是の如き等、一切皆練りて洞曉せざる無し。工巧辨捷にして、利智聰明に、悉く皆成就して、人の與に等しきもの無し。年大なるに至るに及び、別に停まらしめんを欲す。

爾の時其の父、彼の童子の爲めに、三堂を造立す。一は冬坐に擬し、二は春秋兩時に坐するに擬し、三は夏坐に擬す。冬坐に擬せる堂は、一向に溫煖に、夏坐に擬せるは一向に風涼しく、春秋二時の坐に擬せるは熱からず寒からず、調和して中に處る。其の三堂內の有ゆる器服は、皆これ衆寶の雜成する所。有ゆる飲食は、最美最甘にして心の樂見する所。その諸衣服は、種種に莊嚴し、復衆雜の末香・頭香を以て種種に安置し、端正憙ぶべき諸婇女を立てて、其の宮內に相娛樂せしむ。殿堂の前に、種種の階道を立て、一一の階道に、五百人有りて、五百の寶按を擎げ、日初めて出づる時に即便ち安施し、日沒し已りて後、還擎げて收却す。其の堂の周匝に、五百人有りて、防護守

視す。身體に皆牢固なる鎧甲を著し、手に刀棒を取り、或は鐵輪・三叉戟等を持し、以用つて備ふるに擬す。其の三等の堂、各各是の如し。耶輸陀童子の、忽然捨棄出家せんを畏れ、其の堂の內外の門戶關鑰、皆悉く牢固にして、彼の諸門を開閉するの聲、半由旬に聞えぬ。

[八]時に耶輸陀、彼の殿堂に在り、具足して五欲の快樂を受け、逍遙嬉戲す。時に世尊、波羅捺に在し、初めて無上法輪を轉じたまへる後、帝釋天王、天上より下り、耶輸陀の宮殿の中に至り、到り已りて耶輸陀を發覺して言はく、『仁耶輸陀、仁今時至る。必ず應に久しからで捨家し出家すべし』。時に耶輸陀、帝釋天の是の如き言を聞き已り、嘿然として受く。既に嘿して受け已りて、天曉の時、駟馬車を索めて、園中に往き善地を觀看せんと欲す。

爾の時世尊、晨朝時に、著衣持鉢して、安庠として波羅捺城に入り、食を乞はんと欲して、即ち長老阿奢踰時（Aśvajit）を以て、用つて侍者と爲したまふ。其の耶輸陀、遙かに如來の、前に向ひて來りたまふを見るに、威儀端正・行歩沈審にして、身體具足し、諸相の莊嚴なること、猶ほ虚空の星宿を滿すが如し。見已りて、心に歡喜清淨を生じ、內の歡喜清淨の心を以て、車より下りて佛足を頂禮し、圍遶すること三匝、遶り已りて還車中に上りて行く。其の耶輸陀、如來を見まつりて、廻還して未だ久しからず、時に佛、彼の清淨の心を知りて、即便ち微笑して光明を放ちたまふ。

爾の時長老阿奢踰時、衣を整へて立ち、右肩を偏袒ぎ、右膝を地に著け、十指掌を合して、如來に向ひ、佛に白して言さく、『希有なるかな、世尊、何の因緣の故に、微笑して光を放ちたまへる』。爾の時佛、阿奢踰時に告げて、是の如き言を作したまふ、『汝比丘、此の耶輸陀童子を見たりや以不や。其の我が邊に至り、我に頂禮し、三匝して我を遶り、還退して車に上れるを』。阿奢踰時、即ち佛に白して言さく、『唯然り、世尊、我向に已に見たり』。佛、復告げて言はく、『汝、今諦かに聽け。此の耶輸陀大善男子は、今夜決定して捨家し出家して、我が邊に至り、沙門と作らんを乞ひ、

【八】耶輸陀、出家の機緣萌す。

沙門と作り已るや、久しからずして阿羅漢果を得ん』。

時に耶輸陀、園苑の內に至り、善地を觀つつ、次第に經行す。時に天帝釋、神通力を以て、卽ち化して一婦女の死屍と作る。其の身膖脹して、將に爛壞せんと欲し、蠅蛆の雜蟲、處處を唼食す。時に耶輸陀、彼の死屍の是の如き臭爛を見、見已りて心に汚穢の想を生じ、自ら念じて言はく、『この臭爛の身に、何の樂しむべきありてか、著心を生じて、自ら放逸せん、復この中に於て樂想を生ぜん。今已に膿爛す』。卽ち口に唱へて言はく、『我、今臭穢の樂を樂まず。還りて家に到らんと欲す』と。彼の童子、苑內より出で、還りて已が堂に入る。彼、初夜に在りて、眠睡せんと欲す。時に天帝釋、神通力を以て、諸の婇女をして悉く皆著睡せしむ。而して其の家內の處處の然燈は、猶ほ晝の大いさの如くにて、堂堂を盡く照らして、明を斷ぜざらしむ。

爾の時世尊、彼の夜に當りて、是の如く念を作したまふ『今夜の中に、其の耶輸陀大善男子は、決定して勇猛に捨家し出家して、沙門と作らんを求めん』と。是の如く念じ已りて、一河に至りたまふ。波羅那（Varaṇā）（〔隋〕に斷除と言ふ。）と名く。彼の岸に渡り至り、自ら草を取りて鋪き、旣に草を鋪き已り、結跏趺坐して、一夜を眠らんと欲したまふ。心に其の耶輸陀善男子を慈愍したまへるが爲めの故なり。

九 時に耶輸陀、正しく睡眠に著けるも、自然に忽ち覺めて、堂內を見るに、處處に晝許の燈明を安置し、諸の婇女を見るに、悉く睡眠に著く。或は婇女有り、頸に小鼓を懸け、或は婇女有り、琵琶を挾み、或は婇女有り、五絃を挾み、或は婇女有り、箜篌を抱持し、或は婇女有り、臂を以て鼓を抱へ、或は婇女有り、手に簫笛の諸音聲等を執り、或は婇女有り、半身を露はし、喘息して眠り、或は婇女有り、頭髮髼散して、傾側して眠り、或は婇女有り、涕唾不淨を流して眠り、或は婇女有り、口齒相齘み、聲を作して睡り、或は婇女有り、面を覆ひて眠り、或は婇女有り、面を仰いで

【九】耶輸陀、出家を決行す。

眠る。其の耶輸陀、堂内の、諸婇女の眠の、是の如きが地に滿てるを見るに、猶ほ死屍の若くにて一種も異なる無し。見已りて厭離の想を生じ、大患の想を生じ、心中に涅槃を求むるの想を樂欲し、心に向涅槃の想を建立せんと欲して、此の念を作す。謂はく『此は大いにこれ恐怖の處なり。咄、此は大いにこれ擾亂不安怨嫌の處なり』と。時に耶輸陀、是の如く見已りて、其の臥床より、忽然として起ち、脚に衆寶の成す所、其の價値を論ずれば二百千に足る革屣を著け、著け已りて意に念じ、堂より下らんと欲し、堂の基邊に至るに、階道無し。時に天帝釋、卽ち階道を將つて、其の前に立著し、身より光明を放ち、此の光明、普ねく其の家を照らす。

時に耶輸陀、此の明を見已りて、堂より出で、漸く父宮の諸婇女の邊に至り、到り已りて父の臥せる所の堂内を見るに、好香油を用ひて、以て燈明と爲し、其の炷は臂の如く、地及び柱を廻りて、處處に皆安ず。諸婇女を見るに、皆睡眠に著き、樂器を懸抱し、乃至、上の如く猶ほ死人の屍陀林(Śita-vana, 寒林)に在る如し。見已りて厭離の想を生じ、乃至、極大の恐怖を生ず。時に耶輸陀、父堂より出でて、漸く外門に至り、外門の關を見るに、鑰鏁甚だ牢くして、門を開く時、其の聲遠く徹して半由旬に聞ゆ。時に天帝釋、速かに疾く門を開き、彼の門を隱沒して、聲を作さしめず。耶輸陀出家の時、諸の障礙有るを畏れてなり。時に耶輸陀、家より出で已りて、大城門に至る。其の門を、跋陀羅婆提(Bhadravatī)(〔隋〕に賢主と言ふ。)と名づく。旣に彼の賢主城門に到るに、其の門の開閉に、門關甚だ牢くして、聲音遠く聞ゆること、亦半由旬なり。時に天帝釋、一念の頃に、彼の門を開き、又彼の聲を隱して、他をして聞かしめず。心に是の如く念ず『人有りて、耶輸陀出家の因緣を障へしむる勿らん』と。時に耶輸陀、城門より出でて、漸漸にして波羅那河に至る。爾の時彼の河水、忽ち暴漲し、彌岸平滿し、一切の諸鳥、平頭にして飲む。時に天帝釋、卽便ち彼の光明を隱滅す。時に耶輸陀、此の河岸に至り、卽便ち停住して、口中に唱へて謂はく『これ大患なり。咄、

大恐怖なり』。爾の時世尊、河の彼岸に在して、露地を經行したまふ。

爾の時世尊、彼の耶輸陀を憐愍したまへる爲めの故に、身より光明を放ち、金色の臂を以て、手を展べて、耶輸陀の邊に向け、是の如き言を作したまふ、『善來、善來、汝耶輸陀、此處には患無く此處には畏無く、此處は安樂なり、此處は自在なり』。而して偈有りて說かく。

『如來既に彼の心を見已り　　口に是の如き言を呼唱したまふ
汝來れ汝來れ耶輸陀　　此の無畏涅槃の路を取れ』
世尊は所として見ざる無し　　世尊は所として知らざる無し
是の故に能く彼の心を知る　　故に言ふ世尊は諸明を具したまふと』

一〇 時に耶輸陀、世尊の是の如き語を聞き已り、即ち一切の心の諸憂苦を免れ、即ち心の定を得たり。譬へば人有りて、後春の行路に、諸熱惱に疲極し、飢渴せられて、忽ち一池に値ひ、其の水涼冷、其の內に入りて、澡洗飲水し、一切の熱惱諸苦を除滅するが如し。是の如く、是の如し。其の耶輸陀大善男子、佛の是の如き安慰の言を聞き已り、即ち一切の諸の心の憂惱を滅し、心に寂定を得たり。時に耶輸陀大善男子、心に歡喜を生じて、踊躍無量、其の體に遍滿して、能く自ら勝ふる能はず。彼の衆寶所成の革屣の直二百千なるを脫し、棄て已りて步みて波羅那河に入る。譬へば人有りて、涕唾を捨てゝ、復心に念なく、即ち背きて行くが如し。是の如く、是の如し。其の耶輸陀が、革屣を棄捨するも、亦復是の如し。步して河に入りて渡るに、爾の時彼の河水、故のまゝに淺きを爲す。時に耶輸陀、善く河を渡り已りて、彼岸に至り、世尊の所に到る。而して耶輸陀、遙かに世尊を見たてまつるに、威儀整頓して、容止觀るべし。諸根寂定に心意正定にして、乃至、身は三十二相の莊嚴する所なるを以て、猶ほ虛空に星宿の遍滿するが如し。見已りて、復清淨歡喜を生じ、歡喜を生じ已りて、漸く佛所に至り、佛所に到り已りて佛足を頂禮し、却きて一面に住す。爾の時

【一〇】耶輸陀、佛弟子となりて直に解悟す。

世尊、耶輸陀の一面に却き已れるを見て、卽便ち其の爲めに次第して說法したまふ。所謂、布施の行、持戒の行を說き、復生天因緣の行を說きて、これに尙ほ五欲の罪患あり、諸漏未だ盡きず、尙ほ煩惱有りとて、出家淸淨の法を讃歎したまふ。而して世尊は、耶輸陀の、心に已に歡喜を生じ、已に希有を生じ、心に柔輭を得、心に無礙を得て、法を受くべきに堪ふるを知りたまふ。爾の時世尊、佛の所有の、他をして喜ばしむる言、得道せしむる言を以て、向ひて說法したまふ。所謂、苦集滅道の四諦なり。耶輸陀に向ひて、是の如く說きたまふ時、時に耶輸陀、卽ち彼の坐に於て、塵苦を厭離し、煩惱界を盡し、煩惱を離れ已りて、諸法中に於て、淨法眼を得、所有の結惑を、皆滅除し盡して、如實に證知す。譬へば淨衣の、諸の黑纒無きが、色に入りて卽ち受くるが如し。是の如く、是の如し。其の耶輸陀善男子の心は、卽ち彼の坐に於て、塵垢を遠離し、諸煩惱を盡し、乃至、如實に悉皆證知す。

二 時に耶輸陀善男子の婦、睡眠旣に覺め、其の床上に、忽然として夫耶輸陀を見ず。彼は心に耶輸陀を憶念するが故に、兼ねて復渴仰し、思遲戀慕して、卽便ち耶輸陀の母の邊に往詣し、到り已りて白して言はく、『聖母、今聖母の愛子耶輸陀を知るや不や。新婦は、昨夜、眠より覺めて求覓むるに、忽爾として見えず。知らず何に去れるかを』。爾の時聖母、是の語を聞き已り、耶輸陀を憐愍愛念するが故に、啼涙懊惱し、急疾かに耶輸陀の父大長者の邊に往詣し、到り已りて、卽ち大長者に白して言はく、『長者、今仁の愛する所の子耶輸陀を知るや不や』と。一一皆新婦の所說の如くす。

爾の時長者、其の宮中より耶輸陀の失せたるを聞き、子耶輸陀を憶念するを以ての故に、使を遣はし、速かに智慧人の邊、或は算師の邊、博戲人の邊、或は婬女の家に往かしめて、之に告げて言はく、『汝等人輩、宜しく急疾かに、是の如き處に往きて、我が子耶輸陀を求覓め來るべし』と。

爾の時使者、波羅捺城の四衢道に向ひ、鈴を振りて唱へ、是の如く告げて言ふ、『若し當に人あり

【二】 耶輸陀の一族、その出家を知りて驚き、探し求めて却つて遂に佛の信者となる。

て、能く我に向ひて、耶輸陀を見、耶輸陀所在の處、所行の處を知ると道ひて、我をして見るを得しめ、我をして聞くを得しむべくんば、我彼の人に百千價の物を乞ふべし』。即ち後夜に、城門を開かしめ、使をして疾く馳せしめ、遍ねく告げて言はく、『汝等、城外に速疾かに往きて、我が耶輸陀を求めよ』と。

爾の時長者耶輸陀の父、彼の夜天の曉けんと欲する時に當り、愁憂悵快し、啼哭泣涙し、急疾かに往きて跋陀羅提城門の邊に向ひ、到り已りて即ち出で、漸漸にして、行きて其の耶輸陀が革屣の蹤跡を見、見已りて革屣の跡を尋ね逐ひて行き、其の跡を盡くし已りて、河岸の上に於て、二百千價直の革屣を見て、少かに本心を得、即ち是の念を作す、『我が所愛の子耶輸陀は、今應に死せざるべし』と。大喘息を出だし、心口に念言すらく、『若し其の身死せば、此の革屣は、久しく應に有ること無かるべし』と。時に彼の長者、革屣を見已り、觸れず縁らず、棄捨して去る。譬へば人有り、他の涕唾を見て、觀ぜず、念ぜず、棄捨して過ぐるが如し、是の如く、是の如し。其の耶輸陀善男子の父、彼の七寶所成の一雙の革屣を見、棄捨して過ぎ、即便ち彼の波羅那河を渡り、其の子を尋ね求む。

爾の時世尊、河邊に遙かに其の耶輸陀善男子の父の佛に向ひて來るを見たまひ、世尊、見已りて是の如き念をなしたまふ『此の耶輸陀善男子の父、既に來りて子を求む。愛念を以ての故に、或は能く倉率に好惡を避けず、耶輸陀善男子の身を抱かん。我れ今變化神通を出すべし。若し神通變化の事を作さば、耶輸陀善男子の父、此處に在りて、唯眼を以て耶輸陀善男子の面を見るを得、即便ち停住せん、相觸れしむる勿れ』と。

時に耶輸陀善男子の父、遙かに世尊を見まつるに、威儀齊しく整ひ、端正喜ぶべし、乃至、譬へば虛空中の星の、日月を莊嚴するが如し。心に歡喜を生じ、歡喜心を以て、佛の所に往詣し、佛所

に到り已りて、即ち佛に白して言さく、『善い哉、善い哉、大德沙門、願し我が子耶輸陀の、此に來るを見たまへりや不や』。

爾の時佛、彼の長者に告げて言まはく、『大富長者、汝若し時を知らば、且少しく安坐せよ。久しからずして當に耶輸陀を見るを得べし』。時に彼の長者、是の如き念を作す、『此の大沙門は、應に妄語せざるべし。言ふ所應に實なるべし』。此の語を聞き已り、心に歡喜を生じ、踊躍充遍して、自ら勝ふる能はず、佛足を頂禮し、却いて一面に住し已るや、爾の時世尊、即ち長者の爲めに、次第して方便もて、應の如く說法したまふ。所謂檀を行ずることなり。及び結使の法、悉く皆滅し已つて如實に證知すること、譬へば淨衣の染色を受け易きが如し。是の如く、是の如し。時に彼の長者、即ち彼の坐に於て塵垢を遠離し、如實に證知して、諸法中に於て、[二]法眼淨を得、煩惱の海を渡り、諸の障礙を越えて、復疑心なく、無畏所に到る。他より聞かずして、世尊の邊に於て、法敎を聞くを得、佛歸依を受け、法歸依を受け、僧歸依を受け、并びに五戒を受けたり。爾の時人間に、彼の大長者は、最も初首に在りて、優婆塞と爲りぬ。人身の中、[三]三白を以て三歸依を成じたるは、謂はく耶輸陀善男子の父也。其の耶輸陀善男子の父、說法の時に於て、是の如く證見し、是の如く觀行して、[四]道跡を得、見漏皆盡きて、一切法中に、心に解脫を得たり。

爾の時世尊、是の如き念を作したまふ、『其の耶輸陀善男子の父は、法を聞きて見知し、如實に漏盡し、心に解脫を得たり。應に家に在りて諸の五欲を受けんこと、昔の在家の如くならざるべし。我れ今還りて、神通を攝すべし』。爾の時世尊、即ち神通を攝したまふ。神通を攝し已りて、耶輸陀の父、彼の坐に於て、其の子を見るを得、見已りて耶輸陀に告げて言はく、『子耶輸陀、汝の母は汝を憶ひて大苦惱を受く。汝の爲めの故に哭し、汝の爲めの故に悲しむ。復、汝の爲めに命終を取る莫からんや。汝、彼に至り、彼に命を與ふべし』と。是の言を作し已るや、その耶輸陀善男子、即

【二】法眼淨は、聲聞四果中の初果にして、四諦の理を見るを以ていふ。

【三】三白とは、歸依佛・歸依法・歸依僧の三を、三たび告白するをいふ。

【四】道跡、初果をいふ、道の跡を見るを以てなり。

ち如來の面を觀まつる。爾の時世尊、卽便ち彼の耶輸陀の父に告げて、是の如き言を作したまふ、『汝大長者、意に於て云何。若し學人有りて、已に諸智を學び、已に學びて法を見、彼れ法を說く時、證知し、漏盡し、心に解脫を得たらんに、彼若し廻心して本家に入らば、能く更に復五欲を受けんや以不や』。長者報じて言さく、『不とよ、世尊』と。

爾の時世尊、長者に告げて言はく、『其の耶輸陀善男子は、今已に智見を學び、諸法を證せること、汝の如くにして異ならず。今耶輸陀は、說法を聞きし時、道跡を證得し、諸漏已に盡き、心淨く解脫したり』。佛、長者に告げたまはく、『此の耶輸陀善男子は、今應に還歸して、家内に住し、五欲の事を受けんこと、昔家に在りしが如くなるべからず』と。爾の時長者、卽ち佛に白して言さく、『善い哉、世尊、耶輸陀は、今人間に生れて、善く大利を得、善く世間に生れて、諸漏滅盡し、心に解脫を得たり』。

爾の時世尊、耶輸陀善男子の身を見たまふに、諸瓔珞を以て、體を莊嚴す。卽ち偈を說きて言はく、

『諸瓔珞を以て身を莊嚴するも　其心を寂定にして法を證し
諸根を調伏して悉く淸淨に　諸衆生に於て大悲を起す』
若し能く是の如く諦實に行ぜば　是を則ち名づけて眞梵行と爲し
亦沙門釋種の子と名づく　是亦名づけて比丘僧と名づく』

時に耶輸陀善男子の父、卽ち佛に白して言さく、『善い哉、世尊、願はくは我が飲食を布施せんを請ふを受けたまへ。及び耶輸陀善男子等も』。爾の時世尊、長者の邊に於て、嘿然として請を受けたまふ。長者を憐愍せんと欲したまへるが爲めの故に。

爾の時長者、旣に世尊の嘿然受請したまへるを見、坐より起ちて佛足を頂禮し、圍遶すること三

匝して、佛を辭して去る。是の時、長者去りて未だ久しからざる間に、その耶輸陀大善男子、坐より起ちて佛足を頂禮し、胡跪合掌して、佛に白して言さく、『善い哉、世尊、唯願はくは世尊、我に出家を與へ、具足戒を受けしめたまへ』。

爾の時佛、耶輸陀に告げて言はく、『善來比丘、汝、今我が所說の法中に於て、梵行を行じて、正しく諸漏を盡くせ』。佛、是を說き已りたまふや、時に長老耶輸陀の身、卽ち出家を成じ、具足戒を得て、大沙門と爲りぬ。是の時に當り、此の世間中に、七阿羅漢有り。一は是世尊、及び五比丘と耶輸陀等なり。

爾の時世尊、晨朝時に於て、著衣持鉢し、耶輸陀に命じて、用つて侍者と爲し、其の父の家に向ひたまひ、彼の家に到り已り、座を鋪きて坐したまふ。此の時、長老耶輸陀の母、幷に及び長老耶輸陀の婦、來りて佛の邊に向ひ、佛の所に到り已り、佛足を頂禮し、却いて一面に坐す。一面に却き已るや、世尊は、次第して說法を爲したまふ。所謂、是の如く布施の行を說き、乃至、淸淨なり。如來、悉く彼等一切が、心に歡喜を生じ、淸淨柔輭にして、心に障礙無きを知りたまふ。

爾の時世尊、あらゆる諸佛の、歡喜したまふ法、所謂、苦諦・及び苦集諦・苦滅諦・得道諦を、世尊、彼が爲めに、是の法を說きたまへる時、彼等、坐に於て諸塵を遠離し、淸淨智を得、煩惱界盡き、諸法中に於て、淨法眼を得、所有の垢法、諸の可滅の法を、一切知り已り、皆悉く滅盡し、如實に證知しぬ。譬へば淨衣の垢膩有ること無きが、染入する所に隨つて、其の色を受くるが如し。是の如く、是の如く、彼等眷屬は、彼の座に坐して、塵垢を遠離し、所有の垢法を、皆悉く滅し已り、如實に證知しぬ。彼等婦人は、既に諸法を見て證を得、深く入りて諸法の邊に到り、煩惱の壙を渡り、無礙畏を得たり。他人の說法より聽證せず、世尊の敎中に、知見を得已りて、佛と法とに歸依し、及び僧に歸依し、卽ち五戒を受けぬ。

爾の時世間に、是の日に當りて、最初人中にて、三歸受戒し、先づ成じて優婆夷(Upāsikā)と爲るを得たるは、所謂、長老耶輸陀の母、幷に及び長老耶輸陀の婦、所有一切の諸眷屬等なり。

爾の時善覺大富長者、旣に世尊の、其の眷屬の爲に、如應に說法したまふを聞き、聞き已りて歡喜し、卽ち起ちて食を辦じ、長者及び妻、幷に其の新婦は、自ら手に好種種の美食を將ちて、佛及び耶輸陀を供養し奉る。所謂、舐味咋嗽噂啜なり。其の施す所の食、悉く皆充足して、恣意に飽食しぬ。

爾の時長老耶輸陀の父善覺長者、婦及び新婦は、佛の食し訖りて、衣を收め鉢を攝し、手足を洗ひ、是の如く淸淨に安坐し竟るを見已るや、人別に各自一小鉢を將つて、次第に相隨ひ、來りて佛前に向ひ、大小に依りて坐す。爾の時世尊、旣に善覺長者の眷屬の、如法にして來り、前に坐し已るを見たまひ、如來慈愍して、度脫して苦惱を離れしめんと欲したまへるが爲に、是の故に、其の爲めに、如應に說法したまふ。彼れは法を聞き已りて、心に歡喜を生じ、信心熾盛にして、威德增上す。爾の時、彼等旣に法を聽き已り、乃至、一切の心に、歡喜を生ず。是の如く知り已るや、爾の時世尊、卽ち坐より起ちたまひ、其の耶輸陀に、卽ち佛に隨ひて行きぬ。

卷の第三十六

耶輸陀宿緣品第三十九〔一〕

〔二〕爾の時、天竺波羅捺城に、四の居士大富長者有り、最も殊勝なる善男子輩たり。何等をか四と爲す。所謂、第一を毘摩羅(Vimala)(〔隋〕に無垢と言ふ。)と名づけ、其の第二は修婆睺(Subāhu)(〔隋〕に善臂と言ふ。)と名づけ、第三を名づけて富蘭那迦(Pūrṇaka)(〔隋〕に滿足と言ふ。)と爲し、第四を名づけて伽婆跋帝(Gavāmpati)(〔隋〕に牛主と言ふ。)と爲す。彼等は、他より、耶輸陀大善男子の、沙門の邊に往きて、梵行を修行するを聞き、聞き已りて是の如き思惟を作す、『希有なり、斯の事や。彼の大沙門の法行の中、梵行は當に牢固不動なるべく、當に他より勝るべし。其の法會集は、應に必ず第一なるべし。所以は何ぞ。耶輸陀大善男子が、沙門の邊に至り、梵行を受行して、即ち出家するを得たればなり。我等も、今は亦應に彼の大沙門の邊に至りて、梵行を求修すべし』。彼等、是の如く共に平量し已り、相將ゐて耶輸陀の邊に往詣し、到り已りて、即ち其の耶輸陀と對面し、美辭もて善巧に談說して、各心內を話し、意憙の語言もて、敬心に問訊し、相慰喩し已りて、一面に坐し、一面に坐し已りて、彼の四長者、即便ち共に耶輸陀に白して言はく『尊者耶輸陀、此の梵行は必ず應に牢固なるべく、決定して他に勝れん。此の如き法集は、敬す可く、愛すべし。尊の、今大沙門の邊に於て、梵行を受行せる如く、我等も、今は亦大沙門の邊に於て、梵行を修行することを欲求す』。爾の時長老耶輸陀許ひて、即便ち彼の波羅捺城の四大長者と共に、佛の所に往詣し、佛の所に到り已りて、佛足を頂禮し、佛足を禮し已りて、却いて一面に坐す。時に耶輸陀、即ち佛に白して言さく『大覺世尊、此の四長者は、本の居家に在りて、各朋友たり。最も殊勝の善男子輩たり。所謂、無垢・善臂・滿足并に牛主等、今日、故に來りて世尊に歸依す。善い哉、世尊、唯願はくば、此の四大長者の爲めに、

〔一〕本品、耶輸陀の四善友、五十朋友、五百商友の出家因緣、並に耶輸陀の本生を明す。Mahāvastu には本生以外を缺けり。

〔二〕毘摩羅等の四善友、佛弟子となる。

如應に說法し、教誨示導したまへ』。

爾の時世尊、大慈悲を發し、憐愍を起したまへるが故に、卽ち彼等四大長者の爲めに、次第せる方便もて微妙の法を說きたまふ。所謂、布施・持戒・忍辱、乃至、爲めに種種の法要を說きたまふ。彼等長者、世尊の是の如き法相を說きたまへるを聞き、卽ち坐中に於て、塵垢を厭離し、乃至、所有の一切集法を、皆、悉く知るを得、及び滅相の法をも、亦如實に知りぬ。譬へば淨衣の垢膩有る無きが、汁中に入るや、正に其の色を受くるが如く、是の如く、是の如し。彼の四長者は、卽ち坐處に於て、乃至、一切の結惑、集滅相の法を知るを得、如實に證知す。彼の四長者、悉く各是の如く諸法の相を見、諸法の相を得、法相を證し、法相に入り、煩惱の磧を度り、心に障礙無く、諸の疑網を越え、結使を除滅し、無畏處を得、他に隨ひて知らず、佛法に依りて行ぜり。坐より起ちて、佛足を頂禮し、佛前に在りて胡跪合掌し、佛に白して言さく、『大覺世尊、我等は、今佛世尊の邊に從つて出家せんことを乞求す。佛の教法に依りて、具足戒を受けん』。

爾の時世尊、卽ち彼等四長者に告げて言はく、『汝輩比丘、淸淨善來、我が法中に入りて、梵行を行ぜよ、諸苦を滅せんが故に』。是の時世尊、此の語を作し已りたまふや、彼の波羅捺の四大長者、頭髮自ら落ち、髭鬚は猶ほ七日剃來の如く、身體に自然に三衣を披服し、手に鉢器を擎げ、彼の四長者、卽ち出家を成じて、具足戒を受けぬ。時に四長者、出家して未だ久しからずして、受具足戒の始より一處に在り、諸緣務を捨てゝ、身口を謹愼し、敢て放逸ならずして勤劬精進し、空閑處に在りて、善行を行じ、獨坐し獨起きて、曾て停息せず。頭然を救ふ如くにて、蘭若內に住す。爾の時、彼等諸善男子は、道を求めん爲めの故に、正信出家し、久しからずして卽ち無上梵行を得、自ら法相を見、自ら諸通を證し、無畏にして行じ、口に卽ち唱へて言はく、『已に生死を斷じ、梵行の報を得、所作已に辦じ、來生更に後世の有を受けず、自知自證す』と。彼の四長者、皆悉く一時に阿羅

漢を成じ、心善く解脫す。彼の時、世間に一十一阿羅漢を成就す。第一は世尊、二は五比丘、三は耶輸陀、及び其在家最勝の朋友なる四大長者善男子是なり。

〔三〕爾の時、長老耶輸陀の、身昔家に在るや、諸國より來集せる五十の朋友有り。或は小來、共に相長養せる善男子輩有り。耶輸陀善男子の、大沙門の邊に往きて、梵行を行ぜるを聞き、聞き已りて是の如く共に相謂ひて言はく『彼の梵行は必ず當に精勝に、法集は牢强なるべし。耶輸陀善男子は、彼の大沙門に事へて梵行を行ず。我等、今亦彼の大沙門の邊に至り、梵行を求行す可し』と。彼等、是の如く共に相平量し已り、相將ゐて、卽ち耶輸陀の所に到り、到り已りて卽ち耶輸陀の面に對し相共に言說し、文辭巧麗に、種種に談論し、各相問訊し、各相虔恭し、是の如くし訖已りて、却いて一面に住す。一面に住し已るや、爾の時、彼等五十の友人は、各これ別國の最大長者にして、往昔家に在りて、親善なる朋舊なり。卽便ち共に耶輸陀に白して言はく『仁、耶輸陀、今此の梵行は、必ず應にこれ好く餘人に勝るべし。長老は大沙門の邊に在りて梵行を行ず。我等の意樂も、亦仁と同じ。彼の大沙門の邊に往詣して、梵行を行ぜんと欲す』と。

時に耶輸陀、卽便ち、彼の五十の、在家往昔の善友と共に、佛所に詣り、佛所に到り已りて、佛足を頂禮し、佛足を禮し已りて、却いて一面に坐す。其の耶輸陀、卽ち佛に白して言さく、『大善世尊、我の昔家に在るや、此の五十の朋友知識有り。或は前後に在るも、一切皆悉くこれ善男子にして、其の意、幷に樂みて如來に歸依す。唯願はくは世尊、大慈憐愍し、爲めに法要を說きて、敎詔示導したまへ』と。

爾の時世尊、卽ち彼等の爲めに、隨順して說法したまふ。其の彼等諸長者輩、佛の所說を聞き、乃至、如實に一切悉く知り、彼等長老、悉く漏盡諸阿羅漢を成じ、心善く解脫す。時に、世間に於て合して六十一阿羅漢を成ず。謂はく、佛世尊と、及び五比丘と、幷に耶輸陀と、其の耶輸陀の波羅捺城

【三】五十朋友、佛弟子となる。

に四善友有り、無垢・善臂・滿足・牛主なり。其の耶輸陀の在家の朋友なる諸大長者に五十人有り、并にこれ別國より相召集し來れる、或は前或は後の善男子等なり。

【四】爾の時世尊、波羅捺鹿苑中に於て、この人を度し已り、更に別に、他方に向ひて行かんと欲し、卽ち長老耶輸陀に告げて言はく『汝耶輸陀、還つて此に住し、我に隨逐する莫かれ。所以は何ぞ。汝耶輸陀は、小來未だ曾て身體を苦しめず、又復汝の身の皮膚は柔輭にして、麤衣を串き、及以び惡食せざればなり。汝は此に在つて住し、汝の父母の須ふる所の供養を受け、勝衣食に隨ひて自ら恣に受けよ。汝の父母は能く汝に供養せん』。

時に耶輸陀、教誨を稟承し、恭敬して立ち、卽ち佛に白して言さく『世尊の勑の如くして、我敢て違せじ』。耶輸陀、佛の勑を聞き已り、波羅捺に住し、一定して移らず。

【五】爾の時、天竺波羅捺城に、復五百の商人長者有り、與に耶輸陀の、昔家に在りし時、亦朋友たり。海に入りて寶を採り、一時、廻還して家に至り、各各相共に耶輸陀の處を借問す。彼等問ひ已り、耶輸陀の、今日彼の大沙門の邊に在りて、梵行を行ずるを聞き、彼等聞き已りて、各相謂ひて言はく『彼の梵行は、定めて應に上妙の教法にして他に勝るべし。若し是の如くならずんば、その耶輸陀善男子は、今云何ぞ乃ち能く廻心して、彼の大沙門の邊に向ひ、梵行を行ぜん。我等も今亦共に大沙門の邊に往詣し、梵行を行ずることを求む可し』と。

爾の時、彼等五百の商人の諸大長者は、結集して相共に、長老耶輸陀の邊に詣向し、到り已りて、共に耶輸陀に白して言はく『仁、耶輸陀、久しく相見ず。我等海に入り、今始めて廻還して、仁の出家を聞き、故に來りて諮り白ふ。安隱にして惱無く、快樂なりや不や』と。是の如き種種の善語美語もて、慰勞して相問ふ。彼此訖了りて、各起ちて恭敬し、却いて一面に住す。

爾の時五百の商人長者、長老耶輸陀に白して言はく『仁、耶輸陀、今こゝは勝るるや』。時に耶輸

【四】耶輸陀、佛命に依り永く波羅捺に住す。

【五】五百眷屬出家して耶輸陀の弟子となる。

陀、卽ち彼に報じて言はく、『是の如く、是の如し。今、こゝは最勝なり』。爾の時彼の商五百の長者、卽ち長老耶輸陀の邊に於て、偕捨出家して、具戒を受けんことを求め、多年月を經て、道を得る能はず。

爾の時世尊、他國を遊歷し、廻還して彼の舍婆提城(Srāvastī)に至り、祇陀林精舍 (Jetavana-vihāra)の內に住したまふ時、その長老耶輸陀、身多時を經、夏【六】を罷め訖りて、卽ち五百の諸比丘衆と共に、相隨ひて去る。佛の祇陀精舍に在すを聞き、彼に往詣して、如來を見んと欲するが故に、彼の客比丘と、祇陀園に至る。是の時彼處の主人比丘、或は鉢を取る者、或は褋【七】を衣る者、房中に內る時、大高聲を起して、喧閙雜亂す。

爾の時世尊、知りて故に長老阿難に問ひて、是の如き言を作したまふ、『長老阿難、此の中これ何ぞ高大の音聲にて、喧亂すること、乃ち爾るか』。是の時阿難、卽ち佛に白して言さく、『如來世尊、今者外許に別に五百の客比丘の來る有り。長老耶輸陀を最其の首と爲して、此處に至る。我等既に客比丘の來るを見、而して此の舊居の諸比丘輩、相共に慰喩して、安和を問訊し、及び衣鉢を受けて、房に內る時、是の高聲を起す』。

爾の時世尊、阿難に告げて言はく、『長老阿難、汝若し時を知らば、我が爲めに彼の是の如き等の客諸比丘を喚び來れ』と。爾の時阿難、世尊の勅を聞き、卽便ち彼の客比丘の邊に至り、諸の一切の客比丘に語りて言はく、『汝長老輩、世尊は、今汝等一切の諸客比丘を喚びたまふ』と。時に諸比丘、既に阿難の是の如き言を聞き已り、阿難に語りて言はく、『長老の意の如くにして、我敢て違せじ』と。爾の時五百の諸客比丘は、阿難の是の如き教を聞受し已り、佛の邊に往詣し、佛所に至り已りて、佛足を頂禮し、既に禮拜し已りて、却いて一面に住し、諸客比丘、一面に住し已りて、嘿然として立つ。爾の時世尊、卽ち彼の諸客比丘に告げて言はく、『汝等比丘、何の故に是の如く

【六】夏とは、雨期の三月間安坐行道するをいふ。

【七】褋。裳の幅を削りたるもの。

大高聲を作すこと、猶ほ世人の諍訟闘を起し、呼呼訶訶（huhu haha?）する如きか。其の聲猶ほ釣魚の師の、各各相競ひ、諸魚を趂逐して、各、相唱喚する如し。汝等比丘、各本處に還り、我と共に此の中に居住するを得されん。我、汝等を趂ふ』と。是の時彼等五百の新入客比丘は、佛の是の如き言を聞き、各佛に白して言さく、『世尊の勅の如くしまつらん』と。彼等五百の諸客比丘、佛の是の言を聞き、佛足を頂禮し、佛を遶ぐる三匝して、佛を辭して去り、衣鉢を執持し、精舍より出で、一河の邊に至る。其の河を名けて婆羅瞿摩帝（〔隋〕に秀媚主と言ふ。）と曰ふ。彼の秀媚河岸の邊に在りて住し、晝夜精勤して、休息有るなく、初夜も後夜も、臥さず眠らず、猛勵に修道し、助道法證を志願規求して、是の故に心を用ひ、彼等の心を用ふること、休まず息まず、久しからざる間に、爲す所の事成す。彼の善男子、既に各正信もて、捨家出家し、能く彼の無上梵行を辦じ、能く辦ずるを得て、自ら現見の法に、諸通を證し、即ち一切諸結を斷除するを得、自ら口に唱へて言はく、『生死已に盡きて、梵行の報を得、所作は辦じ、更に復後世の有を受けず、自ら證し自ら知る』と。彼の諸長老、一切悉く皆阿羅漢を成じ、心善く解脱して、復怖畏する無し。

爾の時世尊、舍婆提祇陀精舍に在し、少時住し已りて、更に行きて其の餘の聚落を歴んと欲し、此の聚落より彼の聚落に到り、漸漸に行きて毘耶離（Vaiśāli）に到り、彼の城に至り已りて獼猴池（Markata hrada）に往き、其の池岸の邊にある草精舍に、即便ち停住したまふ。

爾の時世尊、日の西に下りし時、三昧より起ち、草精舍を出で、露地に向ひ、座を鋪きて坐したまひ、比丘僧衆、左右に周匝し、前後に圍遶す。爾の時世尊、阿難に告げて言はく、『長老阿難、我婆羅瞿摩帝河の、諸比丘等の所居の住處を見るに、大いに光明あり。而して彼の婆羅瞿摩帝岸に、有ゆる五百の諸比丘住す』。是の如く三稱したまふ。

佛、阿難に告げたまふ、『汝、今彼の諸比丘を喚び來つて我を見しむべし』。是の時阿難、佛世尊の

是の如き勅を聞き已り、一年少比丘の邊に向ひ、到り已りて卽ち彼の比丘に告げて言はく、『善い哉、長老、汝速かに彼の婆羅瞿摩帝河の邊に至れ。彼處に今諸比丘等有り。汝、彼等諸長老に語りて言へ。「世尊は、今、長老等を見んと欲したまふ。若し時を知らば、宜しく應に速かに疾く往きて世尊に見えよ」と』。時に彼の年少長老比丘、阿難の是の如き言を聞き已り、阿難に白して言はく、『尊者の敎の如くして、我敢て違せじ』と。時に彼の年少長老比丘、速かに疾く行くこと、譬へば壯士の臂を屈舒する頃の如し。是の如く、是の如し。時に彼の長老年少比丘、毘耶離より、速かに疾く身を隱し、婆羅瞿摩帝の岸に至り、身を出して現はれ、彼所の居處の諸比丘の邊に往き、到り已りて卽ち彼等一切諸比丘に告げて言はく、『善い哉、長老、汝等、今、若し當に時を知るべし。世尊は汝等長老を見んと欲したまふ。汝等、今若し當に善く知らば、速かに往詣して、世尊の所に至るべし』と。

爾の時、彼處の諸比丘等、彼の年少の使の比丘に白して言はく、『長老の敎の如くして、我敢て違せじ』と。是の時、彼等諸比丘衆、此の語を聞き已り、譬へば壯士の臂を屈伸する頃の如く、婆羅瞿摩帝河の所居の處より、各其身を隱し、毘耶離獼猴池岸の草精舍の下に至りて、卽ち身を現ず。

爾の時世尊、この時に當りて、正に不動三昧に入り、其の耶輸陀長老も、亦不動三昧に入り、彼の來れる五百比丘も、亦不動三昧に入り、夜の初更を經たり。爾の時阿難、座より起ち、右肩を偏袒し、正しく衣服を理し、合掌して佛に向ひ、是の言を作す、『願はくは世尊、夜の以に一更なるを知りたまへ。世尊、今彼の客比丘僧を慰喩したまふべし』と。是の時、世尊、默然として言ひたまはず。是の如くにして、復已る。夜の中分を經て、阿難更に請ふ。乃至、世尊默然として言はず。

爾の時、其の夜第三分に至りて、阿難復請ふ。世尊、默然たり。夜の後分を經て、鼓を打たんと欲する時、明星將に現はれんとす。長老阿難、更に坐より起ち、右肩を偏袒し、正しく衣服を理し、合掌して佛に向ひ、是の言を作す、『世尊、當に知りたまふべし。夜已に後分、久しからずして鼓を

打ち、明星出でんと欲す。世尊、今諸比丘をして、彼の諸客比丘を慰勞せしめたまふべし。又復比丘は坐し已りて久しきを經、身體疲懈す』。

爾の時世尊、阿難に告げて言まはく『長老阿難、汝今此の如き義理を知らず。所以は何ぞ。長老阿難、汝若し理を知らば、應に問を發せざるべし。今此の三昧は、汝の境界に非ず。何を以ての故に。阿難、我向に此の不動三昧に入り、此の五百の比丘も、亦不動三昧に入る。長老耶輸陀を最も初首と爲し、皆悉く不動三昧に入る。我、今自ら此の如き理を知り已る』。爾の時世尊、偈を說かんと欲するが故に、卽ち是の如き師子吼を作して言はく、

『已に煩惱諸慾の泥を渡り　復已に諸聚刺を滅除し　彼の貪癡の滅盡せる處に到る　彼には苦樂更に停らず　旣に已に彼岸の邊に越度する　これを則ち名づけて眞の勇健と爲す　亦比丘と稱す善く惡を破る　又復善辨脫人と名づく』

爾の時世尊、是の偈を說き已りたまふや、而も彼の五百の諸比丘等、心に希有未曾有の事を生じ、已に希有未曾有を生ぜるが故に、各相謂ひて言はく『諸長老等、希有なり、此の事や、此の長老耶輸陀は、大いに神通有り、乃ち能く此の五百の比丘をして、一切皆亦大神通有らしめたり。耶輸陀と共に、昔は朋友と作り、各能く相似たり。彼等の父母も亦皆德有り』。是の時、彼等五百の比丘は、心に各疑を生じ、世尊に問ひて、疑ふ所を決斷せんと欲し、卽便ち相與に世尊に白して言さく『今此の長老耶輸陀は、彼の往昔に、何の善根を種ゑてか、今身中に乃ち能く是の如く居家殷富にして、是の如く多財、是の如く多寶、是の如く二足四足具足し、是の如き家に生れ、然かも其の初めて生るるや、上に寶蓋を覆ひ、又其の父母は、耶輸陀の爲めに三種の堂を造れる。昔何の業に緣りてか、此の果報を得、又復諸婇女等の邊に於て、塚墓の想を生ぜる。何の因ぞ能く爾かく佛に値ひまつりて出家し、具足戒を受け、阿羅漢を成じ、父母及び妻は、皆、聖法を得、在家の朋友と、及び諸國

土の[八]朝廷に商主たると、幷に婆羅瞿摩帝河の邊にありたる五百比丘とは、阿羅漢果を得たる』と。是の語を作し已りて、皆各默然たり。

[九]爾の時世尊、卽ち彼等諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、至心に諦聽せよ。我、念ふに往昔波羅㮈城に、時に一人有り。其の事を營まんと欲して、彼是の如く念ぜり。「我、若し此事を成就するを得已らば、復是の事を作し、此事を辦じ已らば、當に此事を作すべし。我、此事を一切辦じ訖りて後、別に當に美食美飮を造り、種種に飡噉嚼齧唼嗽吮等を辦具すべし。各辦具し已らば、當に沙門及び婆羅門に施し、悉く具足し充實して、飽滿せしむべし」と。爾の時彼の人、心の勇猛なる善業の因緣を以て、復衆多の福德の潤す所なるを以て、所營の事、悉く皆成辦す。彼の人、旣に其の事の已に辦じたるを見、晨朝に起ちて、多種豐饒の飮食の、飡噉すべき者を整頓し、具足執持して、將つて城門に詣り、到り已つて安置し、是の如き念を作す、「今此の城門の、最初の見者、若しは沙門なれ、若しは婆羅門なれ、我當に此の多種の飮食、乃至、唼嗽を持つて、用つて布施すべし」。

爾の時、彼の城門の外に、一辟支佛有り、那伽羅尸棄(Nagarasikhin?)(〔隋〕に成髻と言ふ。)と名づく。恒常に波羅㮈城に住在す。而るに彼の尊者大辟支佛、晨朝に於て日東方に在る時、著衣持鉢し、徐行して波羅㮈城に入り、飯食を乞求せんと欲す。是の人、遙かに彼辟支佛を見るに、威儀庠序、進止端平、足步安隱にして、差移あることなく、左右を觀看し、徐行し直視し、擧動審諦、急がず寬からず、住立仰瞻して、人の樂み觀る所、形服相稱ひ、內外嚴儀あり。彼の人見已りて淸淨心を得、大歡喜を生じ、卽ち其の食を將つて、辟支佛に奉る。爾の時彼の辟支佛、是の如き念を作す、「我、今已に種種美食の布施を得たり。而るに食時旣に未だ至らず。我今且少時心を攝して、坐禪繫念すべし」。是く思惟し已り、却いて一面に行き、河岸の邊に到る。時に一樹有り。卽ち其の下に在りて、加趺して坐し、正意定想に、身體端然とし、寂定一心にして、搖がず動かず、是の如くにして住す。

【八】諸國土商主朝廷の意義不明。

【九】耶輸陀の本生、第一、那伽羅尸棄辟支佛供養。Mahāvastu, III. pp. 413—415 辟支佛の名を Bhadrika とす。

爾の時、波羅捺城に一王有り。婆羅摩達多（Brahmadatta（〔隋〕に梵德と言ふ。））と名づく。四兵に嚴飾して、城門より出づ。是の時城外に、忽ち一人有りて、聚落より來り、手に傘蓋を執るが、逆頭して王に値ふ。彼の人、遙かに梵德國王の、前に在りて來るを見、見已りて內心に、是の如き念を作す、「我、今梵德王を避け、我を見せしむる勿るべし」彼の人、是の如く心に念を生じ已り、卽ち道を下りて行き、一別路に向ふ。其路は乃ち彼の波羅那河に到る。彼の河岸より、流に順ひて下行し、未だ多地を經ずして、忽然彼の辟支佛の河岸の一樹下に在りて、加趺して坐し、正念正思、身動搖せざるを見る。彼の辟支佛、日光の爲めに、身體を照觸せられ、遂に便ち汗流る。彼の人見已りて、是の念を作す、「此の仙は應にこれ持戒淸淨なるべし。必定して應に諸正法を得證すべし。今この日光、旣に其體を照らす、或は熱惱を患へたまはん」。是の念を作し已り、「我、今この傘蓋を持て、其の身上を覆ひて、爲めに蔭涼を作すべし」と。

爾の時彼の辟支佛、食時の至れるを知り、是の如き念を作す、「我が食時至る。宜しく應に此の三昧より起つべし」。時に辟支佛、旣に三昧を出で、卽ち彼の人の、傘蓋を持して、己が身上を覆へるを見、見已りて、彼の人を愍れまんと欲するが爲めの故に、虛空に飛騰して、十八變を作し、虛空中に於て、行動來去す。或は跪き、或は立ち、或は坐し、或は臥し、復、烟炎を出だし、或は火光を放ち、或時は水を作し、湧沒隱顯して、是の如き等の無量諸種の神通示現を作す。

爾の時彼の人、卽便ち此の那伽尸棄辟支佛の邊に於て、淨信心を生じ、十指掌を合し、至誠もて頂禮し、是の如き願を作す、「願はくは我、來世に是の如き聖に、或は此より勝れたるに値はん。旣に値遇し已りて、彼の所說の法を、願はくは我卽ち能く彼の法中に於て、速疾かに證知せん。願はくは、我當來に惡道に墮せざらん」と。復更に彼の辟支佛に啓請して、手もて食を奉らんを乞ひ、諮問して言はく、「尊者、現今何處に住居したまへる」。彼の辟支佛、卽ち之に報じて言はく、「我は

某處に住し、我は某處に行く」。

爾の時彼の人、即便ち彼の辟支佛の所居住處なる草庵の邊に往詣し、至り已りて、內も外も、泥地を灑掃し、穢草を除却し訖りて、彼の辟支佛に奉請す、「四事を以て供養供給しまつらんと欲す。若し須ひたまふ所あらば、我能く一切の衣食を辦具しまつらん」。是の如く、彼の辟支佛に奉じ已りて、自家の中に到り、其の父母妻子眷屬、及び餘の無量無邊の人輩に向ひ、前の如く說きて言はく、「我、今是の如き仙人の、是の如き戒行が、是の如く清淨にして、妙法を證せる者を見るを得たり。仁、若し時を知らば、彼所に至りて、供養尊重せよ」と。是の時、彼の人の父母妻子、并に及び朋友諸知識等、聞き已りて、皆那伽羅辟支佛の所に詣向し、淸淨心を以て、恭敬供養せり。

爾の時彼の人、少時を經て、是の善念を作す、「在家は大患にして、煩惱纏繞し、出家は大樂にして、解脫無爲なり。在家は辨じ難くして、一向に無垢なること、亦得べからず。一向に無染なること、亦得べからず。乃至、一身命を盡して、淸淨無垢に、梵行を行ぜしめんと欲すること、終に得べからず。我、今彼の仙人の邊に至り、出家を乞求すべし」。是の如く念じ已りて、彼の人即ち尸棄辟支佛の所に往詣し諮りて白して言さく、「善い哉、大仙、我が出家を聽したまへ」。而して辟支佛は出家を許さず。彼の人再び白し、乃至、三たび白す、「善い哉、大仙、我が出家を聽したまへ」と。爾の時尸棄辟支佛、心に彼の人の、是の如く三請せるを愍念して、即ち其の人に告げて、是の如き言を作す、「汝善男子、汝、今若し出家を欲求せば、此を去る遠からざるに、諸外道有り。名づけて波黎婆羅闍(Parivrāja)(〔隋〕に行行復行と云ふ。)と曰ふ。汝、彼處に於て且らく身心を熏修調伏し、而して來世に當り、正法中に於て、出家の因を取れよ」。復乞ひて求願す、「未來世に一佛有りて、出世したまふ。名づけて釋迦牟尼如來といふ。願はくは彼の佛を見ん。我、値遇し已りて失脫せしむる勿からん。彼の如來法敎の中に、出家を得已りて、誓願して一切諸苦を捨離せん」。爾の時彼の人、伽羅辟

支佛の語を取り、遵奉して違せず。卽ち彼の佛に請ひ、一形壽を盡して、諸の供具を將つて、以て彼の辟支佛を供養せり。

爾の時尊者那伽羅尸棄辟支佛、乃至、緣に隨ひて、世に住し已りて、般涅槃に入る。而して彼人等の所有の眷屬、一切聚集して、辟支佛の般涅槃に入るを見、卽便ち共に辟支佛の身を取り、如法に供養して、殯塟闍維す。所謂、諸舍利の塔を造り、塔上に覆盆相輪を造作し、諸寶鈴を懸け、幡蓋・香花・末香・燒香、然燈續明して、用つて供養す。

爾の時彼の人、是の如く供養して、時を過歷し已り、卽ち波梨婆羅闍の所に於て、法中に出家し、旣に出家し已りて、還りて彼の林に依りて、坐起して住し、晨朝時に數數波羅捺城に入り、乞食して活命す。曾て一日を經て、波羅捺に入りて食を乞ふ時、一方面に婦女の屍を見る。重病の爲に死して、身青色に爛壞せんと欲し、蛆蟲穴を穿ちて遍啖す。見已りて近づき立ち、熟視熟觀して、其の內心に不淨の想を生じ、之を捨てて去る。是の如く身體の不淨なるを繫念し、憶念して捨てず。數數復念じ、成就勤劬して、四禪心を得。復更に重ねて是の如きの願を發す、「願はくは未來世に、釋迦佛の世に出現したまふに値ひ、爾の時に我が願滿足を得しめん。値遇の日、願はくは彼の佛邊に、童子として出家し、梵行を修行せん。彼の佛世尊所說の法を、願はくは我聞き已りて速かに能く證知せん」と。而して彼の人、多少時に隨ひ、世に住し已りて、遂に便ち命終す。命終の後、梵天宮に生る。然るに其の彼の人、天上より下りて、復人間に生る。是の如く次第して、劫數を經歷し、最後に身有り、還り來りて此の波羅捺城の最大巨富長者の家に生る。而して其の長者、多く錢財・資產・服玩有り、乃至須ふる所に乏少あるなし』〔一〇〕。

爾の時世尊、復更に重ねて諸比丘に告げて言まはく、『更に因緣有り、我當に具さに說くべし。往昔を憶念するに、還りて、此處波羅捺城に在りて、迦尸國(Kāsi)有り。其王を名づけて喞(居鄙の反)唳

【一〇】本生第二、迦葉佛塔供養。Mahāvastu に缺く。

尸(Kṛki)（〔隋〕に損庾と言ふ。）王といふ。彼の唎翅尸、迦葉佛の般涅槃後に、舍利を收取して、七寶塔を起す。所謂、金・銀・頗梨・琉璃・馬瑙・珊瑚・虎魄等の寶を塔裏に內れ、其外は別に更に石を以て之を壘む。寶塔は地を去る、高さ一由旬、廣さ半由旬なり。

爾の時、彼の國の唎翅尸王所起の塔を、陀奢婆黎伽(Daśamaliṅga)（〔隋〕に十相と言ふ。）と名づく。其の塔の相輪の、第一覆盆は唎翅王の作、第二覆盆は王の大妃の作、第三覆盆は王の長子の作、第四覆盆はこれ王女、摩梨尼(Mālinī)（〔隋〕に小鬘と言ふ。）と名づくるの作、第五覆盆は唎翅尸王第二兒の作、第六覆盆は唎翅尸王第三兒の作、第七覆盆は唎翅尸王第四兒の作なり。汝等比丘當に知るべし。爾の時、彼の唎翅尸王第三兒——迦葉佛・阿羅呵・三藐三佛陀の爲めに舍利塔上に、其の第六層の覆盆を作りしもの——は、今の耶輸陀比丘是なり』。

復比丘に告げたまはく、『又彼の過去の那伽羅尸棄辟支佛の邊に、手に傘蓋を執りて、蔭を作せる人は、還是れ卽ち今の此の耶輸陀比丘の身是なり。其の耶輸陀は、手を以て傘を取り、辟支佛上に蔭涼を作せるが爲めに、迦葉如來舍利塔上の覆盆の莊嚴なる相輪光顯す。彼等の業緣果報の熟せるが故に、初生の時、頭上に自然に寶傘蓋有り。

又復往昔那伽羅辟支佛身の爲めに、草庵を作り、雜資財を將つて、彼の尸棄辟支佛の所に詣り、幷に及び種種の衣服飮食を供養せる因緣の、彼の果報の故に、今具足を得て、長者の家に生れ、盛年中に於て、然かも其の父母は、爲めに三堂を造り、種種自在の福報を受けたるなり。

又復往昔會て林に於て、死婦女の屍を見て、不淨想を生じ、念念相續せり。彼の善業に繫心せる果報に藉りて、今世在家にして、諸婇女の身體の中に、塚墓の想を生ぜるなり。

又復往昔彼の尸棄辟支佛の所にて、「願はくは我來世生に、生れて諸惡道に墮する莫からん」との誓願を發せり。是の善緣果報力を以ての故に、在在處處に惡趣を經ず、天より人に生れ、人より天

【一】宋・元・明の三本は琥珀に作る。

に生れ、樂果報を受けたるなり。

又復往昔彼の尸棄辟支佛の所に於て、是の誓願を發せり、「願はくは我、來世に是の如き大仙尊者に値遇し、或は此に勝れるに遇ひ、若し彼の世尊の、言說したまふ所有る、微密の法要を、願はくは我一切悉く能く聞持し、聞き已りて速疾かに皆證知するを得ん」。彼の福力果報の因緣に藉りて、我最勝なる世尊に値遇し、復我が說ける教法中に、出家を得て、漏盡羅漢を成ずるを得たるなり。

又復往昔彼の尸棄辟支佛の所に於て、初始に聞きし時、心に歡喜を生じ、歡喜を生じ已りて、即時に傳へて、其家の父母・妻子・六親、幷に餘の眷屬に向ひ、那伽羅大仙尸棄辟支佛の、種種の功德有るを說きて、稱揚讚歎せり。彼の諸眷屬は、其より聞き已りて、倍信敬殷重の心を生じ、歡喜踊躍して、卽ち共に相率ゐ、種種供養の具を備辦して、彼に往き、禮拜して奉設供養し、四事充足せり。彼の善業福報の因緣に藉りて、今世に至りて、其の耶輸陀長老比丘の父母妻妾及び諸眷屬は、我法中に於て、皆聖法を得たり。

又復長老耶輸陀に、在家知識有り、及び彼の婆維罹摩河岸に、久時住せる所の五百の比丘の皆悉く阿羅漢果を證成せるものあるは、此等、彼の時辟支佛に遇ひ、並に各、同願齊心に、共に是の如き大誓を發し、仙聖人の邊に、諸善業を植ゑたるにて、是の果報を得たるなり」。

爾の時世尊、偈を說きて言はく、

『是の如く諸聖眞　佛及び尸棄辟支覺　幷に諸羅漢漏盡の人を供養すれば　無量の大果報を得』
或は復無畏にして諸相滿し、大慈大悲にして諸正智を具足せる　十力尊を供養すれば
能く果報を得ること窮り有るなし』　諸佛・緣覺の田　及び諸聲聞解脫の衆に供養すれば
現在人天に果報を受け　後に寂滅大涅槃を得』

卷の第三十七

富樓那出家品第四十[一]

爾の時、憍薩羅(Kośala)聚落に、迦毘羅婆蘇都城邑を去る、其の間遠からずして[二]一村陌有り。彼の村に一大婆羅門有りて、淨飯王の爲めに、國師と作る。其の家、巨富にして、多饒の財寶あり、乃至、屋宅は猶ほ北方毘沙門天の宮殿の如くにして異る無し。彼の婆羅門に一子有り。富樓那彌多羅尼子(Purṇa Maitrāyaṇīputra)(〔隋〕に滿足慈者と言ふ。)と名づく。極大端正にして、喜ぶべく雙少なし。諸の衆人の、樂覩する所たり。巧智聰慧・細意細心にして、能く一切の韋陀論を誦して徹し、既に自解し已りて、復能く他に敎ふ。具さに[三]三種韋陀を解し、舊くは[四]尼乾陀論・[五]鞞輸婆論・解破字論を解し、又能く往昔の諸事五明の論を宣說し、一句半句、一偈半偈も、皆能く分別す。亦復、[六]受記の論を通解し、世辯中に於て、悉く皆具さに六十種の事、有大人相の法を解す。

淨飯大王の悉達太子が、生れたる日に當りて、其の彌多羅尼子も亦共に同時に生る。彼の人、本性、世間を厭離して、解脫を志求し、煩惱中に於て、恒に驚怖有り、心常に寂定なり。往昔已に曾て諸佛の來たまふを見、彼の諸佛の邊に、諸の善根を種ゑ、多くの福業を作して、其の心に薰習し、涅槃の門に志して、煩惱を樂まず、一切有の諸の生死の內に於て、皆悉く遠離し、已に行を作して、諸纏壞爛し、因を取りて力と爲し、成熟の地に到る。聖法に到らんが故に。時に富樓那、獨坐して思惟す『我が父は、既に輸頭檀王の爲めに、國師と作り、多くの經營を須ひ、多種の技を備へ、王法中に處して、王に代りて事を斷ず。又復其の兒悉達太子は、決定して、彼の輪頭檀王と、一種にして異なし。應當に必ず轉輪聖王と作るべし。我が父、若し無くば、我が身決定して彼の悉達轉輪聖王の與に、國師と作らん。我が父既に小王の國師と爲りて、今以て是の如く暫くの閑時無し。況

【一】富樓那の出家因緣を記す。Mahāvastu, III. pp. 377—381 參照。
【二】Mvst. には、この村を Droṇavastuka とせり。
【三】三種韋陀(Veda)とは、荷力(Ṛg-veda)讃誦。冶受(Yajur-veda)祭祀。三摩(Sāma-veda)歌詠。
【四】尼乾陀論は Nirghaṇṭa 即ち字彙。
【五】鞞輸婆論は Kaiṭabha (Keṭubha) 即ち知明・楷書。
【六】受記論は Vyākaraṇa 即ち文法書。

んや復轉輪聖王大國の師と作り、普ねく國內に於て事を辯ぜば、閑有らんと欲するも、終に是處無けん。我、今預め前に、當に何の事をか作すべき。當に何の計をか作すべき。我、今唯捨家して出家する有らんのみ。』

時に富樓那、是の如く念じ已り、菩薩が出家せる夜に當り、夜半默然として父母に諮らず、其の朋友の三十人に足るものと共に、家より出で、逕ちに往きて波梨婆遮迦法の中に至り、出家を請乞ひ、雪山に居在して、苦行もて道を求む。彼等諸人、勇猛精進にして暫くも休息せず。其の三十人、一時に成就して、四禪、幷に及び五通を獲得しぬ。時に富樓那苦行仙人、自ら思惟して言はく『我、今應に內に自ら悉達太子の、聖王の位を受くる時節の、至れるや、未だなるやを觀察すべし』と。而して富樓那、天眼を以て觀じ、世尊の波羅捺鹿野苑中に在し、無上の阿耨多羅三藐三菩提を證得して、已に無上の微妙法輪を轉じ、諸天人の爲めに、分別說法したまへるを覩見し、見已りて、卽ち諸朋友の邊に至り、而して之に告げて言はく、『汝等、今歡喜心を生じて、大踴躍を作すべし。今彼の悉達大聖太子は出家して、已に無上菩提を證し、菩提を證し已りて、已に、無上淸淨法輪を轉じたまふ。世尊、今日現に波羅捺城鹿野苑內に在し、諸天人の爲めに、說法開示したまふ。汝等今我と共に相隨ひて彼の邊に至り、梵行を行ずべし』。是の時彼等諸朋友輩、歡喜して報じて言はく、『仁の語や善し、我等順從せん。』

時に富樓那苦行仙人、身を擧げて、卽ち三十の朋友と共に、雪山より下り、飛昇して行くこと、猶ほ鴈王の虛空に騰るが如く、波羅捺鹿野苑に至りて下り、佛の邊に往詣して、佛の所に到り已り、佛足を頂禮して、兩手を以て、世尊の足を執り、摩挲頂戴し、頭を擧げて口を以て如來の足を嗚し、起ちて佛前に在り、胡跪して偈を以て佛を讚歎して言はく、

『昔兜率陀天上に在り　正念化して白象の形と作り　身を託して摩耶の胎に入り　來りて釋種

【七】 Parivrājaka, 遊行者。

の家に至りて子と作らんと欲したまふ』　妙蓮花の水に著せざる如く　母胎に在りて身を汚したまはず　彼の母　樂を受けて歡び無量に　五欲を食らずして唯法を樂しみ』　唯善行を行じて諸惡を捨て　尊の胎に在して鑄金の如きを觀　歡喜踴躍し厭くことを知らず　看て足るを知らず更に復觀る』　尊の胎内に在るや常に說法したまふ　諸の天人慈悲心を起し　皆悉く歡喜して法膏を飲む　世尊初生して妙語を發したまふらく』「我衆生の生死の苦を脫せん」と右脇より出で已りて七步行き　無畏なること猶ほ師子王の如く「我はこれ如來なり、終に苦を滅せん」と』　世尊初生して池水に浴したまふに　水は冷煖ならずして彌岸平かなり　浴し訖り香を塗りて身を莊嚴したまふに　宮中に自然に蓋拂現はる　世間希有に此の事を見る　是の故に我等尊に頂禮しまつる』

是の偈を說き已り、富樓那等若干仙人は、聲を擧げて、佛に從ひて出家せんことを乞求し、是の如く白して言さく『唯願はくは世尊、我等を哀愍したまへ。我等の心願は、出家を得んと欲す。慈悲もて怜れむが故に、我等を度脫したまへ』と。

爾の時佛、富樓那に告げて言はく、『汝富樓那、今速かに起つべし。當に汝の意に從ふべし。我、汝等の與に心の所願に從はん』。時に富樓那、如來の其の出家を聽したまへるを得已りて、具足戒を乞受し、及び其の朋友、二十九人の彼の長老輩も、既に出家を得、具戒を受け竟り、未だ久しからざる間にして、各各用心して、獨臥獨行・獨坐獨立し、勇猛精進にして、空閑阿蘭若處に行坐し、各各別行して、用心謹愼に、曾て放逸ならずして、恒に空閑に住す。時節久しからずして、若き善男子は、大利を求むるが故に、正心正信もて捨家出家し、爲めに無上梵行を求めんと欲し、已に欲邊を盡くし、諸法の相を見、諸通を修せんと欲して、即ち彼の法を證し、已に諸生を斷じて、梵行の報を得、所作已に訖りて、後有を受けず。彼等一切の諸長老輩は、既に證知し已りて、悉く羅漢

と成り、心善く一切解脱を得たるを以て、皆大德と成り、一切皆悉く能く大事を作して、衆生を利益す。

爾の時世尊、諸比丘に告げて、是の如き言を作したまふ、『汝等當に知るべし。說法人中、最第一なるは、卽ち此の富樓那彌多羅尼子これ也』と。而して偈有りて說かく、

『世尊波羅捺に在し　微妙の語もて諸衆に告げて言はく

「此この滿足眞比丘は　說法人中最第一なり」と』

爾の時、世間に、一切合して九十一阿羅漢を成じぬ。謂はく、佛世尊・幷に五比丘・長老耶輸陀・及び波羅捺國の耶輸陀と同時に生れし四朋友の最勝長者、勝中に復勝れたる諸善男子、謂はく、毘摩羅・善臂・滿足、幷に及び牛主、又、耶輸陀在家の估客たる行賈商人なる五十の朋友、次に善男子長老富樓那彌多羅尼子、幷に及び知舊二十九人なり。

那羅陀出家品第四十一の上[一]

[二]爾の時、閻浮南天竺の地に、一國土有り。阿槃提(Avanti)と名づく。彼の國土中に一聚落有り。獼猴食(Markarakṛta āraṇya)と名づく。其の聚落內に、一巨富婆羅門有り。姓は大迦旃延(Mahā-kātyāyana)なり。其の家、多く資財珍寶・奴婢六畜・穀麥豆麻・屋宅園林有りて、種種豐足し、乃至、彼の毘沙門宮の如くにて、殊異有ること無し。彼の婆羅門、聰明智慧にして、三韋陀論を讀誦し、受持し、博く諸物に通じ、一事十名の嘰輈婆等の文句字論、往昔過去の一切諸事、五明の論、一句半句を知り、世間の諸受記論及び六十種、大丈夫の相を分別し、皆悉く具足して、讀誦通知して、嚴熾王(Pradyota)の與に、國大師と作る。時に彼の國師大婆羅門の第一長子、家を辭して他國に遊歷し、學問して厭足を知らず。處處に師を尋ねて、具さに諸論を解し、技成就し已りて、本家に還歸

【一】那羅陀の俗姓、及び出家因緣を記す。Mahāvastu III. pp. 382—389 參照。
【二】那羅陀の俗姓。

し、既に父を見奉りて、卽ち諮白して言す『善い哉、阿爺、我、今學問して、種種通達す。我の爲めに一切の大衆を聚集せよ。我、韋陀論等及び諸の技能を誦出せんと欲す』と。父、聞きて歡喜し、卽ち爲めに衆を集む。兒、人の集まれるを見、卽ち衆前に在りて、誦する所の一切韋陀論等及び諸の技能、皆隱藏せず、悉く並に誦出す。而して彼の大衆、卽便ち共に彼の國師の子を尊び、推して上坐と爲す。其の父、卽ち種種の珍寶を將つて、之に供養す。時に彼の國師大婆羅門、復更に別に第二の子有り。那羅陀(Nālada)（〔隋〕に不叫と言ふ。）と名づく。其の父、彼の第二子に告げて言はく『汝那羅陀、今家を捨てて出で、他國に至りて學を受け、韋陀諸論を誦習すること、汝の兄の如からしむべし』と。而して那羅陀童子の兄の、一切韋陀論を誦する時に當りてや、其の那羅陀、一聞して卽便ち一切受持せり。時に那羅陀、此の語を聞き已り、卽ち父に白して言はく『善い哉、阿爺、我已に一切韋陀及び呪術等を通辯しぬ。阿爺、今我が爲めに一切の大衆を聚集すべし。我、衆前に於て諸韋陀及以び技能を誦せん』と。其の父、子の是の如く語るを聞き已り、心に希有を生じ、卽ち大衆を集め、大衆を集め已りて、諸種安置す。時に那羅陀、大衆の前に在りて、諸韋陀、一切論等を誦す。爾の時大衆、聞き已りて、各各心に歡喜を生じ、彼を讃歎して言はく『善い哉、善い哉。大智童子、快く能く諸韋陀論を誦習す』と。其の父、復種種の財寶を將つて、以用つて供養す。

爾の時長兄、弟の一切諸論を誦通するを聞き、心に苦惱を生じ、是の如き念を作す『我、無量の年、諸國に遊歷して、種種の所誦の呪論を學習し、心慮煩勞して、方に始めて諸の呪術を誦持し得たり。其の那羅陀、云何ぞ聞き已りて、皆少時の間に受持して淨遍なる。其の少年なるに、尙ほ是の如きを得たり。若し後長成せば、必定して應當に王の國師と作るべし。是の因緣を以て、我、須らく方便もて其の體を除滅すべし。是の如くせば、則ち我大利を成すを得ん。若し然からずんば、終に我が位を奪はん』と。爾の時、其の父、自ら長子の內心の、是の如く那羅陀に於て私かに惡念

を生ぜるを知り、既に覺知し已りて、是の思惟を作す『我が此の小兒や、聰慧憐れむべし。兒の尊命する所と爲らしむる勿からん』。是の念を作し已りて、『應に方便を須つて、其をして知らしむる莫からしむべし」と』

［三］爾の時、南方に一城有り、優禪耶尼（Ujjayani）と名づく。城を去る遠からずして頻陀山（Vindhya）有り。其の山中に一老仙人有り。阿私陀（Asita）と名づく。中に在りて居住す。彼の仙は一切の韋陀幷に及び諸論を洞解し、以て四禪を得、五神通を具す。是れ那羅陀童子の外舅なり。是の時國師大婆羅門、幷に及び其の婦、卽ち其の子那羅陀の身を將つて、彼の山中に往き、對して共に阿私陀仙に付囑し、以て弟子と爲す。其の阿私陀、既に那羅陀を受領し得已り、敎詔顯示するや、久しからずして成就し、四禪を獲得し、五神通を具す。

爾の時梵志、阿私陀仙、其の弟子、那羅陀の身を將つて、卽ち山を出でて波羅捺城に向ひ、卽ち城外に於て草庵を造立し、中に在りて居住し、晝夜六時に是の如き敎を作し、大聲にて唱へて言はく『善い哉、善い哉、汝那羅陀、佛、今出世したまふ（是の如く三稱す。）。汝應に是の邊に剃落して、出家し、梵行を修行すべし。必ず當に長夜に大いに利益を得、大いに快樂を得べし。自ら身を利し已りて、復應に他を利すべし』。

爾の時彼の老阿私陀仙、是の如き語を作して、其の弟子、那羅陀を敎へ已り、多時を經ずして命終を取る。阿私陀仙の命終の後、時に彼の梵志、阿私陀仙人が有せる世間の利養名聞をば、悉く是の弟子那羅陀は得たり。時に那羅陀、世の利養名聞の多きを以ての故に貪戀著心し、正念有ること無く、更に想を作して勝上を求覓せず、佛有り、法有り、僧有るを信ぜず。

［四］爾の時、海內の伊羅鉢龍王（Elāpattra）（（隋）に香葉と言ふ。）既に龍身を受け、心に厭離を生じて、解脫を欲求し、彼の穢濁、惡想を樂しまずして、是の念を作す『往昔、世尊、迦葉如來・多陀阿伽度・阿羅

【三】那羅陀、阿私陀仙の弟子となり、其の遺言によりて佛の出世を待つ。

【四】伊羅鉢龍王、その本生所得の古偈を解く者を求む。

呵・三藐三佛陀、親しく我に記を授けたまはく、『汝、大龍王、今より已去、若干年・若干百年・若干千年・若干百千年・若干百千億萬年を過ぎて、當に一佛有り、世に出現したまふべし。釋迦牟尼・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と號しまつる』と。而して今已に是の如き無量無邊億數百千萬年を過ぎぬ。頗し彼の佛、釋迦如來の出世有りや、以不や。』

爾の時、復更に一龍王有り、名づけて商佉(Saṅkha)(〔隋〕に蠡と言ふ。)といふ。彼の龍王の宮に、常に無量の龍衆の聚會有り。而して彼の會處に、諸龍王多く、百千雲集す。伊羅鉢龍も、亦彼の宮に在り。是の時一夜叉の王有り。名づけて金齊といふ。伊羅鉢龍王と善友たり。亦彼の龍の衆會中に在りて坐す。

爾の時伊羅鉢龍王、卽ち衆中に於て、夜叉王に告げて、是の如き言を作す、『仁者、汝、今頗し世間に、釋迦如來・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀の世に出現したまへるや、未だしやを知れるや』と。是の時夜叉、龍王に報じて言はく、『大善龍王、我、實に釋迦如來の出現し已りたまへるか、未だなるかを知らず。然りと雖も龍王よ、但我は今知る。彼の曠野中に一城有り。其の城は、本これ夜叉の宮殿にて、阿羅迦槃陀(Āḷavaka-vandha?)(〔隋〕に曠野宮殿と言ふ。)と名づけぬ。彼の城に、先來二偈文有り。而して彼の偈に云ふ、若し佛有りて、世間に出現したまふ無くんば、終に人の能く此の偈を讀む者無からん。設し復讀むあるも、亦此の偈の意を解する能はざらん。若し佛有りて世に出現したまふ時に當りて、卽ち讀知するを得んも、人の義を解する無く、唯如來・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀のみ有りて、能く此の義を說きたまはん。或は佛より聞きて、解を得る有らん』。

爾の時伊羅鉢龍、彼の夜叉王に是の如き言を告ぐ、『仁者、汝、今往きて彼に至り、彼の偈を讀取し得來る可きや以不や』。是の時、金齊夜叉の王、伊羅鉢龍王の邊より、是の如き言を受け已りて、卽便ち往きて彼の阿羅迦槃陀宮殿に至り、彼の偈を受讀し得已りて、速かに疾く還りて、伊羅鉢龍

王の邊に向ひ、到り已りて卽ち伊羅鉢に白して言はく、『大善龍王、今日、應當に心に歡喜を生ずべし。所以は何ぞや。釋迦牟尼・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀・大聖如來は、今已に出世したまふ。何を以てか知るを得る。遂に能く我をして彼の偈を讀むを得しめたればなり。我、已に彼の偈を受持して將來す。若し人の能く此の偈の意を解し、復能く宣說する有らば、卽ち應當に知るべし、此はこれ眞の佛なり』と。

爾の時伊羅鉢龍王、心に大いに歡喜し、踊躍身に遍ねく、自ら勝ふる能はず。卽ち金齊夜叉王の邊より、彼の偈を受け取る。

爾の時、商佉龍王に女有り。名づけて常分といふ。端正にして喜ぶ可く、最上の華色あり。衆人の愛する所にして、世に雙有ること無し。

爾の時、彼の會の諸龍王等、是の如き念を作す『我、今應當に月の八日・十四・十五、或は二十三及び二十九、幷に三十日に至り、好金器に、銀粟を滿て盛り、銀器內に金粟を滿て盛れるを將つて、此の龍女を將つて、其の體を莊飾し、妙種種の瓔珞を以て身を嚴り、此の龍宮より出で、彼の恒河の岸上に置き、露地に著して、此の二偈を說きて以て衆人に示すべし。

『何この自在に在りてか　染著するを名づけて染と爲す　彼云何が淸淨となし　云何が癡の名を得るものぞ』　癡人は何の故にか迷ふ　云何なるか智人と名づくる　何が會して別離し已れるを　名づけて因緣を盡すとはいふ』

時に彼の龍王、此の偈を說き已り、遍ねく一切諸世間に告げて言はく、『若し能く此の偈を解誦する者有らば、我等は卽ち當に此の金銀盛滿の粟等、幷に及び龍女を以て、持用つて布施し、卽ち彼の人を取りて佛想を作すべし。若し當に人有り、傳へて他より聞き、來りて我が爲めに說かば、亦然かく布施すべし』。時に商佉王及び伊羅鉢諸龍王等、世尊を見んと欲し、世尊を渴仰し、世尊を

思遲し、恒に白月黒月の八日・十四・十五を以て、好金器に、銀粟を滿盛し、銀器内に復金粟を盛れるを將つて、及び彼の龍女を、種種に身を嚴り、將つて恒河岸上に至り、安置して陸地に住し、彼の二龍王、相與に此の二偈を說いて言はく、『何こに自在に在りてか、乃至、因緣を盡す』と。復是の言を作す。『若し人の能く此の偈の義を解く有らば、我等此の二器の金銀、幷に及び端正喜ぶ可き龍女を將つて、持用つて布施せん』。而して彼の龍王、此の事を說くや、聲八方に聞ゆ。あらゆる林にあり、或は復水に在り、或は陸地に在る、或は婆羅門、或は復、長者　各相謂ひて言はく、『白月黒月の、恒に六日を以て、彼の二龍王、水より出で、二器に金銀の粟を盛りたると、及び一龍女の、瓔珞もて身を嚴れるとを將つて、恒河より出で、岸の某方陸地に在りて住立し、此の二偈「何この自在に在りてか、乃至、因緣を盡くす」を說きて、是の如き語を作す、「若し人の能く此の偈を讀解する有らば、我等此の二器及び女を將つて布施せん」』。時に婆羅門及び長者等、二龍王より是の如き語を聞き、悉く八方より競ひ來り、彼の龍王の處に集會し、各自唱へて言はく、『我、能く此の二偈を讀解せん』と。龍の邊に至るに及び、偈を讀むことを得ず、又義を解せず。或は復人有り。此の偈を讀み已り、反りて還た彼の二龍王に問ひて言はく、『此の偈は何ぞや』と。復問ふ、『此の偈、其の義云何』と。

時に那羅陀童子仙人、居止して摩伽陀國に在り。諸の人民の爲めに導師と作る。彼の國の男女、那羅陀仙を尊重し、供承し、讃歎し、歌詠し、各相謂ひて言はく、『此の摩那婆(Māṇava 儒童)は、自ら既に知り已りて、復他に知らしめ、自ら既に見已りて、復他に見しむ』と。是の時摩伽陀國内の所有の人民、是の如き念を作す、『此の那羅陀仙聖童子は、既に自ら知見して、他に知見せしむ。我等、彼の二龍王の邊に於て、斯かる二偈を、人の能く誦する無く、人の能く答ふる無しと聞く。我等、今那羅陀童子仙の邊に至るべし。到り已りて、應に此の如き事を說くべし』と。是の

念を作し已りて、摩伽陀國の諸婆羅門、及び長者等、即便ち往きて那羅陀仙童子の所に至り、到り已りて、詳かに共に那羅陀童子仙に白して言はく『仁、若し時を知らば、恒河岸上に二龍王有り。一を商佉と名づけ、二を伊羅鉢と名づく。常に白月、黒月の六日を以て、恒河水より、陸地に出で、金銀器に粟を盛れると、女とを將つて、乃至、「誰か能く此の偈の義を解かば、即ち彼に施與せん」といふ。此の二偈を説け。偈に云ふ、何こに自在に在りてか、乃至、因緣を盡す」と』。

[五] 爾の時那羅陀仙人童子、是の思惟を作す『我、今既に此の摩伽陀國内人民の爲めに、尊師と作る。此の人民、皆我を供養し、尊重承事して我を欽仰す。又復謂はく我自ら知見し已り、轉じて能く他を教ふと。我、今是の人民の前に於て、我此の二偈の義を解せずと言はば、此の人民は即ち我を毀辱せん。一切の利養名聞を闕少して、我皆之を失はん』。是の念を作し已り、即便ち彼の摩伽陀國の諸婆羅門・大長者等に告げて、是の如きの言を作す、『我、汝等と共に一時二龍王の邊に往詣し、二偈を説かんことを請ひ、其の義を尋取せん』と。

爾の時童子那羅陀仙、摩伽陀の長者・人民・婆羅門等と共に、左右を圍遶せられ、那羅陀童子仙人を推して最も上首となし、二龍の邊に向ひ、到り已りて告げて言はく、『二大龍王、願はくは我等の爲めに、二偈を説け。我、聞き已り、思惟して義を取らん』爾の時商佉二龍王等、即ち彼の仙の爲めに、二偈を説きて云はく『何こに自在に在りてか、乃至、因緣を盡す』。爾の時童子、那羅陀仙、彼の二龍に告げて、是の如き言を作す『我、今二龍王の邊に於て、此の二偈を受けぬ。今より已去七日を過ぐる外に、當に汝の邊に來りて、偈の意を報答すべし』と。時に彼の二龍王、那羅陀童子仙に白して言はく、『仁者の教の如く、是の如き事を作さん』。

時に那羅陀、二龍王より、偈を受得し已り、還た本處に向ふ。時に摩伽陀の一切の人民、憍薩國の一切の人民、及び鳩留國・般遮羅國の諸人民等、童子那羅陀仙の、商佉龍・幷に伊羅鉢二龍王の邊

【五】那羅陀、龍王の古偈を解かんとして龍所に趣く。

より、二偈を受持し、『今より去、七日を出でなば、還た來りて此に到り、二偈の義を說かん』と謂言へる傳聞し、彼の人民、諸の雜乘――所謂、象車・馬車・牛車――に駕し、及び步人等、相與に雲集す。

爾の時、恒河の此彼兩岸に、八萬四千の衆類有り。閦然として集聚す。皆共に那羅陀仙及び二龍王の、偈を解說する時を聽かんと欲す。時に波羅捺に居住して城に在る諸の六師有り。各自稱して言はく、『我はこれ尊者なり』。所謂、富蘭迦葉・摩薩迦梨瞿奢梨迦・阿耆多祁耆迦摩羅・波羅浮多迦遮耶那・刪闍夷毘羅師誰富多羅・尼乾他若祁富多羅等なり。時に那羅陀童子仙人、卽便ち彼の六師の邊に向ひ、偈の義を問はんと欲し、到り已りて卽ち此の二偈の意を問ふ。而して彼の六師、旣に此の偈の義意を解する能はず。更に復增上して、仙人の邊に瞋恚心を起し、還りて那羅陀仙に反問して、是の如き言を作す『此の二偈に何の意か有る』と。

六 爾の時世尊、初めて正覺を證したまひ、居住して、彼の波羅捺城鹿野苑內、舊仙人林に在す。時に那羅陀童子仙人、自ら心に是の如く思惟し、念言す『此の沙門、波羅捺城鹿苑の舊仙所居の林內に在り。我、今彼の邊に向ひ、此の二偈の意を借問すべし』。復重ねて思惟す、『自餘の沙門及び婆羅門、耆年大德は、久來出家して、一切國王の爲めに師と作るに堪ふ。所謂、富蘭迦葉、乃至、尼乾陀若祁富多羅等なり。我、彼の邊に至り、此の二偈を問へるに、猶ほ解する能はざるを、況んや復此の如き年少沙門の、生來未だ久しからず、出家して始めて爾るをや。我此の二偈の意を問はんに、彼詎ぞ能く答へん』。更に復思惟す、『年少の沙門或は婆羅門も、輙ち輕んず可らず。所以は何ぞや。或は彼の年少沙門の人、或は婆羅門にも、亦聰明なる快智慧者有らん。我今但彼の大沙門の邊に往詣して、此の偈の義を問ふべし』。

爾の時童子那羅陀仙、卽ち佛の邊に詣り、佛の所に到り已りて、佛と共に相瞻て、慰喩面款し、

【六】那羅陀、佛所に至りて偈意を問ふ。

種種の善言、巧語もて、談話し訖已り、即便ち一面に却きて坐す。其の那羅陀摩那婆仙、一面に坐し已り、即ち佛に白して言さく、『大德尊者、沙門瞿曇、我、尊者に一義を諮問せんと欲す。未だ審かならず、尊者、我を許したまふや以不や』。是の時佛、摩那婆に告げて言まはく、『汝摩那婆、所有の問に隨へ。我、當に爲めに解すべし』。時に那羅陀摩那婆仙、佛の許を得已り、即便ち偈を說きて、佛に問ひて言さく、

『何こに自在王在りてか　染著するを名づけて染と爲す　彼云何が淸淨となし　云何が癡の名を得るものぞ』　癡人何の故に迷ふか　云何なる智者と名づくる　何が會して別離し已れるを名けて因緣を盡すとはいふ』

爾の時世尊、彼の說を聞き已り、即ち還た偈を以て那羅陀摩那婆に答へて言はく、

[七]『第六は自在の故に　王に染せらるゝを名づけて染といひ　染無きに染する有るを　是の故に名づけて癡と爲す』　この癡者大水に沒するを以ての故に　故に盡方便と名づけ　一切の方便もて[八]大水を盡くす　故に名づけ智者と爲す』

[九]爾の時童子那羅陀仙、佛より是の如き偈を聞くを得已り、心意開解して、大歡喜を生じ、踴躍身に遍ねく、自ら喩ふる能はず。聞き已りて即便ち奔走して彼の商估の所、及び伊羅鉢二龍王の邊に往詣し、彼の二大龍王の邊に到り已りて、即便ち彼の二龍王に告げて言はく、『汝等龍王、偈を說きて我に問へ』。時に二龍王、依りて二偈を以て那羅陀童子仙に問ひて言はく、『何こに自在王在りてか、乃至、因緣を盡す』。爾の時童子那羅陀仙、還た二偈を以て龍王に答へて言はく、『第六は自在の故に、乃至、名づけて智と爲す』と。

爾の時伊羅鉢龍王、此の偈を聞き已り、心に是の如き思惟、念言を作す、『我、今已に無上世尊を得たり。我今已に賖修伽陀を得たり。我、今已に世尊の出現したまへるを知り、修伽陀を知る。大

【七】第六は、五分律卷十五によるに、第六天の魔王とせらる。

【八】大水。暴流とも譯し、生死に沒在せしむる煩惱の異名。この偈は、すべて前註にいへる五分律傳に比して解讀せり。

【九】那羅陀、佛より得たる偈意を龍王に傳ふ。

聖世尊、今我が爲めに生れ、我が爲に出世し、我が爲に覺悟したまへり』（是の如く再稱す。）

時に伊羅鉢二大龍王、是の如く念じ已り、那羅陀摩那婆に白して言はく、『仁、摩那婆、實に我の爲に說け。此はこれ仙の意なるか、自らの辯才力なるか。他より聞けるが爲めに此の義を解したるか。仙、摩那婆、我、實に今世間中、及び天上に、若しは沙門・婆羅門等、或は天、或は人有りて、能く自らの辯才もて、是の二偈に達せるを見ず。能く自ら說かんこと、是處有る無けん。唯如來無上世尊を除く。或は佛沙門あり、彼等の邊より聞きて、方に辯ぜるか』。

爾の時童子那羅陀仙、卽便ち偈を以て伊羅鉢二龍王に告げて言はく、

『龍王の說くが如く我が辯に非ず　大聖世尊已に出興し　諸相具足して身を莊嚴し　彼能く是の如き辯才もて說きたまふ』

爾の時伊羅鉢龍王、卽ち還た偈を以て仙童子那羅陀に白して言はく、

『大仙の言これ佛語ならば　當に睡臥夢裏に聞くべしと爲んや　若し是分明に對面して承くとせんや　唯願はくは仁今重ねて讃說せよ』

爾の時童子那羅陀仙、親見する所に依り、卽便ち偈を以て、龍王に答へて言はく、

『天人自在の大丈夫は　今波羅㮈鹿苑內に居て　既に無上の法輪を轉じ已りたまふ　猶ほ師子の勝林に吼ゆるが如し』

爾の時伊羅鉢龍王、復更に偈を以て那羅陀童子仙に白して言はく、

『仁今言ふ所の佛世尊は　我聞かざる久しくして今や說くを聞きぬ　既に聞きぬ、仁と相共に詣り　彼の希現せる難思議を觀まつらん　昔覩たり、今復重ねて觀るを得ん　正覺如來の諸相好を　今日始めて更に世に出現したまふ　値ひ難きこと猶ほ優曇花の若し』　多時を經歷して乃ち一たび興りたまふ　清淨なること猶ほ彼の空中の月の如く　諸相具足して體を莊嚴し　正

覺最上にして勝菩提なり』 久遠より曠絶して聲を聞かず 清亮なること猶ほ梵音の響の如きを 若し諸の衆生聞くを得ば 佛に從ひて解脱の門に入るを得ん』

爾の時伊羅鉢龍王、偈を說きて、佛世尊を讃歎し已り、復更に重ねて那羅陀仙に白して、是の如き言を作す『那羅陀仙、仁、佛と言へりや』。時に那羅陀摩那婆仙、龍王に答へて言はく、『我、佛と言へり』。(梵本には再問再答す)

龍王、復言はく『那羅陀仙、是の如き鳴吼は出世甚難なり。所謂、彼の佛は佛世尊なり。那羅陀仙、彼の阿羅呵・三藐三佛陀は、今何方に在すか』。時に那羅陀摩那婆仙、卽ち衣服を整へ、右肩を偏袒し、十指掌を合し、佛の在す方に向ひ、龍王に示して言はく『汝等、龍王、若し知らんと欲せば、彼の佛・(一〇)如來・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀は、今、某方に在す』。時に伊羅鉢龍王、佛の處を知り已り、卽ち衣服を整へ、右肩を偏袒し、右膝を地に著け、佛の在す所に向ひ、十指掌を合し、三たび此の言を稱す『南無世尊・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀』(是の如く三たび說く。)。時に伊羅鉢龍王、那羅陀童子仙に白して言はく、『摩那婆仙、相隨ひて共に彼の世尊・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀の所に向ひ、禮拜供養せん』。時に那羅陀、龍王に報じて言はく、『善い哉、龍王、我等共に去かん』。時に伊羅鉢、幷に及び商佉の二大龍王、自餘の無量の諸龍眷屬、那羅陀仙摩那婆等の八萬四千の諸衆生の輩、佛の所に向はんと欲す。

爾の時伊羅鉢龍王、是の思惟を作す『我、今若し變化の身を以て佛に見えなば、これ我が不善なり。我、今宜しく自許の(一一)報身を以て、往きて世尊に見ゆべし』。

(一二)爾の時伊羅鉢龍王、其の龍宮に至り、自らの報形を以て、佛に見えんと欲し、北天竺、特叉尸羅城(Takṣasila)より波羅捺國に向ふ。强三百六十由旬有り。時に彼の龍王、出でて、佛に見えんと欲し、其の頭已に佛世尊の所に至るも、尾は尙ほ自らの本宮に在り。彼の龍頭、其の狀猶ほ獨樹にて

【一〇】如來は世尊の誤なるべし。

【一一】報身は過去の業に報いたる身、卽ち龍身なり。

【一二】伊羅鉢龍王、佛所に詣る。

造れる船の如く、其の頂は猶ほ象の鼻の水を放つが如く、耳目は猶ほ憍薩羅國の銅鉢の器の如く、口より出せる炎光は猶ほ重雲の閃電を出すが如く、氣息の作せる聲は、雲雷の鳴りて伽茶伽茶の聲を作す如し。而して彼の八萬四千の衆類、一切悉く伊羅鉢に隨ひて行く。而して伊羅鉢、遙かに如來の極大端正にして、光相の非常なるを見、心に歡喜を生ず、乃至、猶ほ虛空中に星の莊嚴顯赫なるが如し。旣に覩見し已りて、佛の邊に向ひ、淸淨の心、正信の心を生じ、踴躍喜歡して、進みて佛の所に向ふ。

爾の時世尊、旣に遙かに、伊羅鉢龍の漸漸にして來るを覩見し、見已りて、告げて言はく、『善來、善來、伊羅鉢龍王、多時を經歷して曾て相見ず。王、今身體安穩なりや以不や。少病少惱なるや。及び諸の親眷も、並に疾無きや』。

卷の第三十八

那羅陀出家品第四十一の下

[一]爾の時伊羅鉢龍王、是の如き念を作す『世尊は已に我が名字を知りたまふ』。復更に重ねて如來世尊に、歡喜を增加し、淸淨心を得、愛敬心を生ず。時に伊羅鉢、卽ち本形を隱し、別に更に化して摩那婆身（Mānava童子）を作し、世尊の前に近づきて、佛足を頂禮し、却いて一面に住し、一面に住し已りて、卽ち更に親しく彼の二偈文を誦し、重ねて佛に問ひまつるらく、

『何こに自在王在りてか　染著するを名けて染と爲す　彼云何が淸淨となし　云何が癡の名を得るものぞ』　癡人何の故に迷ふ　云何なるか智者と名くる　何が會して別離し已るを　名けて因緣を盡すとはいふ』

爾の時世尊、復還偈を以て龍王に答へて言はく、

『第六は自在の故に　王に染せらるゝを名けて染といひ、　染無きに染する有る　是の故に名けて癡と爲す』　この癡者大水に沒するを以ての故に　故に盡方便と名け　一切の方便もて大水を盡くす　故に名けて智者と爲す』

爾の時伊羅鉢龍王、復更に偈を以て重ねて佛に白して言さく、

『何の戒を受持し何の行を行じ　復更に何の業因を作してか　能く人天に於て勝身を受け　最上無邊の利を熏修する』

爾の時世尊、卽ち還偈を以て龍王に答へて言はく、

『老人を供養して他を毀る勿れ　尊長を見んと欲せば時節を須つべし　常に善行及び法語を愛し歎正眞利益の談を聽け』　法を樂しみ深く正菩提を念じ　智慧もて義を分別思惟せよ　實言

【一】伊羅鉢龍王、佛に古偈の意を向ふ。

精苦して梵行を修し 他に於て常に布施檀を行ぜよ』 質直詳審にして意に勤劬し 笑哭の語「言を皆避惡せよ 諂曲憿慢を悉く遠離し 他人と怨讎を作す勿れ』 善言は正念の中に在り若しは聞き若しは知りて心意を定めよ 若し人常に放逸の行有るは 彼の輩は聞くこと無く正思無きなり』 若し能く聖道の因を行ずれば 是を行に依りて口業を淨むと名く 彼等忍辱もて正しく思念せば 多聞廣智の中に在らん』

爾の時世尊、此の偈を說き已るや、其の那羅陀摩那婆仙、卽ち欲法を離れぬ。爾の時 伊羅鉢龍、佛を見、法を聞き、尊顏を瞻仰して、悲喜相交はり、涙下ること雨の如し。

〔二〕爾の時世尊、伊羅鉢大龍王に告げて言はく、『汝大龍王、何の故に忽然我が面を瞻看し、笑ひて復悲しみ、是の如く涙を下すか』是の語を作し已りたまふや、伊羅鉢龍、卽ち佛に白して言さく、『如來世尊、我念ふに、往昔佛有りて出世したまへり、名けて迦葉・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀といひき。我、時に彼の佛法の中に、梵行を修行して、出家人と爲れり。世尊、我彼の時に一草有るを見たり。名けて伊羅(Elā)といふ。我れ時に手を以て彼の草を斫り、取執捉將して、迦葉佛の所に詣り、佛の所に到り已りて、彼の佛に白して言さく、「世尊、若し比丘有り、此の草を斫らば、何の果報をか得ん」。時に彼の世尊、卽ち我に報じて言はく、「汝比丘、知れ。若し人故らに此の草を斫斷せば、彼の人は當に牢固地獄に墮すべし」と。世尊、我爾の時に彼の迦葉・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀の邊に於て此の語を聞きしも、心中に信ぜず、希有奇特の想を生ぜざりき。我、彼の佛の語を取らざるを以ての故に、彼の如來の敎誨を受けざりき。又自ら思惟して、「但我此の伊羅の草を斫るのみ。何の果報か有らん」と、心に是の念を作せり。世尊、我、當時既に彼の波夜提罪(Pāyattikā, 墮罪)を造りて、而して波夜提罪の有るを信ぜず、復此の邪見を捨つる能はずして、命終以後、遂に卽ち長壽の龍中に生じたり。是の故に彼の時、我が爲めに名を立てて、伊羅鉢、伊

〔二〕伊羅鉢龍王、自ら其の本生を說く。

羅鉢と名けたり。我、爾の時還彼處の迦葉佛の邊に於て、彼の佛に問ひて言さく、「大聖世尊、我、何の時に當に此の惡龍の形を脱するを得、何時か當に復人身を得べき」と。是の語を作し已りて、默然として住せり。爾の時、彼の佛、迦葉如來・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀、即ち我に告げて言はく、「汝大龍王、今應當に知るべし。若干年・若干百年・若干千年を過ぎ、若干百千萬億年を過ぎたる後、當に佛有りて世に出興したまふべし。彼の佛を號して釋迦牟尼・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と爲す。彼の釋迦佛は、當に汝が人身に復するを得んを記すべし」と。世尊、我、彼の時是の如き念を作せり、「我、今迦葉佛の邊に於て所說の法戒に違背して信ぜざるを以て、此の龍身を受けたり」と。微かなる善緣を以て、今世尊に値ふも、還戒を持せず。世尊、我、此の如く自らの罪過を見るが故に、自身を呵責して、泣涙啼哭し、雨の如く面に滿ち、世尊に見えて喜ぶ。所以に微笑す。是の因緣の爲めに、我、是の如く念ず、「希有なり、希有なり、未曾有の事なり、是の如きの法よ。諸佛世尊は、乃ち能く是の如く二言有ること無し」。彼の迦葉如來世尊の、我に記を授けたまひし如くんば、「汝大龍王、若干年、乃至、億年を過ぎて後に、當に如來有りて世に出でたまふべし」と。彼の佛の言の如く異有ること無し。世尊、我、是の緣を以て今復佛世尊に問ひまつらん、「我、何の時にか此の龍身を脱するを得、更に何の時にか人身に復するを得ん」と』。

[三]爾の時、世尊、伊羅鉢大龍王に告げて言はく、『汝大龍王、今より已去、若干年、乃至、前の如く若干億年を過ぎて後に、當に佛有りて世に出でたまふ。名づけて彌勒・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀といふ。汝、彼の時に於て當に人身を得べし。時に彼の世尊、汝を度して出家せしめんに、梵行を修行して、諸苦を盡すを得ん』。爾の時世尊、伊羅鉢の爲めに、更に復說法し、其をして歡喜せしめ、勸示教言したまはく、『來れ汝龍王、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依し、五戒を受持せよ。汝、當に長夜に利益を得、大に安樂を得べし』。伊羅鉢龍、既に佛より是の如き語を聞き已り、

【三】佛、伊羅鉢龍王に授記したまふ。

卽ち佛に白して言さく『世尊の教の如く、我、今佛・法・僧寶に歸依し、五戒を受持せん』。

〔四〕爾の時世尊、重ねて更に伊羅鉢を教誨して言はく、『汝大龍王、今應に時を知るべし』。時に伊羅鉢、那羅陀摩那婆に語りて言はく『來れ摩那婆、仁、須らく幾多の金銀珍寶を、意の須ふる所に隨ひて我より之を索むべし。我、當に仁に與ふべし』。而して此の龍女には、仁、所用無からん。所以は何に。此の龍女は、口に一たび氣を出せば、能く世人をして灰土と作らしむればなり』。時に那羅陀、龍王に報じて言はく『汝大龍王、我、亦金銀珍寶をも用ひず。亦復龍王の女をも用ひず。何を以ての故に。我、今佛の邊に諸偈を聞き已り、卽ち諸欲に於て厭離の想を生ずればなり』。爾の時伊羅鉢龍王、佛足を頂禮し、佛を遶ること三匝にして、佛を辭して還る。

爾の時世尊、その那羅陀を最も上首と爲せる、彼の八萬四千の衆等に告げて、次第して爲めに說きたまふ。所謂布施を行じ、戒を持して、天に上生するを得るを教へ、又、欲中に諸過患多きを說きて、厭離を生じて、漏盡を證せしめ、又、出家を教へ、功德を讚歎して、解脫を助成したまふ。而して世尊、那羅陀等を最も上首と爲せる彼の諸大衆が、各各皆歡喜の心を生じ、踊躍心を生じ、柔軟心を生じ、無礙心を得たるを知りたまふ。

爾の時世尊、有らゆる教法もて、他をして眞正の要趣を歡喜せしめたまふ。謂はく、苦集滅道の四聖諦なり。世尊、既に此の四聖諦を將て、種種の方便もて、是の如き生苦、是の如き苦集、是の如き苦滅、是の如き得道を解說顯示し、教誨建立し、分別宣揚して、教行學習せしめたまふ。世尊此の四種聖諦を、種種の因緣もて顯示宣說し、乃至、教行せしめたるを以て、彼の衆等、卽ち其の坐に於て、諸塵垢を離れ、煩惱界を盡くし、諸法中に於て、淨智眼を得、有らゆる集法を、皆悉く除滅して、如實に知見す。譬へば淨衣の垢膩有ること無く、黑毛有ること無きが、染めんと欲する時に隨ひて、諸色を受くるが如し。是の如く、是の如く、彼の諸大衆那羅陀等、彼の坐處に於て、

【四】那羅陀童子、歸佛す。

煩惱を遠離して、悉く諸集を盡し、諸法を證知し、無畏を建立し、諸の疑網を度す。他語に隨はずして、世尊の敎を知り、卽ち幷に佛・法・僧寶に歸依し、五戒を受持す。是の時彼の衆八萬四千は、坐より起ち、佛足を頂禮し、圍繞三匝して、辭して本處に還る。

爾の時童子那羅陀仙、已に諸法を見、已に諸法を得、已に諸法を證し、已に諸法に入り、諸の疑ふ所を度し、諸の惑へる所を度して、復疑網無く、已に無畏を得、他の語に隨はず、已に世尊の法敎の微密を知り、卽ち坐より起ちて、佛足を頂禮し、佛に白して言さく『唯願はくは世尊、我に出家及び具足戒を與へたまへ』と。

爾の時佛、彼の童子に告げて言はく、『善來、比丘、我が法中に入りて、梵行を行じ、正しく諸苦を盡して、其の邊に到らしめよ』。時に彼の長老、便ち出家を成じ、戒行具足す。是の時長老那羅陀比丘、既に出家し已り、具戒成就して、未だ幾時をも經ず、獨行獨坐して、衆鬧を捨て、身口を謹愼して、曾て放逸ならず、精勤勇猛にして、懈怠無きが故に、久しからざる間に、其の善男子が爲せる出家無上梵行もて、彼岸に進み、現見の諸法に於て自ら諸通を證し、證し已りて自知自見自覺し、而して口に唱へて言はく『生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に後有を受けず』と。是の如く了知して、彼の長老、卽ち阿羅漢を成じ、心善く解脫し、慧善く解脫しぬ。而して那羅陀長老比丘、既に阿羅漢無著の果を得、空閑に獨處して、是の如き念を作す『我、今佛世尊の所に詣り、偈を以て佛に問ひたてまつるべし』。爾の時長老那羅陀比丘、晨朝時に房より出で、佛の所に往詣し、佛の所に到り已りて、佛足を頂禮し、却いて一面に坐し、一面に坐し已るや、時に那羅陀、卽便ち偈を以て佛に義を問ひて言さく、

『我今方に昔の阿私陀を驗するに　諦了に語の如くにて實ならざるなし　今復世尊の敎を聞くを得て　諸法の彼岸の邊に渡到す』　既已に家を捨てて能く出家し　復乞食を持て活命を存す

此の行を行じて何の報をか得ん　我今佛世尊に諮問しまつる』

爾の時世尊、即ち還、偈を以て彼の長老那羅陀に報じて言はく、

『汝の問ふ行を行じたる果報とは　此の事は無常にして驗知し難きも　我今汝の爲めに分別して宣ぜん　宜しく精進を發して牢固ならしむべし』凡そ行ずる有るもの聚落に入るや　讃歎と毀辱とに心を平等にし　其の意を亂す有る處を須らく防ぐべくば　當に寂定無上の果を取るべし』行人は常に叫喚の響を觀ずること　猶ほ猛火熾炎の然ゆるが如くせよ　婦人の端正なる容を見ば　應に須らく捨離して染を生ずる勿るべし』諸の欲法に染せざるを以て　彼此各相染する因無し』染無ければ即ち鬪競の緣無し　「世間の有らゆる衆類の輩は　我が身と彼の身と異有ること無く　我が命と彼の命とは等しく共に同じと」是の如く審諦に思惟して觀じ瞋りて時に殺すなく相害する勿れ』應に貪等我慢の事を捨つべし　一切の凡夫は身に染著すれども　諸の有眼者は能く怨を離る　毒藥を食して平等に死するが如し』若し聚落に入りて飯食を乞はば　諸事を觀て心を散亂する莫れ　諸の貪染の處を若し捨捐せば　著無きを以ての故に當に解脱すべし』夜獨坐する時[五]請を念ふこと莫く　聚落を遠離して亦思ふ勿れ　但天曉に至りて乞はんと欲する時は　正念正思もて聚落に入れよ』聚落中に到らば默然として住し[六]次第して家を歷りて乞食して行き　聚落に遊ぶに忽ち嗤ふ莫く　他に向ひて語言するに麁獷なる勿れ』手に鉢盂を執り行きて食を乞ひ　才辯有りと雖も但默然たれ　設し少食を得るも心に嫌ふ莫く　飯を施す有る人を毀罵する勿れ』[七]所得の處を最も善と爲し　若し得ざる處にも瞋を生ずる莫く　二邊に於て平等の心を生じ　樹下に至りて意に隨ひて食せよ』食し訖已りて後林内に還り　樹下に住して趺を結跏し　鋪上に在りては仙人の如くし　身心及び口を皆斂攝せよ』恐怖を皆捨て心意を勸まし　餘事を想ふ莫く唯林を念ぜよ　樹下に在りて當に

【五】獨坐中に「善家に請ぜられて美食美衣を得んこと」を念じ、或は人里の快樂を念ずべからずの意。

【六】貧富の別を見ず、戶每を順次に乞食するが佛制の作法なり。

【七】我の得たる食は、たとへ如何なるものにても最上のものなりと思へとの意。

善く觀ずべく 舌を以て腭を拄へ漸く息を出だせ』 自餘の諸根を悉く調伏して 心意を諸緣に著するを得ざれ [八]境界を悉く遣りて心に存する莫く 穢濁の處を並に須らく捨つべし』 清淨なる眞心もて梵行を行じ 善語の處所を精勤求し 博聞多智には須らく稟承すべし 其れ寂靜離欲者有らば 若し是の如き人には應に親近すべし』 彼の邊に至りて心に信從し 信じ已りて恭敬すること世尊の如くせよ 他家の是非の事を說く勿れ 他人を毀りて自ら讃歎する莫れ』 語言するに大高聲なるを得ざれ 猶ほ猛火を遠處に聞くが如くせよ 是の如く思惟して諸惑を斷ずる 是を比丘出家の法と名く』 [九]作と不作との事に悉く身を離れて 若し能く平等なれば觸處に安し 聖人の行を行ずる應に是の如くなるべし 當に知るべし業は車輪の如くに轉ずるを』 一人に對して聖法を說く時 一人思惟して卽ち證知し 諸根を調伏して獨處に坐し 諸根を調伏して心成就せば 後に名聞は十方に遍ねからん』 此の行は唯空閑なる林に在りて 或は山間及び樹下に坐し 或は河岸池泉の側らに在りて 是の如き處所に坐して思惟す』 智慧を闕少せるは恒に睡眠し 寂定に滿足せるは常に覺悟す 泉の如く池の如く大海の如く寂定の者も亦復然り』 愚癡は人の半瓶の [一〇]泔の如く 智慧者は猶ほ池に滿てる水の如し 智人は復多く言語すと雖も 言語は多しと雖も時を失せず 或は才辯語言の多き有り 復少言なるも審諦なる有り』 是の如く少言なるも亦智と名け これを則ち名けて仙聖人と爲し 是を眞實中道の行と名け 是を寂定にして解脫を得と名く』

爾の時、世尊、此の偈を說き已るや、其の那羅陀、心意開解して、歡喜踊躍す。

[一一]又、有師の言はく、『此の長老那羅陀は、其の本種族姓は迦旃延なり。本姓を以ての故に、衆人稱して大迦旃延と言ふ』。

又復長老大迦旃延は、佛曾て記して言はく、『汝等比丘、今、應當に知るべし。我が此の聲聞

【八】執着の對象となる境界を心に止めず、煩惱雜染の穢濁あるものは皆捨てよとなり。

【九】一方が他を犯罪を「作せり」といふに對して、「我作さず」といひて爭ふ場合をいふ。破和合僧の罪にて、滅諍の法によりて解く。

【一〇】泔。米の汁、しろみづ。

【一一】以下、別派の異傳を揭ぐ。那羅陀と大迦旃延を同一人と見る說なり。

大衆の中に、捷利にして義を取り、廣說有るを聞きて、其の聰敏より、悉く能く領悟し、或は少しく聽受して、能く他の爲めに廣く分別して說く最第一者は、所謂即ちこの大迦旃延比丘是なり』と。

爾の時彼等諸比丘輩、是の語を聞き已り、希有の心を生じ、各相謂ひて言はく、『今此の尊者大迦旃延は、甚だ希有と爲す。心に疑惑を生ずれども、更に人有りて能く我が疑を決する無し。一切諸經の義を解了するもの、唯佛世尊のみなり』とて、即ち佛の所に往き、佛の所に到り已りて、共に佛に白して言さく、『善い哉、世尊。今、此の長老大迦旃延は、往昔曾て何等の善根を種ゑてか、今佛世尊の所に來詣し、即ち出家し、具足戒を受け、阿羅漢果を證するを得たる。世尊、復記したまはく、「聲聞衆中、捷疾利智にして、略說を廣解し、廣言を能く略する、最第一者は、所謂即ち此の大迦旃延比丘これなり」と。我等願はくは之を聞かん』。

爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘よ、至心にして諦かに聽け。我、往昔を念ふに、此の賢劫中、衆生の壽命二萬歲の時、一如來有りて世に出現したまふ。名けて迦葉多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀といへり。爾の時、彼の佛迦葉如來は、法輪を轉じ已り、法幢を竪て竟り、昔の誓願滿足して、自在に大丈夫一切の作事を利辦し、所化を開化して、諸衆生蓮花衆等の八千億類を度し、天上に生ぜしめたり。是の時、彼の佛の入涅槃後に、并に及び建立の解脫法門は、悉く皆、此の波羅㮈城鹿野苑中諸仙の居處に在り、說法して住せり。

爾の時、彼處波羅㮈城に、一信行の善優婆塞有り、五戒を受持して、善く五明を解し、世論を分別して、能く其の義を解せり。彼の優婆塞、鹿苑林に至り、諸比丘に向ひて、略して義を問ふや、是の如く問ひ已れる時、諸比丘は、即ち廣說を爲せり。彼の優婆塞、既に彼等諸比丘輩の、其の爲めに廣說せる是の如き義を聞き已り、心に欣羨を生じて、是の如き願を發しぬ、「善

い哉、希有なり。願はくは、我、來世に更に是の如きに勝る法を得、亦能く是の如く分別して、他の爲めに次第して說くこと、この比丘の如く、等しくして異有る無けん」と』。

爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝等當に知るべし、彼の時の五戒の優婆塞とは、即ち此の摩訶迦旃延これなり。以て彼の佛の邊にて、五戒を受持して、優婆塞と爲り、善く五明微細の義を解し、復能く分別して他の爲めに解說し、彼の時に是の如き誓願を發せり、「願はくは我來世に、是の如き一切諸法を成就し、能く廣く他の爲めに種種に解說せん」と。又復比丘、汝當に知るべし、是の迦旃延比丘は、往昔歡喜心もて、是の如き善根を種ゑたり。是の因緣を以て、我が邊に至り、即ち出家して阿羅漢果を成ずるを得たり。我今記を授けん。我が聲聞大衆の中に於て、略義を能く廣くし、廣義を能く略する第一の者は、所謂摩訶大迦旃延比丘これなり』。

是の時、世間に即ち九十二阿羅漢を成ぜり。第一は世尊、後に五比丘、并に及び長老耶輸陀の身、又、耶輸陀の大富の朋友諸長者等の、勝れる中の復勝れる諸善男子、所謂、無垢・善臂・滿足并に牛主等、又、耶輸陀の、復、他方より來れる五十の商主朋友の諸善男子有り。又復長老富樓那彌多羅尼子、及び其の朋友二十九人と、并に及び長老迦旃延等なり。

婆毘耶出家品第四十二の上[一]

爾の時、北天に一城有り、[二]特叉尸羅(Takṣaśilā)（〔隋〕に削石といふ。）と名く。時に彼の城内に、一家有り。彼の家の婦女、忽爾に男女二人を雙產す。時に其の父母、即ち[三]明師を召し、爲めに之を相せしむ。是の時相師、即ち爲めに之を占ひて言はく、『この女は薄相なり、吉利有ること無し』と。彼の女の父母、此の言を聞き已りて、是の如き念を作す、『此の女、今既に好相有ること無く、則ち吉祥なら

【一】婆毘耶 Sabhiya 又は Sabhika の出家因緣を叙す。Mahāvastu, III. pp. 389—401 Suttanipāta, Sabhiya sutta を參照。而して諸律記事にはこの項を逸す。
【二】特叉尸羅。梵本「大事」は Mathurā とす。以下婆毘耶の素姓を擧ぐ。
【三】明師は相師の誤ならん。

ずば、若し長成するに至りて、當に是れ誰か取りて、其を用つて婦と作すべき』。父母是の如く共に平章し已り、卽ち彼の女を將て、一學問外道の婦に乞ひて、是の如き言を作す。其の外道を〔四〕波梨婆闍(parivrājikā)(〔隋〕に行行といふ。)と名く『我、今汝に乞ふ、此の女を養育し、道法を教示し、其をして增長せしめよ。若し調度供擬を須つ所有らば、我當に悉く與ふべし』。

爾の時外道波梨婆闍、卽便ち彼の女を攝受して養育し、是の如く看視す。其の女漸漸に時に隨ひて長大し、笄年に至るに及び、女の意智成る。時に彼の外道、波梨婆闍の婦、女の大なるを見、卽ち彼の女に種種の呪術、種種の技能を教へて悉く皆成就し、意智に種種の諸論を明辨せしむ。齒の成就するに至り、端正にして雙少なく、多人見るを喜び、身體柔輭にして面目他に勝れ、骨節成熟して身體正等に、缺減する所無し。

爾の時彼の女、身體の上に、一奢稀衣を著して、腰下に在り。一奢稀衣を肩上に披踸し、手中に三奇立拒を執持して、澡洗時の安瓶の所に擬し、處處の村城聚落國邑王門を遊歷して、諸外道を覓め、共に論議せんと欲す。折伏せんと欲せるが故なり。漸漸行きて一波梨婆闍道人に値ふ。名けて最妙自在勝他といふ。處處に遊歷して、南天竺より北天に來往す。時に彼の道人も、亦復喜ぶべく、端正にして雙少なく、年又盛壯にして、人に樂見せらる。面目還爾かく他人に勝れ、身體整頓し、支節喜ぶべく、諸論師に於て、最も名聞を得たり。時に彼の道人、此の波梨婆闍の女の、是の如く喜ぶ可く、端正なる容色の、他の樂觀するところたるを見、見已りて彼の波梨婆闍女人の邊に於て、愛著心を生ず。時に彼の波梨婆闍の女も、亦復彼の波梨婆闍道人の邊に於て、亦染心を生じ、更に相貪戀して、私感已む無し。

爾の時彼の客波梨婆闍道人、卽ち彼の波梨婆闍女に、是の如く語りて言はく、『善女仁者、我が意、今甚だ汝と共に世事を行はんことを願樂す』。是の時、彼の女も亦報じて言はく、『我、今心中に、亦

〔四〕波梨婆闍、遊行者。

仁を貪樂して、一處なるを得んと欲す』。時に彼の波梨婆闍道人、彼の女に報じて言はく、『我等二人は、倶にこれ出家修道の者なり。若し是の如き法中の中に在りて、世事を作さば、諸人等若し我輩の是の如き事を作すを見て、卽便ち我等を訶責毀辱せん。我等、今諸人の前に共に相論議して要誓の言を立つべし。若し如かざるものは、卽ち承事せしめん』。

爾の時彼の女、卽ち是の如く言ふ、『若し我勝を得て、汝脱し如かずんば、此の事不善なり、便ち非理を成す。豈丈夫の女人に事ふる有らんや。若し女如かざれば、丈夫に伏事する、此の事乃ち善し。此はこれ順理なり』。時に彼の波梨婆闍道人、卽ち女に報じて言はく、『善い哉、德女、汝の此の語の義や、甚だ當理たり。汝の所說の如し』。爾の時波梨婆闍道人、卽ち衆の中に於て、論議の鼓を打ち、之に告げて言はく、『此處に頗し人有り、能く我と共に問答するや以不や。若しは或は波梨婆闍道人（parivrājaka）、若しは或は波梨婆闍女人（parivrājikā）、誰か能く我と共に問答語言するぞ、能くするものを善と爲す』。是の如きこと、三たびするに至り、時に彼の波梨婆闍女人、衆中に在りて是の如き語を聞き已り、卽便ち唱へて言はく、『我、今甚だ能く汝と共に論議往來問答せん』。

爾の時彼の女、容儀庠序として、大衆の中に在りて、其の義を發問す。時に彼の波梨婆闍道人、辯を僞して通ずるを得。而して彼の波梨婆闍道人、彼の女に反問し、女も辯して亦通ず。是の如く再過して、各各相問ひ、各各相通じ、第三過に至りて、彼の波梨婆闍道人、彼の女に義を問ふ。其の女能く辯通を僞すの力有れども、但彼の波梨婆闍を護り、心に相愛するが故に、通ぜざるに同じきを現じ、默然として答へず。時に彼の波梨婆闍道人、卽ち衆中に於て、彼女を降伏す。

爾の時彼の女、既に波梨婆闍道人に降伏せられ已り、卽便ち衆に對して、彼の波梨婆闍道人の身手の邊より、其の革屣及び三叉拄を取り、執持して行きぬ。彼等二人、既に相を現じ已りて、是の如き穢亂を各相避けず、共に一處に行き、彼の道人、二和合せるを以ての故に、其の女卽便ち娠體

有り。女、旣に娠む有り、本行に違するが故に、容色を失ひて、復端正ならず。而して彼の波梨婆闍道人、彼の女の身が、本の顏色を失せるを見て、卽ち厭賤を生じ、彼に告げて言はく、『我、復汝と共に一處に居住停止する能はず』。時に彼の女人、彼の波梨婆闍道人に報じて、是の如き言を作す、『我等二人、旣に並に修道せるも、兩ら倶に意を失し、今汝の邊に於て已に此の胎有り。汝、今我の花色有ること無きを見て、忽ち我を棄捨せば、我は當に立ろに死すべし。若しそれ未だ死せざるも、必ず大苦を受けん』。時に彼の波梨婆闍道人、離心旣に決し、彼の女に一の金の指環を與へ、用以つて記と爲し、復女に告げて言はく、『汝、若し女を生まば、此の指環を用つて、貨に易へて財を取り、持以つて養育せよ。若し男を生まば、汝、當に此の指環を與へて記と爲し、我を尋覓せしめよ』。指環を付し已りて、彼の女を捨てて去り、背面して、還南天竺に向ひて行きぬ。

五 爾の時波梨婆闍女人、娠體を懷抱して、處處を遊歷し、經渉して行き、漸漸に摩頭聚落（Madhura?）に至る。時に彼の聚落に、邊地州有り。名けて白雲といふ。彼處に在りて、一縣内に寄りて、一男兒を産む。兒旣に生れ已るや、時に彼の縣内に居住せる有らゆる男子婦人、皆憐愛慈愍の心を生じて、或は彼に酥を與へ、或は彼に油を與へ、自餘の須つ所をも、皆亦布施す。而して彼の波梨婆闍女人、是の如く思惟す『我が今此の子、縣内に在りて生れたり。今名を立つること、還地諮に依るべし』と。是の故に此の子を婆毘耶(Sabhiya)（(隋)に縣官といふ。）と名く。

六 時に彼の女人波梨婆闍、如法に子の婆毘耶を養育し、其をして增長せしめ、乳餔を與ふ。而して婆毘耶童子、長大して意智漸漸に長成せんと欲するに向ふ。而して彼の波梨婆闍女人、卽ち其の子に書畫算數・印記呪術・自餘の諸論を敎へ、悉く敎へて成ぜしむ。而して彼の童子、捷利聰明にして、學ぶ所の事、皆成就を得て、知らざる者無し。時に婆毘耶、曾て一日其の母に問ひて言はく、『阿孃阿孃、我が父はこれ誰ぞ。今何處に在るか』。是の時彼の母、其の子に報じて言はく、『子婆毘耶よ、

【五】 婆毘耶、誕生す。

【六】 婆毘耶、母より父を尋求すべきを遺言せらる。

汝の父は今南天竺國に在り、汝、今宜しく應に彼に至りて、汝の父を尋求推覓すべし』。是の時彼の母即ち其の子に、夫の先に留めて、記と爲せる所の指環を與へ、出して之に附し、之に告げて言はく『汝、此の記を將つて、汝の父を尋求せよ』。而して婆毘耶、即ち母に報じて言はく『一ら母の教の如くにして、我當に依行すべし』。

七 時に婆毘耶、記を受け取り已り、漸漸に發して南天竺に向ひ、村より村に至り、一聚落より一聚落に至り、城より城に至り、漸漸に南天竺の地に向ひ、所至の處に、論議の人を見ては、皆悉く降伏し、漸く父の所に到るも、既に父を識らず、亦借問せず。至り已りて即ち論議の鼓を打ち、是の如き言を作す『此處に、頗し或は復波梨婆闍道人、或は復波梨婆闍の女有りて、能く我と共と是の如きを問答論議する者有りや不や』。時に婆毘耶童子の父、既に親、童子も亦見、即便ち心裏に自然に子を愛する想を生じ、彼の波梨婆闍道人、童子に問ひて言はく『汝善童子、汝は今これ誰れぞや。何よりか來れる』。是の時童子、即ち波梨婆闍道人に向ひ、委曲に其の來れる因緣を說き、指環を出して、以て示現す。時に彼の波梨婆闍道人、指環を見已り、童子に語りて言はく『汝はこれ我が子なり』。時に彼の波梨婆闍道人、既に子を得已り、即ち更に種種の呪術技能を增進して教示す。而して彼の波梨婆闍道人は、先舊時に於て已に曾て諸禪定を修得し、是の如く次第に即ち其の子に禪定の法を教ふ。時に彼の波梨婆闍道人、其の後久しからずして、遂に便ち命終す。

時に婆毘耶、父の命終の後、漸漸に行き至りて、海岸の邊に向ひ、既に彼處に至りて、即便ち草庵を造作して彼處に住し、寂靜に思惟して坐し、久しからずして成就して、四禪を獲得し、兼ねて五通を證し、既に證獲し已りて、心に是の如く念ず『世間の有らゆる諸阿羅漢は、或は復我、羅漢・阿羅漢道を得たりと自稱す。我も、彼の邊に於て、亦羅漢と名くること一種も異ること無し』。

八 時に婆毘耶童子の母、其の命先に終りて即ち三十三天に上生するを得たり。是の時世尊、既已に

【七】父に違ひて法を承く。

【八】婆毘耶、母天より佛を求むるために、二十問を授けらる。

阿耨多羅三藐三菩提を證得し、鹿野苑に在まして、無上の法輪を轉じたまへる後なり。時に彼の地居の諸天、各各迭に相唱へ告げ、其の聲轉轉相承し、上りて三十天に至る。爾の時、忉利なる童子の母天、此の聲を聞き已りて、内心に思惟すらく、『我が子は今日何處に住在せん』。彼、正念に觀じて、卽ち其の子の海岸に在りて住するを見る。爾の時、彼の天の身色他に過ぎ、正しく夜半に當りて、天の光明を放ち、子の住處を照し、婆毘耶波梨婆闍の、行を行ぜる邊に至り、婆毘耶に告げて言はく、『汝婆毘耶は、これ羅漢に非ず、亦復未だ阿羅漢道及び羅漢法に入らず。汝、羅漢に於て、求道せる法未だ次第有らず』。而して婆毘耶、彼の天に問ひて言はく、『天はこれ何誰ぞ。天は今復これ羅漢なりや以不や、羅漢の道法に入れる有りや以不や。頗し復羅漢の法教を知る有らば、能く羅漢を學習し得しむるや不や』。爾の時彼の天、卽便ち婆毘耶に報じて言はく、『汝、婆毘耶、今、世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀有り。現に彼の波羅捺國鹿野苑中仙人の居處に在ます。彼の世尊は自らこれ羅漢なり。羅漢道に入りて、自ら解知し已り、復能く他に羅漢法を得ることを教へたまふ』。時に婆毘耶、復天に問ひて言はく、『仁者大天、我今智無し。何の方便を作してか、乃ち能く彼はこれ多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀なりと知るを得ん』。爾の時彼の天、婆毘耶に教へて、是の如き言を作す、『波梨婆闍よ、汝義法を問ふには、應に須らく是の如くなるべし、「汝は是の如く比丘の名を受けたり。(1)云何が調伏、(2)云何が善行、(3)云何が佛と名け、(4)云何が比丘、(5)云何が沙門(6)及び婆羅門、(7)云何が淸淨、(8)云何がこれ智、(9)及び福田を知る。(10)云何が巧善解(11)方便と名け、(12)云何が仙と名け、(13)云何が聞と名け、(14)云何が隨順、(15)云何が精進、(16)云何が龍と名け、(17)云何が受と名け、(18)云何が聖と名け、(19)云何が行行[九]、(20)云何が求道なるや」と。汝婆毘耶、若し人有り、汝に是の義を問はれて、彼の人、一一汝の爲めに解說し、汝をして歡喜せしめば、汝彼の邊に於て梵行を行ぜよ』。

【九】行行 parivrājaka 出家。遊行者の意。

時に婆毘耶波梨婆闍、彼の天より是の如き文句を聞き、心に憶持し已りて、卽ち遊歷して一切の國城村邑聚落に行き、處處に鼓を打ちて、論議を求欲し、復口に唱へて言はく、『若し沙門及び婆羅門有りて、能く是の如き我が問義を解するや不や』。是の時、至る處に、一人の能く是の如き議論を解する者有ること無し。時に婆毘耶、所行の處に、或は舊と人の坐して法を思惟するあり、或は論議する者あり、婆毘耶の其の邊に來到せるを聞きて、各各散走し、終に一人として敢て彼と共に論議言語談說するもの無し。

時に婆毘耶波梨婆闍、次第に行きて漸漸に彼の波羅㮈城に至る。〔一〇〕爾の時彼の城に六大師有り。各各唱へて言はく、『我、世間に於て最も第一と爲す』と。謂はく、富蘭那・幷に三迦葉・尼乾子等なり。時に婆毘耶、卽便ち彼の富蘭那迦葉等の邊に往詣し、到り已りて卽ち彼の富蘭那(Purāṇa-kāśyapa)と面して、相慰喩し、言語問訊し、言說し訖已りて、一面に却きて住す。

【一〇】六師に就いて、母天授與の二十問を試問す。

卷の第三十九

婆毘耶出家品第四十二の下

時に婆毘耶波梨婆闍、富蘭那迦葉等に義を問へること、上の所說の如し、『云何が比丘なる、乃至、云何が名けて求道と爲すか』と。時に婆毘耶、是の如く迦葉に諸問して語り已るや、迦葉等、言義を領受し、心意錯亂して、報答する能はず。彼の義意に逮及せざるを以て、增復嚬皺し、眉頷赧縮して、現に三分と爲り、心に怨恨を生じ、瞋恚憤怒して、事なきに唱响す。時に婆毘耶波梨婆闍、是の如き念を作す、『此の長老は、我が諸問する所を、微塵等の義をも解して答對せず、又我が意を領するに、倒錯參差して解を得る能はず、文句蹇澁なるに、更に重ねて慚恧し、瞋恨を生じて、事なくして大呼す。

時に婆毘耶波梨婆闍、富蘭那迦葉の邊に於て、厭離を生じ已り、背捨して去り、摩娑迦梨劬奢黎(Maskarī-gosālīputra)及び尼乾(Nirgrantha-jñātaputra)の邊に往き、旣に彼に到り已るや、乃至、尼乾子と共に面して共に相慰喩し、美言もて事情を問訊し訖了り、却いて一面に住し――其の婆毘耶波梨婆闍、尼乾等に如上の所說を問ふ『義に於て云何が名けて比丘と爲し、乃至、道を求むるか』と。其の尼乾子、婆毘耶の是の如き問を得已り、心意錯亂して、報答する能はず。時に婆毘耶、是の如き念を作す、『此の諸長老も、遂に微塵等の義をも解する能はず。我、問ひ已るや心意迷荒して、領解する能はず。復瞋恚を增して、叫喚すること前の如し』と。時に婆毘耶、心に是の如く念ず、『頗し復世間に更に別に人有り、或は復沙門、或は婆羅門あり、世間が是を一切智眞阿羅漢と稱する、是の如きもの有らば、我は彼の邊に往きて心の所疑を問はん。若し領解を得ば、我當に承事供養頂禮して、晨夕に離れざるべし』と。

時に婆毘耶、復是の如く念ず『大沙門、今、波羅捺鹿野苑中諸仙の居處に在ます。世間の人は、智阿羅漢、大に聰慧有りと言ふ。我、今當に彼の沙門の邊に至り、疑ふ所の義を問ふべし』と。彼復更に是の如き思惟を作す『此處の沙門、或は婆羅門は、老年宿德、多時を經來りて、梵行を修行し、各各諸國王と師と作るに堪ふ。世間、各聰明智慧の大阿羅漢と言ふ。所謂、富蘭那迦葉等、及び尼乾子なり。彼等だも我が問を尙ほ自ら知らざるを、況んや此の沙門をや。年少已來、出家して久しからず。我が今問ふ所、云何か解するを得ん』と。復重ねて思惟すらく『彼の沙門も輕忽にすべからず。欺陵すべからず。所以は何に。其れ沙門有り、復年少なりと雖も、或は聰明にして大智慧有るや、知るを得べからず。我、今但當に彼處の大沙門の邊に至りて、心の所疑を問ふべし』と。

[一]時に婆毘耶波梨婆闍、佛の所に往詣し、遙に世尊の、乃至、猶ほ虛空の中に、衆星の莊嚴するが如く、衆中に在まして、法要を宣說したまふを見、見已りて心に信行の想を生ずらく『此は必ず是彼の前に聞ける所の如き、如來・世尊・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀にして異有る無けん』と。即ち佛の所に詣り、佛の所に到り已りて、卽ち世尊と共に對面し、美言巧語もて慰喩し、種種に說言を談じ訖り、坐より却き、一面に退き已るや、其の婆毘耶波梨闍、卽便ち偈を以て佛に白して言さく、

『我はこれ婆毘耶てふ道人なり　故らに他方より遠く來至せるは　心に疑有りて大智を問はんと
欲してなり　唯願はくは我が爲めに分別して說きたまへ』　若し能く我が心の疑ふ所を斷じ
一一思惟して我が爲めに說き　我が義句に依りて次第に解し　分分開曉して參差ある莫れ』

時に婆毘耶、此の偈を說き已るや、默然として住す。但諸佛の法には、旣に三種神通門の說有り、若し化す可くんば、卽便ち之を化す。何等をか三と爲す。第一は所謂出現神通なり。第二は名けて教示神通と爲す。第三は名けて教行神通と爲す。而して世尊、彼の婆毘耶波梨婆闍の心に疑ふ所有

【一】婆毘耶、佛を訪ぬ。

るが爲めに、其の心を知り已り、婆毘耶に向ひて、偈を以て答へて曰まはく、

『汝婆毘耶よ遠道より來りて　我に心の疑惑を問はんと欲す　汝今說くべし我當に解すべし
汝の問ふ所に隨ひて我之を領して　一に問意の如くして差はしめざらん　汝婆毘耶よ宜しく
早く說くべし　必ず心に請はんと欲すること疑惑する莫かれ　一一問の如くに當に廣宣すべ
し』

爾の時世尊、是の偈を說き已りたまふや、其の婆毘耶波梨婆闍、是の如き念を作す、『我、已前に於て、諸處に有ゆる或は復沙門、或は婆羅門の、年耆宿德にして、久來出家し、國師と作るに堪へ、世間が謂ひて、大阿羅漢なり、智慧聰明なりと言へるものに、我、彼等に心に疑ふ所の義を問へり。然も其の彼等は、皆悉く倒錯して、我に報ずる能はず、我が所問の義を答ふる能はざるを以て、其の彼等は、心内に慚を懷き、面を三分と作し、嚬眉皺頟して、瞋恨を生じ、事無きに唱呴したりき』と。時に婆毘耶、心に希有を生ず『此の大沙門は、我の問ふ所を、嗔らず忿らず、淸淨なる容貌の熙怡を增上して、異色を作さず、更に益光顯にして、我の諸問する所を、我が爲めに宣せんことを許す。我は彼の人に於て、諸根寂靜にして、錯有るを見ず』。此の如く知り已るや、其の婆毘耶波梨婆闍は、心に大に歡喜し、踴躍遍滿して、自ら勝ふる能はず。歡喜を得已るや、即偈頌を以て、佛に義を問ひて言さく、

『[二]大聖、云何が比丘と名くる　諸聖の伏するとは何をか伏すると名くる　何事を知見するをか名
けて覺と爲す　唯願はくは世尊我が爲めに宣べたまへ』

爾の時世尊、即ち偈頌を以て、彼の波梨婆闍婆毘耶に答へて言はく、

『苦行無礙にして菩提を求め　諸疑を度して涅槃の岸に向ひ　有の有と無の有を悉く棄捨して
梵行漏盡なるを比丘と名く』　一切の捨處を正念もて行じ　不殺害の世間内に於て　能く淸淨

【二】以下二十問、前揭と少出入あり。
第一問、比丘。bhiksu,
第二問、調伏。suvrata,
第三問、善行。dānta
第四問、覺。buddha.

無濁の體を得　諸縛を免脫するを名けて調と爲す』　若し能く內外に諸根を攝し　此の如く降伏する是を直と名く　此の世及び後世を厭離し　時を待ちて涅槃するを善行と名く』　諸劫中に於て勤苦して修し　生死の二邊を業に隨ひて受け　世間に無垢にして諸縛を離れたるを　是を名けて覺生死窮と爲す』

時に婆毘耶梨波婆闍、說を聞きて歡喜し、復更に偈を以て佛に問ひて言さく、

『(四)何等を名けて梵行を修すと爲す　沙門淸淨とは復云何　佛說の大智は示何が調せん　今世尊に問ひまつる我が爲めに解きたまへ』

爾の時世尊、還偈頌を以て彼の波梨婆闍婆毘耶に答へて言はく、

『諸罪を捨つるを以て垢の纏無く　善く禪定正住の地を得て　獨能く煩惱海を超越する　是を名けて聖梵行の人と爲す』　福德積聚して諸非を捨て　一切の生死除滅するが故に　此の世彼の世に惱無きを知る　此の證を得るを沙門と名く』　諸有の業報悉く滅除し　一切世間の諸內外も　一切の天人も穢す能はざる　是の如きを卽ち淸淨の形と名く』　諸縛皆盡きて拘はる所無く　一切世間の內外の處に　貪・癡・瞋恚の悉く免脫する　佛是を說きて大智人と名く』

時に婆毘耶波梨婆闍、既に說聞を已りて、復更に偈を以て重ねて佛に問ひて言さく、

『(五)諸佛は何を以て福田と爲す　云何が巧知なる善方便なる　云何が名けて大仙聖と爲す　唯願はくは世尊我が爲めに宣したまへ』

爾の時世尊、還、偈頌を以て彼の波梨婆闍婆毘耶に答へて宣まはく、

『諸刹を一一分別して知り　諸梵諸天より供を受くるに堪へ　果報の執著より解縛して脫する　是の如きを乃ち名けて福田と爲す』　業根より報子の從つて生ずる所を　諸梵諸天は悉く分別し　能く諸忍を以て根本を斷ずる　是の如きを名けて巧智知と爲す』　(六)彼此に白淨の因を選擇

【三】覺生死窮。prāptaṃ jātikṣayanta, 生死輪廻の終局に達せること、卽ち再び迷はざる覺に到れること。

【四】第五問、梵行人 brahmaṇa 第六問、沙門 śramaṇa。第十問、淸淨 snnātaka?。第八問、大智人、ajāneya?

【五】第九問、福田 kṣetrajña。第十間、巧知 kuśala。第十一問、善權(mahāvastu は賢者 paṇḍita とす)。第十二問、仙 muni.

【六】(原文)彼此選擇白淨因、一切世間內外有、無我不攝無處所、如是方便名善權。Mahāvastu; Sutta-nipāta 共に文義頗る異り、判讀に由なし。

し一切世間内外の有を　我に攝せざるなく處所なき　是の如き方便を善權と名く』　一切諸法の有無を知り　一切世間に内外無く　此の世に天人より恭敬を得　無礙獨脱なる是れを仙と名く』

七 時に婆毘耶波梨婆闍、既に説を聞き已り、復更に偈を以て重ねて佛に問ひて言さく、

『何を得るを以ての故に名けて聞と爲す　云何が隨順及び精進　云何が名て大龍と爲す　唯願はくは世尊爲めに之を説きたまへ』

爾の時世尊、還た偈頌を以て、彼の波梨婆闍婆毘耶に答へて言はく、

『一切諸法を悉く聞知し　有らゆる諸罪功德等を　超越して復疑惑の刺無く　一切に著せざるとこれを聞と名く』　名色は皆これ虚妄の因なり　内外の根塵はこれ患の本なり　是の如き諸處を解脱し已るを　佛説きて名けて隨順の心と爲す』　一切諸罪の縛を捨離し　地獄の苦を離れんとて須らく勇猛なるべく　彼等を解脱して染著せざる　是の如きを名けて精進の人と爲す』世間の有愛は皆之を遠ざけ　繫縛を解脱して皆悉く斷ち　諸漏已に盡きて復刺無き　是の如き體を名けて龍と爲す』

時に婆毘耶波梨婆闍、既に説を聞き已り、復更に偈を以て重ねて佛に問ひて言さく、

八 『何等を以ての故に名けて受と爲す　云何が聖及び行行と説く　何に緣りてか名けて求道の人と爲す　今世尊に問ひまつる我が爲めに説きたまへ』

爾の時世尊、還た偈頌を以て彼の波梨婆闍婆毘耶に答へて言はく、

『有らゆる韋陀(Veda)を一一選び　或は沙門婆羅門に於て　其の邊より領解し已に證知し　彼に於て各各皆受け取り』　邪見の羅網を截割して斷ち　彼の智復有胎を受けず　三種の相想遲已に除こり　分別を作さざる　これを聖と名く』　正に諸神通を得て已に盡き　平等に一切諸

【七】第十三問、聞 śrotriya。第十四問、隨順 anuvidita。第十五問、精進 virya。第十六問、大龍 nāga.

【八】第十七問、受 vedaka, vedagū。第十八問、聖 arya。第十九問、行行 parivrājaka。第二十問、求道 caraṇa.

法を知り　諸世間に能く達し善く逝く　是の如く解するを行行と名く』　諸法の有らゆる苦報の　若しは上若しは下若しては中間の　名色の境界を能く遍ねく知る　是の如きの人を求道と名く』

九 時に婆毘耶波梨婆闍は、あらゆる世尊に諮問せる義、皆悉く其の本心に稱適し、既に歡喜し已りて、佛足を頂禮し、十指掌を合せて瞻仰し、佛世尊を歎じて言さく、『善い哉世尊、世間の有らゆる六十二見は、皆所用無し。世間中に於て、此等は皆これ虛妄の法なり。我、今無上世尊に歸依す。唯世尊のみ能く悉く分別して知りたまふ、是れ大丈夫なり。唯世尊のみ善解脫法を能くし、唯世尊のみ、能く一切道を知り、唯世尊のみ能く諸の苦海を度り、唯世尊のみ能く永く諸漏を盡し、唯世尊のみ最大の威德有り、唯世尊のみ獨り多く智慧有り、唯世尊のみ能く阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ』と。而して偈を說きて讃ずらく、

『我今大丈夫を頂禮す　實行より放てる光明普ねく照し　能く天人世間の內に於て　善く甘露鼓の門を開き　我が前の有らゆる疑惑の心を　唯世尊のみ能く我が爲めに解きたまふ』　世尊は既に是れ大仙覺なり　諸の塵垢盡きて餘有る無く　其の後更に有身を受けず　一切の生因を皆散滅し　世尊は已に清涼の處を得て　知足淨心もて常に實行したまふ』　是の如く世尊は猶龍のごとく　最大丈夫の金口の說を　帝釋・一切の諸天等　諸仙諸聖皆樂聞す』　世尊は既に是れ眞覺の人　世尊は善能く物を教導し　世尊は能く魔衆を降伏し　世尊は能く諸使の纒を斷じたまへり』　自ら已に度脫して復他を度し　罪福中に於て皆平等に　超越して一切に貪著せず　天人世間を明了に知りたまふ』　唯佛至眞無上尊のみ　已に一切の諸邪道を過ぎ　諸漏の有因を皆滅盡して　猶ほ十五夜の月明の　諸星圍繞して空に遍滿する如く　是の如く世間內の識及び名色壽命等と　王舍所住の諸人民とを照曜したまふ』　山有り名けて毘富羅(Vipula)と

【九】婆毘耶、佛より明答を得て歡喜し、讃佛偈を奉る。

爲すが　一切に最も勝れ最も上と爲す　又諸龍は雪山を最とし　飛行する者には　空最も高く
諸流は海水を最も深と爲し　又諸星の中にて月を最と爲す如し』　若し調伏者に歸命せんと
欲せば　唯無上人に歸命する有るのみ　世間の最勝尊に歸命し　正馭人中の勝れたるに歸命し
無上尊善逝に歸命し　無等等至眞に歸命しまつる』　猶ほ祭祀に火最も尊く　意論には唯呪
術を最と爲し　人中に王は最も自在と爲し　諸河は大海を最も寛しと爲し　諸星にては唯月を
最光と爲し　諸明にては唯日を最も盛と爲す如し』　上下六道善惡趣の　所謂三界諸世間の
一切の有形の天及び人にて　唯だ世尊のみ有りて最も首たり　是の故に我今十指を合し　頭面
に無上尊を頂禮しまつる』

時に婆毘耶、是の如き偈を説きて、如來を讃し已り、復佛に白して言さく『善い哉世尊、唯願はくは世尊、慈悲憐愍して、我に出家を聽し、幷に乞ふ、我に受具足戒を與へたまへ』と。是の時佛、婆毘耶に告げて言はく、『善來善來、汝婆毘耶、我が自説の法行の中に於て、正しく諸苦を盡くして解脱を得んが故に』と。是の時長老婆毘耶の身、卽ち比丘と成りて、具足戒を滿しぬ。其の婆毘耶、出家して未だ久しからず、及び具足を受けて、行住坐臥に、獨にして伴侶無く、曾て染著せず、身口を謹愼し、敢て放逸ならず、求道の爲めの故に、頭然を救ふが如し。是の如く行持して、未だ久しからざる間に、其の善男子、正信勇猛にして、捨家出家し、無上清淨の梵行を欲求して、現見の諸法に、自ら心に證知して言はく『我已に一切の生死を盡し、梵行の報を得、後有を受けず、所作已に辦じて、自ら是の如くに知る』と。其の婆毘耶、既已に是の如き處を證知して、羅漢果を得、心に善く解脱す。是の時、世間に凡そ九十三阿羅漢を成ぜり。第一に世尊、乃至、最後に及び婆毘耶なり。爾の時世尊、成道の後、波羅捺鹿野苑内に在まして、通じて佛身に及び、合して八人、六月十六日に安居し、九月十五日に至りて、合して九十三人、夏を解きぬ。

【一〇】婆毘耶、具足戒を受け、進んで證知し、世に九十三聖興る。

敎化兵將品第四十三の上[一]

[二]爾の時、他方に諸人輩有り、或は處處の諸邑聚落及び諸國土より、各各相喚び、意に並に願樂して、出家を求め、具足戒を乞はんと欲して、波羅捺に來り、佛の邊に到り、世尊に白して言さく、『我に出家して具足戒を受くることを與へたまへ』と。是の因緣を以て、諸の舊比丘、應接に勞乏す。彼等諸人、出家を求欲して、聲響喧鬧なり。此の因緣を以て、世尊を惱亂し、閑靜なるを得ず。

爾の時世尊、一時の間に於て、靜室に獨坐し、是の如く思惟したまふ『今、諸人、四遠他方の聚落國土より來りて此處に至り、意に是の如く念ず、「如來、我に出家受具を與へん」と。是の因緣を以て、其の諸人等、意に規求を欲し、遠來疲惓し、又復我が爲めに擾亂を作す。我、今諸比丘等を遣はし、其をして處處に他方の聚落城邑に至り、一切を敎化せしめ、若し諸人有りて、出家を求め具戒を受けんを欲せば、如法に當に與へしむべし』。爾の時世尊、是の念を作し已り、晨朝時に於て房より出で、此の因緣を以て一切諸比丘衆を集め、既に聚集し已るや、之に告げて言まはく、『汝等比丘、今應當に知るべし。我、卒閑靜寂の室に在りて、是の思惟を作す』とて、上の所說の如くし、乃至『汝等、他方に向ひ、其に出家を與へ、具足を受くることを與へんに、其をして來り、既に自らも勞苦し、復他をも妨亂せしむる勿れ』。是の如く告げ已り、更に重ねて語りて言はく、『我、今汝諸比丘に敎勅す、他方の聚落城邑に至り、若し人有り、來りて出家を求め具戒を受けんと欲せば、汝當に其に出家受具を與ふべし』。復比丘に告げたまはく、『若し彼來りて出家せんと欲する時、汝等應に須らく是の如き事を作すべし。先づ當に其の爲めに、鬚髮を剃除し、既に剃落し已らば、則ち敎へて袈裟色衣を著せしめ、其の衣を著する時、服飾を齊整し、右臂を偏袒し、敎へて衆前に在らしめ、右膝を地に著け、敎へて諸比丘の足を頂禮せしめ、禮し已りて還た起ち、比丘の前に在

【一】佛、優婁頻螺聚落に行化せんとし、先づ敎團成立に伴ふ諸作法、傳道の心得等を示し、次で途中三十賢群、六十雲姓比丘、船師、兵將二女、提婆等を度したまへることを記す。

【二】以下、三歸依による受戒規定の緣を敘す。巴利律(一、一二)は次の獨自遊行の傳道訓並に魔羅試佛譚の後に出す。三歸は三唱すべきものとし、この當時は三歸三唱のみにて受戒とし、後に改めて佛制の具戒を授くることとせられたり。

りて跪坐し、敎へて十指掌を合し、是の如き語を作さしめよ、「我某甲、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依す」と。汝等比丘、今より已後、我が勅敎に依り、若し人有り、來りて出家受戒三歸を求欲せば、即ち具足を得ん』。

[三]爾の時世尊、還た彼の波羅捺城鹿野苑の坐夏に在まし、諸比丘に告げて是の如き言を作したまふ、『汝諸比丘、若し當に知るべし。[四]我、已に解脫を得たり、[五]應に一切諸天人中に於て、汝等、[六]行行すべし。多人をして利益を得しめんが爲めの故に。多人をして安樂を得しめんが爲めの故に。世間の爲に當來の利益及び安樂を求むるが故に。若し行きて他方の聚落に至らんと欲せば、獨自に去るを得よ、二人なる須からず。又復比丘、汝等若し他方の聚落に至らば、多人の爲めに憐愍を生ずるが故に、彼を攝受せんが故に、當に說法を爲すべし。初も中も後も善く、其の義微妙に、具足して缺くる無かれ。汝等比丘、當に梵行を說くべし。諸の衆生有りて、諸塵垢を少くし、結使を薄くし、諸根成熟するも、恐畏らくは正法を聞くを得る能はずば、即ち法相を知るを得る能はざらん』。佛、比丘に告げたまはく、『我、今日より漸く當に移去して、行きて優婁頻螺(Uruvilvā)聚落に向ひ、兵將の村(Senāyanagrāma)に詣るべし。彼等に法敎を說かんが爲めの故に』。爾の時世尊、即ち偈を說きて言まはく、

『比丘よ我今諸苦を度し　已に自利を作し復他を益せり　有らゆる多人は苦未だ除かず　今須らく其の爲めに憐愍を作すべし』　是の故に汝等比丘輩　各各宜しく應に獨自に行くべし　我も今亦復此より移り　頻螺聚落の所に向はんと欲す』

[七]爾の時魔王波旬(Mārapāpīma)、密に來りて佛の所に往詣し、佛の所に到り已りて、即便ち佛に向ひ、偈を說きて言はく、

『汝諸縛の爲めに縛せられ　亦諸天人等の有に同じ　既に一切の繩に繫がれ　沙門よ汝は羅網

【三】 次下、獨自遊行の傳道訓、佛敎傳道史上の第一頁は鹿野の初轉法輪となし、敎團的傳道はこの傳道訓によつて幕を開く。實に注意すべき一章なりとす。巴利律一・一一・一。

【四】 我は汝の誤か。

【五】 ここに「汝等も亦解脫を得たり」の一句を脫落す。

【六】 行行す、遊行す。

【七】 魔王、佛を誘惑せんとす。巴利律大品一・一一・二及び同一・一三に重出。Mahāvastu, III. pp. 415—417

を脫せず」

爾の時世尊、此の偈を聞き已り、卽便ち是の如く思惟して念言したまはく、『此は是れ魔王波旬の語なり』。是の如く知り已り、還た偈を以て魔波旬に報じて言はく、

『我久しく已に一切の縛を脫し　天人の所有は我に悉く無し　我が此の諸縛既に身を離れ　汝波旬を降せり　更に何をか道はん』。

爾の時世尊、重ねて更に偈を以て彼の魔王波旬を毀辱して、是の如き言を作したまふ、

「一切の色聲香味觸は　此は是れ五欲の法にして人を染す　我は今悉く已に一切を除きて　汝惡魔波旬を降し訖りぬ」

爾の時波旬、此の偈を聞き已り、是の思惟を作す『沙門瞿曇は已に我が心を知れり』と。大苦惱を生じて、深く自ら悔恨し、彼の地方より忽然として現ぜず。

八時に諸比丘、同じく佛に白して言さく、『善い哉、世尊、若し人有り、來りて我が所に至り、我等に問ひて、「尊者比丘、何をか沙門及び婆羅門と名くる」と言はば、我等比丘は、彼を聞き已りて、當に彼に云何の報答を作すべきか』。爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『若し人有り、「云何が沙門及び婆羅門」と問はば、比丘よ、出家には是の如きもの有り。汝等比丘よ、若し是れ時なるを知らば、應當に正知すべし、知り已りて當に正心もて觀察すべし』。

爾の時世尊、此の事緣に因り、此の言次に因りて、諸比丘の爲めに、偈を說きて言はく、

『永く諂曲及び我慢を除き　貪恚の欲盡きて貧に處る無き　是の如き淸淨の體性は常なり　彼の沙門比丘は是なり』　諸非漏の盡きたるを梵志と號し　精進苦行するを沙門と名く　彼等は垢盡き塵勞を出づ　是れ眞の出家諸惡を破せる」

九時に諸比丘、此の偈を聞き已り、復佛に白して言さく、『善い哉、世尊、我等比丘の食を乞ふ時、

【八】眞の沙門、婆羅門の義を說かる。巴利律大品にては、樹下靜觀の最初に揭げて、慢心婆羅門の問とせり。Mahāvagga, III. p. 325 同じ。

【九】乞食法を說かる。律傳ん缺く。

須らく何の言をか作すべき。或は復言ひて、「我に食を施せ」と謂はんか。或は復直に「食を布施せよ」と言はんか。我等は云何が方便して食を乞はん』。爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、應に是の如く汝の言ふ所に依るべからず。所以は何に。〔一〇〕須らく物を護る心なるべし』。是の時世尊、偈を以て諸比丘に報じて言はく、

『智人は食を乞ふに言有ること無く　亦指點して食を與へよと云はず　聖者の默然として側立して念ずる　是を乞食眞比丘と名く』　若し智有るもの食を乞ふ時は　但當に諦視して一邊に住すべし　彼の人の若し此の如きを見なば　即ち是れ乞食沙門なるを知る』

〔一一〕時に諸比丘、復佛に問ひて言はく、『若し復人有り、信心を生じ已り、我等に食を乞へ、我等を恭敬せば、我等比丘は、更に何の言をか作さん。「汝大吉利なり」と、彼に語るべしとや爲ん。「汝大安穩なり」と、彼に語るべしとや爲ん。「汝大功德あり」と彼に語るべしとや爲ん。「我、今受け已る、汝多福を得たり」と、彼に語るべしとや爲ん。「汝福あるなし」と、彼に語るべしとや爲ん。我等比丘、當に云何が言ふべき。唯願はくは敎導したまへ』。爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、應に是の如く汝の所說に依るべからず。我、今方便もて汝等に敎示せん。當に是の如く作すべし』とて、偈を以て說きて言はく、

『布施は大福德を增長し　忍辱は一切に怨讎無し　善人は諸非を棄捨し　離欲は自然に解脫を得』　福を修すれば常に安穩の樂を得　求むる所辦じ易く多種饒に　現世には速に寂定心を得　然る後彼の涅槃の處を證す』

爾の時世尊、略して此の偈を說き、諸比丘に、是の如き受食呪願の法用を敎へたまふ。

〔一二〕爾の時彼の諸比丘衆、佛より是の如き敎誨を受け、坐より起ち、佛足を頂禮し、圍繞する三匝にして、意に隨ひて行く。是の時彼等諸比丘衆、各隨ひて去りし後、是の時彼處に護林の神・護樹の

〔一〇〕「須護物心」とは、無言にして立つ警護人の如くなれの意ならん。

〔一一〕受食呪願法を說かる。又律傳に缺く。

〔一二〕諸比丘傳道に旅立ち、林神思慕せることを叙す。又、律傳に缺く。

神・護經行の神有り。林内の空しきを見、樹下の空しきを見、經行所の空しきを見、私に心に諸比丘を思慕せるが故に、佛の所に往詣し、此の偈を説き、佛に諮問して言さく、

『我等諸神は大に戀慕するに　此の林樹の悉く皆空しきを見る　彼の多聞衆比丘僧は
瞿曇釋子よ　今何にか去れる』

爾の時世尊、還偈頌を以て彼の樹林を守護する諸神等に報じて言はく、

『衆等は諸根を調伏し訖り　遊行して彼の衆生を教化せんとて　或は憍薩羅（Kosalā）に往ける有り　或は毘耶離（Vaiśālī）城邑に向ひ　或は阿踰闍（Ayadhyā）國土に詣り　或は金剛大地（Vajji, vrji）方に趣き　他の疑惑心を決斷し　機に隨ひ情を遂ひて説法を爲さん』

[一三]爾の時世尊、波羅捺城の夏安居を竟り、多少の時に隨ひ、然る後重ねて諸比丘等に告げて、更に遊方して緣に隨ひて教化せしめ、而して世尊は、波羅捺城より遊行して、漸く優婁頻螺聚落の所に至りたまふ。是れ昔如來の苦行を行じたまへる處なり。其の村に一大婆羅門有り、名けて兵將（Se-nāyona）といふ。彼の村に達到して、舊と往來せる道路より行きたまふ。教化したまはんが爲めの故なり。爾の時世尊、舊路を行きたまふ時、其の道傍に、一園林の蓊鬱として愛すべきを見たまひ、是の時世尊、路より下り避けて、[一四]深く彼の林に入り、樹より樹に至り、一樹の端正憙ぶべき有るを見て、即ち其の下に坐し、一日消息したまふ。時に彼の林内に諸丈夫有り、伴侶朋友三十人に足る。二十九人は、悉く皆妻有り、唯獨一人のみ、隻身にして婦無し。時に彼の朋友の二十九人、共に此の一無妻の人の爲めに、婦を求覓めて、其の意に稱可するを得る能はず、忽然一箇の婬女を雇ひ得て將來し、其と共に相娛樂せしむ。彼の婬女、即ち彼の人と共に、意の隨に娛樂して世事を行じ、彼等三十の丈夫、並に皆眠睡せるを伺候して、有らゆる好物を皆選擇して取り、即ち將つて逃走す。爾の時、彼の人及び諸朋友、相共に彼の婬女を尋求し、彼の林を遍歷して得る能はず。遂に

【一三】白氎林に三十賢群を度したまふ。巴利律大品一・一四。

【一四】避、「縮藏」に僻とす。

世尊の一樹下に坐したまふを見る。憙ぶべく端正にして衆人樂見す。諸根を調伏して心意寂靜に、已に最上最勝の法を得ること、猶ほ象王の如く、最善最妙なること、彼の大池に清淨涼冷の水を滿たせるが如く、一尋の光有りて、猶ほ金挺の如く、身相具足すること、娑羅樹の、花の遍滿せるが如く、乃至、猶ほ虛空の星宿の如し。

爾の時彼等諸人、見已りて佛の所に往詣し、佛の所に到り已りて、佛に白して言さく『此處に頗し是の如き婦女を見たまはざりしや已不や』。佛、問に報じて言はく、『汝諸人輩の所問の者は、これ何の婦女ぞ、此の婦女は何に緣りてか來れる』。是の時、彼等共に佛に答へて言はく、『大に善し、尊者、我等朋友は合して三十人あり。皆是れ良善なり。此の林に在りて、居停住止す。二十九人は並に皆婦有り。唯獨一人のみ。單身無妻なり。而して我等輩、相共に一箇の婬女を雇得し、共に與へて妻と作し、暫らく娛樂せしめたり。而して彼の婬女、我等歡樂の極、自ら恣に眠睡せるを見、彼の婬女、我等の好物を選み、卽ち將つて逃走せり。我等、亦此の朋友の爲めの故に、亦復各自許の物の爲めに、此の林の內に來り、彼の婬女を求むるなり』。爾の時佛、彼等の人に告げて言はく、『諸男子輩、我、今汝に問はん。意に於て云何。汝等、今寧ろ自身を求むると、寧ろ彼の婬女を求覓めんと欲すると、二事の中、何れを勝れたりと爲すか』。彼等男子、共に佛に報じて言さく、『善い哉、世尊、我等は今若し自身を求むるを、彼を最も勝れたりと爲す。寧ろ彼の婦女を求むる莫かるべし』。爾の時世尊、復更に告げて言はく、『諸善男子、若し是の如くんば、汝等安坐せよ。我、今當に汝等の爲めに說法せん』。是の時、彼等三十の男子朋友伴侶、同じく佛に白して言さく、『唯然り、世尊、一に聖の敎に依り、敢て違する有らじ』。是の時、彼等三十の朋友、佛足を頂禮し、卻いて一面に坐す。

爾の時世尊、其の爲めに次第して如應に說法したまふ。所謂、布施・持戒・行忍なり。乃至、有法

の皆これ滅相なるを、如實に觀察し、既に證知し已りて、猶ほ淨衣の、黑縷有ること無く、垢膩有ること無きが、其の所染に隨ひて、即ち彼の色を受くるが如く、是の如く是の如く、彼等三十の男子朋友は、即ち彼の坐に於て、遠塵離垢し、即時に一切煩惱を滅盡し、諸法中に於て法眼淨を得て、『有らゆる垢法は、悉く是れ滅相なり』と是の如く觀知せり。

爾の時彼等男子、是の如く諸法の相を見、是の法相を得、是の法相を證し、是の法相に入り、是の法相を度し、疑ふ所を除滅して、復惑著する無く、無畏地に到り、他に隨ひて行ぜず、既に世尊の聖教法を知り已りて、坐より起ち、佛足を頂禮して、佛に白して言さく『善い哉世尊、願はくは我等に出家受戒を與へたまへ』。爾の時佛、彼等男子に告げて是の如き言を作したまふ『來れ、汝男子、我が所說の法教の中に入りて、梵行を行じ、正しく苦集を盡くし、苦邊を滅せよ』。是の時彼等諸長老輩、即ち出家を成じて、戒品を具足しぬ。

爾の時世尊、更に彼等の爲めに、法要を說き、慇懃に教誨したまふ。是の時彼等、佛、更に爲めに法教を說きたまへるを以て、誨示の時、久しからざる間に、彼の善男子は、其の正信を以て、捨家し、出家し最上梵行を求め已訖り、自證の神通を現見したる後、口に自ら唱へて言はく『我、今已に梵行の報を得たり、所作已に辦じて、更に復、後世の有を受けず』と。是の如く知る時、彼等長老は、皆羅漢を成じ、心善く解說しぬ。

爾の時世尊、彼の三十の長老朋友に教へて、知證を得しめ已り、遊行履歷して、白氈林（Kalpā-siya）を經、彼の林に到り已りて、深く林中に入り、一樹の微妙喜ぶべき有るを見、即ち其の下に坐して、一日消息したまふ。[一五]爾の時、彼處に忽ち六十の雲種姓の人有り、彼の林の路道の便に從ひて過ぎ、彼等諸人、遙かに世尊の、樹下に坐して、端正憙ぶべく、衆人樂見し、乃至、猶ほ虛空の衆星の莊嚴する所の如きを見、見已りて心に淸淨の正信を得、大歡喜を生じ、歡喜を以ての故に、佛

【一五】雲種姓の六十人を度し給ふ。但しこの記事、巴利律等に見えず。

の所に往詣し、佛の所に到り已りて、佛足を頂禮し、却いて一面に坐し、一面に坐し已りて默然として住す。

爾の時佛、彼等六十の雲種姓の人の爲めに、次第して說法したまふ。所謂、布施持戒を敎行し、乃至、證知なり。彼等長老、一切、皆、阿羅漢果を得、心善く解脫す。是の時、世尊、彼等六十の長老雲姓比丘を敎化し、發心せしめ已り、卽ち捨して去り、更に餘方に遊びたまふ。

巻の第四十

教化兵將品第四十三の下

[一]爾の時世尊、漸漸に行きて、恒河(Gaṅgā)の岸邊に到り、彼に到り已りたまふ。而して恒河畔に一船師有り。遙かに世尊の已に向ひて來りたまふを見て、坐より速かに起ち、急速かに向ひて前み、世尊を迎接して、佛邊に到り已り、佛に白して言さく『善來世尊、何より遠來して忽ち此に到りたまへる。世尊、我を憐愍したまふが爲めの故に、願はくは此の船に上りたまはんことを。我、世尊を度して、彼岸に到り、其の價を取らざらん』。爾の時世尊、卽ち船上に上り、船上に坐し已り、是の如き偈を將つて、彼の船師を教誨示導して言はく、

『汝今善く此の船を曝曬せば　是の如く當に艇の輕利を得べし　若し能く此の慾・恚・惱を捨てなば　必定して速かに涅槃に至るを得ん』　汝[二]慈心を以て此の船を曬さば　其をして輕便に早く疾く渡らしめん　汝今若し能く欲・恚を捨てなば　必定して速かに涅槃に趣くを得ん』　汝悲心を以て此の船を曬さば　其をして輕便に早く疾く渡らしめん　汝今若し能く欲・恚を捨てなば　必定して速かに涅槃に趣くを得ん』　汝喜心を以て此の船を曬さば　其をして輕便に早く疾く渡らしめん　汝今若し能く慾・恚を捨てなば　必定して速かに涅槃に趣くを得ん』　汝捨心を以て此の船を曬さば　其をして輕便に早く疾と渡らしめん　汝今若し能く慾・恚を捨てなば　必定して速に涅槃に趣くを得ん』　若し比丘有りて慈心を行じ　能く世尊佛の教法を信じなば　速かに疾く寂定の處を證し　久しからずして無動涅槃を得ん』　若し比丘有りて悲心を行じ　能く世尊佛の教法を信じなば　速かに疾く寂定の處を證し　久しからずして無動涅槃を得ん』　若し比丘有りて喜心を行じ　能く世尊佛の教法を信じなば　速かに疾く寂定の處を證し　久しからずして無動涅槃を得ん』　若し比丘有りて捨心を行じ　能く世尊佛の教法を信じな

【一】以下、船師を度したる記事。この傳、他に見えず。恐らくは長阿遊行經の渡河奇蹟譚を、此に採用せるものならん。

【二】慈・悲・喜・捨の四無量心に就いて到彼岸の道を說く。

ば速かに疾く寂定の處を證し久しからずして無動涅槃を得ん』

爾の時世尊、此の偈を說き已り、船師に告げて言はく、『汝善男子、水を將つて船に灑げよ』。是の語を作し已りたまふ時、彼の船師の有らゆる俗形は、皆隱れて現ぜず。左手に自然に瓦器の鉢を執り、頭鬚及び髮は、猶ほ七日剃落の比丘の如く、行步威儀は、猶ほ百夏の上座の如く異なる無く、是の如く成就して、卽ち出家を得、具足戒を受けぬ。

爾の時世尊、彼をして歡喜を生ぜしめんと欲するが爲めの故に、復更に彼の爲めに增加して說法したまふ。而して彼の善男子、久しからずして、梵行を行じ訖れるを以て、自證の法を現じ、諸通を得んことを求め、生死を捨てんと欲して、淨行を修し、所作已に辦じて、自ら言はく、『我、更に後有を受けじ』と。而して彼の長老、阿羅漢を成じて、心善く解脫しぬ。是の時、長老を、佛、敎誨し已りたまふや、他方に行きて、化を衆生に傳へしめたまふ。

爾の時世尊、彼の長老船師比丘に敎へて、行き去らしめ已り、獨一身にて在まし、更に二件無くして、漸漸に彼の優婁頻螺聚落の所に至りたまふ。[三]爾の時忉利帝釋天王、是の如き念を作す『如來は今何處に在ますや』と。而して自ら觀看して、如來の、獨自無人にして、彼の優婁頻螺の所に向つて去りたまふを見、旣に觀見し已るや、是の時帝釋、卽ち自ら身を隱し、化して意ぶべき端正にして衆人の樂見する梵志摩那婆の形と作り、頭上の螺髻を用以つて冠と爲し、身に黃衣を著し、左手に純金の澡瓶を執持し、右手に雜寶の杖を擎持して、如來の前に在り、卽ち佛より三衣と鉢盂とを取りて、先に行く。時に彼の帝釋の、前に在りて路を行くや、若し州縣聚落國城に値へば、卽ち神通を以て虛空に飛騰して、州縣聚落村邑を圍遶する各各三匝、三匝し訖已りて彼の上に停まる。爾の時彼の化摩那婆身は、是の如く端正に、是の如く意ぶべく、人の樂觀する是の如き威德を爲す。見已るや、衆類百千萬衆、雲雨集聚し、各彼に問ひて言はく『汝摩那婆、是れ何處の人ぞ。誰が家

【三】天帝釋、童形に化して佛に隨從す。又他傳に見えず。

の種族ぞ。兄弟の姓字は云何、云何にして來れるか』と。時に摩那婆、卽ち偈頌を以て彼の諸人等に報答して言はく、

『世間の丈夫の知足にして　自ら能く覺悟して世に無雙なるを　阿羅漢善獨行と名く　我今彼の爲めに弟子と爲れり』　衆生は煩惱の海に沒溺し　困苦するのみ、出でて邊に到る能はず　彼今爲めに法の船師と作りて　旣已に自ら度して彼をも度せんと欲したまふ』　其の世間の能度者に　我れ侍者と爲りて後を逐ひて行く　彼旣に能く慾と貪と恚とを盡し　無明の黑闇亦破裂し　世間の有漏盡く除滅す　我れ弟子となりて供承す』　世間に最妙にして比雙無し　何に況んや勝上者有るを得んや　如來世尊は今出現したまふ　我爲に親侍して東西に隨ふ　世間の是の如き無上尊は　今日此に來至せんと欲したまふ』

時に天帝釋、是の偈を說き已るや、如來世間、卽ち其の前に到りたまふ。而して衆人は、如來の是の如き憙ぶべき殊特と、人に樂觀せらるゝと、乃至、身體は猶ほ虛空の衆星の莊嚴の如きとを見、大衆、見已るや各相謂つて言はく、『此の如き師は、此の弟子に堪へ、是の如き弟子は、是の如き師に堪ふ』と。而して世尊は、彼等諸人の爲めに、微妙の善巧を作して法義を密敎言說したまふ。

爾の時、彼の諸の一切人中に、或は如來の此の妙法を說きたまふを聞きて、或は發心して出家を求むる者有り、或は[四]須陀洹果・斯陀含果・阿羅漢果を得る有り、或は復未來世の爲めに、[五]聲聞乘中の種子因緣を作す有り、或は復未來世の爲めに、緣覺乘中の種子因緣を作す有り、或は復未來世の爲めに、菩薩乘中の種子因緣を作す有り、其の中、或は三歸依及び五戒を受くる者有り。

[六]爾の時世尊、天主帝釋を發遣して去らしめ已り、食を乞ふの時至るや、衣を著け鉢を持ち、獨自に行きて食を乞はんと欲し、漸漸に彼の大兵將村に至り、彼の邑に入り已るや、卽ち兵將婆羅門の家に詣り、其の家に到り已りて、卽便ち其の門內に進入し、座を鋪きて坐したまふ。

【四】　須陀洹(Srota-āpanna)。預流と譯す。初めて聖者の流類に入るの義。斯陀含(Sakṛdāgāmin)。一來と譯す。天人の間を一往來して後に得果するの義。阿那含(Anāgāmin)。不還と譯す。再び欲界に還らざるの義。阿羅漢(Arhan)。應供と譯す、他の供養に應に得るの義。以上の四に各各向と果とありて、四向四果となる。この四果は聲聞(Śrāvaka)の得益なれば、或は四沙門果といひ、或は聲聞四果といふ。大乘菩薩の徒は、之を以て小乘果と爲す。

【五】　聲聞乘(śrāvaka-yāna)緣覺乘(pratyekabuddha-y.)菩薩乘(bodhisattva-y.)を合して三乘といふ。乘は法をいふ。吾人を彼岸に運載するの義に取る。三乘は順序の如く、四諦・十二因緣・六波羅蜜なり。前二は小乘、後一は大乘なり。

【六】　兵將婆羅門の二女を度して僧女としたまふ。(この傳、衆許摩訶帝經卷九初に類傳を見るのみ、他に傳はらず)。二女のこと、本國譯、本緣部二、三八五頁以下に前出せり。二女の內波羅は前に婆羅とするもの正し。

爾の時、兵將大婆羅門に二女有り、一を難陀(Nandā)と名づけ、二を波羅（Balā）と名く。時に彼の二女、出でて佛邊に向ひ、佛の所に到り已るや、佛足を頂禮し、却いて一面に住す。爾の時世尊、彼等の心行所趣の結使、已に薄く、[七]諸界を知り、諸入を知れるを知り已りて、四諦法を說きたまふ。是の如く說き已りたまふ時、彼の二女、佛の說法を聞き、二十重の諸見の山を破り、即時に須陀洹果を證するを得たり。彼等女は法の實相を見已るや、佛に隨ひて三歸五戒を乞ひ受け、既に戒を得已りて、即ち佛の手より鉢器を取り、好色香・美味の具足せる種種の飲食を將つて、鉢中に滿盛し、以用つて佛に奉る。爾の時世尊、彼の食を受け已りて、村より出でたまふ。

[八]爾の時提婆(Deva)大婆羅門、他より彼の大沙門の此に來至したまへるを傳聞し、聞き已りて即ち是の如き思念を作す『我、昔曾て彼の大沙門に飲食を施すを許されんことを請へり。我、今薄財にして貧賤困乏なり。當に何の計をか作すべき』。而して彼の提婆大婆羅門、此の言を聞き已り、速疾かに還りて、自己の家に向ひ、自家に到り已りて、其の妻に語りて、是の如き言を作す『昔、大沙門の、優婁頻螺聚落に在まして苦行したまへる時、我、食を彼の大沙門に施さんことを願へり。今日此に至りたまふ。當に何の計をか作すべき』。彼の妻、夫提婆に報じて言はく、『乞ふ、說ふ所を聽け。未だ爾るや否やを審にせず。我、憶ふに往昔年少の時、是の時兵將大婆羅門、曾て我に弄れ、世事を欲求せり。我、時に聽かざりしかば、彼、暫らく指觸せるのみ。今聖夫、我を將つて彼に與へて、世事を行ぜば、其より隨ひて多少の錢物を索め、以て彼の大沙門の爲めに食の布施を作すを得ん』。爾の時提婆大婆羅門、其の妻に報じて言はく、『此の事然らず、我婆羅門は、理として、是の如き事を作す合からず』。然るに其の提婆大婆羅門、別に思惟し已りて、即ち兵將婆羅門の邊に詣り、彼所に到り已りて、即便ち白して言はく『善い哉、兵將、唯願はくは我に五百錢を借貸せよ。若し我能く償はゞ、此の事善い哉。脫し償ふ能はずんば、我が夫婦二人は、詳かに共に悉く汝の家

【七】界入は萬有分類の術語。即ち十二入・十八界なり。十二入とは六根・六境をいひ、十八界とは六根・六境・六識をいふ。

【八】提婆婆羅門の歸佛。又、本國譯、本緣部二、三七五頁以下に出づ。參看。この傳、他傳に見えず。

に入りて、汝の爲めに力を作さん』。爾の時兵將大婆羅門、卽ち提婆婆羅門に、錢の足滿五百を與へ、之に語りて言はく『汝、今將つて去り、意の所用に隨へ。其の事、若し訖らば、更に傳へて他より借貸して、持以つて我に償ふを得ざれ。汝の所要の如く、身自ら力を出だし、錢を覓めて我に與へよ』。

爾の時提婆大婆羅門、兵將の邊より、法に依りて五百錢を受取し已り、自己の家に至りて、其の妻に付與し、付し已りて語りて言はく『汝、宜しく精好に飲食を備辦すべし』と。身は卽ち自ら外林中に詣り、佛の邊に往き、佛の所に到り已りて、佛と共に對顏し、言語慰喩し、起居を問訊し訖已りて、一面に却いて立ち、如來を請ぜんと欲す。

爾の時提婆大婆羅門、卽ち佛に白して言さく『善い哉大德、沙門瞿曇、唯願はくは我が明日の飯食を受けたまへ』。是の時世尊、默然として受請したまふ。爾の時提婆大婆羅門、佛の默然として其の請を受けたまふを知り已りて、坐より起ち、佛を遶る三匝して、佛を辭して去り、自己の家に至る。是の時、城內の一切の巷陌、皆熟食を賣る。爾の時提婆大婆羅門、卽ち彼の夜に於て、多種の甘美なる飯食——是の如き噉嚼唼嗽嚩唊を嚴備す。其の夜、悉く是の如き諸味を辦じ、夜を過ぎて天明に、家內を灑掃し、牀座を鋪き訖り、卽ち佛の邊に至り、長跪諮白して、是の如き言を作す『大いに善し沙門、若し時を知りたまはゞ、飲食已に辦ぜり、願はくは我が家に赴きたまへ』。

爾の時世尊、旣に食時に至りしかば、衣を著け鉢を持し、漸漸に行きて、彼の提婆婆羅門の家に至り、其の家に到り已りて、鋪に隨ひて坐したまふ。爾の時提婆、佛の坐したまふを見已り、夫婦自ら手に多種の微妙淸淨なる衆味の飲食を擎持して、佛前に立ち、以て世尊に奉りて『唯願はくは如來、自ら恣に食したまへ』といふ。是の時提婆、佛に食を奉り訖り、別に佛の邊に座を鋪きて坐す。坐し已るや、世尊、卽ち提婆大婆羅門の爲めに、如應に說法し示現し敎誨し、歡喜せしめ已りて、

坐より起ち、意に隨ひて去りたまふ。爾の時、提婆大婆羅門は、佛を送りて出づ。

其の提婆の妻は、他より衣を借り、著けて佛に食を奉り、佛を供養し已りて、佛の出でて還りたまふを見るや、卽便ち衣を解きて一處に置き、地を掃除す。時に一賊有り、忽爾に來りて其の衣を偸み將つて去る。時に提婆の妻、衣を失へるが爲めの故に、心に大いに愁惱す。時に其の提婆、佛を送りて家に還り、其の婦の心の大いに擾亂せるを見、卽便ち問ひて言はく、『汝、今何が故に、是の如く煩惱するや』。妻、夫に報じて言はく、『聖夫、當に知るべし。我が借りし所の衣、誰か偸みしを知らず、忽然として失せ去りぬ』。是の時提婆、此の語を聞き已りて、心地迷悶し、爲す所を知らずして、是の如き言を作す、『我は以に他より五百錢を貸り、用つて供具を爲し、汝は今他より借りたる衣を著して、忽ち復失ひ去る。我が家は貧短なり。何を以てか賠償せん。當に何の計もなかるべし』。

爾の時提婆、自死を求めんと欲して、卽便ち往きて屍陀林(Śītavana)中に至り、大樹の上に上り、自ら地に撲んと欲して、墮つる能はず、卽ち復大いに愁ふ。然るに彼の賊人、其の衣裳を執りて、屍陀林に至り、忽爾として還り來りて提婆の上れる所の樹下に在り、地を掘りて之を埋め、土を以て上を覆ひ、上に大便を放ち訖りて去る。時に彼の提婆、樹上に在りて遙かに此の事を見、賊の去れる以後に、樹より下り、掘りて其の衣を取り、還つて將つて舍に向ふ。時に提婆の婦、舍內を掃除し、處處を分除するに、其の屋の一角、忽然自ら陷る。低頭して地下を觀視するに、一の赤銅瓶有りて、其の中に金を滿せるを見、乃至、略說するに、第二瓶を見、第三第四も、悉く皆是れ瓶なり。更に復其の下を觀看するに、更に一の赤銅甕に、亦中に金を滿せるを見る。彼、金を見已りて、卽ち大驚叫し、夫に指示して言はく、『聖夫聖夫、速かに來れ、速かに來れ、我已に得たり』。爾の時提婆、婦の聲を聞き已り、是の思惟を作す、『此の婦は怜れむべし。何の故にか失心して是の如く

誑語して、「我已に得たり」と云ふも、何物をか得たる。其の前に他處より借れる衣を失ひ去れり、我、今已に衣を得て、現に此に在り。其れ何の故にぞ唱へて、「我已に得たり」といふか』と。是の時提婆、衣を將つて家に入り、其の妻に問ひて言はく、『居家の善者、汝何の得る所ぞ』。彼の婦、即便ち其の金を指示し、聖夫に語りて言はく、『我此を得たり』。是の時提婆、復妻に語りて言はく、『汝の失へる所の衣は、我、亦得たり』。而して彼の婦女、其の衣裳を取り、所借の處に向ひて、其の主に還歸す。

爾の時提婆大婆羅門、是の思惟を作す、『我、今獨自に多許の金を淹めて消食する能はず』と。即便ち五百錢を携將し、直ちに還た兵將婆羅門の邊に向ひて、其の債を償はんとて、到り已りて彼の大兵將に語りて言はく、『我、仁者より五百錢を貸りたり。今以て汝に還さん』と。是の時兵將、提婆に語りて言はく、『我、前に汝に「他より錢を擧げて我に償ふを得ざれ。唯自家の身力を出して我に償へ」と語れり』。提婆、復言はく、『我は他より此の物を貸取せず』。兵將、復問ふらく、『汝は何より得たる』。提婆、報じて言はく、『我は地より此の金藏を得たり』。彼、承信せず。爾の時提婆、即ち兵將を將ゐて、自己の家に到り、其の金藏を示す。爾の時兵將、其の金藏を見るに、是一聚炭なり。提婆に語りて言はく、『汝、何の狂ぞや、我に語りて是の炭、用つて金相とは作す』。是の時提婆、復更に重ねて彼の兵將に語りて言はく、『此は實に眞金なり。是れ火炭に非ず』。是の如くに再過し三過し、手を以て彼の金藏に觸れ、唱示して言はく、『此は是れ金にして炭に非ず』。復誓願を作すらく、『我が如き、善業の因縁力の故に、此の金を得たり。乞ふ兵將に示さん』。婆羅門、是の如き語を見已るや、炭即ち金と爲る。

爾の時兵將、此の地藏の、悉く皆是れ金なるを見、見已りて復彼の提婆に問ひて言はく、『仁者、汝、今何誰をか供養せる。天たりや、仙たりや、幷に及び善人たりや。而して彼、汝に是の如き願

報を與へたるぞ』。提婆報じて言はく、『我は今日家に唯是の大沙門の、宅内に來たまへるを供養して、飯食を奉施せるのみ。或は應に彼の功德の果報に藉りて、當に此を成ぜるなるべし』。是の時兵將、提婆に報じて言はく、『汝が、今得たる所の此の金藏は、悉く皆是れ彼の善業の因緣の故に、此の報を生ぜるなり。人の能く奪ふ無く、人の能く斷ずる無し。汝、疑を作す莫く、安隱に食せよ』。爾の時提婆、是の如き念を作す『我、大沙門に食を布施せるを以て、是の如き大功德の報を生ぜるなり』とて、心に歡喜を生じ、踴躍すること無量、其の體に遍滿して、自ら勝ふる能はず。復佛の邊に詣り、到り已りて、佛と共に對論美言し、慰喩問訊し、種種に說き已り、却いて一面に坐す。

爾の時提婆、重ねて佛に白して言さく、『願はくは大沙門、我が明日更に食を奉施するを受けたまはんを』。世尊默然として、還其の請を受けたまふ。是の時提婆、佛の默然として其の請を受けたまへるを見已り、坐より起ち、佛を遶る三匝して、辭退して還り、自家に至り已る。城內の街巷、一切悉く皆五熟ありて賣ること、上の所說の如し。乃至、食飯を佛に施しまつりて已後、妻と共に二人、佛前に在りて、座を鋪きて坐す。法を聽かんと欲するが故なり。佛、彼等の心行體性の、諸使薄少なるを知りて、爲めに[九]四等の諸の法相門を說きたまふ。彼等聞き已りて、二十重の我見の山を却け、卽便ち須陀洹果を證得す。彼等、旣に法の實相を見已り、卽ち三歸を受け、五戒を奉持す。爾の時世尊、坐より起ち、意に隨ひて行きたまふ。

[一〇] 後に一時、諸比丘等、心に疑ひて各念じ、共に相問ひて言はく、『彼の提婆大婆羅門、幷に及び妻等、先に何の業を作してか、業を造り已りて是の果報を得、如來の邊に至りて、諸の聖法を證せる。復何の業を作してか、今世貧窮にして、還卒ち大いに富める』と。時に諸比丘、是の如く語り已りて、卽ち佛の所に詣り、佛の所に到り已りて、卽ち諸問して言さく、『善い哉世尊、彼の提婆大婆羅門幷に及び妻等、昔何の業をか作し、業を造り已りて、此の果報を得、復佛の邊に至りて諸の聖法を得

【九】四等。慈悲喜捨の四無量心をいふ。

【一〇】提婆婆羅門の本事譚。

たる。更に何の業をか造りて、先に貧しく後に富むこと、一旦にして是の如きぞ』。爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘よ。若し聞かんと欲せば、今應に諦かに聽くべし。彼の提婆大婆羅門は、亦過業有り、亦現業有り。何等をか名づけて過去の業と爲す。諸比丘知れ。我念ふに往昔此の賢劫中、是の時の衆生二萬歳なり、佛有りて世に出でたまへり。號して迦葉・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と曰ひ、十號具足したまへり。時に迦葉佛、已に法輪を轉じ、生死の岸を度し、法幢を竪立し、昔の誓願を滿じ、最丈夫と成り、衆生を開化して無量千億を善道に住せしめ、還此の波羅捺城の、昔聖處所の鹿野苑中に居在したまへり。爾の時還彼の波羅捺城に一人有り、佛の邊より三歸五戒を受け、其の生中に布施を行ぜず、命終の時、心に是の願を發せり『迦葉如來、彼の菩薩、名づけて護明(Jyotipala)と曰ふに、[一]記別を授けたまへり。言はく『是の菩薩は、當來世に於て、衆生百年の壽命の中に、佛を成ずるを得て、釋迦牟尼・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と號せん」と。願はくは我、彼の世尊に値遇せんことを』。是の因緣を以て、汝等當に知るべし。爾の時の彼の三歸五戒を受け、布施を行ぜざりし優婆塞とは、今の此の提婆婆羅門是れなり。其は彼の時に此の三歸を受け、五戒を護持して、優婆塞と爲り、命終に乞願して、我に値はんことを願へり。是の因緣を以て、今我に値ふを得たり。復彼の時、布施を行ぜざりしを以て、今貧の報を得たるなり。此は是れ過去に造作せる所の業なり』。

『比丘、當に知るべし、何者をか名づけて現在世の業と爲す。我、昔六年苦行せし時、彼の提婆、宜しきに隨ひ食を將つて我に布施せり。我、今無上菩提を成ずるを得るや、其れ復我を請じて、已が家に至り、我に食を布施せり。是の因緣を以て、現在の報を得たるなり。是の故に汝等諸比丘輩、應當に須らく佛法僧の邊に向ひ、恭敬希有の心を生ずべし。當に是の如き功徳果報を得べきこと、猶ほ提婆婆羅門の、身に現に其の福を受けたるが如くならん。報を得ざるは、慳貪の人にして布施

【一】記別とは將來の得果の豫言なり。

するを肯んぜざるを以て、今貧賤困苦の患を受くるなり。汝等比丘、當に是の如く學ぶべし。

世尊、自ら波羅捺國より、優婁頻螺聚落に來至したまふ。其の中間に於て、八萬人有りて佛の教化を受け、諸法の中に入りぬ。

迦葉三兄弟品第四十四の上[一]

[二]爾の時世尊、是の如き念を作したまふ『我、今先づ一箇の得通の人を教化し、其をして歡喜せしむべし。彼歡喜し已らば、應當に次第に廣く多人を化すべし』。是の時、優婁頻螺聚落の其の中に、三螺髻梵志仙人の居止する有り。第一は所謂優婁頻螺迦葉(Uruvilvā-kāśyapa)、五百の螺髻弟子を教授し、仙法を修學して、首と爲り、匠と爲り、導と爲り、最も前に在りて行く。第二を名けて、那提迦葉(Nadī-kāśyapa)と爲す。復三百の螺髻弟子を領して、首たり導たり。第三を名けて、伽耶迦葉(Gayā-kāśyapa)と爲す。復二百の螺髻弟子を領して、首たり導たり。合して千人有り、彼の兄弟に隨ひて、仙法に修學す。

爾の時世尊、是の如き念を爲したまふ、『今此の優婁頻螺迦葉は、其の聲、摩伽陀國に遍滿す。彼處の內外一切の人民、並に謂ひて言はく、「其れ是れ阿羅漢なり」と。我、今先づ彼の優婁頻螺迦葉を化し、其をして歡喜せしむべし。彼、歡喜し已らば、當に多人の、其の教法を受くる有るべし』と。佛、復思念したまふらく、『此等の諸仙は、何を以てか重しと爲すぞ。彼の行はこれ何ぞ』。念じ已りて卽ち彼等が唯苦行を用つて尊と爲し、其の次に則ち衆を領するを以て重しと爲すを知りたまふ。

[三]爾の時世尊、本形相を隱して、卽便ち苦行の身を化作し、頭上に髮を結び、螺髻もて冠と爲し、兼ねて復五百の梵志摩那婆子を化作し、以て徒衆と爲したまふ。悉く皆憙ぶべく、端正雙無く、人

【一】摩竭陀國に千人の弟子を擁して盛名ありし事火婆羅門迦葉三兄弟を度して、大に佛の偉德を世に知らしめられたることを記す。佛陀の名この時より大に擧る。從つてこれが教化に盡されたる佛陀の努力は實に甚大となすべく、古聖典文學に在りても、梵天勸請と相並べて、特に奇蹟的筆致を以てその苦心を表象せるもの、實に所以ありとすべし。

【二】自法を頒つ第一歩として、先づ當時の代表的宗教家を化せんとし、三迦葉をこれに選ばる。

【三】三迦葉の意を捉ふるために、苦行者となりて訪れ給ふ。

の樂見するところたり。左右を圍遶し、神通を以て彼の優婁頻螺迦葉の聲の聞かるゝ處に飛到し、地に下りて住したまふ。爾の時、彼等一切の諸仙は、化衆を見已り、悉く各忽遑として、東西に馳走し、或は鋪設を安置する者有り、或は足を洗ふ有り、或は草庵に入りて拂拭整頓するあり、或は草を將つて席と作して鋪設する有り、或は水を取り、以て澡洗に擬する有り。又復各各彼等に告げて言はく、『汝等、今何より忽ち來りて、此に至るに、先に相告知せざる。汝等何ぞ先に使を遣はし、「我、來らんと欲す」と道はざる。我、若し先に知らば、當に預め設を置くべかりしなり。是の故に汝等當に少時住すべし。我等、種種の供擬を辦具せん』。世尊、既に一切諸仙が、心に願樂を生じ、悉く佛たるを知れるを知り已りたまふや、爾の時世尊、還神通を攝して、本行に復し、獨立して住したまふ。時に彼の諸仙、既に世尊の、鬚髮を剃除し、身に袈裟染色の衣を著したまふを見、是の時優婁頻螺迦葉、是の如き念を作す、『此の大沙門は大に威神有り、大に威德有り、然も其は未だ阿羅漢果を得ず。我が如きは、今日此に在りて住す』。此は是れ如來が、最初に先づ出したまへる神通の法なり。

四 爾の時優婁頻螺迦葉、卽ち佛に白して言さく、『善し大沙門、仁は今何より遠來して此に至れる。善し、大沙門、仁今若し當に此の我住處を願樂すべくんば、仁の須つ所に隨ひて、我、當に供給すべし。又、仁意に何處所に坐起眠臥するを樂みたまふか。此れ是の草庵、此れ是の草堂を、任意に選み取りたまへ』。是の語を作し已るや、佛、優婁頻螺迦葉に告げて、是の如き言を作したまふ、『善い哉、迦葉、五 汝、若し辭せず、能く敬重せられなば、我、汝の火神(Agni)を祭祀する處所に入りて安居せんと欲す』。爾の時、優婁頻螺迦葉に一弟子有り、先舊に下痢の病を患ひ、病下を以ての故に、糞もて草庵を穢せり。自餘の一切の諸弟子等、草庵を穢せるを見、不淨なるを瞋忿し、驅遣して出でしめたり。是の時、彼の患へる摩那婆、身驅出せらるる時、是の如き念を作せり、『此の庵舍は

【四】宿所を選みて、故意に迦葉の最も尊重する火舍を選び給ふ。

【五】汝若不辭、能見敬重は後段より推すに、不能見敬重の如し。其意、「佛の草堂中に入るを辭せず、草堂を敬重せずば」といふにあり。

一切の螺髻の爲めに造らる。云何ぞ我が病患下痢を見て、我を驅遣して出すぞ。願はくは我命を捨て是の身體を得、彼等が是の如きの事に仰ぎ報ぜん』。時に彼の患者、是の念を作し已り、即便ち命終せり。命終し已りて後、卽ち是の如き大毒龍身を受け、生れ已りて彼の草堂内に在り。或は人有りて來り、或は畜生ありて來るに、皆斃殺せられき。是の因緣を以て、彼の堂は卽ち空にして、人の住む有ること無かりき。爾の時優婁頻螺迦葉、是の如き念を作す『何の對治ありてか、能く毒龍を伏せん。唯應に火有りて能く相屈すべきのみ』。是の念を作し已り、卽ち火神を以て、彼の草堂に安じ、恒常に如法に時に依りて供養せり。

爾の時優婁頻螺迦葉、卽ち佛に白して言さく『善し、大沙門、我實に辭せじ。亦是れ此の草堂を惜まず。但彼の草堂には、大極惡嚴熾の龍王有りて、彼の中に居住す。其の龍に甚だ大神通力有り、大惡毒有り、猛厲なる毒有りて、止に仁を害するのみに非ず、亦我を損ぜん』。

爾の時世尊、是の如く、再過して迦葉に語りて言はく、『汝若し辭せず、彼を敬重せずば、但當に我に草堂の居住を與ふべし』。迦葉、報じて言さく、『我が意、仁の火堂(Aguyāgāra)に住するを願はず。所以は何に。彼處に今一大毒龍(āśsvisa)有りて、猛惡嚴熾なり。恐らくは仁丼に及び我が身の爲めに、毒害を作さん。善し、大沙門、此の堂は本來、我等師徒の久しく共に之を捨て、人の能く入るなきなり』。爾の時世尊、第三重に、彼の迦葉に告げて言はく、『仁者迦葉、若し一切の毒龍有り、來りて此の堂に滿ちて住するも、彼等、我が一毛をだも損ずる能はじ。況んや一龍をや。仁者迦葉、但汝意に可ならば、我、自ら當に入るべし。願はくは汝辭するなく、彼の堂を重んずる莫かれ。其は終に我を損害する能はじ』。是の時優婁頻螺迦葉、佛の三度慇懃にして未だ已みたまはざるを以て、卽ち佛に白して言さく、『善し、大沙門、我も亦辭せじ、亦彼を重んぜず。我以て相語りたり。若し心に疑はずば、當に意の隨に住したまふべし。常に方便を作して、害せられしむる莫

かれ』。

[6]爾の時世尊、迦葉の印可を聽くを得已り、手に自ら一把の草を執持して、火神堂に入り已り、草を鋪きて僧伽梨(saṅghāṭi僧衣)を取り、襞みて四牒と作し、以て草上に鋪き、加趺して僧伽梨の上に坐し、端身にして住し、正念にして動かず、一切外內の怖畏を除捨し、身毛竪たず、寂然として禪定したまふ。

爾の時彼の堂の毒龍、外に出でて食を求覓めんが故に、處處經歷し、飽き已りて廻還し、火堂に入り、遙に如來の火堂內に坐したまふを見、見已りて其の心に是の如き念を作す、『我が身、猶ほ活く。今何人か有りて、忽ち我が堂に入れる』。其の意旣に惡み、卽ち毒害を興して、口に烟炎を出す。如來は、復是の如き三昧に坐し、身、亦烟を放ちたまふ。爾の時彼の龍、是の烟を見已り、增長して更に[7]瞋り、猛火炎を放つ。如來、爾の時亦是の如き火光三昧(sajyotibhūta-samādhi)に入り、身より大火を出だしたまふ。佛及び毒龍、各猛火を放てば、是の時、彼の堂に嚴熾なる猛炎あり。猛炎を以ての故に、草堂[8]彤然として大火聚の如し。爾の時世尊、復是の如く念じたまふ、『我は今是の如き神通を作し、神通を作し已りて、彼の龍王の命根を害する莫かるべし。但當に其の皮肉筋骨を燒きて、悉く淨め盡さしむべし』。爾の時世尊、卽ち是の如き神通變化を作し、神通を以ての故に、彼の龍王をして、命を傷害せざらしめ、但其の餘の身分を然え盡さしむ。是の如くし訖已りて、又復身より諸種雜色の光明を出だしたまふ。所謂、青黃赤白黑色なり。出だし已りて、唯一尋の地を照して、彼に龍に明示したまふ。

[9]爾の時優婁頻螺迦葉、彼の祭祀火堂を去ること遠からずして、遙に堂內に大猛炎を出せるを見、見已りて卽ち是の如き念言を作す、『嗚呼嗚呼、此の大沙門は、今毒龍に燒害せらる。惜むべく、惜むべし。其の我等師徒の好言善語を取らざりしを以てなり』。時に彼の衆に一摩那婆有り、阿羅陀祇

【六】佛、火神堂に入り毒龍を降伏したまふ。

【七】瞋、縮藏に嗔に作る。古くは嗔瞋を通用せり。

【八】彤。あか。

【九】優婁頻螺迦葉及び其弟子等、佛が毒龍のために害損せられしに非ざるかを疑ひ、之を悲しむ。

黎迦(〔隋〕に濕樹皮衣といふ。)と名く。彼の火堂を見て、亦大に懊惱す。自餘の一切の諸摩那婆も、各各名を稱へて、悉く皆恐怖し、並に相呼喚す。謂はく迦吒牟尼(〔隋〕に苦行仙といふ。)、謂はく耶摩其尼(Yamatagni)(〔隋〕に雙火といふ。)、謂はく何唎尼毘奢耶那(〔隋〕に立火といふ。)、謂はく毘羅波羅婆(Viraprabha)(〔隋〕に丈夫光といふ。)、謂はく奢摩羅耶那(〔隋〕に雜色眼といふ。)、謂はく波羅耶那(Pārayana)(〔隋〕に能度彼岸といふ。)、謂はく迦吒耶那 (Kātyāyana)(〔隋〕に將愛行といふ。)謂はく瞿曇姓(Gautama-gotra)(〔隋〕に暗牛といふ。)、謂はく目犍連種 (Maudgalyāya-vaṃśa)(〔隋〕に白捧といふ。)、謂はく婆私吒姓(Vasiṣṭha-gotra)(〔隋〕に化住といふ。)、謂はく頻羅墮(Bharadvāja)(〔隋〕に重幢といふ。)、汝等、汝等、速に來れ、速に來れ。此の大沙門は、今毒龍の吐火に燒熱せらる。我等當に往きて其を助けて撲滅すべし』。爾の時彼等諸摩那婆、是の聲を聞き已りて、或は水瓶を將ち、或は復梯を擔ひて、速疾かに走り來り、來り已りて梯を著け、彼の火神の天堂の上に上り、上り已りて、水を將つて火を滅せんと欲す。而るに彼の火炎は、世尊の力の故に、更に熾盛を增す。時に彼の一切の諸摩那婆、卽ち還彼の火神の堂より下りて住し、一邊に在りて立ち、各相謂ひて言はく、『此の端正憙ぶべき大沙門は、毒龍に惱害せらる』(梵本には沙門來を並に再稱す)。爾の時衆中なる濕樹皮衣摩那婆仙、悲哀して偈を說き、以て佛を哭して言ふ。

『嗚呼微妙端正の身　頭髮は甚だ青く指に羅網あり　七處圓滿し端正なる眼なりしを　龍の翳を
　被りて日月の昏き如し』

爾の時、更に一摩那婆有り、還復悲哀して佛を哭泣し、偈を說きて言ふ、

『嗚呼諸王の勝家の生なる　甘蔗上種人中の勝　世間此の生處に過ぐる無かりしを　今毒龍の火
の爲に身を燒かる』

爾の時、更に一摩那婆有り、還復悲哀して佛を哭泣し、偈を說きて言ふ、

『三十二相莊嚴の體　自ら解脫を得て能く他をも脫し　瞋恚能く伏して身を害せざりしを　今毒

龍の毒火を被りて滅す』

爾の時、更に一摩那婆有り、還復悲哀して佛を哭泣し、偈を說きて言ふ、

『支節長短正等の身　甘蔗諸王種增益して　體は閻浮檀金の柱の如かりしを　今毒龍の火の焚く所と爲る』

爾の時、更に一摩那婆有り、還復悲哀して佛を哭泣し、偈を說きて言ふ、

『諸仙は聲を聞きて心に歡喜し　布施持戒の最福田　身體柔輭にして大吉祥なりしを　嗚呼今龍火に殺されぬ』

爾の時、優婁頻螺迦葉も、亦來り集聚して、彼の火堂を去る遠からずして立ちて住す。爾の時、一摩那婆有り、來りて優婁頻螺迦葉に白して、是の如き言を作す『和上、彼の大沙門を、一過して試みに觀占せよ。其の大沙門の生宿の中を看るに、更に諸餘の惡星の犯觸する所と爲らずや。それ犯されば、何の星か是の沙門の生宿に逼れるぞ』

爾の時優婁頻螺迦葉、卽便ち仰いで虛空の星を瞻已り、還彼の摩那婆に告げて言はく『汝摩那婆、今應當に知るべし、此の大沙門は鬼宿日の生なり。彼の鬼宿(Pusya)は餘星の逼觸する所と爲らず』。摩那婆に謂ふ『此の大沙門の星は甚だ快明なり。我が所見の如くんば、星宿の相貌や、大沙門が、今龍と共に角鬪決勝するの狀なり。此の相、必定して、是の大沙門の決んで彼の龍を降さんこと、疑有ること無きなり』。

卷の第四十一

迦葉三兄弟品第四十四の中

[一]爾の時毒龍、火神の堂を見るに、四面一時に洞然熾盛なり。唯如來所坐の處有りて、其の處のみ寂靜にして火光を見ず、見已りて漸く詣りて佛の所に向ひ、佛の所に至り已りて、即便ち身を踊らして佛の鉢中に入り、是の偈を說きぬ。

『若し人百千億萬歲　一心に此の火神を祭祀せんも　彼の輩の瞋を斷じ去ること　今の勝世尊の忍辱に如く能はじ　一切の天人世界の內に　唯世尊大丈夫のみ有りて　瞋恚の重病に纏はる諸に　世尊は能く忍辱の藥を與へたまふ』

爾の時世尊、彼の夜を過ぎて後、明の淸旦に至り、手に鉢を擎げ、彼の毒龍を將つて、來りて優婁頻蠡迦葉所坐の處に至り、到り已りて即ち彼の迦葉に告げて言はく、『仁者迦葉、此は是れ毒龍、汝等が畏れて、火神堂に入る能はざる所のもの。此に即ち是の彼を我が威火を以て、其の毒火を滅し、今故らに將來して、以て汝輩諸梵志等に示す』。偈有りて說かく、

『是の時彼の夜分已に過ぎて　世尊來りて迦葉の所に至り　鉢中に毒龍を盛りて示し　手に擎げて彼の前に安置し著けぬ』

爾の時優婁頻蠡迦葉、是の如き念を作す『此の大毒龍は、自ら大沙門の鉢に入れりと爲すや、大沙門の神通力の故に、其をして中に入らしめしと爲すや』。爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉の、心に念ずる所を知り、知り已りて即便ち手に執る所の鉢を、自然に優婁頻螺迦葉の邊に展向したまふ。時に彼の毒龍、九頭の大項の頸を引きて、優婁頻螺迦葉の身邊に向はんと欲す。爾の時優婁頻螺迦葉、龍の頭を擧げて己が邊に向はんと欲するを見、心に驚怖を生じ、却いて身を縮めて住し、自ら

【一】佛、神變を以て毒龍を降伏したまへるも、猶優婁頻螺迦葉に歸佛の心なし。たゞ佛に滯留を請ひて、其の供養を約するのみ。

兩手を以て其の面を掩覆す。爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉に告げて、是の如き言を作したまふ、『仁者迦葉、何の故に身を縮めて、是の如く驚怖する。汝、心に畏るるや』。迦葉報じて言さく、『是の如く是の如し。大德沙門、我實に畏る』。爾の時佛、彼の迦葉に告げて言はく、『仁者迦葉、汝、怖畏する莫かれ』。爾の時世尊、卽ち偈頌を以て、迦葉に語りて言はく、

『我昨夜來彼を敎化せり　其は更に他を恐怖する能はじ　それ若し今仁を螫さんと欲せんこと、

　世間終に此の法有ること無けん　假使天の地に崩倒し　大地破碎して微塵の如くなり

　須彌は本處の安きより移離すとも　諸佛は口に終に妄語せず』

　爾の時優婁頻螺迦葉、是の如き念を作す『此の大沙門は大威神力あり、大に功能有り、乃ち是の如き神力の火を設けて、彼の毒龍の毒惡なる熾火を滅せり。其の事然りと雖も、而も猶ほ阿羅漢果を得ること、我の今の如くならじ』。爾の時世尊、彼の毒龍を取り、發遣して彼の大海外鐵圍山間に安置したまふ。是の時優婁頻螺迦葉、卽ち佛に白して言さく、『大德沙門、彼の毒龍は、今何處に安在するか』。爾の時佛、彼の迦葉に告げて言はく、『仁者迦葉、彼の毒龍を、我、今已に遣はして彼の鐵圍山間に安置しぬ』。爾の時優婁頻螺迦葉、佛の、是の神通を示現したまふを見已り、心に歡喜を生じ、卽ち佛に白して言さく、『大德沙門、願はくは恒に此に住したまへ。我當に常に請ひて飯食を供奉すべし』。爾の時世尊、默然として彼の優婁頻螺迦葉等の請を受けたまふ。

　或は復師有りて、是の如き說を作す、『佛、優婁頻螺迦葉に告げて、是の如き言を作したまふ、「仁者迦葉、若し汝等輩、能く時節に依りて、我に食時を告げなば、是の如くば、則ち我仁者の請を受けん」。時に迦葉言さく、「我等當に告ぐべし」と』。

　爾の時、色界淨居の諸天、卽ち偈を說きて言さく、

『これ是の大慈世尊の力　善く能く大毒龍を降伏したまふ　其の三迦葉の火神に事へたる　有ら

ゆる精神力は當に滅すべし』

[二] 爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉の邊より、食を受け訖り、漸漸に行きて、優婁頻螺迦葉の處を去る遠からざる所に、一林有り、差梨尼迦(Kṣīriṇika)(隋に斫校といふ即ち乳汁を出す。)と名くる、彼の林に在まして、經行して住したまふ。是の時四鎭の四大天王、身より勝光を出し、夜半に當りて、世間に下來し、天の身光を以て、普ねく彼の林を照し、佛所に向ひ、佛所に到り已りて、佛足を頂禮し、合掌して却き、各來方に隨ひて、一面に住立し、佛に向ひて躬を曲げ、低頭頂禮し、猛火聚の如く、大炎光を出して、尼迦林を照す。

爾の時優婁頻螺迦葉す彼の夜を過ぎて後、晨に佛所に向ひ、佛所に到り已るや、佛に白して言さく、『大德沙門、食時將に至らんとす。飯食辦具しぬ。未だ審にせず、昨夜の四人は是れ誰なりや。身より最勝微妙の光明を出し、夜半に於て此の林樹を照して此の大沙門の邊に來到し、到り已りて頂禮し、却いて一面に住し、低頭合掌して恭敬立住すること、譬へば火聚の大勝光を出せる如かりきぞ』。

爾の時佛、彼の迦葉に告げて言はく、『仁者迦葉、彼の四人は、是れ四天王の、我が所に來詣し、我が邊より法を諮問せんと欲せるなり』。是の時優婁頻螺迦葉、心に是の如く念す、『此の大沙門は、大に威神有り、大に威德有り、乃ち四大天王有り、下來して其の邊に詣り、法を請問せんと欲すること。威力は然りと雖も、但其れ阿羅漢果を得ること、我が今の如からじ』。

[三] 爾の時世尊、即ち優婁頻螺迦葉所住の處に至り、飯食し訖已り、後に還彼の林內に向ひて經行し、寂靜に住したまふ。是の時、忉利帝釋天王、身より最勝上妙の光明を放ち、夜半の時に、普ねく彼の林を照し、佛所に來詣し、到り已りて佛世尊の足を頂禮し、却いて一面に住し、十指掌を合して、佛に向ひて立つ。譬へば火聚の大焰光を出すが如く、前の四天王の身光に倍勝し、明照顯赫、比を

【二】第二神變、四天王佛に來問す。

【三】第三神變、帝釋天來問。

寫すべからず。

爾の時優婁頻螺迦葉、彼の夜を過ぎ已りて、佛の所に往詣し、佛所に到り已るや、佛に白して言さく、『大德沙門、食時已に至り、飯食辦具す。未だ審にせず、昨夜の光明は是れ誰なりや。夜半の時に身より最勝の大光明を出し、來到し已りて頂禮し、十指掌を合し、一面に向ひて立ち、乃至、猛焰にして四天の光に倍せしぞ』。爾の時佛、彼の迦葉に告げて言はく、『仁者迦葉、彼は是れ忉利天主帝釋、來りて我が邊に到れるなり、法を聽かんと欲せるが故に』。是の時優婁頻螺迦葉、是の如き念を作す『此の大沙門は、大に威德有り、乃ち帝釋をして其の邊に來詣して、法を聽かんと欲せしむること。威力は然りと雖も、而も猶ほ阿羅漢果を得ること、我の今の如くならじ』。

四 爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉の邊より食を受け訖りて、還た彼の林に向ひ、經行して住したまふ。時に夜摩天(Suyāma)、夜半の時に身より勝光を出し、佛所に來詣し、到り已りて合掌し、佛に向ひて頂禮し、却いて一面に住す。乃至、略說せんに、『此の大沙門は、大に威德有り、大に威神有り、乃ち彼の須夜摩天をして、來りて法を聽かんと欲せしむ。威德は然りと雖も、其は猶ほ阿羅漢果を得ること、我の今の如くならじ』。

五 爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉の邊より食を受け訖り、還た彼の林に向ひ、經行して住したまふ。時に兜率天(Tusita)、夜半の時に、身より光明を出し來りて佛所に詣る。乃至、略說せんに、『此の大沙門は、大に威力有り、大に威神有り、乃ち彼の兜率陀天をして、來りて法を聽かんと欲せしむ。威德然りと雖も、其は猶ほ阿羅漢果を得ること、我の今の如くならじ』と。

六 爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉の邊より、食を受け訖り、還た彼の林に向ひ、經行して住したまふ。時に化樂天(Nirmāṇarataya)、夜半の時、身より光明を出し、來りて佛所に詣る。到り已り、乃至、『此の大沙門、大威神有り、乃ち化樂天子をして、下り來りて法を聽受せんと欲せしむ。威德然りと

【四】第四神變、夜摩天來聞。

【五】第五神變、兜率天來聞。

【六】第六神變、化樂天來聞。

雖も、其れ猶ほ阿羅漢果を得ること、我の今の如くならじ』と。

[七]爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉の邊より食を受け訖り、還た彼の林に入り、經行して住したまふ。是の時他化自在天子(Paranirmitavaśavartina-devaputra)、夜半に於て、身より光明を出し、來りて佛所に詣る。乃至、略說せんに『此の大沙門は、大に威神有り、大に威力有り、乃ち他化自在天子ありて、來りて法を聽かんと欲す。威力然りと雖も、其は猶ほ阿羅漢果を得ること、我の今の如くならじ』と。

[八]爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉の邊より食を受け訖り、還た彼の林に向ひ、經行して住したまふ。時に娑婆世界の主大梵天王(Sahampati Mahā-brahmā)、夜半の時に於て、身より光明を放ち、普ねく彼の林を照し、來りて佛所に詣り、佛所に到り已りて、十指掌を合し、佛足を頂禮し、却いて一面に住し、佛に向ひて立つ。譬へば火聚の大猛焰を出すが如く、已前の欲界諸天の光明に勝る百倍、譬を爲すべからず。爾の時、優婁頻螺迦葉、彼の夜を過ぎて後、佛所に往詣し、佛所に到り已りて、卽ち佛に白して言さく『大德沙門、食時既に至り、飯食辦具す。未だ審にせず、昨夜、勝光明を出し、普ねく林內を照し、來りて此の大沙門の邊に至れるを。彼をこれ誰とか爲す。十指掌を合し、頂禮して却いて住す。乃至、前の欲天の光明に勝れたり』。爾の時世尊、卽ち優婁頻螺迦葉に告げて、是の如き言を作したまふ『仁者迦葉、彼の來れる所の者は、是は此れ娑婆世界の主、大梵天王の、來りて我が所に詣り、法を聽受せんと欲せるなり』。是の時迦葉、是の如き念を作す『此の大沙門は、大に威力有り、大に威神有り、乃ち娑婆世界の主、大梵天王をして、來りて其の邊に至り、法を聽かんと欲せしむ。威德は然りと雖も、其は猶ほ阿羅漢果を得ること、我が今の如くならじ』。

[九]爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉の邊より食を受け訖り、還た彼の林に向ひ、經行して住したまふ。是の時、優婁頻螺迦葉の居處にては、年ごとに常恆に共に一の祭祀の法を竪立す。其の時節に至れ

【七】第七神變、他化自在天子來問。

【八】第八神變、梵天來問。

【九】第九神變、鬱單越に至りて食を乞ひたまふ。

ば、摩伽陀國の一切の人民は、好種種の上味の飲食――噉者・食者・舐者・唼者――を將つこ辦具し已訖り、明日各各、優婁頻螺迦葉の居處に來り向はんと欲す。爾の時優婁頻螺迦葉、卽ち其の夜に於て、自の室內に在り、是の思惟を作す『明日、集聚する摩伽陀國の一切の人民は、種種無量の飲食を辦具し、我が邊に來りて祭祀の法を修せんと欲す。而して此の瞿曇大德沙門、脫しは是の會の大衆の前に於て、神通勝上の法を顯示せん。若し是の如くんば、我が所有の利養名聞は、卽ち當に彼に著すべく、則ち我が邊に於て、或は復減少せん。唯願はくは方便して、此の大沙門を明日來る莫からしめん』。

爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉の、心に念ずる所を知り已り、彼の夜を過ぎて後、鬱單越(Uttara-kuru)に至り、彼に到りて食を乞ひ、阿耨達大池(Anavadata, Anavatapta)の邊に於て食を食し訖り、還彼の大池の邊に在まし、少時靜攝し竟り、本林に還り、經行して住したまふ。

一〇 爾の時優婁頻螺迦葉、彼の夜を過ぎ已り、食後、佛世尊の所に往詣し、佛の所に到り已り、卽ち佛に白して言さく、『大德沙門、食、時に至り、辦具亦訖れるに、未だ審にせず、沙門、何の故に來らざりしか。其の事然りと雖も、我猶ほ有らゆる上好味の諸食を忘れず。我、今仁の爲めに、猶ほ一分を留めたり』。爾の時佛、彼の迦葉に告げて言はく、『仁者迦葉、汝昨夜靜室の中に在り、獨自にて坐し、是の如きを思惟念言せざるべきか、「我、明朝に於て所居の處に在りて、年ごとに常恆に祭祀の法を作さんに、摩伽陀國の有らゆる男女一切人民、好種種の食飲を將つて、來りて我が邊に向はん。而して此の大德沙門瞿曇、恐らくは彼の會の衆人の前に於て、神通を出現し、上人の法を示さん。卽ち我が所有の利養名聞は、悉は彼の大沙門の邊に著き、我は卽ち減少せん」とて、心に私に我の明日來る莫からんを願へり。仁者迦葉、我、爾の時に仁の此の心の、是の如き想念を知り、彼の夜を過ぎて、我卽ち空に騰り、鬱單越に至り、彼に

【一〇】 尼沙塞部の異說。

向ひて食を乞ひ、得已るや來りて阿耨達池に到り、如法に食し、日の多少に隨ひて、彼に在りて經行し、還た此の林に向ひて宿止せんとて來れり』。是の時優婁頻螺迦葉、是の如き念を作す、『此の大沙門は、大に神力有り、大に威權有り、感變然りと雖も、其は猶ほ阿羅漢果を得ること、我の今の如からじ』と。(尼沙塞の説なり)

爾の時、優婁頻螺迦葉の居處に、年ごとに常に一大會有り、翼宿日(Uttaraphalguni)と名づく。彼の會の日、摩伽陀國の數千萬人、各來りて聚集す。然もその彼の會に、亦市易あり、賭人輩の須つ所に隨ひて貨買す。是の時優婁頻螺迦葉、是の如き念を作す、『明朝、此處に若し沙門來らば、有らゆる人民、皆彼を觀看して、我等の爲めに齋食を造作せざらん』。彼、是の如き思惟念を作し已り、往きて佛の所に詣り、即ち佛に白して言さく『大德沙門、明朝、我が林の修道の處所に、當に大會を作すべし。多く衆生有り、百千聚集して、甚大に喧鬧ならん。而るに大沙門は寂靜を愛樂し、恆に淸淨空閑の處に行ず。沙門、此處より移去して、別に靜處を求めて彼の間に住すべし』と。(此は僧祇の説なり)

爾の時世尊、彼の住處より、即便ち移りて差梨尼迦林に至り、彼の林に至り已りて、心に彼の四迦婁羅王(Garuḍendra)を念じたまふ。王を可觸と名く。又四提頭賴吒龍王(Dhṛtaraṣṭha-nāga-rāja)・四水神龍(Varuṇa-nāga-rāja)・四大天王・帝釋天王、及び餘の欲界の一切諸天、娑婆世界主大梵天等を、並に皆念じたまふ。

爾の時、彼等四可觸王の迦婁羅等は、佛の內心に是の如く念じたまふを知り已り、大風を出現して、彼の優婁頻螺迦葉所居の住處より、虛空に飛騰し、即時に差梨尼迦林に往詣し、彼處に到り已りて、佛足を頂禮し、十指掌を合し、却いて一面に住して、遙に世尊を覩、佛に向ひて頂禮す。その四提頭賴吒龍王・四水神王も亦佛心を知り、大雲雨を出だし、彼の優婁頻螺迦葉の居處より、飛ん

【二】僧祇部の異説を擧ぐ。

で差梨尼迦林に向ひ、到り已りて佛世尊の足を頂禮し、十指掌を合し却いて一面に住し、佛に向ひて遙に敬す。是の時、四方の四大天王も、亦佛心を知り、大に端正喜ぶべく、人に樂見せらるゝ身を作し、顯赫威光もて、自身を照曜し、悉く白象に乘りて、地より湧出し、彼の優婁頻螺迦葉の居處より差梨尼伽林に往詣し、到り已りて佛世尊の足を頂禮し、乃至、合掌して遙に佛を敬す。

爾の時、忉利帝釋天王・及び欲界天・娑婆世界主大梵天王も、佛の心に念じたまふを知り、身より威光を出だし、遍ねく其の地を照し、彼の優婁頻螺迦葉居住の處より、虛空に飛騰し、一時に差梨尼迦林に往詣し、到り已りて佛世尊の足を頂禮し、乃至躬を曲げて遙に佛を敬す。

爾の時、彼處の一切の人民、是の如き衆の諸天龍等を見、心に恐怖を生じ、身毛皆竪ち、卽便ち彼の優婁頻螺迦葉等に問ひて言はく『大德和上、此れ何物の神か、斯の變怪を作す。是れ災に非ずや。或は當に疫有り、或は大恐怖あり、或は大闘諍あるべし。或は迦吒富單那鬼、及び黑闇鬼有りて、來らんと欲するにや』。

爾の時優婁頻螺迦葉、是の如き念を作す『此は必らずや是れ彼の大德沙門の威力、斯の神通變を作すならん』と。卽便ち彼の諸大衆に報じて言はく『汝等一切、恐るゝ莫く、怖るゝ莫く、畏るゝ莫く、驚く莫かれ。此は災變に非ず、亦疫病及び闘諍、諸の鬼魅の來るに非ず。當に無畏有るべし、當に豐熟有るべし、當に怪異無かるべし。恐怖すべからず、亦疾病無し。汝等但當に安隱に自慰すべし。此の事は苦無く、一切の諸相は、盡く皆大吉なり』。

爾の時、優婁頻螺迦葉、是の如き念を作す『我も今亦彼の大沙門の邊に往詣して、此の事を度量し、自ら應當に、何が故に、何の變か、是の如からしむるを致すかを知るべし』と。彼是の如き思惟念を作し已り、卽便ち佛世尊の所に往詣し、佛邊に至らんと欲するや、如來忽ち神通の力を以て、卽ち其の前に於て、一箇高峻の大山を化作す。彼來らんと欲するも、過ぐるを得る能はず、彼の山

に到り已り、即ち反りて廻還す。彼の夜を過ぎて後、還佛の所に詣り、佛所に到り已りて、佛に白して言さく『大德沙門、昨日何ぞ是の如き變怪を作したまへる。我、昔よりこのかた、此に在りて居停するも、未だ曾て斯の如きの事を覩見せざるなり』。

爾の時世尊、即便ち彼の爲めに前事を廣說したまふ。而して彼の優婁頻螺迦葉、既に說くを聞き已り、大希有を生ず『奇特恠むべし、我、多年來此に在り、恆常に火神を祭祀するも、曾て一旋風の氣も、我が邊に至りしこと有らず、況んや復餘神をや。然るに今此處の沙門瞿曇、大威德有り、一切の諸天、來りて其の邊に向ふ』と。是の念を作し已り、即ち佛邊に、信向の心希有の心を生じ、即ち心を以て佛·世尊を請じて言はく、『願はくは大沙門、明日食時に、更に我が邊に於て、我が微供を受けたまへ。若し佛は實にこれ一切智(Sarvajña)ならば、應に我が心を知りたまふべし』と。是の念を作し已るや、如來即ち優婁頻螺迦葉の心念を知り、默然として彼の心請を受けたまふ。

爾の時優婁頻螺迦葉、其の居處に還り、諸の一切摩那婆に告げて言はく『汝等、大沙門の邊に詣向して、量度觀看せよ。其の大沙門は、何事をか作す、當に食を求め衣を著けて行かんと欲すべしと爲すや、當に默然寂靜にして坐すべしと爲すやを』と。爾の時彼等諸摩那婆、優婁頻螺迦葉より、此の言を聞き已り、即便ち差梨尼迦林に往詣し、到り已りて、佛の彼の林內の樹下に在まして思惟し、寂然として坐し、身より光明を出して、彼處を照耀し、食に於て足るを知り、行きて乞求せず、默然として住したまふを見、彼等見已りて、佛の所に詣向し、佛所に到り已るや、佛に白して言さく『大德沙門、仁は今何の故に食を求めたまはざる』。爾の時佛、彼の諸の一切の摩那婆に告げて言まはく『諸摩那婆、我は已に請ぜられたり』。彼等問ひて言さく『大德沙門、これ誰にか請ぜられたる』。佛、即ち報じて言まはく『汝輩の和上(Upādhyāya) 已に我を請ぜり』。爾の時彼等摩那婆、心に希有を生じ『甚奇、恠むべし。希有なり、希有なり、此の大沙門や。然も口に言はさるに、

遙に他の心を知りたまふ』とて、彼等即ち大に歡喜踊躍し、其の體に遍滿して、自ら勝ふる能はず。

爾の時彼等、速疾かに優婁頻螺迦葉の邊に廻還し、到り已りて白して言ふ『尊者和上、我、決定して知んぬ、此の大沙門は、是れ一切智なり。和上の、心を以て彼を歎請したまへるに、彼即ち自ら和上の心を知り、亦我に向ひて語るらく『我を已に彼の汝の和上、心に請ぜり』と』。爾の時優婁頻螺迦葉、彼の語を聞き已り、卽便ち大價の座を鋪設し、鋪設既に訖りて、心に是の念を發す『沙門瞿曇、若し仁今是れ一切智ならば、當に我が念に應じて卽ち此の座に現ずべし』と。

爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉の心の所念を知り已り、身時に應じて彼の座上に現じたまへり。爾の時優婁頻螺迦葉、既に世尊の、其の座上に在まして端然と坐したまふを見、見已りて歡喜し、卽ち自らの手を以て、好種種の餚饍飲食を將つて、持用つて佛に施す。所謂、噉食唼嗽舐啜にして、豐足自恣せしむ。復是の念を作す『希有なり、希有なり、此の大沙門は、大に威神有り、大に德力有り、乃ち能く我が心中の所念を知りたまふ。威神は然り雖も、而も猶ほ阿羅漢果を得ること、我の今の如くならじ』と。

爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉の邊より食を受け訖り、還廻して差梨迦林に至り、經行して住したまふ。是の時、世尊の身上に著けたまふ所の袈裟の衣、悉く皆破壞す。而して彼の兵將婆羅門村に、一家人の命既に終りて、卽便ち林葬せる有り。是の時世尊、林に於て見已り、卽ち自ら收めて彼糞掃衣を取り、取り已りて、世尊是の思念を作したまふ『我、今何處にて是の如き糞掃の衣を洗ひ、能く淸淨ならしめんか』。爾の時帝釋忉利天王、既に世尊の、心意に念じたまふ所を知り、知り已りて、卽ち彼の處所に於て、手を以て地を掘り、一池を造作す。其の水淸淨なり。作し已りて卽便ち佛に諮白して言さく『善い哉、世尊、願はくは此の水を以て糞掃衣を洗ひたまへ』。此の時世尊、池水を見已り、復是の如く念じたまふ『今水をば得たりと雖も、當に何の上に於て、是の衣を洗浣

すべき』。爾の時帝釋、佛の心を知り已り、鐵圍山より、一大石を將つて、佛前に安置し、置きて以て佛に白して、是の如き言を作す、『唯願はくは世尊、此の石上に於て、是の衣を洗踰したまへ』。是の時世尊、復是の如く念じたまふ、『今石をも得たりと雖も、復當に何に攀ぢて此の衣を洗踰せん』。時に彼の池岸に、舊より一樹有り。迦拘婆(kakubha, kakudha)〔(隋)に峯といふ。〕と名く。時に彼の樹間に、一樹神有り、佛の意念を知り、樹の一枝を按じ、垂れて下に向かしめ、而して佛に白して言さく、『唯願はくは世尊、此の樹枝に攀ぢ、是の糞掃の衣を洗踰したまへ』。爾の時世尊、復是の如く念じたまふ『我、衣を洗ひ已るも、復何の上にか、此の衣を曝曬せん』。爾の時帝釋、佛の心念を知り、知り已りて、即ち鐵圍の山間より、一の最大寛廣の石を將つて、佛前に安置し、既に安置し已り、即ち佛に白して言さく、『唯願はくは世尊、是の石上に於て、以用つて衣を曬したまへ』。此の時世尊、即ち石上に糞掃衣を曬したまふ。

爾の時優婁頻螺迦葉、彼の夜を過ぎて後、佛の所に往詣し、佛所に至り已り、佛に白して言さく、『大德沙門、食時已に至り、辦具し訖了る』。又復佛に白さく、『大德沙門、已前には此處に此の池有ること無かりしに、今日何の故に忽ち此の池有るか。此處には、已前是の二石無かりしに、又何より來れる。其の迦拘婆、此の樹已前には、枝垂下せざりしに、今日何に緣りて、是の如く嚲垂[三]せる。知らず、何に緣りてか忽然に此の如くなれる』。是の語を作し已り、默然として言はず。佛、優婁頻螺迦葉に告げて、是の如き言を作したまふ『仁者迦葉、此處に我、糞掃の衣を得たり。彼の時我、是の如く心に念じぬ「何を以て此の糞掃の衣を浣はん」。爾の時帝釋、我が心念を知り、手を以て地を掘り、此の池水を出し、我に白して言ふ「世尊、今此の池水を以て糞掃衣を洗ふべし」と。――是の如きの故を以て、今に至るも相傳へて名けて帝釋手掘の池(puskirini)と爲す。――是の池を得已り、我、復更に是の如き思念を作せり「我、何の上にて、糞掃衣を踰まん」と。爾の時帝釋、

【三】嚲はたれさがる。

我が心念を知り、鐵圍山より、一大石を將つて、來りて此の地に置き、我に白して言ふ、「唯願はくは世尊、此の石上に於て、以て衣を洗浣したまへ」。——是の故に此を非人擲石(Amanuṣyeṇa pāṇinā khanitā amanuṣyeṇa nikṣiptā śilā) と名づく。——我、彼の時に、是の如き念を作せり、「我が手、何に攀ぢてか是の衣を踰まん」と。爾の時、彼の樹の迦拘婆神(Kakubha-devatā)、我が心念を知り、手を以て此の樹枝を按じて垂れしめ、我に白して言ふ、「唯願はくは世尊、手もて此の枝に攀ぢ、脚を以て衣を踰みたまへ」と。是の因緣を以て、此の樹の枝は、是の如く懸垂す。枝を得已りて、我是の如く念ぜり、「今何の上に於て、此の衣を曬さん」と。爾の時帝釋、我の心念を知り、鐵圍山より此の廣石を將つて、我が前に擲置し、我に白して言ふ、「唯願はくは世尊、此の石上に、浣ふ所の衣を曬したまへ」と。——是の因緣を以て、此の石の名を、非人所擲(Amanuṣpena nikṣiptā)と爲す』。

爾の時優婁頻螺迦葉、是の如き念を作す『此の大沙門は、大に威力有り、大に神通あり、乃ち能く彼の天主帝釋をして、來りて供承せしむ。變現は然りと雖も、但大沙門は、理、實に、未だ阿羅漢果を得ること、我の今の如くならじ』。

爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉の居處に於て食し訖り、廻還して林に至り、經行して住したまふ。爾の時優婁頻螺迦葉、彼の夜を過ぎて後、佛の所に往詣し、佛所に到り已り、佛に白して言さく、『大德沙門、若し時を知りたまはば、飯食已に辦ぜり』と。是の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉に告げて、是の如き言を作したまふ『仁者迦葉、汝、前に去れ。我は即ち隨ひて來らん』。爾の時世尊、既に彼の優婁頻螺迦葉を發遣して去らしめ已り、即ち神通に乘じ、須彌山に向ひたまふ。是の時、彼の山に閻浮樹(jambu)有り。彼の閻浮樹の因緣を以ての故に、所以に此の閻浮提の名を得たるなり。彼の樹上に於て、菓を取得し已り、先に來りて優婁頻螺迦葉居處の、火神堂の中に至り、端然とし

て坐したまふ。而して彼の優婁頻螺迦葉、後に在りて來り、如來の火神堂內に坐したまふを見、見已りて驚怪し、即ち佛に白して言さく『大德沙門、仁は何の道より來りて此に至れるか。仁は、元林に在り、我より後に發して、即ち今何ぞ忽ち我の前に在り、此の火神堂に到りて、其の中に安坐したまへるぞ』。爾の時佛、彼の迦葉に告げて言まはく『迦葉、我、先づ汝を發遣し已りて、須彌山に至れり。彼に一樹有り、名づけて閻浮といふ。彼の樹に因るが故に、此に今是の閻浮提の名を得たるなり。彼の樹上の菓を、我今將來して、此の堂內に在り』とて、迦葉に指示し、『彼の閻浮菓(jambupakva)は即ち此の是れなり。顏色端正、香味微妙にして、食ふに甚だ美し。汝、今此の甘菓を取りて、之を噉食すべし』。爾の時迦葉、即ち佛に白して言さく『大德沙門、此の事は然らず。仁、自ら此の甘菓を噉ひたまふ合し。我は應に食すべからず』。爾の時優婁頻螺迦葉、心に是の如く念ず『此の大沙門は、大に神通有り、大に威力有りて、乃ち能く先づ我を發遣し已り、其の身は自ら須彌山に到り、閻浮菓を取り、此の火神堂に來り、前に坐せり。然りと雖も猶ほ阿羅漢を得ること、我の今の如くならじ』。

爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉の居處に於て食し訖り、速かに還林內に向ひて經行したまふ。是の時優婁頻螺迦葉、彼の夜を過ぎて後、明淸旦に至り、佛の所に往詣し、佛に白して言さく『大德沙門、若し時を知りたまはば、飯食已に辦ず』と。爾の時世尊、迦葉に告げて言まはく『迦葉、汝、今且先に行け、我は隨ひて後に去らん』。爾の時世尊、先づ迦葉を發遣して去らしめ已り、即ち復還自ら須彌山に向ひ、閻浮樹を離れ、相去る遠からずして、更に一樹有り、菴婆羅(āmra)と名づく。菴婆羅より、一菓を取得し、先に來りて迦葉の住處の、火神堂に到りて坐したまふ。迦葉後に來り、世尊の、火神堂に在まして、安然として坐したまふを見、見已りて佛に白して、是の如き言を作す、『大德沙門、何れの道より來り、我が前に在りて、此の火神堂に到りたまへるか』と。佛、迦葉に

告げたまはく、『我、汝を遣はして後、須彌山に至り、是の菴婆羅菓を取得し、將來して此に在り』とて、乃至、先づ迦葉に勸めて食はしむ。迦葉白して言さく、『我は食す合からず』。爾の時優婁頻螺迦葉、心に是の如く念ず、『此の大沙門は、大に神通あり、大に威力あり、乃ち能く先づ我を發遣して、須彌山に到り、菓を取りて將來し、先に坐せり。然りと雖も猶ほ阿羅漢を得ること、我の今の如くならじ』。

爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉の居處にて食し訖り、還廻りて彼の林内に至りて經行したまふ。是の時優婁頻螺迦葉、彼の夜を過ぎて後、明清旦に至り、佛所に往詣し、佛に白して白さく、『大德沙門、若し時を知りたまはば、飯食已に辦ず』と。乃至、彼の閻浮提樹の處所を去る遠からずして、呵梨樹(harītaka)有り、彼の菓を將つて來り、先づ迦葉の火神堂内に至りたまふ。乃至、『沙門、大に神通有り。然りと雖も猶ほ阿羅漢を得ること、我の今の如くならじ』。

爾の時世尊、食し訖り、還彼の林に至りて經行したまふ。乃至、彼の閻浮提[一三]を去る近くして、更に一樹有り、毘醯勒(vihethaka)と名づく。彼の樹上より一菓を取り、將來して先づ堂内に至り、乃至、前の如し。『此の大沙門、大に神通有り。先づ我が身を遣はし、其の後、菓を取る。然りと雖も猶ほ阿羅漢を得ること、我の今の如くならじ』。

爾の時、世尊食し訖り、還彼の林に至り經行したまふ。乃至、彼の閻浮提樹を去りて、更に一樹有り、阿摩勒(āmalaka)と名く。彼の樹より菓を取り、先に將來し、火神堂に坐したまふ。乃至、『沙門、大に神通有り、先に我を發遣し、身は後に果を將つて火神堂に來る。然りと雖も猶ほ阿羅漢を得ること、我の今の如くならじ』。

爾の時世尊、食し訖り、還彼の林に至りて經行したまふ。是の時優婁頻螺迦葉、彼の夜を過ぎて後、佛の所に往詣し、佛所に至り已り、佛に白して言さく、『大德沙門、若し時を知りたまはば、飯食已

【一三】閻浮提は閻浮樹の誤。

に辦ず』。佛、迦葉に告げたまはく、『汝、先づ且つ去れ。我、隨ひて後に來らん』と。爾の時世尊、迦葉を遣はし已り、瞿耶尼(Godāniya)に至り、彼處に到り已り、乳を乞ひて鉢に滿たし、前に在りて來り、火神堂内に至りたまふ。是の時優婁頻螺迦葉、見已りて佛に白さく、『大德沙門、何れの道より來りてか、我が前に在りて、此の堂内に到りたまへる』。佛、迦葉に告げたまはく、『我、汝を遣はして後、瞿耶尼に到り、乞ひて是の乳を得、此の鉢中に滿し、此に在りて坐す。迦葉、是の乳は、顏色微妙、香氣甘美なり。汝、意に若し樂まば、此の乳を取りて飲め』。迦葉、佛に言さく、『我、飲むに堪へず、沙門自ら飲みたまへ』。是の時迦葉、是の如き念を作す『此の大沙門は、大に威力有り、大に神通有り、乃ち先づ我を遣はし、其後身瞿耶尼國に往き、乳を乞ひて鉢に滿し、先に來りて此の火神堂内に至れり。然りと雖も猶ほ阿羅漢を得ること、我の今の如くならじ』と。

卷の第四十一

迦葉三兄弟品第四十四の下

爾の時世尊、食し訖り、還彼の林に至りて經行したまふ。是の時優婁頻螺迦葉、彼の夜を過ぎて後、往きて佛の所に至り、到り已りて佛に白さく、『大德沙門、若し時を知りたまはば、飯食已に辦ず』と。佛、迦葉に告げたまはく、『汝先に去れ、我、隨ひて後に來らん』。爾の時世尊、先に迦葉を發遣して去らしめし後、卽ち彼の三十三天に到り、彼の天に到り已りて、一華を取得す。其の華を波梨闍多迦(pārijātaka)（隋に彼岸生といふ。）と名く。取り已りて先に火神堂に來りたまふ。迦葉後に來り、佛の已に坐したまふを見て、卽ち佛に白して言さく、『大德沙門、何れの道より來りてか、我が前に在りて、火神堂に到りたまへる』。佛、迦葉に告げたまはく、『我、先づ汝を遣はして後、忉利天宮に至り、此の波梨闍華を將つて、此の火神堂に來る。然も此の波梨闍多迦華は、顏色愛すべく、香氣甚だ好し。汝意に若し樂まば、此の華を取つて其の香氣を齅ぐべし』。迦葉、佛に白さく、『大德沙門、此の華の香氣は、微妙精好なり、沙門自ら持ちたまへ、我は齅ぐ合からず』。是の時迦葉、是の如き念を作す、『此の大沙門は、大に威力有り、大に神通有り、乃ち能く先に我を發遣し已りて後、天上に到り、彼の波梨闍多迦華を取り、先に來りて火神堂內に坐せり。然りと雖も猶ほ阿羅漢を得て、身心の寂靜なること、我の今の如くならず』と。

爾の時、迦葉居處の、螺髻諸梵志(jaṭila)等は、柴を破らんと欲して、得る能はず。若し倚立せば、身を屈する能はず、若し腰を低うする時は、正直なる能はず。若し斧柴に著せば、拔きて出だす能はず。爾の時彼等螺髻梵志、是の如き念を作す、『此の神通は、必ず當に是れ彼の大沙門の作なるべきこと、疑有る無し。乃ち我等をして、今日此の柴薪を破る能はず、極めて甚だ勞苦せしむ』。

爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉一切等に告げて言まはく、『螺髻迦葉、汝等は今薪を破らんと欲するや』。迦葉、佛に白さく、『大德沙門、實に薪を破らんと欲して、得る能はざるなり』。是の時佛、是の如き語を作し已りたまふや、彼等梵志は、即ち自ら恣に其の薪柴を破るを得たり。是の時優婁頻螺迦葉、是の如き念を作す『此の大沙門は、大に威力有り、大に神通有り。然りと雖も猶ほ阿羅漢を得ること、我の今の如くならじ』と。

爾の時世尊、食し訖りて、還彼の林に向ひ經行したまふ。是の時優婁頻螺迦葉、所居の住處に、火燭を燃さんと欲して、著くる能はず。是の時彼等螺髻梵志、是の如き念を作す『此の神通は、必ず是れ彼の大沙門の所作なること、疑有る無し。而して我等をして、是の如く辛苦して、火を燃す能はざらしむ』。爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉一切等に告げて言まはく、『迦葉、汝等は火を燃さんと欲するや』。是の時彼等迦葉、報じて言さく、『大德沙門、我、火を燃さんと欲す』。時に佛問ひ已りたまふに、彼の火、即ち五百の火聚を燃す。是の時優婁頻螺迦葉、是の如き念を作す『此の大沙門は、大に威力有り、大に神通有り、乃ち能く彼の燃ゆべき火をして、其の燃ゆるを聽さざらしめ、若し燃えしめんと欲すれば、方に始めて即ち燃えしむ。然りと雖も猶ほ阿羅漢を得ること、我の今の如くならじ』。

爾の時世尊、食し訖り、還彼の林に向ひて經行したまふ。爾の時、彼等螺髻梵志は、火を滅せんと欲して得る能はず。爾の時彼等螺髻梵志、是の如き念を作す『此は是れ沙門神通の力にして、我等をして火炎を滅せんと欲して、滅する能はざらしむるなり』。爾の時世尊、迦葉に告げて言まはく、『迦葉、汝等は今此の火炎を滅せんと欲するや』。迦葉、佛に白さく、『大德沙門、我は今、此の火炎を滅するを得んと欲して、得る能はず』。時に佛、問ひ已りたまふや、即ち五百の火炎を滅し得たり。爾の時迦葉、是の如き念を作す『此の大沙門は大に威力有り、大に神通有り、其の力もて、乃ち能

く火を滅せんとせば即ち滅し、燃さんと欲せば即ち燃す。爾りと雖も猶ほ阿羅漢を得ること、我の今の如くならじ』。

爾の時世尊、食し訖已りて後、還彼の林に至り、經行して住したまふ。是の時彼等螺髻梵志、極寒の冬、天正に夜半に至り、或は嚴酷凍冷、風雪有ること多き後夜に至り、尼連禪河の水中に入り、或は沒し或は出で、是の如くして澡浴す。爾の時世尊、神通力を以て、五百の赤炭の火聚を化作し、彼の岸邊に在り。是の時、彼等螺髻梵志は、寒噤して、水を出でて、岸邊に住在し、各各火に向ふ。是の時彼等螺髻梵志、心に是の如く念ず『此は必定して是れ彼の大沙門の、是の神變をなし、忽然として此の五百の火鑪有りて、烟炎無く、我等をして冷水より出で火に向ひて、炙煖せしむるならん』と。是の時優婁頻螺迦葉、是の如き念を作す『此の大沙門は、大に威力有り、大に神通有り、乃ち能く五百の鑪火を化作して、烟炎有る　く、我の螺髻五百の弟子をして、冷水より出で、火煖に向ひて坐せしむ。然りと雖も猶ほ阿羅漢を得ること、我の今の如くならじ』。

爾の時世尊、食し訖已りて後、還彼の林に至り、經行して住したまふ。是の時彼等螺髻梵志、水を取らんと欲して、各手に瓶を持し、或は軍持(kuṇḍi;壷)を將つて、用つて水を取らんと欲して、捉ふる能はず。是の時彼等螺髻梵志、是の如き念を作す『此は必ず是れ、彼の大沙門の作にて、我等をして瓶及以び軍持を取る能はざらしむるならん』。爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉、幷に及び五百の螺髻梵志一切等に告げて言まはく『迦葉、汝等は各瓶及び軍持等を將つて水を取らんと欲するや』。迦葉、白して言さく『善い哉沙門、此等五百の螺髻梵志は、瓶幷に軍持を將つて水を取らんと欲す』。時に佛、問ひ已りたまふや、其の五百螺髻梵志は、皆能く瓶及び軍持等を將つて、水を取るを得たり。爾の時優婁頻螺迦葉、是の如き念を作す『希有なり希有なり。此の大沙門は、大に威力有り、大に神通有り、乃ち能く此の五百の螺髻梵志等をして、其の水を取るを許せば、乃ち能く水

を得しめ、許さざれば得ざらしむ。然りと雖も猶ほ阿羅漢を得ること、我の今の如くならじ』。

爾の時世尊、食し訖りて已後、還た彼の林に至り、經行して住したまふ。是の時優婁頻螺迦葉、其の已前に、火を祭祀せる時、恒常に七多羅樹の上に坐せり。後の祭祀に於て、還七多羅樹の上に上らんと欲して上る能はず。爾の時優婁頻螺迦葉、是の如き念を作す『決定して是れ彼の大沙門の作せる神通なるや疑なく、我をして此の多羅樹の上に上りて火を祭る能はざらしむるなり』と。是の時迦葉、是の如き念を作す『此の大沙門は、大に威力有り、大に神通有りて、乃ち能く是の如く、我等の樹に上るを許さざれば、則ち上る能はざらしむ。然りと雖も猶ほ阿羅漢を得ること、我の今の如くならじ』と。

爾の時世尊、食し訖りて已後、還彼の林に至り、經行して住したまふ。是の時優婁頻螺迦葉、七多羅樹上に上りて祭祀し、上り已りて安隱に住する能はず。爾の時優婁頻螺迦葉、是の如き念を作す『決定して是れ彼の大沙門の作せる神通なるや疑無く、我をして此の七多羅樹の舊住處に上り坐するに、住するを得る能はざらしむるなり』。復更に上らんと欲して、佛に白して言さく『善い哉、沙門、願はくは我等に舊に依りて此の七多羅樹に住して、火を祭祀するを聽したまへ』。時に佛、語り已りたまふや、其の迦葉等は、即ち舊に依り彼の七多羅樹上に安住するを得たり。爾の時優婁頻螺迦葉、是の如き念を作す『此の大沙門は、大に威力有り、大に神通有り、乃ち能く我の住するを許せば則ち住するを得、許さゞれば得ざらしむ然りと雖も猶ほ阿羅漢を得ること、我の今の如くならじ』と。

爾の時世尊、食し訖りて已後、還彼の林に至り、經行して住したまふ。是の時優婁頻螺迦葉、火を祭祀し訖り、覆藏して置かんと欲して、即ち覆ふ能はず。是の時優婁頻螺迦葉、是の如き念を作す『決定して是れ彼の沙門瞿曇、此の神通を作し、我等輩をして火を覆ふを得ざらしむるなり』と。

是の時迦葉、卽ち佛に白して言さく『善い哉沙門、願はくは我等をして此の火を覆ふを得しめたまへ』。是の語をなし已るや、卽ち火を覆ふを得たり。爾の時迦葉、是の如き念を作す『此の大沙門は、大に威力有り、大に神通有りて、乃ち能く是の如く、覆ふを許せば覆ふを得、許さゞれば得さらしむ。然りと雖も猶ほ阿羅漢を得ること、我の今の如くならじ』。

爾の時世尊、食し訖りて、還彼の舊林中に歸り、經行して住したまふ。是の時迦葉、火を祭祀する時、火及び木頭、東西に馳走して、一住する能はず。是の時迦葉、是の如き念を作す『決定して是れ彼の沙門瞿曇、是の神通を爲し、我が火を祭祀するの器具をして、東西に馳走し、狀、人の駈くるがごとく、定住する能はざらしむるならん』と。卽ち佛に白して言さく『善い哉沙門、願はくは我が此の火を祭祀するの具をして、一に定住するを得しめたまへ』。爾の時佛、彼の迦葉に告げて言まはく『汝等の意の如く、其の祭火の具は、卽ち安定を得ん』と。此の緣に因るが故に、其の迦葉等、是の如き念を作す『此の大沙門は、大いに威力有り、大に神通有り、乃ち能く我が火を祭祀する器の、住するを許せば、則ち住するを得、許さゞれば住せざらしむ。然りと雖も猶ほ阿羅漢を得ること、我の今の如くならじ』と。

爾の時世尊、食し訖りて已後、還彼の林に至り、經行して住したまふ。是の時彼處に、忽爾に時ならずして、其の虛空中に大黑雲起り、大暴雨を降らすに、佛、所居の處には、雨水有ること無し。爾の時世尊、是の如き念を作したまふ、『我、今此の水をして遍布せしめ、水內に於て復地を乾かしめ、塵の起る有らしめ、經行の處を現じて、彼を往來すべし』と。是の念を作し已りたまふや、卽ち前の如き乾地塵坌を現じて、去來經行したまふ。爾の時迦葉、是の如き念を作す『今、旣に時に非ず。虛空の中、云何ぞ忽爾に時ならざるに雲を起し、大雨を降らすぞ。此の大沙門所住の處も、亦一種にして、大水有りて彌滿す。此の沙門、或は水の爲に沒溺せらるべし。或は今見えざらん』

と。是の念を作し已り、多く螺髻諸梵志等を將ゐて、船中に坐し、處處に求覓し、漸く佛所に至る。佛所に到り已るに、是の如くに住したまふ。爾の時迦葉、旣に世尊の兩邊に水有り、唯獨、中間のみ、乾地を現じ、塵土坌起し、來去經行したまふを見、見已りて佛に白さく、『大德沙門、今此の大水中に住在したまふや』。佛言まはく、『此に住す』と。是の語を作し已るや、虛空に飛騰し、卽便ち迦葉の船上に往詣したまふ。爾の時迦葉、此の緣に因るが故に、是の如き念を作す、『此の大沙門は、大に神通有り、大に威力有りて、乃ち能く水に在りて是の道行を作す。然りと雖も猶ほ阿羅漢を得ること、我の今の如くならじ』と。

[一]摩訶僧祇は、是の如き說を作す『如來は彼の優婁頻螺迦葉等輩の爲に、是の如き五百神通を示現したまふ。而して彼の優婁頻螺迦葉は、一切の時に、是の如き念を作す、「此の大沙門は、大いに威力有り、大いに神通有り、復德と術とを變現する此の如しと雖も、而も其は唯阿羅漢を得ること、我の今の如くならじ」と。爾の時世尊、是の如き念を作したまふ、「此の癡人は、無量時に是の如き念有り、此の大沙門は、大威力有り、大神通有り、然りと雖も阿羅漢を得ること、我の今の如くならじと。而も我今此の迦葉及び諸弟子の爲に、慧眼を開き、厭離心を發さしむべし」と』。

爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉に告げて、是の如き言を作したまふ『迦葉、汝は今阿羅漢にあらず、亦復未だ阿羅漢道にも入らず、汝は實に阿羅漢の相無し、況んや復阿羅漢果を得るをや』。此の言に因り、時に其の優婁頻螺迦葉、心に羞慚を生じ、身毛卓竪して、佛足を頂禮し、佛に白して言さく、『善い哉、世尊、我に出家を與へ、具足戒を受けしめたまへ』。爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉に告げて、是の如き言を作したまふ、『汝大迦葉、此の諸の五百の螺髻梵志は、汝に依りて住止し、汝の法行に順ふ。汝其と共に好惡を平量し、告げ語りて知らしめ、彼等の意情の樂む所の如く、是

【一】僧祇部の異說。

の如きを作すべし』。

爾の時優婁頻螺迦葉、佛の語を聞き已り、卽便ち五百の螺髻梵志の邊に往詣し、到り已りて告げて言はく、『汝等梵志、摩那婆輩、我より此の居處を受けて住止し、及び火神所安の堂室及び祭祀の器を奉じ、各汝等の意樂に隨ひて用ひよ。我は今大沙門の邊に向はんと欲す。當に梵行を行ずべきなり』。爾の時、彼等五百の弟子螺髻梵志は、共に優婁頻螺迦葉に白して、是の如き言を作す、『和上、自ら彼の瞿曇大沙門を見てよりこのかた、我等は多時意に樂みて大沙門の邊に往き、梵行を行ぜんと欲せるも、和上の心を敬惜する爲の故に、口に言を發せざりき。和上、今若し彼の大沙門の邊に於て、梵行を行ぜんと欲せば、我等も亦當に隨從して住し、彼の教法に依るべし』。

爾の時、優婁頻螺迦葉及び諸の弟子、佛の所に往詣し、佛所に到り已りて、却いて一面に住す。爾の時佛、迦葉等に告げて言はく、『汝等梵志、汝の鹿皮の衣、及び軍持・杖・衆雜の頭髻を棄て、諸の螺髻をして、火神を祭祀する諸器皿等の種種の調度を、彼の尼連禪河の水中に向ひて、皆擲却せしむべし』と。是の時彼等、卽ち佛に白して言さく、『一ら大德沙門の教誨の如くにして、我等は違せじ』。時に諸梵志、卽ち著する所の鹿皮の衣、乃至、種種の器皿調度を以て、彼の河岸に向ひ、悉く水中に擲ぐ。彼等諸物を水中に擲げ已るや、種種の聲、或は唊唊(śighra-śighra)(子悉の反。)の聲を作し、水を逐ひて流る。彼等螺髻、是の如き諸の異事を見已り、心中に復更に歡喜を增益し、佛足を頂禮し、佛に白して言さく、『唯願はくは世尊、我等輩に出家受戒を與へたまへ』。爾の時佛、彼等梵志に告げて、是の如き言を作したまふ、『汝等比丘、來りて我が所說の法中に入り、梵行を行ぜよ。諸苦を盡さんが故に』。是の時、彼等五百の長老は、聲に應じて出家し、卽ち具足戒を成じぬ。

時に那提螺髻迦葉、尼連禪河水の下流の岸邊に在りて修道し、彼等の鹿皮の衣及び祭火神の器皿調度の、水に隨ひて沿流するを見、見已りて[三]慴然として、心に恐怖を生じ、此の言を發しぬ、『咄咄異

【二】唊唊は慧琳音義に唧唧に作り、經文の唊唊に作るは非なりといへるも、實は梵語の音寫なり。

【三】慴然は慧琳音義に歡然に作り、經文の慴に作れるは、體に非ずといふ。小怖又は懾意なり。

事なり。我が兄、或は能く賊の爲に破られたるか。しからずんば居處にて、他に殺されしならん。我、今往きて彼に至り、是れ何の災禍變怪の致す所とて、忽然に斯の如きかを觀察すべし』。爾の時、其の弟那拱迦葉は、是の念を作し已り、先づ多人の螺髻梵志をして、彼に詣りて逆看し、好惡を當に告ぐべからしむ。『汝等、彼に何の怪か有る、其の事云何を檢校せよ』と。弟子教を奉じ、彼に往きて看已り、廻還して報じて言はく、『並に各平安にして瞿曇氏に事ふ』。那提迦葉は、然る後、自ら三百の弟子を將て、左右に圍遶せられ、長老優婁頻螺迦葉の住處に往き、到り已りて即ち優婁頻螺迦葉の師徒の、鬚髮を剃除し、袈裟衣を著せるを見、見已りて內心に大いに歡喜せず、兄の迦葉に向ひて偈を說きて言ふ、

『仁者は虛しく火神を祭祀し　徒らに復空しく苦行を修せり　今日旣に此の苦行を捨てゝ　猶ほ蛇の故皮を脫するが如しとは』

爾の時那提螺髻迦葉、即ち長老優婁頻螺迦葉兄に白して言はく、『此れ能く勝るゝや』。是の時長老優婁頻螺迦葉、報じて言はく、『此は實に勝る。寧ろ此の行を爲せ。此の行は最も妙なり』。爾の時、那提螺髻迦葉、其の三百の螺髻梵志諸弟子に告げて言はく、『汝等螺髻摩那婆輩、我が彼の居處、及び泉池等、并に諸の調度を、汝の意に自ら知るごとく、何の處分をも作せ。我は今大沙門の邊に在りて、當に梵行を修せんと欲す』。爾の時、彼等三百の螺髻梵志弟子は、師の那提螺髻迦葉に白して、是の如き言を作す、『和上、今若し彼の大沙門の邊に往き、梵行を修せんと欲せば、我等も亦當に和上に隨逐し、同じく彼の邊に詣り、共に梵行を修すべし』。爾の時、那提螺髻迦葉及び諸弟子、佛の所に往詣し、佛所に到り已りて、却いて一面に住す。

爾の時佛、彼等梵志に告げて、是の如き言を作したまふ、『汝等、今能く身上所著の鹿皮及び火を祭祀する器皿調度を將つて、尼連禪河の水中に擲置せよ。棄て去るや以不や』。彼等梵志、同じく

佛に白して言さく、『沙門の教の如くにして、我敢て違せじ』。而して彼等は、前の如き調度を將つて、卽ち水中に擲ぐるに、呋呋の聲を作し、水を逐ひて去る。爾の時、彼の諸の螺髻梵志は、是の如き等の希有の事を見、復歡喜を增しぬ。乃至、彼等長老比丘、時に應じて出家し、卽ち具戒を成じぬ。

爾の時伽耶螺髻迦葉、河の下流に在り、忽ち鹿皮及び火を祭祀する器皿調度の、水に隨ひて流下するを見、見已りて心に復大いに恐怖を生じ、是の言を發す『咄咄異事なり。我が兄は或は能く賊に其の居坐の處を破られ、殺されしにあらざるか。我、今往きて彼に至り、何の災禍の爲めなるかを觀察すべし』。是の念を作し已り、先づ多人の螺髻梵志をして、彼に往きて逆看し、好惡を當に告ぐべからしむ。『汝等、檢校せよ。彼に何の恠か有る。其の事云何』と。弟子、還りて報ずること、前の答ふる所の如し。爾の時伽耶螺髻迦葉、然る後自ら二百の弟子を將て、左右に圍遶せられ、長老優婁頻螺并に及び那提の二迦葉の邊に往き、到り已りて卽ち二迦葉の身を見るに、鬚髮を剃除し、袈裟衣を著す。見已りて內心、大いに歡喜せず、二兄の優婁那提兩迦葉の邊に向ひ、偈を說きて言ふ、

『兄等は昔空しく火神を祭り　亦復徒らに苦行を修したり　今日旣に共に此等を棄つること　猶ほ蛇の彼の故皮を脫する如しとは』

爾の時、優婁頻螺迦葉并に及び長老那提迦葉は、還共に偈を以て弟伽耶螺髻梵志に報じて、是の如き言を作す、

『我等は昔空しく火神を祭り　我等は亦徒らに苦行を修せり　我等は今此の法を捨つるを得ること　實に蛇の彼の故皮を脫する如し』

爾の時伽耶螺髻迦葉、復優婁頻螺迦葉、并に及び那提迦葉等に問ひて言はく、『兄、今此處は實に能く勝るゝか』。是の時、長老二迦葉言はく、『此處は實に勝る。寧ろ此の行を爲せ。此の行は最も妙なり』。爾の時伽耶螺髻迦葉、其の二百の螺髻梵志諸弟子に告げて言はく、『汝等梵志摩那婆輩、我が

彼の居處の、有らゆる泉池井に諸の調度を、汝の意に自ら知るごとく、何の處分をも作せ。我、今大沙門の邊に在りて梵行を修學せんと欲す』。爾の時、彼等二百の螺髻梵志弟子、師の伽耶螺髻迦葉に白して、是の如き言を作す『和上、今若し彼の大沙門の邊に往きて梵行を行ぜんと欲せば、我等も亦當に和上に隨逐し、一時に同じく大沙門の邊に詣りて、共に梵行を修すべし』。是の時伽耶螺髻迦葉、及び其の弟子は、佛の所に往詣し、佛所に到り已りて、却いて一面に住し、佛に白して言さく『大德沙門、今、我及び諸弟子は、沙門の法中に入らんと欲す。是の事一切當に是の如く持すべし』爾の時、世尊即ち彼等螺髻梵志に告げて、是の如き言を作したまふ『汝等若し能く是の事を然りとせば、當に汝等の鹿皮の衣、及び火を祭祀する器皿調度を取り、悉く棄てゝ尼連河中に擲著すべし』。彼等報じて言さく『沙門の教の如くにし、我敢て違せじ』。是の時、彼等螺髻梵志は、即ち鹿皮及び諸の調度祭祀火物を持ちて、悉く河中に擲ぐ。河中に擲げ已るや、其の諸皮衣、軍持瓶罐は、種種の聲を出だし、呹呹と唱响し、流に隨ひて下る。爾の時、彼の諸螺髻梵志は、是の如き等の希有の事を見、復歡喜を增して、佛に白して言さく『善い哉世尊、我に出家及び具足戒を與へたまへ』。佛、即ち告げて言まはく『汝等比丘、來りて我が自說の法中に入り、梵行を修行して、諸苦を盡せ』。是の時彼等諸長老輩は、聲に應じて出家し、即ち具戒を成じぬ。

爾の時世尊、彼の優婁頻螺迦葉の聚落内に在まし、多少の時に隨ひ、意樂のまゝに住し已り、漸漸に行きて伽耶城(Gayā)の邊に向ひ、如來、彼の象頭山(Gayā-śīrṣa)頂に在まし、是の一千の比丘徒衆を以て停住し、即ち三種の神通、――所謂身通と口通と意通とを以て、彼等を教化し、之を調習したまふ。爾の時世尊、身通を顯はさんと欲し、所謂一身を多身と作し、多身を、復還一身と作し、上に沒して下に現じ、下に沒して上に現じ、東に沒して西に現じ、西に沒して東に現じ、南に沒して北に現じ、北に沒して南に現じ、山崖石壁を能く過ぎて礙なく、地に入ること水の如く、

水を履むこと地の如く、地より踟趺のまゝ虚空に昇陟して猶ほ飛鳥の如く、身より烟炎を出だして大火聚の如く、火を滅して水を現じ、水を消して火を放ち、此の日月の是の如き威德あるを、能く手を以て摩捫捉持し、乃至、梵天まで、自在に行動したまふ。此は是れ如來の、身神通を現じたまへるなり。

口通を現ずるとは、『汝等比丘、今應當に是の如き分別を知るべし。應當に是の如き分別を生ずる莫かるべし。應當に是の如く觀察思惟すべし。應當に是の如く思惟して觀ずる莫かるべし。汝等比丘、應に是の如く證し、是の如く證する莫かるべし。汝等比丘、應に是の如く行じ、是の如く行ずる莫かるべし』と。此は、是れ、如來の、口神通を現じたまへるなり。

意通を現ずるとは、『汝等比丘、今應當に知るべし。此の一切の法は、皆悉く熾燃す。熾燃と言ふは、眼も亦熾燃し、色も亦熾燃し、眼識も熾燃し、眼觸も熾燃す。眼觸の因りて生ずる所は、受有りて、若しくは樂、若しくは苦、非樂非苦なり。彼も亦熾燃す。何を以てか熾燃する。欲火を以ての故に、煩惱熾燃し、瞋恚の火を以て煩惱熾燃し、愚癡の火を以て煩惱熾燃す。我、是の如く眼過を說く。

是の如く、其れ耳も熾燃し、聲響も熾燃し、略說せんに、乃至、鼻香も熾燃し、舌味も熾燃し、身觸も熾燃し、意法も熾燃す。意觸に因る所生の受は、若しくは苦、若しくは樂、非苦非樂なり。彼も亦熾燃す。何を以てか熾燃する。欲火を以ての故に煩惱熾燃し、瞋恚の火を以て、煩惱熾燃し、愚癡の火を以て煩惱熾燃す。我、是の如く耳鼻舌身根塵の過患を說く。

復次に若し多聞の人有りて、能く是の如き深き觀察を作さば、彼は能く眼を厭ひ、眼識を厭離し、眼觸を厭離せん。若し眼觸に因る所生の受の、若しくは苦、若しくは樂、非苦非樂を、是の中、亦能く是の如く厭離す。これ眼を厭離するなり。又復是の如く耳を厭離し、聲を厭離し、乃至、略說

せんに、鼻香を厭離し、舌味を厭離し、身觸を厭離し、意法を厭離す。若し意の觸に因る所生の受の、若しくは樂、若しくは苦、非樂非苦を、彼亦厭離す。既に厭離し訖れば、即ち染著せず。既に染著せざれば、即ち解脱を得、既に解脱を得れば、即ち是の如き內淨智の現ずる有りて、我今生死を已に斷じ、梵行已に立し、所作已に辦じ、後有を受けずと自ら知る』。此は是れ如來の意の作せる神通なり』

爾の時世尊、是の如き說を作し、三種神通敎示の時、彼の諸の一千の比丘徒衆は、無爲漏盡し、諸法中に於て、心に解脱を得たり。而して偈有りて說く、

『已に生死の諸欲流を斷じ　已に梵行を得て自ら利益し　所作悉く已に皆成辦して　更に後有の生を受けず』

爾の時、彼の諸の一千の比丘、佛世尊の是の如く說くを聞き已り、諸漏中に於て、復有爲無く、即ち內心に善好の解脱を得、梵志の法を捨てゝ、聲聞僧と名けたり。

一優波斯那品第四十五の上

爾の時、彼の三迦葉兄弟に、一二甥螺髻梵志有り。其の梵志を優波斯那(Uapsena)(〔隋〕に最上征將といふ)と名づけ、三一山に在住す。其の所住の山を、阿修羅(Asura?)と名く。恒に二百五十の螺髻梵志弟子と共に、仙道を修學す。彼、其の舅迦葉三人及び諸弟子の、大沙門の邊に往詣し、悉く皆出家し、鬚髮を剃除せるを聞き、聞き已りて心に驚き、大いに歡喜せず、口に言を發すらく、『希有なり舅等、若干年、火神を祭祀し、今日忽ち已に沙門の中に入り、爲に弟子と作るとは。我、今當に彼處に行き、何の故に是の不善事を作せるかを訶責せん』と。彼、口中に唧唧の聲を咽みて、彼の三阿舅の邊に往詣し、到り已りて其の三阿舅の、鬚髮を剃除して、袈裟衣を著せるを見、見已りて舅に向ひ、偈

【一】この傳、他の佛傳に記さず、たゞ Mahāvastu, III. pp. 431—432 に出づるのみ。恐らくは三迦葉の甥と傳ふるために、ここにその出家因緣を附加挿入せるなり。

【二】甥は他本に外に作る。又、梵本「大事」には優婆頻螺迦葉の姉の子とせり。

【三】梵本「大事」は、尼連禪河畔に草庵を結びて住し、河中に祭器等の流れ來るを見て、三迦葉の歸佛を知るとせり。

を說きて言ふ、

『身等虚しく火を祀る百年　亦復虚しく彼の苦行を修せり　今日同じく此の法を捨てゝ　猶ほ蛇の故皮を脫するごときとは』。

爾の時、彼舅迦葉三人は、同じく共に偈を以て其の甥優波斯那に報じて、是の如き言を作す、

『我等は昔空しく火神を祀り　亦復徒らに苦行を修せり　我等今日此の法を捨てゝ　實に蛇の故皮を脫する如し』

爾の時、[四]兵將螺髻梵志、偈を說くを聞き已り、復彼の三阿舅に反問して言ふ、『此は能く勝るゝか』。是の時、彼の三阿舅報じて言はく、『此は實に勝る。寧ろ此の行を爲せ。此の行は最も妙なり』。爾の時、兵將螺髻梵志、其の二百五十の螺髻梵志の弟子に告げて、是の如き言を作す、『汝等梵志摩那婆輩、我が彼の居處の有らゆる泉池幷に諸調度を、汝が意に、何の處分を作さんかを自ら知れ。我は今大沙門の邊に在りて、梵行を修行せんと欲す』。爾の時、彼等二百五十の螺髻梵志、卽便ち共に優波斯那螺髻梵志に白して、是の如き言を作す、『和上、今若し彼の大沙門の邊に往き、梵行を行ぜんと欲せば、我等も亦當に和上に隨逐して、同じく彼の邊に詣り、共に淨行を修すべし』。

爾の時、兵將螺髻梵志及び諸弟子、佛の所に往詣し、佛の所に到り已り、佛に白して言さく、『大德沙門　我今願はくは諸弟子を將て、沙門の法中に入り、乃至、是の事當に是の如く持すべし』。爾の時、世尊、彼の螺髻諸梵志に告げて言まはく、『汝、若し然らば、當に自ら汝の鹿皮の衣、及び祭火の器を取り、一邊に擲棄すべし』。其の彼等諸梵志言ふ、『沙門の教の如くにして、彼等違せじ』と。卽ち居處に至り、祭火の具を將つて、一邊に擲著す。爾の時、梵志、祭火の器皿を擲棄し已りて後、還佛所に至り、佛所に到り已りて、佛足を頂禮し、佛に白して言さく、『善い哉世尊、我に出家及び具足戒を與へたまへ』。佛彼等に告げて、是の如き言を作したまふ、『汝等比丘、來りて我が自說の法

【四】兵將、征將の譯、優波斯那の略譯。

中に入り、梵行を修せよ。諸苦を盡さんが故に』。而して其の彼等二百五十の諸長老輩は、聲に應じて出家し、卽ち具戒を成じぬ。爾の時世尊、卽ち彼等諸長老輩の爲めに、更に說法を增し、前の如く、還三種の神通を以て、示敎利喜したまふ。是の時、彼等は、無爲の法に於て、悉く諸漏を盡し、心に解脫を得たり。

爾の時世尊、最初に集聚せる諸比丘衆の、所謂[五]一千二百五十人と倶なり。並に悉く梵志より出家し、皆阿羅漢にして、悉く自利を得、世尊に隨侍し、說法を證會す。

[六]復次に其の後、諸比丘等、卽ち佛に白して言さく、『善い哉世尊、彼等螺髻梵志の師徒は、往昔の時、何の善根をか種ゑてか、今日並に出家受具を得、皆、羅漢を證せる。昔、何の業をか作してか、今、是の報を得る。又彼の長老優婁頻螺迦葉一人、[七]其の五百の螺髻梵志に、首たるを得て、最妙最勝、最上最尊なるか。那提迦葉は、三百の弟子に首と爲り最と爲り、勝と爲り妙と爲り、伽耶迦葉は、二百の弟子に、首と爲り勝と爲り、妙と爲り尊と爲れるか。又復長老優婁頻螺迦葉は、往昔何の業を造りてか、今日世尊、種種に敎示したまふに、是の如く難化にして、自餘の一切諸梵志等は、化を受くること易き』。是の語を作し已りて、默然として住す。爾の時佛、諸比丘に告げて言まはく、『汝諸比丘、至心に諦かに聽け。我、念ふに、往昔、還此の閻浮提の內に在りて、具足して一千の商人有りき。彼の商人中、三兄弟有り。各商主たり。其の一は、還た優婁頻螺迦葉と名づけ、五百の商人を主領し、第二を、還た那提迦葉と名け、亦復三百の商人を主領し、第三を還た伽耶迦葉と名け、亦然も、還た二百の商人を領せり。爾の時、彼等三大商主及び諸商人、相共に海內に往きて治生せんと欲し、海に入るに堪ふる貨を、莊嚴し已訖る。其の物の價數、直、三百千萬の金錢に足れり。一百千萬を自らの食糧に擬し、一百千萬を餘の商人に擬して、以て本領と爲し、一百千萬を雜用度に擬して、船舶を料理す。彼等、是の如く莊嚴し竟り、漸漸に行きて、彼の海岸に至り、海岸に至り

【五】一般には、優波斯那の二百五十弟子を除きて、舍利弗、目犍連に隨從出家せる二百五十人を加へて、千二百五十人とす。

【六】三迦葉の三商主本事譚を說く。この傳他に缺き、衆許摩訶帝經にのみ見ゆ。

【七】縮藏には、この間に共の字を有するも、恐くは衍字ならん。

已るや、大海の神を供養祭祀し、船舫を辦具し、其の外に價を倍して、更に五人を雇ふ。所謂善く解して船を調治する者、四方を觀る者、水に泝ひて入る者、善水に浮ぶ者、帆を張施する者なり。既に是の如く彼の五人を得已るや、其の三商主、大聲に唱へて言ふ、「誰か能く海に入る」。(三稱)是の如く三聲に大唱告し已りて、卽ち船上に坐し、相共に海に入る。財を求めんが爲めの故なり。彼等既に大海の中に至り、忽ち黑風に遇ふ。彼の風、船を吹きて、海潭の上に擲げ、僉然として住しぬ」。

【八】泝は慧琳音義に溯に作る。向也亦行也。

【九】潭は沙出也、沙堆也、水中の央地をいふ。

卷の第四十三

優波斯那品第四十五の下

『爾の時、商主及び、衆の賈人、海洲に至り已りて、種種諸雜の珍寶に値ひ、彼等收拾して、其の船舶に滿し、還つて岸邊に至り、寶貨を收斂して、本國に向はんと欲し、中間の路上に、遇一塔を見る。其の塔は乃ちこれ迦葉世尊・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀の舍利の塔なり。其の塔、破壞して、基陛頽落し、處處墮墜す。是の如く見已りて、彼の最長の商主、餘の二商主及び衆商に告げて言ふ、「汝諸人輩、若し我等、身命を惜まず、財を求めんが爲めの故に、彼の大海に入り、今、彼處に利を得て廻還し、此の間に至れるを知らば、我等は今亦共に來世利益の善業因緣を作すべし。舊智人所說の偈に言ふが如し。

「福德の力は多利を成ず　人は利を得んが故に放逸生ず　放逸なれば卽ち持戒心無し　是の因緣を以て地獄に墮つ」

爾の時商主、是の偈を說き已り、復更に告げて言はく、「汝等當に知るべし。是の因緣を以て、我等は今應當に心を運び、共に錢財を斂め、意の多少に隨ひて、此の迦葉如來舍利の塔を料理すべし」。是の時、彼等諸商主輩及び衆の商人、同じく共に諮りて長商主に白して言はく、「大いに善し、商主、汝、若し錢を斂めば、當に自ら主と作りて、檢校造營すべし。我等、心に隨ひて出す所の多少の錢財、之を與へん」。時に長商主、是の如く辭言す、「我は檢校の主たるに堪へず。所以は何に。我、事緣多くして、此の壞塔を修理する能はず。我、若し料理して此の塔を營まば、則ち我の家中は生活を妨廢せん」。彼等商人及び二商主、慇懃多時、相共に勸請し、檢校せしむ。是の時、彼等諸の商人輩は、速疾かに多少の錢財を隨ひて出だし、之を付與す。

爾の時優婁頻螺迦葉、彼の塔を修營し、即ち自ら別に第一の覆盆を造りて、其の上に安置し、其の次に、即ち是の那提迦葉は、第二の覆盆を、其の次に、復、是の伽耶迦葉は、第三の覆盆を安置す。是の如く次第に、彼の商人及び商主等を通じて、詳かに共に迦葉如來舍利の塔の破壞崩落せるを料理して、皆、端嚴ならしめ、還初造の如く、料理し訖已りて、是の如き願を發す、「願はくは我等輩、未來世中に、還共に是の如き世尊に値遇し、既に値遇し已りて、彼の世尊所説の法敎に於て復願はくは我等速疾かに證知し、願はくは、來世世世生生に、三惡四趣の中に墮する莫からんを」と』。

佛、比丘に告げたまはく、『汝等當に知るべし。彼の三迦葉と千の商人は、今の三長老幷に及び一千の比丘是れなり。又諸比丘、彼の時に、優婁頻螺迦葉は、昔日諸商人の多時慇懃の勸請を以て、始めて檢校を肯じたり。彼の業を以ての故に、今我が前に於て、多時にして方に始めて我が化を受けたるなり。爾の時に當りて那提迦葉・伽耶迦葉の二商主等及び諸商人は、暫らく一言を發し、心の多少に隨ひて、速かに錢財を出だせり。是の業報を以て、今日速疾かに我が化を承受せり。彼の時、優婁頻螺迦葉は最長商主にして、先づ迦葉如來世尊の舍利塔上に、第一の覆盆もて、以用つて供養せり。彼の業報に因りて、今日、五百人中に於て、最も其の首と爲り、最勝最妙にして、最も第一たるを得たるなり。那提迦葉は、第二に覆盆の、彼の業報に因りて、今三百の梵志の爲めに首と作りて第一たるを得たるなり。伽耶迦葉は、第三の覆盆の、彼の業報に因りて、今二百の螺髻梵の首と作りて、第一たるを得たるなり。爾の時彼等、是の如き願を發しぬ、「願はくは、我、未來生生世世に、惡道及以び地獄に墮つる莫けん」と。彼の業報に因つて、惡道乃至地獄に入らず、恒に人天に生れ、快樂を受けたるなり。又其の彼等は、共に迦葉佛の舍利塔の破壞せるを見て、料理して還舊の如きを得、心に是の願を發しぬ、「願はくは我等未來世中に、還是の如き世尊に値遇するを得、既

に値遇し已るや、彼の世尊の邊に、所說の法有るを、我等聞き已りて、速疾かに證知せんを」と。彼の業報に因りて、今我に値遇し、即ち出家を得、具足戒をけて、羅漢果を得たるなり』。

時に諸比丘、復佛に白して言さく『希有なるかな世尊、云何ぞ世尊、是の優婁頻螺迦葉を見るに、邪道に墮し、世尊方便して、五百種の神通敎化を出したまひ、然る後始めて阿羅漢果を得たるか』と。是の語を作し已り、默然として住しぬ。爾の時佛、諸比丘に告げて言まはく『汝諸比丘、但に今日のみ、我、優婁頻螺迦葉の、邪道に墮せるを見、勇猛精進、五百種の神通を出だして化し得たるに非ず。其の過去世にも、亦邪道に墮し、我、心に勸劭化取して亦得たるなり』。時に諸比丘、即ち佛に白して言さく『善い哉、世尊、此の事は云何。願はくは爲めに解說したまへ』。

爾の時佛、諸比丘に告げて言まはく『汝諸比丘、至心にして諦に聽け。我念ふに往昔に、一國土有りき。毘提何(Videha)(〔隋〕に非正身といふ。)と名く。彼の國内に一刹利王有り、鴦伽陀(Aṃgada)(〔隋〕に與分身と言ふ。)と名く。灌頂して王と爲り、甚だ大力有りて、兵衆多饒、錢財穀米は、倉庫に盈溢せり。爾の時、國王、心に邪見有り。曾て、一時、月盛圓滿にして、光明照耀せる、十五日の夜、其の王、初夜に諸大臣を喚びて、悉く來りて集聚せしむ。其の第一臣を、毘闍那(Vijaya)(〔隋〕に難勝といふ。)と名け、第二大臣を、蘇摩那(Sumana)(〔隋〕に善意といふ。)と名け、第三を名けて阿羅波多(Ālapata?)(〔隋〕に前言といふ。)と爲す。此の三大臣、最も上首たり。爾の時彼の王、復更に廣く命じて、無量の諸大臣等を召集し、之に告げて言はく、「汝諸臣等、各各自ら心意の中を說け、何の方便を作してか、此の一夜を、相共に娛樂して過ぎ、睡らざらしめん」。時に前言臣、即ち王に白して言さく、「大王、當に知るべし。臣の意見の如くんば、應に須らく四種の兵衆を備辦し、未降の國土を、當に降伏せしめ、旣に降伏し已らば、治化して住すべし」。時に善意臣、復王に白して言さく、「大王、當に知るべし。臣の意見の如くんば、今、一切處の、有らゆる怨敵は、皆悉く降伏して、更に畏るる所無し。今宜しく情を恣

【一】優婁頻螺迦葉の鴦伽陀王本事。此の本生因緣の結構、殆んど中阿含寂志果經のまゝなり。

【二】毘提何の何は恐く呵の誤り。

にして、五欲を受けて、自ら歡樂すべし」。時に難勝臣、復、王に白して言さく、「大王常に知るべし、五欲は恒常に是れ事とするを得べし。これ何の奇有り、何の希有あらん。但大王、今若し沙門若しくは婆羅門の、精進持戒具足多聞廣智慧の者有らんに、若し是の人を得ば、彼を供養すべし、彼に承事すべし。何を以ての故に。開悟の人なるが故に」。

爾の時國王、彼の臣に報じて言はく、「卿の此の一言は、甚だ大に善し。此の言は甚だ美なりと爲す。是の故に卿は今、審諦に觀察して、何處の邊の最好沙門、好婆羅門か、精進持戒にして、多聞智慧なるかを看よ。我當に彼に至りて承事供養すべし」。時に前言臣、卽ち王に白して言さく、「大王、若し是の如き人を須たば、臣は今能く是の如き人を知る。鹿苑に處在して、一精進多聞の人有り。名けて裸形(Acela?)といふ。姓は迦葉氏(Kāśyapa)、能く微妙多種の言語を說く。大王、今彼の人に事ふべし。」

爾の時彼の王、駟馬を賢善妙車に嚴駕して、其の上に坐し、身に白衣を著け、白き瓔珞を攝き、左右皆悉く白き衣裳を著け、白き傘蓋を張り、白き革履を脚にし、手に白拂を執り、白摩尼を以て之を莊嚴し、大王の威、大王の神力を以て、及び彼の諸臣を前後に導從し、裸行迦葉師の邊に往詣し、到り已りて恭敬し、一面に坐して、未だ聞かざることを諮受せり。

爾の時舊伽陀王、迦葉裸形導師を慰問して、是の如き言を作せり、「尊者、四大は安隱なりや不や。一切時節は和順なりや不や。資身の物は具足を得たるや不や。衣食は得易くして乏少する所無く、擾亂せざるや」。爾の時裸形迦葉道人、卽ち彼の舊伽陀王に報じて、是の如き言を作せり、「大王、我、今乏少する所無く、我が身も亦安隱を得て患無し。又復大王の身體、起動安和なりや不や。善事の利益、增長するや不や、國內の人民、豐樂なりや不や、王の政治は端平にして直なりや不や」。爾の時舊伽陀王、彼の裸形迦葉道人と共に、相慰問し已り、心に疑處有り、卽ち諮問して言はく、「尊者、

世間に諸の沙門及び婆羅門有り、各法行を說く。是の中の有らゆる至眞實なる者を、尊者、我が爲めに次第して解說せよ」。是の語を作し已るや、是の時裸行迦葉道人、即ち王に報じて言はく、「大王、善く聽け、是の中、有らゆる至眞實なる者、此の眞義を、我、今當に說くべし」。是の中偈有り、鈍根の人は、了知する能はず。

[三]「世間の幽冥愚癡の人は　或は實なると或は虛なると或は妄語なるとを　彼に智慧有ること無きを以ての故に　語に觸るるも辯じ了知する能はず　諸業は一切雜種無し　善惡の果報も亦有らず　夜叉等の身も亦實に非ず　況んや復上諸天有るを得んや　又復父母親有ること無く　此の世彼の世悉く皆絕え　沙門及び婆羅門等　彼の一切も皆悉く空なり　世間の師等も亦復無し　更に誰か能く調伏せらるる有らん　[四]愚癡人の輩は他に施を教ふるも　智人は聞き已りて心に隨はず　若しは善く他の財を誑取する有りて　彼實に愚癡にして自ら智と言ふのみ　死すべき所のもの其れ自ら死して　施を行じ已りて後果の收むる無からん　此の身は一切常に相連る　斷を言はんと欲するも是有る無けん　有らゆる火風及び地水に　若しくは苦あり不苦あり并に樂時あるのみ　第七は即ちこれ壽命根なり　此等は能く殺す者有ること無し　諸身及び命の兩間內に器仗　中より自ら運行するのみ　世間の愚癡人は知らずして　謂ひて言ふ此は傷害せられて死すと　是の如く怖畏するを不智と名け　若し受くるを是を智慧人と名く　一たび八萬四千生を經ば　流轉の時や方に脫するを得ん　是の如く煩惱は乃ち能く淨く　[五]八萬四千生の後周に流轉に錯亂の期有る無きこと　猶ほ海湖の波の限に依るが如けん　是の如き法を次第に說かん　大王今應當に知るべし」

爾の時前言大臣、偈を說くを聞き已りて、即ち裸形迦葉師に白して言はく、「是の如く是の如し、迦葉道人、尊者の說の如し。所以は何に。尊者迦葉、我、宿命を知る。憶念するに、昔倶睒彌城(Ka-

【三】この偈に表はるゝ思想は、六師中の富蘭那迦葉の說といはるゝものに一致す。(大乘涅槃經にては尼乾陀說とするもの)。

【四】愚癡人とは一般の沙門婆羅門を指し、智人とは自宗の智者を指す。

【五】八萬四千生とは、時至れば自然に解脫す、善惡業報あるなしといふなり。

usambī）に在り、曾て屠兒と作る。彼の時、我、無量無邊の牛羊水牛豬羊馬を殺し、殺しては賣りて錢を取り、以用つて活命せり。我、是の如き惡業を作して後、彼より捨命し、今此の大將の家に來生して、資財を有つに足る。是の因緣を以て、我知んぬ、善惡の業報有ること無きを」。

爾の時、鴦伽陀王の第一大臣の、難勝と名くるが、王の後に在りて立てり。彼の大臣、是の如き語を聞き已りて、悲泣して涙を下し、嗚咽して言はざりき。時に鴦伽陀王、彼の臣に告げて言はく、「汝、今何の故に悲泣すること乃ち爾るか」。難勝報じて言さく、「大王當に知るべし。迦葉道人所說の偈、及び前言臣の是の如き義理は、違失有ること無し。大王當に知るべし。我も亦憶念するに、往昔俱睒彌城に在り、曾て長者と作り、能く大に捨施し、檀主と作りて、有らゆる資財を、悉く皆他と共に分張して用ひ、白月黑月の八日十四及び十五日に、恒常に八關の齋戒を受持し、恒常に精進して身口を守護せり。我、是の如き清淨の業を作し已りて、今是の如き下賤の婢の胎に墮し、生れて奴と作る。大王當に知るべし、是の因緣を以て、我、躶形迦葉道人、及び前言臣の二人等の語を聞き、是の故に悲泣啼哭して勝へず、亦世間に善道有ること無きを知りぬ」。

時に鴦伽王、躶形迦葉道人の是の如き語を聞き已り、座より起ちて、還た本宮に至り、彼の夜を過ぎて後、百官一切の大臣を聚集し、之に告げし言はく、「卿等三人、今日より去、若し私竊善惡等の事有るも、愼みて我に問ふ莫かれ。我、今此の難勝善意幷に及び前言の三大臣等を遣はす。此等の三人は、聰明にて智慧あり、我に代りて事を判ぜん」。時に鴦伽王、是の語を作し已りて、一殿に入りぬ。名けて妙色(Durūpa?)と爲す。其の中に在りて坐し、七日を經て、五欲の樂を受け、放逸自恣、情を縱まにして住しぬ。

七日を過ぎて後、時に鴦伽王に、一女有り、名けて意憙といふ、身に種種雜色の衣を著け、復、種種の瓔珞七寶を以て、身を莊嚴し已り、妙色殿に向ひ、父王の邊に至り、到り已りて父王の足を

頂禮し、却いて一面に坐し、默然として住す。時に鴦伽王、其の女に告げて言はく、「善きかな意憙女、汝曾て彼の園の樹林内に至りて遊戲せるや不や。其の中に多く種種の樹木有り、其の樹木の上に、諸の華果有り、復種種の飛鳥の聲を作す有り、汝彼の中に入りて意樂しむや不や。汝、何等をか貪る。我に向ひて之を道へ。求願するものを當に與ふべし」。是の語を作し已り、女の須つ所を問ひぬ。時に意憙女、父王に白して言さく、「善い哉阿爺、女は今身資乏少する所無し。唯阿爺に一言を啓白せんと欲す。唯願はくは父王、女の諮諫を聽きたまへ」とて、偈を說きて言ふ、

「父王我今布施せんと欲す　一切の沙門婆羅門に　恒に月生の十五に至る時　願はくは我に千金の錢直を與へんことを」

時に鴦伽陀王、其の女の是の如き語を說くを聞き已り、即ち還偈を以て意憙女に報じて、是の如き言を作しぬ。

『善女汝今至心に聽け　我智人より是の如く聞く「復多種の財を施さんと欲すと雖も　一切は皆空しくして果執無し」と』　汝今何の故に此の意を發して　世間の諸癡人を誑惑する　現在未來は悉く皆無きを　汝復何を須つてか過勞苦する』　癡女汝今彼を聞かずや　迦葉の說法は正しくして差はず　實に造業及び作人無く　一切人天の善惡果も　夜叉鬼神も悉く有るに非ず　父母眷屬も亦復無し』　略說せんに八萬四千生に　是の如き煩惱は乃ち能く淨し　若し八萬四千生を過ぎての後は　流轉に方に錯亂の心無きこと』　猶ほ海潮の限期に依るが如し　間中未だ至らざるに　預めすべからず　但當に任運に時の到るを待つべし　何ぞ强ひて世の紛紜を作すを用ひん。』　迦葉の諸說を汝當に知るべし　此の事虛有るなく眞實なり　現及び未來世は無し汝自ら獨り疲勞する莫れ」。』

爾の時、意憙女、父王鴦伽の、是の如き語を說くを聞き已り、心中に樂まず。即ち復偈を以て更

【六】間中は、八萬四千生の輪廻期間を指す。
【七】（原文）此事無有虛眞實。

に父王に白して言さく。

「阿爺は今是の國の王なり　應に正法を以て天下を治むべし　惡臣は諂曲にして旣に實無く　復王に愚癡師に事へんことを勸む』　迦葉及び彼の三大臣の　其等の所說は眞正ならず　父王此はこれ惡知識なり　今は詐りて知識の形を現ずるのみ』　自ら邪道を行き復人を誤る　下賤の愚癡と何の別つ所ぞ　それ今王に安樂を與へずして　反りて王をして不善の因を作さしむ』我昔曾て是の事を聞きてより來　現在の我が身親しく自ら見るに　愚癡の故に此に來生し　後復還りて愚癡の身を得ん』　幽冥を出で已りて幽冥に入り　其の後復還りて幽冥を受けん　迦葉は旣にこれ愚癡者なり　其の愚惑の意に稱へるを宣ぶる所なり』　王は人主と爲りて四方を統べ　理を知り世間の事を達解せるに　云何ぞ彼の小兒輩の如く　邪小の道徑中に入りて行き』　意受[八]に隨逐して人に親近し　相學びて卽便ち染著を生ずること　箭の血に汚され已りて束に入り　展轉して更に相塗るが如きぞ』　智者は交往して深く自ら防ぎ　惡伴の諸朋友に狎れず　身に諸罪を作さずと雖も　常に作罪の人に習ひ近づけば　久眤習學して自ら相成じ　其の後自然に惡響を得』　是の故に猶ほ彼の射　垜[九]の如く　智者の罪に著するを畏るるも亦然り諸の惡知識と交る莫く　常に智慧の善知識に親しむ』　若し諸衆生の身業淨く[一〇]ば　八萬四千の生を經んとき　屠兒の衆命を殺害する　時[一一]も　又獵射釣魚の如き者も　迦葉旣に彼等の輩に似

彼の輩も亦迦葉の　儔の如く』　彼の二を格量するに一種にして齊しく　勝不如の差別有ること無けん　是の如き理を體する無き迦葉は　愚痴盲冥にして　空しく出家す[一二]』　此の虛妄を執して淨因と爲さば　八萬四千の生分畢るや　顚倒左轉して行くに度を失ひ　無智愚癡にして心意迷はんも　若し諸衆生の淨を得ん時に[一三]　八萬四千の受に應ぜじ』　偷賊の人物を劫殺し能く他の與に惡怨讎を作すと　迦葉と彼と　殊に有る無く　彼と迦葉と亦異る無からんも　衆生

【八】意受。意の命ずるまゝに隨ふ、卽ち本能に隨ふなり。

【九】垜。或は埵に作る。射垜也。弓射を習ふとき、的をかけ當く處。

【一〇】身業淨。善惡の差別なくして、一切のものゝ所爲に價値の差別なく、悉く淸淨なりとせばの意なり。

【一一】時、恐らくは者の誤ならん。

【一二】空出家とは、因果の理に暗き迦葉の出家は、全く無益のものなりの意。

【一三】(原文)若諸衆生得淨時、不應八萬四千受。淨は淨行にして、淨行だにあらば、八萬四千生を待たずして、直に淨果を得んとの意。

若し彼の淨を得なば　云何ぞ八萬四千生あらん』　是の如く善惡を數取する時　上下も及び中も平等ならば　一切に勝無く復劣も無く　亦復分別の生ずることも有ること無し』　【一四】若し諸衆生にして淨修を得つつ　八萬四千處を經歷せば　彼の人愚癡にして智有る無きこと　猶ほ彼の迦葉の空しく出家するがごとけん』　譬へば炎熾なる大火燃の　普ねく諸の所祭の物を燒盡する如く　是の如く無智愚癡の故に　自ら一切の功德山を燒かん』　大臣前言は未來を見て　衆罪を造作するに果報無しといふも　彼先世に福業を修して　故に今快樂心を得たるなり』　若し人衆罪を造作するの時は　福を捨てて自然に殃禍を受けん　船の水中に在りて出でざるが如し　重きを以て沈沒するが故に浮ばず』　更に人の能く之を出だす有る無くんば　即ち水中に沒して常に腐敗す　人の數數諸罪を造るが如し　造りて息まず罪過多きを以て　是の如くして即ち地獄中に沒す　王の此の前言臣は卽ちこれなり』　其の罪患未だ成熟せざるを以て　其の罪久しからずして熟するを卽ち知らん　罪熟して卽ち彼の泥梨に墮すること　猶ほ船の水中に在りて沒するが如けん』　【一五】諸苔の衣に覆蔽せられて　草重くして自ら擧ぐるに勝ふる能はず　船久しくして是の如く益重牢なり』　人の衆罪を造るも亦復爾り　漸漸に久沈して體轉た重からん　猶ほ人の善行の因を造りて　速疾に上界に向ひて生ずるを得る如し』　往昔諸の一切の罪を造らば　今生は彼の地の種子の如く　罪業盡き已りて後漸くに生じ　若し諸善を造らば業報の時　即ち自ら善果處に生ぜん』

時に意憙女、是の偈を說き已り、復更に重ねて其の父に白して言さく、「父王、當に知るべし、我自ら思惟して、亦宿命を識る。所以は何に。我憶ふに、往昔七生して摩伽陀國王舍城內に在り。惡知識の相牽挽するを以ての故に、多くの罪業を造り、邪慾を行ひ、他の妻婦を侵して、樂を受くること天の如かりき。大王、當に知るべし、我、彼の時、造る所の惡業を、覆藏して住すること、灰

【一四】（原文）若諸衆生得淨修、經歷八萬四千處、彼人愚癡無有智、猶彼迦葉空出家。淨修を得たる衆生にして、同じく八萬四千生の說を信ぜば、何の爲の淨修ぞの意。

【一五】（原文）彼諸苔衣所覆蔽、草重自擧不能勝。苔衣は慧琳音義に水中魚衣綠色生衣底者也、亦可以爲紙といふ。船久しく沈沒する時、海草の附著する所となり、重くして浮む能はざるに至るをいふ。

もて火を覆ふが如かりき。復次に大王、我、彼處に於て、捨身して已後、又復金剛聚落(Vajji; Vṛji)の富貴の家に生れ、彼處に生れ、生れ已りて善知識に値ひ、黑月白月の八日・十四・及び十五日に、清淨に一六八禁の齋法を守護し、恒常に持戒せり。大王當に知るべし。我、彼處に於て、既に善業を造れり。譬へば種種の伏藏を安置するに、水界に至り、牢固に封治して、即便ち停住するが如し。復次に大王、我彼處に於て、亦身命を捨し、昔、緣に遇ひ惡業を造れるを以ての故に、餘有りて、未だ盡きず、即便ち叫喚地獄(Raurava)に墮落し、彼處に在りて、多千年を經、極苦の厄を受けぬ。復次に大王、我、彼處に於て、罪業畢盡し、捨身して即ち頻那倶吒國土内に生れ、白羝羊身を受く。彼處に生れ已るや、諸王子有り、或は車乘に駕し、或は鞍韉を被せて我が上に騎りぬ。復次に大王、我、彼處に於て、既に捨身し已り、復彼の陀毘羅國(Draviḍa)に生れて、亦羊身と作り、彼處に捨身して、復、牛身を受け、彼の牛身を捨てて、山林中に出で、獼猴の身を受けぬ。復次に大王、我、彼處に獼猴の身を捨て、還た彼の金剛國(Vajji, Vṛji)內に生れ、復、非男非女等の身を受け、彼處の業盡くるや、捨身して即ち忉利天上歡喜園(Nandana)中に生れ、天帝釋の與に、以て侍衞と爲れり。復、次に大王、我、彼處に捨身せる後、昔、月六の齋戒を護持して清淨を得たるを以ての故に、今日大王の家に來生し、資財巨富にして、乏少する所無し。大王、今自ら此の因緣を觀ぜざるべけんや。何によりてか是の如き功德を得たるぞ。昔、善業を造れるを以ての故に、今此の報を受くること、是の如きにあらざるべきや不や」。

爾の時鴦伽陀王、是の如く女の意憙と共に、對說言論せる時、一天仙有り、名けて一七不那羅陀(Nārada?)((隋)に不叫喚といふ。)とす。天上より閻浮提を下觀し、正しく彼の鴦伽陀王宮殿の上に當りて、虛空中より、漸漸に下る。爾の時王女意憙、彼の天仙の是の如く上より下るを見、即ち座より起ち、更に高座を置きて、彼の天仙を請じ、其の上に坐せしむ。是の時天仙、安坐し訖るや、意憙、天仙の足を頂禮

【一六】八齋戒。在家にして持する出家戒なり。

【一七】不那羅陀は、恐らくは不は竄入なるべし。

し、十指掌を合して、天仙に向ひ、諮白して言ふ、「尊者天仙、世間には頗し善惡の果報諸業有りや不や。頗し夜叉諸天有りや不や。父母有りや不や。此彼の世有りや。沙門婆羅門有りや不や。唯願はくは天仙、我が爲めに解說したまへ。我が此の父王は、是の事を信ぜず」。爾の時、大天不那羅陀、卽便ち鴦伽陀王に反問して、是の如き言を作せり、「大王、云何ぞや。汝、今意中に。此の事を信ぜざるや不や」。王卽ち白して言はく、「此の事、實に然り」。天仙、復、言ふ、「大王當に知るべし、善惡果報一切皆有り、亦夜叉及び諸天有り、父有り母有り、此彼の世有り、諸の沙門及び婆羅門有り、大王須らく信ずべし。我、天上より下りて此に來至す」と。爾の時、鴦伽陀王、天仙に語りて言ふ、「尊者天仙、若し彼の世有らば、今日尊者、我に五百の金錢を與ふべし、我、未來世に、當に尊者に償ふに、滿足一千なるべし」。時に那羅陀天仙、王に向ひて偈を說きて言ふ、

『我今王に五百錢を與へんも　須らく知るべし王の身に禁戒有るを　若し王、心中に善行なくば何に因りてか未來に一千を償はん』　此の世に人あり諂曲を行ぜば　彼の世に相求むるも何處にか得ん　智人は彼等に債を與へず　是の如き人輩の債は求むること難し』　地獄の猛火燃に墮せば　或は諸鳥有りて周匝して食せん　云何ぞ來世に能く我に償はん』　地獄に墮して苦を受くるの時　利刀もて割截して身完からず　節節割く時膿血を流し　苦惱は暫時も歇息する無きに　云何ぞ我に一千の錢を還さん』　手を擧げ利刀を把りて筋を剝ぐ時　其の身を斫剉すること蔗を斬る如く　支節に完全の處有る無し　云何ぞ我に一倍の錢を還さん』　嚴惡の黑狗の〔一八〕膩茶身(Nila-kāya?靑色身)なるが　處處に轉動して割截して食し　地獄に在りて身肉無きに　云何ぞ未來に倍錢を與へん』　彼處に大利なる鐵叉有り　獄に墮つれば數數其の上に鑽さる　地獄に在りて手、下に向くに　云何ぞ我に一千錢を與へん』　地獄には多く劍の樹林(Asi-pattra-vana)有り　一一の劍頭に十六刃あり　其の上に貫穿せられて暫くも住せざるに　誰か能

【一八】膩茶は字音より還梵すれば、Niḍa 又は Nīla(語義、巢)とすべきも、恐く Nila なるべし。

く我に一倍の錢を與へん』 灰河地獄（Vaitaraṇī?）の熱沸の流は 速疾にして風の如く箭射の如し 其の中に入りて苦痛を受くるに 云何ぞ我に一倍錢を與へん』 熱鐵丸（Ayo-guḍa）を呑む地獄中に 或は復亦銅の汁を融銷す 是の如き苦逼の內に在りて 云何ぞ我に一倍錢を與へん』 地獄に手有り霹靂〔一九〕の如く 各熱炎嚴熾の火を出だし 支節を割截して暫らくも住せさるに 云何ぞ我に一倍錢を與へん』 彼處は畏るべし闇無明なり 日月の光影も照さゞる所 彼に在る無智愚癡の輩 云何ぞ我に一倍錢を與へん』 大王此の非法の行を捨てよ 王に勸む如法の事を行ぜんを 王よ、當に是の如き習を作すべし 後に應に地獄中に墮せざるべし』 東西南北の有らゆるより來りて 沙門婆羅門の乞ひ索めんに 王當に食飲衣服湯藥臥具房を 充足して與ふべし』 彼等精進梵行の人 沙門婆羅門より語を取らば 彼能く王の苦厄を救護せんこと 猶ほ熱雨を繖蓋の遮するが如けん』 王是の如き善業を作す時は 多く朋友の相隨順する有り 善路快樂の處に至るを得 神通中最も神通を得ん』 牛の水を渡るに直に流を截り 若し人尾を把れば隨つて濟るを得んが如し 一切の世間も亦是の如し 直を逐へば直を得邪には邪を得 諸有人中に法行を行ぜば 凡そ人の學行皆勝を成さん』

爾の時舊伽陀王、旣に說を聞き已りて、復還偈を以て彼の天仙那羅陀に白して言ふ、

「大梵天仙我を哀愍すること 猶ほ父母の嬌兒を愛する如し 唯願はくは數我が爲めに現來し 若しは智人を覩しめ善事を見せよ』 唯願はくは尊者度脫せられよ 我煩惱海に沒する甚だ深し 我今地の住行すべき無し 唯尊我が歸依處と作れ』 唯願はくは大梵仙我を護れ 我今覆面して坑を蹈む如し 地獄は無量の苦衆多なり 我今一一、尊の語に依らん』

爾の時、大仙那羅陀天、還、更に偈を以て、舊伽陀王に、是の如き言を告げぬ、

「王今若し罪を造りて息まず 沙門婆羅門を憎嫉し 斷見の顚倒を旣に除かずば 我と汝と各各

【一九】霹靂。三日以上の雨をいふ。

相見じ』 王若し能く正法の行を行じ 沙門婆羅門に承事し 精進・持戒・布施・禪ならば 我と恒常に相見ん』

時に那羅陀大天仙神、鴦伽陀大王の爲めに說法し、正見を敎令して、心既に廻し已る。王、意に喜歡し、天仙を頂禮して、十指掌を合し、右遶三匝す。時に那羅陀、卽ち座より起ち、鴦伽王に別れて、本來の處に還りぬ』。

爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、今應當に知るべし。爾の時の天仙那羅陀は、今見よ我が身、釋迦文これなり。爾の時の彼の王、鴦伽陀は、見よ、卽ち今日の優婁頻螺迦葉の身是れなり』。

爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、我、往昔に彼の優彼頻螺迦葉の、邪見熾盛にして、顚倒の道に墮せるを見て、精進心を發し、敎化して正道中に入らしめたり。今日も亦然り。其の顚倒して邪道に入れるを見るが故に、我、是を以て大精進力を發し、其の爲めに五百種の變を出現し、神通もて敎化して、其をして無上菩提に安住し、生死の際を盡し、無畏處に到り、涅槃の岸に至らしめたり』。

巻の第四十四

[一]布施竹園品第四十六の上

[二]爾の時世尊、少時を經て、象頭山(Gayāśīrṣa)に住し、次第に漸く王舍城(Rājagṛha)に向はんと欲し、遊歷して行きたまふ。是の時、彼の優婁頻螺聚落を去る、未だ幾ならずして、王舍城に至る。其の間に、一舊仙人の居たる林苑處所有り、名づけて法雨(Dharmavarṣa?)といふ。その法雨林內に舊仙人の草庵有り、其の中に常に五百の苦行道人有りて住し、悉く五通を得、並に皆年老、久しく梵行を修し、頭白くして少毛に、齒缺け背曲り、身體皮膚に、多くの黑黶有り、咽喉[三]垂嚲して牛の頸[四]頽の如く、容貌乾枯、形骸朽敗し、杖を仰いで方に行き、喘氣嗽聲し、行かんと欲して即ち踣れ、前に向ひ進まんと欲するに、一歩も移らず、羸瘦筋焦して、纔に皮骨有り、皆悉く百歲にして一切堪ふる無し。その往昔に諸の善根を種ゑたるを以て、唯今一生に、但、佛に値ふ時、即ち信行を得んも、未だ法を聞かざるを以て、涅槃に入らず、皆窟中に在りて、各各禪坐す。爾の時世尊、彼の諸の苦行仙人を化せんと欲し、憐愍の爲めの故に、彼の居處に至り、其の窟門の戶頰の外に在まして、此の偈を說きて、彼の仙に語りて言はく、

[五]『若し人百句義を說くと雖も　其の名・味・字・文に合はずば　寧ろ一句を說くこと百千に勝り
當に聞く者をして寂定を得しむべし』　若し人百句の偈を說くも　既に義理無くして文句乖か
ば　一句を說くを最勝尊と爲す　聞き已りて自然に寂定を得ん』　若し人善く巧に戰鬪を解す
るも　獨り自ら伏すれば百萬人たるを得　今若し能く自己の身を伏するを　是を世間の善鬪戰
と名く』　一月の中千たび鬪を過ぎて　『鬪百倍して他に勝るを得んも　若し能く佛世尊に歸
信せば　能く彼の[六]十六分に勝れん。』　一月の中千たび鬪を過ぎて　一鬪百倍して人に勝るゝ

【一】佛、頻婆沙羅王を敎化して、竹林精舍の布施を得たまへることを記す。

【二】佛、王舍城に趣かるゝ途中、法雨林所住の五百老仙を化し給ふ。この記事、諸傳に見えず。恐らくは法句經の古註より取りしものならん。

【三】嚲。垂れさがる。

【四】頽。たれにく。

【五】この下の偈は、大略「法句經」中に見出さる。

【六】十六分は、十六倍の意。

を得んも　若し能く法の正眞なるに歸信せば　能く彼の十六分に勝れん』　一月の中千たび鬪を過ぎて　一鬪百倍して他に勝るゝを得んも　若し能く一切の僧に歸信せば　能く彼の十六分に勝れん』　一月の中千たび鬪を過ぎ　一鬪百倍して人に勝るゝを得んも　若し能く法性の空なるを思惟せば　能く彼の十六分に勝れん』　〔七〕猶ほ小兒の月月に學ぶが如く　食ふ所は彼の茅草頭の如きも　若し人佛如來に歸信せば　能く彼の十六分に勝れん』　若し能く法僧寶を信ずる有り　幷に及び法性の如を思惟せば　是の如く歸するものゝ信量り難く　能く彼の十六分に勝れん』　彼の世間の火を祭祀する如き　具足して一百年に滿たんも　若し一心に三寶に歸せん時　彼の福は百千萬倍勝れん』　是の如き百數は盡すべからず　口業もて說くも窮むるを得べからず　彼の質直牢固の心を以て　能く是の如き上幅の報を得ん』　若し人一百歲を滿足し林に在りて火神を祭祀せんに　若し善調伏人の來るを見て　能く捨てゝ暫時供養せば　是れ則ち彼の火を祭祀するに勝り　多種具足して一生を極めん』　若し人壽命百年に滿つるも　破戒心にして寂定有る無くば　能く忍・精進を堅持する有る　〔八〕一日の活は彼の長きに足り勝る』　若し人壽命百年に滿つるも　愚癡心より恆に散亂を生ぜば　能く智慧及び禪定有る　一日の活は彼の長きに足り勝る』　若し人壽命百年に滿つるも　盲聾憒憒にして聞見無くば　それ佛を見及び法を聞く有る　一日の活は彼の長きに足り勝る』　若し人壽命百年に滿つるも　〔九〕懵懵濁亂して覺察無くば　能く生死の趣を諦觀する有る　一日の活は彼の長きに足り勝る』　若し人、壽命百年に滿つるも　世間無常の句を觀ぜずば　其の能く身の非實なるを了する有る　一日の活は彼の長きに足り勝る』　若し人壽命百年に滿つるも　世間の甘露の處を觀ぜずば　其の能く甘露を識る有る者の　一日の活は彼の長きに足り勝る』

爾の時世尊、是の如き妙偈頌を說きたまふ時、彼の一切の諸苦行人は、此の偈を聞き已りて、人

【七】（原文）猶如小兒月月學、所食如彼茅草頭。嬰兒の如く月月に學び、茅草ほどの小食を取りて苦行するの謂ならん。

【八】一日活足勝彼長。一日の活にて足り、彼の長に勝るの意。

【九】懵。或は懵瞢に作る。失臥極也。

人皆悉く六通を證得し、是の時、彼等諸苦行人は、其の窟より出で、出で已りて佛世尊の足を頂禮し、各各禮し已りて、彼の地方より虚空に飛騰し、壽命を捨てゝ般涅槃に入り、身より水火を出だして以て自ら焚燒し、既に焚燒し已るや、彼の諸の舍利、虚空中より各地上に墮ちぬ。爾の時世尊彼の五百羅漢の舍利を收め、持ちて一聚と作し、卽ち支提（caitya, 塔廟）を起したまふ。是の時彼の中に、諸比丘有り、世尊を佐助して、泥及び石を供し、壘治して塔を爲る。世尊は神手網縵の指もて、親しく自ら砌壘したまひ、彼の塔成就して、端正意ぶべし。世尊、彼の舍利塔上に、種種の法を作し、作し已りて次第に諸比丘と與に、行きて彼の摩伽陀國に向ひたまふ。徒衆の弟子は、足滿千人、皆是れ彼の舊螺髻梵志の出家する所の者なり。是の如くにして、漸く王舍城に往詣したまふ。

爾の時世尊、諸比丘と與に、王舍城に至り、彼の杖林（Yaṣṭi-vana）の內に居住したまふ。是の時、彼の林に、別に一塔有り、善安住（Supratiṣṭha-caitya）と名く。而して偈有りて說く、

『是の時大衆相圍遶して　世尊漸く王舍城に至り　精妙なる杖林の中に在まし　如來彼に向ひて
　居住せんと欲したまふ』。

〔一〇〕爾の時、彼處摩伽陀國に、粟散王有り、其の王を名けて〔一一〕頻頭娑羅といふ。他の說を傳聞するに『沙門瞿曇は、甘蔗の苗裔にして、釋種姓より、捨して出家し、今日摩伽陀中に來りて遊行敎化し、比丘衆――足滿千人、一切皆是れ耆舊の螺髻梵志の出家せるなり。――と與に今已に王舍城の側に至り、杖林中の善安住塔に在まし、相與に停止したまふ。彼の沙門は、能く世間に大名聞を出だしたまふ。彼の婆伽婆・阿羅呵・三藐三佛陀・善逝・世間解・無上師・調御丈夫・天人師・佛・世尊、現に今彼に在まして有緣を敎化したまふ。又復世尊は、能く天・人・魔・梵・沙門、及び婆羅門の一切の世間に於て自らの神通を以て、皆能く證知し、知り已りて能く是の如き宣說を作したまふ、「生死已に斷じ、

〔一〇〕頻婆娑羅王、佛所を問ふ。
〔一一〕頻頭娑羅（Bindusāra）。本經、後に頻婆娑羅（Bimbisāra）に作るもの正し。頻頭娑羅は、百年後の阿育大王の父なり。混交せるものなるべし。

梵行已に立ち、所作已に辦じ、永く更に後世有を受けず」と。彼の世尊の說法は、初も善く、中も善く、後も善く、其の義微妙にして、唯獨り具足し、畢竟淸淨にして、是の如く說法したまふ。是の如き等の阿羅呵・三藐三佛陀は、若し當に人有り、往きて見るを得んと欲せば、其の人、善い哉。我も今、亦、彼所の大沙門の邊に至るべし。世尊に見えんが故に』と。

爾の時、摩伽陀國の頻頭娑羅は、卽ち賢善の好車を嚴駕せしめて其の上に座し、前後を圍遶して十二那由他の人を滿足せる國內の諸婆羅門・長者居士と共に、王舍城より、導引して出で、佛の所に往詣して、如來に見えんと欲す。

〔二〕爾の時、彼の國の王舍城中に、一婬女有り、其の女を名づけて婆羅跋帝（Balavatī?）といふ。憙ぶべき端正、人の樂見する所、世に雙有ること無く、歌舞作唱し音樂洞辦し、有らゆる衆伎・六十四能を、皆悉く具足す。時に彼の婬女、人の道ふを傳聞するに、『此に沙門瞿曇釋子の、王種にして出家せる有り』。乃至、彼、是の如き心念を作す、『我、今彼の沙門の邊に至るべし』と。爾の時彼の女、是の如く示現し、門を出でんと欲し已りて、復是の如く思ふ、『我、今頻頭娑羅大王の前に於て、世尊に見ゆべし』と。復是の念を作す『又、彼の頻頭娑羅大王は多人力を以て、道を打ちて行き、沙門の邊に到らん。又復多人大衆の雜鬧して、其の我を遮り、行くを得る能はざらんを恐る。我、今、崩壞空所の人行なき處に於て、速疾かに往き、先づ世尊に見えん』。爾の時彼の女、是の念を作し已り、多人を雇取し、之に告げて言はく『誰か能く多く壞城〔三〕鹿塼を拔かば、卽ち當に汝に如許の錢直を與ふべし』。是の時、彼等諸の受雇人、一念の時間に、彼の壞を破り已りて道を得、一切の瓦石荊棘を除きて平正ならしむ。爾の時、婬女婆羅跋帝は、卽ち妙好の車乘を莊束せしめて、其の上に坐し、自己の家より出で、端直平正の好道を行き、杖林の善安住塔に詣り、佛世尊に見えて頂禮恭敬せんと欲す。

〔二〕婬女婆羅跋帝。頻頭王に先じて佛に見えんとし、佛神通を以て之を遮り給ふ。この傳他に見えず。

〔三〕鹿塼。又は甎に作る。狹長なる瓦をいふ。

爾の時世尊、彼の婬女婆羅跋帝の心に念ずる所を知り、知り已りて卽ち是の如き念言を作したまふ『若し彼の婬女、先づ來りて我を見、其の頻頭王、既に後に在りて來り、此の婬女、我が前に立つを見なば、卽ち疑阻を生ぜん』。是の念を作し已り、卽ち神通を作し、彼の婬女をして、卽ち更に王より前に來る能はざらしめたまふ。

一四 其の頻頭王は、先に來らんと欲するも、其の車一定し、卽ち住して行かず、爾の時、頻頭婆羅大王、心に恐怖を生じ、悵怏毛竪して、是の如き念を作す『今何の鬼神災禍有りてか、我が爲めに礙を作し、此の如くならしむるを致せる』。是の時、彼處に一天神有り、頻頭婆羅王の心を知り、虚空中に在り、身を隱して現はれずして、王に告げて言はく『大王、汝、今恐怖を生ずる莫かれ。大王、汝、今亦災禍無く、亦變怪無し。然りと雖も大王、汝、某處の瞻波城(Campā)中に、一人を禁繫す、名けて某甲と爲す。速かに解放せしめなば、車卽ち行くを得ん』。爾の時頻頭婆羅大王、彼の天神の是の如き語を聞き已り、速疾かに使を遣はして彼の人を放たしむ。既に散放し已るや、車を通ずべき處は、車卽ち行くを得、其の通ぜざる處は、歩みて山林に入り、佛の所に往詣し、佛の所に到り已り、佛足を頂禮して、却いて一面に住す。

一五 爾の時、彼處の摩伽陀國の、一切の人民長者居士、或は頂禮し已りて、退いて一面に坐するあり、或は佛と共に、善語言を對へ、各相慰喩し訖りて、各、還却いて一面に坐する有り、或は復、佛世尊の前に在りて、已が姓字を說き、既に自ら說き已りて、却いて一面に坐する有り、或は復人有り、佛に向ひて合掌し、却いて一面に坐し、或は復人有り、佛に對して默然として、却いて一面に坐す。爾の時、國中の一切の人民・長者・居士、一面に坐し已りて、是の如き念を作す「今日、此の中に大沙門有り。復我等の國師、優婁頻螺迦葉あり。未だ審にせず、今、當に是は此れ瞿曇沙門、迦葉の邊より梵行を受學すべしと爲すか、迦葉等が、沙門の邊より梵行を修學すと爲すか』。

【一四】頻頭王、途中進む能はず、天神の告により禁繫者を解放して進むを得。これ又諸律傳に載せず、但、中本起、衆許摩訶帝二經に見ゆ。

【一五】摩伽陀の諸人、佛と迦葉と何れが師なるかを疑ふ。

爾の時世尊、摩伽陀の一切人民・長者・居士の、心に念ずる所を知り、偈を以て彼の長老優婁頻螺迦葉に告げて、是の如き言を作したまふ。

『迦葉、汝何の事情をか見る　先に河邊に在りて苦行を修し　我及び衆の爲めに此の意を說けるに　彼の祭事を棄てし事云何』

爾の時、長老優婁頻螺梵志迦葉、即ち還た偈を以て佛に答へまつりて言さく、

『色聲香味及び觸法は　五欲世間の人の求むる所　是の如き染愛は天中に滿つ　是の事を貪るが爲めに我祭祀せり』

爾の時、彼處摩伽陀國の、一切人民長者居士及び婆羅門、是の如き念を作す、『此の大沙門、自ら一偈を說き、而して彼の優婁頻螺迦葉、復一偈を說く。而して此の二人は、竟に誰何かこれ師にして、何れがこれ弟子なるを知らず』と。是の時世尊、諸の人民の、是の念を作せるを知り已り、還た更に偈を以て彼の優婁頻螺迦葉に問ひて、是の如き言を作したまふ、

『色聲香味觸等の法　迦葉よ、是の中汝何を樂しむか　或は天上人世中に有りて　汝の心に貪る所を我が問に答へよ』

爾の時、長老優婁頻螺梵志迦葉、重ねて還　偈を以て是の言を奉答す、

『我寂靜無礙空を見るに　相障礙するなく著する能はず　不變易の處に誰有ること無し　是處の祭祀は我が心を樂ましむ』

爾の時、彼處の摩伽陀國の一切人民長者居士、心に是の如く念ず、『此の大沙門は、自ら二偈を說き、彼の優婁頻螺迦葉も、亦二偈を說く。我等、今猶自ら知らず、何れかこれ師、何れかこれ弟子なるを』。是の如く十方の諸佛世尊に、皆此の法有り、『若しそれ一切大衆をして、歡喜心及び希有想を生ぜしめざれば、則ち法を說かず』。爾の時世尊、大衆に、歡喜希有の心を生ぜしめんと欲したま

ふが故に、彼の優婁頻螺迦葉に告げて、是の如き言を作したまふ、『迦葉、汝、今、若し時を知らば、彼の摩伽陀國の一切人民長者居士婆羅門等の爲めに、上人の法を現じ、神通を出だすべし』。是の時優婁頻螺迦葉、佛の語を聞き已り、即ち佛に白して言さく、『世尊の敎の如くにして、我、敢て違せじ』。

爾の時、優婁頻螺葉迦、座より起ちて、即ち神通を出だし、飛騰すること自在、虛空中に於て、或は又經行し、或は住し或は坐し、或は復眠臥し、身より煙焔を出だし、或は復、身を隱す。是の如き等の種種の神通を出だし、遍ねく顯示し已りて、空より下りて、地上に住し、佛足を頂禮して佛に白して言さく、『世尊は實にこれ我が敎授師なり、我、今、眞にこれ無上世尊の聲聞の弟子なり』。而して偈を說きて言ふ、

『微妙の神通を攝受し已りて　世尊の勝足趺を頂禮す　我弟子の事既に已に周る　世尊は眞にこ
れ我が師父なり』

爾の時、摩伽陀國衆婆羅門長者居士及び諸人民、心に是の念を生ず、『今是の優婁頻螺迦葉は、乃ちこれ沙門瞿曇の弟子にして、沙門の邊に從ひて、梵行を行ずるや』。是の知を作し已り、世尊の邊に向ひ、信向の心を生じ、希有の想を生ず。

一六 爾の時世尊、諸の大衆の、歡喜希有の想を生ぜるを知り、即ち大衆の爲めに、次第して說法したまふ。所謂、布施持戒を行ずるを敎へ、生天の因緣業報を說き、五欲の事を厭離するを說き、漏盡の因を說き、煩惱を盡すを說き、出家を讃歎し、解脫を護助したまふ。而して世尊、摩伽陀國の婆羅門等、長者居士、及び諸の大衆が、一切、已に歡喜の心を生じ、柔軟の心、無染著の心を生ぜるを知りたまふ。

爾の時、世尊、彼の大衆の、應當に得道すべきを知りたまひ、又復一切の諸佛世尊は、諸衆生の、

【一六】世尊、民衆のために說法利喜したまふ。

或は讃歎して道法を得る有るを知りて、即ち大衆の爲めに如應に説きたまふ。所謂苦集及び滅道なり。世尊、彼の大衆の爲めに、是の法相を宣説したまふ時、彼等大衆は、坐中に在りて、頻頭娑羅を上首と爲し、已下の十一那由他の人、一時に領悟したり。復、師有りて言ふ、

一七 『凡そ十二那由他の人有りて、遠塵離垢し、煩惱界を盡くして、心、清淨を得、諸法中に於て、淨法眼を生じ、集あるべきの法は、皆これ滅相なりと、如實に證知し、譬へば淨衣の、無垢無膩にして、黑色有ることなきが、其の染むる所に隨ひて、色を受け易きが如く、是の如く是の如く、彼の摩伽陀の諸婆羅門長者居士及び人民は、彼の座に坐して、遠塵離垢し、乃至、一切の苦集の法は、皆これ滅相なりと、是の如の證知しぬ。其の中に復、一那由他の淸信士有りて、優婆塞戒を受けたり』と。

一八 爾の時、摩伽陀王頻頭娑羅、已に法相を見、已に法相を知り、已に法相に入り、法相中に於て、已に諸疑を度し、徹過して礙無く、諸法中に於て、復、礙心無く、已に無畏を得、世尊の法中、復、他に隨はず、復他に問はず、一切法中に、是の如き知を得て自在無礙なり。時に頻頭王、即ち佛に白して言さく、『如來世尊、我、昔し家に在りて童子たりし時、五種の願を發せしに、我、今日悉く成就するを得たり。何等を五と爲す。一に我、少年の時に在りて、早く王位を得ん。世尊、此はこれ我の初願なり。今、已に成ずるを得たり。第二に又、願ふらく、王位を得已らば、我が治化の內に、佛の出世したまふ有らんをと。此は即ちこれ我が第二の心願なり。今、已に成ずるを得たり。第三に又願ふらく、佛出世し已らば、彼の世尊の邊に、我、供養を設け、歡喜を得しめんと。此はこれ我が心の第三の願なり。今、亦成ずるを得たり。第四に又願ふらく、彼の世尊の邊に、心を歡喜し已らば、我を爲めに法を説きたまはんをと。此は即ちこれ我が第四の心願なり。今亦成ずるを得たり。第五に又願ふらく、彼の世尊の、我が爲めに説法したまふ所、願はくは我、一切、悉く證

【一七】この一師の説は、巴利律大品一・二二に一致す。

【一八】頻頭王、五願滿足の喜を陳べ、世尊に歸して信者となる。

知するを得んと。此は卽ちこれ我が第五の心願なり。今亦成ずるを得たり。又復世尊、我、昔在家童子の時、是の如き心を發せり、「願はくは、所作有らば、我、悉く成ずるを得ん」と。無上世尊よ、我、今遂げたり。善きかな修伽陀(Sugata,善逝)、我、今勝れたり、譬へば人有り、身の曲れるが舒ぶるを得、人有り、逃避して藏伏せるが、出るを得、迷人道を得、闇地に明を得、盲眼の人の、顯に諸色を見るが如く、無上世尊、我も今亦然り。然も今世尊は、種種の方便もて、我が爲めに說法したまふ。又復世尊、我、今より去、世尊に歸依し、法寶に歸依し、聖僧に歸依し、今日より去、一切時に優婆塞の行を行ぜん。願はくは世尊、我が是の如くに持するを知りたまへ。如來世尊、我、今より去、此の形壽を盡すまで、誓ひて殺生せず、衆生の命を護ること、猶ほ己が命の如くし、諸衆生の爲めに、歸依處と作り、是の如き等の五戒十善を持せん。唯願はくは世尊及び比丘衆、我が明日の飯食供養を受けたまへ』。

爾の時世尊、摩伽陀國頻頭大王の爲めに、默然として請を受けたまふ。時に頻頭王、佛の默然として其の請を請けたまふを知り已り、卽ち佛に白して言さく、『善い哉世尊、此の車上に坐し、王舍城に入りたまへ。我當に自ら行きて此の車を牽くべし』と。是の語を作し已るや、佛、王に語りて言はく、『善い哉大王、唯願はくは大王、常に安樂を得よ。我、車を用ゐず』。時に頻頭王、坐より起ち、佛足を頂禮し、世尊を圍遶する、三匝し竟已りて、佛を辭して去りぬ。

一九 その頻頭王、去りて未だ久しからざるの間、時に諸比丘、卽ち佛に白して言さく、『希有なり世尊、云何が今日摩伽陀王、世尊に馬車を布施して乘らしめ、又自ら行かんを乞ひぬるぞ。此の事は云何』。是の語を作し已りて、默然として住す。爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、至心に諦に聽け。其れ摩伽陀の頻頭大王は、但に今日のみ我に馬車を布施して乘らしめ、我が爲に車を牽くのみに非ず、往昔も亦然りき。已に曾て我に諸の是の如き事を施したり』。時に諸比丘、重ねて

【一九】諸比丘、頻頭王歸佛の因緣を問ひ、佛ために善意王本事譚を說し給ふ。この傳他に見えず。

佛に白して言さく、『唯願はくは世尊、我等が爲めに、其の事の云何なるかを說きたまへ』。爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『我、念ふに往昔、迦尸(Kāsi)國内に一王有り、善意(Sumana?)と名く。法を樂しみて、如法に王治せり。時に天帝釋、彼の王を見んと欲し、調御天摩多梨(Matali)(隋に無著處といふ。)に告げて言ふ、「汝、摩多梨、迦尸國に至り、善意王を將て、來りて我に見えよ。我が爲めに、彼に語りて、是の如き言を作せ、仁者善意、三十三天及び天帝釋は、汝を見るを得んと欲す。仁者辭する莫かれ、要必ず須らく來るべし」と。時に調御天摩多梨、即ち帝釋に白して言ふ、『天主の教の如くにして、敢て違する有らじ』。既に教を受け已りて、寶車に嚴駕す。其の車、千疋の馬牽を控馭せるを、莊嚴し訖已りて、即時に閻浮提地に飛下し、迦尸國善意王の邊に詣り、既に彼に到り已りて、虛空に住し、偈を以て善意王に白して言はく、

「仁者は今來りて車に上るべし　天乘の莊嚴や上有る無し　諸天は仁者を憶念す　是は彼の三十三天王なり』　爾の時善意王既に聞き　即ち東面より車上に登る　此の乘は最勝にして譬有ること無し　行詣して尊勝天に向ふ』　諸天遙に彼の王の來るを見　各起ちて迎へ、彼に告ぐ「善來、人中の法王者　天帝釋と共に此處に坐せよ」』　是の時帝釋大天王　遙に彼の王の來るを見て即ち起ち　迎逆へて王に告げ言ひて曰ふ「善來、汝世間の大王』　今此處自在天に於て　此に住して天の威力を承くべし　意に停まらんと欲せば、時多少に隨ひ　情の所用に任せて終に違せされ』

爾の時彼の王、忉利三十三天に在りて、多時に住し已り、心意に樂しまずして、是の念言を作せり、「我、今壽命の減損せんを恐る」と。是の念を作し已りて、即便ち偈を帝釋に白して言ふ、

「我昔初めて來るや天上の　此處の音樂微妙の聲を樂しめり　我今壽命の終らんを恐畏る　所以に還天果を樂しまず」

爾の時忉利帝釋天王、即ち還た偈を以て彼の善意王に報答して言はく、

「王は今年壽未だ斷滅せず　命終の日は猶尚ほ遙なり　但王は今善業微なるを以て　是の故に天上を樂まざるのみ」　仁者は昔より來自力に乘ぜり　彼の業は今盡きて餘有る無し　既に罪業心を迷惑するを以て　故に心をして天上を樂まざらしむ」　今若し天の威力を受けんと欲せば即ち天樂を受けんこと　〔二〇〕舊時の如く　微妙なる車乘中の如く　又妙林苑に惑亂する如けん汝今若し是の如き想を作さば　即ち心に樂しんで此の天に住するを得ん」

時に善意王、此の偈を聞き已り、即便ち諸りて天帝釋に白して言はく、「大に善し、天王、我、此處より人間に至りて、當に多くの福業を作し、布施を行じ、苦行を行じ、善事を行ひ、語言に實多く、齋戒を受くべし。我、當に是の諸善業を作し已らば、還更に來りて此の天上に上るべし」。時に天帝釋、彼の王に告げて言はく、「是の如く是の如く、仁者の言の如くせよ。汝今日此處より去り、人間に至りて、當に是の如き多種の功德を作し、多く善業を作し、乃至布施し、齋戒を受くべし。汝、是の如き善業を造し竟らば、還天上に來れ」。時に善意王、彼の天上に住して、多時を經歷して然る後、還り詣りて閻浮提に向ひ、其の王宮に至るに、宮內の有らゆる婇女・妃后・及び諸王子・大臣百官・親眷族等、皆悉く死亡して、一の在る有ること無し。王、彼等舊人を見ざれば、心中に樂まず、憂愁悵快して、偈を說きて言はく、

「此はこれ彼の舊衣服　瓔珞・臂釧及び耳璫なり　生平に護惜して他に施さゞりしに　今死物のみ留りて身は何にか在る」　是の如き種種莊嚴の具　床褥・被枕・妙〔二一〕綩〔二二〕綖をも　園林・池沼及び香山をも　忽然として此處を捨て」　一切の人民既に見えず　有らゆる宮殿は並に虛空に婦兒眷屬悉く皆無し　我が意云何ぞ此を樂まん」　智慧あり尊豪にして甚だ富貴なる　是の如き威德の大家生をも　司命の惡鬼は護持せず　磨滅して悉く皆離散せしめたり」　若しくは富

【二〇】舊時とは、最初天上に來る時を指す。

【二一】綩。かんむりのを。

【二二】綖。冕の前後に垂れ覆ふもの。

若しくは貴若しくは貧賤も　若しくは聰若しくは慧若しくは愚癡も　或は少或は壯或は老年も
若し此の盡くる時節に至れば　其の司命鬼は護する能はずして　一切を捉撮して消亡せしむ』　諸有の[二三]刹利・[二四]婆羅門・[二五]毘舍・[二六]首陀の貴賤等も　或は[二七]旃陀羅・[二八]塗摩の類も　時至れば彼の留まるを簡擇せず』　一切摧折して悉く遺す無く　猶ほ山川の疾流の駛くして　諸險岸所生の樹を拔くが如く　老病死の至るも亦復然り　衆類の身命根を呑噉す』　我親しく自ら彼處に於て見るに　四埵所居の四鎭主　忉利三十三天宮は　一ら戲れ意に喜びて遊歷して行き　[二九]七日七夜するも時や及ばず』　我彼の帝釋の處に住し　面前に恒に天王に對囑し　彼の邊にて親る所の餘の諸天にも　常に是の如き事有るを見たり』　我今唯福業を造作し　[三〇]檀捨施及び尸羅
精進・忍辱・智慧・禪を行じて　誓つて更に王位の報を求めじ」』

爾の時、佛、諸比丘に告げて言はく、『汝等比丘、彼の時の善意王を知らんと欲せば、則ち我が身是なり。其の摩多梨調御天とは、卽ち此の摩伽陀の頻頭王是なり。そは、彼の時に車を將つて我を請じ、我が爲めに車を牽けり。今も亦是の如し、我を請じて車を與へ、亦我が爲めに躬自ら駕を馭せんと欲す。本誓願、然り』。

爾の時頻頭娑羅大王、已が宮殿に至り、到り已りて彼夜に、種種甘美の飲食——所謂、噉食啖食味食舐食——を辦具し、悉く皆豐足す。諸の是の如き等、一切並に訖り、彼の夜を過ぎて後、堂殿を掃灑し、諸座を鋪設し、卽ち使人を遣はして、佛所に往詣し、諮請の時至るや、是の如き言を作さしむ、『善い哉、世尊、時節至らんとす。營む所の飯食、已に辦具し訖る』と。爾の時世尊、晨朝時に衣を著け鉢を持し、比丘衆、左右に圍遶して、足滿千人、皆これ宿舊の螺髻梵志の出家せる所、世尊を羽翼して、王舍城に詣る。

爾の時忉利帝釋天王、卽ち自ら天身を變改化作して、摩那婆の形貌と爲り、端正喜ぶべく、衆人

【二三】刹利（Kṣatriya）は武士族なり。
【二四】婆羅門（Brāhmaṇa）は長袖族なり。
【二五】毗舍（Vaiśya）は平民族なり。
【二六】首陀（Śūdra）は賤種族なり。
【二七】旃陀羅（Caṇḍāla）は屠釣族なり。
【二八】塗摩（Mātaṅga）。Caṇḍāla と同級に屬する最賤族なり。
【二九】七日七夜時不及。七日七夜の間歡樂を極むる程の榮華の身なれども、時至れば力及ばず。
【三〇】以下、六度を擧ぐ。この本事譚の原作者が、六度說を取りたる部派なるを知る。

衆見す。頭上に還た螺髻を以て冠と爲し、身に黄衣を著け、其の左手中に、金の澡瓶を執り、右手に雜寶の杖を挾持し、佛比丘大衆の前に在りて行き、行く時、其の足地を離れて、四指塵土に到らず。爾の時帝釋摩那婆身、是の偈を說きて言ふ、

『如來自ら伏して能く他をも調し　此の一千の舊螺髻と共に　是の如き金色妙身體の　無上世尊は今し城に入りたまふ』　自ら既に寂靜に能く他をも寂し　此の一千の舊螺髻と共に　是の如き金色妙身體の　無上世尊は今し城に入りたまふ』　自ら既に得度して能く他をも度し　此の一千の舊螺髻と共に　是の如き金色妙身體の　無上世尊は今し城に入りたまふ』　自ら既に得脫して能く他をも脫し　此の一千の舊螺髻と共に　是の如き金色妙身體の　無上世尊は今し城に入りたまふ』　その能く[三一]十法門を說く有り　十力具足し十無勝なる　無上世尊は一千の比丘に　左右遶られて今し城に入りたまふ』

爾の時、城內の一切諸人、天帝釋を見て、是の如き言を作す、『希有なり希有なり。此の摩那婆は極大端正、喜ぶべきこと雙無く、人の樂見する所なり。此は誰の侍者ぞ、此は誰にか供承する』と。爾の時忉利帝釋天王、卽ち偈を以て彼の諸人に報じて言はく、

『諸佛は能善く一切を伏し　寂靜無上の最勝尊として　天人世間中に應供たり　我今彼が與に侍者たり』　最大丈夫の能く物を伏せるは　能く佛世尊に勝るゝ有る無く　天人世間中に應供たり　我今彼が與に侍者たり』

[三二]爾の時世尊、安庠として行き、頻頭娑羅王の宮殿中に至り、入り已りて卽便ち鋪座して坐したまふ。爾の時、頻頭娑羅大王、佛世尊、及び諸大衆の安坐し已訖るを見て、自ら手に種種の餚饍飲食の具を執持し、佛及び僧幷に餘の大衆に施し、一切充足して、自ら恣に衆雜の啖味を噉食せしめ、悉く皆訖了る。佛及び衆僧、飯食し竟已りて、手足を淨洗し、各小座を將つて、佛の前に坐す。時

【三一】十法門、十力、十無勝。巴利律（大品、一・二二・一三）には、十住・十力・十法・十無學法とす。

【三二】頻頭王、竹林園を施捨す。

に頻頭王、佛前に坐し已りて、是の思惟を作す『今日、佛をして何處に住せしめてか、城を去ること近きに過ぎ遠きに過ぎしむる莫からん。出家の人に、安止して如法に道を行ずるを得しめん』。時に頻頭王、復是の念を作す『此の竹園は、城隍に近く、還往に穩便にして、來去に疲れず、平坦にして行き易く、衆人の樂む所、利益を欲求するに、得易くして難からず。兼ねて蚊虻・毒蛇・蝮蠍少く、晝日は寂靜にして、人の去來無く、夜裏は少聲にして、蘭若(āraṇya、閑靜處)たるを亦得ん。城池に近かんと欲すれば、來去に礙無く、善人の修道の處たるに堪ふ。我、今、應に此の竹林を用つて、世尊に奉施し、以て坐處と爲さん』。時に頻頭王、是の念を作し已りて、佛に白して言さく、『大聖世尊、此の竹園林は、王舍城を去る、近からず遠からず、乃至、善人の修道を爲すに堪ふ。唯願はくは世尊、我に何なる法もて、此の竹林を以て、世尊に布施し、以て坐處と爲さんかを教へたまへ』。爾の時佛、頻頭王に告げて言はく『是の如し、大王、若し我に竹林を布施せんと欲せば、當に彼の[三三]招提僧(catur-deśa)に布施すべきを聽け』。時に頻頭王、即ち佛に白して言さく『世尊の教の如くにせん』。時に頻頭王、坐より起ち、手に金瓶を執り、世尊に水を與へ、復佛に白して言さく『善い哉、世尊、此の竹林園は、城側を去ること近く、乃至、善人、修道を爲すに堪ふ。我、今諸佛世尊、招提僧等に捨施せん、布施せる以後、唯、願はくは世尊、納取受用したまへ。我を哀愍したまふが故に』。爾の時世尊、即便ち受取したまふ。憐愍の爲めの故なり。因つて此の偈を以て、呪願して言はく、

『一切の樹木雜園林　幷に及び諸の橋等を造作し　渠池井泉以て充濟し　船舫來去して衆人を度せば』　彼等は恒に晝夜の中に　福報日に增長して絕ゆる無けん　行法持戒の人も亦爾り　信敬堅固なれば即ち天に生ず』

爾の時世尊、頻頭王の爲めに、呪願し訖已りて、坐より起ち、還りて本處に至り、本處に至り已

【三三】招提僧。四方より來る僧。佛寺は四方より來宿したるものゝ共有として、建立布施を許さるゝ例なり。

るや、此の事縁の爲めに、諸大衆を集め、集め已りて、諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、今より已後、諸比丘の、自ら園林を畜ふるを許す』と。[三四]尼沙塞師は、是の如く竹園を得たる縁を説くことを作す。

【三四】尼沙塞師說。尼沙塞部の五分律は、竹園を頻頭王布施とすること之に同じきも、巴利律、四分律等も亦之に同じ。次卷の迦蘭陀長者布施說は、中本起、方廣大莊嚴經に見ゆ。

卷の第四十五

布施竹園品第四十六の下

[一]「爾の時、王舍大城の中に、一長者有り、迦蘭陀(Kalanda, Karaṇḍa)と名づく。國中の大富にして、多く資財有り、豐饒の駈使あり。乃至、其の家は、猶ほ北方の毘沙門宮の如く、一種も異るなし。其の迦蘭陀竹林の處所は、これ彼の長者の自己の者なり。城を去る遠からず、乃至、善人の居處たるに堪ふ。彼の園中に諸の求道人有りて、來去居住す。『其の道人を阿耆毘伽(Ājīvaka, Ājīvikā)(〔隋〕に邪命と言ふ。)と名く』と、迦葉遺師は、是の如き說を作す。

爾の時、四鎭の四大天王、靑色身の夜叉等に告げて言はく『汝輩、速疾かに迦蘭陀竹園(Veṇuvana-kalandaka-nivāpa)の內に往き、掃灑して一切の沙礫・礓石・荊棘・糞穢・土塠を除却して、皆平正ならしめ、坑坎をして其の淨潔を仰がしむる勿れ。今日世尊、彼の園に於て安居坐夏せんと欲したまふ』。是の時、靑色の夜叉等の衆、彼の四大天王の威もて、是の如く敎ふるを承け已りて、卽便ち白して言ふ『天王の勅の如く、疾く彼の園に至り、掃灑淸淨にして、乃至、悉く皆平正嚴淨ならしめん』と。

爾の時、一阿耆毘伽學道の人、晨朝に起きて、明星將に現はれんとするころ、四靑色の夜叉の、來りて竹園を掃灑するを見、見已りて卽ち彼等の邊に至り、問ひて是の如き言を作す、『長老、云何。汝等はこれ誰ぞや』。彼等、報じて言はく『仁者、我輩は靑色の夜叉なり。四天王、我等を駈遣して、此處に來り、竹園を掃灑し、乃至、平正ならしむ。如來、今此に安居して一夏の坐を經たまはんと欲す。是の義を以ての故に、我等、今來りて此處を料理す』と。

爾の時阿耆毘伽道人、是の如き事を見、夜を過ぎて日出づるや、速疾かに往きて迦蘭陀所の大長

【一】竹林園奉獻に二說あり、頻頭王所献と、迦蘭陀長者所献なり。本經は尼沙塞部傳に依り、前說次下、自宗別傳として長者說を出す。

【二】迦蘭陀、巴利傳 Kalanda とし、梵語は、大事は、巴利に同じく、Lalitavistara 等は Karaṇḍa とし、栗鼠と譯し、又鳥名とせらる。又園名を長者の名によるとする說と、鳥名によるとする說とあり。

【三】迦葉維師の說とは、何れを指すか明確ならず。且らく、「其道人名阿耆毘伽」の八字を充つ。

者の邊に至り、到り已りて彼の迦蘭陀に語りて言はく、『汝大長者、今、若し時を知らば、昨夜將に盡きんとし、明星の現はるゝ時、我、四の青色夜叉有りて、竹林園を掃灑料理するを見、我、旣に見已りて、彼等の邊に至り、其借問して言はく、「諸長老輩、汝等はこれ誰ぞ」と。彼、我に報じて言はく、「我等は是、彼の青色夜叉にて、四天王に駈使せられて來り、此處に至る。四天王、我等を遣はして、此の竹園を掃かしめ、我に語りて言はく、「汝等竹林園内に至り、乃至、修治して平正ならしめよ。世尊、今此に住して安居したまはんと欲す」と。是の故に我等、故らに此處に來り、此の竹園中を[四]屛擋料理す」と』。

爾の時阿耆毘伽道人、長者に語りて言はく、『汝は今、先づ竹林園を將つて、沙門瞿曇に奉施して、受用せしめよ。恐畏らくは、後に摩伽陀王頻頭婆羅、彼の園を奪ひて、沙門瞿曇に與へん。汝長者は、爾の時に當りて、恐らくは此を施すの功德を得ず。汝は當に得ずして、徒らに自ら虛しく損ずべし』。時に迦蘭陀大富長者、彼の阿耆毘伽道人より、是の言を聞き已り、卽ち佛所に詣り、半由旬にして、道に世尊に逆へ逢ふ。其の迦蘭陀長者、遙に世尊の前み來たまふを見るに、意ぶべく端正にして、衆人見るを意び、乃至、諸相其の身を莊嚴して、猶ほ衆星の、虛空を莊嚴するが如し。見已りて卽便ち世尊の所に於て、心に淸淨を生じ、心に歡喜を生じ、佛邊に詣向し、佛所に到り已りて、佛足を頂禮し、手に金瓶を執り、淸淨水を以て、佛手に灌ぐ。爾の時長者、口に是の言を作す、『善い哉、世尊、我は王舍に住し、迦蘭陀と名づく。我に一園有り、稱して竹林と爲す。城を去る遠からず、乃至善人の安處たるに堪ふ。我、今、彼の園を將つて世尊に奉る。世尊、我が爲めに彼の園を受けたまへ。慈愍を用つての故に』。爾の時佛、彼の長者に告げて言はく、『若し當に人有り、布施して佛に奉り、或は園林、或は復宅地、或は餘の衣服、或は餘の資財を、[五]空しく佛に施すべくは、然も彼の物は、天人中に於て、卽ち成じて塔と爲り、餘のものは用ふるを得ず』。佛、長

【四】屛擋は除なり、掃飾をいふ。

【五】空施佛。空字不穩なるに似たり。或は定字の誤か。

者に告げたまはく、『汝、今若し彼の竹園を將つて、招提に布施せば、若しは未來に在る、一切の大衆も、皆悉く用ふるを得ん。汝に是の如き殷重の布施を勸む』。時に迦蘭陀長者、佛の是の如き語を聞き已り、即ち佛に白して言さく、『世尊の敎の如くにして、我敢て違せじ』と。爾の時長者、重ねて佛に白して言さく、『世尊、我今竹林園を將つて、未來三世の一切衆僧の來者に布施す。皆意に隨つて用ひられよ。願はくは我が爲めに、彼の園を受用したまへ』。是の時世尊、迦蘭陀長者の邊より彼の竹園を受けたまひぬ。彼の長者を憐愍せんと欲したまへるが爲めの故なり。即ち偈頌を說き、呪願して言まふ。其の偈の初に云はく、『樹木雜園、乃至略說せんに、即ち天に生ずるを得ん』と。此はこれ世尊の、最も先に、竹園の施を受けたまへる因緣なり。爾の時世尊、王舍城迦蘭陀鳥竹園の內に在まし、大比丘徒衆千人と與なり。所謂、悉くこれ舊仙螺髻梵志の出家なり。

[一]大迦葉因緣品第四十七の上

爾の時、彼の王舍大城を去る、近からず遠からずして、一村有り、[二]新竪立(Mahātiṣṭa)と名づく。別に一師有りて是の說を作し、摩訶僧祇、復、是の說を作す。摩伽陀國の王舍大城に、一聚落有り、其の聚落を摩訶婆陀羅(Makāṣṭhilā (〔隋〕に大澤田といふ。))と名づく。彼處に一婆羅門村有り、其の村を還た摩訶婆陀羅と名づく。彼の村內に一大富婆羅門有り、尼拘盧陀羯波(Nyagrodha-kalpa)(〔隋〕に堪用樹と言ふ。)と名づく。彼の大長者、巨富饒財にして、多く駈使有り、乃至、其の家は猶ほ北方毘沙門天宮の宅の如くにして異る無し。而して彼の長者大婆羅門は、五百村を領し、處分駈使して、其の節度を受けたり。

爾の時、摩伽陀國の頻頭婆羅王に、一千具の犂牛耕地有り。彼の婆羅門は、止、一具を少きて、一千に滿たず。所以は云何。頻頭婆羅大王の嫉妬心を生ぜんを恐畏し、所以に故に減ずるなり。其

【一】大迦葉の俗姓並にその出家因緣を叙す。而し諸佛傳に迦葉出家事を缺くを普通とす。

【二】Thera gāthā, G. 1051—1090 の註には、Mahātittha (Mahātiṣṭha) とせり。又本經の宋元明三本は、村名を樹名とし、新竪立を雜竪立とせり。而して本經の說は、摩訶婆陀羅を採るものゝ如し。

の婆羅門所有の六畜は、數を知るべからず。唯烟火を數へて、其の多少を知るのみ。其の金錢の藏は、一切を合せて二十五窖有り、而して彼の大富婆羅門の婦、其の園中に至りて、遊戲觀看す。彼の婦、因りて一畢鉢羅樹（pippala）の下に在りて坐す。爾の時彼の婦、先舊より懷娠し、即便ち彼の樹下に在りて、一童子を產生す。憙ぶ可く端正にして、衆人樂觀し、世間に無比なる、猶ほ金像の如し。而して彼の童子、初生の時、彼の樹上に於て、即ち自然に一の妙天衣を出す。彼の衣現はれ已るや、其の父母見て、是の思惟を作しぬ『此の天衣は、必ずこれ童子の福德の故に生ず』と。是の故に、即ち此の瑞相に因りて、畢鉢羅耶那（Pippalayana, Pippali）（〔隋〕に樹下生といふ。）と名づく。彼の童子、生れてより已來、樹に因りて名と爲し、相傳へて即ち畢鉢羅耶那と稱す。

爾の時父母、彼の童子の與に、各別に四種の嬭母を安置しぬ。謂はく、抱持嬭（aṅka-dhātrī）、乳餔嬭（kṣīra-dh.）、將遊戲嬭（krīḍanikā-dh.）、看養育嬭（mala-dh.）なり。彼の四嬭は、養育洗浴し、抱持戲笑し、乳を與へて餔飼し、其をして增長せしめぬ。時に畢鉢羅耶那童子は、その父母の唯此れ一兒なり。愛重の心、暫くも離すを聽さず、若し見ざる時は、父母の心中、即便ち樂しまず。爾の時童子、福德の因緣にて、養育する未だ幾ならざるに、漸く增長に向ひ、久しからざる間に、智慧を成就し、乃至、稍大となり、能く行き能く走る。其の父母、胎年數、滿八歲に至るに及び、即ち其の爲めに、婆羅門戒を受け、既に戒を受け已りて、即便ち父母の家業を付囑し、諸雜の技藝、祭祀の法式を、悉く敎へしむ。所謂書畫・算數・刻印、及び四韋陀、諸の授記法、世辯言談、受持杖法、大呪術法、闡陀の論（Chandas，語學）種種の文章、五行星宿、度數陰陽、滯漏にて一日一夜の凡そ若干時なるかを知ること、是の如きは則ち凶、是の如きは則ち吉なるを敎へしむ。又復童子は、地動の相、雷鳴震吼、鳥獸の鳴呼、飛走驚動を知り、候相もて一切の諸變を盡く知り、又占相して諸の技藝の相を知り、男女の相を知り、六畜の相を知り、人の洗淨清淨の行を知り、受水の法、澡

罐を受くるの法を知り、受灰の法を知り、唱唄歌明を知り、吉祥盛衰の相を識り、禳災の解除、火神、大人、諸天を祭祀するを、悉く皆備へ訖り、既に自ら學び已りて、復能く他に教へ、他の物を受くること、或は他に物を施すことをも、皆悉く學得し、世間中に於て、達せざる所無く、知らざる處無く、叡智捷疾、黠慧聰明に、敏博辯才、利根多巧なり。而して彼の童子、本性質直にして、常に世間を厭ひ、欲の不淨なるを知りて、心に捨離を生じ、昔曾て諸佛世尊を見、彼の佛邊に於て、諸の善根を種ゑ、諸の功徳を修し、已に成就を得たるを以て、諸食の相を知り、心多く涅槃の門に入向せんと欲し、常に諸煩惱を出捨せんと欲求し、一切世間の有爲を受けず、一切の生老病死を受けず、往昔の修行もて、一切諸業の繋縛を爛せるを以て、此の智力に因りて、成熟地[三]一生補處に至りぬ。

[四]時に畢鉢羅耶那童子の父母、其の年、漸く長成し、世慾を受くるに堪ふるを見、是の如く知り已りて、卽ち彼に告げて言はく、『耶那童子、我、兒の爲めに女子を娉娶し、兒に與へて侍と爲さんと欲す』。是の語を作し已る時、畢鉢羅耶那童子、父母に白して言さく、『波波（papa）・摩摩（mama）、我、心に妻を娶り婦を畜ふるを樂まず、我、意に願樂して梵行を修せんと欲す』。爾の時耶那童子の父母、其の子に告げて言はく、『我が所愛の子兒よ、今、先づ須らく子を生み世に立つべし。然る後、當に梵行を修すべきに任ふ。何を以ての故に。此の事、相承け傳聞して說言す、「若し人、子無くして後を繼ぐ有ること無くば、彼の人は終に天上に生るゝを得ず」と』。時に彼の童子、父母に報じて言はく、『波波・摩摩、我は今世に立ち相傳ふるを用ひず、亦復後を繼續するを用ひず、我は當に梵行すべし』。是の如く、父母、再過三過して、畢鉢羅耶那童子に告げて、是の如き言を作す、『愛子よ、要らず須らく世に立ち婦を娶るべし。何を以ての故に。我等の家の、當に嗣胤を絕つべきを畏るればなり』。時に畢鉢羅耶那童子、乃至、三過して、其の父母に是の如く惱まされし時、卽便ち閻浮檀金

【三】一生補處（eka-jāti-pratibuddha）は一生を終りて後、佛處を補ひて、成佛する地位をいふ。
【四】父母、大迦葉の爲に婦を與へんとす。

を捉取し、工匠に教へて、婦女の形と作し、作し已りて將つて其の父母の邊に向ひ、出して以て示現し、其の父母に向ひて、是の如き言を作す、『波波・摩摩、我は五欲の樂を受くるを用ひず、梵行を修せんことを願ふ。若し必ず波波・摩摩の、要ず我が爲めに婦を娶り、持つて世に立たんを欲せば、必ず當に須らく是の如く、顏色の、閻浮檀金の形狀の如きを覓むべし』。時に畢鉢羅耶那童の父母、既に是の如き事を見已りて、心に大いに憂愁し、悵怏として樂まず、心に是の念を作す、『我等何處にか、能く婦女の閻浮檀金色形の如きを得ん』と。

時に尼拘盧陀大婆羅門は、樓上に坐し、心裏に歡ばずして、默然として住す。爾の時、彼の家に、婆羅門有り、其の門師たり、恒常に來往して、彼の大富婆羅門の家に至る。時に彼の門師婆羅門、其の家に來入し、彼の富婆羅門に呪願して、是の如き言を作す『大施檀主、願はくは汝一切の財錢を增加し、吉祥の果報、乏少する所無く、妻妾子息、願はくは多く增益せんを』。復更に重ねて其の家人に問ひて言はく、『汝の大家、今何處にか在る』。家人報じて言はく、『大婆羅門、我が大家、今樓上に在り、心大に悵怏し、愁憂して樂しまず、默坐して住す』。彼の門師婆羅門、即ち大富婆羅門の邊に至り、是の如く白して言はく、『願はくは大施主、家計を增長せよ。宿昔は何如、夜臥の時、食消せりや不や。又復夜、愛人と共に相戲れ、快樂を受くること、意に稱へりや不や』。而して彼の主人富婆羅門默然として報ぜず。彼、復問ひて言はく、『汝、今何の故に默然として報ぜざる。我、今是の如く汝と小より來、苦を同じくし、樂を同じくす。汝、今何の故に我と共に語らざる』。

五 時に尼拘盧陀大婆羅門、其の門師婆羅門の邊に向ひ、委に前事を說き、說き已りて彼の婆羅門に語りて言はく、『我今、何處にか是の如く、女の閻浮檀金色形の如なるを得ん』。爾の時門師婆羅門、大婆羅門に報じて是の如き言を作す、『汝、大施主富婆羅門愁ふる莫かれ、苦しむ莫かれ。汝、既に我が爲めに施主と作りぬ。我が須ふる所の衣食具度は、常に汝より得たり。我、汝の爲めに是の如

【五】門師婆羅門、大迦葉の婦を探るために天下に周遊す。

き閻浮檀金色形の女を覓求めん。汝、心に疑ふ莫れ。我、覓めて決んで得ん。我道糧并に及び道伴を須つ。汝、覓めて我に與へよ。我、彼等と共に、相隨つて去り、四方に求覓めん』。爾の時大富婆羅門、是の如き語を聞き已り、其の言ふ所に稱ひて、皆悉く辦具し、及び徒伴を與ふ。時に彼の門師婆羅門、種種の資糧を得、相發遣し已り、即ち四色の神明の繖蓋、種種に莊校せるを作り、立てて神明と爲す。其の前に於て、種種の音樂を作し、前後圍遶して、或は傘蓋の底に金を打ちて、其の神明の面を作る有り。或は銀を以て、或は頗梨をもて、神明の面を作り、或は琉璃もて神明の面を作り、作り已りて三の傘蓋を別ち遣はし、行きて餘方に向ひ、其の一に自ら隨ひ、彼の別道の諸人等に告げて言はく、『汝輩、至る所の村邑方處にて、普ねく一切諸村の女に告げて言へ「此はこれ神明なり、阿誰の女か能く施設供養する。若し供養する者は、彼の女の心の欲する所の求願に稱ひて、即ち成就を得ん」と。汝等當に觀るべし、其の諸女の內に、若し女有りて金色を作すを見ば、汝等當に其の姓氏・族・名・字・住處を問ひ、宜しく速疾かに來還して我が邊に向ふべし』。是の如く語り已りて、即便ち別れ去る。

　時に彼の門師大婆羅門、即ち自ら一の傘蓋の神明を將て、囊裏に置き、及び食糧を具して、他方に詣り、或は州村・聚落・城邑・王宮・巷陌に至り、所入の處に、即ち音聲を將つて彼の神明に樂するに、至る所の處に、諸女等有り、彼の音聲を聞きて、一切悉く來りて、聚集觀察す。爾の時彼の大婆羅門、諸女の集聚せるを見て、即ち囊中より、神明の形を出し、女輩に示現し、口に是の言を作す、『汝等女輩、各當に此の神明に供養すべし。若し女有りて能く此の神明に供養せん者は、其の女の心の求願有るべき所、即ち成就するを得ん』。爾の時彼等一切の女輩、即ち種種の塗香・末香・華鬘・散花を將つて、家より將來し、用つて彼の神明を供養せんと欲す。是の如き方便もて漸漸に行きて毘耶離城（Vaiśāli）に至る。

六 爾の時、彼の毘耶離城を去る遠からずして、一大村有り、迦羅毘迦(Kapilaka?)(〔隋〕に赤黄色といふ。)と名く。時に彼の村內に、一巨富大婆羅門有り、迦毘羅(Kapila)(〔隋〕に黄赤といふ。)と名づく。彼の婆羅門、富足資財にして、多饒の駈使あり、乃至、彼の家は、猶ほ北方毘沙門宮の如くにて、一種も異なし。彼の婆羅門に一女有り、跋陀羅迦卑梨耶(Bhadra-kapilānī; Bhadra-kapiliyā?)(〔隋〕に賢色黄女といふ。)と名づく。彼の女、憙ぶべく、端正殊絶にして、衆人樂見し、世に雙有ること無く、短ならず長ならず、麁ならず細ならず、白からず黒からず、紫ならず青ならず、其れ盛年に在りて、天下玉女の寶たるに堪ふ。

爾の時、彼處毘耶離城に、一節日有り、名けて燃火(agni-jvalana-yajana?)と爲す。其の節日內に、五百の女有り、共に來りて集聚す。跋陀羅女の身、亦來集して彼の會の中に在り。爾の時、彼傘蓋神明を將てる大婆羅門、彼の諸女の邊に詣向し、到り已りて嚢より卽ち神明を出だし、彼等一切諸女に示現し、口に是の言を作す、『汝諸女輩、此はこれ天神、最勝最妙なり。汝等各當に供養祭祀すべし。若し女人有りて、此の神を供養せば、心に願ふ有る、皆悉く成るを得べし』。爾の時、彼等一切諸女、各種種の末香・塗香・花鬘・散花を將つて、速に走りて彼の神明の邊に向ひ、口に是の言を作す、『我、今、此の天神明を供養す』。唯自ら彼の跋陀羅女有り、獨り往きて彼の神明に近づくを肯んぜず。彼の一切の諸女伴輩、强ひて其を抱き將つて神明の邊に往く。亦彼處に到るや、其の威光力より、彼の閻浮檀金色の形、卽ち威光無く、便ち本色を失ひぬ。

爾の時、彼處の跋陀羅女は、女伴の邊に於て、力を出だして身を挺き、卽便ち脫るるを得、走りて自家に向ひ、己が父母に白して、是の如き言を作す『波波・摩摩、願はくは我を將つて餘人に與ふる莫かれ。何を以ての故に、我、今人を用つて夫主と作さじ。我、心中に梵行を修行せんと欲す』。爾の時、彼の女の有らゆる兄弟、跋陀羅に語りて、是の如き言を作す、『阿姉・阿妹、我等實に亦汝と

【六】迦毘羅婆羅門の女を見出す。

暫時も別離するを欲せず。但、我等輩、若し汝を嫁せずば、道理中に於て、復世人たるを得る能はず』。――或は言ふ、『是の女の兄弟は、其の邊に於て、邪私意有り、是の故に嫁して他人に與ふるを肯んぜず』と。この疑に渉らんを恐れて、是の時、彼の女の兄弟は、復更に是の如き言を作す、『汝但愁ふる莫かれ。我等若し當に汝を將つて他人に許さんと欲すべくんば、會ず、當に汝の爲めに多く錢財を索むべし。彼の人求むるも、若し多許の錢物を辦ずる能はずんば、則ち汝は自然に家居を離れず』。而して彼の兄弟は、人有りて來りて彼の女を求むべくんば、即ち是の言を作す、『若し人、我が姉妹を求めんと欲せば、還りて好金を聚め、女の如く大ならしめよ、乃ち當に相與ふべし』と。

七 爾の時彼、女を求めて閻浮金の女形を將て行ける所の門師大婆羅門、既に彼の跋陀羅女を覩、見已りて彼の諸の別の女に問ひて言はく、『此の女はこれ誰ぞ。誰が家の所生か』。時に彼の諸女、彼の客婆羅門に報じて言はく、『此處に一最勝巨富の大婆羅門有り、迦毘羅と名く。彼はこれ其の女なり』。爾の時、彼の客婆羅門、此の因緣を聞き已りて、日將に沒せんとする黃昏時に至り、漸く彼の富婆羅門迦毘羅の家に到り、其の家に到り已りて、從ひて寄宿を乞ふに、彼の家人は、即便ち許可し、其の宿處を借す。時に彼の寄宿せる客婆羅門、其の夜を過ぎ已りて、彼の後日に至り、晨朝時に於て、迦毘羅婆羅門の邊に詣り、其の邊に到り已りて、即ち其の前に在り、而して呪願して言はく、『願はくは、此の仁者婆羅門の家の、常に勝れ增長せんを』と。是の如き呪願を作し畢り、却いて一面に坐す。其の迦毘羅、彼の客婆羅門に問ひて言はく、『仁者、昨夜は安隱なりしや不や、宿昔は如何』。是の時、彼の客婆羅門、報じて是の如き言を作す、『我、昨夜中、甚大安隱にして、快樂無惱なりき』。

爾の時、彼の家の跋陀羅女、晨朝時に於て、眠臥より起き、其の父の邊に至り、到り已りて其の父の足を頂禮し、却いて一面に立つ。時に、彼の求女の客婆羅門、迦毘羅富婆羅門に白して、是の

【七】門師婆羅門、跋陀羅女を求む。

如き言を作す、『善い哉、仁者、此はこれ誰の女ぞ』。其の迦毘羅、彼の客に報じて言はく、『是は我の女なり』。彼の婆羅門、復、問ふらく、『仁者、此の女は頗し與ふる處有りや不や』。迦毘羅の言はく、『此の女は、未だ他に與へんと許せる處有らず』。時に彼の求女客婆羅門、即ち主人迦毘羅に白して言はく、『大富仁者、摩伽陀國に、一聚落有り、摩訶婆陀羅と名く。彼の聚落内に、一村有り。其の村を、還た摩訶婆陀羅と名く。其の中に、一大婆羅門有り、尼拘盧陀羯波と名け、巨富饒財なり。彼に一子有り、畢鉢羅耶那摩那婆と名く。諸義を自ら解して、復能く他に教へ、三韋陀を悉く皆洞解し、又一事十名の論及び尼乾(Nirghaṇṭu,字彙)・輈書論(Kaiṭubha,音義)・往事・五明論等を解し、一句半句、一偈半偈をも、皆能く分別し、授記・世辯、六十種の論、大丈夫の諸の要相等を解し、一切の技藝、乏少する所無し』。爾の時、彼の客婆羅門、是の如き語を說き已りて、主人に白して言はく、『今、仁者に勸む。此の女を將つて、彼の摩那婆に與へ、持以つて妻と爲さんを』。是の時、彼の大富婆羅門、及び諸の兒子、彼の客婆羅門に報じて言はく、『大婆羅門、此の女若し嫁せんには、多くの錢財を索む。誰か能く取る有らん』。客婆羅門、主人に問ひて言はく、『幾多の財をか索むる』。彼等報じて言はく、『此の女の形に稱へる、若干金を索む』。爾の時、彼の客婆羅門、聞きて即ち袋より彼の閻浮檀金の女の形を出し、彼の父母兄弟に示現し訖りて、是の言を作す、『此の閻浮檀金色の形は、願に是の女に稱ふべし。汝等當に取りて我に此の女を與ふべし』。爾の時、彼の女の父母兄弟、是の如き念を作す、『應に彼處の人は、我が此の女の是の如く端正なるを聞かば、多許の閻浮檀金を集聚して、女形を造作し、若干大ならしむべし』と。爾の時、彼の女の父母兄弟は、共に是の如く言ふ、『我等、今若し此の形の閻浮檀金を取るも、彼の家の錢財の多少を見ず、又、悉く其の國の禮儀・法則の高下を諳んぜず。我が女、脫し若し彼の家に至らば、當に苦惱を見るべし。今、須らく密使もて私に彼の家を覩るべし』。是の念を作し已り、彼の求女婆羅門に告げて言はく、『善使仁者大婆羅

門、我、今、使を遣はして彼の家の法用云何を觀せしめ、然る後に、與ふべきや不やを思量せんと欲す』。是の時彼の客大婆羅門、報じて言はく『是の如く、任意に當に觀るべし』。

爾の時彼の客大婆羅門、是の語を作し已りて、卽ち主人を辭して、本國に歸還し、尼拘盧陀羯波婆羅門の邊に至り、到り已りて白して言はく『善勝仁者大婆羅門、心に應に歡喜すべし。我、求めて、女の閻浮檀金の如き色形なるを得たり。彼、甚だ憙ぶ可く、端正無雙にして衆人樂見す』。時に彼の大富婆羅門、彼の求女婆羅門に問ひて言はく『大婆羅門、仁者は何處に是の女を見るを得たるか』。彼の婆羅門、卽ち之に報じて言はく『彼の女の舍は、毘耶離城を去る、其の間遠からずして一村有り、迦毘羅と名く。其の內に一富婆羅門有り、迦毘羅と名く。彼の婆羅門に、女有り、名けて跋陀羅迦卑梨耶といふなり』。

爾の時畢鉢羅耶那の父母、是の事を聞き已りて、心に大に歡喜し、其の體に遍滿して、自ら勝ふる能はず。

是の時、尼拘盧陀羯波大婆羅門は、卽便ち置立して、已が坐村より連接して、乃ち毘耶離城に至る。其の間の步地、半由旬の道に、一牛群を安じ、幷に客舍を造り、是の如く處處に安置し訖了る。時に迦毘羅大婆羅門、彼等、當に牧牛すべき人に告げて、是の如き言を作す『汝等、各應に是の如く備擬すべし。若し其れ人の、毘耶離城より此に來る有らば、彼等の須むる所の一切諸物を、汝等迎接して彼の人に供奉し、乏短ならしむる勿れ』。

爾の時、跋陀羅卑梨女の兄弟、其の家より出でて、摩伽陀に向ひ、王舍城に至る。彼等初第一の牛群所居の處に値ふや、彼等の諸人、躬を曲げて出で迎へ、口に是の言を作す『善來二輩、何方より遠來して此に到れる』とて、卽ち引將して、客舍の中に入れ、諸の香湯を以て、與へて澡浴せしめ、復、種種の香を以て、其の身に塗り、復、種種無價の衣を將つて、其に與へて著せしめ、復、

種種雜好の香花を將つて、結んで以て鬘と作し、其の頭上に置き、然る後、別に種種の甘美なる餚饍飲食を將つて、共に與へて噉はしむ。所謂、嘍・喋・嚼・齧・嘗・啜の種種の味具はりて、皆悉く充足し、自ら恣に飽かしめ已りて、始めて告げ語りて言ふ、『此の中は、即ちこれ我等の牛舍なり、停りて一宿し、後日早く起きて隨意に行くべし』。時に彼等の客、牛子に問ひて言はく、『此は誰の牛舍ぞ』。牛子、報じて言はく、『此はこれ尼拘盧陀羯波富婆羅門の牧牛の舍なり。故に仁等の客行安立の爲にす。仁等行來に疲乏し、飢渇困極し、須むる所を得ざるを恐畏して、彼の客人を、一夜安臥せしむ。後日、起きて行かば、是の如く、次第に第二の牛群の舍に値ひ、是の如く、第三・第四・第五・第六・第七、悉く皆是の如く出迎承接せん』。復口に白して言はく、『汝等仁輩、何より遠來せる。乃至一夜を宿して、安樂に眠臥せしむ』。後日、意に隨ひて行く。時に、彼等の客、主人に問ひて言はく、『是の如き牛舍は、幾許有るべきか』。牛子、報じて言はく、『彼の摩訶婆陀羅村より已來、毘耶離城に至る、半由旬の間ごとに、一牛舍を置く』。爾の時、跋陀羅迦卑梨耶女の兄弟、共に是の如き語を聞き已りて、即ち是の念を作す、『彼の人の牛舍は、尚若干有り。其の餘の錢財は、更に何ぞ說くを須ひん。我等、此より應に須らく廻返し、還りて本家に向ふべし。我等當に我が姉妹を以て、彼の家に嫁與し、以て其の婦と爲すべし』。時に彼の兄弟、即ち使人を遣はして、彼の大富婆羅門に告げて言はく、『汝、來りて我の姉妹を取り、汝の新婦と爲すべし』。此の語を作し已りて、彼より廻還しぬ。

時に畢鉢羅耶摩那婆、使人の以て其の心意に稱へる女を得たるを聞き、聞き已りて即ち是の如き念言を作す、『我、今應當に自ら往きて彼の女の、實に是の如き徳行智慧有りや不やを觀有るべし』。是の時、畢鉢羅耶童子、即使ち己が父母の邊に至り、長跪して白して言はく、『菴婆[八](amba)・多多(tata)、我が心實に亦五欲を用ひず、梵行を修せんことを願ふに、尊長は、今既に强ひて、我が爲

【八】菴婆(Ambā)多多(Tata)は、兒女の母父を呼ぶ聲なり。

めに匹對を求めたり。是の故に、我、今自ら應に彼に往き、次第に乞食して、彼の女の、實に使人の言語の如くなりや不やを觀看るべし』。時に、其の父母、卽ち子に告げて言はく、『若し時を知らば、汝當に自ら行くべし』。而して彼の童子、卽便ち辭して行き、次第に乞食して、漸漸に迦卑羅迦村に至りぬ。時に、彼の國內に、是の如き法有り。若しは沙門、若しは婆羅門有り、來りて食を乞へば、女、手に食を將つて、出でて彼の人に與ふ。爾の時跋陀羅女、卽ち其の家より、自ら食を將つて出で、彼の客摩那婆の手に授與しぬ。爾の時畢鉢羅耶、彼の女を見已りて、是の如き念を作す、『此は決定して應にこれ彼の女なるべし』。是の時其の女、自らの手もて、彼の摩那婆に、飯食を授與し訖りて、其の足を頂禮し、却いて一面に住す。時に摩那婆、彼の女に問ひて言はく、『仁者善女、嫁處有りや未だしや』。爾の時彼の女、卽便ち報じて言はく、『仁者摩那婆、摩伽陀國に一聚落有り、其の聚落を[九]摩訶羯波と名け、彼處に一婆羅門村有り、彼の村に一の富婆羅門有りて、尼拘盧陀羯波と名け、彼に一子の畢鉢羅耶と名くる有り。我の父母、我を以將つて彼に許與し、妻と爲せり』。爾の時畢鉢羅耶、卽便ち彼の跋陀羅女に報じて、是の如き言を作す、『善女、我聞く、彼の摩那婆は、內心に五欲を行ふを用ひず、梵行を修するを願ふと』。是の時彼の女、卽便ち摩那婆に諮白して言はく、『大婆羅門、我、今是の如き言を聞くを得て、甚大歡喜す。我も、亦五慾を行ふを用ひず、梵行を修せんを願ふ。今日、他に許せるは、此はこれ父母世間の意にして、我は實に用ひず。今、强ひて我を以て世人に隨同して、彼に適きて妻と爲すのみ』。爾の時畢鉢羅耶童子、是の語を聞き已りて、彼の女に問ひ、言ひて謂はく、『仁善女、汝は、昔曾て畢鉢羅耶摩那婆を見たりや不や』彼の女報じて言はく、『善摩那婆、我、未だ曾て見ず』。時に、摩那婆、復更に、重ねて彼の女に語り、言ひて謂はく、『汝善女、卽ち我はこれ彼の畢鉢羅耶摩那婆の身なり。我、實に五慾を行ふを用ひず。我、今、內心に梵行を行ぜんを願ふ。此の事情は、これ我が父母眷屬の意なり。直、是、父母は故に强ひて、

【九】摩訶羯波、摩訶婆陀羅の誤り。

我が與に汝を取りて妻と爲すのみ』。爾の時、跋陀羅女、是の語を聞き已りて、卽便ち彼の摩那婆に白して言はく『善い哉、仁者大摩那婆、我、是の言を得て、甚大歡喜す。仁、必ず世の五欲を用ひずば、今、久しく住する莫れ、速かに宜しく我を取るべし。彼の梵行無き世間の人の、我を求索むる有らしむる莫かれ』。爾の時畢鉢羅耶、是の語を得已りて、卽ち彼處より廻還して家に向ひ、父母の邊に至り、到り已りて長跪し、父母に白して言はく、『菴婆・多多、我、實に世の五慾を行ふを用ひず、梵行を修せんと願ふも、二尊、我が爲めに婦を娶らんと欲したまはば、但速疾かに我が爲めに彼の婦を迎へ來れ』。一〇

爾の時畢鉢羅耶の父母、卽ち迦毘羅迦大婆羅門と共に、言契を立て、交關下財して、索むる多少に隨つて、種種の飮食雜味、無價の瓔珞、妙寶衣等を辦具し、吉祥善好の宿日を選求し、多く財寶を齎して、彼に往きて跋陀羅迦毘羅の女を迎へ取り、兒に與へて妻と作し、家に迎へ入れ已りて、一室內に二合榻を鋪き、既に安置し已る。而も彼の二人、一室內に在りて、各各收斂して、相染觸せず。

爾の時畢鉢羅耶の父母、此の事を聞き已りて、是の如き念を作す『彼の二人は、一室內に在りて、相染觸せず。此の事云何。卽ち更に方便して、一合榻を却け、止一合榻を留めなば、それ既に同眠して、自ら應に相合すべし』。而して彼の二人、猶ほ相觸れず。若し畢鉢羅耶、睡眠に著すれば、その跋陀羅女は、卽ち起ちて經行し、若し跋陀羅女、睡眠に著すれば、その畢鉢羅耶は、卽ち復經行し、是の如く更互に年載を周歷して終に同寢せず。

【一〇】跋陀女、遂に迎へられて畢波羅耶の妻となる。

卷の第四十六

大迦葉因緣品第四十七の中

[一]爾の時、跋陀羅の身、正しく睡眠に著き、其の夫、起立して經行せる時、彼の地方所に、一黑蛇有り、行き過ぐを得んと欲する時、跋陀羅、既に睡眠に著き、其の一手を床[二]陛に懸垂す。畢鉢羅耶、黑蛇の、彼より過ぎんと欲し、跋陀羅の手の、既に垂下して懸れるを見、心に是の念を作す、『畏らくは彼の黑蛇、其の手を蛆螫せん』と。即ち衣にて手を裹み、跋陀羅の臂を擎げて、床上に安じぬ。

爾の時跋陀羅、臂に觸れしを以ての故に、睡眠より卽ち覺め、心に恐怖を生じ、愁憂して樂しまず、意中に疑怪し、卽便ち畢鉢羅耶に諮白して、是の如き言を作す、『賢善聖子、仁は前時に我が與に是の要誓有りしにあらざるべきか。「我意に五欲を行ふを憙ばず、梵行を修せんを願ふ」と。今何の爲めの故に、是の如き心を發せるか』。畢鉢羅耶報じて言はく、『是の如し、我、欲を行ぜず』。跋陀羅言はく、『聖子、今若し欲を行ぜずば、何の故に、向に忽ち我が臂に觸れたるか』。爾の時、畢鉢羅耶、實に依りて報じて言はく、『向に黑蛇有りて、此より過ぎぬ。我、汝の臂の床前に懸在せしを見、我、彼の時に是の如き念を爲す、「恐畏らくは、彼の蛇、毒を吐きて汝を螫さん」と。我、彼の時に衣を以て手を裹み、汝の臂を擎持して、牀上に安置しぬ。實に故らに觸れず』と。是の如き次第もて、彼の二人、一處に居止して、十二年を經、同じく室內に在りて、各相觸れず。十二年を過ぎて、後一時有り、畢鉢羅耶の父母命終す。家業既に廣く、卽便ち經營し、畢鉢羅耶は、身自ら家外に田作を檢校し、其の跋陀羅は、家內の有らゆる一切資生の業を修緝す。

爾の時畢鉢羅耶、嘗て一時に於て、跋陀羅に語りて、是の如き言を作す、『賢善仁者、汝處分して

[一] 迦葉夫婦、遂に契を交へず。
[二] 陛は、きだはし。

烏麻油を壓せしめよ。今諸牛等に將つて與へて、飲ましめんと欲す』。其の跋陀羅、卽ち夫主に報ず、『聖子の教の如くして、我敢て違せじ』。是の教を聞き已りて、諸の使女を喚び、之に告げて言はく、『汝等、速疾かに、烏麻油を壓せよ。聖子は將つて諸牛に飲ましめんと欲す』。

爾の時使女、跋陀羅の是の如き言を聞き已りて、卽ち烏麻を將つて、日中に置きて曬し、諸蟲の百千蠕動するを見、見已りて各各共に相謂ひて言はく、『我等は當に無量の諸罪を得べし』。或は復言ふ有り、『我等は今何の罪有るかを知る。此の罪科は跋陀羅に屬す。そは我等をして是の如き事を作さしむればなり』。

〔三〕跋陀羅、諸使女等の是の言を作すを聞き已り、卽ち之に語りて言はく、『若し是の如き衆罪過有らば、汝等は當に更に油を壓する莫かるべし』。爾の時跋陀羅、人を遣はして彼の烏麻を擗擒し已りて室内に入り、門を閉ぢて思惟して、心中に樂しまず、低頭して默然し、寂靜として坐す。

其の畢鉢羅は、田地を檢校し、觀看して廻還し、諸衆生の、彼の種種無量の苦惱を受くるを見、復諸牛の困厄を受け、作使駈逐せられて暫くも停まるを得ざるを覩、見已りて憂惱し、頭を低れて默然し、是の思惟を作す、『嗚呼、一切諸衆生の輩は、是の苦惱を受く』。還りて其の家に至り、心大に憂愁し、顏色樂まず、頭を低れて念坐す。

その跋陀羅、畢鉢羅の是の如く憂惱し、頭を低れて思惟するを見、見已りて邊に到り、到り已りて白して言はく、『聖子、何の故に、是の如く憂愁し、心內樂しまず、低頭して坐するか。仁、今是の如き念を作さざるべけんや、「我、汝跋陀羅を處分して、人をして油を壓せしめたるに、我が爲に壓せず、此の因緣を以て、心に樂しまず」と』。彼、卽ち報じて言はく、『皆善仁者、我、今此の如き因緣を以て、心中に樂しまず、低頭して住するにあらず。我、今朝、此より去り、田作を檢校して、諸衆生の、種種の苦を受け、來去行住して、暫くも安きを得ざるを見、復諸牛の、種種に事を作し、曾て

【三】迦葉夫婦、共に厭離の心を起す。

停息せざるを見、我是を見已りて、是の如き念を作しぬ、『嗚呼嗚呼、諸の衆生等は、乃ち是の苦を受く』と。我、是を以ての故に、心中樂しまず、低頭して住するなり』。時に跋陀羅、復夫に報じて言はく、『善仁聖子、我も今亦是の如き大患を見る』。其の夫、問ひて言はく、『賢善仁者、汝、何の患をか見たる』。其跋陀羅は、次第に即ち是の如き因緣を說く。爾の時畢鉢羅耶、跋陀羅女に語りて、是の如き言を作す、『賢善仁者、家內に住在しては、淸淨を行じ、無缺無犯、無損無害なり難し。終に一形一命を盡して、心に稱ひて梵行を修行するを得べき能はず』。其の跋陀羅報じて言はく、『聖子、是の故に我等二人、詳に共に家を捨てゝ出家せん』。是の時畢鉢羅耶、即便ち彼の跋陀羅に報じて言はく『賢善仁者、汝、今且らく住せよ。我、當に師を求むべし。若し尋ね得已らば、當に汝に告げ知らすべし。汝、後時に家を捨てゝ出家せよ』。

爾の時、畢鉢羅耶、即ち家內の有らゆる作使の諸男女等を喚び、之に告げて言はく、『汝輩、我が錢財、或は復穀米を當[四]くるあるべし。皆汝等に屬せしめ、皆放つて良と爲ん。我、出家して梵行を修行せんと欲す。厭離の爲めの故に』。爾の時畢鉢羅耶、已が白氎無價の衣を取り、即時に用つて彼の僧伽梨と作し、即ち一人に請ひて、其の鬚髮を剃り、而して是の言を作す、『世間に大阿羅漢の出家者有るべし。我、今其に隨ひて、出家修道せん』。彼の時に當りて、唯、如來多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀のみを除きて、世間に未だ一の阿羅漢有らず。

[五] 爾の時世尊、晨朝時に於て、明相現じ已るや、阿耨多羅三藐三菩提を證したまふ。爾の時畢鉢羅耶迦葉、是の日に當りて、夜分已に過ぎ、日始初めて出づるや、尋いで復出家す。是の畢鉢羅耶迦葉は、大迦葉の種姓の內に生れたるが故に、世間に於て迦葉の名を得たり。彼、出家し已り、聚落內に、次第に乞食して、漸次にして往き、復一時の間、次第に遊行して、摩伽陀國の摩伽陀聚落に到り、那荼陀村(Nāgada?, Nālada)の王舍大城に至る。其の間に、忽ち如來の、彼の一神祇の處に

【四】當。つかさどる、承く。

【五】迦葉、遂に出家を決行し、王舍城外多子塔下に、佛を見てその弟子となる。

在ますを見たり。爾の時、是の神を名けて、多子(Bahuputraka)といふ。彼の坐に在るや、甚大端正に、其の身は正直にして、猶ほ虛空の內に、衆宿の莊嚴なるが如し。迦葉見已りて、卽ち淸淨を得、無二の想を得ぬ『我、今必ず教師を見ん。我、世尊を見ん。我、今必ず婆伽婆を見ん。我、今必ず一切智を見ん。我、今必ず世尊・一切見者を見ん。我、世尊を見ん。我、無礙知見者を見ん。我、世尊を見ん』と。彼の大迦葉、是の如き淨心を得已りて、心心相續し、正念にして散ぜず、世尊の足下を頂禮し已畢りて、右膝を地に着け、佛の前に在りて、佛に白して言さく、『世尊、我はこれ世尊の聲聞弟子なり。唯願はくは世尊、我が爲に師と爲りたまへ。我はこれ世尊の聲聞弟子なり』。是の故に、論者、偈を說きて言ふ、

『彼は佛の多子樹に在まして　猶ほ金像の光顯赫たるが如きを見　其の心內に一切智を發し　合掌歡喜して世尊に向ふ　彼の林處に於て佛足を禮し　尊の前に合掌して是の言を作す「唯願はくは世尊我が師と爲りたまへ　猶ほ闇處を燃燈の照すが如く」と』

爾の時世尊、迦葉に告げて言はく、『迦葉、若し聲聞弟子有りて、是の如く一心に正念し已訖りて、是は我が師なりと言ひ、是の如く、心に尊重供養せんに、而も彼の教師は、知らざるを知ると言ひ、見ざるを見たりと言ひて、彼の人、是の虛妄の語を以ての故に、是の尊重供養を受けなば、彼の人の頭は、破れて七分と作らん。然るに大迦葉、我は今、實を知りて知ると言ひ、實を見て見たりと言ふ。我、聲聞諸弟子等の爲めに說法するの時、因緣を說くは、因緣無きに非ず。[六]開遮する無きに非ず。但開遮するのみに非ず、亦神通をも現ず。但、神通を現ずるのみに非ず、亦開遮する有り、開遮する無きに非ず。復次に、迦葉、我、彼の時に於て、因緣を說き、乃至、亦開遮する有り、開遮する無きに非ざるなり。我が所說の如く、應に之を奉行して違するを得る勿く、我が言に隨順すべし。若し、是の如くせば、當來の世に於て、長夜に自の利益の事を獲得し、大安樂を得

【六】開遮は、肯定否定をいふ。說くは開なり、不說は遮なり。

ん。復次に迦葉、汝、應に是の如く學ぶべし。迦葉、汝、若し是の如き行を學ばんと欲せば、梵行人內の下中上所に於て、應に敬重して慚愧の心を起すべし。迦葉、汝、應に是の如く學ぶべきなり。復、次に迦葉、汝、彼の時に、常に正念を起し、蹔くも捨離する勿れ。迦葉、汝、此の事に於て、復應當に學ぶべし。復次に迦葉、汝、彼の時に、五陰中に於て、應に生滅の相を觀ずべし。所謂、「此はこれ色、此はこれ色の生、此はこれ色の滅、此はこれ受、此はこれ想、此はこれ行、此はこれ識、此はこれ識の生、此はこれ識の滅なり」と。迦葉、汝、是の處に於て、應に是の如く學ぶべし』。

七 時に長老摩訶迦葉、既に世尊の、是の敎を作したまふを蒙り已り、是の不淨想を生じ、常に食を乞ひて食し、七日を經て、八日に至り、敎の如く智を生じぬ。時に世尊、是の如く敎へ已りて、坐より起ちたまふ。是に於て、長老摩訶迦葉、世尊を侍送す。

八 爾の時世尊、路を行きたまふ未だ久しからずして、便ち路側に在りて、一樹の下に到り、彼の樹に到り已りたまふや、然るに其の長老摩訶迦葉は、己が身上の僧伽梨衣を取り、四疊して地に敷き、佛に白して言さく、『世尊、是の座は世尊の爲めに設く、我を憐愍したまふが故に、佛、是の座に坐したまへ』と。是の語を作し已る時、世尊便ち、彼の座に坐し、坐し已りて、佛、長老摩訶迦葉に告げて言はく、『迦葉、此の僧伽梨の如きは、極めて微妙にして、最勝最輭と爲す』。時に長老迦葉、佛に白して言さく、『世尊善い哉、善い哉世尊、今は我を憐愍したまふが故に、我が是の座を受けたまへ』。時に世尊、彼の長老摩訶迦葉に告げて、是の如き言を作したまふ『迦葉、汝は能く我が著くる所の糞掃の衣を持せんや不や』。時に長老摩訶迦葉、佛に白して言さく、『唯然り、世尊、我、能く彼の如來所著の糞掃衣を持せんのみ』。時に世尊、即ち長老摩訶迦葉に、麁糞掃衣を授け、世尊は便ち摩訶迦葉所著の妙服を受けたまふ。九 世間中に於て、人有りて疑を作さく『頗し世尊は、他を憐愍

【七】大迦葉八日目に證悟す。

【八】大加葉自著の妙衣を佛に奉り、佛の麁衣を受けて生涯捨てず。

【九】（原文）於世間中、有人作疑、頗有世尊、憐愍他故、顯示大德福利之事、至於富勢、在先棄捨、而受麁布糞掃之衣。世尊は他を憐愍して、大德福利の事を顯示したまふ。富勢のものが、自ら進んで棄捨して麁衣を受くるに至る事あるべきやといふならん。頭陀は後にあり。

したまふが故に、大德福利の事を顯示したまふに、富勢の先に在りて棄捨して、而も麁布糞掃の衣を受くるに至る有りや』と。彼の疑ふ所のもの、唯應に此を說くべし、『摩訶迦葉聲聞弟子これなり。乃至、能く如來より、彼の麁糞掃衣を受け、其の長老迦葉は、乃至、阿羅漢果を得、形壽を盡して、彼の長老摩訶迦葉は、此の想を捨てざればなり』と。是の故に世尊、彼に記を授けたまはく、『汝等比丘、若し我が聲聞弟子の少欲知足にして、頭陀を行じて悉く具足せる者を知らんと欲せば、所謂、長老摩訶迦葉比丘これなり』と。

一〇

爾の時世尊、復一時の間、舍衞城祇樹給孤獨園 (Śrāvastin Jetavana Anāthapiṇḍikārāma) に在まして、時に世尊、諸比丘に告げて言はく『我、昔時に於て、諸の欲惡不善の法を離れて[一一]覺有り、觀有り、離より喜樂を生じて、初禪に入りぬ。是の時、摩訶迦葉比丘も、亦復是の如く、諸の欲惡不善の法を離れて、覺有り、觀有り、離より喜樂を生じて、初禪の行に入りぬ。我、爾の時、覺・觀を滅して、內の淸淨心の一處、覺無く觀無くして、定より喜樂を生じ、第二禪に入りぬ。爾の時、摩訶迦葉比丘も、亦復是の如く、亦、覺・觀を滅して、乃至、第二禪の行に入りぬ。諸比丘、我、爾の時に喜を離れて捨を行じ、憶念正智もて、身の樂を受け、賢聖の歎ずる所の如く、已に諸事を捨て、安樂に住して、三禪の行に入りぬ。是の摩訶迦葉比丘も、亦復是の如く、離喜行捨し、憶念正智もて、身樂を受け、賢聖の歎ずる所の如く、已に諸事を捨てゝ、安樂に住し、三禪の行に入りぬ。諸比丘、我、爾の時に諸苦を斷ち、諸樂を斷捨せんと欲して、先づ憂喜を滅し、不苦不樂、捨念淸淨にして、四禪の行に入りぬ。是の迦葉比丘も、亦復是の如く、苦を斷ち樂を斷ち、先づ憂喜を滅して、不苦不樂、捨念淸淨にして、四禪の行に入りぬ。

一二

汝等比丘、我爾の時に於て、正しく慈心を以て、一方に遍ねくして、入定安住し、是の如く、第一第二第三より、第四方に至り、是の如く上下に、一切處一切世間に、慈心を以て、一切に遍滿して、

【一〇】覺觀。新譯には尋、伺といふ。
【一一】大迦葉の得果が、佛に等しきを歎じ給ふ。(1)四禪。
【一二】(2)四無量心。

入定安住し、廣大無量にして、怨恨有ること無く、毒害を生ぜざりき。是の時摩訶迦葉比丘も、亦復是の如く、乃至、怨恨有ること無く、毒害悲喜の心を生ぜざること、亦復是の如し。諸比丘、我、爾の時に、其の捨心を以て、一方に遍滿して、入定安住し、是の如く、第一第二第三より、第四方に至り、是の如く上下に、一切處一切世間に、捨心を以て、悉く皆遍滿して、入定安住し、廣大無量にして、怨恨有ること無く、毒害を生ぜざりき。是の時、迦葉比丘も、亦復是の如く、乃至、害せず。

〔一三〕汝等比丘、我、爾の時に一切の色相を過ぎ、一切の有對相を滅し、一切別異の相を思はず念ぜず、無邊虛空處を念じて、卽ち無邊虛空處行に入りぬ。是の時、迦葉比丘も、亦復是の如く、一切の色相を過ぎ、乃至無邊虛空處行に入る。諸比丘、我、爾の時一切無邊虛空處を過ぎ、無邊識處を念じて、卽ち無邊識處の行に入りぬ。是の時、摩訶迦葉比丘も、亦復是の如く、乃至、無邊識處行に入る。諸比丘、我、爾の時一切の識相を過ぎ、一切の無所有相を念じて、卽ち一切の無所有處行に入りぬ。汝諸比丘、是の時、摩訶迦葉比丘も、亦復是の如く、乃至一切無所有處行に入る。諸比丘、我爾の時一切無所有相を過ぎて、非有想非無想處行に入りぬ。是の時、摩訶迦葉比丘も、亦復是の如く、乃至、非有想非無想處行に入る。諸比丘、我、爾の時一切の非有想非無想處行を過ぎぬ。是の時摩訶迦葉比丘も、亦復是の如し。

〔一四〕諸比丘、我、爾の時八解脫行に入りて、逆順に出入し、入り已りて還出で、出で已りて還入りぬ。是の時、摩訶迦葉比丘も、亦復是の如く、乃至、入り已りて還出で、出で已りて還入る。諸比丘、我、爾の時八勝處行に入りて、逆順に出入し、入り已りて還出で、出で已りて還入りぬ。是の時、摩訶迦葉比丘も、亦復是の如く、乃至、入り已りて還出で、出で已りて還入る。諸比丘、我爾の時十一切處行に入り、入り已りて還出で、出で已りて還入りぬ。是の時、摩訶迦葉比丘も、亦復是の

【一三】(3)四無色定。

【一四】(4)八解脫行。(5)八勝處行。(6)十一切處行。何れも禪定中の所得なり。

如く、乃至、入り已りて還出で、出で已りて還入る。

一五 諸比丘、我爾の時、種種の神通境界に遊戯せり。所謂、一身を分ちて多身と作し、多身を合して共に一身と作し、外より內に入り、內より外に出で、上より下に入り、下より上に出で、石壁山障を、徹過して礙無く、地に出入すること、水の如くにして異ならず。譬へば火炎の、現じ已りて尋いで滅するが如く、日と月と、大威德・大威力有れども、而も能く以て手上に之を捫摸し、身、自在を得て、乃し梵天に至りぬ。汝諸比丘、是の時摩阿迦葉比丘も、亦復是の如く、亦復、種種の神通に遊戯し、能く一身を以て分ちて多身と作し、復多身を以て共に一身と作し、乃至、身に自在を得て梵天に至る。

諸比丘、我、爾の時淨天耳の、人耳に過ぐるを以て、聞く所の衆聲は、或はこれ天聲、或はこれ人聲なるを、皆悉く了聞しぬ。是の時摩訶迦葉比丘も、亦復是の如く、亦復能く清淨の天耳の、人耳に過ぐるを用て、乃至、一切悉皆了聞す。

諸比丘、我、爾の時他心智を以て、他の富伽羅（pudgala, 人我）等の心行の事を知り、即ち如實に是の如き心念を知り、若し瞋心あれば、即ち如實に瞋心を知り、若し瞋心無ければ、即ち如實に瞋心無きを知り、是の如く瞋心有れば、如實に瞋心有るを知り、瞋心無ければ、如實に瞋心無きを知り、癡心有れば、如實に癡心有るを知り、癡心無ければ、如實に癡心無きを知り、愛心有れば、如實に愛心有るを知り、愛心無ければ、如實に愛心無きを知り、爲心有れば、如實に爲心有るを知り、爲心無ければ、如實に爲心無きを知り、小心・廣心、大心・狹心、亂心・不亂心、無量心・無邊心、有上心・無上心、入定心・不入定心、住定心・不住定心、解脫心・不解脫心を、如實に即ち知りぬ。是の時、摩訶迦葉比丘も、亦復是の如く、亦、他心智を以て、富伽羅等の心行の事を知り、即ち如實に是の如き心念を知り、若しは瞋心有り、若しは瞋心無きを、乃至、如實に知り、解脫心、不解脫

【一五】(7)六通を擧ぐ。身如意、天耳智、他心智、宿命智、天眼智、漏盡智の順序。

心を如實に能く知る。

諸比丘、我、爾の時種種宿命の事を憶知したり。或は一生處、或は二、或は三、或は四、或は五、或は十、二十、三十、五十、或は百、或は千、或は壞一劫、或は住一劫、壞劫已りて住劫、住劫已りて壞劫、或は無量の壞劫、成劫已りて壞劫、壞劫已りて成劫るを知りぬ。我、彼處に於て、是の如き名字、是の如き姓、是の如き生、是の如き食、是の如き樂、是の如き苦、是の如き受、若干時の壽命、我、彼處に死して此處に生れ、我、此處に死して彼處に生れ、是の如き相、是の如き形ありし、種種の宿命を、皆悉く念知せり。是の摩訶迦葉比丘も、亦復是の如く、亦清淨の天眼の、天人に過ぐるを以て、宿命の事を見、或は一生、乃至、是の如き相貌、是の如き形の、種種の宿命を皆悉く念知す。

諸比丘、我、爾の時清淨天眼の、天人に過ぐるを以て、諸衆生の、此に死して彼に生れ、或は好、或は醜、或は善道に生れ、或は惡道に生れて、其の業報に隨ふを見、乃至、實に此等の衆生は、身の惡行を具足し、口の惡行を具足し、意の惡行を具足し、及び賢聖を謗り、邪見顚倒なるが、此の業和合し、因緣成ずるが故に、身壞れ命終りて、惡道中に墮し、此等の衆生は、身の善行を具足し口の善行を具足し、意の善行を具足し、賢聖を謗らず、正見なるが、業法の因緣の故に、身壞れ命終りて、善道に生るゝを知りぬ。是の如き事を、淨天眼の、天人に過ぐるを以て、彼處に死して此處に生れ、或は勝、或は劣、或は好、或は醜、善道と惡道と、業に隨ひて報を受くるを、如實に見て、皆悉く知見せり。是の時、摩訶迦葉比丘も、亦復是の如く、如實に能く知り、如實に能く見る。

諸比丘、我爾の時諸漏盡きて、無漏中に於て、心、解脫を得、慧、解脫を得、現法中に於て、神通自在に、安樂行を證して、是の如き言を唱へたり、「生死已に斷ち、梵行成就し、所作已に辦じて、後有を受けず」と。是の時、摩訶迦葉比丘も、亦復是の如く、諸漏盡き、乃至、所作已に辦じ、後

有を受けず』。

[26] 爾の時諸比丘、佛に白して言さく『世尊、是の長老摩訶迦葉は、往昔の時、何の善業を爲してか富貴の家に生れて、資財具足し、乃至、所作已に辦じ、身相端正にして、衆の樂觀する所、世間に比なく、最上最勝にして、狀、金像の如くなるぞ。何の業因を作してか、復、出家を得、衆戒を具足し、羅漢果を證し、又佛が、諸比丘中、少欲知足、頭陀[27]第一なるは、摩訶迦葉比丘これなりと授記したまふぞ』。是の語を作し已るや、佛、諸比丘に告げて言はく、『我憶ふに、往昔過去の時、一辟支佛有り、名けて多伽羅尸棄(Tagarasikhin)といひ、恆に彼の波羅捺城に住在せり。彼の時の間、波羅捺の處、穀貴く飢儉にして、白骨地に滿ち、人民多く死し、食を乞ふも得難く、出家の人、舉措する能はざりき。爾の時、辟支佛、日の東方に在る晨朝時に、衣を著け鉢を持し、波羅捺城に入り、次第乞食して得ず、先の如く鉢を洗ひ、空鉢にて出でたり。

爾の時、波羅捺城中に、一人有り、其の家貧苦にして、居積少なかりき。而も彼の貧人、辟支佛多伽羅尸棄の、漸進して前み、威儀庠序あり、地を視て行き、進止所を得、顏を舒べて平視し、威儀具足し、心に正念を得たるを見、時に貧人、辟支佛を見て、心に清淨を得、漸く彼に到り已り、辟支佛に白して、是の如き言を作せり、「善い哉、大仙、此の城中に於て、飮食を求乞して、得べきや不や」。尊者報じて言はく、「善い哉、仁者、我、此の城に於て、食を乞ひて得ず」。時に彼の貧人、辟支佛に白して言さく、「善い哉大仙、來りて我か家に詣れ」。時に彼の人の家内に、唯稗飯一升有りて、成熟し已訖る。遂に辟支佛を將て、來りて家中に入れ、安坐を敷設し、飯を以て奉獻す。而して諸辟支佛に、是の如き法有り、神通力を以て、衆生を教化し、餘通を以てせず。爾の時多伽羅辟支佛、彼の人の所に於て、食を受得し已り、彼を憐愍するが故に、彼の貧舍より、空に騰りて去る。時に彼の貧人、彼の尊者辟支佛の、空に騰りて去るを見、彼、既に見已りて歡喜踊躍、身心に

【二六】大迦葉の畢婆陵伽王子本事譚。

【二七】頭陀(Dhūta)は抖擻と譯す。煩惱の塵垢を抖擻するの義なり。蓋し比丘たるものは、憒鬧を離り、飾好を樂まず、心に貪求を絕ち、諸の憍慢なく、清淨に自活して、以て無上正眞の道を求むべし、この行を頭陀といふ。これに十二種あり。以下を見よ。

遍滿し、十指を頂戴して、合掌恭敬し、頭面に禮を作し、是の如き願を乞へり、「願はくは、將來に於て、是の如き辟支聖人、或は復勝れたる者に値遇せんを。若し彼の聖人の、說く所の法要を、願はくは聞持して速疾かに解悟するを得んを。又願はくは生生世世、惡道の中に墮せざらんを」と。汝等比丘、爾の時の波羅捺城の貧苦の人、多伽羅辟支世尊を請じて、其の家內に到り、食を施せる者を知らんと欲せば、摩訶迦葉比丘これなり。時に彼の貧人、少貯積を以てして、能く好心を以て、多伽羅辟支世尊に一食を施せる緣の故に、千返、北鬱單越處に生れ、無量世に於て、往返して恆に刹利・大姓婆羅門種・居士大家に生れ、是の業報の因緣力に藉るが故に、迦葉佛出世の時、迦尸國王訖利尸子(Kṛkin-putra)と爲るを得たり。其の迦尸國王訖利尸子は、迦葉如來・阿羅呵・三藐三佛陀を恭敬尊重し、一世を盡くして、然る後に涅槃しぬ。是の迦尸國王は、佛舍離の爲めに、七寶塔を造れり。其の七寶とは、所謂、金・銀・頗梨・琉璃・虎珀・瑪瑙・及び車渠等なり。其の寶塔の內は七寶もて莊校し、外は石砌を以て、其の寶塔を覆ひぬ。其の塔、高妙にて、一由旬を極め、廣さ半由旬なり。其の王子を奢婆陵伽(隋に攀緣といふ。)と名く。其の塔上に、七寶の蓋を造りて、遍ねく其の塔を覆ひたり。

一八 又、師有りて說く、塔を造る八分にして、比丘僧に、衣服・飲食・靴履を布施し、施し已りて願を作せり、「願はくは我將來に、是の如き聖に値ひ、彼の聖の說法を、尋いで卽ち領悟せんを。又願はくは惡道の中に生ぜず、所生の處に、金色の身を得んことを」と。是の事を作し已りて、遂に父王より出家せんことを乞求せしも、其の父王は許さざりき。時に彼の王子、父の命終後、乃ち出家するを得、既に出家し已りて、經典を讀誦し、禪定を成就し、彼、命終して、往返して恆に天人の內に生れ、無量世中、是を遊歷し已りて、最後身に於て、今尼拘陀羯婆羅門家に生るゝを得たり。其の家、巨富にして、財寶を具足し、乃至須ふる所、皆少乏する無し。

【一八】大迦葉本事の別師異說。

而して是の摩訶迦葉は、迦葉佛の舍利塔上に、七寶の蓋を造り、供養尊重せる因緣力の故に、金色の身を得たり。彼の時に於て、是の如き願を乞へり、「願はくは我惡道に生ぜざらんを」と。是の業報因緣力を以ての故に、是より已來、惡道に墮せず、常に天人の處に生れ、無量無邊の業報を受くるを得たり。而して彼の時に、復、願を乞ひて言へり、「願はくは我、將來是の聖人に値ひ、既に値ふを得已らば、我に背かしむるなからんを。或は此の聖より勝れたるもの、彼、若し法を說かば、聞き已りて卽ち解せんを」と。彼の業報因緣力を以ての故に、我が是の如き敎化に値ふを得、卽ち我に値ひ已るや、卽ち出家を得、衆戒を具足し、羅漢果を證して、諸比丘中、少欲知足なるは、卽ち此の上座摩訶迦葉比丘これなりと、我が授記する所なり。

諸比丘、これ是の摩訶迦葉は、往昔所造の功德業報の因緣力の故に、大富婆羅門の家に生れ、乃至、乏少する所無く、身相端正、最妙最勝に、狀金像の如く、復、出家を得、衆戒を具持し、阿羅漢果を證したり。故に、我授記す。少欲知足にして、頭陀第一なるは、卽ち摩訶迦葉比丘これなり」と。

(一九) 爾の時世尊、多時を經て、復一時の間、大迦葉に告げて、是の如き言を作したまふ、『迦葉、汝は今將に少年を過ぎて已に老年をも過ぎんとす。復汝の身に著くる所の糞掃麁弊の服に至りては、宜しく須らく捨棄すべし。今、我が上妙の衣服を取るべし。迦葉、汝來れ。是の如きの服は、長者の施す所、微細輕軟にして、刀の割成する所、縫治して身に著けよ。他人の請を受けよ。常に佛邊に在りて我に離るゝ勿れ』と。是の語を作し已りたまふ時、(二〇)大迦葉、佛に白して言さく、『世尊、我、長夜に於て阿蘭若に在り、亦常に阿蘭若の法を讚歎す。我、長夜に於て、食を乞ひて活命し、亦復乞食の功德を讚歎す、我、長夜に於て糞掃衣を著け、亦復常に糞掃衣の德を歎ず。我、長夜に於て非時に食せず、亦復不非時の法を讚歎す。我、長夜に於て、一坐食を修し、亦復一坐食の法を讚歎

【一九】大迦葉の頭陀の德を舉ぐ。

【二〇】大迦葉の常行せるを、後世名を立てゝ十二頭陀といふ、左の如し。

一、住阿蘭若處……一、同上
二、乞食活命……二、同上
三、著糞掃衣……七、同上
四、不非時食……六、過中不飲漿
五、修坐食……四、一食
六、節量食……五、同上
七、塚間坐……九、同上
八、露地坐……十一、同上
九、樹下坐……十、同上
十、經行……三、次第乞食
十一、常坐不臥……十二、同上
十二、唯三衣……八、同上

下に附記せるは、十二頭陀經の所說にして、概ね一致す。唯この不非時食、經行の二が、彼にありては、過中不飲漿、次第乞食とせらるゝの差あるのみ。

す。我、長夜に於て、一摶食を受けて節量して飡噉し、亦復一摶食を受くるを讃歎し、及び食を節量するの法を讃歎す。我、長夜に於て塚間に在り、亦復塚間に在るの法を讃歎す。我、長夜に於て、露地に在り、亦復露地に在るの法を讃歎す。我、長夜に於て、樹下に住在し、亦復樹下に住するの法を讃歎す。我、長夜に於て、經行に在り、亦復經行に在るの法を讃歎す。我、長夜に於て、常に坐して臥せず、亦復常に臥せざる法を讃歎す。我、長夜に於て、唯、三衣を畜へ、亦復三衣を畜ふる法を讃歎す。我、長夜に於て、少欲知足し、亦復少欲知足を讃歎す。我、長夜に於て、寂靜を樂しみ、亦復寂靜を樂しむ法を讃歎す。我、長夜に於て、曾て無益の語を樂說せず、亦復無益の言語を樂說せざるの法を讃歎す。我、長夜に於て、常に精進を行じ、亦復常精進の法を讃歎す。我、長夜に於て、正念を成就し、亦復正念を成ずるの法を讃歎す。我、長夜に於て、正定を成就し、亦復正定を成ずるの法を讃歎す。我、長夜に於て、智慧を成就し、亦復智慧を成ずる法を讃歎す。我、長夜に於て、常に禪定に入り、亦復禪定に入る法を讃歎す』。

佛、迦葉に告げて、是の如き言を作したまふ『迦葉、汝、何の利益を見るが故に、長夜に自ら阿蘭若の法を行じ、亦復阿蘭若の法を讃歎し、乃至、長夜に自ら禪定に入り、亦復禪定に入る法を讃歎するか』 是に於て大迦葉、佛に白して言さく『世尊、我、二種の利を見るが故に、長夜、阿蘭若處に在り、亦復阿蘭若を行ずる者を讃歎し、乃至、長夜、常に禪定に入り、亦復常に定に入る者を讃歎す。何等をか二と爲す。一には我今現に安樂の行法を得、二には後世の衆生の爲めに、憐愍を生ずるが故なり。唯願はくは將來の人衆、我等を見るが故に、我等の行を學びて、應に是の言を作すべし「過去の世に、老宿上座の聲聞比丘あり。彼等は長夜阿蘭若を樂み、阿蘭若の行を讃歎し、乃至、常に禪定に入り、亦復常に禪定に入る者を讃歎したり。我等云何に彼の行を學び、乃至、自ら禪定に入り、常に禪定に入る者を讃歎せん」。世尊、我、此の二種の利を見るが故に、長夜、阿蘭

若に在りて行じ、亦復阿蘭若を行ずる者を讃歎し、乃至、常に禪定に入り、亦復常に禪定に入る者を讃歎するなり」。

佛、大迦葉に告げて言まはく『善い哉、善い哉、大迦葉、汝は來世の多衆生の爲めに、大利益を作し、大安樂を作し、無量の諸天人民を安隱ならしむ。是の故に、汝は今意の樂む所に隨ひ、阿蘭若處に住せよ。汝、時に隨ひ、如來を見んと欲せば、時時來りて見よ』。

〔三〕時に、諸比丘、佛に問ひて、言して白さく『希有なり、世尊、是の長老摩訶迦葉は、何の故に、乃ち能く多くの衆生の爲めに、大利益を作すか』。是の語を作し已るや、佛、彼等、諸比丘に告げて言まはく『諸比丘、是の摩訶迦葉は、但、現今のみ、衆多の人の爲めに大利益を作すにあらず。過去の世にも、亦多人の爲めに、大利益を作せり』。諸比丘、佛に白して言さく『世尊、唯然り世尊、願はくは因緣を說きたまへ』。

佛、諸比丘に告げて言はく『諸比丘、我念ふに、往昔此の摩訶迦葉は、曾て帝釋天王となり、彼の時の間に於て、佛の出世無く、亦辟支佛の、彼の時中に出世する無く、一切の人輩は、人道中より命終せる已後、人身を捨て已りて、多く惡道に生じ、人天に生るる少かりき。是の如く、三十三天・夜摩天・兜率天・化樂天・他化自在天・梵身天より墮し已りて、多く惡道に生れ、人天に生るる少なく、彼の時に於て、天處人處に、多く空曠有りき』。

【三】大迦葉の帝釋本事譚。

卷の第四十七

大迦葉因縁品第四十七の下

『爾の時彼の帝釋王、是の如き念を作せり、「我、今亦下生して彼の閻浮提の人間に生を受け、彼等を教化し、教誨成就すべし」。是の思惟を作し已り、四天王を喚びて言ふ、「善い哉、仁者、汝、今我が所に就きて、我が教令を聽くべし。我今意に汝等輩と共に人間に生れんと欲す。人を教化せんが故に彼等を教誨せん。我、彼の時に、當に師子王身と作るべし。汝等當に師子と作りて之を守護し、多くの眷屬を將て、之を圍遶すべし。是の身を作し已りて、村舍城邑聚落を遊歷し遊行する處に、時時に彼の人輩、若し汝等に、「我、當應に常に汝に何物をか與ふべき」と問はば、汝等應當に彼の人に報へて言ふべし。「別に我に一百數人を與へよ」と。若しそれ彼等復汝等に、「丈夫を須ふるか。小兒を須ふるか。婦人を取るとや爲ん。男子を取るとや爲ん」と問はば、汝等應に報へて是の如き言を作すべし、「若し多く殺生する者有らば、是の如き等の人を、日に一百を須ちて、用つて此の師子王の食に供給せよ。是の如く、偷盜する人、邪婬を行ふ者、妄語を行ふ者、或は兩舌する者、或は惡口する者、或は綺語する者、或は多貪なる者、或は多瞋なる者、或は邪見なる者、是の如き等の諸惡人輩を、日に一百を須ちて、此の師子に供せよ。若しそれ諸の不殺生の者有らば、汝等此の如きの人を與ふる勿れ。師子は是の如き不盜の者、乃至、不邪見の者を食せず。汝等與ふる勿れ。此の如きを、師子は悉く皆食はず」と。復是を須つて家ごとに別に一人を教へて、決んで須らく出家せしむべし。

爾の時、帝釋及び四天王、善教思惟して、是の念を作し已り、閻浮に下來せり。爾の時帝釋、化して師子と作り、縱廣高下、一俱盧舍にして、猶ほ師子の如くにして異有る無かりき。時に彼の人

衆、師子の後に在り、師子王の爲めに、食を索めて行くこと、彼の、昔時、帝釋の敎へたる所の如くにて、異有ること無かりき。爾の時、彼の衆、師子を怖るるを以て、心に殺生を悔い、偷盜有ること無く、亦邪婬も無く、乃至、邪見の心有ること無く、悉く具足して十善の業を持修せり。家に別に一人ありて、出家學道して、四梵行を行じ、命終して已後、梵宮に生ぜり。其の衆中に於て、若し人等有りて、唯十善を持するも、出家せざる者は、彼等人輩は、多く人天に生れ、流轉して行けり。是の摩訶迦葉は、彼の時中に、是の如き方便もて、衆多の人の爲めに、大利益を爲しぬ。過去世の因緣力を以ての故に、今も亦復爾り。衆の人民の爲めに、大利益を作す。諸比丘、是の摩訶迦葉比丘は、未來世の彌勒世尊の法敎の中にも、亦多人の爲めに大利益を作さん』。

時に諸比丘、佛に白して言さく、『世尊、是の摩訶迦葉は、彼、云何が當に利益を作すべきか』。佛、諸比丘に告げて言はく、『諸比丘、是の摩訶迦葉は、我が涅槃後、我が法及び諸戒律を攝護して、久しく世に住せしめ、當に法會を作すべし。其の形壽を盡し、將に命終せんとする時、山間に入り、神通力を以て、此の身を住持し、此の如き願を起さん、「願はくは我が此の身、散壞せしむるなからん。乃至、彌勒如來・多陀阿伽度・三藐三佛陀出でて、我が身を見たまはんを」。是の思惟を作し已り、遂に身命を捨てて、無餘涅槃に入るや、彼の涅槃の後、二山は還合せり。後に於て、彌勒の阿耨多羅三藐三佛陀を得たまはん時、廣く法敎を顯はさん。彼の時の間に於て、彌勒世尊は、是の大迦葉の舍利を憶念し、憶念を生じ已りて、諸比丘に告げて、是の如き言を作さん、「汝等比丘、釋迦牟尼・多陀阿伽度・三藐三佛陀の聲聞弟子、少欲知足、頭陀第一者の所謂摩訶迦葉を見んと欲するや不や」。彼等比丘、白して言さく、「唯然り、世尊、我等見んを樂ふ」。

爾の時、彌勒如來・阿羅漢帝・三藐三佛陀は、無量の千衆に、左右圍遶せられて、彼所に至らん。彼處に至り已る時、彼の兩山、即便ち兩開せん。爾の時、彌勒・多陀阿伽度・三藐三佛陀は、大迦葉

【一】大迦葉の入滅並に彌勒佛時に舍利出現するに就いての懸記。

【二】Arahat

比丘の舍利の、散ぜず壞せずして、唯僧伽梨を著するを見、見已りて諸比丘に告げて言はく、「諸比丘、こはこれ釋迦・多陀阿伽度・三藐三佛陀の聲聞弟子の、頭陀第一なる大迦葉と名くる、卽ち其の人也」と。爾の時、彌勒・多陀阿伽度・三藐三佛陀は、彼處に在りて、諸比丘の爲めに、其の法を說きて、是の如き言を作さん、「諸比丘、迦葉比丘の所行是の如し。我是の如く敎ふ。汝等、今應に迦葉比丘の所行の如くなるべし」と。爾の時、衆中の多千比丘は、是の如き法に乘じ、是の如き法を行ずること、摩訶迦葉比丘の行ずべき所の如けん。彼の衆中に於て、無量千數の衆等は、彼の法中に於て、當に淸淨の法眼を得べし』。

佛、諸比丘に告げたまはく『是の如き次第もて、是の大迦葉比丘は、當來時に大利益を爲さん。諸比丘、我今汝等に誡勸す、大迦葉比丘を學び、願はくは汝等の行、迦葉比丘の如からんを』と。

[一] 跋陀羅夫婦因緣品第四十八

爾の時、跋陀羅迦卑梨耶女(Bhadrakapilānī)は、善師を得ざるを以て、遂に外道波離婆闍迦(parivrājaka, 遊行者)の所に至り、出家學道し、精勤修習して、彼の法を成就し、四禪を尅獲し、五通を具足し、彼の法中に於て、大名稱を得、威力を成就しぬ。

爾の時世尊、已に女人に開きて、其の出家を聽したまふ。時に摩訶波闍波提(Mahāprajāpatī)、五百の釋女と共に、[二] 皆悉く出家して、佛法を光顯し、比丘尼衆(bhikṣuṇī-saṅgha)を建立す。彼の時の間に、長老大迦葉は、是の思惟を作す『我、往昔、已に跋陀羅迦卑梨耶女に許せり。善敎師を得ば、要ず當に相示すべく、必ず汝をして出家學道せしむべし』と。復、是の念を作す『彼の跋陀羅迦卑梨耶女は、今何處に在るか』。卽便ち定に入りて、是の女を觀察せんとて、淸淨なる天眼の、人眼に過ぐるを以て、是の女を觀見するに、彼の波離婆闍迦外道の處に在りて、出家學道し、恒河

【一】大迦葉の妻の出家因緣並に其本事を明す。

【二】「爲五百釋女」とするも、爲は共の誤ならん。

河岸の處に住在して、外道の行を修む。見已りて卽ち一箇得通の比丘尼を喚び來り、告げて言ひて曰ふ『善い哉、姉妹、汝若し時を知らば、其の跋陀羅迦卑梨耶女は、波離婆闍迦外道の所に於て、出家學道し、今、恒河河岸の所に在り。善い哉、姉妹、汝應に彼に詣り、實の如く告げて言へ、「善い哉、姉妹、汝の夫迦葉は、我と共に師を同じくし、出家學道す。汝も今亦彼所に往詣し、我が師の邊に於て、出家學道して、梵行を修行すべし」と』。

時に彼の得通比丘尼、長老摩訶迦葉の是の如き語を聞き已りて、譬へば壯士の臂を屈伸する如き頃に、彼の比丘尼、風の如く速疾かに、舍衛城より、其の身相を沒して、遂に跋陀羅迦卑梨耶、波離婆闍迦外道女の前に於て身を現じ、却いて一面に住在し、彼の比丘尼、卽便ち波離婆闍迦外道の女を慰問し、慰問し已訖りて、復告げて言はく『善い哉、姉妹、汝應に時を知るべし。汝の夫迦葉は、我と師を同じくし、出家學道し、梵行を修行す。汝も今亦彼所に往詣し、我が師の邊に於て、出家學道して、梵行を修行すべし』。爾の時、跋陀羅迦卑梨耶、波離婆闍迦外道女、彼の比丘尼に問ひて言はく『善い哉、姉妹、汝等の敎師は、當に何に似たるべきか』。是の語を作し已るや、彼の比丘尼、跋陀羅外道女に報じて言はく「善い哉、姉妹、我等の敎師は、三十二大人の相を以て、其の身を莊嚴し、八十種好・十八不共佛法・十力・四無所畏・大慈大悲を具足し、[三]無邊の戒衆具足し、無邊の定衆具足し、無邊の智慧衆具足し、無邊の解脫衆具足し、無邊の解脫知見衆具足す。我が彼の大師の、一切の聲聞、諸の弟子等も、亦復是の如く、戒衆具足し、定衆具足し、智慧衆具足し、解脫衆具足し、解脫知見衆具足す』と。時に彼の比丘尼、跋陀羅迦卑梨耶女の前に於て、是の如く是の如く、佛の功德及び聲聞弟子を歎ず。時に彼の跋陀羅迦卑梨耶外道女、聞き已りて遂に如來及び比丘僧の所に於て、心に清淨を得、清淨を得已りて、彼の比丘尼に告げて言はく『善い哉、姉妹、若し是の如くんば、我も當に隨つて去るべし』。時に彼の比丘尼、跋陀羅迦卑梨耶外道女に語りて言ふ、

【三】戒・定・慧・解脫・解脫智見の五分法身。

『善い哉、姉妹、我が神通に乘じ、相隨ひて去れ』。爾の時、跋陀羅、彼の比丘尼に報じて、是の如き言を作す『善い哉、姉妹、然るに我が身に自ら神通有り』。爾の時、彼の比丘尼、跋陀羅迦卑梨耶外道女と共に、彼を發引し、亦壯士の臂を屈伸するが如き頃に、恒河の所より、即便ち身を沒し、祇陀林 (Jetavana) 中に於て、忽然として出現し、佛所に往詣す。

其の跋陀羅迦卑梨耶外道女、遙に世尊の、端嚴殊妙にして、乃至、猶ほ虚空を衆星の莊嚴するが如きを見、見已りて心に清淨を得、即ち佛前に至り、到り已りて佛足を頂禮し、而して佛に白して言さく『善い哉、世尊、我に出家を聽し、我に具戒を授けたまへ』。爾の時世尊、阿難に告げて言まはく『長老阿難、此の跋陀羅迦卑梨耶外道女を將て、摩訶波闍波提憍曇彌に付囑し、勅敎して言ひて曰へ『此の跋陀羅迦卑梨耶外道女を、敎へて出家せしめ、具足戒を授けよ。是の女は當に神通具足し威力並備するを得べし』。爾の時長老阿難、佛の勅命を奉じ、佛に白して言ひて曰ふ『世尊の敎の如くして、敢て違せじ』とて、遂に彼の女を將て、摩訶波闍波提憍曇彌比丘尼の所に向ひ、到り已りて如上の事を具陳す。

爾の時、摩訶波闍波提憍曇彌比丘尼、跋陀羅迦卑梨耶外道女を度して、出家を得しめ、具足戒を授くるや、具戒未だ久しからずして、空閑處に至り、獨り自ら安靜にして、諸濁を遠離し、精勤苦行し、心、放逸ならず、思惟して住しぬ。

爾の時、跋陀羅迦卑梨耶外道女は、既に出家するを得、具足戒を授かり、乃至、心、不放逸に、思惟して住する久しからず、彼の衆の、諸善男子善女人等が、正信もて出家し、無上の梵行を求めて、現に法を見るを得、自ら神通を得、所作已に辦じて、安樂住を得、口に自ら唱へて『生死已に斷じ、梵行已に立ち、所作已に辦じて、後有を受けず』と言ふ。是の長老女、是を見知し已りて、遂に阿羅漢果を得、心に解脫を得たり。世尊復記して、諸比丘に告げ、是の如き言を作したまふ、

『聲聞比丘尼の、宿命を識る中にて、是の跋陀羅迦卑梨耶比丘尼を、最も第一と爲す。諸比丘尼の、凡そ諮問する所を、皆能く記別せん』。

爾の時、彼等諸比丘尼衆、大に希有の想を生じ、各各嗟歎すらく、『希有なり、希有なり、是の跋陀羅迦卑梨耶比丘尼や。大衆中の諸比丘尼は、久しく已に出家して、梵行を修行するも、未だ是の如く捷疾かに神通を得ること、跋陀羅迦卑梨耶比丘尼の如くならず』。爾の時、彼の比丘尼衆、心に疑有るが故に如來――能く疑惑を斷じて、一切實義を達解せる者――の所に往詣し、到り已りて佛足を頂禮し、却いて一面に住し、一面に住し已りて、彼の諸比丘尼衆、佛に白して言さく、『世尊、此の跋陀羅迦卑梨耶比丘尼は、往昔の時、何の善根を作してか、今に於て大富の家に生れて、資財具足し、乃至、一切乏少する所無く、身相端正に、衆人樂見して、觀るもの厭くこと無く、世に希有なる所にして、衆相を具足せるぞ。復何の緣を以てか、出家を得て、諸の戒行を具し、疾く神通を得、世尊授記して、諸聲聞比丘尼衆弟子の中に於て、宿命を識るは、是の跋陀羅迦卑梨耶比丘尼を、最も第一と爲したまふぞ』。

是の語を作し已るや、佛、諸比丘尼に告げて、是の如き言を作したまふ、『[四]諸比丘尼、我念ふに往昔波羅㮈城中に、二女有り、共に親友たり。一は大富長者の女、二は大姓婆羅門の女なり。爾の時、彼の婆羅門大種姓の女、彼の大富長者の女に請ぜられて、其の舍宅に至りぬ。時に迦葉如來・多陀阿伽度・三藐三佛陀、大富長者の家に詣りたまふ。時に彼の大富長者の女、迦葉如來の、已が舍に詣りたまへるを見、卽便ち舍を出で、世尊を迎逆ふ。時に彼の婆羅門の女、出で迎ふるを肯んぜず。時に彼の大富長者の女、大婆羅門の女に告げて、『善い哉、姉妹、汝何を以ての故に、世尊を迎へざるか』。彼の女、之に報じて言はく、『善い哉、姉妹、我手に物無し。云何ぞ空手にして、佛所に往詣せん。今、佛の邊に向ひ、何等の事を以てか、自ら恣に佛を迎へん』。爾の時大富長者の女、彼の女

【四】跋陀女本事の第一。

に報じて言はく、「善い哉、姉妹、汝但佛を迎へよ。如來は必ず入りたまはん」。爾の時、大婆羅門の女、遂に一蓋を造り、衆寶もて莊嚴し、細氎の衣を以て、其の上を彌覆し、復種種の諸花鬘等を以て、四散垂下せしむ。

爾の時、迦葉如來・阿羅訶・三藐三佛陀は、晨朝時に於て、日東方に在るころ、彼の女を愍みたまふが故に、衣を著け鉢を持し、彼の大富長者の女の家に詣る。爾の時、婆羅門大姓の女は、彼の寶蓋を持ちて、迦葉如來・阿羅呵・三藐三佛陀に奉獻し、奉獻し訖るや、復偈誦を以て、之を說きて曰さく、

「種種の寶蓋は金もて柄と爲し　微妙細衣は花もて上を覆ひ　丈夫大威德に迎奉す　唯願はくは
世尊哀みて受納したまへ」

爾の時、迦葉如來・阿羅呵・三藐三佛陀、彼の女を愍みたまふが故に、其の寶蓋を受けたまふ。汝等比丘尼、心に疑を作す勿れ。彼の時、寶蓋を施せる女は、豈に異人ならんや。卽ち跋陀羅迦卑梨耶比丘尼是なり。

[五]諸比丘尼、更に因緣有り。我念ふに、往昔還此の波羅捺城に、一大富長者有り。其の彼の長者に、駈使の女有り。彼の時の間に、一辟支佛有り。波羅捺大城に依りて住しぬ。爾の時辟支佛、晨朝時に、日東方に在るや、衣を著け鉢を持し、大長者の舍宅に詣りて食を乞ふ。爾の時使女、辟支佛の、漸進して來り、威儀庠序として、進止に方有るを見、爾の時使女、心に淸淨を得、淸淨を得已るや、速かに家中に詣り、長者の婦の邊に向ひ、白して言さく、「善い哉、聖女、一比丘有り、門に在りて食を乞ふ」と。時に長者の婦、髮を梳りて坐し、其の左手を以て、髮を擧げて遙に彼の辟支佛を看る。是の辟支佛は、形體醜陋にして、身、正直ならず。時に長者の婦、見已りて卽ち彼の使女に告げて言はく、「我今是の如き醜陋不正の人を喜ばず、況んや食を與ふるをや」と。是の時使女、復、

【五】跋陀比丘尼本事の第二。

彼に白して言はく、「善い哉、聖女、但與へよ、但與へよ、此の仙人に食を。是の如き人は、何ぞ必ずしても端正ならん。但心の賢きを取れ」と。時に長者の婦、復是の言を作しぬ、「我、實に是の如き人を憙ばず。云何ぞ我をして食を布施せしむるか」。使女、復言はく、「聖女、今若し仙人に食を與ふるを憙ばずば、但願はくは我に一日の食料を與へよ。我、自ら廻施せん」。時に長者の婦復是の言を作す、「善い哉、姉妹、汝今既にこれ我が家の作使なり。汝自らの分を取り、意のままに與へられよ」。爾の時、使女、長者の婦の邊に於て、自分の食を取りて、尊者辟支佛に奉獻す。

諸辟支佛に、是の如きの法有り。神通力を以て、衆生を教化し、餘の法を以てせず。時に辟支佛、使女の邊に於て、憐愍を生ぜるが故に、奉ずる所の食を受け、即ち彼の前に於て、空に騰りて去る。時に彼の使女、辟支佛の、神通力を以て、空を飛騰して行けるを見、既に此を見已り、歡喜踊躍、身心に遍滿して、自ら勝ふる能はず。十指掌を合して、遙に即ち頂禮し、彼の尊者辟支佛陀に向ひ、遂に是の願を起し、口に即ち唱へて言さく、「願はくは我、將來に是る好師、或は是に勝れたるに値ひ、彼の所說の法を、願はくは速かに領悟し、生生世世、惡道に墮せず、醜陋にして不正の身を得る、此の仙人の如からしむる勿らん。所以は何に。醜陋を以ての故に、食を乞ふも得さればなり。我、所生の處、一切時中、憙ぶべく端正に、衆の樂觀する所たらんを」と。

爾の時彼の長者の婦、彼の尊者辟支佛の、大神通を現じて、空に騰りて去るを見、見已りて彼の使女に告げ、言ひて曰ふ、「善い哉、姉妹、汝我に此の如き功德を與ふべし。我は今倍して汝に食を與へん」。時に彼の使女、長者の婦に白して、是の如き言を作す、「善い哉、聖女、我は與ふる能はず」。時に長者の婦、復是の言を作す、「善い哉、姉妹、願はくは汝我に此の如き功德を與へよ。我、汝に食を與ふること、前に兩倍せん」。彼の使女言はく、「亦與ふる能はず」と。是の如くして、三分・四分・五分・十分・二十分・三十分・四十分・五十分なるも、悉く與ふるを肯んぜず。時に長者の婦復使女に

告ぐらく、「善い哉、姉妹、汝今我に是の如き功德を與へよ。我今汝に一百分の食を與へん」と。使女言ひて曰ふ、「亦、與ふる能はず」。

爾の時彼の長者の婦、卽ち瞋恨を生じ、便ち之に告げて曰ふ、「汝、何を以ての故に、故に我が勅に違する」とて、遂に使女を捉へ、苦加打縛す。時に彼の使女、遂に卽ち高聲に大啼哭を作す。爾の時彼の大長者、外より入り來り、彼の使女の啼哭する是の如きを見、之に問ひて曰ふ、「賢者、何の故にか、此の如く啼哭する」。時に彼の使女、卽ち長者に向ひ、前の情狀を說く。爾の時長者、便ち瞋恨を生じて、卽ち己が婦を喚び、衣服及び諸の瓔珞を辨かしめ、復告げて言ひて曰ふ、「我、既に汝をして家資を檢校せしむるに、乃ち沙門婆羅門有りて、家に詣りて食を乞ふに、汝與へず」。是の因緣を以て、駈りて堂を出でしめ、小室弊陋の處に安置し、卽ち使女を召して洗浴せしめ、婦の瓔珞衣服の具を以て、悉く使女に授け、卽ち彼の女をして、倉庫の門を開かしめ、財寶を顯示して、之に告げて曰ふ、「賢者、是の如き錢財物中、若し沙門婆羅門等有り、若し乞ふ有らば、任隨に施與せよ。限閡を爲す莫かれ」と。

汝等比丘、意に於て云何。彼の時の長者家内の使女とは、豈異人ならんや。斯の疑を作す勿れ。此は卽ち跋陀羅迦卑梨耶比丘尼、是なり。時に彼の使女、辟支佛の所に、淸淨の心を生ぜるを以ての故に、其の終るに隨ひて、忉利天に生じ、憙ぶべく端正に、衆の樂觀する所、最勝最妙にして、忉利天宮殿の處に於て玉女中に、勝る有るもの無かりき。而して彼の天上に、四天子有り、各各諍競して、彼の玉女を求め、以て妻と爲さんと欲し、各各言ひて曰ふ、「是の玉女、當に與に婦と爲すべし」と。

時に天帝釋、四天子の、各各諍競するを見、卽ち勅して言ひて曰ふ、「仁者、汝等、各競ひて此の女を取りて妻と爲さんと欲す。汝等宜しく各隨ひて便ち偈を說くべし。偈の勝れたる者に、卽便ち

相與へん」。爾の時彼の四天子、天帝釋に白さく、「善い哉、天王、唯願はくは天王、前に偈を說け、我等は當に說くべし」。時に彼の帝釋、卽ち偈を說きて言ふ、

「行坐に恒に思念し　寢臥に常に樂しむ無し　我睡眠に著する時のみ　爾も乃ち心より放捨す」

爾の時、彼の四天子の內、一天子有り、復偈を說きて言ふ、

「天王、汝は快樂なり　睡眠に安穩を得　我には猶ほ戰鼓の聲の如く　常恒に我を攪亂す」

時に第二の天子、復偈を說きて言ふ、

「戰鼓を擊つ聲の如きは　是の聲や互に有無なり　我には耳に近く酪を搖かすが如く　我を攪亂して息まず」

時に第三の天子、復偈を說きて言ふ、

「搖酪は時有りて　急なる有り、亦疾き有る容し　我が慾の爲めに亂さるるは　狀炎日の光の如し」

時に第四の天子、復偈を說きて言ふ、

「汝等は皆安樂なり　善く巧に能く偈を說く　我今自らを知らず　活くると爲せんか當に死すべしと爲んか」

爾の時、天帝釋、第四天子の心、慾に耽著するを見、卽ち偈を說きて言ふ、

「是の人は命を捨てんと欲す　久しからずして自ら當に死して　恐らくは天處の樂を捨つべし　宜しく速かに彼の女を授くべし」

時に彼の天衆、更に共に評論して、遂に彼の女を授く。時に彼の使女、是より已來、惡道に墮せず、周廻往返して、天人の處に於て、無量の生を經、最後の生に於て、迦毘羅婆羅門の家に生れて、多饒なる財寶あり、資財無量なり。是の跋陀羅迦卑梨耶比丘尼は、往昔生れて彼の大婆羅門の家に

在りて女たりし時、迦葉如來・三藐三佛陀の所に於て、雜寶の蓋を施せるに由り、復往昔長者の家に在りて使女たりし時、彼の尊辟支佛に食を施して、一たび飯を喰ませしに因るを以ての故に、而して發願して言ふ、「願はくは我が生るる所、憙ぶべく端正に、衆の樂見する所たらんを」と。彼の業果の因緣力を以ての故に、生生の處に、喜ぶべく端正に、衆人樂見し、最勝最妙にして、人の慕ふ所と爲りぬ。彼の時に緣りて、又復願ひて言ふ、「我をして將來、惡道に墮する勿からしめんを」と。是の業報の因緣力を以ての故に、生生の處、三塗に落ちず、天人處に周旋往返して、常に快樂を受けたり。彼の時を以て、更に乞願して言ふ、「我をして、將來願はくは是の如き教師或は此に勝るる者に値はしめ、彼より法を聞き、皆能く領悟せんを」と。是の業報の因緣力を以ての故に、今我に値ふを得、復出家して衆戒を具足するを得、亦復能く速疾に神通を得たり。我、爲に授記す、「聲聞衆比丘尼中に於て、宿命通を得たる、最第一の者は、所謂、跋陀羅迦卑梨耶比丘尼、是なり」と。是の跋陀羅迦卑梨耶は、昔、善根を種ゑぬ。彼の善根の因緣力を以ての故に、是の故に跋陀羅迦卑梨耶比丘尼は、今富貴なる大婆羅門の家に生れ、端正憙ぶべく、乃至、我が聲聞の衆比丘尼中、往宿命を憶ふこと、最も第一たるなり』。

爾の時諸比丘、佛に白して言さく、『世尊、希有なり、婆伽婆、是の跋陀羅迦卑梨耶比丘尼は、長老摩訶迦葉に隨順して、出家を得已りて、善能く出家の法に隨順することよ』。是の語を作し已るや、佛、諸比丘に告げて言はく、『諸比丘、是の跋陀羅迦卑梨耶比丘尼は、但に今世のみ摩訶迦葉に隨順して出家せるに非ず。過去の世にも、亦復是の如く隨順して出家せり』。諸比丘、佛に白して言さく、『世尊、此の事云何、願はくは爲めに解說したまへ』。

[六]佛、諸比丘に告げたまはく、『我念ふに、往昔一貧人有り、田業を修營せり。時に貧人の婦、家より出で、食を以て夫に餉らんとて、一河邊に到りて、一貧者辟支の、樹下に跏趺し、端身正念にし

【六】跋陀比丘尼、本事譚の第三。

て、身心不動なるを見、時に彼の貧婦、辟支佛を見て、心に清淨を生じ、十指掌を合し、頭頂もて足を禮し、敬意もて前に在り。其の夫、田に在りて、遙に其の婦の、家より出でて、河岸の下に入れるを見れども、渡る處を見ず。卽ち心念を起す、「誰か彼の邊に在る。誰と共にか住して、卽ち來らざる。我、今飢渴して、甚大に疲頓し、早く至らんを思欲す」と。是の因緣を以て、彼の夫卽便ち大瞋恚を生じ悵怏として樂しまず、杖を執りて彼に向ひ、彼處に至り已りて、辟支佛の安坐禪定せるを見、見已りて卽ち是の如き思惟を作す、「我が婦、今彼の沙門と與に、共に世事を爲せること、決んで疑無し」。時に彼の人、大瞋恨を生じ、杖を以て彼の婆私瑟吒(Vasiṣṭha)尊者辟支佛を打つ。

爾の時辟支佛、卽ち彼の岸より、神通力を以て、空に騰りて飛行す。時に彼の貧婦、卽ち夫に白して言はく、「咄なる哉、汝が是の如き大罪を造れることや。仙人に咎無し。何の義を以ての故に、横に惱亂を生ぜる。今此の大僊、戒德具足し、妙法を行じ、大威德有り、大神通を具す」。爾の時貧人、辟支佛を打ち已り、尋いで卽ち悔を生じ、既に悔を生じ已りて、卽ち婦に告げて言ふ、「善い哉、姊妹、汝今は共に出家して、同じく梵行を修すべし。所以は何に。我が今の是の罪は、少因緣を以ては除滅すべからず」。婦、卽ち、夫に報へて是の言を作して曰ふ、「善い哉、聖子、敢て敎に違せじ。今我れ二人、捨家出家せん」。時に彼の二人、心を齊しくして出家し、既に出家し已りて、二人修行し、慈心を成就し、身命を捨て終りて、終に梵處に生じぬ。汝等比丘、意に於て云何。彼の昔時に于て、是の如き貧人の、田業を營める者は、豈異人ならんや。摩訶迦葉比丘これなり。彼の時の貧人の婦、辟支佛に供養し、夫の爲めに食を餉り、乃至、慈心を成就し、身命を捨て終りて、梵宮に生ぜる者は、豈異人ならんや。卽ち跋陀羅迦卑梨耶比丘尼これなり。彼の時、夫に隨ひて出家せるを以ての故に、今も亦復摩訶迦葉に隨逐して出家し、敎に違せざるなり」。

舍利目連因緣品第四十九の上【一】

【二】爾の時、摩訶陀聚落に、王舍城(Rājagṛha)を去る遠からずして、一村柵有り、那羅陀(Nālada, Nālanda)と名く。彼の村の中に、一巨富大婆羅門の、名けて檀孃耶那(Dhānyayana)(〔隋〕に吉至といふ。)といふ有りて、彼の村に住在す——又師有りて説く、『彼の婆羅門を、名けて檀那達多(Dhanadatta)(〔隋〕に財與といふ。)と曰ふ』と。——彼の婆羅門は、甚大巨富、多く資財有り、毘沙門の如くにして、一種も異る無し。彼の婆羅門、八子を具有す。其の第一子は、名けて優婆低沙(Upatiṣya)といひ、其の第二子は、名けて大膝(Mahākauṣṭhila)といひ、其の第三子は、名けて純陀(Cunda)といひ、其の第四子は、名けて姜叉頡唎拔多(Kāṅkṣa-revavata?)といひ、其の第五子は、名けて闡陀(Canda?)といひ、第六は、名けて閻浮呵迦(Jambukṣādaka?)といひ、第七は名けて憍陳尼(Kauṇḍinya?)といひ、第八は名けて蘇達離舍那(Sudarśana?)といふ。是を八子と名く。復一女有り、名けて蘇尸彌迦(Suśimikā?)といふ。是の女、彼の波離婆闍外道法中に於て、出家修道す。——【三】摩訶僧祇師、復言ふ、『彼の婆羅門に七子有り、所謂、第一は名けて達摩(Dharma)といひ、其の第二は名けて蘇達摩(Sudharma)といひ、第三は名けて優波達摩(Upadharma)といひ、其の第四は名けて堤沙(Tiṣya)といひ、第五は名けて優波堤沙(Upatiṣya)といひ、第六は名けて頡唎拔多(Kāṅkṣā-revata)といひ、第七は名けて優波波離拔多(Uparevata?)といひ、是を七子と名く』。——其の優波堤沙摩那婆は、兄弟の內にて、最も大に處ると爲す。善く能く誦習して、亦、他人に教へ、四韋陀(Veda)に於て、曉悟せざる莫く、誦習成就し、善能く自餘の諸論、所謂、尼犍陀(Nighaṇṭa,字彙)鷄晝婆(Kaittubha,智明)等を解釋し、及び其の名字を、一一能く釋し、宿世の事に明にして、巧に能く分別し、五明處に於て、曉了無礙に、授記別論を、縺練して心に在り、六十四能を、具足成就し、善く能く

【一】舍利弗目連二大弟子の出家因緣及本事を記す。

【二】舍利弗の俗姓。

【三】僧祇の說とするは、Mahāvastu, III. p. 56. の說に最も近し。

大丈夫の相に曉達す。

時に摩那婆、本性柔輭に、其の心賢直にして、常に慈悲を懐き、深く世事を厭ひ、昔先の罪を悔い、已に過去に於て、多く諸佛に値ひて、諸善根を種ゑ、衆事を成就し、巧に能く熏習して、常に精勤を樂しみ、食に於て足るを知り、煩惱を厭背して、涅槃に向ひ、順理無礙にして、能く諸有を惡み、衆行成就し、結縛を朽壞して、成熟地に至り、唯一生在るのみ。聰明妙巧に、細心思惟して、諸法に明了に、童子の父母、家業を營事して、皆悉く諮問するに、爾く乃ち造作しぬ。

〔四〕爾の時、王舍大城の、城を去る遠からずして、一聚落有り、拘離迦(Kolika)と名く。彼の村内に、一種姓大婆羅門居士有り。是の大居士、彼の村に依りて住し、大富饒財に、乃至、彼の家は、猶ほ毘沙門天王の宮殿のごとくにして、異有るなし。彼の婆羅門は、一子を產生して、拘離多(Kolita)と名く。顏容端正にして、衆の樂觀する所、一切の書論、皆悉く通曉して、復能く他に敎へ、乃至能く丈夫の相を了す。其の優波坻沙童子と、共に親友たり。時に彼の二人、互に相愛念して、常に歡喜を懐き、和顏悅色に、若し少時の別れにも、大に愁惱を生じぬ。彼等は、往昔千生の中より、愛戀相縛せるなり。而して偈有りて言ふ。

『宿世の因果相熏習し　二心展轉して互に相親しむ　是の如き等の愛心を以ての故に　猶ほ蓮花の水に生在するが如し』　優波坻沙と拘離多と　彼の二は遞互に相愛敬し　若し少時を經て相見されば　腹中煩惋して自ら懊惱す』

【四】目犍連の俗姓。

卷の第四十八

舍利目連因緣品第四十九の下

[一]爾の時、王舍大城の城を去る遠からずして、一山有り、祇離渠呵(Gṛdhrakūṭa?)と名く。彼の山中に、常に一時施設の大會有り、其の會を卽ち祇離渠呵と名く。復、山有り、離師祇離（Ṛṣi-giri）と名け、亦常に會を設く。其の會も亦離師祇離と名く。復一山有り、倍呵羅（Vaibhāra-giri）と名く。是の如く般荼山(Pāṇḍava)にも、是の如く毘富羅山(Vipula)にも、各一會有り、其の會も亦毘富羅等と名く。是の如く彼の山、祇離渠呵に、節に隨ひて會を設け、彼の會處に、大衆を聚集す。時に無量千數、無量百千數、乃至億數の人民有りて交集し、種種の乘——所謂象馬車步——に乘り八方より來りて、彼の會を觀んと欲す。其の王舍城の一切人民、皆出でざる莫し。彼の時の間に、王舍城那羅陀村を去り、拘離迦聚落を去ること、半由旬ばかりにして、時に低沙童子、是の思惟を作す『我今、祇離渠呵處に至り、彼に詣りて觀看すべし。若し彼に至らば、我をして必ず當に一事——心に厭離するを謂ふ——を剋獲せしめん』。時に優波低沙童子、四象車に乘り、那羅陀聚落より出で、祇離渠呵設會の所に至る。觀看せんが爲めの故なり。其の拘離多童子も、亦是の念を作す、『我今、彼の祇離渠呵大會の處に往詣すべし。乃至、心に厭離を生ぜん』。其の象の背に乘り、漸進して行く。是の童子の前に、諸人をして戲れ、或は歌ひ、或は舞はしめ、拘離迦聚落より出でて、祇離渠呵設會の處に至る。觀看せんが爲めの故なり。

時に彼の二人、顏容端正にして、能く人心を悅ばしめ、乃至、技藝の了達せざる莫く、衆の首たるに堪ふ。時に彼の會中に、諸の高座を敷く。彼の人至り已りて、各高座に昇る。是の時優波低沙童子、彼の大衆の、種種の伎を以て、諸の音樂を作し、或は歌ひ、或は舞ひ、嬉戲受樂するを見、

【一】低沙、拘離多の二人、祭會を見て厭離の心を生ず。

既に之を見已りて、卽ち是の念を作す、『此の事は希奇未曾有なり。今この人民や、乃ち能く此の苦惱の中、諸の穢濁内、衰老垢の處に於て、樂を受けて放逸す。是の如き病垢に、安隱有ること無く、是の如き死穢に、命の久長なる非ざるに、是の如き大衆は、樂想を生じ、放逸自恣にして、種種に歌舞し、衆の音樂を作し、諸の戲樂を受く』と。時に優波低沙、大衆を觀已り、是の如き念を作す、『百年を過ぎ已らば、是の如き大衆は、一も在ること無けん』と。是の念を作す時、卽ち悔恨を生じて、欣慕を生ぜず。便ち勝座より、安徐として起ち、漸く會處を離れて、空閑林に至り、一樹下に詣り、悵怏として坐し、諸根閉塞して、禪定を思惟す。

時に彼の會中に、一技人有り、戲弄を以ての故に、大衆を喜ばしむ。時に拘離多童子、彼の大衆の呵呵大笑するを見、卽ち是の念を作す『今此の大衆も、百年を已らば、頷車頬骨、更に合ふべきや不や』。是の念を作し已り、大憂苦を生じ、貪樂を生ぜず。便ち坐より起ちて、優波低沙童子を覓め、卽ち念言を作すらく、『優波低沙童子、今何所に在るか』と。四向顧覓して、遙に優波低沙童子の、彼の林樹に在り、安坐して思惟し、其の心樂しまず、諸根閉塞し、思惟念定するを見、顧瞻して見已るや、卽便ち彼に詣り、白言して曰ふ、『汝、今、何の故に、其の心悅ばず、此の處に於て、獨坐思惟するか。汝今、災怪不祥の惱殃苦事無きを得るや』。卽ち偈を說きて言はく、

『鼓瑟等の音聲　男女歌詠の聲　應に是の妙音を聽くべし　何の故に樂を生ぜざる』　此の時應に歡喜すべし　憂惱を懷くを得る勿れ　これ是の樂を受くる時　應に啼哭を作すべきに非ず』
但是の音聲の　天の玉女の作す如きを聽け　此の會は天の會の如し　何の故にか情欣ばざる』

爾の時、優波低沙童子、拘離多童子に告ぐ、『奇なるかな、親友、汝、是の如き大會の事を見るや不や。種種の音聲を以て歌詠し、大喜樂を受くるも、是の大會衆、百年の已るや、一の在るもの有ること無けん』。卽ち偈を說きて言ふ、

『衆人の貪樂する境　是の境は救ふ能はず　諸物は久固ならず　愚癡輩は何をか樂しむ』　此の諸衆生等は　五欲の心に染著して　久しからずして地獄に墮ち　命終して灰土と成らん』　我今心内に一の欣無し　恐怖愁憂甚だ增長す　汝等は音樂を樂しむ有りと雖も　我が如きは意に法を樂しむ心を見るのみ』　天・人・修羅・緊那羅は　多事・心中に歡樂を受け　厭離する能はずして便ち命盡く　是の故に我應に法行を修すべし』

爾の時拘離多童子、復優波低沙童子に白して言はく、『優波低沙、我の心念も、亦復是の如し』。卽ち偈を說きて言ふ、

『苦樂相同じくするものは　憂喜も亦復同じくす　[二]智者の讃歎する所　今我も亦汝に同じ』　汝の欲して心に好む所　我が意も亦當に隨ふべし　寧ろ汝と共に死すべけんも　汝に離れて生くるを欲せず』

爾の時拘離多童子、復優波低沙童子に問ひて言はく、『我等は今何の所作をか欲せん』。時に優波低沙童子、拘離多童子に報じて、是の如き言を作す、『知友、若し爾らば、今我等應當に出家して勝甘露を求むべし』。時に拘離多童子、便ち優波低沙童子に報じて、是の如き言を作す、『汝の意を樂むが如く、私も亦隨喜す。優波低沙よ、我等は今、既に捨家し、宜しく此より去りて出家を求索すべし』。時に優波低沙童子、拘離多童子に告げて言はく、『汝、拘離多、應當に時を知るべし。我等は今、衆人に識知せらる。若し家にして許さずば、誰か我等を度せん。彼は父母の留難心を生ぜんを恐るればなり。我等、今宜しく父母に諮るべし』。時に二童子、遂に衆會より還りて家中に至る。

[三]爾の時、優波低沙童子、父母の所に詣り、白して言ひて曰ふ、『善い哉父母、我、今意に樂んで出家せんと欲す。唯願はくは聽許したまへ』。爾の時父母、私に共に評論すらく、『今家內、誰をか繼嗣と爲せん。一切の資生、誰を以てか主と爲さん。是の如く、童子を我等愛念するに、將に我を捨て

【二】智者所讃歎とは厭離心のことをいふ。

【三】優波低沙、父母に出家を請ふ。

て、出家求道せんと欲す、我に何の心有りてか、能く彼に別れん』。時に父母、共に評論し已りて、卽ち優波低沙童子に告げて言ふ『童子、我等、今日衆子有りと雖も、汝を偏愛し、暫時も見されば大憂惱を生じ、常に汝を樂見して、相離るるを欲せず。汝、生れてより來、未だ曾て勤苦せず、我等の意の如くんば、乃至、絕命するも、相離るるを欲せず。況んや我、現存するを、當に相放つべけんや。若し出家を許さんこと、終に此の事無し』。是の如く、二請し乃至三請するも、亦聽許せず。是の如く三請して、許を蒙らざるや、爾の時優波低沙童子、既に許を蒙らざるを以て、遂に一日、飮まず食はずして乃至七日なり。

爾の時、[四]父母、一切の親屬、及び諸知識、各共に集會して、父母に白して言はく、『善い哉、聖者、汝等、應に優波低沙の捨家出家を許すべし。其の人、若し捨家出家するを得ば、彼の求むる道を樂みて、活路を存すべし。身命若し存せば、汝等何ぞ見ざるを憂へんや。若し樂まずば、彼れ會ず自ら當に歸るべし。汝をして前に命終を取らしむる勿らんのみ』。爾の時、童子の父母、卽ち告げて言ひて曰ふ『若し必ず然らば、我今、聽許せん』。

[五]爾の時、拘離多童子、卽ち父母に詣り、白して言ひて曰ふ『善い哉、父母、我今、將に捨家出家せんと欲す。唯願はくは聽許したまへ』。是の拘離多の父母は、唯一息有るのみ。之を愛する甚だ重くして、暫くも捨つるを欲せず。若し少らく見されば、大憂愁を生ず。時に拘離多童子の父母、昔家內に於て、先に要契有り『汝等家內の大小、拘離多童子の邊に於て、所作有らば、違するを得る勿れ。凡そ發言する所、皆悉く命に從へ』と。時に彼等、善く時を知り已り、拘離多童子に告げて言ふ『汝の意樂に隨ひ、情の所作に任す』と。

[六]爾の時、王舍大城に、一外道有り、波離婆闍(parivrājaka,遊行者)刪闍耶と名く。住して彼の城に在り、五百の眷屬有り。爾の時優波低沙童子、及び拘離多童子、未だ歸依有らず、何に去らんを知らず。

【四】父母、この二字不用か。

【五】拘離多、父母に出家を請ふ。

【六】兩人、刪闍耶毘羅愁智子の弟子と成る。六師外道の一人なり。梵語、此にはSañjaya-vairaṭṭi-putra?

時に彼の二童子、遂に鬚髮を剃り、刪闍耶(〔隋〕に彼勝といふ。)外道の所に於て、出家して道を學ぶ。時に彼の二人、念行捷利に少欲知足にして智慧深遠なり。其の刪闍耶毘羅瑟智(〔隋〕に別異杖といふ。)の子(Sañjaya-vairaṭṭi-putra)、遂に二人に向ひ、己が道術・種種の技藝・醫方藥草・非想禪定を說く。時に二童子、既に是を聞き已りて、七日七夜にして、皆悉く通達す。時に彼の二人、是に通達し已りて、波離婆闍迦外道の所に於て、五百の眷屬に、教授の師と爲る。時に彼の二人、是の如き次第もて、大衆を主領すること、復、此の如しと雖も、內心に於て、未だ安靜を得ず。時に優波低沙童子、波離婆闍迦(〔隋〕に遠離といふ。)拘離多に告げて曰ふ、『善い哉、拘離多、此の刪闍耶波離婆闍迦の法は、究竟して苦際を窮盡せず。拘離多、汝應に我と共に更に善師を求むべし』。時に拘離多波離婆闍迦童子、優波低沙波離婆闍童子に告げて言ふ、『優波低沙の言ふ所の如くにして、我、違せざらん。然りと雖も、此の師を、亦復全く之を棄捨し、更に餘に別に覓むるを得ず』と。時に彼の二人、同じく心に誓を立て、『我等二人、若し復更に是の師より勝れて、我等の爲めに甘露勝道を說く者を得ば、必ず相啓悟せん』と。

爾の時世尊、頻婆沙羅等に因りて、十二那由他の衆生を敎化し已り、王舍城迦蘭陀竹園の內に住したまひ、大比丘衆一千人と倶なり。皆悉く髮を剃り、捨家出家せるなり。

[七]爾の時、一長老比丘有り、優婆斯那(Upasena)と名く。威儀庠序たること、諸比丘中、最も第一たり。晨朝時に、衣を著け鉢を持して、王舍城に入り、其の城中に於て、次第して食を乞ふ――[八]摩訶僧祇師は、是の如き說を作す――自餘の諸師、又復說きて言く、「時に阿輸波踰祇多(Aśvajit)(〔隋〕に馬星といふ。)晨朝時に、日の東方に在るや、衣を著け鉢を持し、城に入りて食を乞ふ。其の城中に於て、次第して食を乞ふや、威儀庠序として、進止に方有り、僧伽梨(saṅghāṭi 僧衣)及び涅槃僧(nivāsana, 內衣)を著し、食器を齎持し、皆悉く齊整に、巧に諸根を攝し、安心して外を見、諸法を思惟

【七】優波低沙、阿輸波踰祇多に會ひ、佛所に歸依心を發す。
【八】Mahāvaṃsa, III. 60. 並に初分說經は優婆斯那說なり。

し、正念して直行す』と。

爾の時、王舍大城の一切の人民、目に見る所の者、各共に評論し、而して偈を說きて言ふ、

『巧に諸根識を攝し　進止恒に靜定し　笑を含みて美言を出す　これ必ず釋種の子ならん』

爾の時優波低沙童子、彼の長老阿濕波踰祇多比丘の、王舍城に於て、次第して、食を乞ふを見るに、威儀庠序として、進止に方有り、僧伽梨及び涅槃僧を著し、食器を嚴持し、悉く皆齊整し、巧に諸根を攝し、安心して諦視し、諸法を思惟し、正念もて直行す。爲めに諸人、此の偈を說けるが故に、爾の時、優波低沙波離婆闍迦、卽ち是の念を作す、『世間の有らゆる諸阿羅漢、一切の聖人、及び成道に向ふもの、今、この大德、應に一數に在るべし。我當に彼に詣り、其に心の疑を問ふべし』。爾の時優波低沙波離婆闍迦、復是の念を作す、『若し往きて問はんこと、今は其の時に非ず。所以は何に。食を乞へるを以ての故なり。夫れ法を求めんには、應に我慢を捨つべし。宜しく應に隨逐して、何の方所にも詣るべし』。是の念を作し已り、其の優波低沙波離婆闍迦、卽ち後に隨ひて行き、去る所を觀覓す。

爾の時阿濕波踰祇多比丘、王舍大城より食を乞ひ已り、食を持つて城を出づ。時に優波低沙波離婆闍迦、卽ち大德阿濕波踰祇多比丘の所に詣り、到り已りて彼の長老阿濕波踰祇多比丘と共に、對自慰喩し、共に談說し已りて、却いて一面に住しぬ。時に優波低沙波離婆闍迦、大德阿濕波踰祇多比丘に白して言はく、『仁者、汝はこれ正師たりや、これ他の聲聞弟子たるべしと爲すや』。是の語を說き已れる時、長老阿濕波踰祇多、優波低沙波離婆闍迦に告げて言はく、『別に大師有り、我はこれ餘尊の聲聞弟子なり』。爾の時優波低沙波離婆闍迦、大德阿濕波踰祇多比丘に問ひて言ふ、『大德、汝の師はこれ誰ぞ。誰に依りて出家せる。誰の法行をか樂む』。

爾の時世尊、初めて正覺を成じたまへる時、諸人輩、皆悉く佛と號し、大沙門と爲し、『これ摩訶

沙門なり』と。是の名號を作す。爾の時阿濕波踰祇多大德比丘、優波低沙波離婆闍迦に告げて言はく、『善い哉、仁者、大沙門有り、これ釋種の子なり、釋迦種類に於て彼より出家せり。彼はこれ我が師なり。彼に依りて出家し、彼の法を憙樂するなり』。爾の時優波低沙波離婆闍迦、復大德阿濕波踰祇多に白して言ふ、『善い哉、仁者、彼の汝の大師は、顏容の端正、汝より勝るや不や。所有の德術、亦汝に勝るや』。爾の時長老阿濕波踰祇多、即ち偈を說きて言ふ、

『芥子の須彌に對し　牛跡を大海に比し　蚊虻を金翅に並ぶる如く　我と彼とも亦然り　假使聲聞は彼岸に度し　諸地を成就するも、猶ほ弟子なり　彼の佛の邊に於ては數に入らず　佛世尊は威德別なり』

『然も彼の我が師は、三世の法に於て、皆悉く明了に、無礙智を得たまふ。仁者、我が師は一切の法に於て、事、皆成就したまふ』。爾の時優波低沙波離婆闍迦、大德阿濕波踰祇多に白して言ふ、『仁者、汝の師は何等の法を說き、何等の事を論ずるか』。即ち偈を說きて言ふ、

『我は斯の威儀を見て　身心甚だ寂定なり　是の故に我が疑網を　願はくは爲めに是の事を說け』　汝今疲倦する莫かれ　我心に疑網を懷く　汝の師は何の法をか說く　願はくは爲めに之を辨說せよ』　是の婆羅門を見て　恭敬して是の問を起すに　報じて言ふ「我が師は　甘蔗種の大姓なり　一切智にして勝るもの無し　これ我が無上の師なり」と』

爾の時大德阿濕波踰祇多、優波低沙に告げて言ふ、『仁者、我生れて年幼く、法を學ぶこと初淺に、少知少聞なり。豈に能く廣說せんや。今當に汝の爲めに之を略言せんのみ』。爾の時優波低沙、阿濕波踰祇多に白して言ふ、『善い哉、大德、要略して之を說け。我が今の如きは多語を好まず』。而して偈を說きて言ふ、

『我は唯だ眞理を取る　名と句とを好まず　智者は實義を愛す　義に依りて我修行せん』

爾の時大德阿濕波踰祇多、優波低沙に告げて言ふ『仁者、我が彼の大師は、因緣の法を說き、解脫の路を談ず。我が師、偈もて是の如きの法を說く』。——摩訶僧祇師は、是　如きの說を作す。迦葉惟師は、又復別に說く。「是の義は如何といふに、仁者、我が師は是の法句を說きたまふ、

「諸法は因より生じ　諸法は因によりて滅す　是の如き滅と生と　沙門の說は是の如し」——

爾の時、優波低沙波離婆闍迦は、善く文字の法に達し、時に大德彼の阿濕波踰祇多比丘は、能く文義を解し、又能く彼の義及び文字を攝せり。九何の多きをか是とせんや。

一〇『諸法は因より生じ　彼の法は因に隨つて滅す　因緣滅するは卽ち道なり　大師の說は是の如し』

時に優波低沙波離婆闍迦、此の如き法行を觀見するの時、卽ち是の處に於て遠塵離垢し、諸煩惱を盡して、法眼淨を得、諸の有爲の法に、皆滅相を得、如實に觀知し、譬へば淨衣の、垢染有ること無く、黑膩を遠離せるが、染色を受け易きが如く、是の如く是の如く、優波低沙波離婆闍迦、此の行法を觀じ、卽ち是の處に於て、遠塵離垢し、乃至、如實に觀知する時已りぬ。彼の優波低沙波離婆闍迦は、如實に彼の諸法を觀見し已り、諸法を得已り、諸法に觀じ已り、諸法に入り已り、諸法を度し已りて復疑網無く、是非の心皆悉く滅沒して、無畏の地を得、他の教に隨はずして、自然に能く如來の法を知り已り、卽ち偈を說きて言はく、

『是の如きの法行　我の得る所の如きものは　數劫那由他にも　未だ曾て此の法を得ず』

一一爾の時優波低沙波離婆闍迦、已に諸法を見、已に諸法を得、已に智を生ずるを得、三奇木(tri-daṇḍin,行者の杖)を捨てて、衣服を整理し、大德阿濕波踰祇多に向ひ、足下に頂禮し、禮し已りて還起ち、右遶三匝して、是より別れ去り、拘離多波離婆闍迦の所に詣る。到り已るや、其の拘離多波離婆闍迦、遙に優波低沙波離婆闍迦の、面目淸淨にして、儀容光澤なるを見、見已りて白して言は

【九】（原文）是何多耶。是れ何ぞ多からんやと訓ずるも、亦然るべし。いづれにせよ略說の中に多義あるをいふなり。

【一〇】この因緣法の偈、巴利律大品一・二三・五と Mahāvastu, III. 62 と一致し、今と少異す。梵—ye dharmo hetu-prabhāva hetuntesāṃ tath-āgath āha, teṣāṃ cayo niro-dha evaṃ-vādi mahāśrama-ṇaḥ 巴—ye dhammā hetu-ppobhavā tesaṃ hetuṃ ta-thāgato āha, tesañ ca yo ni-rodho evaṃ-vādi mahāsamaṇo

【一一】優波低沙、拘離多を誘ひ、五百の弟子と共に本師删闍耶の下を辭せんとす。弟子人數、梵本「大事」は同じく五百とするも、他傳は多く三百五十とする例なり。

く、『仁者優波低沙波離婆闍迦、汝は今、諸根已に淨く、皮膚光澤に、面目清淨なり。汝、今に於て頗し甘露を證し、頗し甘露道を得たるならずや』。時に優波低沙波離婆闍迦、拘離多波離婆闍迦に告げて言ふ、『我已に甘露勝法に値遇し、甘露道を得たり』。時に拘離多、即ち彼に報じて言はく、『仁者、是の如き甘露を、誰の邊所にか得たる』。時に優波低沙波離婆闍迦、報じて言ふ、『仁者、我は彼の大沙門の邊所に於て得たり』。拘離多波離婆闍迦、復言はく、『仁者、彼の大沙門は、何等の事を說き、何等の法をか論ぜる。汝、今云何してか甘露の勝道を得たる』。爾の時優波低沙波離婆闍迦、拘離多波離婆闍迦に向ひ、偈を說きて言はく、

「諸法は因より生じ　彼の法は因に隨ひて滅す　因緣の滅するは即ち道なり　大師の說は是の如し」

爾の時拘離多波離婆闍迦、是の偈を聞き已り、即ち是の處に於て、遠塵離垢し、諸惱惱を盡し、法眼淨を得、一切の行法に、皆滅相を得、如實に能く知り、如實に能く解して、譬へば淨衣の、垢染有ること無く、黑膩を遠離せるが、染色を受け易き如く、乃至、如實に能く觀知し已り、偈を說きて言はく、

『是の如きの行法　我の今得たる所の如きは　數劫那由他にも　未だ曾て此の法を獲ず』

時に拘離多、復偈頌を以て優波低沙波離婆闍迦に告げて言ふ、

『汝は甘露に遇ひしが故に　面目淨く光澤あり　汝が是の法を讃說するや　聞き已りて淨眼を得たり』

爾の時拘離多、優波低沙波離婆闍迦に告げて言ふ、『善い哉、仁者、速かに往き速かに往かん。宜しく此より大沙門の所に到り、當に梵行を行ずべし。彼の佛世尊は、これ我が教師なり』。爾の時優波低沙波離婆闍迦、拘離多に告げて言ふ、『仁者、我等は今日恩を失ふを得ず。應に本師刪闍耶の所

に詣るべし。何を以ての故に。彼は我等に於て、多く利益を作し、先づ我が邊に、大重恩有り。我等を救度し、出家を得しめたり。應に彼に詣りて別るべし。又復五百の眷屬徒黨は、我等に依附して、行法を修學す。須らく彼に告げ知らすべし。若し彼印可せば、我も亦共に行かん』。

爾の時、優婆低沙波離婆闍迦は、拘離多波離婆闍迦と共に、彼の師刪闍耶波離婆闍迦の邊に往詣し、到り已りて白して言はく、『善い哉、仁者、我等は今、大沙門・佛世尊の所に至り梵行を行ぜんと欲す』。時に刪闍耶波離婆闍迦、優婆低沙波離婆闍迦等に告げて言ふ、『仁者、彼所に往く莫れ。我汝等と共に、此の衆を教習せん』。是の如く第二に、優婆低沙波離婆闍迦は、復刪闍耶波離婆闍迦に告げて言はく、『善い哉、仁者、我等は去りて、大沙門・佛世尊の所に至りて梵行を行ぜんと欲す』。時に刪闍耶波離婆闍迦、再び優波低沙波離闍迦に語りて言ふ、『仁者、彼所に至る莫れ。此の諸弟子を、汝に付囑し、我、今獨一邊に到り、情を縱にして預る無からん』。是の如く第三に、時に優波低沙波離婆闍迦、拘離多波離婆闍迦等と共に、刪闍耶波離婆闍迦に語りて言ふ、『我等は是の諸弟子を欲せず、但、我、唯速かに彼の師、大沙門の邊に詣り、梵行を行ぜんことを願ふ。彼の大沙門は、これ我が世尊、これ我が教師なり』。是の語を說き已り、即ち此處に於て、刪闍耶に背き、去りて還らず。

爾の時、彼の五百の波離波闍迦外道の衆は、即ち是の念を作す、『此の優波低沙・拘離多の、是の二人等は、多辯多知にして聰明細意なり。我等多年、疲勞して意を讀誦技藝呪術等の事に勵ますに、然も是の二人は、七日七夜にして、一切に通達せり。彼、凡庶に非ず。此等は應に曉に能く勝處を求むべし。若し彼の求むる處を、我も亦隨ひて求め、其の行ずる所の法を、我も亦當に行ずべく、修する所の梵行を我も亦隨ひて修せん』。是の思惟を作し已りて、便即ち隨ひて行く。時に刪闍耶波離婆闍迦、復彼の大衆に告げて言ひて曰はく、『汝等人輩、去る莫かれ、去る莫かれ』と。復、是の

如き言説もて遮斷すと雖も、留礙する能はず、遂に爾く去る。時に删闍耶波離婆闍迦、卽ち是の念を作す『今此の大衆は、必ず定めて我を捨てん』。此の大衆、捨離の因緣を以ての故に、大に愁惱し卽ち口中より、大熱血を吐きて、命終す。

〔三〕爾の時、優波低沙波離婆闍迦は、拘離多波離婆闍迦と、五百の眷屬を將て、迦蘭陀竹林の處に詣る。爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、應に善く時を知るべし。此の院內に、須らく淨座を敷くべし』。彼の諸比丘、佛に白して言さく、『世尊、唯然り、教を受けぬ』と。時に諸比丘、卽ち世尊の爲めに、其の院內に、淨座を敷設す。世尊、是に於て彼の座に坐したまふ。時に長老憍陳如、遙に彼の優婆低沙及び拘離多の二人が彼の外道の徒衆の與に左右に圍遶せられて、來至せんと欲するを望見し、卽ち佛に白して言さく『世尊、今此の二人、優波低沙波離婆闍迦、拘離多波離婆闍迦等は、大技藝有り、多聞多知にして、諸の道術に於て、復疑網無く、名聞流布して、遍ねく四方に至る。今若し世尊の前に來至せば、我が意見もて、此の二人を量る如くんば、決んで佛と共に論議せんと欲して來るならん』。是の語を作し已るや、佛、長老憍陳如に告げて言はく、『汝憍陳如我今彼の二人の心を知る。勝を求めんが故に來る。論議を以てせじ』と。爾の時世尊、遙に彼等、優波低沙波離婆闍迦・拘離多波離婆闍迦等の二人の因緣を見たまひ、偈を說きて言はく、

『諸聖を見るを樂と爲し　共に居るも亦復樂しみ　群癡輩を見ざるを　是を則ち常樂と名く』

爾の時世尊、諸比丘に告げて、是の如き言を作したまふ、『汝諸比丘、此の二人の波離婆闍迦、一を優波低沙と名け、二を拘離多と名くるを見るや不や』。時に諸比丘、佛に白して言さく、『見る、世尊』。佛復彼の諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、今此の二人は、これ我が聲聞弟子の中、各第一に有り。一は智慧第一、二に神通第一なり』。而して是の偈を說きて言はく、

『彼等遙に二人の來るを見るに　弟子及眷屬圍遶す　雲雷の尊音もて比丘に告げたまふ「此の如

【三】兩人、佛弟子となる。

き二人は外道生なり』　今我が大衆の處に來詣す　汝等比丘應當に知るべし　一は智慧最も勝と爲し　二は神通復第一なるを』

時に佛、復諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、一切過去の、有らゆる諸佛・多陀阿伽度・三藐三佛陀は、此の聲聞大衆の中に於て、更に勝るゝ無かりき。今此の二人も、當に亦是の如くなるべし。諸比丘、若し未來世の、諸佛・如來・三藐三佛陀も、更に我が今の此の一雙の聲聞弟子に勝るゝ無けん。汝等比丘、亦敷設して、宜しく彼をして坐せしむべし』。而して偈有りて說く、

『二人の牛王は深智を得　已に一切諸の邪道を捨てたり　未だ此の大林中に至らずと雖も　世尊は遙に彼の人に記を授けたまひぬ』

時に二人、漸進して來り、彼の林に到らんと欲し、遙に長老阿濕波踰祇多の、一樹下に在りて、地を視て經行せるを見、卽ち彼所に詣り、到り已りて頂禮し、却いて一面に住す。時に憍陳如、佛に白して言さく、『希有なり、世尊、云何ぞ、今此の優波低沙波離婆闍迦等は、彼の勝生放蕩の處及び多聞の處を捨てゝ、最上の心を發し、長老阿濕波踰祇多の所に於て、最下の心を起せるか』。是の語を作し已るや、佛、長老慧命憍陳如に告げたまはく、『夫れ智有る者は、智を得たる處に隨ひて、常に報恩を起し、繫念して忘れず。若し少しく恩を得るも、常に憶うて失ふ無し。況んや多く得んをや。憍陳如、この優波低沙波離婆闍迦等は、阿輸波踰祇多の所に於て、法眼淨を得たり』。是の因緣を以て、此の法句を說きたまふ、

『諸佛所說の法を　誰の邊よりか聽きて解知し　是處もて恭敬を起すこと　梵志の火に事ふる如きぞ』

爾の時優波低沙波離婆闍迦等、諸波離婆闍迦等と、佛所に詣向し、佛足を頂禮し、長跪して白して言さく、『善い哉、世尊、我等は今世尊の前にて出家修道せんと欲す。唯願はくは世尊、我が出家

して、具足戒を受けんを聽したまへ』。佛、彼に告げて言はく『善來、比丘、今來りて我が自證の法中に入り、梵行を行ぜよ。諸苦を盡さんが故に』。是の語を作し已りたまふや、彼の諸比丘、自然に卽ち三衣を得て身に著け、各瓦鉢を執り、鬚髮自ら落ち、狀、童兒の初めて其の髮を剃り、始めて七日を經たるが如く、時に諸長老、卽ち出家を成じ、衆戒を具足しぬ。

〔一三〕爾の時長老優波低沙、佛の右邊に在り、長老拘離多は、佛の左邊に在り、各一面に坐す。是の長老優波低沙、出家してより後、始めて半月を經て、諸の結漏を盡くし、神通力を現じ、及び神通智波羅蜜を得、羅漢果を證す。時に拘離多、止七日を經て、卽ち結漏を盡し、神通力を現じ、及び神通智波羅蜜を得、羅漢果を證す。時に彼の長老優波低沙、及び拘離多等は、是の如き因緣にて、漸次に五百の眷屬有りしが、悉く出家を得、具足戒を成じぬ。

爾の時、長老優波低沙の母を舍利(Sāri)（〔隋〕に鸜鵒といふ。）と名く。是の因緣を以て、世間、號して舍利弗多(Sāriputra)（弗多は〔隋〕に子といふ。）といふ。其の彼の長老目揵連延(Mandgalyāyana)は、これ彼の種姓なり。是の義を以ての故に、世間、號して目揵連延といふ。又復世尊、之を記して言はく、『汝、諸比丘、我が聲聞弟子の中、大智慧のものは、舍利弗多を、最も第一と爲し、神通の內に、目揵連延を、最も第一と爲す』。爾の時諸比丘、佛に白して言さく、『世尊、其の長老舍利弗・目揵連等は、彼、往昔に何の善根を種ゑてか、是の因緣に乘じ、今出家を得、衆戒を具足して、羅漢果を證せるぞ。世尊復大智慧聲聞の中、舍利弗勝れ、神通の中、目連を最と爲すと記したまふか』。是の語を作し已るや、〔一四〕佛、比丘に告げて、是の如き言を作したまふ『諸比丘、我憶ふに、往昔波羅捺城に、時に二人有り、一はこれ兄、二はこれ妹なり。其の兄は名けて蘇畢利耶(Supriya)（〔隋〕に善愛といふ。）といひ、其の妹も亦、蘇畢利耶(Supriyā)と名く。時に兄の善愛、捨家して出家し、既に出家し已りて、卽ち其の辟支佛道を成ずるを得、其の妹善愛は、波離婆闍迦外道の中に於て、出家學道す。其の兄善愛

〔一三〕佛、兩弟子を推して上首となし給ふ。

〔一四〕舍利弗の善愛女本事譚。

辟支佛尊は、一時の間に於て、外道なる妹の善愛の所に往詣す。既に彼に到り已りて、座を敷きて坐するや、其の妹善愛は、百味飲食の具を備辦し、手に自ら供設して、食を飽滿ならしむ。飯食し已訖るや、復一刀及び一針を持ちて、其の兄辟支佛尊に奉施す。其の辟支佛飯食し已訖り、妹善愛所施の物――刀子及び針――を將つて、彼の妹の前に於て、飛騰して去る。其の妹善愛、眼に自ら彼の尊者辟支佛の、空に騰りて去りしを見、歡喜踊躍、身心に遍滿して、自ら勝ふる能はず、十指掌を合し、遙に彼の辟支佛尊を敬禮し、尋いで是の願を作す。「願はくは我が將來、是の教師及び此に勝るゝ者に値ひ、彼の所說の法を、速かに解悟するを得て、惡道に生ぜざらん。利刀割らざる無きを施せるが如く、此の斷割の因緣業を以ての故に、我をして來世に一切煩惱を、斷壞せざる莫らしめん。又此の針の、遍ねく能く貫穿するが如く、我をして來世に一切煩惱を、具足穿徹せしめん」と。汝等比丘、彼の時の中に於ける、善愛外道波離婆闍迦――辟支佛に刀子及び針を施せる――は、豈異人ならんや。卽ち舍利弗比丘是れなり。

一五 復、次に諸比丘、我念ふに、往昔波羅㮈城に一商人有り、恆に大海に於て、螺を捕へて賣る。是の時、商人、是の如き念を作す。「我が今の所作は、財を求めて自活す。これ大苦業なり。今日應に將來世の因、功德の事を造すべし」。時に波羅㮈に辟支佛あり、城に依りて住す。時に辟支佛、日の東方に在る晨朝時に、衣を著け鉢を持ち、便ち往きて波羅㮈城に入り、其の城內に、次第して食を乞ふ。螺を賣る商人、遙に尊者辟支佛の來るや、威儀庠序として、進止安審に、顏を舒べて平視するを見、既に此を見已りて、心に淸淨を得、卽ち爲めに禮を作し、辟支佛を請じて、其の家に往詣し、尊重供養し、諸の餚饍を施し、須つ所を供養し、時に辟支佛、彼の施す所の飯食を受け訖る。辟支佛に、理として說法無く、唯神通を以て、用つて物を化するのみ、餘法を以てせず。時に辟支佛、彼の商人の、須つ所の飯食を供給するを受け訖り、彼を憐愍するが故に、卽ち是處より、虛空

【一五】目犍連の本事譚。

に飛騰す。時に彼の商人親しく、自ら遙に辟支佛尊の、空に騰りて飛ぶを見已り、歡喜踊躍、身心に遍滿し、自ら勝ふる能はず、十指掌を合し、遙に向ひ彼の辟支佛を頂禮し、遂に是の願を發しぬ、「願はくは我將來に、是の教師、或は復勝ぐるゝものに値ひ、彼の所說の法を、速かに領悟するを得、生生の處、惡道に墮するなく、彼の所得の如く、願はくは我も亦得て、是の聖者の、空に騰りて飛行せると同じく、我をして將來に、亦復是の如くならしめんを」と。汝等比丘、意に於て云何。彼の時の人、螺を捕へて賣り、以て自ら存活し、後時に辟支佛を供養せるものは、豈異人ならんや。卽ち目揵連比丘これなり。諸比丘、此の舍利弗・目揵連延は、往昔彼の諸善根を種ゑたるが故に、今出家を得て、羅漢果を證し、我復我が聲聞諸弟子中、智慧の勝るゝは、舍利弗これなり。神通の勝るゝは、目揵連これなりと授記するなり』。

巻の第四十九

五百比丘因緣品第五十[一]

爾の時諸比丘、佛に白して言さく『希有なり、世尊、云何ぞ舍利弗に五百の波離婆闍迦刪闍耶弟子有り、已に邪見に墮して、曠野險道にして、顚倒行を行ぜるに、其の舍利弗、乃ち能く教化して將て佛所に詣り、佛、彼を見已りて、邪見曠野の嶮難を捨て、諸苦の中に於て、解脫を得しめたまへるか』と。是の語を作し已るや、佛、諸比丘に告げたまふ、『汝諸比丘、是の舍利弗は、但今日のみ五百の刪闍耶弟子波離婆闍迦を將て、大邪見に墮し、曠野嶮路にして、虛妄の行を行ひ、還復た我が所に來至して、邪見虛妄顚倒を免るゝを得、苦惱中に於て解脫を得しめたるに非ず。往昔も亦此の如き五百人等を將領して、厄難中に墮し、時に舍利弗、亦復將導して我が所に來詣するや、我彼の時にも亦彼の厄を救ひ、諸苦惱を免れしめたり』。諸比丘言さく『唯然り、世尊、願はくは爲めに解說したまへ』。

爾の時、佛、諸比丘に告げて言はく『我、念ふに、往昔一馬王有り、雞尸(Keśi)と名づく。形貌端正に、身體白淨にして、猶ほ珂雪の如く、又白銀のごとく、淨滿月の如く、君陀花(kumuda)の如く、其の頭は、紺色にして、走疾風の如く、聲は妙鼓の如し。彼の時の間に、閻浮提に、五百の商人(pañca vāṇija-śatāni)有り。時に諸商人、大海に入らんと欲し、資粮を辦具するに、三千萬の種種の貨物を持つてし、復、十萬を持ち、以て資粮と爲して、道路の興販、取利に擬し、復、別財有り、用つて船師に擬し、是の如く具辦して漸漸に行き、大海の際に到りて、卽ち海神を祠り、諸の船舶を備へ、復五人を雇ひぬ。其の五人とは、一は船を執り、二は棹を持し、三は漏を抒み、四は沈浮に善巧に、五は船師なり。是の諸人等は、又所有の罪過を告語して、淸淨に懺悔し、又復海

【一】舍利弗目連に隨從出家したる五百弟子に就いて、雞尸馬王本生を明す。Mahāvastu, III. 67 以下 Rākṣasī-dvīpa-kṣipt nā-jātaka に一致す。梵本は、本經に比して簡なるも、本文の末尾に、重頌を以て再說せり。

に入るの法を敎令して、然る後に始めて入り、珍寶を求覓めぬ。時に諸人輩、其の海內に至り、忽ち惡風の、其の船舫を吹くに値ひて、羅刹の國(Rākṣasī-dvīpa) に至りぬ。時に羅刹國に、其の國に多くの羅刹の女有り。是の時、船舶の彼の國に到らんとするや、大風飄搏して、船悉く破壞せり。時に諸商人、各手足を運び、流を截りて浮び去り、彼の岸に到らんと欲するや、時に羅刹女、彼の大海に船ありて破壞せるを聞き、羅刹女等、卽ち往きて救接し、一時に五百の商人を捉へ得て、彼の商人と共に、五欲自娛し、歡喜踊躍せり。時に羅刹女、已に商人と共に、男を生み女を生むや、方に始めて彼の商人輩を將て、一鐵城に置けり。既に安置し已りて、本形を變化して、端正ならしめ、憙ぶべきこと、人に過ぎ、纔に天に及ばず。或は童女と作り、或は復久しからずして嫁する形と化作し、是の身を化し已りて、香湯もて澡浴し、香を以て身に塗り、種種の衣、種種の瓔珞を著けて、其の身を莊嚴し、首に種種妙花の天冠を戴き、一切の身處に、諸の花瓔を垂れ、以て旒蘇と爲し、復妙花を以て、其の身を莊校し、花を瓔珞と爲し、花鬘の處に、懸くるに寶鈴を以てし、捷疾に走行して、商人の所に詣り、其の所に到り已りて、諸人に語りて言はく、「是の諸聖子、恐るゝ有る莫かれ。諸聖子等、愁ふる有る莫かれ。汝の手を過ごし來れ、汝の臂を過ごし來れ、汝の腕を過ごし來れ」と。是の時商人、窮極して命を護り、死を恐怖して畏れ、遂に彼の所に於て、實の女なりとの想を起し、其の手臂を與ふ。

時に羅刹女、諸商人を大海中より渡し、既に之を渡し已りて、慈言もて哀愍し、諸商人に語るらく、「善來聖子、何より遠來せる。汝等聖子、來りて我等が與に夫となるべし。我等を憐愍して、我が爲めに主と作れ。我等は今、人の愛念する無し。汝、我等の爲めに歸依の處と作り、我等の憂煩愁惱を減除し、我等輩の爲めに、當に家長と作るべし。我等は法に依りて汝輩に承事し、虧失せしめさらん。汝諸聖子、我が家に來り、歡喜心を以て、五欲の樂を受くべし。汝等憂ふる勿れ。汝等

怖るゝ勿れ。一切の家業は、我當に備辦すべく、凡そ須つ所あれば、我等皆有り。其の海の大神、必ず我が所に、深く憐愍を生ずるが故に、汝等を將て我が所に來らしめしのみ」。爾の時一切の諸商人輩、咸共に彼の羅刹の女に告げて言ふ、「善い哉姉妹、汝等心を安んぜよ。少時住すべし。乃至、我をして當に愁憂を散ぜしむべし」。時に諸商人、各一廂に住し、其の心惻愴して、聲を擧げて啼哭す。或は人ありて「嗚呼父母」と言ふ有り。或は唱へて「嗚呼兄弟」と言ふ有り。或は復、唱へて「嗚呼姉妹」と言ひ、或は復、唱へて、「嗚呼所愛の諸親眷屬」と言ひ、或は復、唱へて「嗚呼宗族、我等、今已に親戚を離れたり」と言ひ、或は復、唱へて、「我等、今愛戀する所と離れたり」と言ひ、或は復、唱へて、「嗚呼妙地閻浮境界や」と言ふ。是の如き等の悲號啼哭の種種の聲を作し、又相告げて言ふ、「嗚呼哉忍せよ」。是の語を作し已りて、各熱氣を吐き、共に相慰喩して、迭互に心を安んじ、羅刹城に詣らんとて、漸漸に行く。未だ彼の城に到らずして、其の中路に、一所有り、其の地寛廣にして皆悉く平正に、荊棘沙礫瓦石の有ること無く、一切の塵土、皆悉く有る無く、諸の青草を生じ、其の草繁茂し、甚だ大いに膳直愛すべく樂むべく、好樹林有り、其の林の花果、枝葉扶踈として、狀は青雲の叆靆として垂布せるがごとくなるを見る。是の大林處は、廣大無邊なり。

時に彼の林の所の、一切の樹木を、我今當に說くべし。那迦多摩羅樹・迦尼迦羅樹・阿濕波他樹・尼拘陀樹・烏徒婆羅樹・波羅叉樹・可闍囉樹・迦雛囉等の種種の諸樹なり。復種種香花の樹有りて、彼の林に彌滿す。其の花樹とは、所謂、阿題目多迦花樹・瞻波迦花樹・阿輸迦花樹・波多羅花樹・波利師迦花樹・拘羅荼迦花樹・拘毘陀羅華樹・檀奴沙迦梨迦花樹・目眞隣陀花樹・蘇摩那等の種々の花樹なり。彼等諸樹、或は始めて萌え出づるあり、或は已に成萠せる有り、或は復開敷せんとし、或は已に花と成り、或は華開き已りて萎落せるもの、是の如き等の香華雜樹あり。復種種の諸果子樹有り。所謂菴婆羅樹・閻浮果樹・俱闍果樹・破那娑樹・鎭頭迦樹・呵梨勒樹・毘醯勒樹・菴婆勒樹、是の如き等の種種の

果樹あり。其の諸果樹は、或は生じ、或は熟し、或は成熟して、始めて食すべき有り、或は熟し過ぎて已に墮落せる有り、或は花さき始む、是の如き種種の諸樹あり。復、諸鳥有りて其の上に遊集す。所謂、鸚鵡・鸖鴿等の鳥、倶翅羅鳥・孔雀王鳥・迦陵頻伽鳥・命命鳥等、是の如き無量種種の諸鳥なり。復種種雜花の池沼有り、所謂優鉢羅花・鉢頭摩花・拘物頭花・分陀利花、是の如き等の花、池上に彌覆す。其の池中に、復諸鳥の所謂、鴻・鵠・鳧・鴈・崐崘・鴛鴦等の鳥有り、池中に遊戯して、彼の池を光嚴し、觀る者欣悅して、能く憂煩を滅す。

其の羅刹城(Rākṣasī-nagara)は、四壁潔白にして、猶珂雪の如く、又冰山の如し。其の城、地に在るや、若し遙に觀れば、乃ち彼の城を見ること、白雲隊の地より湧出するが如し。其の諸城の上に、復樓閣・種種の[二]却敵・周匝の女墻・四廂隍塹あり。其の塹岸の上に、欄楯圍遶す。或は樓閣有りて、其の樓閣中に、諸の窻牖有り。復天宮・臺殿・堂閣有りて欄楯齊整し、其の諸閣道は微妙端嚴にして、寶張幃蓋、其の上を彌覆し、其の城の周帀に、諸の幢幡を建て、寶案を施設し、香爐中に、諸の妙香を燒く。

爾の時諸の羅刹女、諸の商人を將ゐて彼の城に向ひ已り、舊衣を脫せしめ、諸の香湯を以て、其の體を沐浴し、種種妙勝の座に坐せしめ、五慾の具を以て、之を娛樂し、五音の諸聲を、前に於て作し、是の如き等の種種の方便を以て、久時を經、大快樂を受け、歡喜悅[三]悆し、迭に相娛樂す。後時に彼の諸の羅刹女等、諸の商人に告ぐらく「善い哉、聖子、是の城の南面、彼より出でて某處に向ふを得ざれ」と。時に諸の商人に、一の商主（sārthavāha）有り。智慧深細にして、聰明利見なり、卽ち疑念を生じて、是の思惟を作す「何等を以ての故に、此の諸女、我等輩を斷じて、南面の處に於て、行き過ぎて彼所に詣るを聽さゞる。我應に諸女の睡臥を伺ふべし。是の如きの時、此の道を尋ね、往きて其の女の禁ぜる處に至り、次第に觀看して彼處の善惡の事を知らんと欲す。若し

【二】却敵は、敵を防がんが爲の設備。

【三】悆。元明二本には、豫に作る。

それ知り已らば、即ち當に事の如くすべし、應に方便を行ずべし」。爾の時、商主是の念を作し已りて、即ち彼の諸の羅刹女等の、臥して睡眠し已るを伺ひ、遂に臥牀より安詳として起ち、聲有らしめずして、即ち利刀を執り、家より出でて、意趣を尋逐し、漸漸に前進して、少地に至り、一の微徑の恐怖の所の、草木有ること無く、甚だ畏懼すべを見、乃ち人ありて大叫喚する聲を聞く。狀は叫喚大地獄中の苦痛の聲の如し。是の聲を聞き已りて、遂に大いに怖畏し、身毛皆竪ち、默然として住す。良久しくして喘定まり、漸く身心を安んじ、氣力稍增して、還彼の道に詣り、漸漸に復其の路を進むこと、未だ遠からずして一の鐵城(ayomaya-nagara)を見る。其の城高峻にして、乃ちこれ聞く所の聲の出づる處なり。彼の城に詣り已りて、周匝巡行するに、門を見ず。北面に到りて、一樹有るを見る。名づけて合歡(sirīṣa)と云ふ。城に近づきて生ず。其の樹高大にして、城の上に出でたり。時に彼の商主、斯の樹を見已り、即ち其の樹に上りて、城内を觀看するに、彼の城中に、多くの人の死せるもの、百餘數に過ぐる有り。或は死者の、已に半を食せられたる有り。或は命未だ斷ぜず、半身支解せるあり。或は饑渴に逼惱せられて坐する有り。或は復消瘦して、唯筋骨のみなる有り。眼目欠陷して、井底の星の如く、迷悶して地に在り、頭髮蓬亂し、塵土もて身を坌し、甚大臝瘦し、各相肉を割きて、之れを噉食す。是の因緣を以て、大叫喚を作すこと、閻羅王所居の處の如し。諸の衆生の、大苦惱を受くるを見るや、是の大商主、是の事を見已りて、亦復是の如く大恐怖を生じ、身毛皆竪つ。時に大商主、復少時を經て、心を安んじ意を定め、恐怖稍除きて、氣力漸く生じ、即ち手を以て合歡樹の枝を捉へ、之を搖動す。一枝動き已るや、擧樹の枝葉、互に相振觸して、聲有りて出づ。

爾の時、苦を受くる諸人等輩、是の聲を聞き已りて、城上を仰觀し、彼の商主の合歡樹に在るを見、見已りて悲呼し、之に問ひて言はく、「汝はこれ誰ぞ。これ天なるか、これ龍なるか、野叉なる

か、乾闥婆なるか、阿修羅なるか、迦樓羅なるか、緊那羅なるか、これ摩睺羅伽なるか、これ帝釋憍尸迦なるか、これ天尊大梵王なるか。或は能く我が厄難に在るを見、我が輩を憐愍するが故に此に來至し、來りて我等の苦を救拔せんと欲するか」。時に彼の人輩、十指掌を合し、頭頂もて遙に禮し、哀泣して聲を發し、仰面上觀して、是の如き語を作して白す、「善い哉、仁者、當に我が輩に大慈愍を生じ、我が此の難を脫せしむべし。我等は、皆これ別離の人を愛す。汝今願に我を濟拔し、是の方便を作し、我等輩をして還能く親愛する所に到らしむべし」。爾の時、商主、彼の苦人より、是の語を聞き已りて、鬱怏として樂まず、身心悲惱して、彼に報じて言はく、「是の諸人輩當に知るべし、我は今これ天に非ず、亦龍に非ず、乃至、我は大梵天に非ず。但我等輩は、閻浮提より、興生にとて是に至れるのみ。財を求めんが爲めの故に、大海に入り、我等、將に際地に到らんと欲するや、忽ちに大風に値ひ、船舶破散し、諸の婦女の、我等の邊に來至して、我等を濟拔せるに値ひ、爾より已來、我輩は常に是の如き諸女と共に、歡娛受樂す。我、今云何ぞ能く汝の苦を濟はん」。是の時商主、復彼に問ひて言ふ、「汝諸人等は、云何ぞ此に在りて斯の如き事を受くるや」。彼の苦人輩、卽ち答へて言はく、「善い哉、善人、我等も今亦復是の如く、閻浮提より、商賈を興販し、財寶の爲めの故に、大海に來入し、彼岸に至らんとせるに、遇、惡風の、吹きて船舶を壞するに値ひ、我等も彼の時、亦是の如き羅刹の女に遭ひ、彼の難を濟度せられ、亦復我と共に五慾の樂を受けたり。[四]但汝等に是の如き聲有るを聞け。この羅刹の女は、卽ち大海に船の破壞する有るを知るや、彼の時、我等輩を將て、鐵城中に置きたり。我等來りし日、行人同伴、亦五百人なりき。此の城に入りて來かた、已に他に二百五十を食せられ、今、唯、二百五十人在るのみ。我等も亦、彼の輩と共に和合し、男女を生めり。彼の羅刹の女は、語言微妙にして、其の聲婉媚なり。但彼の女等は、肉を貪り食ふが故に、共に男女を生めるも、悉く還た食ひ盡せり。汝諸人輩、愼みて彼と共に樂を受け

【四】（原文）但聞汝等有如是聲。後にある馬王の聲なり。

娯樂する莫かれ。何を以ての故に、彼は甚だ畏るべし。愛心無きが故に」。是の時商主、復彼に問ひて言ふ、「諸人等輩、頗し方便して此の如き羅刹の難を脫し得ること有りや不や」。彼、即ち報じて言はく、「一方便有り」。商主、復問ふ、「方便は如何、善い哉、爲めに說け」。彼等報じて言はく、「十五日滿四月節會大喜樂の日、月と昴宿と合會する時(kārtikapūrṇamā)、一馬王有り、名けて鷄尸(〔喑〕に多娑といふ。)といふ。形貌端正にして、見るもの樂觀し、白きこと珂貝の如く、其の頭紺黑にして、行くこと疾くして風の如く、聲は妙鼓の如し。彼の所停の處には、乃ち粳米(sāli)有り、自ら糠糩無く、甚大鮮白にして、香美具足す。彼の馬の食する所なり。是の米を食し已るや、海岸に來詣し、半身を露現し、口に人聲を出して、是の言を作す、「誰か彼の大鹹苦の水を渡らんと欲する」と。是の如く三說す、「我今當に安隱に鹹水の彼岸に渡るを得しむべし」。汝等、若し是の如き馬に値はば、即ち難を免るるを得ん。唯此の事有るのみ、更に餘無し。汝等、若し諸難を脫れんと欲せば、此の言を泄す勿かれ」。商主復問ふ、「汝等頗し復曾て、鷄尸馬王の此の如きを見たりや不や。汝、若し見たらば、何ぞ親近せざりし。汝若し親近したらんには、何ぞ汝を渡さざる。汝は初めて誰より此の如きの事を聞くを得たる。虛か實か」。彼等報じて言はく、「善い哉、仁者、我虛空より、是の如き聲を聞けるも、閻浮提內の諸の商人輩は、愚癡無智なり。所以は何ぞ。彼に至る能はず。昴と月と交合する十五日滿、是れ大節會歡樂の時四月節中に、彼の北道(Uttarakuru)に詣りて行く能はず。若し彼處に行かば、應に馬王の、形貌端正にして、觀者厭くこと無く、淨粳米を食し、彼處より、海岸に來詣し、半身を露現して、日別三時、是の如き言を唱へて、「誰か彼の大鹹苦の水を渡りて、彼岸に至らんと欲する。我能く安隱に之を渡して過ぎ、此處より彼岸に至るを得しめん」といふを見るべし。衆人聞き已りて、信ずる者有り。虛空の聲を尋ねて、北道の馬王の所に詣り、其の所に往くと雖も、彼の言を受けずして、復還歸す。我等は皆羅刹の女を愛するに由り、是の故に此の如く、今是の厄を

受くるなり」。是の時商主、復彼に問ひて言はく、「汝等去り來れ。共に彼の馬王の所に詣るべし」と。彼等報じて言ふ、「我、城を上らんと欲すれば、城卽ち增長し、地を掘りて出んと欲すれば、其の孔還た合す。我等は此處より、解脫するの期無し。我輩は必ず羅刹女の爲めに食はれん。何ぞ當に彼の親眷屬を見るを得べき。汝等人輩、愼みて放逸なる莫かれ。意の去る所に隨ひ、速かに父母及び自らの眷屬のところに詣り、本鄕に還歸せよ。唯願はくは汝等、心意和合せよ。我等人輩は、本某處の某城某邑に生れたり。善い哉汝等、若し彼處に至らば、我等輩の爲めに、父母及び餘の親朋友知識を問訊せよ」。是の語を作し已り、復彼に告げて言ふ、「汝等後時に、更に發心して彼の大海に向はんとする莫かれ。何を以ての故に。大海內に、諸の恐怖有り。所謂海潮、或る時は黑風、水流旋洄、低彌羅魚(timiṅgila)蛟龍等の怖、諸羅刹女、是の如き等の怖あり。大海の中に、多種の畏難あり。汝等人輩、但彼處に在りて、諸の方便を以て、宜しきに隨ひて活命せよ。乃至、傭力して、亦存濟すべし。是の方便を以て、父母妻子眷屬と共なるを得、復分離せざれ。能く布施を行じ、多く福業を造り、齋戒を嚴持せよ」。

是の時商主、彼の語を聞き已りて、大恐怖を生じ、遂に卽ち彼の合歡樹より下る。彼の樹を下る時、彼諸人輩、一時に聲を發し、叫喚啼哭す、「嗚呼大苦なり、嗚呼極苦なり。閻浮提內微妙の地を、何ぞ當に復能く彼處を見るべけん。我、若し本是の厄難有るを知らば、寧ろ彼に住在し、牛糞を飡啖するも、用つて活命を爲し、財を求めんが爲めに、此に來らざりしならん」と。爾の時商主、既に樹を下り已り、來りし道に依著して、本處に還り向ひ、彼等輩、諸の羅刹女を見るに、猶ほ故のまゝに睡眠す。商主、爾の時還た卽ち眠臥し、天曉に至りて、便ち是の念を作す、「云何ぞ彼の諸商人輩をして此の事を知るを得しめ、彼の羅刹女をして覺らしめざらん。我、今、若し當に、輙ち是の言を出して、彼に向ひて說かば、これ卽ち漏泄すべし。若しそれ漏泄して、彼の羅刹諸女をして

聞かしめば、恐らくは我等を將て、厄難の處に至らしめん。我の是の語は、應に須らく隱默して、乃ち四月に至り、節會の大歡樂の時に當り、馬王の來る日に臨みて、即ち言を出だして彼等に告ぐべし。所以は何に。昔より偈有りて說く、

『凡　知識の處に於て　輕く心實を陳ぶれば　其の事當に泄漏して　聞く者各々傳ふべし』是を
以て怨に得られ　便ち大苦惱を受けん　故に智慧有る者は　唯其の言を漏さず』

爾の時商主、是を思惟し已りて、隱默して住し、乃ち四月歡樂會の時に至り、方に始めて彼の諸商人に告げて言ふ、「善い哉、諸人、汝等今愼みて放逸なる莫かれ。戀著を生ずる莫かれ。愛心を生じて、或は婦女に貪し、或は飮食及び餘の資財を貪る勿かれ。我、汝等に、極めて憐愍を生じ、我今密語もて、相示告せんと欲す。汝諸人輩、若し諸女の睡りて安隱なる時を見ば、共に集會して、同じく某處に向ふべし」。時に諸商人、彼の商主の是の語を說くを聞き已るや、猶ほ師子の山林に在りて、忽ち大哮吼するに、諸の凡獸有り、彼の山邊に在りて、其の吼聲を聞き、大驚怖を生ずるが如く、各相謂つて言はく、「我等今未だ大海の惡むべき事を脫せず」と。時に彼の商人、彼の日を過ぎ已りて、遂に夜內に至り、彼の羅刹の一切諸女の、睡眠に耽著し、安隱に臥せるを見、私密盜竊して、臥床より起ち、各各咸共に、彼の期する處に詣り、彼處に詣り已りて、商主に白して言はく、「善い哉、商主、見る所の者を、願はくは我の爲めに說け。或は他より聞けるや。我を憐愍するが故に、我を利益するが故に、願はくは爲めに之を說け」。是の時、商主、商人に報じて言はく、「汝等時を知らば、是の事を密にせよ。乃ち能く爲めに說かん」。彼等報じて言はく、「我等は實語を是の事を聞き已りて、皆悉く密持せん」。爾の時商主、即ち彼等に告げて、前に見たる事を說く。諸商人等、大商主より是の事を聞き已りて、憂愁して樂しまず、甚だ大に悵快し、恐懼戰慄して、商主に白して言はく、「善い哉、商主、我等は今當に宜しく速かに彼の馬王の所に至るべし。願はくは我等輩を、安置

して閻浮提內本生の處に達するを得しめんを」。時に諸商人并に及び商主、皆共に聚集して、彼の鷄尸馬王の住所に詣りぬ。

爾の時馬王、彼の無糠自然の粳米の淸淨香美なるを食し、是の如く食し已りて、海岸に詣り、半身を露現し、人の音聲を以て、三たび唱へ告ぐらく、「誰か鹹水の彼岸に渡らんを欲樂する。我、當に安隱に負ひて之を渡し、彼岸に到らしむべし」と。時に諸商人、彼の馬王の是の如き語を聞き已り、歡喜踊躍して、身毛皆竪ち、十指掌を合し、馬王を頂禮して、是の如き言を作す、「善い哉、馬王、我等は渡らんと欲し、彼岸に至らんと樂ふ。願はくは我等を濟ひて、水の此岸より彼岸に達到せよ」と。爾の時馬王、諸商人に告ぐ、「汝等當に知るべし。彼の羅刹女は久しからずして應に來り、或は男を將ち、或は女を將つて、汝に、慈悲哀哭して、苦惱を受くるを顯示すべけんも、汝等時に染著愛戀の心を生ずる莫かれ。汝等若し此の如き意を起して、「彼はこれ我が婦なり、彼はこれ我が男なり、彼はこれ我が女なり」と言はば、汝等假使我が背上に乘るとも、必ず當に墮落して彼の羅刹の爲めに噉食せらるべし。汝等、若し是の如き意念――「彼は我が許に非ず、我は彼の物に非ず、我が男女に非ず」――を作さば、時に汝等、設使手を以て我が一毛だに執るも、而も之に懸かるものは、我、是の時に安隱に將て、汝諸人輩を送り、彼の鹹水を渡し、彼岸に達到せん」。是の語を作し已り、是の大馬王、諸商人に告ぐらく、「汝等今我が背に乘るべし。或は身分脚足支節を執れ」。時に諸商人、或は背に上り、或は肢節脚足の分を執る。爾の時馬王、彼の商人を負ひ、哀愍の聲を出して、空裏を飛騰し、行くこと疾くして風の如し。

爾の時、彼の諸羅刹女の輩、彼の馬王の哀愍の聲を聞き、復走聲の狀、猛風の如きを聞きて、忽ち睡より覺め、彼の商人を覓むるに、悉く皆見えず。處處觀看して、乃ち遙に彼の諸商人輩の、馬王の上に乘り、或は諸の毛髮鬣支節を執り、空に乘じて去るを見、既に是を見已りて、速かに男女

を將て、馳走奔赴して、海岸に至り、慈愍の聲を發して、哀號啼哭し、大苦惱を作して、各是の言を作す、「汝諸聖子、今我を捨てて、何所にか去らんと欲する。我をして主無からしむるか。汝はこれ我が主なり。汝等は先に海難の大恐怖中に墮在せるを、我等汝を渡したり。唯願はくは汝等、我が與に夫と爲れ。汝等、今我に背捨し、何所にか詣らんと欲する。汝等は今恩無く義無し。何の故に相棄てて恩を報ぜざる。我等若し聖子の邊に當りて、違犯せる所有らば、今懺謝を乞はん。今より已去、諸惡を作さじ。汝諸聖子、凡そ善男子は、結恨惱恚を懷抱するを得ず。汝速かに廻還せよ。今何所に詣らんとて、我等を捨離する。諸聖子輩、汝等もしそれ我を用ひずば、今この男女を、收めて將て去るべし」。時に羅刹女、是の如き慈流の言語を作すと雖も、鷄尸馬王、仍し彼の輩五百商人を將て、安隱に大海の彼岸に渡り、閻浮提に到るを得たり。

諸比丘、汝が意に於て云何。若し時の鷄尸馬王を疑はば、豈異人ならんや。異念を生ずる勿かれ。即ち我が身是れなり。五百人中の大商主は、豈異人ならんや。即ち舍利弗比丘是れなり。五百の商人は、豈異人ならんや。即ち刪闍耶波離婆闍迦諸弟子等の五百人是れなり。我、彼の時、此の五百の諸商人等が、厄難の處に至り、是の如き羅刹女の邊に墮し、後羅刹女、復彼を將つて隨意に處分せんと欲せるを以て、爾の時に當り、この舍利弗、將て我が所に詣り、我、彼の時に、其の苦厄を救ひ、鹹水を渡して彼岸に達到するを得しめぬ。今も還た復刪闍耶に至り、邪見の曠野險難の中にして、虛妄の路に乘ぜるに、舍利弗、彼の處に於て、教化を示し已り、將て我が所に詣り、我、邪見曠野の中に於て、化して生死海を脫渡するを得せしめぬ。諸比丘、如來は乃往未だ佛を得ざる時にも、能く是の如き大利益の事を作せり。是の故に、汝等、當に佛の所に於て、應に尊重恭敬の心を生じ、希有の想を生ずべし。汝諸比丘、應に是の如く學ぶべし」と。

斷不信人行品第五十一[一]

爾の時婆伽婆、長老舍利弗及び目犍連の五百人等を度し、出家を得已りて、衆戒を具足せしめ、摩伽陀國より、次第に遊行して、一聚落より一聚落に至り、諸の村邑を經て、隨意に行き、漸漸に歸還して、王舍城に到り給ふ。（摩訶僧祇師、是の如き說を作す。）其の迦葉惟師は、復、異說を作して、乃ち言ふ、『如來は南方の山に至りて、處處に遊行し、復廻還して王舍城に至りたまふ』と。時に多くの大威神有り、大威力有る、諸善男子、如來の所に於て、梵行を行ず。時に多人、道說毀呰して、各各唱へて言ふ、『沙門瞿曇は、當に我等をして子息有る無からしめ、我等輩をして、家を破り宅を散じ、我が後胤を絕たしむべし。沙門瞿曇は、已に髻髮一千人等を度して、出家せしめぬ。沙門瞿曇は、刪闍耶波離婆闍迦の邊より、亦復五百の弟子を劫奪して、出家せしめたり。今復摩伽陀國の諸大威德大威力等の諸善男子有り、當に其の所に至りて、梵行を行ずべし』と。彼の諸人輩、諸比丘の、前に來るを見るや、各各偈を說き、相謂ひて言はく、

『是の大沙門は還た　南山を踰えて此に詣る　已に波梨婆闍等を度し　今復誰をか將て去る』

爾の時彼の輩諸比丘等、諸の他人の、是の如き偈を說くを聞きて、心に慚愧を生じ、便ち佛所竹園の內に至り、所聞の偈を以て佛に向ひて說く。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、『汝等當に知るべし。是の如き音聲は、應に多時なるべからず。唯七日に至らんのみ。七日の後には、是の聲自ら滅して、一切處に、復更に聞く無けん。諸比丘、復人有り、汝等に向ひて是の如き偈を說くと雖も、

「是の大沙門は還た　南山を踰えて此に詣る　已に婆闍を度し　今復誰をか將て去る」

是の語を作すものに、汝等應に此の如き偈を以て答ふべし。

「世尊大丈夫は　人を將て如法に去る　既に如法の行有り　智者何ぞ違するを得ん」と

【一】律佛傳類には、何れも出づ。Mahāvastu, III. 90 に簡潔に記さる。

爾の時、彼等諸比丘輩、其の晨朝時に、日の東方に在るや、衣を著け針を持ち、王舍城に入りて食を乞ふ時、衆人見て、皆此の偈を説き、相告げて言ふ、

『是の大沙門は還た　南山を踰えて此に詣る　已に婆闍等を度し　今復誰をか將て去る』

時に諸比丘、卽ち彼の偈を以て諸人に報じて言ふ。時に彼の諸人、是の偈を聞き已り、是の思惟を作す『沙門釋子の、凡そ人を度する所は、如法に行ぜしめて、不如法に非ず』。是の故に此の聲、七日に在り、七日を過ぎ已りて、一切皆滅して、一切處に復聞かず。

說法儀式品第五十二の上[一]

爾の時、復衆多の外道波離婆闍迦有り。[二]五日五日に、恒常に集聚して人の爲めに説法し、衆人大に集り、彼に詣りて聽受す。是の因緣を以て、諸外道輩波離婆闍迦等は、大利養を得、恭敬尊重せらる。彼の時の間に、王舍大城の摩伽國王頻婆娑羅、佛法中に深く正信を生じて、是の如き念を作す『今、外道波離婆闍迦、五日五日に恒常に集聚し、他の爲めに説法し、多く人衆有り、彼に詣りて聽受す。是の因緣を以て、諸外道輩は、大に利養を得、世人に貴重せられ、供養恭敬せらる。我今亦諸師を集めて、五日五日に、勸めて説法せしめ、我も應に自ら彼の大會に往詣すべし。彼の大會内に、若し我の來るを見ん時、一切の人民は、悉く應に來集すべく、是の如き因緣もて、應に我が師をして、大に利養を得、世間に尊重せしむべし』と。是を思惟し已りて、佛の所に至り、具に斯の事を白す。爾の時世尊、此に因りて起發し、比丘僧を集めて、之に告げて言はく『汝諸比丘、我今より已許、五日五日に、汝等輩をして集聚大會し、他の爲に説法し、法義を談論せしめん』。時に諸比丘、白して言さく『世尊、何の法をか當に説き、何の法をか説かざるべき』。時に諸比丘、此の事を問ひ已るや、佛、大衆諸比丘に告げて言ふらく、『[三]汝等比丘、我今より已許、五日五日に、其

【一】本品に、説法に關する諸規定を集む。蓋し他の佛傳には見ざる所、恐らくは律の布薩に關する規定に倣へるものならん。

【二】黒分、白分の五と十五の日を指すものなるべく、布薩の六齋日に近し。

【三】説法の内容に關する規定。

の中間に於て、衆を集聚し已り、佛の功德を歎じ、法の功德を歎じ、僧の功德を歎じ、信の功德を歎じ、乃至、略說せんに、戒行多聞の功德を讚歎し、布施を行ずるを歎じ、智慧を行ずるを歎じ、知足を行ずるを歎じ、少欲を行ずるを歎じ、頭陀を歎說し、聚落城邑を遠離して常に空閑に在るを歎說し、妙行を行ずるを歎じ、利益を讚歎し、精進を行ずるを歎じ、父母尊長を供養し、沙門及び婆羅門を供養するを讚歎し、諸善知識を供養するを讚歎し、善言を歎說し、諸根門を調伏する者を讚歎し、諸飮食を節量する者を讚歎し、初夜及び後夜に睡眠を省く者を讚歎し、正念を生ずるを讚じ、相奉事するを讚じ、相諮問するを讚じ、聞きて領悟するを讚じ、師教を受けて違背せず聞き已りて奉行するを讚じ、法を聞き已りて能く正知するを讚じ、正法を聞きて法に順じて行ずるを讚じ、[四]佛を念ずるを歎說し、法を念ずるを歎說し、僧を念ずるを歎說し、天を念ずるを歎說し、施を念ずるを歎說し、寂滅を念ずるを歎じ、[五]阿那波那を念ずるを歎じ、身を念ずるを歎說し、恒に不淨觀想を念ずるを讚歎し、[六]死想を念ずるを歎じ、飮食を念じて不淨想を作すを歎じ、世間の不可樂想を讚歎し、無常想を讚じ、苦空想を讚じ、無我想を讚じ、斷想を讚歎し、離欲想を讚じ、滅想を讚歎し、及び白骨想を觀ずるを讚歎し、骨離想を讚歎し、膖脹想を讚歎し、欲壞想を讚歎し、半噉想を讚歎し、散想を讚歎し、半燒想を讚じ、[七]燒火想を讚じ、可惡想を讚じ、亦應に諸功德を念ずるを讚歎すべく、亦應に四正勤・四如意足・五根・五力・七覺道分を讚歎すべく、解脫門の諸解脫分を讚じ、[八]八勝處を讚じ、三明を讚歎し、亦應に六通の功德を讚說すべし』。

【四】佛・法・僧・天・施を念ずるに、念戒を加へて六念といふ。

【五】阿那波那（Ānāpāna）。數息觀なり。

【六】九種の不淨觀法、禪波羅蜜門に出づ。之を對照すれば左の如し。

一、肨脹想……膖脹想
二、青瘀想……可惡想(?)
三、壞想……欲壞想
四、血塗漫想……半燒想(?)
五、膿爛想……骨離想(?)
六、蟲噉想……半噉想(?)
七、散想……散想
八、骨想……白骨想
九、燒想……燒火想

【七】「燒赤想」に作らる。赤は火の誤植か。

【八】八勝處とは、自在に淨不淨境を觀ずるをいふ。

一、內有㆓色想㆒、觀㆓外色少㆒
二、內有㆓色想㆒、觀㆓外色多㆒
三、內無㆓色想㆒、觀㆓外色少㆒
四、內無㆓色想㆒、觀㆓外色多㆒
五、內無㆓色想㆒、觀㆓外色青㆒
六、內無㆓色想㆒、觀㆓外色黃㆒
七、內無㆓色想㆒、觀㆓外色赤㆒
八、內無㆓色想㆒、觀㆓外色白㆒

卷の第五十

說法儀式品第五十二の下

爾の時、諸比丘、是の如き念を作す、『如來已に我等輩に五日五日の聚集大會を許聽せらる。應當に諸佛の功德を讚說し、乃至、六神通の諸功德等を讚歎して說くべし』と。彼の諸比丘、五日五日に遂に卽ち集聚し、同じく一聲を發して、佛の功德を讚じ、乃至、六神通等の功德の事を讚說す。時に諸人、各來りて法を聽く。是の時、卽ち談論毀呰有り、是の如き言を作す、『我等の諸師は、云何ぞ同じく一音を出して說法すること、譬へば初學の諸童子輩の、合聲唱讀して、異有る無きが如きぞ』。時に諸比丘、此の諸人の毀呰道說を聞き、佛所に來詣して、上の如き事を白す。

爾の時世尊、諸比丘に告げて、是の如き言を作したまふ、『汝諸比丘、今より已去、諸弟子を制して、同聲にて法義を讚說するを得ざれ。唯辯才の說法に堪ふる者を請ぜよ』。爾の時諸比丘、或は復彼の諸根の、闇鈍及び缺漏し、諸戒を具せざるものを請じて、法を演說す。乃至、衆人、更に復毀呰して、種種に道說し、情、喜樂せず、口に唱へて言ふ、『是の諸師輩すら、尙ほ是の如きを作す。況んや師に非ざるをや』。時に諸比丘、是の事を聞き已りて、具に往きて佛に白しぬ。爾の時、佛、諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、我、今日より、諸弟子を制す。諸根の闇鈍及び缺漏し、戒の不具なる者を請じて、其の法を說くを得ざれ。今より已後、若し說法を請はんには、應に諸衆內に於て、勝行成就せる妙行具足の人を請ずべし』。乃至、佛、復其の制を唱へて言はく、『應當に辯才知法して、次第に舊くより阿含經等を解するを簡擇し、請じて說法せしむべし』。乃至、衆中多く阿含(Āgama)を解す。佛、復彼の諸比丘に告げて言はく、『但唯、阿含經を解する者をのみ、須らく請じて說法せしむべきに非らず、復修多羅(Sūtra)を解し、及び摩登伽(Mātṛkā)を解する者をも、應に

【一】說法者の資格と其の選擇に關する制規。

是の人を請じて、衆の爲めに說法せしむべし。若し大衆中に、諸比丘の、修多羅を解し、及び毘尼(Vinaya)を解し、摩登伽を解する有らば、又是の中に於て、應當に文字に分明に、辯才を具足するを選擇すべし。又衆中に現在する比丘にして、多く文字を解すること分明に、辯才悉く具足せば、我今、應に是等の比丘を、下座より次第に差遣して、衆の爲めに說法するを得るを聽すべし。若し一にして乏しからば、更に第二を請じ、第二疲乏せば、應に第三を請ずべく、第三にして疲乏せば、應に第四を請ずべく、第四にして疲乏せば、應に第五を請ずべく、乃至、若干の說法に堪ふる者を、次第に應に請じて衆の爲めに[二]說法せしむべし。諸比丘有り、或は露地に在りて說法せん時、或は寒く、或は熱からば、我、堂を造りて、堂下に說法するを許す。若し堂有りと雖も、露にして四壁無く、風塵草を吹き、比丘を汚さば、我今當に四壁を起して、諸の塵草を障遮するを聽すべし。時に諸比丘、說法堂に在り、若し地平ならずば、應に種種の、若しくは麻、若しくは草を以て、其の地を泥塗し、淨好ならしむべし』。

爾の時諸比丘、說法堂を起し、地を泥り訖り、說法堂に在りて、誦習經行するに、塵を以て足を汚すや、比丘の、應に須らく足を洗ふべきを聽許したまひぬ。是の時比丘、數數足を洗ひて、脚足痛めるが故に、乃至、佛、諸比丘に告げて言はく『應に香湯を以て地に灑ぎ、塵埃を滅去すべし』。塵埃を滅し已りて、其の地亦乾き、還た其の脚を汚すや、乃至、佛、復諸比丘に告げたまはく『我當に牛糞香水もて、以て堂地に塗るを聽許すべし』と。時に水乾き、牛糞散壞して、還た復足を汚すや、佛復諸比丘に告げたまはく『應に軟草、或は復麻等を取り、以て地上に敷くべし』と。

[三]爾の時衆人、彼の法師(dharma-kathika)の辯才具足し、能く法を演說するを見、卽ち香花を持ちて其の上に散ず。時に諸比丘、其の法を受けずして、厭離を生じぬ。何を以ての故に、佛、斷じたまへるを以ての故なり。『出家の人は、塗香末香及び諸香鬘を將持するを得ざれ』と。時に諸人輩、

【二】說法處に關する制規。

【三】受供養に關する制規。

此の事を聞見し、毀呰して說いて言ふ、『是等の比丘は、是の如き供養をも、尙ほ受くるに堪へず。況んや復勝るるをや』と。時に諸比丘、是の如き事を以て、具に往きて佛に白す。爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、若し其れ諸白衣の檀越（dānapati）有り、歡喜心を以て、古祥を以ての故に、種種の香花、塗香末香及び諸の華鬘を持つて、法師の上に散じなば、應當に之を受くべし』と。是の時白衣の諸檀越等、遂に種種の資財寶物、及び袈裟等を將つて、法師を供養するに、是の諸比丘、恐懼慚愧して、彼の物を受けず。世の諸人輩、毀呰して、談說すらく『是の輩沙門、諸の釋子等は、若干の輕物も、尙ほ受くるに堪へず、況んや復勝るるをや』と。爾の時諸比丘、是の事を聞き已りて、具に往きて佛に白す。爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、若し俗人の、諸財物及び袈裟等を持ちて、歡喜の爲めの故に、法師に奉施する有らば、我、捨施するを許す。若し須ふる有らば、其を受け取るを聽す。若し須ひずば、我送り還すを許す』と。

【四】爾の時諸比丘、說法の時に於て、大部黨の闇誦する者、多きを取りて或は復一月にして竟るを得る能はず。止休罷せんと欲するも、恐怖慚愧し、止誦徹せんと欲するも、身心疲殆す。時に諸比丘、具に上事を白す。爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『衆の爲めに說法せんには、應當に時を知るべし』。爾の時諸比丘、說法の時、微妙の音を以て、法義を演說す。時に比丘有り、恐怖慚愧して、具に世尊に白しぬ。爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『我今微妙の音を以て、法を演說するを聽許す』と。時に比丘、諸經中の要略の義味を取りて、他の爲めに說き、次第に依らず。時に比丘、慚愧恐怖して、經律に違するを慮り、具に以て佛に白す。時に佛、諸比丘に告げて言まはく、『我隨ひて便ち諸經中に於て、要義を擇取するを許す。文句を安比して、人の爲めに說法し、但中の義を取りて、經本を壞する莫かれ』。是に於て、法師說法の時に、大衆集會するや、其の聲顯はれず、衆をして愛樂歡喜せしむる能はず。時に諸比丘、具に世尊に白す。佛、諸比丘に告げたまふ、『我、今已に大

【四】說法の手段に關する僩規。

衆中に、高座を敷設して、應に法師を請じ、座に昇りて說法し、衆をして、悉く聞かしむべきを許す』。又時に其の衆を聚會して、更に大に說法するに、諸師の聲猶ほ徹せず。時に諸比丘、復往きて佛に白す。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、『當に須らく更に倍して、高座を敷設し、說法者をして是の座上に昇らしむべし』。爾の時大衆、倍更に增多し、聲猶徹せず。時に諸比丘、復往きて佛に白す。佛、言はく、『我、已に比丘の、或は起ち、或は行き、便に隨ひて說法するを聽許す』と。時に諸比丘、一堂內に集るや、二比丘有りて、經法を演說し、是の故に相妨ぐ。卽ち二堂を作りて、二堂の內に、各別に說法するに、猶ほ故のごとく相妨ぐ。此の堂の內の比丘を將引して、彼の堂に往詣すれば、彼の堂の處に諸比丘有りて、迭ひに相誘接して、此の堂に詣らしめ、往來交雜して、遂に乃ち衆人を亂し、或は去來して法事斷絕す。或は比丘あり、此の法門に於て、聞說するを憙ばず。時に諸比丘、具に以て佛に白す。佛、諸比丘に告げたまはく、『今より已去、一堂に二人說法するを得ざれ。亦復二堂相近く、聲をして相接し、以て相妨礙するを得ざれ。亦復彼、此の衆に詣り、此、彼の衆に詣るを得ざれ。亦復法門を憎惡して、聞說を喜ばざるを得ざれ。若し憎惡せば、須らく如法に之を治すべし』。是の時、衆中に法師有ること無し。諸比丘等、具に以て佛に白す。佛、諸比丘に告げたまはく、『若し法師無くば、應に誦者(bhāṇaka)を請じ、昇座して之を誦せしむべし』。是の時、衆中に經を誦する者無し。諸比丘、具に以て佛に白す。佛、諸比丘に告げたまはく、『我、今次第に之を誦し、或は上座より次第に差誦し、或は下座より次第に差誦し、乃至、一四句の偈を讀誦するを聽許す』。爾の時諸法師、經を讀誦する時、猶ほ俗歌の如くにして、其の法を說く。是の故に人の爲めに毀呰譏[五]論せらる、『是の如き說法は、我が俗人の歌詠に似て異る無し。剃頭の沙門、豈に歌詠の如くにして說法せんや』と。時に諸比丘、是の事を聞き已りて、具に將つて佛に白す。佛、諸比丘に告げたまはく、『若し比丘有り、世の歌詠に依りて法を說かば、五失有り。何等を五と

【五】譏、本には飢又は饑に作る。何れも誤ならん。

爲す。一には自ら歌聲に染す。二には他、聞きて染を生じて義を受けず。三には聲の出沒を以て便ち文句を失ふ。四には俗人聞く時は、毀呰譏論す。五には將來の世人、此の事を聞き已りて、卽ち俗行に依りて以て恒式と爲さん。若し比丘有り、俗歌に依附して說法せば、此の五失有り、是の故に俗の歌詠に依りて說法するを得ざれ。汝諸比丘、其れ未だ如上の法を解せざる者有らば、若し遊止する所には、應に先づ和上・阿闍黎等に諮問すべし』。

〔六〕時に比丘有り、他方の城邑聚落に詣らんと欲す。爾の時和上・阿闍黎等、彼の比丘に語る、『是の如く長老、汝須らく往くべからず』。時に彼の比丘、遂に語を取らず、彼に詣らんとて去り、中路に至るや、劫賊に逢値ふ。比丘を執捉し、手及び脚を以て打蹹して甚だ困しめ、唯命のみを留殘して衣鉢を劫奪し、然る後之を放つ。時に彼の比丘、旣に僧伽藍(saṃghārāma, 僧院)の處に廻還り、諸比丘に告げて、此の事を具陳す。時に諸比丘、此を將つて佛に白す。爾の時世尊、是の事に因が故に、衆僧を召集し、之に告げて言はく、『汝等比丘、和上・阿闍黎は、實に汝の遠き聚落に詣りて遊行するを許さざりしや以不や』。時に諸比丘、白して言さく、『是の如し、實に許さざりしなり』。佛、復諸比丘に告げたまはく、『汝等當に知るべし。此の事や不善なり。和上・阿闍黎の、旣に許可さざるを、何の故に自ら專ら他の聚落に詣れる。諸比丘、此に因緣有り。所以は何に。〔七〕我念ふに、往昔此の閻浮提内に、五百の商人あり。是の商人中、一商主有り、名けて慈者(Maitri?)といひ、最も導首たり。時に諸商人、皆共に集會し、各相議して言はく、「我等は、今資粮と入海の具とを辦具して、彼の大海に詣るべし。財を求めんが爲めの故に。必ず應當に種種の珍寶——所謂、摩尼・眞珠・珂玉・珊瑚・金・銀——を獲て、其の家に來還すべし。是の如き等の寶は、我等輩をして、七世已來、家内大富にして、資物を住持し、眷族を養育し、多く基業を作さしめん」と。

爾の時、彼等五百の商人は、所須を具辦して海に入るに、貨物三千萬有り。一千萬を持ちて、道

【六】この一項、說法の事に關係なし。但し律の布薩規定に見ゆるもの。本品と布薩規定の關係上に於て、注意すべきものとす。

【七】慈童女本生。これ雜寶藏經に見ゆるに過ぎざるもの〻如し。右經、慈者を慈童女とす。

路中の資用粮食に擬し、又二千萬を、彼の商人に與へて以て本貨と爲し、第三の千萬は、舟船を治め及び船師の價に擬し、是を具辦し已りて、各各安心して、八關齋を受け、既に齋を受け已りて、各己が家に至り、父母・妻子・眷族に辭別す。時に慈者、遂に母の所に詣り、具に是の事を諮る。爾の時慈者、母の前に至り、是の如き言を作す、「善い哉、父母、我海に入りて諸の財寶を求め、彼處に至り、種種の貨を持ちて來り、還歸らんと欲す。所謂摩尼・眞珠・頗梨・乃至金・銀なり。我が家をして此の如き財寶を、七世に住持し、資用窮る無く、富饒具足して、父母及び諸妻子を供養し、復用つて布施し、諸の功德を營ましめんと欲す」。爾の時慈者商主の母、慈者に告げて言ふ、「兒、今何を用つてか大海の中に入るぞ。汝が今の家內は、大富豐饒にして、財物具足し、凡そ須つ所有る、皆應に缺くる無く、七世已來、存濟し得るに堪へ、以て供養を充たし、兼ねて檀を行じて、諸の功德を作すを得べし。愛子よ、愛子よ。大海の內には、諸の恐怖、所謂潮波惡風の難、低彌羅魚神の縛する怖、羅刹女の怖有り。愛子慈者よ、大海には多く是の如き等の難有り。我今年老い、衰暮已に至る。愛子若し去らば、汝と相見んこと、此の事實に難し。我、今復少かに殘命有りと雖も、死日の至ること近し」。是の如く再三、慇懃に切語す。是の時慈者、重ねて母に白して言ふ、「善い哉、阿母、財を求めんが爲めの故に、我必ず海に詣り、彼所に至りて、種種の寶を持ちて、必ず歸還らんを望む。所謂、摩尼眞珠、乃至金銀を將來して、父母師長を供養し、檀布施を行じて、廣く功德を修せん」。是の語を作し已りて、即ち進發せんと欲す。爾の時慈者商主の母、座より起ちて、慈者を抱持し、之に告げて曰はく、「愛子慈者、我、汝の大海に詣りて財を求むるを許さず。何を以ての故に。我が今の家內、多く資財有り、乏少する所無ければなり」。爾の時慈者、是の如き念を作す、「我が母の、今憙ばざるは、我に於て益當に損敗すべし。而して今日更に我が海に入りて財を求むるを許さず。

我、今日必ず禍敗を作さん」。是の因縁を以て、便ち瞋恚を生じて、遂に其の母を撲ち、地上に置きて、其の母の頭を打ち、卽ち家より出で、諸商人と共に、行きて海岸に到り、既に海に到り已りて、海神を祭祀し、船舶を嚴整し、別に五人を雇ひて、三倍して價を與ふ。其の五人とは、所謂尾を執ると、棹を執ると、漏を抒むと、能く沈み能く浮ぶと、善く船を行る者となり。共に所宜を量り、遂に船舶に乘りて、大海に入る。財を求めんが爲めの故なり。彼等諸人、海內に至るや、其の船破壞し、五百の商人、悉く皆水に沒して、唯慈者商主のみ有りて、一人活くるを得たり。

爾の時慈者、彼の破船に於て、一板を捉得し、卽ち其の板に依りて、手を運び足を動かし、筋力を極め盡し、其の風勢に因り海の濤波に從ひて、一渚に落つ。其の渚を名けて、[八]毘戶波婆提（Viśvavati）（隋に化渚といふ。）といふ。是の時慈者、彼の化渚に在り。諸の果子及び藥草を食して、少時活命し、後に於て慈者、彼の渚を遊歷し、南畔に至りて、一路有るを見、遂に彼の道に從ひ、行きて少地に至り、便卽ち遙に一の銀城（rūpya-maya-nagara）を望見す。其の城や、憘ぶべく、微妙希有にして、觀るもの厭くこと無く、樓櫓・却敵・隍壍もて圍遶し、天窻・欄楯、及び諸寶閣・臺殿宮舍・偏梁閣道、上は寶帳もて覆ひ、種種の寶を以て、之を莊嚴し、雜幡蓋を懸け、寶幢を竪立し、香案香爐に衆の妙香を燒き、其の城の周匝に、諸の園林・泉池・渠流有り、皆悉く娛樂の處を具足す。彼の城內の正處中央に在りて、一寶殿有り、名けて喜樂といふ。其の殿は、微妙にして七寶の所成たり。所謂、金・銀・琉璃・車璖・瑪瑙・琥珀・眞珠等の寶なり。爾の時、彼の城に、四婦女有り、城より出づ。端正憘ぶべく、觀るもの厭く無く、最勝最妙にして、諸の瓔珞を以て、身を莊嚴し、慈者の所に詣りて、白言して曰はく、「善來慈者、何ぞ能く冒涉して此の城に來至せる。此の城には、主無く、衆物具足して、乏少する所無し。此の城內に、一の寶殿在り。名けて憘樂といふ。七寶の所成なり。我等四女の、其の殿內に居るや、早起夜臥し、志意淸潔、言語貞良にして、容儀婉媚・聲氣和雅な

【八】本經卷十六に Viśvamitra も化支と譯せり。

り。是の故に汝今此の城に入り、寶殿に昇りて共に相娯樂し、男無き處に共に欲樂を受け、和合して行き、隨意に止住すべし。我等は、汝に一切の物を持ちて、承事供養せん」。

爾の時慈者、遂に彼の城に入り、寶殿無男の處に詣り向ひ、彼の四女と共に、五欲の樂を以て隨意に歡娯し、數年を經歴し、數百年を經、數千年を經、情を縱にして樂を受く。彼に於て、後時に其の四婦人、慈者に告げて言ふ、「善い哉聖子、汝は此に住して餘城に向ふ莫かるべし」。爾の時慈者、即ち疑慮を生ず、「云何ぞ此の女、我に語りて、聖子、今此の城に在りて住し、餘城に向ふ勿かれといふや。我今竊に此の婦人に違すべし。其の睡臥せるを伺ひ、此の路に乘依して、別所に至り、東西に馳訪して、竟に何事の若しくは善、若しくは惡の有らんかを、當に自ら證知すべし。既に覺知し已らば、應に如法に行ずべし」。

爾の時慈者、彼の婦人の睡眠に著せる時を伺ひ、安徐として起ち、寶殿より下りて、巡歴して行き、東門より出でて、是の城を圍遶し、周匝して遶り已り、南面に至りて、一道有るを見る。即ち是の道を尋ね、漸行して進み、遂に復遙に一の金城(suvarṇa-maya-nagara)の、端正憘ぶべく、乃至、周匝して諸の泉池渠流の盈滿する有るを見る。彼の城中に、一寶殿有り、名けて常醉といふ。微妙にして觀るべく、七寶、所謂金・銀・乃至・車璖・眞珠等の寶より成る所なり。爾の時、彼の城に八婦女有りて、城より出づ。憙ぶべく端正に、最勝最妙にして、諸瓔珞を以て、其の身を莊嚴し、慈者商主の處に來詣し、到り已りて白して言はく、「善い哉、慈者、何ぞ能く遠く至れる」。復、慈者に言ふ、「此の城都は、これ眞金の所造にて、一切の衆物資財具足す。其の城の中央に、一寶殿有り、名けて常醉といふ。七寶の所成なり。我等八女は、早起晩眠す」。乃至、慈者、亦彼の城に入り、寶殿に昇り、彼の八女と共に、無男の處に、諸の五欲を以て具足受樂し、共に相娯樂して、數年・數百千年を經、意に隨ひて住す。後時に、彼の女、慈者に告げて言ふ、「聖者慈者、汝、此より去りて餘城

に至る莫かれ」。

爾の時、慈者、亦復驚疑し、尋ねて卽ち盜出し、處處に遊觀し、乃ち復遙に一頗梨城(silā-maya-nagara)の、憙ぶべく端正に、觀るもの厭くこと無きを見る。彼の城處の中に、一寶殿有り、名けて意樂といふ。微妙して憙ぶべく、七寶——金・銀・琉璃・乃至・眞珠より成る所なり。爾の時、彼の城に乃ち婦女一十六人有りて、城より出づ。顏容端正に、觀るもの厭くこと無く、諸寶瓔珞にて其の身を莊嚴し、乃至、亦復慈者に白して言はく、「善來、慈者、何ぞ能く冒し至れる」。又慈者に言ふ、「此の城は純らこれ頗梨所成にて、衆物具足す。其の城處の中に、一寶殿有り、名けて意樂といふ。亦七寶を以て成立する所なり。我等諸女一十六人は、早起晩臥す」とて、前の如く、住せんことを請ふ。爾の時慈者、卽ち彼の城に入りて、寶殿に昇り、十六女と共に、無男の處に具に欲樂を受け、以て相娛樂し、數年・數百千年を經たり。

爾の時諸女、又慈者に語る、「愼みて東西する莫かれ」と。慈者亦疑ひ、卽ち彼に遠して出で、遊歷して漸進し、又復遙に一琉璃城(vaiḍūrya-maya-nagara)の憙ぶべく端正に、四壁牢固にして、乃至、周匝せる泉池・流水・溝渠の盈滿するを見る。爾の時、彼處に、一寶殿有り、名けて梵德といひ、憙ぶべく微妙にて、七寶の所成なり。城中に復三十二女有りて、城より出づ。端嚴にして憙ぶべく、觀るもの厭くこと無く、微妙殊特なり。諸瓔珞を以て其の身を莊嚴し、慈者に語りて曰ふ、「善來聖者、冒して能く遠く至る」。又慈者に言ふ、「此の城は、皆これ琉璃の所成にして衆物具有す。我はこれ淸潔にして、行ふに違失なく、常に先づ啓白し、然る後方に心意の和善、言語の風流を僞す。今來りて汝に諮る。願はくは此の城に入りて寶殿に昇り、共に相娛樂し、五欲を具足して、和合受樂せよ。凡そ須つ所は、我當に諮奉すべし」。爾の時慈者、彼の城中に入り、寶殿に昇りて、彼の女三十二人と共に、無男の處に、具に欲樂を受け、數年を經、數百年、數百千年を經、意に喜びて住す。

爾の時、彼の諸の三十二女、復慈者に白さく、「善い哉、聖子、汝、今愼みて此の城より出で他城に詣る莫かれ」と。爾の時慈者、便ち復疑を生じて、是の如く籌量す、「此等の諸女、云何ぞ我に語りて、是の如き言を作せる、――聖子愼みて此の城より出で餘城に至る莫かれと。我、今諸女の眠る時を伺ひ、此の路に乘依し、安徐として去るべし。若しくは善、若しくは惡なるを、到り已りて應に知るべく、既に知見し已らば、如實に應に行ずべし」。爾の時慈者、彼の諸女の、睡眠に著せる時を伺ひ、徐徐として緩に起ち、殿を下りて去り、城の東門より出でて、彼の城を巡遶し、城南に詣到りて、一道路を見、見已りて遂に復彼に乘じて去り、須臾にして、遙に一の鐵城（ayo-maya-na=gara）有るを見る。其の城の四面に皆各門有り。時に彼の城中に、一人の若しくは男若しくは女、童男童女の、出でて慈者を迎ふる有ること無く、唯この聲を聞くのみ、「誰か饑ゑ、誰か渇し、誰か裸露に、誰か急走し、誰か遠く行來し、疲乏せる。[九]我は誰ものにか乘れる」と。爾の時慈者、便ち是の念を作す、「我先に已に曾て銀城を見たるに、其の城内に四女人有りて、我を迎接せり。又金城に詣りし時、彼の城内に八女人有り、出でて我を迎へたり。又一時玻瓈城に詣りしに、十六女有り、出でて我を迎接せり。我、後に一時琉璃城に遇ふや、三十二女、出でて我を迎接せるに、今此の城には、一人の或は男、或は女、童男童女有りて、我を迎接する者無く、唯彼の意に憙ばざる所の是の如き等の聲を聞く有るのみ。――誰か飢ゑたりと言ひ、誰か渇すと言ふ。誰か裸露に、誰か急走し、誰か遠道より疲乏して來れる、誰にか我乘れると。我が今の如きは、若し此の城に入らば、即ち是の聲の誰の所作なるかを知らん」。爾の時慈者、即ち彼の城に入るに、彼の城に入り已るや。四門尋で閉づ。爾の時慈者、心に恐懼を懷き、身毛皆竪ち、處處に迯走して、是の如き言を作す、「我は今敗れぬ。我は今壞れぬ」。而して、彼の處處に迯走せる時、一人有りて頭に鐵輪を戴くを見る。其の輪は赫赤として、狀猛火の如く、其の火餤熾にして、甚だ怖畏すべし。遂に彼所に詣り、問ひ

【九】（原文）我乘誰者。誰の字必ずしも人に用ゐざるは、經典の中に數々見らる。こゝは業をいふなるべし。

て言ふ、「仁者、汝はこれ誰ぞ、汝の頭上の輪は誰の轉ずる所ぞ。何の故に、餤赫熾然して、畏るべきこと、猶ほ火聚の如くなるか」。時に彼の罪人、報じて言ふ、「仁者、汝は今知るや不や、我はこれ〔一〇〕頻主、名は瞿頻陀(Govinda)なり」。爾の時慈者、又彼に問ひて言はく、「汝は往昔何の罪業をか作し、彼の罪業を造れる因緣を以ての故に、此の鐵輪の、是の如く熾猛に、是の如く餤熱して、頭上に轉在する有るか」。彼の人報じて言はく、「我れ昔日、瞋怒を以ての故に、母の頭を打蹋せり。是の如き業罪の因緣を以ての故に、大鐵輪の、是の如く猛熾に、是の如く赫餤として、頭上に轉在するを受く」。爾の時慈者、此の語を聞き已り、悲啼號泣し、悔過自責し、自らの業を憶省して、口に是の言を作す、「今我禁ぜられて、鹿の檻に入るが如し」と。爾の時、彼の〔一一〕執に、一夜叉有り、業として彼の城を守り、婆流迦と名けて、彼の城中に在り。時に彼の夜叉、彼の商主瞿頻陀の邊より、其の頭上に熾然する火輪を取り、取り已りて慈者の頭上に擐著す。爾の時、慈者の頭上の鐵輪、甚大餤赫して、極めて大苦を受く。極燒極燃して、其の苦忍び難し。卽ち時に偈を以て、夜叉に問ひて言ふ、

「此の城の周匝四門の所に　常に光餤有りて人を恐怖せしむ　我今已に是の如く縛せられ　猶ほ諸鹿の深檻に入るが如し』　善い哉夜叉王に乞ひ問はん　是の輪を何の故に我に與へて著くる熾然せる猛餤は火聚の如く　今將に我が身命をして斷ぜしめんとす』　我先に喜樂殿を經復金城の常醉宮に入り　又頗梨の意樂處を經て　最後に過ぎし所を梵德と名けぬ』　先に銀城に入るや四女有り　後金郭に至るや復八に遇ひ　頗梨城に女十六有り　又琉璃に至るに三十二ありき』　是の如く彼に値ひ復此に値ひ　次第に値ひ已るに轉更に勝れ　既に是の如きものに値遇するを得たるを　云何ぞ今恐怖の輪に値へる』　我の貪欲の足るを知るを知らざるに由りて　今此の如き苦厄難に逢へるや　我昔更に何の業を作せるが爲めに　此の鐵輪の頭上に旋

〔一〇〕頻主は商主の誤か。

〔一一〕執は城の誤か。

るに値へるか』　熾燃輝赫して火聚の如く　今將に我が身命をして斷ぜしめんとす　願はくは夜叉王哀愍して答へよ　幾歳數を經て斯の輪を受くるやを』

爾の時夜叉守城者、卽便ち偈を以て慈者に告げて言ふ、

『昔時汝が母淨戒を持せるに　汝脚足を以て其の頭を踏めり　是の如き等の業の因緣を以て　今鐵輪の頭上に轉ずることを爲す』　熾然して猶ほ猛火聚の如く　火輝炎赫として甚だ畏るべし　輪轉じて汝の頭上に在り　汝の身命を斷じて更に斷ぜしめん』　斯に於て六萬年を滿足して終に歲數の闕減する無く　此の輪は常に汝の頭上に在らん　是の如き事は實なり終に疑はされ」』。

爾の時世尊、卽ち偈を說きて言はく、

『若し知識有りて彼に利を與へんに　彼乃ち返りて更に其に禍を與へば　彼則ち後に是の如き殃を受けんこと　猶ほ慈者の瞋恨を懷けるが如けん』　惡を與ふべからざるに反りて惡を與へ罪を與ふべからざるに更に罪を與へば　彼は則ち後に是の如き殃を受けんこと　猶ほ慈者の瞋恨を懷けるが如けん』　若し慈心を興すに反りて便を覓め　恩德の處に恩を報ぜずば　彼は則ち後に是の如き殃を受けんこと　猶ほ慈者の瞋恨を懷けるが如けん』　業力は遠きより牽きて將つて來り　業力は近きより牽きて將つて去り　業力は人を將つて處處を經　其の作業に隨ひて苦樂を受けしむ』　地に非ず空に非ず海中に非ず　亦山間の巖石の裏にも非ず　一切の地方處に　能く之を脫して業を受けざらしむる有ること無けん』

佛、諸比丘に告げたまはく、『汝等比丘、意に於て云何。是の時の慈者は、豈異人ならんや。異見を作す勿れ。卽ち我が身これなり。我、彼の時、海に入らんと欲せるを以ての故に、八關齋戒を受けたり。彼の業報の因緣力を以ての故に、是の如き四種の寶城に値ふを得、一切の諸物皆悉く具足

して乏少する所無かりしも、悪心瞋恨の因縁もて、母の頭を蹈みたるに由るが故に、具足して六萬年歳を經由し、大鐵輪熾然の苦を受けたり。汝諸比丘、因業の報應は、虚空しく受くるに非ず。但この衆生、善惡の業を造りて、業の因縁に隨ひて、是の報を受くるのみ。是の故に諸比丘、應に須らく業を受くべし。身業を清淨にし、口業を清淨にし、意業を清淨にせよ。諸比丘、若し比丘有り、身自ら愚癡にして、罪福善不善等を辯ぜずば、應當に師長・和上・阿闍黎等に諮問すべし。後に乃ち城邑聚落に行かんとせんに、若し和上・阿闍黎の許可せざるに、自ら專ら去らば、應當に如法に其の不敬不孝順の罪を治すべし』と。

一 尸棄佛本生品第五十三の上

二 爾の時菩薩、優婁頻螺河岸の側に住在して、其の苦行を行じ、坐臥宜しきに隨ひ、弊故の衣を着け、隨用器に受けて、一日の內に、唯一粒を食するのみ。所謂、胡麻、或は一粳米、或は一小豆、或は一三菉豆、或は一大豆、或は赤粳米、或は一青豆なり。彼の時に當り、輸頭檀王、（Suddhodana）菩薩を訪覓めて、所在を知らず。他に借問して言ふ、『我が子は、今何處にか住在し、何の事業をか作せる』と。是の月日に於て、私密に使を遣はし、菩薩行坐の處を訪問せしめんとて、使者に告げて曰ふ、『卿今應當に我が子の所停の處、何の爲作す所なるかを訪知すべく、應に我に報じて知らすべし』。時に諸使者、是の勅を承け已りて、即ち王に白して曰はく、『王の勅する所の如くにして、敢て皆に違せじ』と。遂に即ち馳訪して、次第に漸く優婁頻螺所居の處に到り。其の菩薩の難苦行を行ぜるを見、尋いで還り往きて、輸頭檀王に白して、是の如き言を作す『善い哉、大王、今童子は、優婁頻螺所居の處に在りて、難苦行を行じ、其の居停する所、皆悉く宜しきに隨ひ、乃至日に一青豆等を食す』と。時に輸頭檀王、是の事を聞き已り、心に悵快を懷きて、愁憂して樂します。即ち是

【一】（イ）羅睺羅、在胎六年にして誕生せるため、耶輸陀羅疑はれたる事情、並に本生。（ロ）淨飯王、佛を迎へんとして、優陀夷等を遣はす。（ハ）佛、生國に行化せんとし、其の地が尸棄佛本生の地なることを說く。

【二】以下次卷の初、魔王本生に至るまで、Mahāvastu, II. 231. Śriprabha jātaka に相當す。

【三】菉。玉篇。かりやす。一種の草。但しこゝは Mudga, 即ち綠豆に類せる、學名 Phaseolus Mungo の類と思はる。

の言を説く、『嗚呼我が子は、身體羸弱たるに、汝、何事を以てか、乃至是の如く次第に六年なる』。時に諸使者、其の菩薩の善惡の消息を將つて、大王の所に詣り、次第に論説す。

爾の時に當り、耶輸陀羅(Yaśodharā)釋種の女、諸使人の『童子が苦行處に在りて、其の苦行を行じ、所居の行住、宜しきに隨ひて安止し、乃至、日に一靑豆等を食す』と論説するを聞き、是の事を聞き已りて、即便ち思惟すらく、『我今安然として樂を受くるは、實に非善なり。何を以ての故に。我が夫は、今既に苦行に在り。我も亦應當に童子の法に順ひて、其の苦行を行ずべし』。時に耶輸陀羅、是の念を作し已るや、即ち瓔珞、金・銀・琉璃・眞珠・摩尼・種種の諸寶、塗香・末香、諸の花鬘等を脱して、皆悉く棄捨し、純白衣を著して、唯一髻を留め、凡惡の鋪に臥し、食する所麁澀にして、纔に活命すべく、世人苦行の能く及ぶ者莫し。

爾の時世尊、菩提を得已りたまふ時、優陀夷(Udāyi)、佛に白して言さく、『希有なり世尊、耶輸陀羅は、既に世尊の、山林に在りて苦行を行じたまふを見し時、云何ぞ能く世尊に隨順して、苦行を行じ、諸餘の世人の能く及ぶ者莫かりしか』と。佛、優陀夷に告げて言はく、『優陀夷、耶輸陀羅釋種の女は、但に今世のみ、我の山林に在りて大苦行を行ずるや、能く我に隨順して苦行を行ぜるに非ず、過去の世にも、我が厄難に在るや、亦能く我に隨ひて大苦難に入れり』。時に優陀夷、佛に白して言さく、『世尊、其の事は云何。願はくは爲めに解説したまへ』。佛、優陀夷に告げたまはく、『我念ふに、往昔過久遠時に、一の閑靜なる阿蘭若(araṇya)處有り、其處の山林溪壑の内に、[四]一の鹿王(mṛga-rāja)有り。諸の群鹿を領し、草を食して活き、次第に遊行す。彼の時に、一獵師(lubdhaka)有り。木、[五]機を張設して、彼の鹿王を[六]羂く。爾の時群鹿、各各走散す。爾の時に當り、一母鹿有り、彼の鹿王の、機の爲めに羂けられ、即ち住りて走らざるを見――爾の時、諸鹿多く人語を解しぬ――彼の鹿母、即便ち偈を説きて、鹿王に告げて言はく、

【四】 Mahāvastu は、鹿王の名を Śiriprabha とし、獵師の名を Nilaka とす

【五】 機 (pāśa) は慧琳音義に弶に作り、施罥於道也と爲す。

【六】 羂(oḍḍita)。わなにかく。

「鹿王當に努力すべし　奮迅せよ足と頭とにて　機羂を張設せる人は　今猶ほ未だ此に來らず」

爾の時鹿王、即ち偈句を以て、母鹿に報じて言はく、

「我今力を用ふと雖も　此の機を抜く能はず　皮を以て作れる羂繩は　縛束する轉復急なり」

微妙なり諸山林　甘泉水草は美なり　願はくは未來世に　永く此の殃を受くる莫からんを」

而して偈有りて說く、

『是の時彼の二鹿は　恐怖して涙交流れぬ　惡獵師の來るや　刀杖を執持せるを以ての故なり」』

卷の第五十一

尸棄佛本生品第五十三の下

『爾の時鹿王、遙に獵師の杖を執りて來るを見、卽便ち偈を以て牝鹿に告げて言ふ、
「此是の獵師將に來至せんとす　身體烏黑にして鹿衣を著けたり　今來りて必ず我が皮膚を剝ぎ
　肢節を斬截して將つて去らん」
爾の時、牝鹿遙に獵者を迎へ、漸く其の前に至り、偈を說きて言はく、
「善い哉汝獵師　今草鋪を敷くべし　先づ我が皮肉を破り　爾して乃ち鹿王を殺せ」
　爾の時獵師、牝鹿に問ひて、是の如き言を作す、「今この鹿王は、汝と何の親かある」。是の時牝鹿、獵師に報じて言ふ、「此はこれ我が夫なり、甚だ相愛敬す。是の因緣を以て、是の如き念を作し、彼と愛別分離せざらんを願ふ。是の義を以ての故に、必ず先に我を殺して後、鹿王に及べ」。爾の時獵師、是の如き念を作す「此はこれ仁婦、希有なり希有なり、是の鹿、能く是の如き大事を作す」。時に彼の獵師、其牝鹿に於て、大歡喜を生じ、卽ち偈頌を以て、牝鹿に報じて言はく、
「我、生小より未だ曾て聞かず　諸獸の人語を解する有るを見ることを　此の事世間に甚だ希有なり　我意何ぞ害心を起すに忍びん』　今旣に汝の身を殺さず　亦復幷に爾の夫をも放ち去り
　是の如く全く爾の身命を活かさん　願はくは汝夫婦恒に相隨へ」』
　爾の時獵師、彼の椋所に詣りて、鹿王を解放す。爾の時、牝鹿、王の縛を免れたるを見、心に大に歡喜し、遍體踊躍して、自ら勝ふる能はず。復偈句を以て、獵師に白して言はく、
「善い哉是の如き大獵師　諸親の見る者皆歡喜せん　我の如きは夫の免脫を見るを得て　歡喜踊躍する亦復然り」と』

佛、優陀夷に告げたまはく、『汝、今當に知るべし。彼の鹿王は、豈異人ならんや。卽ち我が身是れなり。時の牝鹿は、耶輸陀羅、卽ち其の是れなり。耶輸陀羅は、彼の時にも尙ほ我に隨順して、大苦厄を受けたり。況んや今日、能く我に隨順して、大苦行を行じ、諸世人の能く行ずる莫き事をも能く行ずるをや』。

[一]其の羅睺羅（Rāhula）は、今過業に逼惱せらるるを以ての故に、胎に在ること六年なり。耶輸陀羅は、是の菩薩の爲めに、愁毒を懷けるが故に、自ら嚴飾せず。然るに其の如來は、六年を過ぎて後、阿耨多羅三藐三菩提を證したまふ。時に輸頭檀王の、遣はせる所の使人、消息を候へる者、彼等使人は、佛世尊の坐より起ちたまへるを見るが故に、卽ち輸頭檀王の所に詣り、王所に到り已りて、王に白して言はく、『大王に當に知るべし。太子は今、苦行已に徹し、心意を稱へ滿てり。已に坐より起ちたまひぬ』と。爾の時輸頭檀王、是の語を聞き已りて、別に二人に勅し、之に告げて曰はく、『汝等今當に太子の所に詣るべし、彼處に至り已らば、當に我が言を宣して彼の太子に告ぐべし、「汝今苦行已に徹せば、當に速に來りて、國事を統領し、轉輪王と爲りて七寶を具足すべし」と』。時に彼の二人、王勅を奉じ已り、王の敎命に依りて、如法に頂受し、是の勅意を承けて、太子の所に詣り、頭面もて足を禮し、却いて一面に住して、太子に白して言さく、『善い哉、聖子、輸頭檀王は、我が二人に勅すらく、聖子の所に到り、聖子に告げて言へ、汝、今、苦行已に徹せば、今速に來り我が位を承受して、轉輪王と爲り、七寶の具を悉く備足せしむべしと』。爾の時世尊、彼の二人の是の言を作すを聞き已り、偈を說きて言はく、

『若し人已に調伏し　世に伏せざる者無き　諸佛の境は無邊にして　跡無く來去無し。
若し人網に入らず　愛の從りて生ずる所無き　諸佛の境は無邊にして、跡無く來去無し』。

爾の時耶輸陀羅、其の宮內に於て、是の太子の苦行已に徹せるを聞き、猶ほ望むらく、『久しから

【一】羅睺羅の在胎六年にして生るゝや、輸頭檀王等、耶輸陀羅の貞節を疑ひて之を殺さんとし、佛知りて之を救ひ給ふ。

ずして必ず應に還り來り、當に王位を受けて、國を政し民を治め、轉輪王と作るべし』と。即ち是の念を生ず『太子若し轉輪聖王と作らば、我即ち當に第一妃后たるべし』と。是の如く念じ已り、歡喜踊躍、其の體に遍滿して、自ら勝ふる能はず。種種の香を持ちて、其の身體に塗り、即ち種種無價の寶衣及び諸瓔珞を著けて、自ら莊飾し、諸の妙饌を食し、寶床・柔輭の臥具に眠寢し、是の如き事を作して、豫て太子を待つ。

時に羅睺羅、六年を過ぎ已りて、其の往業を盡す。耶輸陀羅、即ち種種の資物食飲を以て、自ら供養す。是の因縁を以て、其の羅睺羅、即便ち出生す。既に出世し已るや、時の諸内人、尋いで共に輸頭檀王に諮白して、是の如き言を作す『異なる哉、大王、耶輸陀羅は今乃ち子を生みぬ』。輸頭檀王、此の事を聞き已りて、心に大に瞋怒して、是の言を作す『今、我が太子、家を捨てゝ出家し、已に六歳を經たるに、耶輸陀羅が、今此の子を生まんこと、何によりてか得ん』。是の時釋子提婆達多(Devadatta)、是の如き言を作す『此はこれ我が子なり』。輸頭檀王、倍瞋恚を增し、諸釋子を召して、悉く聚集せしめ、即ち之に告げて曰はく『卿等當に知るべし、耶輸陀羅は、太子を護らず、亦我をも護らず、諸釋を護らず、名聞を惜まず、其の意を縱恣にし、我が宗族を辱しめたり。我等は今應に何事を作してか苦治すべき』。

爾の時釋種、皆共に同聲にて、是の如き言を作す『耶輸陀羅は、家を汙辱せり。我等は應當に辱家法の如くに、之を苦治すべし』。時に、彼の衆内に、一大臣有りて、是の如き言を作す『當に其の髮を髡にし、杖を以て之を打ち、打ち已りて印記すべし』と。復一臣有りて、是の如き言を作す、『當に其の耳を截り、其の鼻を劓去すべし』と。復一臣有りて、是の言を作す『當に兩目を挑るべし』と。復、一臣ありて、是の如き言を作す『木上に槍貫せん』と。復、一臣有りて、是の如き言を作す『空井に擲著せん』と。復一臣有りて是の如き言を作す『火内に擲著せん』と。復一臣有り

て、是の如き言を作す、『熾然せる大熱鐵柱を抱かしめよ』と。復一臣有りて、是の如き言を作す、『手足を繫縛して、大群牛をして、踏みて之を殺さしめん』と。復一臣有りて、是の如き言を作す、『地上に臥さしめ、白象に之を踏ましめよ』と。復一臣有りて、是の如き言を作す、『頭より足に至るまで、鋸を以て之を解くべし』と、復一臣有りて、是の如き言を作す『節節支解して分ちて八段と爲せ』と。爾の時輸頭檀王、諸臣に告げて言はく『我今勅して耶輸陀羅及び所生の子をして、倶に當に死に就かしむべし』。

是の時如來、已に阿耨多羅三藐三菩提を成じ、便ち自ら耶輸陀羅及び所生の子の厄難の處に在るを觀見し、慈悲心に逼惱せらるゝを以ての故に、處處を顧視したまひぬ。時に毘沙門天王、佛を去ること遠からずして有り。時に彼の天王、如來の意を知り、卽ち筆墨及び陀羅葉（tālapatra）を持ちて、佛所に往詣するや、爾の時世尊、手もて自ら書を作り、王に白して言はく、『其の所生の兒は、これ我の息なり。願はくは疑有る莫かれ』と。爾の時、毘沙門天王、世尊の所より、是の書を受け已り、尋いで卽ち輸頭檀王大衆の內に往至し、卽ち其の書を出して、王の懷裏に擲ぐ[二]。爾の時、彼の書に、證有り、驗有り。輸頭檀王は、是の驗を見已りて思尋すらく、『此の書は眞にこれ我が息悉達太子(Siddhārtha)の、手に自ら書ける處なり』と。爾の時、輸頭檀王及び諸大衆は、此の因緣の爲めに、耶輸陀羅に、歡喜心を生じぬ。

耶輸陀羅は、人の『大王勅する有りて、其の身及所生の子を殺さんと欲す』と道ふを傳聞し、身命を護らんが故に、速疾かに往きて摩訶波闍波提憍曇彌の所に至り、是の如き言を作す、『善い哉、尊后、我に是の過無し。此の所生の子は、太子の胎胤なり。聽聞くらく、久しからずして太子來到すと。若し其れ到り已らば、自ら應當に知るべし、今我を殺さんと欲するは、これ虛枉のみなるを』。爾の時摩訶波闍波提、耶輸陀羅の是の語を作すを聞き已りて、心に復歡喜して、卽ち使を遣はし、

【二】三本に擲字を加ふ。今之に從ふ。

輸頭檀王に請ひ、阿輸迦樹林（asokavana）の內に至り、林處に到り已りて、王に白して言はく、『唯願はくは大王、當に知るべし、今耶輸陀羅釋種の女は、我が邊に至りて、是の言を作す、「我に此の過無し、我が所生の子は、太子の體胤なり。若し彼の太子、身來到し已らば、自ら虛實を知らん」と。是の故に大王、是の事を作す莫く、應に須らく彼の太子の來到を待ち、卽ち此の事の定めて實なるか云何を知るべし』と。爾の時輸頭檀王、彼の摩訶波闍波提の是の如き等の善利益の義を作すを聞き、卽ち之に報じて言はく、『此の言、理有り。若し尊后の言說する所の如くんば、我等は宜しく住して、太子の至るに聽くべし。若し爾せずば、當に此事の定めて實なるや如何を知るべけんや』。復此の如くなりと雖も、輸頭檀王は、釋女耶輸陀羅に於て、未だ歡喜を生ぜざるに由り、是の故に衣服及び餘の瓔珞を、少分供給して、發遣して隨宜の處所に安置す。

〔三〕爾の時、釋女耶輸陀羅は、復摩訶波闍波提憍曇彌の所に至り、至り已りて白して言はく、『善い哉、尊后、我、今、園內に詣り、昔所許の諸天に微願を酬い、暫く一たび祠祀せんと欲す。未だ尊后の聽許するや不やを審にせず』と。爾の時、摩訶波闍波提、彼の釋女耶輸陀羅と共に、羅睺羅を將て、廣く供具を辦じ、雜物を齎持して、彼の神所に詣る。其の神を名けて、盧提羅迦（Rudraka?）といひ、神に從ひて名を作して、其の苑も亦盧闍羅迦と名く。彼の苑中に、菩薩、往昔在家の日、恆に彼の苑に於て、按摩遊戲しぬ。彼の苑の內に、一大石有り、菩薩往日、上に坐起せり。耶輸陀羅釋種の女は、爾の時に當り、羅睺羅を將て、彼の石に臥息せしめ、後に石を捉りて水中に擲著し、遂に誓を立てゝ言ふ『我が今の要誓は、如實不虛なり。唯太子のみを除きて、更に丈夫の、共に彼此を行く無し。我が所生の兒は、實にこれ太子の體胤の息なり。これ虛ならずば、此の大石をして、水上に在りて浮遊し、沒せざらしめよ』。時に彼の大石、彼の要誓の如く、水上に在りて、遂に卽ち浮住すること、芭蕉葉の水上に浮みて、沈まず沒せざるが如く、亦復此の如し。時に大衆、此を見

【三】この下の石を投じて試むる傳說は、有部系のものならん。有部破僧事卷五、卷十二に見ゆ。

聞し已りて、稀有の心を生じて、讙譁嘯調し、踊躍已む無くして、叫喚跳躑し、歌舞作倡し、旋裾舞袖し、又種種の音聲技樂を作す。

爾の時輸頭檀王、此の事を聞ける時、歡喜踊躍、其體に遍滿して、自ら勝ふる能はず。即ち勅して彼の迦毘羅婆蘇都城を莊嚴し、荊棘・沙礫・土石・穢惡糞等の諸不淨物を除かしめ、更に香湯を以て、掃灑塗治して、其の地を摩拭せしめ、在在處處に、香鑪を安置して、最妙の香を燒き、其の香鑪間に、種種妙色の寶餅を雜錯し、其の寶餅の內に、香水を盛り滿て、其の水中に、復香花を安じ、其の香鑪寶餅の中間に、更に復芭蕉を安置して行列し、復種種の紛葩繒綵を懸け、種種雜色の幢幡を竪立し、眞珠の條貫もて、處處に交橫し、金鈴羅網もて、遍ねく其の上を覆ひ、復日月星宿の形像を作して、空中に張設し、寶花の流蘇を處處に垂下し、復種種雜の犛牛の尾を以て、所在間錯す。

爾の時、嚴飾せる迦毘羅處は、猶ほ幻炎の乾闥婆城の如し。是を莊嚴し已るや、羅睺羅を將て、即ち彼の城に入れ、釋種の宗族傍親を召喚して、悉く皆聚集せしめ、廣く種種の財物飲食を辦じ、須ふる所の調度を、方に始めて別に更に羅睺羅の爲めに作りぬ。其の生れし日は、耶輸陀羅の生息せる時、これ羅睺羅阿修羅王(Raihvasurendra)、其の月を捉りて食ひ、剎那の頃に於て、暫く捉へて還た放てるなり。是の故に釋種の諸親族等、聚集議論して、羅睺羅食月の際、一剎那の間に、此の童子に生みたればとて、是の故に名を立てゝ、羅睺羅(Raihula)と名けぬ。

其の羅睺羅は、喜ぶべく端正に、諸人の見る者、歡悅せざる無く、膚體黃白にして、眞金色の如く、然も其の頭頂は、猶ほ繖蓋の如く、其の鼻高隆にして猶も鸚鵡の如く、兩臂修肅に、下垂して膝を過ぎ、一切の肢節、缺減有ること無く、諸根完具して、充備せざる無し。爾の時、輸頭檀王は、羅睺羅の爲めに、四嬭母を置きぬ。何等をか四と爲す、一は抱持し、二は洗濯し、三は乳を飲まし

め、四は遊戯せしむ。此の四嬭母は、時に隨ひて將養ひ、久しからずして卽ち智慧を備足せしむ。

[四]爾の時世尊、波羅捺に在まし、大法輪を轉じたまふ。時に諸天、各各相告げ、其の聲展轉して、乃ち梵頂に至る。卽ち彼の時、輸頭檀王は、子の悉達が已に阿耨多羅三藐三菩提を證するを得、旣に覺證し已りて波羅捺に至り、大法輪を轉じて、天と人との爲めに法を演說するを聞き、爾の時輸頭檀王、世尊の所に於て、倍更に憶念して、是の思惟を作す、『何の方便を設けてか、彼の太子をして、諸眷屬を愍れみ、速かに來りて此の迦毘羅城に至らしめん』と。復是の念を作す、『應當に誰を遣はして使者と爲さんか。誰か智略有りて、能く此の事を了せん』。復是の念を作す、『此の優陀夷(Udāyi)國師の子、次に復、車匿(Channa)の、此の二人は小より已來、恆に悉達と共に塵を捐し土を弄し、伴涉遨遊せり。此の二人は、並に各悉達多の所に至るに堪ふ。我、今應に遣はして彼に往き使を爲さしむべし』。

爾の時輸頭檀王、優陀夷國師の子、及び車匿を喚びて、之に告げて言はく、『汝等二人、應當に時を知るべし。今太子は、旣に阿耨多羅三藐三菩提を成就するを得已りて、波羅捺國に至り、大法輪を轉じて、諸天人の爲めに諸法を演說す。汝等、今速かに往きて彼の悉達多の所に至り、我が告勅を宣じて、我が意旨を傳ふべし。「今、汝太子、難苦行を行じて、其の邊際に至り、汝の心を稱遂し已りて、阿耨多羅三藐三菩提を證するを得、已に復無上の法輪を轉じて、旣に天人の爲めに諸法を演說すと。善い哉、太子、今來りて迦毘羅城に詣るべし。一切の諸眷屬を憐れむが爲めの故に」と』。

爾の時、優陀夷國師の子、幷に及び車匿、王に白して言ふ、『大王當に知るべし、悉達太子にして、若し來らずば、未だ審にせず我等更に何の計をか作すべき』。王之に報じて言はく、『汝等、但太子の處分を聽け』。其の優陀夷國師の子、幷に及び車匿、卽ち王に白して言ふ、『大王の勅の如くにして、敢て命に違せじ』と。王勅を受け已りて、其の足を頂禮し、各本處に還りて、父母諸眷屬等に辭別

【四】淨飯王、優陀夷並に車匿を遣はして佛を迎へしむ。Mahāvastu, III. 90 以下に相當す。

し、漸く行きて波羅捺國諸仙居處の鹿野苑中に至り、彼處に至り已りて、佛足を頂禮し、一面に却住して白して曰さく、『世尊、我等は今大王輸頭檀の勅を奉承し、遣來して此に至る。而して王、告げて言ひたまはく、「善い哉、太子、汝、今苦行已りて超越を得、汝の心願を滿して、阿耨多羅三藐三菩提を成就し、大法輪を轉じて、〔五〕復天人の爲めに、諸法を演說すと。善い哉、太子、今來りて此の迦毘羅婆蘇都城に至るべし。一切の諸眷屬を憐愍するが故に」と』。

爾の時世尊、此の語を聞き已り、故に偈を說きて言はく、

『若し人已に調伏して　世に伏せざる者無き　諸佛の境や無邊にして　跡無く來去無し』　若し人網に入らず　愛の從りて生ずる所無き　諸佛の境は無邊にして　跡無く來去無し』

〔六〕時に優陀夷國師の子、幷に及び車匿、白して言さく、『世尊は我等をして當に何に所作すべからしめんと欲したまふか』。佛、彼等に告げて、是の如き言を作したまふ、『汝能く我が此の諸弟子出家の法を學ぶや不や』。爾の時世尊、彼等に問ひたまふと雖も、但彼の二人は、先に佛邊に於て已に慕仰出家の意有り。因りて佛に白して言さく、『我等並に各出家を願樂す』と。時に世尊、即ち出家を聽して、具戒を與受したまふ。

〔七〕爾の時世尊、出家してより、起にも坐にも、未だ曾て生地迦毘羅城に面向したまはず、乃至、未だ化したまはず。賢友知識五比丘等、及び長老耶輸陀（Yaśoda）等の親善友輩、波羅捺城所生の四大富長者諸勝男子、一は毘摩羅（Vimala）、二は蘇婆睺（Subahu）、三は富樓那（Pūrṇa）、四は伽婆般帝（Gavampati）。爾の時尊者耶輸陀に善知識等五十餘人あり、長老富樓那彌多羅尼子に亦徒衆三十一人あり、長老摩訶迦旃延に、復八萬四千の徒衆あり、長老沙毘耶（Sabhiya, Sabhika）、亦勝徒合して三十人、同行善友、其數六十あり。復、迷祇耶（Meghiya?）聚落所生の長老那毘迦栖那耶那（Nābhika-senayāna?）あり。爾の時復一婆羅門あり、其の二女の、一は難陀（Nandā）、二は婆羅

〔五〕天人は、縮刷藏經に大人に作る。天人の誤なる事疑なし。

〔六〕優陀夷並に車匿、出家して佛弟子となる。

〔七〕優陀夷、佛に還國遊歷を請ふ。Mahāvastu には、こゝの諸人名を擧ぐる約十行の文を缺く。

〔八〕迷祇耶村の那毘迦とは、何人なるか明かならず、或は優樓頻螺村の村主を指すか。

(Bali) あり。爾の時、復一婆羅門の名を提婆と曰ふと、并に其の妻とあり。長老頻螺迦葉に合して五百の螺髻梵志あり、復、長老那提迦葉に螺髻梵志其の數三百あり、復、長老伽耶迦葉に諸徒衆等、其の數二百あり、亦是れ螺髻諸梵志なり。爾の時、復、長老優波斯那に數合二百五十一人ありて倶なり。爾の時、復、一樹林中に五百の苦行仙人等あり、爲に法雨を雨らす。王舍城中の頻婆娑羅王、及び臣等、凡そ九十二那由他人あり。長老摩訶迦葉・長老舍利弗・目犍連等あり。又、刪闍耶波梨婆闍迦外道弟子の五百人等あり。是の如き輩若干人を化し已りて、然る後世尊は、方に始めて面を廻らして、本生地迦毘羅城に向ひたまふ。時に優陀夷、婆伽婆の面を廻らして、坐にして本所生地迦毘羅城に向ひたまふを見る。又復、諸天、彼の長老優陀夷に告げて言はく、『善い哉、尊者、今佛に請ひて、生地なる本迦毘羅婆蘇都城に至りたまはんことを願ふべし。其の諸眷屬を憐愍したまふが爲めの故に』。爾の時長老優陀夷、善く聖意を知り、如來の將に去りたまはんとして、遂に坐より起ちたまふや、右臂を偏袒し、衣服を整理して、合掌して佛に向ひ、僂身低頭して、偈を説きて言さく、

『[九]譬へば非時の諸樹木の如し、花果を著けんと欲すれば其の時を待つ　非時の花果には光麗無し　尊今恒伽河を渡りたまふべし』　樹木の紛葩花正に開き　其の花香十方刹に遍ねく　花既に開敷して果實を結べり　尊の生地に向ひたまふは正にこの時なり』　此の時や最も妙に最も勝れたりと爲す　清流香潔たり泉池の水　百鳥林中に妙響を出す　諸の欣悦の事はこれ其の時なり』　釋種往昔心に發願す　「一切の大地を我獨攝せん」と　尊の出家を見て大いに憂怖し　心願に稱はずして甚だ鬱怏たり』　世尊の眷屬の思ひ遲つ所は　尊の生子羅睺羅に由る　願はくは彼に往至して疑を決したまへ　大衆は渴仰して見んと思欲す』　如來よ母の養育の恩を念じたまへ　彼の慈心憐愍の爲の故に　若し遠來の大聖師を見ば　應に歡喜を得て憂惱を除くべ

【九】この歌、Mahāvastu, III. 93 は、四偈に過ぎず。

し』 釋種の大王輪頭檀は 往昔此の微妙の願を起せり 「何が當に金色の體なる我が子の此の迦毘羅城に入るを見るを得べき」と』 此の時は熱に非ず亦寒に非ず 世尊の受樂の道たるに堪稱す 億數の釋種は瞻仰して待つこと 猶ほ畢宿(lohiṇī) の月廻(tāraka, 惑星) を冀ふが如し』

一〇 爾の時世尊、卽ち長老優陀夷に告げて言はく、『汝優陀夷、若し其れ然らば、汝等二人、先に於て彼の迦毘羅婆蘇都城に至り、我が親眷諸釋種等に告げて、是の如き言を作すべし、『今、太子は、苦行已に徹し、汝等を愍れむが故に、久しからずして來らんと欲す』と。其の優陀夷及び彼の車匿、佛勅を蒙り已りて、佛に白して言さく、『唯然り世尊、我敢て違せじ』とて、佛足を頂禮し、右遶三匝して辭退して去り、次第に漸く行きて、迦毘羅婆蘇都城の尼倶陀林 (nyogrodha-vana) に至り、彼の聚落に依りて、暫時止住す。

一一 爾の時輪頭檀王、駟馬寶車に嚴駕して、出でて彼の園に往至して、好地を占觀す。輪頭檀王、時に遙に長老車匿及び優陀夷の、鬚髮を剃除して、身に袈裟を著け、手に鉢器を執れるを見、見已りて卽ち諸大臣に告げて言はく、『汝等大臣、此は何人ぞ。鬚髮を剃除して、身に色衣を著け、手に應器を持つ』。時に諸大臣等、卽ち王に報じて言はく、『此等の二人は、乃ちこれ悉達太子の門徒なり』。爾の時輪頭檀王、心に懊惱を懷き、悵怏として樂しまずして、是の言を作す、『我が子は端正にして、容儀喜ぶべく、觀るもの厭く無きこと、喩へば金像の如かりしに、彼の身形、今是の如くならば、觀見するを喜ばず』とて、諸臣に謂ひて言はく、『汝等必ず應に是の二人を斷じて、我をして見しむる勿かるべし』。是の語を作し已りて、始めて園內に往く。爾の時臣等、是の如き念を作す、『今此の二人、一は乃ちこれ國師の子、二は悉達太子の侍者なり』と。是の籌量を作して、遣却する能はず。輪頭檀王、園に在りて遊觀し、還た出でんと欲する時、爾の時諸臣、王が彼の長老二人を見て、煩

【一〇】 優陀夷先發して迦毘羅婆蘇都に還る。以下、尸棄佛本生偈に至るまで、Mahāvastu に缺く。

【一一】 淨飯王、出家形を見て喜ばず、二人を林中より却かしむ。

惱を生ぜんを恐るるが故に、遂に將て空精院内に安置す。

〔一二〕爾の時世尊、諸比丘に告げて、是の如き言を作したまふ、『汝等比丘、今速かに疾く衣鉢を辨具すべし。我、今行きて餘國の城邑聚落を觀んと欲す。因りて、我が本自生地たる、彼の迦毘羅婆蘇都城に向はんと欲す。一切の諸眷屬を憐愍するが故に』爾の時、長老舍利弗、坐より起ちて、衣服を整理し、右臂を偏袒し、右膝を地に著けて、合掌して佛に向ひ、是の言を作す『希有なり、世尊、未曾有なり、世尊。今行きたまふは、正にこれ時、甚精甚妙なり。今や世尊、乃ち諸餘の國城を遊觀せんと欲したまふ、實にこれ其の時なり』。爾の時佛、舍利弗に告げて言はく『舍利弗、汝、今此の事を聞くを得んと欲せば、當に汝の爲めに、尸棄(Sikhi)如來・多陀阿伽多・阿羅呵・三藐三佛陀の、將に本自生地に遊行し、城邑聚落を處處觀看せんと欲したまふや、其の時の微妙にて、甚だ愛樂すべかりし因緣の事を說くべし』。爾の時舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、今正にこれ時なり。願はくは比丘の爲めに、往昔の尸棄如來の自生地に詣り、國邑を遊觀したまへるを演說し、諸比丘をして佛說を聞き已りて、當に是の如く持せしむべし』。

〔一三〕爾の時世尊、卽ち偈を以て、尸棄如來の本生地を遊歷觀看し給へる事を說きたまふらく、

『善い哉甚妙なり舍利弗　汝今應當に一心に聽くべし　昔日尸棄聖如來の　往昔生地を觀看したまへる事を』〔一四〕尸棄聖如來の往見したまへる　所至の一切の村聚落は　處處に皆各甘泉を生じ八功德の味悉く具足せり』　尸棄大聖師の往見しませる　至る所の一切の村聚落は　處處皆諸花樹有り　枝葉垂下して普ねく蓊鬱たりき』　至る所の一切の林樹の下　尸棄如來の止住したまふ處　是の樹自然に妙花を雨らし　遍ねく其の地に布きて悉く充滿す』　經る所の一切の林樹の下　尸棄如來若し止住せば　其の樹の甘果自然に落ち　枝條婀娜として悉く低垂せり』樹有りて人の攀づ及ぶ所は　花果紛雜して甚だ憐れむべし　尸棄如來大聖師の　流行に是の如

【一二】佛、尋いで故鄕に還らんとし、故鄕が嘗て尸棄佛本生の地たりしことに於て、眞に佛に取つての故鄕たり得ることを明す。

【一三】Mahāvastu, III. 94—97. に次下の偈出づ。

【一四】所至一切村聚落、往見尸棄聖如來、梵文に yaṃ so grāmaṃ vā nigamaṃ vā upasaṃkramati nāyako, 今梵文に照して判讀す（尸棄）導師が往詣したまへる所のその村又は町は、——とす。

き事を[一五]應感す』　若し人の及ばざる所の樹は　妙花甘果自然に落ちたり　尸棄如來大聖師の流行に是の如き事を應感す』　諸天は虚空裏に在りて　大妙花萎迦羅を雨らせり　尸棄如來大聖師の　流行に是の如き事を應感す』　諸天は虚空裏に在りて　普ねく清涼妙花の雨を雨らせり　尸棄如來大聖師の　流行に是の如き事を應感す』　諸天は虚空裏に在りて　花の名づけて曼陀羅といふを雨らせり　尸棄如來大聖師の　流行に是の如き事を應感す』　諸天は虚空裏に在りて　花の名づけて波黎耶といふを雨らせり　尸棄如來大聖師の　流行に是の如き事を應感す』　諸天は虚空裏に在りて　花の名けて毘婆伽といふを雨らせり　尸棄如來大聖師の流行に是の如き事を應感す』　諸天は虚空裏に在りて　花の名けて香勝香といふを雨らせり　尸棄如來大聖師の　流行に是の如き事を應感す』　諸天は虚空裏に在りて　諸種種妙香の花を雨らしぬ　尸棄如來大聖師の　流行に是の如き事を應感す』　諸天は虚空裏に在りて　花の名けて普至香といふを雨らせり　尸棄如來大聖師の　應感流行に是の如き事あり』　諸天は虚空裏に在りて　異種の妙香花を雨らしぬ　尸棄如來大聖師の　應感流行に是の如き事あり』諸天は虚空裏に在りて　純眞金の妙香花を雨らせり　尸棄如來大聖師の　應感流行に是の如き事あり』　諸天は虚空裏に在りて　諸七寶妙色の花を雨らせり　尸棄如來大聖師の　應感流行に是の如き事あり』　諸天は虚空裏に在りて　花の雨らせるは純これ眞金莖なりき　尸棄如來大聖師の　應感流行に是の如き事あり』　諸天は虚空裏に在りて　純一切寶莖の花を雨らせり尸棄如來大聖師の　應感流行に是の如き事あり』　諸天は虚空裏に在りて　純優波羅花葉を雨らせり　尸棄如來大聖師の　應感流行に是の如き事あり』　諸天は虚空裏に在りて　純栴檀妙香末を雨らせり　尸棄如來大聖師の　應感流行に是の如き事あり』　諸天は虚空裏に在りて赤栴檀の妙末香を雨らせり　尸棄如來大聖師の　應感流行に是の如き事あり』　諸天は虚空

【一五】應感流行如是事は、次品の讃佛偈には遊行應感如是事とあり。梵文には cārikāyntanāni dṛśyensu; cārikāṃ pratipannasya; cārikāṃtāni dṛśyensu; cārikāṃ caramāṇa 等とあり。如是事は補辭と思はる。

裏に在りて　純牛頭栴檀の末を雨らせり　尸棄如來大聖師の　應感流行に是の如き事あり』諸天は虛空裏に在りて　種種の天の樂音を奏作せり　尸棄如來大聖師の　應感流行に是の如き事あり』　非人は虛空裏に在りて　諸の種種妙香花を拂弄せり　尸棄如來大聖師の　應感流行に是の如き事あり』　諸天は佛の路を行くに隨順して　諸種種妙香花を持ち　其の花に粉雜種種の光あるを　諸道路に雨らすこと深くして膝に至りぬ』　彼の時寒無く復熱無く　亦蚊虻の諸惡蟲無かりき　尸棄如來大聖師の　應感流行に是の如き事あり』　一切の大地悉く微動し幷に大巨海及び諸山も然りき　尸棄如來大聖師の　應感流行に是の如き事あり』　一切の大地は普ねく調柔に　清淨にして惡荊棘無かりき　尸棄如來大聖師の　應感流行に是の如き事あり』　有らゆる丘墟は悉く平滿し　山陵堆阜皆坦然たり　尸棄如來大聖師の　應感流行に是の如き事あり』　剎利種姓の大威德あるが　其の數八萬有六千　尸棄如來大聖師の　行住坐起に相隨逐せり』　諸婆羅門淨行種　其の數八萬有六千　尸棄如來大聖師の　行住坐起に相隨逐せり』　豪富威德の大長者　其の數八萬有六千　尸棄如來大聖師の　行住坐起に相隨逐せり』亦地居の諸天等有り　皆これ妙色の淨莊嚴もて　尸棄如來大聖師の　行住坐起に相隨逐せり』復虛空諸天衆の　皆大威德最嚴勝なるありて　尸棄如來大聖師の　行住坐起に相隨逐せり』四大天王及び天衆の　殊勝の妙色威德あるが　尸棄如來大聖師の　行住坐起に相隨逐せり』護世の四天大王等の　復殊妙の大威勢有るが　尸棄如來大聖師の　行住坐起に相隨逐せり』忉利三十三天衆の　微妙の威力轉殊勝なるが　尸棄如來大聖師の　行住坐起に相隨逐せり』須彌山頂の帝釋王　及び諸親友眷屬等　尸棄如來大聖師の　行住坐起に相隨逐せり』　善分・耶摩の諸天輩の　妙色清淨にして大威嚴あるが　尸棄如來大聖師の　行住坐起に相隨逐せり』喜樂の諸天兜率陀は　威德功德甚だ微妙なるに　尸棄如來大聖師の　行住坐起に相隨逐せ

り』 次に又化樂の諸天等も 所行の功德轉微妙なるに 尸棄如來大聖師の 行住坐起に相隨逐せり』 他化自在の諸天等も 威德の光嚴甚だ輝耀なるに 尸棄如來大聖師の 行住坐起に相隨逐せり』 大梵宮中の諸天輩の 妙色威力轉光華なるが 尸棄如來大聖師の 行住坐起に相隨逐せり』 色界所有の諸天輩 及び諸龍神・金翅鳥 乾闥婆等・阿修羅 夜叉・鬼神・及び羅剎・緊那羅等・摩睺羅 皆妙威嚴を具足するを得て 尸棄如來大聖師の 行住坐起に相隨逐せり』 世間に諸の衆生類あり 已に說き及び說かざる者も 尸棄如來大聖師の 行住坐起に相隨逐せり』 彼の尊尸棄は是の如くにして行き 無量の天人衆を調伏し 正覺して大涅槃に入り 永く諸有及び後生を斷じたまへり』

時に佛、復舍利弗に告げて言はく、『汝舍利弗、尸棄如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊の、初めて本自生地に住到せんと欲したまふや、是の如き等の無量微妙希有の行事有りき』と。

卷の第五十二

優陀夷因緣品第五十四の上[一]

[二]爾の時佛、復舍利弗に告げて、是の如き言を作したまふ『汝舍利弗、我、今當に行きて國土を遊歷すべし。初めて本自生地微妙の處に往き到らんと欲する、亦當に是の如くなるべし』。時に舍利弗、卽ち坐より起ちて、衣服を整理し、右臂を偏袒ぬぎて、合掌して佛に向ひ、是の言を作す『世尊、何の時か當に國土を遊歷し、聚落を觀看せんと欲したまふぞ』。爾の時佛、舍利弗に告げて言はく『汝舍利弗、我、今月に於て、半月を過ぎ已り、[三]布薩の事訖りて、然る後當に行きて國土を遊歷すべし』。爾の時、世尊、彼の半月を過ぎ、布薩已に訖るや、諸比丘と與に、諸國を涉歷したまひぬ。

爾の時世尊、王舍城に至り、飯食し已訖りて廻還し、足を以て城門の閫を蹈みたまふ時、彼の大地、六種に震動し、動き已りて復動き、涌き已りて復涌く。時に摩伽陀の彼の國の王頻婆娑羅、諸人衆と倶に佛所に詣り、卽ち佛に隨ひて行き、諸國を遊涉し、聚落を觀看す。時に虛空中の無量の諸天、千億萬衆、佛の將に國土を遊歷せんと欲したまふを見、皆來りて集會し、歡喜踊躍、其の體に遍滿して、自ら勝ふる能はず、口に種種微妙の音聲を出だし、歌嘯喜樂し、呼唱大喚し、旋裾舞袖し、天衣を拂弄し、復天上の優鉢羅花・拘物頭花・波頭摩花・分陀利花を以て、以て佛の上に散じ、復種種の末香・塗香・及び香花鬘を持ちて、亦佛の上に散じ、散じ已りて復散ず。

時に[四]婆伽婆(bhagava)、行き至らるる所に、諸國を觀看したまふや、一切衆類、皆悉く恭敬し、尊重し供養す。如來の到る處、最勝最妙なる諸の衣服・飲食・湯藥・牀褥・臥具を得、是の如き資物は、稱計すべからず、利養殊妙にて乏少する所無く、名聞流布して世間に遍滿しぬ。而も佛はこの名聞利養に於て、染著を生ぜず、猶ほ蓮花の濁水に處するが如し。爾の時世尊、是の如き等の無量の威

【一】優陀夷が、佛命によりて淨飯王を敎化歡喜せしめ、次で佛と淨飯王の、出家後の初對面の狀を記す。

【二】以下、mahāvastu, に缺く。

【三】布薩(Upavasatha or Posadha)。說戒の集會をいふ。淨住・長養・增長・長淨等の義譯あり。說戒によりて、自他共に犯せるを懺悔し、以て善法を長養し、破戒の過を淨除するを以てなり。

【四】婆伽婆。有德・能破・巧分別・有名聲・世尊等の諸譯あり。如來に多數の尊號ある中、常に總稱として用ひらる。

德有り、諸世間に於て、威德最勝、殊妙第一なり。

時に婆伽婆・多他阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師なる佛・世尊は、此の世、彼の世、若しくは天、若しくは魔・梵・沙門等、及び婆羅門、諸天人の境を、神通智を以て皆悉く證知したまふ。而して彼の世尊、世の爲めに說法したまふや、辭義巧妙にして、初も中も後も善く、悉く淸淨の梵行を具足せしめたまひぬ。爾の時、世尊、諸衆生の、化を受くるに堪ふる者を知りて、卽ち之を敎化し、宜しく建立すべきものには、敎へて建立せしめ、其の住する處に隨ひて、便ち成就するを得しめ、應に三歸を受くべきには、三歸の法を授け、應に五戒を受くべきには、五戒を授與し、應に[五]八關齋戒の法を受くべきには、卽ち八關齋戒の法を授け、應に十善を受くべきには、[五]十善法を授け、應に出家すべきには、出家を得しめ、應に具戒を受くべきには具足戒を授け、是の如く、次第に展轉漸進して、迦毘羅婆蘇都城（Kapilavastu）の園林內に至りて住したまふ。

[六]爾の時世尊、迦毘羅婆蘇都城に至り、尼拘陀樹林園（nyagrodhārāma）內に住し、偈を以て遊歷せる國土の勝妙の事を說きたまふ。

『釋種如來大師子　瞿曇最勝の威德者　往きて城邑聚落を觀るに　悉く廣大の諸異相有り』　至らんと欲する所の村聚落　往きて如來大聖師を見　處處の一切の諸人衆　恭敬尊嚴して來りて迎奉す』　至らんと欲する所の村聚落　往きて如來大聖師を見　凡そこの一切の諸華樹は　悉く各傾きて世尊の所に向ひぬ』　一切の林樹の下に至りて　世尊若しくは立ち若しくは止息するに　是の樹は自然に其の華を雨ふらし　遍ねく其の地に布きて悉く充滿す』　至る所の一切の林樹の下に　世尊中に於て若しくは止住せば　この樹の甘果は自然に落ち　枝葉婀娜として悉く低垂す』　樹有りて人の攀ぢ及ぶ所の者は　花果紛雜して自ら憐れむべし　瞿曇如來大聖師の

【五】八關齋戒とは、關は禁也、八罪を禁閉して犯さざるをいふ。齋は過中不食をいふ。八戒と共に齋日を支持するを八關齋戒といふ。八罪とは、殺生・偸盜・邪婬・妄語・飲酒・坐高廣大床・著花鬘瓔珞・習歌舞戲樂をいひ、八關齋戒とは、右八罪を犯さず、且つ齋日を持つをいふ。十善とは、殺生・偸盜・邪婬・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・愚癡を離るゝをいふ。

【六】以下、Mahāvastu III. 97—101に相當。

遊行は是の如き事に感應す』　樹の人の及ばざる所の者有れば　妙花甘果自然に落つ　瞿曇雄猛大聖師の　遊行は是の如き事に感應す』　諸天は虚空裏に在り　華の名けて囊迦羅といふを雨ふらす　瞿曇雄猛大聖師の　遊行は是の如き事に感應す』　諸天は虚空裏に在り　華の名けて曼殊沙といふを雨ふらす　瞿曇雄猛大聖師の　威德は是の如き事に感應す』　諸天は虚空の裏に在り　雜種妙色の華を雨ふらす・瞿曇雄猛大世尊の　威神は是の如き事に應感す』　諸天は虚空の裏に在り　華の名けて曼陀羅といふを雨ふらす　瞿曇雄猛大聖師の　威德は是の如き事に應感す』　諸天は虚空の裏に在り　華の名けて波利耶といふを雨ふらす　瞿曇雄猛大聖尊の　遊行は是の如き事に應感す』　諸天は虚空の裏に在りて　華の名けて毘婆伽といふを雨ふらす　瞿曇師子大聖師の　遊行は是の如き事に應感す』　諸天は虚空裏に在りて　華の名けて香勝香といふを雨ふらす　瞿曇師子天人尊の　遊行は是の如き事に應感す』　諸天は虚空の裏に在りて　種種妙香華を雨ふらす　瞿曇大聖人天眼の　遊行は是の如き事に應感す』　諸天は虚空の裏に在り　華の名けて普至香といふを雨ふらす　瞿曇雄猛大聖尊の　遊行は是の如き事に應感す』　諸天は虚空の裏に在り　微妙金色の華を雨ふらす　瞿曇雄猛大聖師の　遊行は是の如き事に應感す』　諸天は虚空の裏に在り　諸の微妙寶色の華を雨ふらす　瞿曇十力大聖尊の　遊行は是の如き事に應感す』　諸天は虚空の裏に在り　諸妙色寶蓋の華を雨ふらす　瞿曇雄猛人天眼の　遊行は是の如き事に應感す』　諸天は虚空裏に在り　優鉢羅微妙の花を雨ふらす　瞿曇雄猛天人師の　遊行は是の如き事に應感す』　諸天は虚空の裏に在り　沈水妙香の末を雨ふらす　瞿曇三界天人師の　威德は是の如き事に應感す』　諸天は虚空の裏に在り　赤栴檀妙香の末を雨ふらす　瞿曇師子大聖子の　遊行は是の如き事に應感す』　諸天は虚空の裏に在り　牛頭妙香の末を雨ふらす　瞿曇雄猛大世尊の　遊行は是の如き事に應感す』　諸天は

虚空の裏に在り　種種諸天の樂を奏作す　瞿曇威猛大聖尊の　遊行は是の如き事に應感す』
非天は虚空裏に在りて　種種の妙天衣を拂弄す　瞿曇師子大聖師の　遊行は是の如き事に應感
す』　諸天は佛の行路に隨順し　悉く種種妙香の花を持ちて　彼の大聖天中天の爲めに　路に
隨ひ花を雨ふらして恒に膝に至る』　彼の時寒無く復熱無く　種種の蚊虻諸惡蟲(無し)　微妙
大聖天中尊の　應感は能く是の如き事を招く』　一切の大地皆平正に　山陵堆阜悉く坦然たり
　瞿曇十力大聖尊の　遊行は是の如き事に應感す』　一切の大地甚だ清淨に　惡刺諸荊棘有る
こと無し　瞿曇威德天人尊の　遊行は是の如き事に應感す』　一切の大地微に徐動し　丼に大
巨海及び諸山も微に徐動す　瞿曇三界無上尊の　遊行は是の如き事に應感す』　一切の刹利・
婆羅門　丼に及び毘舍・首陀等　其の數千萬にして千萬有り　恒に共に如來に相隨逐す』　復地
居の妙勝天有り　諸色力大威嚴有るが　瞿曇雄猛大世尊に　行住坐立に相隨逐す』　又護世の
四天王有り　並に大威力最勝者たり　瞿曇微妙大聖尊の　行住坐立に相隨逐す』　須彌山頂の
帝釋王も　及び梵王娑婆主も　瞿曇奇特最勝尊に　恒に共に是の如く相隨逐す』　復欲界の諸
天衆　及び色界の四禪等も　瞿曇威猛大聖尊に　恒に共に是の如く相隨逐す』　復諸龍・金翅鳥
　犍闥婆等・阿修羅　夜叉・及び羅刹衆有り　皆共に如來に隨逐して行く』　世間所有の衆生類
の　已に說けるもの及び說かざるもの　悉く雄猛瞿曇師を逐ひて　國土及び城邑を遊歷す』
世尊は是の如く遊行する時に　無量の人天等を敎化したまひ　所生の親族を憐愍するが故に
今本城迦毘羅に至りたまひぬ』

爾の時長老優陀夷(Udāyi)及び長老車匿(Chanda)の二人、俱に佛所に詣り、佛足を頂禮して、
却いて一面に住す。時に二長老、佛に白して言さく、『世尊、輸頭檀王は、曾て信心無くして、不淨
心有り、乃至、諸比丘を見るを欲せず』。爾の時世尊、是の事を知りたまふが故に、諸比丘に告げて

是の如き言を作したまふ、『諸比丘等、誰か能く往きて輪頭檀王の所に詣り、至り已りて教化し、其をして信敬せしむるぞ』。爾の時、衆中に一比丘有り、佛に白して言さく、『世尊、今この長老舍利弗は能く往きて輪頭檀の所に詣り、方便もて教化し、其をして信敬せしむるに堪へん』。或は比丘有り、白して言さく、『世尊、今此の長老目犍連は、能く往きて輪頭檀王の所に詣り、方便もて教化し、其をして信敬せしむるに堪へん』。或は比丘有り、白して言さく、『世尊、今此の長老摩訶迦葉は、能く教化し、其をして信敬せしむるに堪へん』。或は比丘有り、白して言さく、『世尊、今此の長老大迦旃延（Mahā-kātyāyana）は、能く教化して、其をして信敬せしむるに堪へん』。或は比丘有り、白して言さく、『世尊、今此の衆中の長老優婁頻螺迦葉は、能く教化し、其をして信敬せしむるに堪へん』。或は比丘有り、白して言さく、『世尊、今此の衆中の那提迦葉は、能く教化し、其をして信敬せしむるに堪へん』。或は比丘有り、白して言さく、『世尊、今此の長老優波斯那は、能く往きて輪頭檀王の所に詣り、方便もて教化し、其をして信敬せしむるに堪へん』。爾の時、世尊、優陀夷に告げて、是の如き言を作したまふ、『優陀夷、汝、今頗し能く輪頭檀王の所に詣り、到り已りて教化し、信敬せしむるや不や』。時に優陀夷白して言さく、『世尊、我、今能くするに堪へん』。佛、即ち告げて言はく、『汝優陀夷、汝、今往きて輪頭檀王の所に詣り、方便もて教化し、其をして信敬せしめよ』。

爾の時、長老優陀夷は、佛世尊の是の如き語を聞き已りて、佛に白して言さく、『唯然り、世尊、佛の教へたまふ如く、敢て違せじ』。時に、優陀夷、其の晨朝に、日の始初めて出づるや、衣を著け鉢を持ちて、往きて彼の輪頭檀王宮に詣向し、到り已りて彼の守門の人に問ひて言はく、『仁者、應に知るべし、輪頭檀王は、今何許に在るか』。彼の人報じて言はく、『王は今殿に在りて王務を治理したまふ』。爾の時長老優陀夷、輪頭檀王の所に往至し、一廂に在りて默然として住しぬ。

爾の時、左右の諸大臣等、優陀夷の一邊に在るを見已りて、即ち四門の諸守人に告げて言はく、『速かに往きて此の出家の人を斷ぜよ。此に在りて、王をして見て惡心を起發せしむる勿れ』。其の守門の人、大臣の命を聞き、速かに往きて彼の優陀夷の邊に至り、驅りて出でしめんと欲す。時に守門の人見已りて、始めはこれ國師の子にして、昔時恒に太子悉達と共に、少小より朋として拊塵の戯を遊べるを知り、驅逐するに忍びずして、復廻還す。時に、諸大臣、守門人に問ひて、是の如き言を作す『汝等、何の故に此の如き出家の人を驅らざるか』。即時に守門人、諸臣等に報じて、是の如き言を作す『其の人は乃ちこれ國師の子にして、生れてより已來、悉達太子と交れる故の朋親として拊塵の好あり。是の故に我等驅遣するに忍びず』。

爾の時輸頭檀王、殿に在りて事を料理し訖りて、起ちて閤に還らんと欲するや、諸大臣等、左右圍遶し、將に宮内に入らんとす。時に優陀夷、速かに往きて直に輸頭檀王の所に至り、其の王の手を執る。爾の時に當り、輸頭檀王、默然として語らず、是の如き念を作す『我、今若し語らば、恐らくは守門人、驅りて出で去らしめん』。其の守門人、復是の念を作す『諸大臣輩、自ら應に驅遣すべし』。其の諸大臣は、復是の念を作す『宮門内の人、應當に遮却すべし』。宮門内の人は、復是の念を作す、『此の人は、本是れ輸頭檀王の恒に愛念せる所、如今還復手を執りて行く』。爾の時、各復是の如き念を作すが故に、一人の能く驅遣する者有ること無し。

爾の時輸頭檀王、漸く進みて宮に入り、其の内殿に昇りて師子座に坐す。時に優陀夷、淨飯王の彼の宮内に入りて、其の殿に昇れるを見已り、優陀夷も亦其の殿に昇り、王を去る遠からずして前に在りて立つ。輸頭檀王、優陀夷の相去る遠からずして、前に在りて立つを見已り、即ち煩惱を生じ、微細の聲を出だして、是の如き言を作す『嗚呼苦しい哉、我が子の形容、此の如く枯悴して、厭惡すべきことや。汝等、速かに此の出家の人を驅れ。阿誰か入りて此に來らしむるを聽せる』。

時に諸大臣、白して言はく、『大王、臣等の見る如くんば、是の事然らず、大王は應に此の人を驅りて出すべからず。所以は何に。此の人は、既にこれ國師の子、復これ悉達の小來の朋伴にて、拊塵遊戯せるなり』。時に優陀夷、言辭哀愍もて、淨飯王の意を傷損せしめじとて、偈を說きて言はく、

『穀實を規求するが故に犂種し　寶貨を貪覓して海に入る　我が意今來りて此に貪住するは　唯其の事の速かに成就せんを願ふのみ』　此の如き道路は常に吉利あり　諸の無畏に於て常に安隱なり　諸方に至りて利を求めんと欲せば　必ず瞿曇をして利を成ずるを得しめん』　數數諸人は其の地を耕し　數數中に於て種子を散じ　數數諸頭天甘雨を下して　數數國内に五穀成ず』　數數乞士は恒常に乞ひ　數數施主は恒常に施し　數數此の世に檀那を行じて　數數頭上に其の果を獲たり』　數數牸牛は乳を搆得し　數數犢子は母邊に向ふ　數數婦人は胎藏に懷きて　數數生產して諸苦を受く』　數數死屍は寒林に向ひ　數數諸親は悲啼して送る　若し聖道を得ば後有無く　煩惱中に於て生を受けじ』

爾の時輸頭檀王、優陀夷の是の如き等の哀愍の語を作すを聞き已り、猶ほ小疑を懷き、尋いで復重ねて優陀夷に問ひて言はく、『尊者は、本誰の邊に於てか出家せる。大師はこれ誰ぞ』。時に優陀夷、偈を說き以て淨飯王に報じて言はく、

『師の父は名けて輸頭檀王といひ　尊を生みたまへる所の母を摩耶と名く　胎中に懷在して十月を經　生み已りて母は終に忉利に生れぬ』　是の如き聖者汝の家に生れぬ　大德大聖にして天中の天なり　彼の家を七世已に濟拔し　名聞處處に皆流布す』　丈夫人中の最希有　一切處に生を受けず　是の如き大聖者を生める所の　其の家は恒に大安樂を受けん』　釋種親族の最名稱ある　尊は生れて百福もて身を莊嚴せり　是の如き釋子は天中の勝なり　我は彼の邊に出家せる者なり』

【七】以下、Mahāvastu, III. pp. 108 ff.

【八】搆。或は搾(しぼる)に作る。又、搆は擩(もむ)に同じ。

爾の時輸頭檀王、復長老優陀夷に問ひて言はく、『善い哉、比丘、汝は實に誰邊にて出家を得たる。而して彼の人師は、頗し正信あり、及び能く正意もて梵行を行ずるや不や。阿蘭若空閑樹下に在りて、意樂を生ずるや不や』。爾の時長老優陀夷、偈を以て復、輸頭檀王に報じて、是の如き言を作す。

『王は「誰が邊にて出家したるか」と問ふ　彼の人は正信もて梵行を行じ　方所の憂怖を懷く有ること無く　樹下に在りて常に樂を受く　他聲を畏れざること猶ほ師子のごとく　羅網を被らざること猛風の如し　他人を教授して自ら學ぶべきなく　諸の恐怖を拔きて身怖れず』

輸頭檀王、復長老優陀夷に問ひて言はく、『是の如き比丘は、今何處に在るか』。優陀夷言はく、『如し大王問はば、然も彼の多他阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀は、今已に此の迦毘羅城尼倶陀林に在ます』。爾の時輸頭檀王、卽ち是の念を作す『此の優陀夷は、乃ちこれ我が兒の弟子なり』と。是の因緣を以て、諸大臣に告げて、是の如き言を作す『卿等、今此の比丘を請じ、座に在りて安坐せしむべし』。其の諸大臣、王勅を聞き已りて、白して言はく『大王、敢て違背せじ』と。卽ち長老優陀夷を請じて坐せしむ。時に淨飯王、復諸臣に勅すらく、『卿等、食を將つて此の比丘に與へよ』。諸臣勅を得、卽ち淨水を持ちて、優陀夷に與へ、手を澡洗し已るや、卽ち飯食を將つて優陀夷に授けぬ。時に優陀夷、此の食を得已りて、自ら食せず、此の食を將つて世尊に奉獻せんと欲す。輸頭檀王、遂に長老優陀夷に問ひて言はく、『比丘、何が故に此の食を食せざる』。優陀夷言はく、『此の食は、將つて世尊に奉獻せんと擬す。是の故に食はず』。時に淨飯王、心に復懊惱し、涕涙横流して、是の言を作す『嗚呼我が子は、身體柔輭に、昔宮内に在るや、恒に快樂を受け、身に諸苦無かりしに、今日何が故に此の如き困みを受け、乃ち比丘をして食を乞ひ得しめて、爾して乃ち方に食する』と。時に淨飯王是の語を作し已りて、悲啼哽咽し、復優陀夷に告げて、是の如き言を作す『比丘、今は

但此の食を食せよ。我、今更に爲めに別に飯食を取り、將つて汝の師に與へん』。時に優陀夷、復王に白して言はく、『是の如し、大王、此の食は已に世尊に奉獻せんと擬せり。此の食は、世間の有らゆる衆生の能く消する者無し。所以は何に。然り、彼の世尊は、戒行最も勝れ、禪定最も勝れ、智慧亦勝るればなり』。時に淨飯王、諸大臣に告げて、是の如き言を作す、『卿等、今更に餘食を取りて此の比丘に與へ、其をして食せしめ已りて、速かに此の食を將つて、彼の太子に送れ』。諸臣即時に更に別の食を將つて、優陀夷に與ふ。時に優陀夷、飯食し訖りて、王に白して言はく、『是の如し、大王、如來・世尊・阿羅呵・三藐三佛陀を、是の如く王及び無量無邊の諸人衆、皆來りて恭敬す。然り、今大王も、亦應に宜しく往きて彼處に到るべし』と。是の語を作し已り、座より起ちて宮を出でんと欲す。時に輸頭檀王、復長老優陀夷に白して言はく、『尊者、先づ悉達の所に至り、是の如き言を作せ、「我、今久しからずして、來りて汝を見んと欲す」と』。優陀夷言はく、『敬んで王命の如くせん』。

爾の時長老優陀夷、即ち彼の食を持ちて城より出で、尼倶陀樹林の內に至り、佛所に至り已りて白して言はく、『世尊、輸頭檀王を、我已に教化して歡喜を得しめぬ。來りて佛を見んと欲す』と。其の優陀夷、宮より出でし時、須臾の間に、其の輸頭檀王、諸大臣に勅して、是の如き言を作す、『卿等、時を知れ。悉達太子は、已に此の城に至れり。我等は今、當に何の事をか作すべき』。諸大臣言はく、『善い哉、大王、若し更に別に餘の沙門有り、來りて王の所に到らば、我等は尙ほ須らく供養供給すべし。況んや復今悉達太子は、我等の身と異無く別無きをや。豈に安然として、恭敬を生ぜざるを得んや。我等は但大王の心意を護りて、未だ彼に至らざるのみ』。爾の時輸頭檀王、勅して鐸を振り、普ねく城內に告げて、悉く知聞せしむらく、『我、今悉達太子に至り、往きて彼處を觀んと欲す。汝等各各莊嚴を備辦して我に隨從せよ』。（迦葉遺師は是の如き說を作す。）

其の摩訶哬祇師は、復是の説を作して、乃ち言はく――爾の時、輸頭檀王は、優陀夷に白して、是の如き言を作す、『比丘の意の如くんば、太子の爲めに何等の食をか作さんと欲する』。時に優陀夷、王に白して言はく、『是の如し、大王、若しそれ世間の爲めに食を造らんと欲せば、當に須らく、淸淨甘美香潔の餚饍を好作すべし。世尊は唯此の如き食をのみ食したまふ』。爾の時輸頭檀王、諸大臣に勅す、『卿等須らく知るべし、速かに太子の爲めに、諸の淸淨香潔の飯食を辦ぜよ』と。諸大臣等、王勅を聞き已り、王に白して言はく、『大王の教に依り、敢て違せじ』と。遂に卽ち種種餚饍の淸淨香潔甘美なる飯食を供辦し、是の如きを辦じ已りて、優陀夷に付す。其の優陀夷、自ら食し訖りて、王の辦ぜる所の餚饍の淸淨香潔なるを持ち、迦毘羅婆蘇都城より出で、往きて尼倶陀林に至り、彼の佛所に至り、佛に白して言さく、『世尊、我已に輸頭檀王を教化し、心をして歡喜せしめぬ。來りて佛を見んと欲し、先づ此の如き香美の飲食を以て、辦具して我に與へ、來りて世尊に奉らしむ。願はくは佛、納受して如法に食したまへ』。

九 爾の時諸比丘、佛に白して言さく、『希有なり、世尊、云何ぞ長老優陀夷は、輸頭檀王を教化して能く歡喜せしめ、又能く淸淨香潔甘美の飲食を辦じて、將つて世尊に奉らしめたる』と。是の語を作し已るや、佛、諸比丘に告げて、是の如き言を作したまふ『汝諸比丘、其の優陀夷は、但に今日のみ輸頭檀王の所に至りて教化し訖り、復甘美の飲食を將つて我に與ふるに非ず。往昔も亦曾て彼を教化して歡喜せしめ已り、甘美の食を將つて、我に與へ來れり』。時に諸比丘、復、佛に白して言さく、『唯、然り、世尊、其の事云何。願はくは我等の爲めに、是の如き事を說きたまへ。我が輩は今願樂して聞かんと欲す』。

一〇 佛、諸比丘に告げたまはく、『我念ふに、往昔久遠の時、波羅㮈國に、一烏王（kāka-rāja）有り、を名けて 一〇 蘇弗多羅（Supātra）（「隋」に善子といふ。）といひ、彼の波羅㮈城に依住し、八萬の烏と、和合共住

【九】 Kākajātaka; Mahāvastu III. pp. 125, ff.

【一〇】 蘇弗多羅、Suputra なるが如し、今は Mahāvastu に從ふ。

せり。善子烏王に妻有り、名けて蘇弗室利(Supārśvā)(〔隋〕に善女といふ。)といへり。時に彼の烏妻(kākabhāryā)、彼の烏王と共に、欲を行じて懐妊せる時、彼の烏妻、忽ち是の念を作せり「願はくは我、浄香潔の飯食の、現に今人王の食する所の者を得んを」と。而して彼の烏妻、是の飯食を思うて、得る能はざるの故に、宛轉迷悶し、身體憔悴、羸瘦戰掉して、安きを得る能はざりき。善子烏王、既に己が妻の、宛轉迷悶し、身體憔悴、羸瘦戰掉して、自ら安からざるを見るが故に、其の妻に問うて言はく、「汝、今何ぞ卽ち地に宛轉し、身體憔悴し、羸瘦戰掉し、自ら安んずる能はざる」。彼の時、烏妻、烏王に報じて言はく、「善い哉聖子、我、今娠む有りて、乃ち是の念を作せり。願はくは清淨香潔の餚饍の、王の食の如きを得んを」と。時に善子烏、其の妻に告げて言はく、「異なる哉、賢者、我が今日の如きは、何處にか是の香美の飲食を得ん。王宮は深邃にして、到るを得べからず。我若し入らば、彼の手邊に、必ず身命を失はん」。彼の妻、又復、烏王に報じて言はく、「聖子今若し是の如き飲食を得る能はずんば、我死せんこと疑無く、幷に其の胎子も、亦必ず活くる無けん」。善子烏王、復妻に告げて言はく「異なる哉、賢者、汝今死日必ず當に至らんとすべし。卽ち是の如き得難き物を思ふ」と。善子烏王、是の語を作し已りて、憂愁悵怏し、思惟して住し、復是の念を作せり「我が意の如くんば、是の如き香潔清淨の飲食の、王の食の如きは、實に得難し」と。

爾の時、烏王の群衆の内に、乃ち一烏有り、善子烏の心に愁憂を懷き、樂しまずして住するを見、是の事を見已りて、烏王の所に詣り、烏王に白して言はく、「異なる哉、聖者、何が故に憂愁思惟して住する」。善子烏王、時に前事の因緣を廣說するや、彼の烏復、善子王に白して言ふ「善い哉、聖子、復愁憂する莫れ。我能く王の爲めに、是の得難き香美餚饍の、王の食する所のものを覓めん」。是の時、烏王、復彼の烏に告げて、是の如き言を作せり「善い哉、善友、汝若し力めて能く我が爲めに、此の如き事を辦ずるを得ば、我れ當に汝の作せる所の功德に報ずべし」。

【一】蘇弗室利は Sustrī なるが如し、今 Mvyt. による。

爾の時彼の烏、烏王の所居住の處より、虛空に飛騰し、梵德宮に至り、厨を去る遠からずして、一樹上に坐し、梵德王(Brahmadatta)の食厨の內を觀るに、其の王の食辦じ、一婦女有りて、餚饍を備具し、食時將に至らんとし、專ら銀器を以て、彼の飮食を盛り、王に奉與せんと欲しぬ。爾の時彼の烏、樹より飛び下りて、彼の婦女の頭上に在りて立ち、其の鼻を啄嚙せり。時に彼の婦女、其の鼻の痛を患へ、卽ち此の食を翻して、地上に在り。爾の時彼の烏、卽ち其の食を取り、將つて烏王に與ふ。烏王得已りて、卽ち將つて彼の善女烏妻に與ふ。其の妻得已りて、尋時飽食し、身體安隱にして、是の如く產生せり。爾の時、彼の烏、日別に數往き、彼の食を奪ひ取り、將つて烏王に與へぬ。時に梵德王、屢此の事を見、是の如き念を作せり「奇なる哉、奇異なるかな。云何ぞ此の烏、數數恒に來りて、我が食を穢汚し、復嘴爪を以て我が婦女を傷くるか」。而して王は此の事を忍ぶ能はざりしが故に、尋時に勅して網捕獵師を喚び、之に語りて言はく、「卿等、急速かに彼の烏の處に至り、生け捕りて將て來れ」。時に諸獵師、王勅を聞き已り、王に啓白して言はく、「王の所勅の如くして、敢て命に違せじ」。獵師、往きて至り、其の羅網を以て此の烏を捕へ得、生きながら捉へて將來し、梵德王に付せり。時に梵德王、其の烏に語りて言ふ、「汝、比、何が故に數我が食を汚し、復嘴爪を以つて我が女婦を傷けたる」。爾の時彼の烏、梵德王に語りぬ、「善い哉、大王、聽け。我王に向ひて此の如き事を說き、王をして歡喜せしめん」。時に梵德王、心に憘悅を生じ、是の如き念を作せり、「希有なり、斯の事、云何ぞ此の烏は、能く人語を作すや」。是の念を作し已りて、彼の烏に告げて言はく、「善い哉、善い哉、汝必ず我が爲めに、斯の事の意を說き、我をして歡喜せしめよ」。爾の時彼の烏、卽ち偈頌を以て梵德王に向ひ、之を說きて曰ふ、

「大王當に知るべし波羅㮈に　一烏王有りて恒に依止す　圍繞する所の八萬の烏衆　悉く皆彼の
王の處分を取る」　彼の烏王の妻憶ふ所有り　我大王に向ひて其の緣を說かん　烏妻の思ふ所

は香美の饍　是れ大王の食する所の如き者なり』　是の故に我今數數來りて　大王の香美の食を抄撥せり　今彼の烏王の爲めの故に　大王に繋がるるを致』　善い哉唯願はくは大聖王慈悲もて憐愍し我を放脫せよ　我烏王の彼の妻の爲めの故に　數數來りて大王の食を抄撥せり』我念ふに此一生より來た　未だ曾て此の如き事を經造せず　今大王の一勅を爲し已るや後に於て敢て更に復爲さじ』

時に梵德王、既に彼の烏の此の如く語るを聞き已り、心に喜悅を生じて、是の如き言を作せり、「希有なり、此の事、人も尙ほ其の主の邊に、是の如き愛重の心有ること、此の烏の如くなる能はず」。是の語を作し已りて、其の梵德王、偈を說きて言はく、

「若し是の如き大臣有らば　彼應に重く封祿を食ましむべし　須らく是の如き猛健の烏に似て主の爲めに食を求めて命を惜まざるべし」。

其の梵德王、此の偈を說き已りて、復烏に告げて言ふ、「善い哉、汝烏、今より已去、常に來りて此に至り、香美の食を取れ。若しそれ人有り、汝を遮斷して食を與へずば、來りて我に語り知らせよ。我自ら汝に與へん。己が食する所を分ちて、將つて去らしめんのみ」と。

佛、諸比丘に告げたまはく、『汝等當に知るべし。彼の烏王は我が身これなり。彼の時、王の爲めに食を偷める烏は、卽ち優陀夷比丘これなり。梵德王は、これ卽ち輸頭檀王是なり。時に比丘、優陀夷は、彼をして歡喜せしめて、我が爲めに食を取れり。今、亦復爾り。淨飯王をして、心に歡喜を生ぜしめ、又復我が爲めに食を將つて來りぬ』と。

時に淨飯王、後に方に始めて、其の鈴鐸を扣き、迦毘羅婆蘇都城所有の人民に勅すらく、『一人も先づ往きて悉達太子を見るを得ざれ。若し見んと欲する者は、要ず須らく我と共に相隨ひて見るべし』と。

卷の第五十三

優陀夷因緣品第五十四の下

[一]爾の時輸頭檀王、自宮内の諸眷屬等を將ゐて、前後に圍遶せられ、復悉達太子宮内の一切眷屬を將ゐ、及び其の餘外の眷屬等、幷に釋の童子、及び諸の左右を將ゐ、復四兵・百官・大臣・將帥・僚佐、及び諸の居士、城邑聚落の長者耆年を將ゐて、以て大王の威勢の力を顯はし、幷に大王の神德の自在を顯はし、大親族兵衆を將て、左右前後に圍遶せらる。爾の時釋種の宗族士衆、一切合して九萬九千有り。及び迦毘羅婆蘇都城所居の人民も、城より共に往きて、如來を見まつらんと欲す。世尊、遙に輸頭檀王の諸大衆と與に嚴備して來るを見、卽ち是の念を作したまひぬ、『我、若し彼を見て、起ちて迎奉せずば、人當に我を說いて、此れ豈戒行果報の人ならんや、云何ぞ父を見て、起ちて迎逆へざるといふべし。我、今若し父及び大衆を見、起ちて往きて迎へば、彼等は無量の大罪を獲得せん。若し我今其の威儀を持し、此に在りて住せば、彼等は、我に敬心を生ぜざらん』。如來、此の三種の念觀を作し、此の如き三種の因緣有るを見、是の如き三種の義を思量し已りて、坐より起ち、神通力を以て、虛空に飛騰し、虛空中に在まして、經行來往し、或は起ち、或は坐し、或は臥し、或は睡り、身より或は烟を放ち、或は炎火を放ち、或は隱れ、或は現じ、是の如き等の種種の神通變化を出して顯示したまひぬ。

時に迦毘羅婆蘇都城に、護城の神、守門の神等有り。輸頭檀王の前に在りて、虛空に飛騰し、佛所に詣向して佛足を頂禮し、却いて一面に住し、其の偈頌を以て、佛に向ひ說いて言はく、

『如來の初始めて出家したまひし日に　夜叉諸神は爲めに門を開き　毘沙門等は道路を示しぬ
世尊はこれ大功德の器なり』如來の爾かく門を出でたまふ時に當り　發心して是の大尊願を作

【一】淨飯王諸眷を率ゐて佛所に詣る。Mahāvastu. III. pp. 112 ff.

したまへり　「若し諸魔衆を降伏せずば　我更に此の城中に入らじ」と』　彼の願は今已に滿足し　世尊已に復諸魔を降し　菩提の無上道を證するを得て　昔日の誓願を成じたまふ』　丈夫は福の爲めに世に出で　已に無上菩提道を證し　一切の親族を憐愍したまふが故に　今還りて此の城に來入したまふ』

爾の時輸頭檀王、遙に世尊の神通力を以て虛空に飛騰し、種種の神通變化を示現したまふを見て、卽ち是の念を作す、『我憶ふに、往昔、悉達太子家を捨てて出家せり。今大仙と成りて、大威德有り、大神通を具す』。是の念を作し已りて、其の馬車より地に下りて足步し、往きて佛の所に向ふ。輸頭檀王、漸く佛に近かんと欲するや、佛、復空より漸漸に下り、輸頭檀王、佛の住所に至るや、佛卽ち空より下りて本處に至りたまふ。輸頭檀王、佛の頭上に天冠有ること無く、鬚髮を剃除し、身に袈裟を著けたまふを見、子を愛するを以ての故に、悶絶して地に躃れ、少時を經て、方に乃ち還蘇り、地に在りて宛轉し、悲啼涕泣して、流淚面を被ふ。時に彼の釋種九萬九千、及び內外の諸眷屬等、悉く亦悶絶して地に宛轉し、悲號啼哭して、涕淚交流れ、煩寃懊惱して大苦を受く。時に彼の大衆、偈を說きて言はく、

『大王衆を將て佛邊に至るや　父は世尊を見て未だ共に語らず　王は子と稱せんと欲して言ふを得ず　比丘と道はんと欲して復得ず』　王は如來の沙門の相を見　自ら傘下に於て羞慙を生じ　長叫して口中より熱氣を出し　迷悶して地に躃れ種種に道ふも　如來は默然として禪定に入りたまふ』　王は是の如きを見て自ら憂煎すること　猶ほ渴人の遠くより來り　遙に水を見已りて還枯竭するを見るが如し』

爾の時世尊、復此の念を作したまふ『是の釋種輩は、大我慢有り、貢高自在なり。若しそれ頂を以て地に著け、我を禮せば、卽ち懈勧を生ぜん』。是の念を作し已りて、卽ち虛空に騰り、地を去る

一丈にして、又念じたまふらく、『我、今地を離るる若干ならば、彼の輩は應當に身を傴めて禮を作すべし』。而して偈有りて說く、

『佛、王輩の我慢を懷くを見　虛空に飛住すること高さ一丈　自餘の諸人等を憐愍したまひ　この故に佛空中に在りて住したまふ』。

爾の時輪頭檀王、地より起ちて佛足を頂禮し、偈を說きて言ふ、

『我今眞如尊を三禮し　初めて生れ已りて　復佛足を禮す　昔宮內に在るや相師記すらく　「當に樹下に坐して身を蔭覆すべし」と』　今第一行を行ずるを見るに　面目清淨にして華の開くが如く　我が身心をして大に欣悅せしむ　是の故に今還三たび頂禮す』

爾の時輪頭檀王、佛足を頂禮し、然る後に　次第に二宮の眷屬も、頭面もて頂禮し、次に外親の諸眷屬等ありて、亦佛足を禮し、復釋種の諸童子等ありて、亦復頂禮し、復左右の將士、僚佐百官大臣ありて、次第に禮を作し、復是の如き大姓居士あり、佛足を頂禮し、次第に復大富長者諸老宿等あり、亦復禮を作しぬ。

然るに佛世尊に、深く是の如き微妙の法有るも、但大衆の未だ歡喜渴仰の心を生ぜず、未だ希有奇特の意を生ぜざるを恐れて、是の故に未だ此の如き法を說きたまはざるのみ。爾の時、世尊、時衆をして歡喜心・信敬心を生ぜしめんと欲したまふが故に、神通力を以て空裏に飛騰し、東方に在まして、地を去ること高さ一多羅樹に至りて、空中に住し已り、又種種の神通變現を作したまふ。所謂、一身を分ちて多身と作し、或は多身を以て合して一身と作し、下より橫行して、足地を踏まず、下より上行し、上より下行し、石壁山障も皆過ぐるに礙無く、地に入ること水の如く、水を履むこと地の如く、虛空に在まして、結跏趺坐して安然として動ぜず、虛空を經行すること猶ほ飛鳥の如く、身上より烟を放ち、身下より火を出して、大火聚の如く、亦日月の如く、大威德有り、大神通有り、

威德熾盛に、光明顯赫たり。或時は手を以て日月を捫摸し、其の身長大して乃し梵天に至り、是の如く種種神通變化の事を出だしたまふ。爾の時世尊、是の事を作し已りて、復是の如き雙對の神通を現じたまふ。所謂、如來、其の半身に於て身下に烟を出し、又半身に於て身上に火を出し、如來、或は復其の半身に於て身上に烟を出し、或は半身に於て身下に火を出し、如來、或は復左扇に火を出し、右扇に烟を出し、右扇に火を出し、左扇に烟を出し、如來、又時に其の半身に於て身下に烟を出し、或は復半身に於て身上に清涼の冷水を出し、如來、又時に其の半身に於て身下に清涼の冷水を出し、或は半身に於て身上に烟を出し、如來或る時、左扇に烟を出し、其の右扇に涼冷の水を出し、須臾にして或は復右扇に烟を出し、其の左扇に涼冷の水を出し、如來、又時に半身下に其の炎火を出し、半身上に涼冷の水を出し、又半身上に其の炎火を出し、半身下に清冷水を出し、又時に如來、左扇に火を出し、復右扇に清冷水を出し、如來、又時に左扇に火を出し、其の右扇に清冷水を出し、或は復右扇に清冷水を出して、其の左扇に其の焰火を放ち、如來、又時に遍ねく身に火を出し、兩目の間に清冷水を出し、或は目間に其の焰火を出し、或は復遍身に清冷水を放ち、如來、或時には下分身を現じ上分を現ぜずして、其の法を說き、或時は唯上分の身を現じ下分を現ぜずして、其の法を說き、如來、又時に或は復火光三昧に入りて、諸毛孔より種種の光——所謂、青色の光明、黃色の光明、赤色の光明、白色の光明、蒨草色の光、頗梨色の光——を出し、如來、或は復空中に乘じ、地を去る高さ一多羅樹にして神通を現じ、或は復地を去る高さ二多羅、或は三四五、或は七多羅にして、空中に住して神通を現じ、所謂、一身分れて多身と作り、乃至頗梨色の光を放ち、種種の神變、悉く皆示現したまふ。

爾の時世尊、或は復南方より身を出し、西方に地を去る高さ一多羅にして、種種の神通變化を作し、世尊、或は復西方に身を沒し、北方に地を去ること高さ一多羅にして、虛空中に住して種種の

【二】蒨。あかね。

神通變化を作し、所謂、一身分れて多身と作り、乃至、頗梨色の光を放ち、乃至、一一の諸方も亦爾かく、皆虚空に乘じ、地を去ること高さ七多羅樹に至り、倶に種種の神通變化を現じ、所謂、一身分れて多身と作り、乃至、頗梨色の光を放ちたまふ。

爾の時大衆、佛・世尊の是の神通を現じたまふを見、卽ち佛邊に於て、歡喜心・信敬・希有、是の如き等の心を生ず。爾の時世尊、彼の大衆の信敬・希有の心を生ぜるを見たまふが故に、空より下り、其の衆の首に在りて、座を敷きて坐し、其の大衆の爲めに次第して說法したまふ。說法と云ふは、所謂、衆生、長夜に煩惱の中に在り、是の語を聞きて、厭離を生ぜしむるなり。是の故に、布施・持戒・精進・忍辱を行じて、善處に生ずるを得るを勸め、欲有漏等を厭離することを行ずるを教へて、煩惱を出でしめ、亦復出家の功德を讃歎し、復是の如き法有るを解脱するを讃じたまふ。如來、此の諸法を說きたまふ時、其の大衆の歡喜心・踊躍心・柔輭等の心・得無外心を生ずるを知りたまふ。

爾の時、世尊に亦諸佛攝受の法有り、所謂、苦・集・滅・道等の法なり。時に世尊、彼の大衆の爲めに、方便顯設し、宣通示現したまふ。時に彼の大衆、無量百千萬億の衆類、卽ち其の座上に於て遠塵離苦して、復煩惱無く、諸の結使を斷じて法眼淨を得、有らゆる集法に、悉く皆相を滅して、如實の智を得ること、譬へば清淨無垢なる衣裳の、諸色に入るに堪へ、諸色に入れば、尋いで其の色を受くるが如し。是の如く說き已りたまふや、彼の時の大衆、無量無邊百千萬億の諸衆生類、卽ち座上に於て遠塵離苦して、復煩惱無く、諸の結使を斷じて法眼淨を得、乃至、一切に相を滅して、如實の智を得たり。而して彼の大衆、自ら諸法を見、已に諸法を得、已に諸法を證し、已に諸法に入りて、衆疑已に度し、諸惑已に滅して、復疑心無く、已に無畏を得て、我生の因緣、悉く皆盡滅し、是の如く知り已るや、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依し、優婆塞五戒の法を受く。輸頭檀王のみ、子を愛する煩惱の羅網に覆はるるが爲めの故に、遂に果を獲ず。世尊の前に坐して、哀戀の情

を以て、悲泣哽咽して偈を說きて言ふ。

『汝は昔首に七寶の冠を戴き　微妙莊嚴なりしを何處にか捨てし　又髻中の明淨珠をも捨て　露頭毀形にして威德無し』昔日の上妙の[三]迦尸服を　汝亦當に何處にか捨てたるべき　此の如き[四]麁澀糞掃の衣を　我が所愛の子よ云何ぞ著くる』

爾の時世尊、偈を以て彼の輪頭檀王に報じて、是の如き言を作したまふ、

『大王、國有り奴師（Anupriyā?）と名く　我彼處に天冠を捨てぬ　心に其の我慢を除かんと欲せるが故に　又彼の甘露句を證せんと欲してなり』　諸染色の袈裟衣の爲に　故に我彼の迦尸服を棄てぬ　袈裟を旣に身體に著け已りて　我無上の妙菩提を證しぬ』

是に於て輪頭檀王、復如來に向ひ、偈を說きて言ふ、

『我昔宮に在りて百の願を求め　生子を得て輪王と作さんと願へるに　今頭を剃りて手に鉢を持するを見る　子よ、我が爲めに說くも何の勝をか得ん』

爾の時世尊、復偈を以て輪頭檀王に報じて、是の言を作して曰まはく、

『輪王は萬を得るも心に厭くこと無く　命長きを得と雖も自在ならず　我が心自在にして邊際無し　子の輪王たるを願ふは實に愚癡なり』

爾の時、輪頭檀王、復偈頌を以て佛に向ひて說きて言ふ、

『七寶の革屣を汝は先に著け　臥具の柔輭なるを種種に鋪き　宮殿樓閣に安隱に居し　頭上に白傘蓋を罩籠し　足相輭淨にして蓮花の如かりしに　沙棘・礫磧を云何ぞ踏むか』

爾の時世尊、復偈を以て輪頭檀王に報じて言はく、

『我は今一切遍知の尊たり　諸法に染まざること蓮華の如く　諸有已に捨して愛著無し　我が今の如きは諸の惱無し』

【三】Kāśikasūkṣma.　迦尸細軟布。
【四】Pāṃsukūla-cīvara　納衣、弊衲。

爾の時輪頭檀王、復偈頌を以て佛に白して言ふ、

『昔宮殿に在るや栴檀等　及び諸香の涼しきこと月に似たるを　時に隨ひ此を用ひて汝の身を摩し　摩し已りて遍體安隱を受けぬ』　今時は初夏にして正に以て熱きに　林藪を獨歩して　苦[五]しんで行を爲す　本宮内に在るや微妙の音ありしに　今婇女無し、誰か娛樂せん』

爾の時世尊、偈を以て輪頭檀王に報じて言はく、

『我に法池の清冷なる水あり　智人の無憂處と歎ずる所　功德の寶池に身を洗浴せば　水の爲めに溺れずして彼岸に至る』

輪頭檀王、復偈頌を以て、佛に向ひて說きて言ふ、

『在宮の昔は迦尸衣を著け　蓮華瞻蔔の香もて體を熏じ　柔輭の疊花を衣内に貯へ　釋の宮殿に坐して威顯赫たりき』　今は麁麻　糞掃の物　隨所の樹皮の染むる所もて　纔に身體を覆ふは羞愧すべし　汝大丈夫、厭惡せざるか』

爾の時世尊、復偈頌を以て輪頭檀王に報じて、是の如き言を作したまふ、

『衣服臥具飲食等に　我は過去に於て悉く貪を生ぜしに　微妙端正の色愛の處を　今正念もて皆已に捨てぬ』

輪頭檀王、復偈頌を以て佛に向ひて說く、

『汝昔宮中にて七寶の器及び金銀の槃[六]案等を用ひ　種種の餚饍甘味の味は　諸王の隨意に食ふに堪ふる所なりき』　今得るは冷熱麁澀等にして　妙薄淡に非さるに云何ぞ飡ひ　云何ぞ是の如き食を嫌はざる　臭穢嫌恨の相を生ぜざるか』

佛、復偈を以て、輪頭檀王に報じて、是の如き言を作したまふ、

『傳聞すらく過去・今現在　及び未來の諸聖者は　隨つて麁澀及び苦味を飡うて　世間を憐愍す

【五】苦。麗本に若に作り、明本苦に作る。今明本に從ふ。

【六】槃は宋・元・明三本には盤に作る。

るが故に嫌ひたまはずと』

輸頭檀王、復偈頌を以て、之を說きて言ふ、

『汝昔我が宮內に在りし時　微妙柔軟の鋪に坐臥し　世間最勝にして比方無く　倚枕意に稱ひて嫌ふ無かりき』　今や麁澀[七]鞠地の上に　唯諸草及び樹葉を鋪き　云何ぞ眠臥して嫌ふ無く身體の柔輭を傷損せざるや』

爾の時世尊、復偈頌を以て、輸頭檀王に報じて、是の如き言を作したまふ、

『我今諸の自在智を得　一切の苦惱悉く已に脫し　諸の苦煩惱の刺を拔かんが爲めに　世間を憐愍するが故に嫌はざるなり』

輸頭檀王、復偈頌を以て佛に向ひて說きて言ふ、

『汝昔日愛樂せる家は　種種の妙華を地上に散じ　室內は風無くして燈明照し　及び樓閣の諸窻牖をも照らせり』　華鬘瓔珞もて身を莊嚴し　婦人の端正なる猶ほ玉女のごとく　語言婉媚相隨順し　瞻仰して亂れず夫勅を聽けり』

佛、復偈を以て、輸頭檀王に報じて、是の如き言を作したまふ、

『釋王、我に新學行有り　微妙の天中の諸梵行なり　我以て心に自在の行を得　我が意の去るに隨ひて皆行ずるを得』

輸頭檀王、復偈頌を以て、佛に向ひて說きて言ふ、

『鼓・瑟・箜篌等の音聲　微妙の歌詠は汝の眠を覺せり　猶ほ帝釋の天中に在るが如く　汝が昔宮に在りしや亦復爾りき』

佛、復偈を以て、輸頭檀王に報じて、是の如き言を作したまふ、

『[八]修多・[六]祇夜に妙音を出だし　如意の辨脫今我を覺ましぬ　我に梵行の諸友等有り　大王、我是

【七】 鞠(かはぐつ)。或は鞻(かたし)に作る。

【八】 Sūtra 契經、貫經。

【九】 Geya 應頌、重頌。

の如き衆と住す』
輪頭檀王、復偈頌を以て、佛に向ひて說きて言ふ、
『大地諸山川を降伏し　并に及び諸の千子を具せんと欲せるを　微妙の七寶を捨棄し來りて　云何ぞ此の沙門の行を行ずる』
佛、復偈を以て、輸頭檀王に報じて、是の如き言を作したまふ、
『智慧・三昧は我が大地　千數の禪定はこれ我が子[一〇]　七種の覺分はこれ其の寶　大王よ知れ、我悉く已に得たるを』
輸頭檀王、復偈頌を以て、說きて言ひて曰ふ、
『汝昔車に調善の馬を駕し　其の車は雜寶に莊嚴せられ　潔白の傘蓋持ちて身を覆ひ　素拂は淸淨にして琉璃の把なりき』
佛、復偈を以て、王に報じて言はく、
『我正勤を持ちて驕馬と爲し[一一]　慧思慚愧を以て車と爲し　精進の駿疾なるを所乘と爲し　我乘りて以て無憂處に入る』
輸頭檀王、復偈を說きて言ふ、
『汝昔家に在りて乘れる　揵陟（Kaṇṭhaka）は　其の身潔白淸淨にして勝れ　衆寶もて鞍轡等を莊嚴し　此の調馬に乘りて意の隨に行けり』
佛、復偈を以て、王に報じて言はく、
『大地の有らゆる諸衆馬は　世間無數の多人の乘なり　彼等一切は常に定まり無しと　觀じ已りて意の隨に神通を馭す』
輸頭檀王、復偈頌を以て之に說きて言ふ、

【一〇】七覺支（Sapta bodhy-aṅgāni）とは、念覺支（Smṛti-sambodhy-aṅga）。擇法覺支（Dharmapravicaya-s.）。精進覺支（Vīrya-s.）輕安覺支（Praśrabdhi-s.）。喜覺支（Prīti-s.）。定覺支（Samādhi-s.）。捨覺支（Upekṣā-s.）の七なり。

【一一】思。三本に忍に作る。

『汝昔宮內に在りし時　殿閣は天の如くして異有る無く　刀弓箭を執りて衆に護られ　身に鎧甲を著して　甚だ精微なりき　今汝林に在りて護る者無く　夜叉(Yakṣa勇健)羅刹(Rākṣasa惡鬼)の畏るべき所　闇夜種種の諸獸鳴けるを　云何ぞ能く是の無畏を生ぜる』

佛、復偈を以て、王に報じて言はく、

『有らゆる夜叉・毘舍遮(Piśāca食血肉鬼)種種の諸獸の畏るべき者　黑闇の夜行きて林內に在るも　我が一毛端をだも動かす能はず』　他聲を畏れざること師子の如く　[二]風の繩もて羈する能はざる所の如く　亦蓮華の水に著せざる如く　吾世法の濁に在りて汚れず』

[三]爾の時、長老目揵連・長老摩訶迦葉・長老優婁頻螺迦葉・那提迦葉・伽耶迦葉・優波斯那・摩訶俱郗羅・村陀(Cunda)・離波多(Revata)等の無量の大衆、佛の左右に坐す。時に彼の諸德、苦行を以ての故に身に精光無く、勤體疲勞し形容羸瘦して、色光澤ならず、氣力尠少に、唯筋皮の其の形を纒裹する有るのみ。爾の時輸頭檀王、佛に白して言ふ『世尊、今世尊の右邊に在りて坐する者、此等の人輩は、何より來りて出家を得たるか』。爾の時世尊、金色の臂を伸べ、輸頭檀王に向ひて、彼の一一の諸比丘等を指して、口に悉く名を稱へ、王に示して言はく『此はこれ舍利弗、此はこれ摩訶迦葉、此はこれ優婁頻螺迦葉、此はこれ那提迦葉、此はこれ伽耶迦葉、此はこれ優波斯那、此はこれ離波多、此は別の離波多、是の如き等の輩は、皆此れ摩伽陀國の大姓婆羅門種なり』。輸頭檀王、復佛に問ひて言ふ『今、世尊の左邊に在りて坐するは、復これ何人ぞ。何より來りて、世尊の邊に在りて出家せるか』。佛、王に告げて言はく『此はこれ摩訶目揵連、此はこれ摩訶迦旃延、此はこれ摩訶俱郗羅、此はこれ摩訶純陀(Mahācunda)、諸の是の如き等も亦摩伽陀の村邑聚落の大姓の諸子なり』。時に、輸頭檀王、此の語を聞き已り、悵怏として樂しまずして、是の如き念を作す『此の我が子は、眞にこれ大姓刹利の童子にして、端正喜ぶべく、視る者厭かざること、猶ほ金像の如し。旣

【二】（原文）如風繩所不能羈。vātaṃ va jālasmiṃ asajjamānaṃ

【三】以下、Mahāvastu に缺く。

に是れ大姓刹利の童子なり、婆羅門を以て左右圍遶せらるゝこと、此の事宜しきに非ず。旣にこれ刹利大姓の童子なり、還た應に刹利大姓に圍遶せらるべきこと、此れ其の法に順ずるなり』。是の念を作し已りて、是の如き事を成就せんと欲するが爲の故に、卽ち座より起ちて、其の宮內に還る。

[一]優波離因緣品第五十五の上

[二]爾の時輸頭檀王、宮に還りて未だ久しからず。一童子有り、優波離(Upāli)と名く。其の前の業に從ひて、佛所に來至す。時に優波離童子の母、其の子優波離の手を牽捉し、將て以て佛に奉じ、是の如き言を唱へぬ、『此の優波離は、曾て世尊の爲めに鬚髮を剃除せり』と。時に優波離、卽ち世尊の爲めに髮鬚を剃る。時に優波離童子の母、佛に白して言さく、『世尊、優波離童子は、佛の鬚髮を剃るに、善能くし已るや不や』と。佛、優波離童子の母に告げて言はく、『復善く鬚髮を剃除すと雖も、身太だ低し』と。爾の時優波離童子の母、優波離に告げて是の如き言を作す、『汝優波離、汝、如來の爲めに鬚髮を剃除せんに、身を太だ低くして、尊の心をして亂れしむる莫かれ』。時に優波離、卽ち初禪に入りぬ。時に優波離童子の母、復佛に白して言さく、『世尊、優波離童子は、鬚髮を剃除するに、善能くし已るや不や』と。佛、優波離童子の母に告げて言はく、『復善能く鬚髮を剃除すと雖も、其の身太だ仰げり』。爾の時優波離童子の母、復優波離童子に告げて言はく、『汝優波離、身を太だ仰げて、尊の心をして亂れしむる莫かれ』。時に優波離、第二禪に入りぬ。時に優波離童子の母、復佛に白して言さく、『世尊、優波離童子は、鬚髮を剃除するに、善能くし已るや不や』。佛、優波離童子の母に告げて言はく、『復善能く鬚髮を剃除すと雖も、但以て入息、稍復太だ多し』と。時に優波離童子の母、優波離に告げて、是の如き言を作す、『汝、如來の與に鬚髮を剃除するに、入息をして是の如く太だ多からしめ、尊の心をして亂れしむる勿れ』。時に優波離童子、卽ち第三禪に

【一】 優波離の出家因緣並に本生を敍す。

【二】 優波離、佛を剃髮しつゝ四禪に入る。Mahāvastu, III. pp. 179—180

入りぬ。時に優波離童子の母、復佛に白して言さく『世尊、優波離童子は、鬚髮を剃除するに、善能くし已るや不や』。佛、優波離童子の母に告げて言はく『復能善く鬚髮を剃除すと雖も、然も其の出息、稍太だ多し』。爾の時、童子優波離の母、優波離に語りて、是の如き言を作す『汝、如來の與に鬚髮を剃除するに、出息をして是の如く太だ多からしめ、尊の心をして亂れしむる勿れ』。時に優波離童子、卽ち第四禪に入りぬ。爾の時、世尊、諸比丘に告げて言はく『諸比丘、汝等、速疾かに優波離手中の剃刀を取り、地に倒れしむる勿れ。所以は何に。その彼の童子、已に四禪に入りたればなり』。時に優波離童子の母、優波離童子の手中より卽ち刀を取りぬ。

[三]爾の時輪頭王、迦毘羅婆蘇都城に入り、諸釋種を喚びて、悉く皆來集するや、大殿庭に於て之に勅して言はく『汝等釋種、應當に知るべし。我が王子悉達、若し出家せずば、必定して當に轉輪聖王と作るべく、汝等釋種も亦應に承事すべし。何を以ての故に。彼、出家し已りて、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、已に能く無上の法輪を轉じて、人天中に勝る。彼、既に刹利種姓の王子にして、喜ぶ可く端嚴に、猶ほ金像の如く、人皆樂見す。而して彼乃ち婆羅門種を用つて、以て弟子と爲し、左右圍遶せらるゝは、此れ實に宜しきに非ず。既に、これ刹利釋種の王子なり。還た應に刹利釋種に圍遶せらるべきこと、乃ち善と爲すべし』。爾の時諸釋、咸皆共に輪頭檀に白して言はく『大王、今我等に於て、先づ何事をか作さんと欲する』。爾の時輪頭檀王、諸釋に告げて言はく『汝等諸釋、若し時を知らば、必ず須らく家ごとに別に一人出家すべし。若し其の釋種にして兄弟五人ならば、三をして出家せしめ、二人家に在れ。若し四人ならば、二人出家し、二人家に在れ。若し三人ならば、二人出家し、一人家に在れ。若し二人ならば、一人出家して、一人家に在れ。若し一人ならば、出家せしめざれ。何を以ての故に。我が諸釋種を斷ぜしめざらんが故に』。爾の時諸釋、咸く復共に輪頭檀に白して言はく『大王、若し爾らば、必ず須らく分明に其の言契を立てよ』。輪頭檀王、卽ち

【三】淨飯王、諸釋に出家を勸む。M.hāvastu, III. pp. 176 ff.

諸釋を集めて、之に問ひて言はく、『我が子、今既に出家せり。誰か能く隨從して出家する。若し能く隨從して出家せば、自ら名を抄して署し、以て記と爲すべし』。爾の時、五百の諸釋の童子、各自手もて己が名字を抄し、咸謂ふ『太子に隨ひて出家せん』と。

爾の時、五百の釋種童子、各、己が身に服せる所の瓔珞を解き、自ら相謂ひて言はく、『阿誰か我等の瓔珞を取るべき』と。籌量を作し已りて、復念言を作すらく、『此の優波離は、昔より長夜、我等諸釋種に勤事し來れり。是の優波離は、我等所脫の瓔珞を受くるに堪へん』。爾の時、五百の諸釋童子、各瓔珞を脫して、優波離に付し、既に付屬し已りて、俱に本家に還り、其の父母に諮りぬ。

[四]時に優波離、尋いで是の念を作す『彼等諸釋は、今既に能く珍寶瓔珞を捨てたり。我若し受用せば、これ相應せざる所なり。諸釋子には、大威勢有り、大神德有るに、既に能く重んずる所の官位及び諸財寶を棄捨して、尙ほ出家せんと欲するを、我、今何事ぞ出家せざらん』と。時に優波離剃鬚髮師、諸釋子の各往きて父母に諮白する時を見て、便即ち彼の施されし瓔珞を捨てゝ、即ち佛所に詣り、佛足を頂禮して、却きて一面に住し、其の優波離一面に住し已りて、佛に白して言さく『善い哉、世尊、唯願はくは我の佛に隨ひて出家するを聽したまへ』。爾の時世尊、即ち出家して、具足戒を受くるを聽したまふ。時に彼の五百の釋種童子、各己が家に至りて、父母に諮り已り、還た復輸頭檀の邊に來至して、之に白して曰はく『大王、今我等を將て、世尊の所に至るべし。彼、既に出家せり。我も亦應當に隨從して出家すべし』。時に輸頭檀、彼の五百諸釋童子と共に、佛所に往詣し、佛足を頂禮して、却いて一面に住し、既に安坐し已るや、輸頭檀王、佛に白して言さく『世尊、善い哉、大德刹利種姓、彼の婆羅門種を將つて、共に相關涉すべからず。實に宜しきに非ずと謂ふ。今世尊は刹利種姓なり。還た應に此の刹利を以て關涉すべきこと、乃ち善と爲すべし。然り、今世尊、釋種の內の五百の童子は、世尊の法中に於て出家し、具足戒を受けんと欲す。唯願はくは世

【四】優波離出家す。Mahāvastu III. pp. 180–181.

尊、哀愍して聽許し、兼ねて具戒を受けしめたまへ』。爾の時世尊、彼の五百の釋種の出家して具戒を受くるを聽し已り、[五]威儀を學ばしめて、之に告げて言はく『汝等比丘、咸倶に來りて優波離上座の比丘を禮すべし』。時に彼の五百の諸比丘等、先づ佛足を禮し、然る後に、彼の優波離上座の比丘を頂禮し、禮を修し畢りて、次第して坐す。

爾の時世尊、復輸頭檀王に告げ、言ひて曰はく『大王、今比丘優波離を頂禮し已りて、次第に應に五百の比丘を禮すべし』。爾の時、大王、佛の敎を聞き已りて、即ち佛に白して言さく『唯然り、世尊、我敢て違せじ』。卽ち座より起ちて佛足を頂禮し、然る後、彼の上座比丘優波離を禮し已りて、次第に復五百の比丘を禮し、禮し已りて次第に其の本座に還る。

[六]爾の時世尊、威顏悅豫して、是の如き言を作したまふ『今釋種、已に自ら釋種の憍豪を降伏し、亦復諸釋の憿慢を摧撲しぬ』。時に諸比丘、卽ち佛に白して言さく『希有なり、世尊、其の優波離は、今世尊に因りて、此の五百の釋種の比丘、及び輸頭檀王の尊敬禮拜を得たり』と。是の語を作し已るや、佛、諸比丘に告げたまはく『汝、諸比丘、此の優波離は、但、今日のみ、我に因りて此の五百の比丘、輸頭檀等の恭敬禮拜を得たるに非ず。汝等比丘、過去世時にも、其の優波離は、亦我に因るが故に、曾て五百の大臣の跪拜を得、亦彼の王の、名けて梵德(Brahmadatta)と曰ふに敬禮せらるゝを得たり』。時に諸比丘、各佛に白して言さく『此の事は云何。唯願はくは世尊、我が爲めに分別して其の本業を說きたまへ』。

爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく『我念ふに、往昔波羅捺城に、時に二人(dvedaridrā dārakā, 二窮子)有り、共に親友たり。其の人貧下にして、世に名聞無かりき。彼の人、時有りて自ら家內の菉豆一升を持し、波羅捺より城を出でゝ[七]客作す。爾の時、恒に一辟支佛有り、彼の波羅捺城に往來して住せり。時に辟支佛、晨朝時に衣を著け鉢を持し、城に入りて食を乞ひぬ。彼の二貧人、遙

【五】威儀とは容儀に規律あるをいふ。これに四種あり、行・住・坐・臥なり。

【六】Upāli-Gaṅga-pālanāṃ jātaka; Mahāvastu, III. pp. 182―197.

【七】客作は他に傭はれて勞作すること。

に尊者辟支佛の來るや、威儀庠序として平視して進み、僧伽梨(saṃghāṭi)を著し、齊亭相稱ひ、鉢を執りて動かざるを見、彼の人、見已りて淸淨の信を得、辟支佛に於て勇悅心を生じ、各相謂ひて言はく、「我等の貧窮なるは、皆過去に未だ曾て是の如き[八]福田に逢値せず、復逢遇すと雖も、或は恭敬し、供養し、瞻侍せざりしに由る。我等、若し是の如き勝上の福田に値遇するに當りて、恭敬し供養したらんには 今、應に此の如き厄難に遭ひ、所謂、無財にして恆常に客作し、以て自ら存活せざるべし。我等今應當に此の一升の菉豆を持つて、仙人に奉施すべし。若しそれ憐愍もて、我が施す所を受けたまはば、我等は卽ち應に此の貧苦を脫すべし」。是の念を作し已り、此の菉豆を將つて辟支佛に奉じ、是の如き言を作せり、「唯願はくは尊者、憐愍の心を起して、我が此の施を受けたまへ」。時に辟支佛、彼の二人に於て憐愍を生ぜるが故に、其の施す所を受け、施を受け已ると雖も、但辟支佛には、皆一法有り、衆生を化せんと欲せば、唯、神通を現ずるのみ、更に方便無し。時に辟支佛、彼の二人を愍れみて、其の施を受け已り、卽ち彼の方より、空に騰りて行きぬ。

【八】福田(puṇya-kṣetra)とは、將來の福を收むべき田地をいふ。譬へていふなり。これに三種あり、敬田・恩田・悲田これなり。中に於て、出家を敬田といふ。

卷の第五十四

優波離因縁品第五十五の中

爾の時、彼等親友二人、辟支佛の虚空に飛騰し、遊行無礙なるを見て、心に大に歡喜し、遍身踊躍して、自ら勝ふる能はず、十指掌を合し、尊者辟支佛の足を敬禮して、是の如き願を乞ふ、「願はくは我等をして、未來世に、恆常に是の如き敎師、或は更に勝れたる者に値遇せしめ、彼の說く所の法を、我等聞き已りて、速かに即ち知解して、惡道に生ぜざらんを」と。是の願を作し已るや、時に彼の一人又別に乞願す、「願はくは此の功德の力に藉りて、未來世に於て、恆に大姓婆羅門の家に生れ、願はくは能く四惟陀論(Veda)及び六十種の諸技藝等を誦持せんことを」と。而して偈有りて說かく、

「直端心にして正信を懷くのみを　即ち名けて上福田と爲すを得るに非ず　唯須らく佛と僧とを
供養し　并に及び辟支佛に値遇すべし」

時に彼の二人、後に命終し、一は波羅捺城の刹利姓の家に生るゝを得、即ち王位を紹ぎて、名けて梵德(Brahmadatta)と曰ふ。第二人は、婆羅門大清淨の家に生れ、優波伽摩那婆(Upaka-māṇava)と名け、具に諸論を解せり。其の優波伽摩那婆は、彼の時妻有り、名けて摩那毘迦(Māṇavikā)と曰ふ。端嚴喜ぶべく、觀るもの厭かず、最勝最妙にして、世に比無き所。優波伽摩那婆に愛敬せらるるを得、若し暫く見ざるも、心即ち悅ばざりき。

爾の時彼の妻摩那毘迦、少事の爲に因りて、嫌恨する所有り。遂に便ち優波伽と共に語らざりき。時に優波伽、煩寃懊惱して、是の如き念を作せり、「今日、我が妻摩那毘迦、我と共に語らず。聲音の斷絕、乃ち此の如し」。後時、彼の妻摩那毘迦、夏四月を過ぎて秋節に至り、優波伽摩那婆に白し

【一】經に「願言」とあり、言は衍字か。

【二】摩那毘迦は、學童女の意、男姓、摩那婆に對す。梵文「大事」は固有名詞とせず。正しからん。

て言ふ、「善い哉、聖子、汝、今去りて市肆に往至し、上妙・塗香・末香及び諸花等を買ひ取るべし。然る所以は、秋節四月、今已に至り、衆人皆共に五欲の樂を受く。我等も亦須らく身體を莊嚴して、五欲の樂を受くべし」。爾の時優波伽摩那婆、此の語を聞き已りて、歡喜踊躍其の體に遍滿し、自ら勝ふる能はずして是の如き念を作せり、「今、我が妻摩那毘迦、何ぞ期せん忽ち爾かく我と共に言語するを」。而して優波伽に、一金錢有りしが、先に餘村に於て他邊に出擧せり。遂に午時、日大地を炙り、陽焰暉赫し、其の諸地の色、猶ほ赤鷄の如くなるに、其の家宅を發して彼の村落に向ひ、往きて債錢せんと欲するや、其の道路に於て欲心纒逼し、口に婬歌を唱へぬ。爾の時に當りて、梵德宮と相去る遠からざりき。其の梵德王、樓閣に在りて清涼を取納し、晝日眠に著き、少時睡より覺むるや、忽ち彼の人の、五欲に染著して、婬歌の聲を作すを聞き、時に王、聞き已りて、卽ち復自らの本欲心を起發しぬ。而して偈有りて說かく、

「或は本[三]習氣に由る有り　或は復事に因りて其の情を動かす　これ色欲の愛染に著するに由る
　亦蓮花の水に因りて生ずるに似たり」

爾の時梵德、彼の婬歌を聞き、忽ち卽ち驚疑す、「此はこれ誰ぞ。盛日午炎熱の時に於て、欲心に染著し、口に婬歌を唱ふるは」と。是の念を作し已り、窗より遙に彼の優波伽が、盛午時の大地炎熱なるに於て、行く行く路に歌ふを見、卽ち一臣を喚びて、之に勅して言はく、「汝、速かに往きて彼の歌人を捉へ、將て我が邊に向ふべし」。其の臣、勅を聞き、卽ち王に白して言はく、「敢て旨に違せじ」と。遂に彼の邊に至り、優波伽を捉へて之に語りて言はく、「汝摩那婆、去りて來れ、去りて來れ。王、今汝を喚ぶ」。時に優波伽、心に恐怖を生じ、擧身の毛竪ち、悵怏して樂しまずして、是の如き念を作す、「今、誰か我を知るぞ。梵德の邊に於て、何の罪過有りて、我をして愁惱せしむる」。爾の時大臣、優波伽を將て、往きて卽ち梵德王の邊に至れり。其の王見已りて、卽ち愛心を生

【三】習氣は、過去の經驗による習性にして、唯識宗にては種子の意に用ふ。

じ、愛心を生じ已りて、彼の人に向ひ、偈を説きて言はく、

『日中輝赫正に炎熱　大地紅色にして赤鷄の如きに　汝今婬欲の歌に耽著す　云何ぞ是に於て惱を生ぜざる』　日光普ねく照らして正に炎熾　地上の融沙彌復熱するに　汝今婬欲の歌に耽著す　云何ぞ是に於て惱を生ぜざる』

爾の時優波伽摩那婆、偈を以て彼の梵德王に報じて言はく、

「大王、今は熱惱に非ず　上天の日炙何ぞ及ぶ所ならん　唯利を求め及び利を失する有るは　此はこれ惱中に最も惱と爲す』　日光は復大炎熾なりと雖も　此を惱中の極下惱と爲す　種種の諸事業を經營する　斯の如きを名けて最大惱と爲す』

時に梵德王、復優波伽摩那婆に問ひて言はく、「摩那婆、汝は今何事を經營してか、是處の熾熱の大地に於て路を行く」。爾の時優波伽、卽ち上事を以て、梵德王に向ひて、分別して之を説けり。爾の時梵德王、復優波伽摩那婆に告げて言はく、「摩那婆、止めよ止めよ、去る莫かれ。我、今汝に兩錢(māṣa)(卽ち天竺の金錢。)を與へん」。其の梵德王、遂に卽ち之に與へたり。

爾の時優波伽、梵德の邊に於て、其の錢を受け已り、仍つて復彼の梵德王に白して言はく、「善い哉、大王、大王の賜ふ所の兩錢を得たりと雖も、我、今王に諮りて更に一枚を乞ひ、前を通じて三を得ん。我、村落に向ひ、自ら一錢を取り、幷に王の賜ふ所と、合せて四枚を得、我、卽摩那毘迦と共に、其の秋節に供へて、五欲の樂を爲すを得ん」。其の梵德王、復優波伽那摩婆に告げて言はく、「汝、止めよ、去る莫れ。我、今汝に八錢を與へん」とて、遂に卽ち之を與へたり。其の優婆伽、八錢を受け已り、復王に白して言く、「善い哉、大王願はくは、歡喜せんを乞ふ。今、王に諮り、更に一錢を乞ひて、卽ち九錢と成し、復聚落に行き、自ら一錢を取りて、合せて十枚と成し、是の如き因緣もて、我、便ち摩那毘迦と共に、其の秋節の五欲の樂を受くるを得ん」。時に梵德王、復優波

伽摩那婆に告げて言はく、「止めよ、止めよ、去る莫かれ。我、今、汝に一十六錢を與へん」とて、王、卽ち錢一十六枚を與へたり。其れ、錢を受け已るや、復王に白して言く、「善い哉、大王、願はくは歡喜せんを乞ふ。已に王の錢一十六枚を得たり。今、王に諮り、更に一錢を乞ひ、十七と成すを得、復、聚落に往きて自ら一錢を取り、合せて十八と成さん。是の因緣を以て、我卽ち摩那毘迦と共に、五欲の樂を受くるを得ん」と。爾の時梵德、復、彼に告げて言はく、「汝摩那婆、止めよ、止めよ、去る莫かれ。我、今汝に三十二錢を與へん」と。其れ錢を受け已るや、復王に白して言はく、「善い哉、大王、願はくは歡喜せんを乞ふ。已に王の錢三十二枚を得たり。今復王に諮り、更に一錢を乞ひ、我、聚落に往きて自ら一錢を取り、合せて卽ち總て三十四枚と成し、便ち我が摩那毘迦と共に、其の秋節に於て五欲の樂を受くるを得ん」と。爾の時梵德、復彼に告げて言はく、「汝摩那婆、止めよ、止めよ、去る莫かれ。我、今汝に六十四錢を與へん」と。時に優波伽、卽ち錢を受け已りて、復王に白して言く、「善い哉、大王、願はくは歡喜せんを乞ふ。已に大王の六十四錢を得たり。今、願はくは王更に一錢を與へんを。我、今復、彼の村聚落に往きて、自ら一錢を取り、都て合せて六十六枚と成すを得、卽ち我と摩那毘迦と共に、秋節に於て、五欲の樂を受けん」。爾の時梵德、復彼に告げて言はく、「汝摩那婆、止めよ、止めよ、去る莫かれ。我、今汝に百錢を與へん」と。時に優波伽、百錢を受け已りて、復王に白して言はく、「善い哉、大王、願はくは歡喜せんを乞ふ。我、今已に王の錢百枚を得たり。今大王に諮りて、更に一錢を乞ひ、我、聚落に往きて、復一錢を取り、合して一百二錢と成すを得て、我と摩那毘迦と供に、共に秋節の五欲の樂を受くるを得ん」。爾の時梵德、復彼に告げて言はく、「汝摩那婆、止めよ、止めよ、去る莫かれ。我、當に別に更に汝に一村を與へ、以て封祿と爲すべし」。

[四]而して彼の婆羅門、爲に得て、爲に食る。是の故に其の人、數王邊に至る。其の王、卽ち最上の

【四】「而婆羅門、爲得爲食」。爲得爲食を、三本には唯得唯食に作る。

一村を擇びて、彼に與へて封と爲す。彼、封を得已りて、遂に卽ち勸劬し、勞役を辭せざること、猶ほ奴僕の如く、彼の王に伏事して、先に起き後に眠り、行迹和輭にして、作す所の事業、悉く王の意に稱ひ、意行端直なり。是の如く王に事へて、終に王の爲めに嫌責せらるる有らざりき。是の因緣を以て、王の顏色を取り、梵德王をして歡喜已む無からしむるや、後に於て、復更に優波伽と國を分ちて半治し、王の倉庫も、亦共に分半せり。彼の婆羅門、是の優寵を得、其の五欲具足の樂を受けて、乏少する所無く、是の如く次第に、一切の所作、悉く皆王の爲めに檢校して辨ずるを得たり。彼の婆羅門は、但己が家より、王宮に來至するや、王、恒に彼の膝上に枕して眠りぬ。

其の梵德王、後一時に於て、優波伽の膝上に枕して臥し、因りて卽ち睡著す。時に優波伽、王の睡れるを見已りて、心に是の念を作せり、「云何ぞ一國に乃ち二王有りて、並びに威勢を用ひん。一倉庫内も、亦復二人共に用ふべからず。我、今梵德王を覓め、便ち其の命根を斷つべし。若し殺すを得ば、我、卽ち獨王位を取りて治化せん」。彼の優波伽、是の念を作し已りて、刀を取らんと欲せる時、更に、此の念を作せり、「此の梵德王、先に我が爲めに此の利益を作し、其の半國を分ちて、我と共に治め、一切の倉庫も亦悉く分半せり。我、今若し殺さば、これ恩義無し」と。是の如く第二に、又是の念を作せり、「云何ぞ二人、一處にして共に治國化するを得べき。亦復二人共に倉庫の財物を用ふべからず」。乃至、第三に念じ已りて、還た悔い、「我、若し彼を殺さば、必ず當に我が恩義無き行を成ずべし」。

時に優波伽、是の念を作し已りて、聲を擧げて叫哭す。時に梵德王、此の哭聲を聞き、忽然として睡より覺め、覺め已りて彼の優波伽に問ひて言はく、「汝今云何ぞ此の大聲を作すか」。時に優婆伽、梵德王に向ひ、前事を廣說す。時に梵德王、心に彼の優波伽に此の如き事有るを信ぜず。之に語りて言はく、「汝、應に定めて此の如き事無かるべし。汝優波伽、是の語を作す莫れ」。時に優波

伽、尋いで復彼の梵德王に語りて言はく、「大王、今當に我が語を信ずべし。我、實に是の如き惡心を起發せり」。時に優波伽、復更に思惟して、是の如き念を作せり、「我、今忽ち是の如き惡心を發せるは、何の事相に因るか」と。正しく觀思し已り、是の如き言を作せり、「我の是の如き惡事相を發せるは、五欲の爲めの故、王位の爲の故に由らざる莫し。我、亦須らく此の王位を貪るべからず、亦復須らく其の世樂を貪るべからず。我、此の事に因りて、是の惡心を生ぜり。我、今唯捨家して出家すべし」と。即ち王に白して言はく、「大王、今我の將に捨家して出家せんと欲するを知れ」。時に、梵德王、優波伽に語る、「是の語を作す莫れ。我、既に汝と國を分ちて半治し、倉庫も亦半す。我、今汝と腹心なり。一心の汝に如似たる者有ること無し。汝、若し出家せば、我が今の心意、定めて安樂ならざらん」。其の優波伽、復王に語りて言はく、「善い哉、大王、願はくは我が捨家して出家するを垂許せよ。我、今決定して出家せんこと疑はず。我が法行に於て留難を生ずる莫かれ」。時に梵德王、又復彼の優波伽に告げて言はく、「汝の樂む所の如く、意の隨に作せ」と。

爾の時、波羅捺城に一瓦師(kumbhakāra)有り。先に出家して仙人の行を行じ、彼の城に依りて住しぬ。時に彼の仙人に大威德有り、已に五通を成じ、即ち能く手を以て日月の輪を摸る。時に優波伽、彼の仙人に依りて鬚髮を剃除し、既に出家し已りて、勇猛精進にして、即ち四禪を成じ、復五通を得、大に威力有り、亦能く手を以て日月の輪を摸れり。其の梵德王、優波伽の捨家出家して大仙を成就し、大威德有り、亦能く手を以て日月の輪を摸るを聞き、聞き已りて微笑し、宮內に入りて諸宮人に對し、偈を說きて言はく、

「優波は善を造して未だ久しきを經ざるに　已に利益果報を獲ること深し　彼の仙や善い哉人身を得　五欲を捨棄して出家して行ずること」

爾の時宮人、梵德王の是の偈を說くを聞き已り、其の心皆悉く憂愁して樂まず。遂に共に彼の梵

德王に白して言はく、「大王、當に知るべし。彼の人は本昔販賣博戲し、杖を執りて行きて乞ひ、以て自ら活命し、婆羅門人の威方尠少なり。是の故に出家せり。大王、今彼の人の家國を捨棄して出家せるを學ぶ莫れ」。

爾の時、梵德に剃髮師(kalpaka)有り、其の人を名けて嗢伽波羅(Gaṅgapāla)と曰ふ。舊來、恒に梵德王の心に可し。時に梵德王、追覓して彼の剃髮師を喚び、之に勅して言はく、「嗢伽波羅、汝、今我が爲めに鬚髮を剃治せよ」。是の語を作し已りて、即ち睡眠しぬ。時に剃髮師嗢伽波羅、王の眠れるを見已り、便即ち王の鬚髮を剃治す。是の如く治し已るも、梵德王、睡眠して覺めざりき。王、後に覺め已り、剃髮師嗢伽波羅に謂ふ、「我、已に勅する有りて、汝をして我が與に鬚髮を剃治せしめぬ。云何ぞ不か」と。是の語を作し已るや、嗢伽波羅、梵德王に白す、「我、已に治し訖る。但、王、睡眠して覺めざるのみ」と。

爾の時梵德、鏡を取りて自ら照し、己が鬚髮の治理し訖れるを見、見已りて喜を生じ、因りて即ち彼の嗢伽波羅に勅すらく、「汝、當に我が最勝の村落を受くべし。我更に汝に稱意の樂事を與へん」。時に剃髮師嗢伽波羅、梵德王に白す、「我、宮內の王の眷屬と共に、委曲評論して、然る後に王に報ぜん」と。是の語を作し已り、拜辭して去りぬ。其の剃髮師嗢伽波羅、本より王宮に於て、出入無礙なり。遂に即ち宮に入り、宮人に白して言はく、「王、已に我に最勝の村落を許して、以て封邑と爲せり。諸后妃等の意、悉く云何。取るべきや不や」 爾の時、妃・后、彼の嗢伽波羅に告げて言ひて曰はく、「嗢伽波羅、汝は今何を用つて王の最勝の村落を取らん。我等現在、能く汝に金銀珍寶を與ふるに足れり。但、我汝に囑託する所の事有り、我が爲めに辨ずるや不や」。其の剃髮師嗢伽波羅、宮人に問ひて言はく、「妃等、今何の事業有りて、我をして辨ぜんと欲せしむるか」。時に諸妃等、即ち彼の剃髮師に告げて言く、「大王、比來、宮內に入る毎に、恒に一偈を說き、是の如き

言を作せり。

「優波は善を造して未だ久しきを經ずして　利益果報を得ること深し　彼の仙や善い哉人身を得
　五欲を捨棄して出家して行ずること」

我等、時に於て王の此の偈を聞き、即ち是の念を作せり、「將た恐らくは大王、位を捨てて出家せんかと。善い哉、善い哉、咺伽波羅、汝王邊に至り、斯の偈の意、其の義如何なるかを問へ」。爾の時咺伽波羅、即ち往きて梵德王の所に詣し、到り已りて白して言はく、「大王、我に最勝の村落を許すも、我、今是の如きの願を用ひず。但、王、宮內に入る毎に、妃后の前に於て說く所の偈を知らんと欲す。

「優波は善を造して未だ久しきを經ずして　利益果報を得ること深し　彼の仙や善い哉人身を得
　五欲を捨棄して出家して行ずること」

善い哉、大王、願はくは我が爲めに此の如き偈の意、其の理如何なるかを說け。今、大王より是の如き願を乞ふ」。時に梵德王、剃髮師咺伽波羅に告ぐ、「我聞く、優波伽摩那婆は、半國の位を捨てて出家を求め、仙人を成ずるを得て、大威力有り、能く手掌を以て日月輪を摩すと。我、今正に五欲を以て斯に醉亂貪著す。是の故に、我、今彼を仰羨し、數宮內に入りて、是の偈を說けるなり」。時に剃髮師咺伽波羅、即ち宮內に入り、妃后の邊に至り、是の如き言を說く、「諸妃后等、大王の出家せんと欲するを慮る莫かれ。大王は、今定めて出家せざらん」。時に彼の后妃、剃髮師咺伽波羅の此の語を說くを聞き已りて、皆悉く歡悅し、心に踊躍を懷き、其の體に遍滿し、自ら勝ふる能はず、諸瓔珞を將つて、已が身を莊嚴し、之に告げて言はく、「咺伽波羅、我が此の瓔珞を、今悉く汝に施さん。汝、今更に活命の爲めの故に、諸業を造作する莫かれ」。咺伽波羅是の事を見已りて、是の如き念を作す、「彼の優波伽は、既に是の如き半國の王位を捨てて出家を求め、今梵德王も、彼を仰羨

す。我、今何が故に、是の事を作さずして、一切世間をして我を羨ましめん。然も此の后妃は、諸瓔珞を將つて、以て我に施せり。我、若し此の后妃の意に順從せば、事必ず不善ならん。我、今、亦捨棄し、從つて出家すべし」。咺伽波羅、是の念を作し已りて、梵德王の所に詣り、白して言ひて曰はく、「大王、我に許すに前事を以てせり、我、今意に捨棄出家を樂む」と。時に梵德王、之に問ひて言はく、「咺伽波羅、汝、今意に誰の邊に於てか出家せんと欲する」と。咺伽波羅白して言はく、「大王、我、往きて優波伽の邊に至り、出家せんに欲するのみ」。時に梵德王、之に告げて言はく、「咺伽波羅、汝の意見の如く、願に隨うて作せ」と。

爾の時咺伽波羅、自ら鬚髮を剃り、優波伽仙人の所に至りて、卽ち出家し、既に出家し已りて、勤劬精進し、尋いで四禪及び五通を獲、大威神を得、大威德有り、亦能く手を以て日月輪を摩せり。その梵德王、既に復彼の咺伽波羅の出家を得已りて、大神仙と成り、大威力有り、復能く手を以て日月輪を捺ると聞き、此の事を聞き已りて、仰羨に勝へず、彼を見んことを欲求し、諸臣に告げて言はく、「諸大臣等、我今彼の仙人の所に往き、彼と共に相見んと欲す」。時に諸臣等、王に白して言はく、「大王、然らず。大王は、今身自ら彼の人の所に往く合からず。我等、使を遣はして、彼の仙を喚び來らん」。時に梵德王、諸臣に報じて言はく、「卿等、今應に此の理無るべし。汝等、是の如き語を作す莫れ。上世より已來、此の如き法、諸仙を、身自在ならずして、從つて喚ぶ有ること無し。我等、今身、自ら彼に往かん。此はこれ如法なり。何を以ての故に。彼の仙人等は、これ大福田なり、供養を受くるに堪ふ。我等、必ず須らく身自ら彼に至らん」。時に梵德王、自らの威德に乘じ、五百の乘車を莊嚴備辦して、左右圍遶し、及び五百の諸大臣等と、波羅棕より出でて、彼の諸仙人の所に詣向し、[五]自ら彼の世界に光顯せんと欲しぬ。

爾の時仙人咺伽波羅、遙に王の來るを見、至るに及びて王に白す、「善來、梵德、希に能く遠きよ

【五】（原文）自欲光顯於彼世界。自身仙人の住處に身を顯はさんとするなり。

り至りたまふ」と。爾の時彼等五百の諸臣、怨恨して彼の嗢伽波羅を瞋り、麁獷の言を出す、「汝はこれ下賤なる婬女の生める所、穢濁不淨にして、恒に垢膩を洗へり。云何ぞ、今日、大王の名を喚ぶか」。時に梵德王、彼の臣を止めて言はく、「是の語を作す勿かれ。仙法は是の如く、人の名字を喚ぶ。但此の仙人のみ、戒行有り、大威力有ればなり」。時に梵德王、卽ち諸臣に向ひ、偈を說きて言ふ、

　「卿等此の仙人を恨む莫かれ　此の仙は修行已に具足し　有らゆる苦事を能く行ぜるが故に　一切の苦怖畏を度するを得たり』心旣に一切の惡を捨つるを得たれば　卽ち剃除師及び瓦師に非ず　嗢伽波羅は已に苦行し　我を降伏するが故に名字を喚べり』　現に忍力を得たり、汝等看よ　諸根を降伏して證果を獲　諸天人に敬重せらるるを得て　卽ち天人中に最も勝れたり』

爾の時梵德王、及び宮內の諸婇女等、先づ仙人の足を頂禮し、却いて一面に住す。彼等五百の諸大臣等も、尋いで復彼の仙人の足を頂禮し、旣に頂禮し已りて、然る後復嗢伽波羅仙人の足を禮し、次後に亦瓦師の足を禮しぬ。其の梵德王、一面に坐し已りて、諸仙を慰めて言はく、「諸尊者輩、身體康和にて安隱なりや不や。求むる所の活命、至勞ならざるや。人の諸仙人を惱亂する無きや」。爾の時仙等、梵德に報じて言はく、「是の如し、大王、此の事須らく忍ぶべし。但、王の體內、安和なりや不や。一切の眷屬、及び諸大臣、國內の民庶、悉く安隱なりや不や」。是の語を作し已りて、彼等諸仙、梵德王の爲めに說法敎化して、心をして歡喜し、功德を增長せしむ。時に梵德王、彼の諸仙の說法敎化を蒙り、心をして歡喜し、功德を增長せしめ、坐より起ちて、諸仙を頂禮し、其の本處に還れり』と。

爾の時佛、諸比丘に告げて言まはく、『汝等、若しは心に彼の時の優波伽は、其の人これ誰ぞと、疑ふ有らん。異見を作す莫かれ。卽ち我が身これなり。汝等比丘、或は、心に彼の時の仙人嗢伽波羅剃髮師は、其の人これ誰ぞと、疑ふ有らん。異見を作す莫かれ。此の優波離比丘これなり。汝等比

丘、或は心に彼の時の梵德王は、其の人これ誰ぞと疑ふ有らん。異見を作す莫かれ。此れ即ち輸頭檀王、これなり。汝等比丘、或は、心に、彼の時の五百の諸大臣等は、其の人これ誰ぞと、疑ふ有らん。異見を作す莫かれ。卽ち今の五百比丘、これなり。諸比丘、時に、優波離比丘は、亦我に因りて五百の大臣の恭敬禮拜を得、幷に及び彼の梵德王の禮を得たりき。今も亦此の如く、復我に因りて五百比丘、及び輸頭檀王に禮拜せらるるを得たり』。

爾の時、[六]世尊、諸比丘に告げたまふ『汝等比丘、若し我が聲聞弟子の中の持律の最なる者を善く知らんと欲せば、謂はく優波離比丘、これなり』。爾の時諸比丘、是の念を作して言ふ『其の優波離は、昔何の業を作してか、彼の業報に乘じ、剃髮師下賤の家に生れたる。復何の業を作してか、其の業報に乘じて、出家を得、具足戒を受け、羅漢果を獲、今、如來其れに記を授けて、「汝諸比丘、我が聲聞弟子の中にて、持律の最なる者は、謂く、優波離比丘これなり」と言ふを得たる』。時に諸比丘、是の語を作し已りて、佛所に往詣し、白して言さく『世尊、其の彼の長老優波離は、昔何の業を作してか、彼の報に乘ぜるが故に、剃髮師下賤の中に生れたる。復何の業を作してか、彼の業に乘ぜるが故に、出家を得、具足戒を受け、羅漢果を得、卽ち如來、其れに記別を授けて、「我が聲聞弟子の中にて、持律第一」と稱したまふを得たる』と。

爾の時佛、諸比丘に告げて言はく『汝、諸比丘、我念ふに、往昔此の城に在りて、剃髮師有り。其の人、娉求に、自らの門戶に稱ひて、剃髮師の家より女を娶りて妻と爲し、其の後久しからずして、一子を產生しぬ。彼の剃髮師、尋時患に遇ひ、醫療を加へて治すと雖も差へず、其の所患に因りて、乃至、命終せり。既に命終し已るや、剃髮師の妻、彼の童兒を將て、自らの兄弟に付し、口づから之に告げて言はく「此の童兒は、これ汝の甥甥なり、今將つて相付す。汝等、必ず須らく此の童兒に自らの父の本業を敎ふべし」と。彼の剃髮師、其の姉妹の是の語を作すを聞き已りて、此

【六】優波離持律本生、Mahāvastu に缺く。他傳にも見えず。

の童兒を受け、遂に便ち父の本業を教授せり。彼の剃髮師、恆に王宮に在りて、王に敬重せられ、毎に國王の爲めに、鬚髮を剃除し、大に外に在りて人の爲めに剃治せざりき。

　時に王、勅して白象一頭を給ひ、之に勅して言はく、「凡そ佛無き世には、辟支佛有り、猶ほ犀牛の如く、獨行して出る時、當に利益を作すべし。尋いで彼の時に、辟支佛有り。頭鬚爪髮、悉く皆長利なり。彼の時の剃髮師の邊に來到して、之に告げて言はく、「善い哉、[七]賢首、願はくは我が與に鬚髮を剃除すべし」。時に剃髮師、辟支佛に報じて、是の如き言を作せり、「善い哉、大仙、若し然かせんと欲せば、明日を待ちて晨朝に早來するを聽せ。必ず當に仙の與に鬚髮を剃除すべし」。時に彼の尊者、辟支仙人、此の語を聞き已りて、尋時に還り去り、彼の夜を過ぎて、晨朝に起きたる時、衣を著け、鉢を持ちて、還復彼の剃髮師の邊に詣り、是の如き言を作せり、「善い哉、賢首、今當に我が與に鬚髮を剃除すべし」。時に剃髮師、還復彼の辟支佛に白して言はく、「善い哉、大仙、若し必ず然らば、日の晩に至るを聽せ。卽ち仙の與に剃らん」。是の如くにして、乃至、若し日西來せば、還復詣りて「晨朝を待つを聽せ」と言ひ、若し、晨朝に來れば、「日の西するを待つを聽せ」と言ひ、是の如くにして、乃至、晨も亦剃らず、晩も亦剃らざりき。

　彼の童子、此の尊者辟支仙人の、或は晨朝に來り、或は日の西するに至り、日月恆に爾るを見、見已りて白して言はく、「辟支尊者仙、何の緣の故に、或は朝に、或は晡に、恆に此に來至するか」。時に、辟支佛、彼の童子に向ひ、廣く前事を說けり。爾の時童子、仙人に白して言はく、「我が身は、終に仙の爲めに髮を剃らさらん。何を以ての故に。王宮に出入すること自在なるを恃み、憍慢を生ずるが故なり。我、今當に仙人の爲めに剃髮すべし」。時に彼の童兒、卽ち仙人の爲めに、鬚髮を剃除せり。爾の時、尊者辟支仙人、是の如き念を作せり、「今此の童子、大に功德を作せり。我、今當

【七】賢首は賢者の誤ならん。

に須らく、彼の童子の爲めに、功徳の事相を光揚示現すべし」。是の念を作し已りて、童子に告げて言はく、「汝童子、若し時を知らば、必ず當に我の鬚髮を持取すべし、汝は當來に於て、大利益有らん」。是の語を作し已りて、猶ほ鴈王の其の兩翅を舒ぶるが如く、神通力を以て、忽爾に飛騰し、空に乘じて去りぬ。時に彼の童子、辟支佛所に剃れる鬚髮を取りて髆上に置き、辟支佛に向ひて、淸淨心を生じ、十指を頂戴し、合掌して禮を作し、即ち是の願を發しぬ「願はくは我當に未來世中に還是の如き辟支佛尊、或は更に勝れたる者に値ひ、彼の世尊の有らゆる説法を、願はくは我速かに即ち悉く皆知解せんを。又願はくは我更に惡道に生ぜざらんを。又願はくは當來の生生世世に、恒に此の如き剃鬚髮師と作り、福田の爲の故に、是の如き聖者に供養承事せんを」と。

爾の時、彼の城の宮内に、國王昇殿して事を視、大國臣の與に、左右圍遶せられき。而して、彼の大衆、悉く皆遙に彼の辟支佛の空に騰りて行くを見、大衆見已りて、彼の王に白して言はく、「大王、今甚だ吉利有り、善く人身を得たることよ。如今國內に福田出世す」と。王、遂に仰觀し、即ち彼の時の辟支佛を見已りて、諸臣に告げて言はく、「此の辟支佛の鬚髮を剃りし者は、大に吉利を得ん」と。時に彼の王の鬚髮を治むる師と爲れるもの、因りて王の邊に在りて、王に白して言はく、「此の仙人の如きは、これ、我能く剃れり。更に誰か能くせん」。時に彼の童子、此の語を聞き已りて、即ち王の邊に至りて、王に白して曰ふ、「大王、當に知るべし。我が舅は、今虛言浪語す。我が舅は、本彼の鬚髮を剃らざりき。此れ旣に小事なるに、猶尙ほ妄稱す。この我れ彼の仙人の鬚髮を剃れり。其の實に剃れるを論ずれば、即ち我が身なり」。爾の時、王の鬚髮を治むる所の師、彼の童子を訶す、「咄なる哉、癡人、汝何の力有りてか、能く彼の髮を剃らん」と。時に彼の童子、即ち辟支佛の髮を挽き出だして、大衆に顯示す、「此の仙人の髮を、我現に持行す。願はくは悉く知見せよ」と。

爾の時王、是の如き事を見已りて、卽ち瞋怒を生じ、彼の恒に治する鬚髮師に告げて言はく、「咄なる哉、癡人、汝我が邊に於て、是の如き力有るに、今日何に因りてか、我を虛誑せる。汝速かに國を出で、我が境に住する勿かれ」。幷に卽ち彼の所乘の白象、及び鬚髮を治する諸具度等、及び封祿を奪ひて、彼の童子に與へ、之に勅して言はく、「今日より後、汝、恒に我が與に其の鬚髮、及び爪甲を治せよ」。時に彼の童子、王に白して言はく、「王の勅する所の如くして、敢て違せじ」。爾より已後、恒に卽ち王の爲めに、其の鬚髮、及び爪甲等を治し、世の壽命に隨ひて、終を取れる後、彼の功德に因りて、生生世世、惡道に墮せず、天より人に至り、人より天に至り、二處を往返しぬ。後一時に於て、還生れて波羅㮈城剃髮師の家に在り、喜ぶべく端正に、觀るもの厭かざりき。而して彼の童子を、父母養育し、其の長大するに及び、意智漸漸し、技藝成就せり。

爾の時、迦葉世尊・怛他伽多・阿羅訶・三藐三佛陀世に出現し、大教師・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と作れり。爾の時、迦葉婆伽婆・阿羅訶・三藐三佛陀、已に法輪を轉じて、逆轉流轉し、已に法擧を受けて本願具足し、最も勝丈夫の志に稱利するを得、所化の蓮華を開敷示現し、無量億百千の衆生に、善道を安置せり。爾の時に當りて、彼の波羅㮈城、住舊仙人所居の處、彼の鹿苑中に依りて修行し、比丘僧二萬人と倶なりき。時に彼の剃治鬚髮師の父數彼の苑に至り、諸比丘の與に、鬚髮を剃除したり。然るに彼の小兒、始めて能く行ける時、父と共に伽藍寺内に至りぬ。然るに諸比丘或は諸法を說きて、講論せる時、彼に至りて聽くを得、律を講說せる時は、或は復聽くを得、或は復聽くを得ざりき。時に彼の童子、諸比丘に問ふ、「云何ぞ、一切等の是の善言を、我、或は聽くを得、或は聽くを得ざる。其の意如何」。時に諸比丘、報じて言はく、「童子、此の如き法は、これ諸比丘祕密の事なり。若し、具足戒を受けざるものは、悉く聽くを得ず」。時に彼の童子、此の事を聞き已りて、心に懊惱を生ずらく、「云何ぞ、願はくは我速かに出家

を得て、善語を聞くに堪へんを」と。

後時に、童子、律師の邊に至りて、出家せんことを請乞して、具戒を受くるを得、諸比丘に依りて、戒律を誦持し、法に依りて行ぜり。復此の如しと雖も、出世の智を證するを得ざりき。然るに彼、後時に病に困しみて床に著き、命終せんとするに臨み、又是の願を發せり、「迦葉如來・怛他伽多・阿羅訶・三藐三佛陀に一菩薩あり、名けて護明(Jyotipāla)といふに、已に授記して言はく、汝、將來、壽百年の世に於て、當に佛と作るを得、號して釋迦多他伽多・阿羅訶・三藐三佛陀と曰ふべしと。我、今、願はくは將來の釋迦牟尼に値ひまつり、若しは所願に順じて、彼の教中に在りて、亦出家を乞ひ、具戒を受け已りて、彼の世尊の諸弟子中の持律する所のものに於て、我、第一たらんを。我が今日の此の師和上の如きは、迦葉佛の諸持律行弟子の中に於て、最も第一たりき。我も亦是の如し。彼の時の、釋迦如來の法教の中に於て、持律の弟子は、我最第一たらんを」。彼の人、爾より命終の已後、卽ち天上に生じ、及び今日最後の身に至りて、受胎して迦毘羅城剃髮師の家に生れ、優波離と名くるは、卽ち其の人なり』と。

卷の第五十五

優波離因緣品第五十五の下

「汝等比丘、若しは心に疑有らんも、彼の時の童子剃髪師は、異想を作す莫かれ、卽ち優波離比丘これなり。然も優波離は、昔尊者辟支佛の邊に於て、鬚髪を剃り已りて、是の如き願を乞へり、「願はくは我、生生世世の中、若し人身を得ば、恒常に生れて剃髪師の家に在らんを」。復彼の時更に乞願して言へり、「願はくは、我惡道の中に生るる莫からんを」と。彼の發願の果報力に由るが故に、惡道に生ぜず。爾より已來、天と人との間を流轉して、多く快樂を受け、現に己利を得て、復是の願を作せり「願はくは、我、未來世時に當り、恒常に是の如き敎師、或は此に勝れたる者に値遇せんを。若しは彼の敎師の所說の法を、願はくは我速かに證し、卽ち知解を得んを」と。斯の業報に由り、今我に値ふを得、以て敎師と爲し、卽ち出家するを得て、具足戒を受け、羅漢果を證しぬ。亦復迦葉如來の法敎の中に在りて、是の如き願を作せり「願はくは我彼の未來世中に於て、釋迦牟尼如來に値遇し、彼の法に背する莫く、隨順して出家せんを。若し出家するを得ば、彼の持律の諸弟子中に於て、我最も第一たらんを」と。彼の業報に藉りて、今我が法中に出家するを得、乃至、持律の諸弟子中、最も第一と爲す。汝、諸比丘、彼の優波離は、過去世に於て、是の如き業を作し、今報を得て剃髪師の家に生れ、復彼の願業を造れる因緣を以て、現に今報を得、我が法中に於て、是の如く出家し、及び具戒を受け、羅漢果を證し、我、今又復彼に記を授けて「我が持律弟子の中にて、最も第一と爲す」と言へるなり」。

[一] 羅睺羅因緣品第五十六の上

【一】羅睺羅の在胎六年の因緣本生並に出家因緣と其の本生を說き、終に巽師傳の佛姨母失明因緣と其の本生を附す。

二 又一時に於て、輸頭檀王、佛に白して言さく、『世尊、願はくは佛及び僧、我が明朝設くる所の飮食を受けたまはんを』と。時に、世尊、默然として許したまふ。輸頭檀王、既に世尊の默然として許したまふを見已りて、坐より起ち、佛足を頂禮して圍遶三匝し、辭退して去り、本宮に至り已るや、卽ち彼の夜に於て、微妙多種の飮食を辨具しぬ。所謂、噉食・嚼食・唼食・啑食なり。辨具し訖るや、夜を過ぎて朝に至り、灑掃鋪設して、卽ち使人を遣はし、世尊に白して言さく『今已に時至り、飮食備辨す。唯願はくは降赴したまはんを』。爾の時、世尊、日の東方に在るや、衣を著け鉢を持し、諸比丘僧に左右に圍遶せられ、佛、導首と爲りて輸頭檀王の宮內に來至し、到り已りて所設の佛座に坐したまふ。諸比丘僧は、各各次に依りて如法に坐す。爾の時輸頭檀王、佛を以て首と爲せる諸比丘僧の、次第して坐し已るや、自ら手もて諸の微妙の飮食を行り、其の種數を盡す。乃至、唼啑悉く充飽し、意に稱ひて自ら恣ならしめ、既に佛及び僧の飮食し飽くを見已りて、鉢器を洗治し、將つて別處の一小座上に置き、却いて一面に住し、既に安座し已りて、輸頭檀王、佛に白して言さく、『唯願はくは世尊、我を敎誨したまへ。又願はくは世尊善逝、示現して我をして長夜常に利益安樂の事を得しめたまはんを』と。爾の時世尊、輸頭檀王に告げて、是の如き言を作したまふ、『大王、今日若し時を知らば、應に須らく此の聽法の事を捨つべし。亦復須らく數來りて諸比丘等を問訊すべからず。王の身、久しからずして、應に自ら其の最勝妙果を得べし』。時に世尊、方便もて輸頭檀王を敎化し、說法顯示して、其をして解悟せしめ、歡喜せしめ已るや、座より起ちて本處に還りたまふ。

三 輸頭檀王、又一時に於て、舍利弗に因りて法眼淨を得、兼ねて須陀洹果を證するを得、而して淨飯王、已に諸法を得、已に諸法を證し、已に諸法に入り、已に諸疑を度して、心に惑有ること無く、已に無畏を得て、更に復自餘の法行を問はず、悉く證知し已りて、佛所に詣向し、佛に白して言さ

【二】淨飯王佛を請じて供養聞法す。Mahāvastu, III. pp. 141—142

【三】淨飯王、須陀洹果を證し、かつ出家を請ひて許されず。Mahāvastu, に缺く。

く、『善い哉、世尊、唯願はくは我を度して出家入道し、具足戒を受けしめたまへ』。爾の時、世尊、是の如き念を作したまふ、『輸頭檀王は、此の教中に於て捨家して出家し、復更に能く勝上の法を證するや不や』。爾の時世尊、是を思惟し已りて、自ら此の輸頭檀王が、決定して捨家し出家すべからず、亦、勝上の法を證するを得ざるを證知し、是の如く知り已りて、之に告げて言はく、『大王、今日若し時を知らば、但本家に在りて行檀布施し、福業を造らんのみ』。

四 後日に至り、摩訶波闍波提大夫人(Mahāprajāpatī)は、佛及び僧を請じて、飲食を供給し、悉く飽滿ならしめ、第三日に至り、第一宮内の諸妃眷屬、又復佛及び比丘僧を請じて、餚饍を供給し、亦悉く充足せしめ、第四日に至り、其の第二宮、又復佛及び比丘僧を請じて、種種百味の餚饍を供奉して、亦悉く充足せしめぬ。其の羅睺羅(Rāhula)、如來出家の六年已後に、始めて母胎を出で、如來の其の父の家に還りたまへる日、其の羅睺羅、年始めて六歲なり。

五 爾の時如來、迦毘羅婆蘇都城に至りたまふや、羅睺羅の母(Rāhula-mātā)是の如き念を作す、『我、昔此の羅睺羅に因るが故に、諸眷屬の誹謗する所と爲りき。今日時至る。我、彼の事に於て、應に自ら清淨にし、以て其の身を明にすべし。是の因緣を以て、必ず須らく佛及び比丘僧を請じて、飲食を布施し、及び一切の諸眷屬等を請じて、以て自ら明白にすべし』。耶輸陀羅(Yaśodharā)、是の念を作し已り、其の彼の夜、種種微妙の飲食を辦具し、既に備辦し已りて、彼の夜を過ぎ、卽ち使人を遣はし、往きて佛に白して言さく、『所設の飲食、辦已に訖る。世尊、時を知りたまはば、兼ねて一切の諸眷屬等に告げ、悉く聚集して所請に來赴せしめたまはんを』。

六 爾の時世尊、晨朝時に、日の東方に在るや、衣を著け鉢を持し、諸比丘の與に左右圍遶せられ、佛を導首と爲し、大比丘一千二百五十人と倶に、王宮に詣向し、鋪ける所の座の如くに、次第して坐す。爾の時羅睺羅の母、別に一枚の大歡喜丸を造り、羅睺羅を喚びて、手裏に內著し、是の如き

【四】淨飯王の後宮、佛に供養す。Mahāvastu, III. p. 142

【五】耶輸陀羅、佛僧を請ず。Mvst. この下、簡。

【六】耶輸陀羅、羅睺羅を佛に近づかしむ。Mvst. 一致。

言を作す『汝羅睺羅、比丘僧衆の内に往至し、是の汝の父に歡喜丸を施せ』。羅睺羅の母、復一切諸眷屬に告げて言はく『是の羅睺羅、今當に父を覓むべし』。時に羅睺羅、歡喜丸(modaka)を持し、遍ねく一切諸比丘を觀已りて、直に佛邊に往き、佛に白して言さく『是の如き沙門の蔭涼快き哉。是の如き沙門の蔭涼快き哉』。

〔七〕爾の時輸頭檀王、佛に白して言さく『世尊、此の事云何。耶輸陀羅に、頗し此の如き過患有りや不や』。爾の時世尊、輸頭檀王に告げて、是の如き言を作したまふ『大王、今日是の疑を作す莫かれ。耶輸陀羅に、此の過患無し。其の羅睺羅は、眞に我が子なり。但是往昔の業緣に逼られ、胎に在ること六年なりき』。爾の時輸頭檀王、及び諸眷屬、佛の此の語を聞きて、皆悉く歡喜し、踊躍身に遍ねくして、自ら勝ふる能はず、各各手を以て諸の種種の飮食餚饍を持ち、佛及び僧に供へて、充足を得しめ、自ら恣に飽き已るや、佛及び大衆、鉢を洗ひ手を澡ぎ、各小座を將つて、佛の左右を遶り、却いて一面に住す。

爾の時輸頭檀王、佛を敬するを以ての故に、廣く如上の因緣を問ふ能はずして、衆中の諸比丘に白して言はく『願はくは諸師等、世尊に請問せよ。其の羅睺羅、及び耶輸陀羅の往昔の造業因緣の事を』。〔八〕爾の時諸比丘、卽ち佛に白して言さく『是の羅睺羅、往昔何の業因緣を造作し、何の業報を以てか、胎に處ること六歳、耶輸陀羅、復何の業を作してか、懷孕六年なりしか』。

爾の時佛、諸比丘に告げて言はく『我念ふに往昔無量世を過ぎたる時、一王有り、婆羅門種なり。名けて人天(Manusyadeva?)と曰ふ。其の二子を生みぬ。大なるを日(Sūrya)と名け、次なるを月(Candra)と名く。其の大王子、恒に世を樂まず、出家せんを願欲す。未だ多からさる時を經て、其の王人天、算盡きて命終し、命終の後、其の子日月、互に相推讓す。其の長子言はく「汝、當に王と爲りて國の政事を治すべし」。其の第二子、復彼に語りて言はく「汝、當に王と爲りて國の政事を

〔七〕淨飯王、羅睺羅が佛の眞子なりや否やを佛に質し、佛ために本生を説く。Mvst. はこれを別所に揭ぐ。次註を見よ。

〔八〕Mahāvastu III. pp. 172—175. Rāhula-bhadrasya pūrva-yogaṃ; 有部破僧事卷十二(大二四・一六二中段以下)にこの本生出づ。Mahāvastu は Videha 國の Mithilā 市の王として、王名を缺き、有部破僧事は、波羅痆斯城附近に住める二道人として、國王の子とせず。道人名又異り、兄を商佉(Śaṅkha)、弟を里企多とす。

治すべし」と。其の日王子、月王子に告げて、復是の言を作す、「汝、必ず王と爲れ。我、當に捨家して出家すべし」。時に月王子、復彼の兄に白して、是の如き言を作す、「汝、既に長大にして、王位汝に當る。我、受くべからず」。其の日王子、復其の弟月王子に告げて言はく、「凡そ王位を受けんには、先づ何の法をか作すべき」。其の月王子、復彼に報じて言はく、「先づ號令を頒て」。其の日王子、復彼に問ひて言はく、「世に、若し人有り、號令に違せば、當に何の罪に合すべきか」。其の月王子、復彼に報じて言はく、「必ず須らく罪の重きものを重く罰すべし」。其の日王子、復其の弟月王子に語りて言はく、「其の道理に依りて、我、王たるを得べし。我、今但王位を捨てて汝に付せん。汝、當に王と作るべし。我、捨家して出家せんと欲す」。時に日王子、其の王位を以て、月王子に付し、遂に卽ち捨家して、出家修道するや、其の日王子の有らゆる眷屬、皆隨ひて出家しぬ。

時に日仙人、是の如き念を作す、「此等の諸人、我に依りて出家す。我、今既に此の輩の與めに師と爲り 當に須らく勤學して道業を求め、以て彼に勝るべし」。是の念を作し已りて、因つて誓言を發すらく、「願はくは我が此の身、今より已後、若し他の施に非されば、乃至、一物水及び楊枝をも自ら取るを得ざらんを」と。爾の時仙人、一時に至り、本念を忘失して、他が施與せざる藥草根等、及び諸果を、自ら取りて食し、又時に夜渇して他の澡罐を見て、謂ひて自許のなりと言ひ、遂に取りて飲み、而して自の澡罐は一邊に在り。時に彼の仙人本澡罐主、自の澡罐の空にして水有ること無きを見、之に問ひて言はく、「これ誰か我が澡罐中の水を取れるぞ。此乃ちこれ賊の住居する處にして、本より仙人所居の地には非ず」。時に彼の水を取りて飲める仙人、自の澡罐の水の其の中に滿てるが一邊に在るを見、遂に彼に報じて言はく、「我知らざるが故に、汝の水を取りて飲み、謂ひて我許のなりと言ふ」と。而して彼の仙人、彼の飲水日仙人に告げて言はく、「汝若し飲まば、善哉快哉」と。爾の時、錯誤して水を飲める仙人、正しく自ら思念すらく、「我、已に昔日の誓言に違失し

て、不善を爲せり。此仙法に非ず。我、今云何ぞ、與へず受けざる諸藥草根及び果子等を、自ら之を食ひ、復他の水を取りて、自ら飲めるか」と。此の因緣を以て、悵快として樂まず、心に憂惱を生じ、地上に蹲坐して、思惟正念にして、此の事を憂愁す。

爾の時弟子摩那婆の輩　便卽ち日仙人の所に詣向し、其の足を頂禮して、如法に承事す。而して彼の仙人、彼の弟子摩那婆に告げて言はく、「汝等童子、今より已後、我を頂禮する莫かれ。何を以ての故に。我、今日已に賊と成りたればなり」。彼の諸童子、卽ち王仙に問ひて、「是の如き言を作す、優波陀(upādhyāy a,和上)事云何ぞ」。時に日王仙、便ち彼等摩那婆に報じて言はく、「汝等童子、今須らく知るべし。我、他の邊より受けざる藥草の根及び果等を得、復他の水を取りて自ら之を飲めり」。是の語を作し已るや、彼等童子、尋いで復彼の日王仙に白して言はく、「師よ、今是の語を作す莫かれ。食飮する所は、一切皆是優波陀の物なり」。時に日王仙、復彼等摩那婆に語りて言はく、「汝等、我が他より得ずして、而かも自ら取ることの然らざるを知らん。我、今他より草藥根果及び澡盥水を得ずして、而も自ら取りて飮む。我已に賊と成れり。是の故に、汝等當に我が罪を罰するに、賊を治する如くにして、等しくして異有る莫かるべし」。時に諸童子、咸彼の仙に白さく、「我、敢て優波陀の罪を決せず。優波陀の弟は、今王と作り、現に是の境を領し、如法に治化す。彼の邊に至らば、必ず能く優波陀を治罰せん」。

爾の時王仙、月王の所に詣る。時に月王、既に此の事を聞き、其の日王の其の邊に來らんと欲するを知り、卽ち四兵を辦じ、出でて城外に迎へ、日王の到り已るや、其の足を頂禮す。時に日王仙、月王を止めて言はく、「我が足ヶ禮する莫かれ。所以は何に。我は今これ賊なり。大王、必ず須らく我が罪を治罰し、賊の如くにして異る莫かるべし」。爾の時彼の王、卽ち其の兄日仙人に問ひて言はく、「聖者は、今日何の賊を作せるか」。彼の時に仙人、月王に報じて言はく、「大王當に知るべし。我、

空閑清靜樹林に在りて修道せる時、他より得ざる藥草根果を取り、幷に他の水を取りて、自ら飲めり」。

爾の時彼の王、是の語を聞き已りて、煩寃懊惱し、嗚噎悲啼して、涕涙滿面にして、此の思惟を作す、「是の如き仙人の功德の本行、自來清淨にして過患有る無し。云何ぞ今日罪罰すべき」。是の念を作し已りて、王仙に報じて言はく、「我、諸仙に諸の果子及び藥草根、乃至、水等を取りて、自ら食し自ら飲むを許す。是の故に、仙人所食の者は、皆これ己が物にて、大仙は賊に非ず、亦罰す可らず」。時に日王仙、月王に告げて言はく、「大王は今日始めて斯の事を許しぬ。昔日に非ず」。王、復白して言く、「我、昔初めて王位を承くるの時、卽ち此の語有り、――我、沙門及び婆羅門に、草木及び水を施す。故に隨ひて用つて食せよ――と。是の故に大仙は實に賊に非ず。我、今云何が罰罪せん」。彼の王仙、復王に告げて言はく、「善い哉、大王、我、今已に不善の事を造し、自ら念ず、此の過罪を消す能はずと。我、既に他の澡盥水を取りて飲めり。是の故に大王、須らく我を治罰し、賊の如く如くにして二無かるべし」。

爾の時、月王に一㛝甥有りて、彼の衆會に在り。而して彼の㛝甥、月王に白して言はく、「大王、但、此の仙の與めに罪を決し、此の仙をして煩寃懊惱せしむる莫かれ」。爾の時月王、彼の仙に白して言はく、「事若し爾らば、我が苑に入在して、止住修道せよ」。爾の時月王、此の仙人をして、其の苑に入らしめ已り、尋いで卽ち廢忘して、復更に憶はざること六日に至り、然る後始めて念じ、諸臣佐諸卿等の輩を喚ぶ「彼の苑に在る仙は、出で去り已れるや、未だしや」。爾の時諸臣、月王に白して言はく、「彼の仙人猶ほ未だ苑を出でず、仍園内に在り」。爾の時月王、天下の一切の囚繫、乃至、飛走する諸禽獸等を放赦し、別に彼の仙を喚びて、種種甘美の飲食を布施し、之に白して言はく、「唯願はくは大仙、意に隨ひて去れ」と。放ち已りて、月王、心に不樂を懷く、「我此の仙に於て、

已に罪過あり。此の仙人に因りて、必ず罪失を得ん」と』。

爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『若し心に時の王仙、號して日と名くるは、此はこれ誰ぞと疑ふ有らば、異見を作す莫かれ、我が身これなり。汝等比丘、若し心に彼の時に當り、王の月と名けしは、此はこれ誰ぞと疑ふ有らば、異見を作す莫かれ、即ち羅睺羅これ其の人なり。其の、彼の仙人を將て苑に入れ、住すること六日なるが爲めの故に、彼の業報に因り、生死煩惱の中に住して、無量に苦を受け、其の餘の業に因りて、復母胎に在りて止住すること六歳なり。

〔九〕汝諸比丘、我念ふに、往昔無量世を過ぎて、一群の牛ありて牧所に在り。其の牛主の妻、自ら一女を將つて牛群に往至し、乳酪を搆取し、將てる所の二器、並に皆盈滿す。其の器の大なるを、女をして負はしめ、其の器の小なるを、身自ら擔提し、其の中路に至り、其の女に語りて言はく、「汝、速疾かに行け、此の間路險にて、怖畏すべき有り」。爾の時彼の女、其の母に語りて言はく、「此の器は大にして重し。我、今云何ぞ速疾かなるを得べき」。其の母、是の如く再語三語す、「汝、速疾かに行け。今此の路中、大に恐怖有り」と。爾の時彼の女、是の念を作す、「云何ぞ我をして最大の器を負はしめ、更に復催促して急行せしむる」。其の女、此に因りて便ち瞋恚を生じ、母に白して言はく、「母は且らく此の乳器を兼ね將つべし。我、今暫く大小便せんと欲す」と。而して彼の女の母、此の大器を取り、負擔して行き已るや、其の女、後に徐徐に緩行す。爾の時、彼の母、重擔を兼ね負ひ、遂に即ち行きて六〔一〇〕拘盧舍に至る』。

爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝等、若しは心に疑ふ有らん、彼の女――瞋恚心有り、乃ち其の母をして重きを負ひ、六拘盧舍を行かしめたるもの――は、異見を作す莫かれ、耶輸羅陀釋女是なり。既に、彼の時、母をして重きを負ひ、其の道路六拘盧舍を行かしめたり。彼の業報に由り、生死煩惱の內に在りて、無量の苦を受け、今此生に於て、懷胎する六歲なり。諸

【九】有部破僧事卷十二（大二四・一六二中以下）にこの本生出づ。Mahāvastu に缺く。

【一〇】拘盧舍（Krośa）。里程の名、牛又は鼓の聲の達する最大距離、五百弓又は五里。

比丘、所有ゆる諸業は、これ虚しく受くるに非ず。善惡を造るに隨ひて、還つて自ら之を受く。是の故に汝諸の比丘輩、恒に須らく此の身口意の惡を捨つべし。何を以ての故に。身口意に善惡の因緣を作せば、汝諸比丘、現に是の如き善惡の果報を見ん。汝等比丘、應當に是の如き善業を修學すべし』。爾の時世尊、淨飯王及び彼の大衆の與に、微妙の法を說き、歡喜せしめて、顯示宣通して教化し訖り、座より起ちて本處に還り給ふ。

(二二) 爾の時羅睺羅の母、羅睺羅をして往きて父の邊に向ひ、父の封を乞ひ取らしむ。時に羅睺羅、佛に隨ひて行き、且行き且語りて、是の如き言を作す、『惟願はくは沙門、我に封邑を與へたまへ。唯願はくは沙門、我に封邑を與へたまへ』。爾の時、世尊、自ら手指を授けて、羅睺羅に與へたまふ。時に羅睺羅、佛の指を執り已りて、佛に傍うて行く。爾の時世尊、羅睺羅を將て靜林に至り、遙に長老舍利弗を喚びて言はく、『汝舍利弗、羅睺羅を將て、其をして出家せしめよ』。時に舍利弗、佛に白して言さく、『世尊の教の如くにしまつらん』とて、佛の教を承け已り、羅睺羅を度して出家せしむ。

爾の時世尊、諸比丘の爲めに、(二三)禁戒を制したまへる時、その羅睺羅、甚だ大に歡喜して、遂に禁戒を受け、如法に奉行す。所以は何に。教法應に爾るべければなり。其の舍利弗、佛の教戒に依りて攝受教示す。

(二四) 爾の時に當り、善男子有り、皆悉く正信正見を獲得せり。何を以ての故に。並に出家して無上道諸梵行を求めんと欲せるが故に。利益現じて自ら法を證見せるが故に、自ら證知し已りて、口に自ら唱へて言はく、『諸漏已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、後有を受けず』と。其の羅睺羅も、亦復是の如く、自ら其の心を證し、正解脫を得たり。世尊即ち記して、諸比丘に告げたまはく、『當に知るべし、我が聲聞弟子持戒の中、其の羅睺羅は最も第一と爲す』と。

(此の摩訶僧祇師は、是の如き說を作す)。

【二二】羅睺羅、佛に追隨を請ひて後を逐ひ、遂に尼拘陀園に至りて出家せしめらる。Mahāvastu 前出〔註六〕の續文。猶この記、諸傳に見ゆ。

【二三】禁戒。佛が初めて禁戒を制したまへる年時に異說あり。或は十二年といひ、乃至、或は六年といふ。

【二四】羅睺羅出家に關する諸部の異說。一、大衆部說。

一四 其の迦葉維に復別說有り。爾の時に當り、輸頭檀王、諸食を辦じ已りて、卽ち宮內の諸眷屬等を喚び、之に勅告して言はく『汝等、今一人も羅睺羅に示して、悉達多はこれ汝の父なりと言はしむる勿かれ。何を以ての故に。羅睺羅、聞き已るや、卽ち其の父に隨ひて出家せんを恐るればなり。時に、淨飯王、其の彼の夜、種種の甘美なる飮食、餐・噉・唼・味を備辦し、辦具し訖りて、彼の夜分を過ぎ、始めて晨朝時に、諸座を鋪設し、羅睺羅及び諸の侍從童男童女を將て、左右に圍遶せられ、並に將つて阿輸迦林(aśoka-vana)に入らしめ、然る後使を發して、往きて佛に白して言さく『食時已に至り、飮食已に辦ず。願はくは尊、時を知りたまへ』。

爾の時世尊、日、東方に在るや、衣を著け鉢を持し、諸比丘僧に左右圍遶せられ、前に在りて行き、相隨へて輸頭檀王宮に往詣し、到り已りて、卽ち先に鋪ける所の座に於て、次第して坐したまふ。時に羅睺羅、彼の童男童女等の、各各亂行して漫遊漫戲し、諸の傅母亦遮斷せず、共に相戲笑するを見、遂に私に便ち阿輸迦林より、漸く王宮に入り、往きて世尊及び比丘衆を見、見已りて頂禮し、禮し已りて卽便ち樓閣上に昇る。彼の時に當り、羅睺羅の母、先づ樓閣に在り、世尊の剃頭鬚髮して、身に袈裟を著けたまふを觀見し、見已りて悲泣す。而して偈有りて說かく、

『大王の釋子の新婦は　其の名を號して輸陀羅と言ふ　夫の是の如き出家の相を見　心に悲泣を懷きて自ら懊惱す』

時に羅睺羅、其の母に問ひて言はく『聖者、何の故に悲啼すること是の如きか』。其の母、子の羅睺羅に報じて言はく『身體金色にして、沙門衆に在るは、卽ちこれ汝の父なり』。時に羅睺羅、復母に白して言はく『是の如き聖者は、我生れて已來、未だ曾て是の如き等の快樂の事有るを憶念せず』。是の語を作し已りて、樓閣上より速疾かに下りて、佛所に詣向し、佛の衣裏に

【一四】同、迦葉維部の說。

入り、隱藏して住す。時に諸比丘、卽ち遮斷せんと欲す。佛、之に告げて言はく、『汝諸比丘、復遮斷する莫かれ。但我が衣內に入りて住せしめよ』。

爾の時輸頭檀王、佛及び僧の、次第して坐したまへるを見、自手もて種種の淸淨甘美の餚饍を奉過し、所謂、餐噉啖咮等の食を、悉く飽滿して自ら恣に充足せしむ。爾の時世尊、飯食し訖りて、鉢を洗ひ手を澡ぎ、一小座を以て、却いて一面に坐し、卽ち父王の爲めに願を作して言はく、

『祭祀には火を最と爲し　諸偈には歎を最と爲し　人中には王を最と爲し　諸流には海を最と爲し　星宿には月を最と爲し　諸明には日を最と爲す　上下及び四方　及び衆生輩の若しくは天若しくは人に於ては　諸佛をこれ最と爲す』

爾の時世尊、淨飯王の爲めに、此の偈句を以て呪願し訖り、卽ち座より起ちて、緣に隨ひて去りたまふ。爾の時輸頭檀王、後に於て事務を檢校して東西に行く時、其の羅睺羅、已に世尊を逐ひて、宮外に出で、旣に宮に出で已りて、還た來入せんと欲す。時に世尊、自ら手指を授けて、羅睺羅に與へ、其をして執捉せしめたまふ。時に羅睺羅、其の身の上分、安隱快樂にして、譬へば繩を以て諸鳥の足に繫けたるが如く、更に復離れず。是の如く、世尊に依附し著し已るや、卽ち將て往きて尼拘陀林に至る。爾の時世尊、羅睺羅に告げて、是の如き言を作したまふ、『汝羅睺羅、汝能く我に隨つて出家するや以不や』。時に羅睺羅、佛に報じて言はく、『我、實に是の如く能く出家せん』。爾の時世尊、諸比丘に告げて、是の如き言を作したまふ、『汝諸比丘、我今羅睺羅をして捨家出家せしめ、舍利弗をして以て和上たらしめん』。爾の時諸比丘、是の如き念を作す、『世尊は、昔日曾て我等に告げて是の如き言を作したまへり、「若し年歲の二十に滿たさるあらば、具足禁戒を受くることを爲すを得ず」と。而も羅睺羅は、今始めて十五な

り。我等は當に佛の昔の教に依るべしとや爲ん。當に更に復別有るべしとや爲ん。所以に是の念を作す』と。時に卽ち前事を將つて、具に世尊に白す。爾の時、佛、諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、當に知るべし。十五にして出家せば、沙彌たるべし』。時に諸比丘、佛の教を蒙り已りて、卽ち出家せしめ、舍利弗を請じて、以て和上と爲すと。

一五 爾の時輸頭檀王、世尊、及び比丘僧・諸眷屬等を發遣し、然る後方に自ら食に坐せんと欲する時、是の言を作す『汝等、當に羅睺羅を喚び來り、我と共に食せしむべし』。爾の時左右、處處に求覓して、了に得る能はず、還りて王所に至り、俱に王に白して言はく『大王、我今羅睺羅を求むるも、所在を知る莫し』。爾の時輸頭檀王、復之に告げて言はく『汝等、往きて阿輸迦林、及び諸宮內に至りて、處處に求覓めよ』。時に彼の左右。復卽ち往きて阿輸迦林、及び諸宮內に至りて求むるも、亦得ず。來りて、王に告げて言はく『彼處に往至して求めたるも、亦見ず』。爾の時輸頭檀王、復、之に告げて言はく『速かに往きて尼拘陀園に至れ。或は、世尊將て出家せしめて、是の如く去れるに非ずや』。爾の時左右、王の此の勅を聞き、速かに卽ち彼の尼拘陀園に至り、處處に求覓めて、羅睺羅の、已に世尊に出家せしめられたるを見已りて宮に還り、王に白して言はく『大王、當に知るべし、其の羅睺羅は、已に世尊に放して出家せしめられぬ』。王、是を聞き已りて、迷悶して地に躃れ、少時を經て、還た醒悟するを得、城より出でて拘尼陀林に至り、佛所に到りて、佛足を頂禮し、却いて一面を坐して、佛に白して言さく『世尊が、往昔家に在ませる日、諸の解相師婆羅門等、已に曾て「若しそれ家に在らば、必ず當に轉輪聖王と作るを得べし」と授記せり。世尊は、今已に捨家出家したまふ。我、世尊の出家したまへるを見たる後、是の思惟を作せり。王位を以て難陀(Nanda)に付與せんと欲すと。世尊、後に復出家せしめたまふ。彼既に出家したれば、我復阿難陀(Ānanda)をして其の王位を紹がしめんと思惟せるに、復世尊の爲に已に放されて出家せり。彼出家せる後、

【一五】浄飯王、羅睺羅の出家を痛みて、爾今、親の許可なくして子弟の出家するを止めんことを佛に請ふ。

我復念を作し、當に彼の阿尼樓陀(Aniruddha)をして其の王位を紹がしめんと欲したるに、復世尊に放して出家せしめられぬ。彼出家の後、我復念を作し、婆提唎迦(Bhadrika)に其の王位を紹がしめんとせるに、世尊は亦復放して出家せしめたまふ。今、羅睺羅を留めて、王位を付するに擬せんと望欲せるに、復世尊に將ゐられて出家せり。世尊、是の如く羅睺羅を將て出家せしめたる後には、豈に我が王の種姓を斷ぜざらんや。復次に世尊、復是の如しと雖も、兼ねて子を戀ふるの情、皮肉筋骨及び髓に穿徹す。是の故に世尊、今日より後、是の如き敎制を作したまへ。諸比丘の出家せんとする有らば、父母に諮らしめ、出家を許し已りて、然る後乃ち放したまはんを』。

爾の時佛、輸頭檀王に告げたまはく『大王の意の如くにして、我敢て違せじ。我必ず當に敎へて是の如き事を作すべし』と。是の語を作し已りたまふや、爾の時世尊、淨飯王に向ひ、諸法の義を說き、顯示敎化して、王をして欣悅せしめ、其の威力を加へて、復歡喜せしめたまふ。爾の時輸頭檀王、既に歡喜し已りて坐より起ち、佛足を頂禮し、佛を遶ぐる三匝して、辭退して去り、其の宮內に還る。

爾の時世尊、此の因緣を以て、比丘僧を集め、之に告げて言はく『汝等比丘、當に知るべし、兒子の其の父母に於るや、報恩最も難し。所以は何に。然も其の父母、作し難きを能く作し、世間を顯示し、諸陰を長育せんが故に、乳哺して身體を養成せしむ。是の故に、汝等諸比丘輩、今より已去、若しは善男子善女人等の出家を求めば、先づ須らく彼をして其の父母に諮らしめ、然る後乃ち聽すべし。若し出家を許可し放さずば、須らく如法に治すべし。我今日より後、是の如き制を立つ。凡そ人の來り投じて出家せんと請はば、先づ須らく問ひて言ふべし、「汝の父母、生存するや不や」。彼の人、若し報じて「我が父母は現に今生在す」と云はば、方便もて問ひて言へ、「復當に汝の出家を聽すべきや不や」と』。

一六 然るに、其の五師、或は異說もて是の如き言を作す有り『其の羅睺羅、生れて二年の後、菩薩、爾の時方に始めて出家し、苦行六年にして、然る後に成道し、成道より七歲にして、方に始めて迦毘羅城に向ひたまふ。是の如き次第にて、羅睺羅出家の日を數ふるに、正に年十五なり』と。

一七 或は諸師有り、是の如き說を作す『波闍波提、其の菩薩の家を捨てて出家せるを見、此の因緣の爲めに、憂愁懊惱して、啼哭せる時、眼壞れて明を失しぬ。然るに佛世尊、已に阿耨多羅三藐三菩提を證して、十二年を過ぎ、然る後、方に迦毘羅城に還りたまふ。眷屬に憐愍を現はさんと欲したまへるが故なり。爾の時輸頭檀王、及び諸の宮內の一切眷屬、左右圍遶し、王を導首と爲して、前に在りて行く。爾の時、復同姓の種族有り、合して九萬九千人有り。倶に同じく來りて佛を見まつる。其の摩訶波闍波提憍曇彌、同じく彼の衆に在りて、佛の所に往詣す。其の子羅睺羅を看んが爲めの故なり。爾の時如來、雙神變を現じたまふ。爾の時摩訶波闍波提憍曇彌、旣に他の『今、我が子、神通を顯現し、所謂、身の下分に其の火光を放ち、身の上分に其の冷水を出す』と說ふを聞き、是の如く聞き已りて、歡喜踊躍、其の體に遍滿して、自ら勝ふる能はず、佛所に往詣し、佛所に到り已りて、佛を敬するが爲めの故に、其の佛身より流るる所の水を取りて、自ら己が身に灑ぎ、及び以て面を洗ふ。爾の時世尊、爲に摩訶波闍波提をして、慈悲を起して、其の體に遍滿し、其の快樂を受けしめたるに、其の壞れたる所の眼、尋いで清淨を得て、本時に勝りぬ。爾の時摩訶波闍波提、卽ち佛邊に於て更に信敬を增す。時に諸比丘、又、佛に白して言さく『希有なり世尊、云何ぞ今此の摩訶波闍波提憍曇彌は、世尊の爲めの故に、憂愁啼泣して其の目を失壞せるに、復世尊に因りて還び清淨を得たるか』。爾の時佛、諸比丘僧に告げて、是の如き言を作したまふ『汝諸比丘、其の摩訶波闍波提憍曇彌は、但に今日のみ我が爲めに是の憂愁啼哭を作して、此の眼を失壞し、還た復我に因りて清淨を得

【一六】羅睺羅出家年齡の五師の異說。五師とは何を指すか不明。

【一七】諸師說の波闍波提失明因緣並にその本生。Mvst. にはその本生のみを出す。次卷〔註一〕を見よ。

たるに非ず。過去の世にも亦曾て我が爲めに憂愁啼哭して其の眼を失壞し、復還た我に因りて清明を得たり』。爾の時諸比丘、佛に白して言さく、『世尊、此の事は云何。願はくは爲めに之を說きたまへ』。

卷の第五十六

羅睺羅因緣品第五十六の下

「爾の時佛、諸比丘に告げて言はく『汝諸比丘、我念ふに、往昔過去久遠に、迦尸國(Kāsi)に在りき。彼の聚落に於て、近く一山有り。鬱蒸伽(Ujjaṅga?)と名づく。其の山の南面に、一園林有り。其の園の雜樹、數、十萬に過ぎ、華果茂盛し、枝葉扶踈として、遙かに遠く瞻望するに、青雲隊の如くなり。其の園內の處處に、皆蓮華の池沼有り。其の數衆多にして、園林を莊嚴し、其の林高大にして空閑寂靜なりき。(或は師有り、鬱蒸伽山は波羅㮈城に近しと說く)。

爾の時、彼の山に諸群象有り、其の群象內に一象母有りて一子を生育す。形體端正にして、觀るもの厭く無し。然るに彼の象子、其の身は潔白にして、六牙備足し、其の頭純黑にて、因陀羅瞿波鳥(indragopaka)の頭の如く、七支もて地を拄ふ。其の彼の象子、養育する久しからずして大象龍と成りて、如法に修行し、父母に孝順にして、供養の時に敬重の心有り。然るに彼の象子、諸の飮食草果根等有れば、先づ父母に奉り、其をして充飽せしめ、然る後に自ら食す。其の時象龍、又一時草果諸飮食等を求むるに因りて、處處に遊行せるに、諸の獵師有り。忽ち此の象を見て、卽ち是の念を作す、「此の象龍は、これ餘人の乘るに堪ふる所に非ず。唯梵德王(Brahmadatta)の能く乘るに堪へんのみ」。此の念を作し已りて、遂に卽ち往きて梵德王の邊に詣り、到り已りて白して言はく、「大王當に知るべし、某處の林內に、一象龍有り。端正喜ぶべく、其の身潔白にして、六牙を具有す。其の象の黑頭は、因陀羅瞿波鳥の如く、七支もて地を拄ふ。我が見る所の如くんば、彼の象は、當に大王之に乘るに堪ふべし。如しそれ大王、意に樂む所ならば、往きて人を遣はし、彼の象を搦めて取りて將つて王に示し來るべし。時に梵

【一】摩訶波闍波提の象龍本生。Mahāvastu, III. 129—133。但し地方を Himavanta 山側の Caṇḍagiri 山の事とし、國王名は單に Kāśi-rāja とせり。文亦簡なり。

德王、尋いで即ち能く象を搦めん者を召喚し、勅して之に告げて言はく、「我、他の說ふを聞くに、一象龍有り、其の象六牙にして、端正喜ぶべく、觀看する者、厭足有る無く、乃至、七支悉く皆地を拄ふと。汝等、必ず當に速かに彼の處に往き、彼の象龍を捉へ、將つて我が所に至るべし。遲遲として失脫する有らしむる勿かれ」。爾の時有らゆる諸搦象人、梵德王の是の如き勅あるを聞き、之に報じて言はく、「王の勅する所の如くにして、敢て教に違せじ」と。即ち、牛靱の諸皮索等を辦じ、往きて象の邊に至り、呪を以て之を呪ふに、其の象自ら來り赴いて、人の所に向ふ。遂に即ち之を捉へ、彼の皮繩を以て、象を繋縛し已り、牽き來りて將つて梵德王の邊に至る。

時に梵德王、遙かに彼等の其の象龍を將つて至らんと欲するを見て、時に即ち起ちて出で迎へ、歡喜を以ての故に、是の如き言を作す「快し、是の如き妙好の大乘を得たるや。快し、是の如き妙好の大乘を得たるや」と。時に梵德王、身自ら養飼し、但彼の象の食ふに堪ふる所の者を、悉く皆之に與へ、一切の食する所を、自ら看自ら與へぬ。復此の如くなりと雖も、而も彼の象龍、返りて更に羸瘦し、恒に大呻吟し、呼聲大叫し、悲啼流淚して、時として暫くも憩ふ無し。時に梵德王、彼の象龍の、羸瘦憔悴し、乃至、悲啼して流淚する是の如きを見、象の前に至り、十指掌を合して、象龍に語りて言はく、「我、一切の諸好飲食を將つて、汝に供養するに、汝、乃ち羸瘦して膚體に著せず、色力を減損して、身羸瘠に嬰る。然も我汝を觀て、心悅懌ばず、歡樂を受けず。我、心に汝を愛し、供給瞻養して、未だ曾て暫くも捨てざるに、汝何事を須むるか。我今皆與へて汝をして歡喜せしめん。汝、何に緣るが故に、喜ばず樂しまざるか」。爾の時象龍、梵德王に白して、是の如き言を作す、「我今大王に一語を啓白して、王を歡喜せしめん」。時に梵德王、彼の象龍の是の如き言を作すを聞き、大希有歡喜の心を生じて、復

是の念を作す、「希有なり此の事、此の象龍王は、能く人語を作す」。是の念を作し已りて、彼の象龍に報じて、是の如き言を作す、「汝象龍王、是の如き語を出し、我をして歡喜せしむ」。

爾の時象龍、梵德王に白して、是の如き言を作す、「大王、當に知るべし。彼の林の內に、我が父母有り、年老い力衰へて、彼の林內に住す。我念ふに未だ王に搦められざる時、爾より已前、曾て先づ自ら食噉して、後始めて父母に與ふる有らんを憶はざりき。水漿も亦然り。先に父母に與へて、然る後に自ら飲みぬ。我、今思量するに、王の供給を受けて、一切の資須、乏少する所無く、我を養育す。然るに其の父母や、彼の林中に在りて、乃ち孤獨と成り、大苦辛を受けん。我、今正しく父母を見ざるを以て、是の故に此の如く憂愁して樂しまざるなり」。時に梵德王、此の語を聞き已りて、未曾有奇特の心を生じ、是の如き念を作す「希有なり此の事、思議すべからず。人中、猶尙ほ、此の法有り難し。云何ぞ象龍にして乃ち此の如きか」。是の念を作し已りて、彼の象龍に告げて、是の如く言ひて曰はく、「大象龍王、[二]我、今、寧ろ自ら此の身命を將つて、牢獄に閉づとも、是の如き如法の行――持戒妙行、孝養父母――此の如き事に於て、敢て擾亂せじ」。爾の時梵德、復象龍に告げて、是の如き言を作す「汝象龍王、我今汝を放さん。父母の邊に至り、其の父母と共に、自ら相供養して、意に隨ひて樂を受けよ」。然して、梵德王、象龍を放てる時、即ち偈を說きて言はく、

「汝今好し去れ、象龍王　父母を供養して當に孝順なるべし　我寧ろ自ら此の命根を捨つとも　汝を更に相擾亂せざらん」

爾の時梵德、彼の象龍を放つ。其の象龍王、既に脫するを得已りて、漸くにして彼の林に至る。彼の象龍の母、時に正に子を見ざるを以ての故に、憂愁懊惱し、泣涙啼哭して、兩目失明す。失明せるを以ての故に、東西に馳走して、本處より他處に遊行す。象龍、初め還りて彼の

【二】（原文）我今寧自將此身命、閉於牢獄、不將如是如法之行、持戒妙行、孝養父母、於如是事、不敢擾亂。不將如是如法之行の句中の不字、恐らくは錯簡ならん。これなきを可とすべし。

林に至る時、彼の母を求覓めて、了に處を知らず。見ざるを以ての故に、聲を放ちて大喚す。時に象母、其の叫聲を聞きて、卽ち彼の聲のこれ其の己が子なるを知り、其の母も爾の時亦卽ち聲を放ちて叫喚悲泣す。彼の象龍王、其の母の叫ぶを聞き、遂に爾く聲を尋ねて、往きて母の所に至る。其の象龍王、旣に其の母の、一池水に近く止息して住するを見て、其の母を安置して岸上に在り。

爾の時象龍、其の水池に入り、鼻に滿つる水を取り、出で已りて歡喜し、身心踊躍して、其の體に遍滿し、自ら勝ふる能はず。其の母の邊に至り、水を以て散灑して、之を洗浴す。爾の時其の母、子の、水を持ちて身を洗浴するを得たる時、眼還清淨なること、本の目に勝れぬ。而して彼の象の母、旣に其の子を見、之に問ひて言はく、「子、何處より來りて今日始めて還り、我をして多時、汝を見るを得ざらしめたる」。時に彼の象龍、母に向ひて具に說き、梵德王の遣はせる人に搦められ、將つて王宮に向ひ、供養の因緣、幷に放たれて脫するを得て還歸せる如き事、一切皆悉く其の母に向ひて說く。爾の時象母、此の語を聞き已りて、歡喜踊躍、其の體に遍滿して、自ら勝ふる能はず。唱へて言ふ、「子よ、子よ。我が今日の如きは、汝と共に相養活するを得て、喜樂是の如し。願はくは梵德王、其の父母妻子、男女諸眷屬の輩、及び知親大臣、百官一切の輔佐と共に、共に相養活して、我の今日斯の快樂を受くる如くならんを」と」。

爾の時佛、諸比丘等に告げて、是の如き言を作したまふ、「汝諸比丘、若し心に、「彼の象龍王は、此はこれ誰なるか」と疑ふ有らん。卽ち我が身是なり。汝等比丘、若し心に「彼の時の象母は、此はこれ誰ぞ」と疑ふ有らば、異見を作す莫かれ。此は卽ち摩訶波闍波提憍曇彌（Mahāprajāpatī Gotamī）これなり。彼の時に當り、我が爲めに啼喚し、悲涕流涙し、苦惱を受けて、兩目失明せるも、還我に因りての故に、淸淨を得たり。今も亦是の如く、摩訶波闍波提憍曇彌は、

我を見ざるが故に悲號啼哭し、憂愁苦惱して、兩目失明せるに、今還た我に因りて淸淨を得たり。汝諸比丘、如來、昔因地に在りし時、未だ佛を成ずるを得ざりしに、尙ほ衆生の爲めに、是の利益を作せり。況んや今日已に阿耨多羅三藐三菩提を成就するを得たるをや。是の故に諸比丘、若し智有る者は、恒に佛所に於て、敬重の心、希有の心を作し、法僧の邊に於ても、亦須らく敬重の心を生ずべし。汝等比丘、當に是の如く學ぶべし』。

[一]難陀出家因緣品第五十七の上

[二]爾の時世尊、難陀(Nanda)釋種の子を敎化し、捨家出家せしめんとて、數數爲めに出家の因緣を說き、亦復出家の因緣を讚歎して、是の言を作したまふ、『汝來れ難陀、當に就きて出家すべし』。是の語を作し已りたまふや、釋子難陀、白して言さく、『世尊、我出家せじ。所以は何に。我、[三]四事を以て、世尊及び比丘僧を供養し、乃至、[四]其の一形を盡して、衣服・臥具・飲食・湯藥を供養せん』。是の如く世尊、第二に第三に、難陀を敎化し、捨家出家の功德を讚歎し、乃至、數數其の出家因緣の事を說き、及び讚歎して、其の出家を勸めたまふ。而も彼の難陀は、出家するを肯んぜず。猶ほ言ひて、衣服・臥具・飲食・湯藥を以て、盡形、佛及び衆僧を供養せんを求むる因緣の事を求む。

爾の時世尊、少時を經、飯食し訖りて一侍者を將、徐徐として彼の釋種童子難陀の家に向ひたまふ。然るに彼の釋種童子難陀は、彼の時に當りて、重閣上に在り、孫陀利(Sundari)と共に、樓に昇りて觀看し、遊遨して坐す。爾の時難陀、樓閣上に在り、遙かに世尊の、將に其の所に至りたまはんとするを見、速かに卽ち驚起して、重閣を下り、往きて佛邊に至りて、佛足を頂禮し、却いて一面に立ち、因りて佛に白して言さく、『善來世尊、何の遠きより至りたまへる。唯願はくは神を垂れて我が堂室に入り、座に昇りて坐したまへ』。爾の時世尊、彼の堂室に入り、座に昇りて坐し已り、

【三】因地、佛地を果地とし、修行地を因地とす。

【一】難陀の出家因緣並に本生を說く。Mahāvastu には相當文を缺く。Jātaka I. p. 91 以下を參照。
【二】佛、難陀に出家を勸め給ふも、難陀之を厭ふ。
【三】四事。以下に出づる衣服、臥具、飲食、湯藥のこと。
【四】盡其一形、又は盡形とは身命のあらん限りをいふ。

難陀を慰喩し、慰喩し訖りて默然として坐したまふ。

爾の時難陀、佛に白して言さく、『世尊、唯願はくは今此に於て供を受けたまへ。我、餚饍飲食を備辦せしめん』。佛、難陀に告げたまはく、『我、已に食し訖る。備辦するを須ひず』。爾の時釋種童子難陀、復佛に白して言さく、『今蜜漿有り。非時に飲みたまふや不や』。佛、難陀に告げたまはく、『我、汝の意に隨はん』。爾の時難陀、復佛に白して言さく、『唯然り、世尊』。是に於て難陀、佛鉢を執持し、[五]非時の漿を盛りて、世尊に奉與す。時に世尊、未だ爲めに受け取りたまはず。爾の時釋種童子難陀、卽ち彼の鉢を持ち、將つて侍者に與ふるに、彼の侍者復受け取らず。

[六]爾の時世尊、座より起ちて、諸侍從と與に、相逐ひて還り、本處に向はんと欲したまふ。其の釋童子、亦重閣より彼の蜜漿を持ちて、佛に隨ひて去らんと欲す。爾の時釋種の女孫陀利、釋の難陀が、其の鉢に非時の蜜漿を滿たせるを執り、世尊に從ひて行くを見、其の孫陀利、頭を梳りて未だ訖らず、便卽ち高聲に難陀を喚びて言ふ、『聖子難陀、何に去らんと欲する』。爾の時難陀、彼の鉢を指して言ふ、『此の鉢を將つて如來を奉送し、彼に至りて卽ち還らんと欲す』。孫陀利言はく、『聖子、速かに來れ。久しく彼に住する莫かれ』。

[七]爾の時世尊、難陀の家を出で、難陀の爲めの故に、步して東西に行き、街巷に在まして、城內一切の人民をして、彼の難陀の、非時の漿を執りて、佛に隨逐するを見せしめんと欲したまふ。是の時人民、此の事を見已りて、各相謂ひて言はく、『今世尊は、必ず難陀をして捨家出家せしめたまはん』。

爾の時世尊、僧伽藍（saṅghārāma, 僧院）に至りて、一比丘を喚び、密に手指を以て、其の相貌を作し、難陀手中の蜜鉢を取らしめたまふ。時に彼の比丘、佛の意を知解し、難陀の邊より卽ち其の鉢を取る。爾の時難陀、佛足を頂禮し、白して言さく、『我、今佛を辭し、家に還り向はんと欲す』。

【五】非時とは、午時に食するは出家の常法なれば、其外の時に於ける飲食をいふ。

【六】難陀、佛鉢を捧持して佛に從ひ僧伽藍に至る。

【七】佛、難陀に出家の功德、五欲の過患を說きて、出家を勸め給ふ。

佛、難陀に告げたまはく、『汝、還り去る莫かれ』。爾の時難陀、復佛に白して言さく、『世尊、我、今思惟するに、出家を欲せず。所以は何に。我、四事もて其の一形を盡して如來及び衆僧を供養せんと欲するが故に』。爾の時世尊、難陀に告げて是の如き言を作したまふ、『此の閻浮提世界は、縱廣七千由旬なり、北面廣闊、南面狹少にして猶ほ車箱の如し。中に羅漢を滿たして、稠きこと甘蔗・竹・葦・麻・稻の若くならんに、若し善男子善女人有りて、彼等諸阿羅漢を供養し、其の一形を盡して、四事闕かず。彼等阿羅漢の涅槃に入れる後、復更に供養して舍利塔を起て、其の塔上に各旛・蓋及び寶鈴・幢を施し、復香花、及び諸油燈を以て、種種に供養せんに、汝の意に於て云何。是の善男子善女人等、功德多きや不や』。難陀白して言さく、『福を得る、甚だ多からん』。爾の時世尊、復難陀に告げたまはく、『若し羅漢有りて、此の閻浮に滿たんに、人有り、形を盡して四事もて供養し、乃至、香華、諸油燈を然さん。若し復人有り、一佛を供養するの功德果報は、彼に倍勝す。復次に難陀、若し人、能く佛の法敎中に入り、乃至、出家し、一日一夜、清淨梵行の法を行ぜば、此の果報、彼に倍多す。是の故に難陀、必ず定めて出家せよ。復五欲の樂を貪受する莫かれ。復次に難陀、諸欲は少味にして、多く苦患有り、諸欲は無常にして、是厭離すべく、これ大苦の本なり、これ大瘡疣、これ大惡刺、これ大厄縛、これ大苦惱、これ損減の相、これ破壞の相、無常不住にして、時として暫くも停る無く、これ牢固ならず、危脆にして壞れ易く、多く怖畏有りて、苦・空・無我なり。汝、今必ず當に諸欲の是の如き過患を諦觀すべし。難陀、汝、今應に善く五欲の過患を思惟すべし。貪著する莫かれ』。

[八]爾の時世尊、難陀に向ひ、此の過患を說きたまふと雖も、然も其の難陀は、心に故出家を欲し樂願せず、但佛を敬するが故に、低徊俛仰して、白して言さく、『世尊、我當に出家すべし』。爾の時世尊、且つ經行に因りて、指を以て相と作し、一比丘を招き來りて、之に語りて言はく、『汝、當に

【八】難陀遂に出家す。

一剃髪師を喚び來るべし』。時に彼の比丘、卽ち衆中に一の剃髪師を喚び、難陀の前に在りて、手に剃刀を執り、難陀の爲めに其の鬚髮を剃らんとす。爾の時難陀、拳を捉り、彼の剃除髮師に向ひて、是の如き言を作す、『汝、今何の力もて敢て我が頭を剃る』。爾の時世尊、正念正意もて、難陀に告げて言はく、『來れ汝比丘、我が法中に入り、梵行を行ぜよ。諸苦を盡さんが故に』。爾の時如來、是の語を作し已りたまふや、難陀の鬚髮は、卽ち自ら墮落ちて、猶ほ比丘の如し。其の鬚髮を剃り、始めて七日を經て、自然に體に袈裟色衣を著け、手に鉢盂如法の器を執る。而して彼の長老、卽ち出家を成じて具足戒を受けぬ。

九 時に難陀、喜ぶべく端正にして、諸人觀んことを樂む。三十相有り、具足して闕けず。身體は金色に、高下四指、如來に及ばざるも、所作の袈裟は、佛の衣服と、等しくして異有る無きを、作し已りて受持す。或は諸比丘、遙かに來るを見て、皆難陀を卽ちこれ世尊なりと謂ひ、起ちて迎逆へんと欲し、至るに及びて非なるを知り、始めて本座に還る。此の因緣を以て、諸比丘は、嫌恨謗量し、而して是の言を作す、『長老難陀は、云何ぞ佛の衣服と一等しきを、而も用つて受持する』。時に諸比丘卽ち往きて佛に白す。

爾の時世尊、此の因緣を以て、尋時に諸比丘衆を聚集して、難陀に問ひて言はく、『汝、衣服、僧伽梨等を作るに、佛と同量なるを受持せるや不や』。爾の時難陀白して言さく、『世尊、此の事、實に然り』。佛、難陀に言はく、『此は如法ならず。汝、今云何ぞ佛世尊と同量にして、僧伽梨を受持するや』。爾の時世尊、難陀を訶責し、是の如く敎へ已りて、諸比丘に告げたまはく、『今日より後、悉く皆世尊の量に依りて、作れる諸の衣服を受持するを得ず。若し違ふ者有らば、如法に治罪せん』。爾の時難陀、是の如き念を作す、『世尊、已に斷じたまふ。復更に世尊の量に依りて衣服を受持するを聽したまはじ。今作す所の衣は、必ず須らく治打し、其の光澤を出して受持すべし』。

【九】難陀出家せるも、猶諸欲相を離れず、爲に佛屢々誡め給ふ。

一〇 爾の時難陀、尋いで卽ち彼の打治の衣の、光澤なるを作りて服し、鉢器を執持し、眼に媚藥を塗りて、其の身を莊嚴し、脚に革屣を著け、左手に傘を執り、右手に鉢を持ち、佛所に詣向して、白して言さく、『世尊、我往きて聚落に入り、食を乞はんと欲す』。爾の時佛、長老難陀に告げて、是の如き言を作したまふ、『汝、今豈に善男子に非さらんや。信心もて家を捨てゝ出家せるを』。難陀答へて言さく、『是の如し、世尊、事實に然り』。爾の時、世尊、復難陀に告げて是の如き言を作したまふ『汝、既に信心の善男子なり、捨家出家して、所持の衣服、何が故に打治して光澤を出でしめたる。復何の緣を以てか身體を莊嚴し、眼に媚藥を塗り、脚に革屣を著け、一手に傘を執り、一手に鉢を持ちて、食を乞はんと欲する。復次に難陀、汝若し阿蘭若處に在り、乞食して活命せんとならば、糞掃衣を著けよ。此を乃ち善と爲す』。爾の時世尊、此の因緣を以て偈を說きて言はく、

『何の時にか當に難陀の　空閑に住して常に食を乞ひ　少欲知足にして遺餘を捨て　又樂しんで諸欲想を遠離するを見るを得べき』。

爾の時世尊、此の因緣を以て、此の事相を以て、諸比丘を集めて、之に告げて言はく、『諸比丘輩今日より後、復打出の光衣を著くるを得ざれ。若し出光の衣を受持する者有らば、法の如く治罪せん。亦復眼に媚藥を塗り、及び妙革屣を著くるを得ざれ。亦復輕妙の鉢を執るを得ざれ。亦復傘を執りて、城。聚落に入りて食を乞ふを得ざれ。若し是の如くせば、悉く如法に治せん』。爾の時難陀、世尊より此の打治光澤の衣を斷ぜられ、幷に及び眼に媚藥を塗るを得ず、好革屣、幷に輕鉢、及び傘蓋を持つを斷ぜられたりと雖も、猶尙ほ王の勢樂を憶念し、斷に依るを肯んぜず、還りて彼の女釋孫陀利を憶ひ、其の色欲を念じて梵行を行ぜず、其の戒を捨てゝ、本の家宅に還らんと欲す。此の因緣を以て、恒に彼の女孫陀利の像を畫く。後に一時、阿蘭若空閑の處に至り、或は塼瓦を取り、或は木板を取りて、此の釋女孫陀利の像を畫き、是の如く觀看して、便ち一日を過す。而して

【一〇】難陀の美衣化粧を用ひしこと、巴利相應部、二一・八、雜阿三八・六等に見ゆ。

諸比丘、其の見る者有り、心に嫌恨を生じ、相謂ひて言はく『長老難陀、云何ぞ阿蘭若處に在りて或は塼瓦を取り、或は木板を取り、婦女の形を畫きて、竟日觀看する』と。

時に諸比丘、卽ち此の事を將つて、往至して佛に白しぬ。爾の時世尊、此の因緣を以て、諸比丘を集め、衆內に在りて、難陀に問ひて言はく『汝、實に阿蘭若處に在りて、或は塼瓦を取り、或は木板を取り、婦女の形を畫きて、竟日看たりや不や』。難陀、佛に白さく『實に爾り、世尊』。爾の時佛、長老難陀に告げて、是の如き言を作したまふ『汝の爲せる此の事は、これ不善なり。出家比丘は、豈に其の婦女を形像を畫きて觀看するを得んや』。爾の時世尊、諸比丘に告げて是の如き言を作したまふ『汝諸比丘、今より婦女の形を畫き、若しくは實に、若しくは虛に、以て欲心に著し、畫き已りて觀看するを得ざれ。若し是の如きが故に、畫きて看る有らば、違戒罪を得ん』。

又一時長老難陀、次第に直に當りて寺舍を守護す。彼の時難陀、是の如き念を作す『如來久しからずして、當に聚落に入りて乞食すべきの時なり。我、今日當に家に歸るを得べし』。爾の時世尊、彼の難陀の是の思惟を作せるを知りたまひ、知り已りて告げて長老難陀に言はく『汝、若し行かんと欲せば、諸房門を閉ぢて、然る後還り去れ』。爾の時世尊、是の語を作し已りて、便卽ち往いて聚落に入りて乞食したまふ。長老難陀、是の如き念を作す『世尊は、已に聚落に入りて、食を乞ひたまふ。我、今當に其の家內に還るを得べし』。爾の時難陀、遂に世尊の房門の閉ぢざるを見、是の如き念を作す『我、此の門を閉ぢて、然る後還り去らん』と。卽ち彼の門を閉づるに、舍利弗の房門の復開くを見、卽ち復往きて舍利弗の門を閉づ。既に彼の門を閉づるに、其の目犍連の房門、復開きたれば、尋いで卽ち彼の目連の房門を閉づ。既に彼の門を閉づるや、大迦葉の房門、復開けるを見て、尋いで卽ち往きて大迦葉の門を閉ぢ、既に彼の門を閉ぢて、復摩訶迦旃延の房を見るに、其の門復開きたれば、尋いで復往きて迦旃延の門を閉ぢ、既に彼の門を閉ぢて、又優樓頻螺迦葉の房

門、復開けるを見、尋いで即ち往きて優樓頻螺迦葉の房門を閉ぢ、既に彼を閉ぢ已るや、那提迦葉の房門、復開きたれば、尋いで復往きて那提の房門を閉ぢ、既に彼を閉ぢ已るに、伽耶迦葉の房門復開く。爾の時難陀、尋いで復彼の伽耶の房門を閉ぢ、既に彼を閉ぢ已るに、優波斯那の房門復開きたれば、彼の門を閉ぢ已り、倶郗羅の房門復開けるを見、既に彼を閉ぢ已り、復摩訶專陀の門の開けるを見、彼の門を閉ぢ已るや、利婆多の房門の復開けるを見、彼の門を閉ぢ已りて、優波離波多の房門の復開けるを見たり。是の如く次第に、一門を閉ぢ已れば、第二門開き、第三を閉ぢ已れば、第四門開く。彼、其の門の一開一閉を見て、遂に是の念を作す[一]『彼の諸比丘は、當に能く我を捉へて何事の過をか作すべき。若しくは開き、若しくは閉づるも、我は當に還り去るべし。將世尊の久しからずして來至したまはんを恐る』と。是の念を作し已りて、尼倶陀樹林の內より、將に出でんと欲せる時、世尊は尋いで天眼を以て彼の難陀を觀じ、已に難陀の將に其の尼倶陀處を出でんと欲するを見、如來見已りて、迦毘羅婆蘇都城より其の身を隱沒し、便即ち其の尼倶陀林に至りて、彼に出現したまふ。爾の時難陀、佛の、彼の林中に出でたまへるを見已り、尋いで即ち一尼倶陀樹に依り、身を隱して坐す。

爾の時世尊、神通力を以て彼の大樹を擧げて虛空に置き、難陀の身を藏して坐せるを見て、是の如き言を作したまふ『汝今難陀、何處に去らんと欲する』。時に彼の難陀、報じて言さく『我、今還つて復彼の王位の快樂自在の事を憶ひ、兼ねて復彼の彼の釋孫陀利を憶ふ。是の故に梵行を行ずるを樂まず、意に戒を捨てゝ本の家に還らんと欲す』と。佛、此の事に因り、偈を說きて言はく、

『叢林を離れんと欲して已に離るゝを得るも　林より出づるを得て還林に入る　汝[二]　富伽羅此の事を觀ぜよ　縛より脫するを得て還た縛せらるゝを』

爾の時世尊、彼の難陀の僞めに、法句を說き已り、更に復勸めて言はく、『長老難陀、汝、當に

【一】（原文）彼諸比丘、當能捉我作何事過、若開若閉、我當還去。

【二】富伽羅（Pudgala）。衆生又は有情と譯す。猶、この偈は巴利「法句經」第三四四偈」に當る。

精心もて、我が自在法教の中に於て、諸苦を盡さんが爲めに、梵行を勤行すべし』。世尊、法を以て難陀を教化したまふも、難陀は猶ほ故のごとく、昔日の五欲樂事、及び王位に在りて意に適へる樂を忘れず、猶ほ復釋孫陀利を憶念し、正法もて梵行を行ずるを樂まず、心に戒を捨てゝ、其の家宅に還らんと欲す。

爾の時、復一大長者有り。世尊を請じて飲食を供設せんと欲す。時に難陀、次をもて守寺に當る。爾の時難陀、復是の念を作す、『世尊は、今當に聚落に入りて、彼の長者の請食を受けたまふべき時なり。我當に家に還るべし』。爾の時、世尊、預め難陀の此の憶念を作すを知り、知り已りて便即ち難陀に告げて言はく、『汝今難陀、須らく必ず時を知り、寺地を灑掃し、有らゆる澡盥に、悉く水を滿たしむべし』。是の語を作し已りて、即ち聚落に往き、其の請ずる所に赴きたまふ。長老難陀は、彼の時に於て即ち是の念を作す、『今、世尊は已に他の請に赴きて聚落に往きたまふ。我、今自ら往きて家に向ふを得べし』と。是の念を作し已り、如來所住の房を顧見するに、多く糞土有り、見已りて念を作すらく、『我、今先づ往きて彼の糞穢を掃ひ、然る後家に向はん』と。是の念を作し已るや、掃帚を執持して、往きて彼の房を掃き、其の一邊を掃くに、風來りて還た吹き、土草地に滿ちて更に報掃を須つ。彼の時難陀、復是の念を作す『地を掃くを且く止め、我先づ當に有らゆる衆僧の水澡盥器をして、先づ水に著けて滿たしめ、然る後に家に向ふべし』。是の念を作し已りて、彼の澡盥を取り、將つて水の所に至り、悉く水を滿し盛るに、其の滿せる所の器、滿ち已りて還復へる。彼の時難陀、是の如き念を作す、『我、今何ぞ地を掃き水を盛るを假らん。如來は、今久しからずして還り來りたまはん。我、今亦速かに已が家に至るべし』。是の念を作し已りて、即ち還た彼の尼俱陀林より、家に向ひて去らんと欲す。

爾の時世尊、彼の請ぜる所の長者の家に在まし、人眼に過ぐる清淨の天眼を以て、彼の難陀を觀

じたまふに、已に彼處尼倶陀林より、出で丶家に向はんと欲す。既に是を見已りて、即ち別に化身して、長者の家より隱沒して現ぜず、尋いで一念の頃に、尼倶陀樹林の內に至り、彼の長老難陀の前に在りて出でたまふ。爾の時難陀、遙に世尊の來りて至らんとしたまふを見已り、即ち一大高峻の險岸に上り、彼の岸より下りて、隈障の處に至り、身を存して坐す。

爾の時世尊、神通力を以て、彼の峻岸をして、地平なること掌の如くならしめたまふ。爾の時世尊、彼の坐せるを見たまへる時、難陀に告げ言はく、『汝今此に在りて、何事をか成さんと欲する』。時に難陀、佛に白して言さく、『婆伽婆、[三]我已に言許して孫陀利と共に家に還るを期とせり。今此の念を作す、「我をして其の妄語を成さしむる勿れ」と。是の故に、我今彼處に往かんと欲す』。爾の時佛、長老難陀に告げたまはく、『汝今何ぞ孫陀利を見るを須ひん。其の身は、是の如く、皮もて筋骨を裹み、內に髓惱有り、膿血屎尿、皆悉く充滿して、最も厭惡すべきこと、猶ほ廁溷の如し。是の如く難陀、我今略說せんに、一一の衆生、婦と共に和同し、出す所の不淨、巨海よりも多きも亦足るを知らず』。爾の時世尊、此の因緣を以て、彼の偈を說きたまふ、

『稠林を離れんと欲して已に離るゝを得るも　林より脫するを得て還林に入る　汝富伽羅此等を
觀ぜよ　縛より脫するを得て復縛せらるゝを』

爾の時世尊、難陀を敎化し、法を說きて、敎へて言はく『我が自在說法の敎中に於て、嬉樂して清淨梵行を行ぜよ。諸の一切の苦を滅せんと欲するが爲めの故に』。爾の時難陀、世尊より是の如き方便敎化を被ると雖も、猶ほ故のごとく梵行を梵ずるを樂まず。乃ち[四]六群の諸比丘等と共に、以て朋黨と爲り、數彼の邊に至り、語言論說して、晨より夜に到るまで、唯邪命諸惡等の事を論ず。

爾の時世尊、其の行を觀知して、是の如き念を作したまふ、『此の難陀は、今已に彼の六群比丘に學ぶ。恐らくは其の功德の業行を損ぜん。我、應に其の彼の人等と共に、以て朋黨と爲るを斷ず

【三】（原文）我已言許共孫陀利還家爲期。家に還らん事を、孫陀利に言約せりの意。

【四】六群比丘、佛弟子中六人一群を成して惡行を常習せるものあり、各人の名は漢巴の諸律によりて一致せず。

べし』。是の念を作し已りて、便即ち彼の長老難陀に告げて、是の如き言を作したまふ、『難陀、汝來れ。我、汝と共に迦毘羅婆蘇都城に入らんと欲す』。難陀、白して言さく、『唯尊の教の如くにしまつらん』。爾の時世尊、彼の難陀と與に、迦毘羅婆蘇都城に入り、入り已りて漸く一賣魚店に至りたまふ。爾の時世尊、彼の店内の茅草鋪上に、一百頭の臭爛せる死魚有りて、彼の草鋪に置けるを見、見已りて彼の長老難陀に告げて、是の如き言を作したまふ、『難陀、汝來りて此の魚鋪の一把の茅草を取れ』。其の彼の難陀　佛に白して言さく、『世尊の教の如くにしまつらん』と。是の語を作し已りて、即ち彼の店に於て、魚鋪の下に在る、一乗の臭惡なる茅草を抽き取る。既に執取り已るや、佛復長老難陀に告げて言はく、『少時捉へ住して、還た地に放て』。難陀白して言さく、『世尊の教の如くにしまつらん』。即ち草を把りて住す。爾の時難陀、彼の草を捉持して、一時を經たる頃、即ち地に放つ。爾の時佛復難陀に告げて言はく、『汝、自ら手を嗅げ』。爾の時難陀、即ち其の手を嗅ぐ。爾の時佛、復難陀に告げて言はく、『汝の手に何の氣かある』。長老難陀、報じて言さく、『世尊唯、不淨腥臭の氣のみ有り』と。

卷の第五十七

難陀出家因緣品第五十七の下

爾の時佛、長老難陀に告げたまはく、『是の如く是の如し。若し人、諸の惡知識に親近して、共に朋友と爲り、交往止住せば、少時を經て共に相隨順すと雖も、後に惡業を以て相染習するが故に、其の惡聲の名聞をして遠く至らしむ』。爾の時世尊、斯の事に因りての故に、偈を說きて言はく、

『猶ほ魚鋪上に在りて　手を以て一把の茅を執取るに　其の人の手は卽ち魚臭に同ずるが如く
惡友に親近するも亦是の如し』

爾の時世尊、又長老難陀と共に、一の賣香邸に至り、彼の邸上に諸の香裹有るを見、見已りて卽ち長老難陀に告げて、是の如き言を作したまふ、『難陀、汝來りて此の邸上の諸香裹の物を取れ』。難陀、爾の時卽ち佛の敎に依りて、彼の邸上に於て、諸の香裹を取る。佛、難陀に告げたまはく、『汝、漏刻一移の頃に於て、香裹を捉持し、然る後地に放て』。爾の時長老難陀、佛の是の如き語を聞き已り、手に此の香を持ち、一刻の間に於て、還た地上に放つ。爾の時佛、長老難陀に告げたまはく、『汝、今當に自ら手を嗅ぎて看るべし』。爾の時難陀、佛の語を聞き已り、卽ち自らの手を嗅ぐや、佛、難陀に語りたまはく、『汝、此の手を嗅ぐに、何等の氣を作すか』。白して言さく、『世尊、其の手の香氣、微妙無量なり』。佛、難陀に告げたまはく、『是の如く、是の如し。若し人、諸の善知識に親近して、恆常に共に居らば、隨順染習し、相親近するが故に、必定して當に廣大の名聞を得べし』。爾の時世尊、此の事に因るが故に、偈を說きて言はく、

『若し手に沈水香　及び藿香麝香等を執る有りて　須臾執持せば香自ら染む　善友に親附するも
亦復然り』

爾の時世尊、迦毘羅婆蘇都城を出でて、本の住處に至りたまふ。此の因緣を以て、大衆諸比丘を聚取し已りて、卽ち長老難陀に告げ、言ひて曰はく、『難陀、汝今彼の六群比丘に親近する莫かれ。彼等と共に以て親友と爲る莫かれ。何を以ての故に。若しそれ人有り、是の如き惡知識に親近せば、復彼と共に朋友と爲り、或は時に彼と與に互に相承事して、彼等の一切の事業に隨順せず【一】と雖も、但惡人に共に相親近するが爲に、卽ち世間に惡名の流布するを得ん。長老難陀、汝若し親友知識を覓めんと欲せば、當に比丘舍利弗・比丘大目連・比丘大迦葉・比丘迦旃延・比丘優樓頻螺迦葉・那提迦葉・伽耶加葉・優波斯那・摩訶俱郗那・摩訶孫陀・離波多等の諸比丘輩に近づくべし。汝に、親近して隨順承事せんことを勸む。所以に何に。若し人、善知識に親近して、承事親善せば、未だ利益の事を證得せずと雖も、交世間に名聞の流布するを獲ん』。爾の時世尊、此の因緣を以て、偈を說きて言はく、

『若し人惡知識に親近せば　現世に好名聞を得ず　必ず惡友の相親近するを以て　當來も亦阿鼻獄に墮せん』　若し人善知識に親近し　彼等所業の行に隨順せば　世間の利を現證せずと雖も
未來には當に苦の因を盡すを得べし』

【二】爾の時世尊、善言を以て難陀を敎示したまふと雖も、而も彼の難陀は、猶ほ王位自在の樂を戀ひ、孫陀利五欲の事を憶ひ、佛の法中に於て猶ほ欣樂せず。梵行を捨てんと欲し、具戒を捨てゝ、還りて家事に從はんと欲す。爾の時世尊、彼の長老難陀の心を知り已りて、是の如き念を作したまふ、『然り此の難陀は、煩惱熾盛なり、豈に能く小敎もて彼の煩惱を破せんや。我今須らく方便を作し、喩へば世間の火を以て火を滅し、毒を以て毒を治するが如くすべし』。是の念を作し已り、彼の長老難陀の手を執りて、尼俱陀樹林より出で、神通力を以て其の身を隱沒し、忽然として香醉山上（Gandhamādana）に在りて、出現して住したまふ。爾の時、彼の山、風吹くを以ての故に、兩樹相揩り

【一】恐らくはここに不の一字を脫せりと思惟せらるるを以て、之を加へて訓ぜり。

【二】佛、難陀を伴ひて雌獼猴、並に天女の所に行き、以て方便敎化したまふ。

て遂に即ち火を出だし、彼の山を燒然して、大煙炎を出だす。

時しも山内に、多く獮猴有り、其の數五百なり。火を被りて毛を燒かれ、皆悉く地に存りて、身火を摩滅す。爾の時世尊、一箇の雌䐗獮猴ありて、彼の群内に在り、亦復手を以て身火を撲滅するを見たまふ。爾の時佛、長老難陀に告げたまはく『今汝、此の雌䐗獮猴の彼の群内に在り、亦復手を以て其の身火を滅する、此の如きを見るや不や』爾の時難陀、佛に白して言さく『世尊、是の如く、是の如し。我、今已に見たり』。爾の時世尊、尋いで復彼の長老難陀に告げて、是の如き言を作したまふ『汝の意に云何。汝の孫陀利は、憙ぶべく端嚴なること、此の獮猴と、これ誰か勝ると爲す』。爾の時難陀、遂に世尊に向ひ、顰眉蹙面して、默然として言はず。

爾の時世尊、長老難陀の手臂を執持し、香醉山より身を沒し、往きて三十三天(Trāyatriṃśat)に至り、波利質多羅樹(pārijātaka)に現れたまふ。時に彼の樹下に一大石有り、名けて婆奴吟（逆林の反）摩羅(Paṇḍukambala)（隋に黃褐と言ふ。）といひ、彼の處に住す。爾の時帝釋天王、往きて彼の園に入り一遊戲す。其の園を名けて[三]伊迦分陀利(Ekapuṇḍarīka)といふ。將領せる五百の宮人婇女、左右に圍遶して、倡伎樂を作す。時に世尊、帝釋王の、彼の伊迦分陀利園に在り、五百の婇女を將領し、音聲歡娛して樂を受くるを見たまひ、時に佛、即ち長老難陀に告げて、是の如き言を作したまふ、『汝今此の五百の婇女の、倡伎樂を作して遊戲するを見るや不や』。難陀白して言さく『是の如し、世尊、我今已に見る』。爾の時世尊、尋いで復彼の長老難陀に告げて、是の如き言を作したまふ『汝の意に如何。當に釋女孫陀利を好かるべしと爲すか。當に五百の婇女を端正なるべしと爲すか』。長老難陀白して言さく『世尊、如し彼の時の雌䐗獮猴を以て、孫陀利と共に相比較せば、百倍も如かず。乃至、千倍より百千倍に至り、世間の算數も、亦及ぶべからず。我今是の如く孫陀利女を、此の婇女五百に比せしめんと欲するに、亦復如かざる事、百倍千倍より、百千倍に至り、世間の算數も

【三】伊迦分陀利、諸傳の忉利天を記すものに、この園名見えず。

及ぶ能はざる所。今、云何ぞ比喩と爲す可けん』。爾の時佛、長老難陀に告げたまはく『汝今意に此の婇女と共に相娛樂せんと欲するや不や』。爾の時難陀、歡喜踊躍して、世尊に白して言さく『我が意の如くんば、實に彼の五百の婇女と共に、相娛樂せんと欲す』。爾の時佛、長老難陀に告げたまはく『汝今此の凡身を以て、彼と共に娛樂す可らず。若し然せんと欲せば、必ず須らく汝が歡喜の心を以て、我が法中に於て、梵行を行ずべし。我當に汝に報ず可し。今若し能く此の法に隨順して、清淨の行を行じなば、命終り身を捨て、未來の世に於て、必ず報を受けて此の處に生れ、此の五百の諸の婇女輩と共に、共に相娛樂するを得ん』。

爾の時難陀、此の事を聞き已りて、歡喜踊躍、其の體に遍滿して、自ら勝ふる能はず、佛に白して言さく『世尊、我今日より佛の法中に於て、歡喜して清淨の梵行を行ぜん。世尊、今已に我に報を許したまふ。我、今實に未來の世に當りて、此の處に生れ、此の五百の諸婇女等と共に、共に相娛樂せんと欲す』。爾の時世尊、復長老難陀の臂を執り已り、彼の三十三天より身を沒し、其の本處に還りたまふ。

[四]爾の時、難陀、是の如き念を作す『世尊は先に已に報を我に許したまふ、未來世に於て、當に彼の五百の婇女と共に、以て相娛樂するを得べしと』。此の故に難陀、此の因緣を以て、其の身心を盡して、正念もて清淨の梵行を行じ、諸根を調伏し、飮食を節量し、初夜後夜に起きて誦し、經行して、勇猛精進に、他人と共に言談戲笑せず、心躁急ならず、心に狡猾なく、口に綺言せず、精進の行を發し、[五]四威儀を念じ、空寂を樂み、諸根を閉塞して、最勝微妙の正念を成就す。

爾の時難陀、若し意に東方を觀んと欲する時や、身心を安定し、志意充滿して、既に正念し已り然る後方に始めて東方を觀る。是の如くにして觀る時、愁惱有る無く、黑闇ある無く、不善の法に於て終に漏失なく、亦迷惑せず。是の如く、南西、北方、下方を觀んと欲するや、亦身心を定め、

【四】、難陀、遂に女欲の故に梵行に精進す。

【五】四威儀、行住坐臥に於ける身の威嚴ある行動。

志意充滿し、是の如くにして觀る時、亦愁惱なく、黑闇有る無く、不善の法に於て更に漏失せず、亦迷惑せず。爾の時難陀に、或は同行の比丘輩あり、之に告げて言はく『長老難陀、汝は先の時、諸根を閉ぢず、諸の飮食に於て、厭足を知らず、恒に妙好の床褥臥具と、安隱なる睡眠とを求めて、本厭勸する無く、或る時は戲笑して心意定まらず、狡猾綺語して曾て精勤せず、恒常に懈怠し、亦正念する無く、諸の忘失多く、威儀漏缺し、禪無く定無く、心を攝する能はず、諸根逸浪なりしこと、具に說く可らず。云何ぞ、今諸根調伏し、飮食に足るを知り、初夜後夜、曾て睡眠せず、復狡戲する無く、身心を攝斂し、又綺語せず、勇猛精進に、正念正勤し、已に禪定を得て、心、漏逸せず、諸根浪せず。長老、今日何に因て爾るを得るか』と。爾の時難陀、彼の同行の諸比丘に告げて言はく『諸の長老輩、當に知るべし、世尊は、未來世に於て、將に我に五百の綵女と歡娛受樂するを報ぜんと欲したまふ。是の故に我今此の法中に於て、梵行を勤行するなり』と。爾の時、難陀の親友同行の諸比丘等、彼の難陀を調笑し、嘲弄し、譏戲する有らんと欲し、各相謂ひて言はく『長老難陀は、世尊の所に於て、客作傭力し、將來の報を求むるが故に、法中に於て梵行を勤行するなり。長老難陀、汝が佛邊に於て梵行を行ずるは、正に諸天五百の玉女の爲に、梵行を行ずるのみ』。爾の時長老難陀の親友、諸比丘等は、爾より已後是の故に常に喚びて『客作者』と爲しぬ。

六 爾の時世尊、是の難陀の、諸の玉女の爲に梵行を行ずるを見たまひて、遂に便ち臂を執り、彼の尼拘陀林より出で、身を沒して大地獄の裏に入りたまふ。世尊、時に一銅釜の、下に猛火を然し、其の釜爀赤として火と異る無く、大光炎を出し、熾然赩赩たるを見たまふ。世尊見已りて、彼の難陀に告げたまはく『汝、往きて是の諸の獄卒等に問へ。是の銅釜は阿誰の爲に熾然湧沸せんと欲するか』と。乃至、是の如く長老難陀、佛の是の語を聞きて、白して言さく『世尊、唯佛の敎の如くにしまつらん』と。即ち往きて彼の諸の獄卒の邊に詣り、之に問ひて言はく『是の大銅釜は、何人

【六】佛、難陀を地獄に伴ひて、天界も猶常住ならず、命盡きて地獄に墮することを敎示し給ふ。難陀、無漏淸淨の梵行を修して、遂に悟に入る。

の爲めに是の如く湧沸せんと欲して、乃ち此に至るか』。爾の時獄卒、咸く難陀に報じて、是の如き言を作す、『佛に姨母所生の弟あり、名づけて難陀と言ふ。彼の人の爲の故に、是の釜を燒然す』と。難陀、復問ふ、『汝、豈聞かずや、如來、往日、報を其の人に許したまふ、若し五百の天樂婇女の爲めに、梵行を行ぜば、後に三十三天に生るるを得んと』。諸の獄卒言ふ、『是の如く、是の如し、我等已に知る。但我等の輩、復聞く、其の人は、彼の三十三天の上より墮落し已りて後、此處に來生す』と。爾の時難陀、此の語を聞き已りて、心に恐怖を生じ、擧身の毛竪ち、是の如き念を作す、『我若し次第に此に於て苦を受けば、我今亦此の如き婇女の果報を用ひざらんと欲す』。爾の時世尊、即ち長老難陀の臂を執り已り、地獄の內より、其の身を隱沒し、還りて尼倶陀林に至りて出でたまふ。爾の時難陀、已が同行、諸親友等の爲めに、恒常に喚びて『佛の客作人』と作して、笑はれ、呵せられ、嘲調戲弄せられ、復地獄を見て、慚愧恐怖して、即ち厭離を生じ、自ら悼み、自ら悔い、空閑處を求めて、獨行獨坐し、更に放逸ならずして、精進勇猛なり。凡そ善男子、其正信有りて、捨家出家し、無上淸淨の梵行を求め、行じ已りて現に自ら神通を證するを得、諸漏を盡すを得て、口に自ら唱へて言ふ、『生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、後有を受けず、羅漢果を證して、心に解脫を得ぬ』と。長老難陀も、亦復是の如く、羅漢果を證して、然る後始めて往きて佛所に至り、佛足を頂禮し、却いて一面に坐す。爾の時長老難陀、佛に白して是の如きの言を作す、『今は世尊の往日の恩許を捨てん。我、昔如來の報を取らんと欲せるは、正しく五百の諸天婇女の爲なりき。是の故に此の如くにして、今世尊、解脫を得たり』。爾の時佛、長老難陀に告げたまはく、『但に今日、我、汝の邊に於て、始めて得脫し、汝、初めて唱へて、「梵行已に立ち、所作已に辦じ、後有を受けず」と言ふにあらず。我、彼の時に於て已に得脫せり』と。

[七]爾の時、長老難陀の同行の諸比丘等、未だ難陀の漏盡を得たるを知らず。猶ほ先日未だ漏盡せざ

【七】佛、諸比丘を集めて、難陀の德を稱揚し、その本生を說き給ふ。この下の難陀の諸德、A. N. VIII 9. 雜阿一一・二等に見ゆ。

る時の如くに、戲弄し謿調して、是の如きの言を唱ふ、『長老難陀は、世尊の所に於て、客作して報を求め、彼の五百の諸天婇女の爲に梵行を行ず』と。爾の時世尊、是の如きの念を作したまふ、『此等の比丘、未だ難陀の諸漏已に盡きたるを知らず、還りて昔日未だ漏盡せざる時に依り、猶ほ故のごとく唱へて、「長老難陀は、彼の諸天五百の婇女の爲に、梵行を行ぜり」と言ふ。我、彼等の多く罪過を獲んを恐る。然れば我今衆中に於て、「長老難陀の漏盡せる事を宣揚顯說す可し』。爾の時世尊、是の如き等の因緣の事を以ての故に、一切の諸比丘僧を聚集し、已に聚集し已りて、之に告げて言はく、『汝諸比丘、若し人有りて好男子と言はば、難陀比丘卽ち其の人也。若し端正と言はば、亦卽ち難陀比丘是なり。大壯人は、難陀比丘亦其の人なり。若し身體の細軟弱なるを言はば、亦復難陀比丘是なり。若し人有りて諸根寂靜にして散亂せずと言はば、亦復難陀比丘是なり。若し人有りて諸飮食に量を節するを知ると言はば、亦復難陀比丘是なり。若し人有り初夜後夜に睡眠せずと言はば、今亦難陀比丘是なり。若し三族淸淨の生を言はば、亦卽ち難陀比丘是なり。若し人有りて六通を得たるを言はば、此亦難陀比丘是なり。若し八解脫定を得たるを言はば、亦復難陀比丘是なり』と。

爾の時世尊、比丘僧に告げて、是の如き言を作したまふ『汝諸比丘、我が聲聞弟子の內に於て、諸根を調伏せるは、難陀比丘を最も第一と爲す』と。時に諸比丘、佛に問ひて言さく『是の如し、世尊、彼の長老難陀比丘は、往昔の時、何の善根有りてか、彼の善根に因りて釋種甚大の富貴に生れ、資財に豐足し、其の人の身體は、端正憙ぶべく、世尊、今日復記して、「我が聲聞弟子の諸根を調伏せる最第一の者は、難陀比丘卽ち其の人なり」とは云ひたまふ』。

是の語を作し已るや、[八]佛、彼等諸比丘に告げて言はく『汝諸の比丘、我念ふに、往昔九十一劫に時に一佛有りて世に出現したまひ、毘婆尸(Vipaśyī)多佗竭多・阿羅呵・三藐三佛陀、如來・應供・正

【八】この下の本生、他傳に見えず。

遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と名く。彼の世界の王の居住する所に於て、彼に一城有り、槃徒摩低(Bandhumatī)と名づく。時に彼の佛、彼の城に依りて住したまひ、諸の比丘六千人有り、倶に皆阿羅漢なり。時に一王あり、名けて槃頭(Bandhu? Bandhumī, Bandhumatī)と曰ふ。彼の佛、及び比丘僧を供養し、尊重恭敬す。所謂、衣服・臥具・飲食・及び諸の湯藥、房舍の具、乏少する所なし。爾の時槃頭摩低城内に、一種姓の婆羅門の子有り。彼の童子、溫室を營造し、佛及び僧を請じて、洗浴供養す。其の婆羅門種姓の童子、諸比丘の溫室より出づるや、身體清淨に、甚大香潔にして、臭氣あるなきを見、見已りて心に歡喜踊躍を生じ、其體に遍滿し、自ら勝ふる能はず、心に是の願を發す「願はくは我來世に常に是の如き清淨無垢、不腥臭の身を得んこと、當に是の如き比丘僧等の清淨香潔無臭の身に似るべけん」。

又後時に毘婆尸佛・多他伽多・阿羅呵・三藐三佛陀の般涅槃に入りたまふや、其の王槃頭、彼の世尊の有らゆる舍利の爲めに、四種の寶を取りて、爲めに塔廟を造る。所謂、金・銀・琉璃・頗梨なり。時に彼の種姓婆羅門の子、當に檢校經營して彼の塔を造るべく、既に塔を造り已りて、心に是の願を作す「願はくは我來世に恒常に是の如き世尊に値遇したてまつり、彼の所說の法を、願はくは我領解して悉く證知するを得、彼の法に背くこと莫く、生生世世に惡道に入らざらん」と。而して彼の童子、命終の後恒に天上に生れ、或は人間に生れ、後の一生に於て一大富長者の家に生れ、父母の養育にて、隨時に長大し、意智漸漸に皆成就するを得たり。

爾の時童子、其の家に恒に一辟支佛有り、爲めに門師と作りて、數數家に至る。彼の辟支佛は、意ふべく端正に、三十大丈夫の相を具足せり。而して彼の童子、恒に四事を以て、彼の辟支佛を供養し供給し、其の一形を盡して、乏少する所無し。

其の辟支佛、其の住世を盡して、然る後涅槃したまふ。爾の時長者、辟支佛の命終涅槃せるを見、

卽ち彼の身を取りて、如法に闍毘し、舍利を收取して、塔を起てて供養し、泥塗を以て飾り、復石灰を以て、重ねて其の上に塗り、莊嚴するを以ての故に、諸種種の寶珠の瓔珞を懸け、是の願を發して言はく「願はくは我未來に恒に是の如き辟支世尊に値ひ、彼の世尊所說の法を聞き已りて、領解して永く忘失せず、生生世世に惡道に墮せず、亦願はくは我が身端正憙ぶべく、見ん者歡喜し、身に三十大丈夫の相有り、具足して滅ずる無きこと、是の如き大仙等と異有る無からんを」と。

而して彼の長者、捨身命終して、後、更に曾て惡道に生ぜず、恒に人天に生れ、久久流轉して後に復波羅㮈國に生る。彼の時王有り、吉利尸(Kṛki)(〔隋〕に痩細といふ。)と名け、以て彼の子と爲る。爾の時に乃ち一佛有り、世に出現したまふ。名けて迦葉(Kāśyapa)多他伽多・阿羅呵・三藐三佛陀といふ。然るに彼の世尊、其の住世に隨ひ、滅度し已りて後、吉利尸王は、純ら七寶を以て爲めに塔廟を作る。所謂、金・銀・頗梨・琉璃・及び赤眞珠・珊瑚・馬瑙なり。其の寶塔の外に、更に瓴塼を以て重ねて其の上を覆ふ。其の塔、高峻にして一由旬に至り、東西の縱廣各半由旬、爲めに銘記を作り、名けて達舍婆陵伽(Daśaliṅga?)(〔隋〕に十相と云ふ。)といふ。

爾の時吉利尸王所生の七子、僉王に白して言はく「善い哉、大王當に知るべし、我等は迦葉多他伽多・阿羅呵・三藐三佛陀の舍利塔上に、各各一大傘蓋を奉施し、以て其の塔を覆はんと欲す。善い哉、大王、願はくは聽許を垂れたまへ」。王之に告げて言はく「汝等に任隨して、我今造ることを聽す」。爾の時彼等諸の七王子、各一寶を以て、其の一蓋を造りて其の塔上を覆ひ、或は金蓋を造り、或は銀蓋を造り、乃至、或は碼瑙等の蓋を造る。其の七子の內、第二の王子は、其の金蓋を造りて以て塔上を覆ひ、心に是の願を發す「願はくは我來世に恒に是の如き辟支佛尊に値ひ、彼の所說の法を願はくは我領證して永く忘失せず、生生世世惡道に墮せず、所生の處願はくは猶ほ金色の如き身を得んことを」と』。

爾の時佛、諸比丘に告げたまはく、『汝諸比丘、若しは心に彼の槃頭摩城の內に於て、婆羅門の子が、彼の佛及び比丘僧に、溫室の洗浴を供養し、心に是の願を發し、「願はくは我來世に當に此の比丘僧衆の淸淨無垢香潔の身に似たるを得べけん」とて、毘婆尸多他伽多・阿羅訶・三藐三佛陀の滅度の後に、造塔供養せる童子を疑ふものあらん。汝等比丘、異見を作す莫かれ。此は卽ち難陀比丘これなり。汝諸比丘、汝等若しは彼の長者の、一形、彼の辟支佛を供養し、滅後に復舍利を以て塔を起てて供養し、塗治し、及び石灰を以て、種種に莊飾し、及び諸の瓔珞もて、彼の塔を供養し、心に是の願を作しぬ、「願はくは我來世に此の辟支の如く、端正喜ぶべく、觀る者厭くこと無く、身に三十の大丈夫の相有り、具足して滅ずる無からん」。此の如き仙人は、蓋しこれ誰ぞと疑ふ有らん。汝諸比丘、異見を作す莫かれ。此も亦難陀比丘これなり。汝諸比丘、汝等若しは心に彼の波羅㮈城吉利尸王の第二の子が、彼の迦葉多他伽多・阿羅訶・三藐三佛陀の爲めに、金蓋を造作し、以て塔を覆へるを疑ふもの有らん。異見を作す莫かれ。此も亦難陀比丘これなり。然るに此の難陀は、往昔毘婆尸佛、及び比丘僧(の許)に於て、僞に溫室を作り、如法に洗浴せるを以て、因りて是の願を發しぬ、「願はくは我來世に當に是の如き淸淨香潔無垢の身を得んこと、此の比丘の淸淨無垢なるが如けん」。又復辟支佛尊を供養し、尊の滅度の後、舍利塔を起て、泥塗を以て治し、石灰もて嚴飾し、并に瓔珞を以て、之を莊校し、心に是の願を作しぬ、「願はくは我來世に是の如く端正に、是の如く憙ぶ可く、身に三十の大丈夫の相有り、具足して滅ずる無きこと、此の仙人の如けん」。復迦葉多他伽多・阿羅訶・三藐三佛陀の滅度の後、舍利塔を造り、純金もて蓋を作りて以て其の上を覆ひ、心に是の願を發しぬ、「願はくは我來世所生の處に、身恒に金色ならん」と。彼の業緣に藉りて、今此の如く憙ぶべく端正に、觀る者厭く無き金色の身を成じ、復三十の大丈夫の相有り、皆悉く具足して缺減有ること無し。彼の時に於て復心願を起しぬ、「願はくは我來世に惡道に生るる勿からん」と。彼

の業報に藉りて、曾て惡道の內に生れず、恒に人天道の中に生る。復彼の時毘婆尸佛・多他伽多・阿羅訶・三藐三佛陀の造塔の時、檢校經紀し、辟支佛に於て復四事を以て、盡形供養す。彼の業報の因緣力に藉るが故に、今釋種の家に生るるを得たり。又爾の時心に是の願を發しぬ、願はくは我、來世に常に是の如き世尊、或は此に勝れたる者に値遇するを得、然も彼の世尊の所有の法敎を、願はくは我聞き已りて、速かに證辯するを得んと。彼の業報の因緣力に藉るが故に、今我に値ふを得て、卽ち我が邊に於て出家し、及び具足戒を得、我復授記して、諸比丘に告ぐ、「若し我が聲聞弟子に於て、諸根を調伏せること最も第一なる者を知らんとせば、難陀比丘卽ち其の人なり」と。

汝諸比丘、汝等須らく知るべし。難陀比丘は、昔日是の如き善根を造作し、彼の善根に藉りて、今釋種の家に生るるを得、身に金色有り、三十の大丈夫の相を具足し、現に出家するを得、具足戒を受け、羅漢果を得、復授記して是の如き言を作すを得たり、[九]「若し我が聲聞弟子の、諸根を調伏せる最第一なるを知らんと欲せば、所謂難陀比丘これなり」と』。

[一]婆提唎迦等因緣品第五十八の上

[二]爾の時提婆達多(Devadatta)釋種童子は、諸の五百の釋童子等の捨家出家するを見、心に是の念を發す、『我も今亦、世尊の所に於て、捨家出家すべし』。是の念を作し已りて、父母の邊に至り、是の如き言を白す、『善い哉、父母、我今發心し、將に佛の邊に捨家出家せんと欲す。願はくは我に許を垂れたまへ』。是の語を作し已るや、父母卽ち提婆達多釋童子に告げて言はく、『我等今是の思惟を作す、「我等は、須らく提婆達多に依るべく、提婆達多は、復須らく我に依るべし」と。旣に是の如くなれば、汝の意樂に隨ひ、當に是の事を作すべし』。

【九】この授記、A. N. I. 14. 增阿四・五に見ゆ。

【一】本品は提婆達多、阿難、婆提唎迦等釋主諸王子の佛弟子となれる因緣、並に婆提唎迦に就いて二個の本緣譚を揭ぐ。而して諸律には其の要點を簡說するに過ぎず、又 Mv. II. Vin. II. に本品に相當するものなし。

【二】提婆達多、佛に出家を請ひて許されず、舍利弗等の諸大弟子亦之を許さず。

爾の時提婆達多童子、身に上妙無價の衣服を著し、最勝の象に乘り、迦毘羅婆蘇都城より、城外に出でんと欲せるに、城門の頬に於て、鈎の爲めに掛けられて、衣裳破裂す。彼の時一解相大婆羅門有り、邊に在りて見る。其の彼、見已りて此の童子を記す、『規する所の事、必ず當に成らざるべし』と。

爾の時童子提婆達多、卽ち城を出で已りて、佛の所に詣向し、佛足を頂禮して、却いて一面に住し、佛に白して言さく、『唯願はくは世尊、我を放して出家せしめたまへ』。爾の時世尊、正念もて彼の提婆達多の前後の事業を觀じて、其の心行を知り、觀じ已りて、卽ち提婆達多に告げて、是の如き言を作したまふ、『提婆達多、汝今愼みて捨家出家すること莫く、但當に家に還り、家に在りて修道し、諸の財寶を持ちて以用つて布施し、諸の功德を作すべし。我が法中に於て、須らく出家すべからず』。爾の時童子提婆達多、佛の訶を被り已りて、復長老舍利弗の邊に至り、之に白して言はく、『聖者舍利弗、我に出家を與へたまへ』。爾の時長老舍利弗、提婆達多に問ひて、是の如き言を作す、『提婆達多、汝曾て先に佛邊に至れるや不や』。提婆達多、聖者に報じて言はく、『我、先に已に曾て佛の邊に至れり』。爾の時長老舍利弗言はく、『提婆達多、世尊は汝に向ひ、何の言說をか作したまへる』。提婆達多、舍利弗に語る、『是の如し、聖者。世尊、我に語りて「汝、家を捨てて出家する莫く、但當に家に在りて其の布施を行じ、諸の功德を作すべし。若しそれ我が法中に在りて出家するも、汝に利益無けん」と』。爾の時、長老舍利弗、是の如き念を作す、『世尊、今既に彼に法に於て出家するを聽したまはざるに、我今若し彼を放して出家せしめば、これ我は不善なり』。是の如く念じ已りて、遂に卽ち彼の提婆達多に告げて、是の如き言を作す、『提婆達多、世尊の敎の如く、汝は必ず應當に是の如き事を作すべし』。

爾の時童子提婆達多、舍利弗に發遣せられ、復長老目揵連の邊に詣り、到り已りて頂禮し、却い

て一面に住し、之に白して言はく、『大目揵連、唯願はくは聖者、我に出家を與へよ』。爾の時長老大目揵連、遂に復彼の提婆達多に告げて、是の如き言を作す、『提婆達多、汝曾て先に佛の邊に至れるや不や。提婆達多、報じて言はく、『聖者、我、已に先づ佛の邊に至れり』。時に長老大目揵連、尋いで復彼の提婆達多に告げて、是の如き言を作す『世尊は、汝に語りたまふに、何事の意有りしか』。提婆達多、復之に報じて言はく『世尊、我に語りたまふらく、「汝は此に於て捨家出家する莫く、但當に法の如く家に在りて修道し、財を以て布施し、諸の功徳を作すべし。須らく我が法中に於て出家すべからず。若し出家するも、汝に於て益無し」と』。爾の時長老大目揵連、亦復彼の提婆達多に報じて、是の如き言を作す『世尊の教の如くにして、汝必ず應當に是の如き事を作すべし』。

爾の時提婆達多、既に目連に出家を許されず、復長老大迦葉の所に詣り、乃至、略說せんに、悉く前事の如し。次に復迦旃延の邊に詣り、次に復優婁頻螺迦葉の邊に至り、次に復長老那提迦葉の邊に至り、次に復長老優波斯那の邊に至り、及び摩訶俱絺羅の邊に、摩訶孫陀・離波多の邊に至るに、悉く皆許されず。既に許されずして、方に乃ち〔三〕長老優波離波多(Uparevata?)の邊に詣向して優波離波多の足を頂禮し、却いて一面に住す。爾の時提婆達多釋種童子、復優波離波多の邊より、出家を請乞す。然も其の長老優波離波多、復之に問ひて言はく『提婆達多、汝應に先づ佛の所に往到すべし』。提婆達多、報じて言はく、『聖者、我、先日已に佛邊に至れり』。爾の時長老優波離波多、是の如き言を作す、『汝、佛の邊に至るや、汝に何事をか語りたまへる』。提婆達多、是の如き言を作す『世尊、我に語りたまひて、「汝此に於て捨家出家する莫く、但當に家に在りて如法に修道し、財を以て布施し、諸の功徳を作すべし。須らく我が法中に於て出家すべからず。若し出家せんも、汝に於て益無し」と』。

〔三〕優波離波多と、優波離とは別人なるが如し。共に其傳審ならざるも、本經前に二人の離波多ありといへるものの一人なるべし。

巻の第五十八

婆提唎迦等因緣品第五十八の中

爾の時長老優波離波多、是の思惟を作す、『世尊、今既に彼の人の出家を聽許したまはず。我若し輒爾出家を放さば、これ我が不善なり』。是の如く念じ已り、尋いで卽ち彼の提婆達多に告げて、是の如き言を作す、『世尊の教の如く、汝必ず應當に是の如き事を作すべし』。

提婆達多、是の如く次第して、處處に大德上座諸比丘の所に至る。而も諸大德上座比丘も、亦皆彼の提婆達多に語りて、是の如き言を作す、『世尊、既に此の如き語有り。汝必ず應當に是の如き事を作すべし』。爾の時提婆達多、所至の處、皆許さざれば、還た白象に乘り、迦毘羅婆蘇都城に向ひて家内に還る。

時に[一]阿難釋種童子(Ānanda)、初めて五百の釋童子等の悉く出家を得たるを見、便ち是の念を作す、『我も今日亦須らく家を捨て、佛の邊に至りて出家を求むべし』。是の如く念じ已りて、父母の邊に至り、白して言ひて曰はく、『我今意に家を捨てて、往きて佛の邊に至り、出家せんと欲す。唯願はくは我を放せ。出家せんのみ』。爾の時、阿難を生める所の母、本佛の邊に於て淨心有ること無し。所以は何に。世尊の家に在して菩薩たりし時、其の阿難の母、既に菩薩の功德巍巍として、威力顯赫なるを見、遂に菩薩に於て其の染心を生じ、種種邪異の言を說きぬ。爾の時菩薩、但彼は親しくこれ其の姨母なるを以て、此の言說に於て、默然として答へたまふこと無かりき。是の因緣を以ての故に、菩薩に於て淨心有ること無く、淨心無きが故に、恒常に己が子阿難を放して捨家出家せしめず。

[二]爾の時提婆達多、他人の說を聞くに、『阿難、意に捨家出家せんと欲すれど、然も其の父母、出家

【一】阿難、出家を欲するも父母許さず。

【二】提婆達多、阿難と共に出家すべきを約す。

するを聽さず』と。提婆達多、阿難の所に詣り、問うて阿難に言ふ、『汝、心に實に捨家出家せんと欲するも、父母頗し曾て聽かざるや不や』。阿難、報じて言はく、『提婆達多、實に語る所の如し。今知らず何の事業を作してか、父母をして我を放して出家するを得、比丘を成じ具足戒を受くるを得しめん』。爾の時釋子提婆達多、阿難に謂ひて言はく、『汝、後に若し父母の、汝に捨家出家するを許すを知らば、必ず我に語りて我に知らしめよ。當に汝と共に倶時に出家すべし』。阿難、尋いで提婆達多に報じて、是の如き言を作す、『汝の論ずる所の如く、我、違せじ』。

〔三〕爾の時阿難、是の如き念を作す、『我が父母は、決して我に捨家出家を聽さず』。是の念を作し已りて、卽ち其の家に在り、五百枚の波利沙般を取りて、私に往きて毘提那國に至る。而して彼の聚落に一長者有り、これ其の父王の舊日の知識なり。此の五百の波利沙般を以つて、以て相付囑し、之に語りて言はく、『今此の錢を以て汝に付囑し、我が食直と爲す。我若し食を須めて此に來らば、必ず此の錢を將つて、我が爲めに食を買へ。至れる時に當りて、汝亦我が來所を問ふべからず。但我此に到らば、汝必ず當に食を須むるが故に來ると知るべし』。是の語を作し已りて、空閑阿蘭若處に至り、無語戒を受け、行住坐臥に、默然として言はず、食を須つ時は、默然として來りて寄錢の家に至り、寂靜に坐し、默して食を受け、食し訖りて還り、復默然として去る。時に彼の聚落に居る所の諸人、數阿難釋種童子の、默然として行住去來坐臥するを見、見已りて問ひて言はく、『仁者はこれ誰ぞ』。爾の時阿難、亦言語して以て彼の人に報ぜず、還た復本の如く默然として去る。時に彼の人輩、各相謂ひて言はく、『此の仙人は、應にこれ毘提那國より出でしなるべし』。是の語を作し已りて、其の爲に名を立て、稱して毘提那國仙人と爲す。

〔四〕爾の時、阿難の父母、人の此の如き語を說くを聞く、『阿難は、此より逃遁し、往きて毘提那國の城邑聚落に至り、不言戒を受け、仙人の行を行じ、仙を成ずるを得たり』。聞き已りて卽ち使人を遣

【三】阿難私かに毘提那國に至りて仙行を修す。

【四】阿難、父母より許を得、提婆に之を告げて共に出家せんとす。

はし、往き至りて謂ひて言はく、『子よ、子よ、汝若し決定して家に住せずば、但此に來向し、我が釋種童子の邊に於て出家せんのみ』。爾の時阿難、遂に即ち還り來り、往きて釋種提婆達多に語りて、是の如き言を作す、『提婆達多、汝今當に知るべし。我が父母、今已に我を放して出家せしむ』。提婆達多、復阿難に問ふ、『汝、今意に誰が邊にて出家せんと欲するか』。阿難報じて言はく、『我、今意に佛の邊にて出家せんと欲す』。提婆達多、復言はく、『我、昔已に佛の邊に至り、出家を求めしも、爲めに佛、我に出家を許したまはざりき』。阿難、復言はく、『當に聖者舍利弗の邊に至りて出家を求請すべし』。提婆達多、復此の言を作す、『彼の人も亦我に出家を與へざりき』。是の如く、乃至、摩訶目揵連・摩訶迦葉・大迦旃延・優婁頻螺迦葉・那提迦葉・伽耶迦葉・優波斯那・摩訶倶絺羅・摩訶專陀・優波離波多、是の如き等の大德上座、諸の比丘輩有るも、悉く皆我に出家を許聽さざりき』。阿難、復提婆達多に問ひて、是の如き言を作す、『提婆達多、汝の意の如きは、何處にか去らんと欲する』。提波達多、報じて言はく、『阿難、我が所去の處は、人をして識らしめず』。阿難復言はく、『我も亦提婆達多の是の如き意趣に隨從せん』。

[五] 爾の時、多く、大威勢力の釋種童子有り、家ごとに別に一人、佛邊に出家す。時に迦毘羅婆蘇都城に二兄弟有り、小なるを名けて摩尼樓陀(Maṇiruddha)(舊に阿尼婁陀 Aniruddha と作す。)と曰ひ、大なるを名けて摩訶那摩摩尼樓陀(Mahānama-maṇiruddha)といふ。久しく善根を植ゑ、解脫藏を修し、涅槃に面向して煩惱に背き、一切の有中に生るるを欲せず。此の世に於て、三界の内に在りて、當に漏盡を取るべきを欲し、已に曾て大功德聚を積集せるが故に、彼の釋種の家内に生れ、彼の家に生れてより、其の家の生業漸漸に增長す。所謂、錢財・諸穀麥等、眞珠・琉璃・珊瑚・虎魄・諸璧玉等、及び金・銀・二足・四足、皆悉く備有し、地下に復五百の伏藏有りて自然に顯現し、其の臥牀・眠息・睡時に在るや、乃ち諸天有りて、五百種の無價の珍寶を將つて其の牀上に置く。其の人の眷屬、是の如き

【五】摩尼婁陀兄弟の生立。

等の希有の事を見、共に相議して言はく『此の童子、睡眠の時、諸天乃ち無價の寶物を將つて、以て其の上を覆ふ。是の故に我等須らく立名して摩尼樓陀と爲すべし』と。然るに彼の童子は、喜ぶべく端正にして、觀るもの厭くこと無く、身體の黃白なること猶金色の如く、其の頭の形狀は、傘蓋の似如く、鼻隆高滿して鸚鵡の嘴の如く、兩臂膊は停下垂して膝を過ぎ、身體の縱廣、上下齊等に、諸根具足して缺減する所無し。然して其の父母は、爲めに四種の阿孄を置きて看視せしむ。所謂、抱く者、又洗浴する者、乳を飮飼する者、遊戲に伴する者なり。其の四の孄母、養育瞻視して漸く長大に至るや、智慧成就し、復行步して東西に馳走し、事に堪ふるに及び至るを見て、家業種種の技藝を敎授す。所謂、書算・造印・音樂・歌舞・戲笑・調謔・滑稽・趨鏘(イ)・妖冶・摩尼寶を造ること、染衣・裁衣・諸香を和合し、花葉及び諸の形像を綵畫し、圍碁・六博・樗蒱等の戲、文章を造作し、象伎・馬伎・及び車伎・弓射の術・俯仰の容儀・捔力・出壯・按摩等の伎、(ロ)超梁・賭走・調象・擲罥・園囿を修治し、行來出入に吉凶を知解し、細行竊密に餘の軍陣を破り、(ハ)自ら其の拳を把れば他の擘の得ざること、地を蹋みて正立せば人推すも動かず、理髮梳頭・操刀斫斲・鑽穿等の事、木石を劈裂し、(ニ)射准差はず。乃至、毛髮もて人の支節を射、箭を放つて聲を尋ね、弓を牽き彊を挽く、是の如きの諸技、悉く皆明達し、成就具足して解せざるは無く、意智は深遠に、精神は迅疾に、心慮は巧妙に、黠慧は聰明なり。然るに彼の童子、一時に至り、其の父に隨從して田作及び生資を檢校す。既に彼處に至れば、腹中渴乏し、其の渴を以ての故に、往きて水邊に至り、水を掬ひて飮まんと欲するに、其の水變じて天漿の美味と成る。

爾の時、其の父、遮して飮むことを聽さず、唱へて言ふ『子よ、子よ、此の水を飮む莫かれ。或は汝の身體をして安からざらしむるを恐る』。爾の時童子摩尼婁陀、此の水を嘗め已り、父に白して言はく、『尊者、此の水は甚だ大に甘美なり』。其の父信ぜず。時に彼の童子、手を以て水を掬び、

【イ】趨鏘。鏘は行く貌。可洪音義に趍鏘に作る。趍は趨に同じ。

【ロ】超梁。とびはしる。慧琳音義に趒梁に作る。趒は躑也、越也。

【ハ】（原文）自把其拳、他擘不得。

【ニ】（原文）射准不差。

卽ち其の父に奉り、口に此の言を作す、『爺、若し信ぜずんば、願はくは此の水を嘗めよ』。其の父、是に於て此の水を嘗め已り、報じて言はく、『子よ、子よ、我、生れて王宮の內に在りと雖も、未だ曾て此の妙甘美の水を得ず』。此の語を作し已り、心に喜悅を生じて未曾有と爲し、自ら口に言はく、『希有なり、我が子、大に福業有り、生れてより已來、作す所の飮食、色・香・味具はりて、他許のに倍勝す』と。

爾の時、彼の兄摩訶那摩、若しは見、若しは嘗め、彼之を飮食して、卽ち妬心を生じ、口に說いて言はく、『何の故に是の如く香潔なる美食を、唯小弟のみに與へて、我に與へざる』。爾の時、其の母、此の語有るを知り、告げて言はく、『子よ子よ、汝知るや不や。從來此の摩尼婁陀の爲めに造る所の飮食は、恒常に十倍して他人許のに勝るを』。摩訶那摩、猶ほ故のごとく信ぜず。又一時に於て摩尼婁陀、園林に遊戲し、彼の園內に在りて使人を往遣し、母より食を索め、使に告げて言はく、『我が母の所に往き、食を送りて來らしめよ』。時に彼の母、盤を以て食を盛き、帊を將つて覆蓋し、先づ太子摩訶那摩に示し、然る後使を遣はし、往きて彼に食を送り、將つて摩尼婁陀の所に至らしむ。摩尼婁陀は、亦此の食を看るに、其の食の色・香、倍卽ち勝を加へ、亦諸器に於て、悉く皆盈滿す。復此の如くなりと雖も、摩訶那摩、猶ほ故のごとく信ぜず、口に說きて言はく、『家內より將つ所を知ると雖も、好惡ともに、誰か諸の眷族の家に於て、備辦して送り去らざるを知らんや』。

又一時に至り、摩尼婁陀、復園林に在りて觀看遊戲し、又使人を遣はして、母に啓白して言はく、『願はくは使人を遣はして食を送り來れ』。此の其の母、爾の時諸の空器を取りて盤上に安著し、巾を以て覆蓋し、先づ大兒摩訶那摩に示し、然る後に始めて送り、復之に告げて言はく、『汝、自ら隨看して、應に虛實を知るべし』。摩訶那摩、此の語を聞き已りて、卽ち盤に隨ひて去り、往きて摩尼婁陀の邊に至る。彼既に見已るに、一切の諸食の色香美味なるが、皆悉く充滿す。爾の時釋子摩訶

【ホ】（原文）雖知家內所將、好惡誰知不、於諸眷屬家、備辦送去。

那摩、是の事を見已りて、心に喜悦を生じ、口に言ふ『希有なり未曾見なり、我が弟に是の如き大福徳有ること』。

摩尼婁陀、漸く長大して年盛壯なるに至り已る。是に於て父母、爲めに三堂を作り、一を冬坐に擬し、二を春秋に擬し、三を夏坐に擬す。冬坐に擬せるには、唯喧煖を備へ、夏坐に擬せるには、淸涼を備へ、春秋に擬せるには、唯和適を備ふ。其の所居の堂に、別の男子無く、唯一人を擬して、五欲の樂を受け、具足自恣して、意に隨ひて居止せしむ。

爾の時、〔六〕童子摩訶那摩、是の如き念を作す『今釋種の諸童子中に於て、大勢有る者、悉く各家ごとに別に一人出家す。我が今の家内に出家する者無し。唯我應當に捨家出家すべし。若し爾らざれば、須らく我が弟摩尼婁陀をして出家せしむべし』。摩訶那摩、是の念を作し已りて、便卽ち摩尼婁陀釋童子の邊に詣向し、到り已りて告げて言はく『摩尼婁陀、我等釋種の勢力有る者は、悉く各家ごとに別に一人出家す。我等の家内に出家する者無し。我今思惟す、或は汝出家せんか、或は我出家せんか』。爾の時釋種摩尼婁陀、其の兄摩訶那摩釋童子に啓白して言はく、『摩訶那摩、汝自出家せば、我去る能はず』。摩訶那摩、復彼に告げて言はく『摩尼婁陀、若し是の如くんば、我今汝に家業の事を囑せん。凡て生活の法は、先づ其地を犂し、然る後磨治し、次に復、其の瓦石・株棘を除き、方に種子を下し、種子を下し已りて、若し天の雨る無くんば、時に依りて灌漑し、法に依りて鋤治し、然る後熟するを待ちて、收刈料理し、倉窖に貯入し、是の如く作し已りて、來年に至り、還た復此の如く次第して造作し、乃至、年年休息するを得ざれ』。

爾の時童子摩尼婁陀、其の兄摩訶那摩釋童子に啓白して言はく、『若し此の如くならば、我が家の作業は窮盡するを得ず、亦盡くる時無けん。此の如き作業、旣に盡くる日無くんば、何の時にか當に此の三堂に於て五欲の樂を受くるを得べけん』。爾の時童子摩訶那摩、復其の弟摩尼婁陀に語りて

【六】摩訶那摩、弟摩尼婁陀に出家をはかる。

是の如き言を作す、『摩尼婁陀、作業の事は、理として盡くべからず、亦盡くる日無し。我等の父母は、祖宗造作の事業を悋惜して、亦復此の如く、未だ盡くる時を見ずして命終せり』。爾の時、童子摩尼婁陀、復其の兄摩訶那摩に語りて、是の如き言を作す、『若し作業の窮盡すべからず、盡くる時を知らず、我が父母も、亦復祖宗の作業を悋惜し、未だ盡くる時を知らずして、命終を取れるを知り、是の如く虛しからずば、我今思惟するに、摩訶那摩は應に須らく家に在りて家業を營理すべし。我は捨家出家して道を修せんと欲す』。

七 爾の時童子摩尼婁陀、父母の邊に詣りて、白して言はく、『爺孃、我捨家して如來の邊に於て出家を求請せんと欲す。願はくは許を垂れて、我を如來の邊に出家せしめたまへ』。爾の時父母、彼の小兒摩尼婁陀に告ぐ、『當に知るべし。我當に唯二子有り、汝二子に於て大に憐愛を生じ、心首を離れず。若し暫く見ざるも、心に憂惱を懷く。假使ひ我死せんも、猶ほ汝と共に相離別せざらんを望む。況んや復我今生平に存在す、汝に出家を聽許さんや』。是の如く再請し、乃至、三請して云ふ、『我、如來の法中に於て、捨家出家せんと欲す。願はくは父母、我に聽許を垂れんを』。八 往昔菩薩の家より出家し、梵行を修したまへる時、輸頭檀王、菩薩の爲の故に憂惱に逼られ、釋種の諸眷族等を聚集して、之に告げて言はく、『諸眷屬輩、汝等須らく知るべし。我が子悉達は、既に出家し已る。我も亦其の王位に處るを欲せず。亦復此の天冠を戴くを用ひず。汝等、誰か能く王位を受くるぞ。我當に委付し、幷に卽ち灌頂して、天冠を授與すべし』と。爾の時、衆內に釋童子有り、其の人を名けて婆提唎迦(Bhadrika)といふ。其の母を名けて黑瞿多彌(Kaligodha(mi))といふ。王に白して言はく、『我、能く此の王位及び冠を受けん』と。爾の時輸頭檀王、及び諸の釋種、一切の眷族、卽ち王位及び天冠を將つて、釋童婆提唎迦に付與し、之に灌頂す。爾より已後、婆提唎迦釋種童子は、卽ち釋の王と作り、其の諸眷屬は、號して釋王婆提唎迦と爲す。然して彼の釋王婆提利迦、王位を

【七】摩尼婁陀、兩親に出家を請ふ。

【八】婆提唎迦の生立。

受けて後、十二年を經、如法に治化しぬ。而して彼の釋種諸眷族等、本要誓有り、『若し誰か首に天冠を戴きて王と爲るを得る者有らば、彼の人は當に一切の釋種諸眷族等の爲めに、百味の餚饍・飲食を造作すべし』と。其の王、舊日、彼の釋種摩尼婁陀と、少小(ホ)より拊塵して共に伴侶たり。設會の時、口づから勅して彼の摩尼婁陀を喚び、是の如き言を作す、『摩尼婁陀、汝、我を佐助して、先づ當に諸眷族に供給し訖るべし。然る後我當に汝と共に食すべし』。摩尼婁陀、釋王婆提唎迦に啓白して、是の如き言を作す『王の今の勅の如く、敢て違せじ』。時に彼の二人、共に釋種諸眷屬に設け已りて、然る後に共に食し、食し已りて卽ち摩尼婁陀を留め、宮に在りて止宿せしむ。

爾の時釋王婆提唎迦、彼の夜を過ぎ已りて、天曉けんとする時、身自ら彼の摩尼婁陀に問ひ、是の如き言を作す『摩尼婁陀、安眠せるや不や』。摩尼婁陀、王に報じて言はく『我、夜の眠に於て安隱なるを得ざりき』。王、復問ひて言はく『何の故に爾るか』。摩尼婁陀、復王に報じて言はく『我、夜腹痛み、又寒熱を患ふ』。王、復問ひて言はく『何の故に然るか』。摩尼婁陀、復王に報じて言はく『彼の飮食に於て、味調適ならざりき。是の故に當時我腹痛を患へぬ。其の臥せる所の褥は、之を織る時に當り、其の彼の織師、身に寒熱を患へたり。是の故に我も亦寒熱の病に著しぬ』。時に釋王婆提唎迦、食を造る人を喚び、之に問ひて言はく『汝百味の食を造作する時に當り、其の食の諸味に、增減有りしと爲すか、調適なりしと爲すか』。其の造食の人、王に報じて言はく『是の如し、大王、其の味稍多く、其の味少かりしが如し。我爾の時作事に蒼忙にして、意の如く事事檢校するを得ざりき。我が佐助の人、心を用ふるを肯せず、悉く捉りて和雜しぬ。』

爾の時釋王婆提唎迦、復織師を喚び、之に問ひて言はく『汝、我が爲めに被褥を織る時に當り、何の故にか精ならざりし』。織師報じて言はく『是の如し、大王、我織る時に當り、寒熱の病に著し、大王、復使人を遣はして催促せしむ。我、爾の時寒熱未だ差えざるも、王の瞋るを畏るるが故

【ホ】（原文）少小拊塵、共爲伴侶。

に、急に織りて送りぬ。是の故に我が織は精妙なるに及ばざりき』。

爾の時釋王婆提唎迦、希有心・未曾有心を生じ、此の如き事は、思議すべからずとし、又是の念を作す『希有なり希有なり、摩尼婁陀に乃ち此の如き勝妙の智慧有ることや』と。爾の時、釋王婆提唎迦、釋童子摩尼婁陀に告げて、是の如き言を作す『摩尼婁陀、今日より後、汝我が邊に於て須むる所有らば、汝自ら求むること莫く、但使をして至らしめば、我相負かじ』。

九 其の時、釋童摩尼婁陀の其の母、念言すらく『今此の釋王、既に我が子と少小より拊摩して、同志の善友なり。其の人決定して應に出家すべからず』。是の念を作し已りて、即ち已が子摩尼婁陀を喚び、是の如き言を作す『摩尼婁陀、若し彼の釋王婆提唎迦、捨家出家せば、汝爾の時に於て、當に出家すべきなり』。爾の時釋童摩尼婁陀、是の語を聞き已りて、釋王婆提唎迦の所に詣向す。時に釋王婆提唎迦、宮より出でて那吒迦(nataka)(〔隋〕に歌を以て吉事を説くと云ふ。)喜樂の會に在り、觀看して坐す。爾の時釋童摩尼婁陀、是の如き念を作す『我、今若し婆提唎迦釋王の會に入らば、必ず當に他の觀看遊戯を妨ぐべし』。是の念を作し已りて、便ち門頰に坐し、那吒迦喜樂會の訖るを待ち、然る後入らんと欲す。

爾の時釋王婆提唎迦、此の會の正に喜樂する時を觀看するに、會中に一音聲の婦女有り、手に箜篌を彈く。爾の箜篌、一絃の斷ずる有るに當り、其の彼の婦女、尋いで即ち還た續けぬ。而して那吒迦喜樂會中に、人の覺れるもの無し。唯釋王婆提唎迦一人の獨知る有るのみ。摩尼婁陀、門頰に在りて亦此の事を知る。

爾に時釋童摩尼婁陀、那吒迦喜樂會の訖らんとするを見、方に始めて婆提唎迦釋王の所に往詣し、到り已りて手を將つて釋王の項を抱き、然る後坐に却きて一面に在り。爾の時釋王婆提唎迦、釋童子摩尼婁陀に告げて是の如き言を作す『摩尼婁陀、我已前に汝に告げざるべきか、「若し須むる所有

【九】 摩尼婁陀、婆提唎迦と共に出家せんことを求む。

らば、身自ら來る莫く、但使を遣はして索めよ、我、相負かじ」と。今日作ぞ身猶ほ自ら至るべき」と。摩尼婁陀、王に報じて言はく、『婆提唎迦、此の事、是の如し。人を遣はして能く斯の事を辦ずべからざればなり』。爾の時釋王、復釋童摩尼婁陀に問ひて是の如き言を作す、『摩尼婁陀、言ふ所の辦ずとは、事云何。當に汝に由るべしと爲すか、當に我に由るべしと爲すか』。摩尼婁陀、復王に報じて言はく『此の事、我に由り、亦王に關す』。婆提辦迦、復是の言を作す、『若し我に關せば、汝應に卽ち辦ずべし』。摩尼婁陀、復王に白して言はく、『大王、當に知るべし。我が意、將に捨家出家せんと欲す。此の如きの事、必ず汝に關するなり』。婆提唎迦、釋童子摩尼婁陀に報じて、是の如き言を作す『摩尼婁陀、汝、今若し捨家出家せんと欲すること、必ず我に關せば、我當に汝を放すべし。汝我が邊に於て、疑慮を生ずる勿れ。若し出家せんと欲せば、汝の意の樂むが隨なり』。爾の時釋童摩尼婁陀、釋王婆提唎迦に啓白して、是の如き言を作す『汝、今當に須らく我と共に出家すべし。何を以ての故に。我の父母、先に我に語りて言はく、「摩尼婁陀、若し彼の釋王婆提唎迦にして、捨家出家せば、汝も亦彼に隨つて出家し去れ」と』。時に彼の釋童摩尼婁陀、復釋王婆提唎迦の、大衆に在りて是の實語を作すを見たり、『摩尼婁陀、汝今若し捨家出家せんと欲し、既に我に關せば、我相違せずして、汝の去るに任せ隨ふ』と。

彼の時に當り、諸釋種等、復皆實語し、是の故に王に同じく共に出家せんを請ふ。爾の時、釋王婆提唎迦、彼の釋童摩尼婁陀に告げて、是の如き言を作す、『若し必ず然らば、且らく七年を住せよ、我が家業、事了辦するを得ん。辦じ已りて然る後に當に汝と共に捨家出家するを得べし』。爾の時釋童摩尼婁陀、復釋王婆提唎迦に白して、是の如き言を作す『婆提唎迦、是の語を作す莫かれ。我、今待ちて七歲に至る能はず。然る所以は、婆提唎迦、七歲は久遠なり、誰か知らん、我等に其の間或は出家の障閡有らんを』。婆提唎迦、復釋童摩尼婁陀に語りて、是の如き言を作す、『摩尼婁陀 汝

且らく我が六年の内に家事を備辦するを待て、然る後に、汝と共に捨家出家せん』。摩尼婁陀、復王に白して言はく、『婆提唎迦、汝今是の語を作す莫かれ。我亦待ちて六年に至る能はず。所以は何に。六年は久遠なり。誰か知らん、我等に中間儻出家の障閡有らんを』。婆提唎迦、復釋童摩尼婁陀に語りて、是の如き言を作す、『摩尼婁陀、若し必ず然らば、且らく我が五年内に、家業を備辦するを聽し待て』と。乃至、四年、三年、二年なるも、摩尼婁陀、皆悉く肯んぜず。時に王、復言はく、『若し必ず然らば、且らく我一年の内に諸の家業を辦ずるを待て。然る後、乃ち當に汝と共に出家すべし』。摩尼婁陀、猶王に白して言はく、『婆提唎迦、我は乃至一年をも待つ能はず。所以は何に。一年も尚久し。誰か知らん、我と汝と儻しや障閡有らんを』。爾の時釋王婆提唎迦、復釋童摩尼婁陀に告げて、是の如き言を作す、『摩尼婁陀、若し必ず然らば、且らく當に我が六月内に、諸の家業を辦ずるを待つべし』。乃至、三月・二月・一月なるも、摩尼婁陀悉く皆肯んぜず。爾の時釋王婆提唎迦、復釋童摩尼婁陀に告げて、是の如き言を作す、『摩尼婁陀、若し必ず然らば、且らく我、七日七夜にして諸の家事を辦ずるを聽し待て。然る後、汝と共に捨家出家せん』。摩尼婁陀、卽ち釋王婆提唎迦に白して、是の如き言を作す、『善い哉、善い哉、婆提唎迦、汝が意の作すに任す。我汝を待ちて七日七夜に至らん』。

爾の時世尊、阿奴彌迦耶聚落(Anumaineyya; Anupriyā)に在住したまふ。其の王、彼の七日七夜に於て、家事を營辦す。所謂、瓔珞もて以て自ら身を嚴り、園内に至りて五欲の樂を受くること、喩へば、人有り、他家に至りて大賓會に赴かんと欲するや、沐髮洗梳し、瓔珞衣服もて、其の身を莊校し、然る後始めて他家の内に往至するが如し。其の彼の釋王婆提唎迦も、園中に至りて遨遊戲樂せんと欲すること、他復是の如し。[一〇]

爾の時、復一の釋童子有り、跋濇婆(Bhrgu?)(〔隋〕に多眉と言ふ。)と名く。又一の釋童有り。宮毘羅(Ki-

【一〇】 釋種諸童子亦出家せんとす。

mbila)と名く。又一の童子有り。難提迦(Nandika)と名く。復釋童有り、名けて阿難といふ。釋童有り、提婆達多と名く。亦前の如く、其の身を莊嚴すること、皆悉く上の如くなり。彼の諸童子、相共に諸の衣服瓔珞を著け、復一の好剃除髮師を將て、四兵を嚴しめ已りて、迦毘羅婆蘇都城を出でて、阿奴彌迦耶聚落に詣向す。時に釋王婆提唎迦に、物の價直三百兩金なるあり、一百兩金を以て衣の直と爲し、一百兩金を瓔珞の直と爲し、一百兩金を鞍馬を嚴しむる直とす。其の彼の童子摩尼婁陀も、亦復是の如く、諸の釋童子、跋涪婆・宮毘羅・難提迦・阿難陀・提婆達多、此の如き等にも各各亦寶物あり、價直三百兩金あり、乃至、鞍馬を嚴しむる直に充用す。彼の諸童子の寶物の價直は合して二千一百兩金有り。

爾の時、彼の輩諸釋童子、迦毘羅婆蘇都城を出でて、各各馬を下り、身の瓔珞を解きて、皆彼の剃除髮師に投與し、口に各言ふ『此の諸瓔珞を皆以て汝に與へて、資生の本と爲さしむ。汝當に受用して以て活命生業の基と爲し、更に餘に求むること莫かるべし』と。瓔珞を付し已りて、阿奴彌迦聚落に詣向す。

二

時に剃髮師、是の如き念を作す『此の諸釋種は、威猛熾盛なり。謂ひて「是れ我、諸童子を將て、東西に逃走す」と言はん。是の因緣を以て、當に彼の來りて、我に逼切するを恐るべし。彼の諸童子の既に吐ける此の物を、我云何ぞ食せん。我今此の諸寶を受くるを得ず。彼既に是の如く豪富熾盛にして、大威勢有るに、猶ほ無量の資生、財寶王位の事を捨てゝ、捨家出家しぬ。況んや、我今何の故に從はざらん』と。彼の剃髮師、是の思を作し已り、彼の瓔珞財寶の物を將つて、樹技に懸著し、是の如き念を作す『若し見る有るもの、此の物を取るに任す。終に盜たらず』と。私に自ら念じ已りて、諸の釋童の所に詣向す。而して彼の諸釋童子、遙に剃髮師の來るを見、之に告げて言はく『汝、今何故に家に歸らざる』。時に剃髮師、諸の釋童に報じて、是の如き言を作す『諸聖子輩、

【二】剃髮師(優婆利なり)、又出家を欲す。

我今私に自ら此の如き念を作す、諸釋は强盛にして大威德有り、大力勢有り、謂ひて、「我、諸釋童子を將て東西に逃走す」と言はん。是の因緣を以て、當に我の身命に逼切するを恐るべし。汝童子の既に吐ける此の物を、我今云何ぞ方に之を食ふを欲せん。我が今の如きは、此の物を受けず。何を以ての故に。諸釋は强盛にして、大力勢有るに、猶ほ故に出家す、況んや我今出家せざらんやと。此の因緣を以て、我歸り去らず』。[一一]

爾の時釋種諸童子等、彼の語を聞き已りて、之に語りて言はく、『汝、今快く是の如き思惟を作し、是の念を作し已りて、家に歸らず。所以は何に。汝の言ふ所の如く、我が諸釋種は、威嚴熾盛にして、必ず此の語有らん。「我が童子を將て逃走せること疑はず」と。既に此の語有らば、彼定めて應に來りて汝の身命に逼るべし』と。

[一二]爾の時諸釋童子等輩、剃髮師と共に佛所に詣向し、佛所に到り已りて、佛足を頂禮し、却いて一面に住して是の如き言を作す、『世尊、今願はくは我等を放し、捨家出家せしめ、及び具戒を受けしめたまへ』と。復佛に白して言さく、『世尊、我等に出家を與へんと欲したまはゞ、先づ當に此の剃除髮師を度して、前に出家せしめたまふべし。何を以ての故に。此の剃髮師は、長夜勤苦し、我等に供承して曾て失有らず。是の故に先づ彼に出家を與へ、及び具戒を受けしめたまへ。彼、出家し已りて、後方に我等に出家を與へ、及び具戒を受けしめたまへ。故に我等をして、先づ當に此の剃除髮師を禮し、起動迎逆し、合掌恭敬して、尊重を示現すべからしめたまへ。所以は何に。我等釋種は、憍慢にして貢高なり。今此の人に因りて、我が諸釋をして廻意して憍慢の心を捨除せしめたまへ』。

爾の時世尊、既に先づ彼の剃除髮師を度し、及び具戒を受けしめ、然る後に、次に婆提唎迦釋王に出家を與へ、具足戒を受けしめ、自餘の各各に、次第に出家し、及び具戒を受けしめたまふ。[一三]時

【一二】諸釋、佛所に出家を許さる。

【一三】阿難と提婆の二人出家を許されず、よつて二人、毘耶離吒に請ひて其の弟子となる。

に、阿難と提婆達多の二人は、猶ほ故の如く出家するを得ずして、世尊の所より、廻還して雪山(Himavant)の下に至る。時に、彼の山下に一長老有り、姓は跋耶瑟吒、名けて僧伽といふ。其の人修行して、已に三果に住し、四禪を成就し、恆常に彼の雪山に依りて住す。爾の時、跋耶瑟吒僧伽、阿難等二人の來至するを見、之を逆へ慰めて言はく、『諸釋童子、何に因りてか此に來れる』。時に彼の二人、之に報じて言はく『我等、今樂んで出家せんと欲するが故に、此に來る。善い哉、聖者、願はくは我等を度して出家を得しめたまへ』。爾の時跋耶瑟吒僧伽、曾て提婆達多童子の行を觀察せず、其の智を練らずして、卽ち二人をして捨家出家し、及び具戒を受けしむ。

長老阿難、出家して未だ久しからず、空閑に在り、坐禪思惟して遂に是の念を作す、『若し優波陀(upādhyāya, 和上)、今必ず我の佛所に至るを許さば、我今亦須らく自ら世尊を見まつるべし』。時に彼の阿難、是の念を作し已りて、晨朝時に於て房より出で、往詣して彼の跋耶瑟吒僧伽の所に向ひ、其の足を頂禮し、却いて一面に住し、一面に住し已りて、長老跋耶瑟吒に白して、是の如き言を作す、『婆檀多(bhadanta, 大德)優波多、我今意に往きて佛に見えんと欲す。聽許するや不や』。爾の時跋耶瑟吒僧伽、彼の阿難に報じて是の言を作して曰ふ、『阿難、汝今若し時を知らば、往きて佛邊に向ひ、佛邊に到り已りて、汝當に我が爲に佛足を頂禮し、我が爲めに通傳して、世尊に少病少惱にて身安きや不や、起居輕利にして、行來化導に德を損せざるや、身體氣力、勝るゝこと常なるや不やを問訊せよ』と。爾の時阿難、優波陀の是の語を作すを聞き已りて、之に白して言はく、『優波陀の如く、敢て敎に違せじ』。遂に卽ち跋耶瑟吒僧伽の脚足を頂禮し、圍遶する三匝して、別辭して去る。

【一四】阿難、更に佛所に出家せんと欲して師に請ふ。

巻の第五十九

婆提唎迦等因縁品第五十八の下

爾の時長老提婆達多、其の阿難の往いて佛所に向ふを見、之に告げて曰はく『長老阿難、何處に去らんと欲する』。爾の時阿難、之に報じて曰ふ『我、今往きて佛を見まつらんと欲す』。爾の時長老提婆達多、阿難に報じて言はく『阿難、汝今若し必ず然かせんとならば、少時相待て。我も亦往きて優婆陀(upādhyāya,和上)に詣り、汝と共に相隨ひて、倶に佛の處に往かんと欲す』。

爾の時提婆達多、卽ち跋唎瑟吒僧伽の所に至り、其の足を頂禮し、却いて一面に住し、之に白して言はく『我、今意に往きて佛を見まつらんと欲す。唯願はくは尊者、慈愍して聽許せよ』。爾の時長老跋唎瑟吒僧伽、彼の提婆達多に報じて、是の如き言を作す『汝、若し時を知らば、往きて佛所に至り、我が爲に傳を通じ、佛足を頂禮して、世尊に問訊しまつれ。少病少惱にして、身安きや不や。起居は輕利に、行來化導して、德を損ぜざるや、身體の氣力、常に勝るゝや不や』。提婆達多、彼の跋唎瑟吒僧伽に報じて、是の如き言を作す『尊者の敎の如くにし、敢て違背せじ』とて、遂に卽ち頂禮し、圍遶三匝して、辭退して去る。

爾の時阿難、彼の長老提婆達多と二人相隨ひて、雪山下を發し、往きて佛所に向ひ、佛所に到り已るや、頭面もて足を禮し、却いて一面に住す。爾の時、長老提婆達多、佛に白して言はく『世尊、我昔如來に出家を求請しまつれるも、如來而も我に出家を與へたまはざりき。如來、今日我を見て出家を得ざらしめたまふべきか』。爾の時佛、提婆達多に告げて、是の如き言を作したまふ『提婆達多、汝、何事の爲めに出家するか。願はくは汝、得已りて背く有る莫かれ』。時に諸比丘、倶に佛に白して言さく『希有なり、世尊。世尊は、往昔恆常に彼の提婆達多に利益の事を爲すを敎へたまへ

るに、今反りて、佛に投じて、以て怨讎を爲さんとは』。是の語を作し已るや、佛、諸比丘に告げて是の如き言を作したまふ『汝諸比丘、但に今日のみ、我、彼の人提婆達多に利益の事を爲すを敎ふるに、反りて爲に、其の人、我を以て怨と爲すのみに非ず。過去世時にも、亦復是の如く、我利益を敎へたるに、反りて我を怨めり』。時に諸比丘、佛に白して言さく『世尊、此の事云何。願はくは爲に論說したまへ』。

[一]爾の時、佛、諸比丘に告げて言はく『我念ふに往昔久遠世の時、雪山下に於て二頭の鳥有り。同じく一身を共にして、彼に在りて住す。一頭を名けて迦嘍嗏鳥(Garuda?)といひ、一をば優波迦嘍嗏鳥(Upagaruda?)と名く。而して彼の二鳥、一頭若し睡れば、一頭便ち覺む。其の迦嘍嗏、又時に睡眠するや、彼の覺頭に近く、一果樹有り、摩頭迦(madhuka)と名く。其の樹、華落つるや、風吹きて、彼所の覺頭の邊に至りぬ。其の頭、爾の時、是の如き念を作しぬ「我、今復獨此の華を食ふと雖も、若し腹に入らば、二頭倶時に色を得、力を得、並に飢渴を除かん」。而して彼の覺頭、遂に卽ち彼の睡頭をして覺めしめず、亦告知せずして默して、彼の華を食ふ。其の彼の睡頭、後に覺めたる時、腹中飽滿して、咳噦の氣出づ。卽ち彼の頭に語りて、是の如き言を作す「汝、何處に於て此の香美微妙の飲食を得て之を噉食し、我が身體をして、安隱飽滿せしめ、我が所出の音聲をして、微妙ならしむるか」と。彼の頭報じて言はく「汝睡眠せる時、此處に我が頭邊を去る遠からずして、摩頭迦華果の樹有り。彼の時に當りて、一華墮落し、我が頭邊に至り、我爾の時、是の如き念を作す――今我、但當に獨り此の華を食ふべし。若し腹に入らば、倶に色と力とを得、並に飢渴を除かん――と。是の故に、我時に汝をして覺めしめず、亦語り知らせずして、卽ち此の華を食したり」。爾の時、彼の頭、此の語を聞き已りて、卽ち瞋恚嫌恨の心を生じて、是の如き念を作す、「其の得たる所の食を、我に語りて知らせず、我を喚びて覺まさずして、卽便ち自ら食へり。若し

【一】この本生、雜寶藏經に出で、倶命鳥とせり。

此の如くんば、我今より後、得る所の飮食を、我も亦彼を喚び覺して語知せざらん」と。

而して彼の二頭、一時に至りて遊行經歷するに、忽然として一箇の毒華に値遇し、便ち是の念を作す、「我此の華を食ひ、願はくは二頭をして倶時に死を取らしめん」と。時に彼の迦嘍嗏に語りて言ふ、「汝、今睡眠せよ。我當に覺めて住すべし」。時に迦嘍嗏、彼の優婆迦嘍嗏頭の、是の如き語を聞き已り、便卽ち睡眠す。其の彼の優波迦嘍嗏頭、尋いで毒華を食ふ。迦嘍嗏頭、既に睡より覺め已りて、咳噦の氣出づるや、是に卽ち此の毒氣有るを覺り、彼の頭に告げて、是の如き言を作す、「汝、向に覺めたる時、何の惡食を食ひてか、我が身體をして安隱を得ず、命將に死せんとし、又我をして、今語言麁澀に、音聲を作さんと欲するに、障礙して利あらざらしむるか」。是に於て覺頭、彼の頭に報じて言はく、「汝、睡眠せる時、我毒華を食ひぬ。二頭をして、倶時に死を取らしめんを願うてなり」。時に彼の頭、別頭に語りて言はく、「汝の爲す所、一に何ぞ太だ卒なる。云何ぞ乃ち是の如き事を作せるか」。既ち偈を說きて言はく、

「汝昔日睡眠せる時　我妙華の甘くして美味なるを食へるに　其の華風に吹かれて我が邊に在り
汝反りて此の大瞋恚を生じたり』　凡そ是れ癡人は願はくは見る莫からん　亦願はくは癡と
共に居るを聞く莫からん　癡と共に居るは利益無し　自ら損じ及以び他身を損ず」

佛、諸比丘に告げたまはく、「汝等、若し心に疑ふ有らば、彼の時の迦嘍嗏鳥の美華を食へるは、異見を作す莫かれ、卽ち我が身これなり。彼の時に優波迦嘍嗏鳥の毒華を食へるは、卽ち此の提婆達多これなり。我、彼の時に利益を爲作せるに、反りて瞋恚を生じ、今も亦復然り。我、利益を敎ふるに、反りて更に我を用つて怨讎と爲す」と。

二 爾の時長老婆提唎迦、既に出家し已りて、卽ち彼の時に於て、夏三月內に三通を成就し、摩尼婁陀は、天眼を成ずるを得、長老跋滔婆・長老因耆(?)・長老難提迦の此の諸人等は、羅漢果を證し、

【二】 Vin. CV. II.; Jātaka, I. p. 140. 參照。

阿難復須陀洹果を得、提婆達多は世間凡夫の神通を成就せり。

[三]爾の時、長老婆提唎迦、羅漢果を得て、或は樹林に在り、或は空閑なる房室に住在し、或は露地に住し、或は祇陀園林に住在して、晝夜三時に、常に是の言を唱ふ、『嗚呼快樂なり』。(是の如く三稱す。)

爾の時衆多の諸比丘等、佛所に詣向し、佛に白して言さく、『世尊、其の彼の長老婆提唎迦喬瞿彌子(Gotamiputra)は、世尊の法中に在るを樂まず、不喜不樂にして、恆常に昔の王位の時の事、富貴の樂を憶ふ。恆常に此の如き事を憶念する故に、或は樹下に住し、或は空房に住し、或は露地に在りて、三時に唱へて言ふ、「嗚呼快樂なり」と』。(是の如く三稱す。)

爾の時世尊、一比丘を喚び、之に告げて言はく、『汝來れ比丘、當に彼の婆提唎迦比丘の邊に往詣し、我が爲めに語りて、是の如き言を作すべし、「世尊、汝を喚びたまふ」と』。其の彼の比丘、白して言さく、『教の如くにし、敢て違しまつらず』。卽ち彼の婆提唎迦長老の所に往詣し、到り已りて告げて言はく、『婆提唎迦よ、世尊、汝を喚びたまふ』と。爾の時長老婆提唎迦、彼の語を聞き已りて、佛所に詣向し、到り已りて頂禮し、却いて一面に住す。

爾の時佛、婆提唎迦に告げて、是の如き言を作したまふ『婆提唎迦、汝實に我が法中に於て梵行を行ずるを樂まざるや不や。恆常に昔の王位の樂を憶ふや否や、彼を憶ふに由るが故に、或は樹下に在り、或は閑房に在り、或は露處に在りて、三時に唱へて言ふ「嗚呼快樂なり、嗚呼快樂なり」と。是の如くなりや不や』。爾の時、長老婆提唎迦、佛に白して言さく、『是の如し、世尊、是の如し跋檀多(bhadanta,大德)と、佛、復告げて言はく、『汝何の利を見て、或は樹下に在りて、乃至、三時に、是の如き言「嗚呼快樂なり、嗚呼快樂なり」と唱ふるか』。爾の時長老婆提唎迦、佛に白して言さく、『世尊、我昔家に在りて王位を治むるや、刹利灌頂し、七重の牆壁、我が宮殿を圍み、我等を守護せり。復象軍有りて、七重に守護し、復馬軍有りて、是の如く七重し、復車軍、及び步軍有

【三】以下。Vin. 同上。Thera-Jātakā. A.G. 842-865參照。

り、皆各七重す。倶に鎧甲を被り、手に戎仗を執る。所謂、弓・箭・刀・槊・矛・楯・金剛大杵・及び大鐵棒・釤鑱・鐵輪・三叉鉞斧の諸戎仗等もて、周匝して我を遶り、牆外に復七重の水塹有りて、是の如く守護し、是の如く障蔽せるに、猶ほ夜中に於て、若し諸聲を聞けば、心に恐怖を生じ、安樂なるを得ず、身毛皆竪ち、恆に慚愧を生じ、諸根變動したり。世尊、我今或は樹下に在り、或は閑房に在り、或は露處に在りて、夜種種の諸惡獸の聲を聞くも、恐怖有る無く、身毛竪たず、慚愧有ること無く、諸根變ぜず。是の故に我恆に獨坐思惟して、心に是の念を作す、「我、今大に利益の事を得たり。今、世尊は我が大師たり。自覺して說法したまふ。彼の法中に於て、我出家するを得、梵行を行じて、多く禁戒有り、我を攝受して、妙行人と成したまへり。我、今善く活命するを得、善く命終するを得ん。是の故に世尊、我王位の樂時、及び富貴なりし時を以て、今日出家の樂・空閑に坐する樂・覺觀の樂・寂定の樂・沙門等の樂に比し、此を憶念するが故に、或は樹下に在り、或は閑房に在り 或は露處に在りて、知足少欲に他より食を乞ひて、身毛竪たず、猶ほ山鹿の如く、心に自在を得、坐臥去住に、障礙有る無ければ、三時に唱へて、「嗚呼快樂なり」と言ひ、是の如く三稱す」と。

爾の時長老婆提唎迦、佛前に在りて、諸大衆に對して、偈を說きて言はく、

『我昔深宮裏に在るや　七重の墻壁甚だ高峻に　嚴に樓櫓及び却敵を治め　并に七重の隍塹等有り』　軍衆は宿衞して戎仗を執り　晝と無く夜と無く我を守護せり　是の如く種種に自ら防守せるも　身意は猶ほ故のごとくにて安寧ならざりき』　我、今世尊の前に在るや　一人の我を守護する有る無く　及以び空閑處に在り　或は樹下山林中に在り』　我佛子婆提(唎)迦の如きは　諸人各各相守護して　行住坐臥常に安樂なり　是の故に心に攀緣有る無し』　我、昔宮內にて大象に乘り　身に綃綵上妙の衣を著け　粳粮の甘美なる飯　羹臛調和の肉味等を食噉せり』　今は坐臥隨意に飾き　空閑にて身に掃糞衣を著け　愛を捨て苦の根本を拔除し　行ずる所有

らんと欲するや我が意の隨なり』

爾の時世尊、此の事に因るが故に、復偈を說きて言はく、

『若し人命を知れば惱を生ぜず　亦即ち是の命終を憂へず　若し能く勇猛なれば眞諦を見　苦海に墮すと雖も終に怖なし』　已に有愛を斷ぜる比丘等は　一切の物に於て悉く已に斷じ　生死煩惱皆滅盡して　是の如く復後有有ること無し』

爾の時世尊、諸比丘に告げて、是の如き言を作したまふ、『汝諸比丘、若し我が聲聞弟子豪貴の中に於て、捨家出家の最第一なるを知らんとならば、所謂即ち此の婆提唎迦比丘是なり』。爾の時諸比丘、佛に白して言さく『世尊、今、此の長老婆提唎迦は、往に昔日に於て、何の善根を造りてか、今釋種大豪貴の家に生れ、乃至、資財產業多饒にして、乏少する所無きぞ。復何の業を作してか、釋種を承繼し、王位に昇るを得たるぞ。復何の業をか作して、便ち出家を得て具足戒を受け、羅漢果を獲、世尊、復「汝諸比丘、若し聲聞弟子の中に於て、彼の豪望を捨てて出家せるは、婆提唎迦を最も第一と爲す」と記したまふぞ』。

[四]爾の時佛、諸比丘僧に告げて、是の如き言を作したまふ、『汝諸比丘、我念ふに往昔久遠の時、一貧人有り、乞を以て自活し、一城より波羅㮈城に至る。彼の城に至り已るや、其の城の有らゆる乞人見て、皆呵責して言ふ、「汝、何より來りて此に至れる」と。遂に遮して遊行して乞を告ぐるを聽さず。爾の時、彼の人、障礙有るを見て、是の思惟を作す、「我、彼の輩に於て過失有ること無きに、何の故に我の乞告を障ふるか」。

時に波羅㮈城に一長者有り、銅鉢を遺失す。時に彼の長者、銅鉢を求覓めて所在を獲ず。鉢を求むるに因るが故に、餘の一村に至る。時に彼の乞人、糞聚中に於て、彼の銅鉢を得、杖頭に掛け、將つて來往して波羅㮈城に入り、街より街に至り、巷より巷に至り、此の交巷より彼の交巷に至り、

【四】　婆提唎迦の本生。

此の隅角より彼の隅角に至り、口に是の言を唱ふ、「此の銅鉢は、これ誰の物ぞ。識る者は收め取れ」と。而して彼、處處東西に遊歷し、其の主を求覓めて了に得る能はず、既に主を得ず、便卽ち往至して梵德王(Brrhmadatta)に付す。乃至、長者、後に、人有りて、彼の糞中より一の銅鉢を得て、杖頭に掛け、將來して彼の波羅棕城に入り、街より街に至り、巷より巷に至り、口に唱へて、「是は誰の銅鉢ぞ」と言ひて、處處遊訪するも、主の所を知らず、既に主を得ざれば、便ち梵德に付したりと聞き、既に是を聞き已りて、梵德の邊に到り、到り已りて白して言はく、「大王、當に知るべし。前に乞人の、奉りし所の銅鉢は、これ我の物なり」と。時に、梵德王、使を遣はして、往きて彼の乞人を喚び、之に語りて言ふ、「汝、前に送れる所の銅鉢を、今此の長者、是は我が許のなりと云ふ。其の事如何」。彼の人、卽ち梵德王に白して言はく、「是の如し、大王、我本彼の銅鉢はこれ誰の物なるかを知らず、糞聚中に在るを、我既に得已り、卽ち杖頭に掛け、將來し往きて波羅棕城に入り、東西訪問せるも、主の處を知らず、主を得ざるを以て、遂に卽ち將來して大王に奉與し、王の所用に任せたるなり」。爾の時、梵德、彼の語を聞き已りて、心に大に歡喜し、彼に告げて言はく、「仁者、汝今我が邊に於て何等の願を乞はんと欲する。我、當に汝に與ふべし」と。而して彼の銅鉢を、其の長者に還す。

爾の時彼の人、梵德王に白して、是の如き言を作す、「大王、今若し必ず歡喜して我に願を與へんと欲するならば、願はくは王よ、此の波羅棕城の有らゆる乞人に於て、我を用つて王と爲せ」。時に梵德王、復彼に告げて言ふ、「今、何を用つてか彼の乞兒の與に王と爲る。但當に更に諸の餘の好き願、或は金、或は銀、或は國中最勝の村落を索め、用つて封邑と爲さんことを乞ふべし。我卽ち汝に與へん」。時に、彼の乞人、復王に白して言はく、「王、若し歡喜して我に願を與へなば、我今止前に願へる所を得んと欲す」。王、遂に奉じて言ふ、「汝の樂む所に任せん」と。

爾の時、彼の波羅㮈城に在りて、合して五百の乞兒有りて依住す。彼の乞願する者を、悉く喚んで集めしめ、之に告げて言はく、「我、今汝等の與に王と爲るを得たり。汝等、必ず當に我が處分を聽くべし」。時に諸の乞人、彼の王に問ひて言はく、「汝、今云何が我等を處分し、何事をか作さしむる」。時に彼の人言はく、「汝等、相共に或は我を捉りて髆上に置く有り、或は我を取りて背に負ふ者有り、自餘は皆悉く我が左右と爲り、圍遶して行け」。而して彼の五百の諸乞兒輩、彼の語を聞き已り、即ち從つて處分し、或は輿く有り、或は背に負ふあり、處處を遊行して、有らゆる飲食坐席の所に、即ち往きて彼乞ひ、乞ひ已りて將つて一處に向ひて分張し、共に食噉す。是の如き方便もて、多時活命す。

時に一人有り、屏處に、獨[五]摩呼茶迦(modaka)(〔隋〕に歡喜丸といふ。)を食す。爾の時乞王、其の人の邊より、彼の食摩呼茶迦を奪取し、奪ひ已りて將つて走る。其の王の徒衆、五百の乞兒、彼の王を逐ひ、走りて遠き處に至り、皆悉く疲乏し、已に疲乏し已り、悉く各廻還る。其の彼の乞王、身力壯健にして、走りて乏しからず。更に遠きに至り已り、頭を廻らして望み看るに、五百の乞兒、悉く皆見えず。既に見えざれば、一園内に入り、水を取りて手を洗ひ、一邊に坐して、彼の食を食せんと欲し、未だ食せざる間に、便ち悔心を生ず。我、今善ならず。我、今何の故に彼の人の邊に於て、其の食を奪取し、更に復我に隨從せる人輩を誑ける。此の食、既に多し。我食するも盡きず。若し世間内に諸の聖人有らば、願はくは我が意を知れ。此に來らば、我即ち分與せん」。

是の心を發し已るに、辟支佛有り、名けて善賢(Subhadra?)といふ。虛空の裏より、飛騰して來り、彼の人の前に在りて空より直に下り、其を去る遠からず。其の人、遙に彼の辟支佛の威儀庠序として行歩齊停し、擧動處を得、緩ならず急ならさるを見、是の如きを見已り、彼の辟支に於て、心に淨信を得、淨心を得已りて、是の如き念を作す、「我、往昔より受くる所の貧賤、及び現在

【五】摩呼茶迦。梵語、Modaka なるも、今は mahodaka なるべきか。涅槃經三十九に、酥、麵、蜜、薑、胡椒、畢茇、蒲萄、胡桃、石榴、桵子を混和せるものといふ。

は、皆悉く是の如き福田に値はず、此の如き人に於て、布施・恭敬・供養を行ぜざりしに由る。我、昔若し是の如き福田に値はば、今日應に斯の困頓に遭はざるべく、亦應に他人の逼切を被むらずして活命を得べし。我、今此の摩呼茶の食を將つて、仙人に奉上せん。未だ此の仙の受納するや不やを審にせず。若し受くることを蒙らば、願はくは我將來に此の貧賤困厄の身を免れんことを」。是の念を作し已り、即ち此の食、摩呼茶迦を將つて、是の仙人に奉る。然るに辟支佛に是の如き法有り、唯神通を現じて衆生を敎化するのみ、更に別の法なし。時に辟支佛、彼の食摩呼茶迦を受け取り、斯の人を愍れむが故に、彼の地方より空に騰りて去る。其の人、彼の辟支世尊の空に騰りて去るを見已り、歡喜踊躍、其の體に遍滿して、自ら勝ふる能はず、歡喜心を以て、指掌を頂戴し、遙に彼の尊辟支の佛足を禮し、是の禮を作し已りて、心に是の願を發す「願はくは我が此の身、未來世に於て恒常に是の如き世尊、或は、是に勝れたるに値遇せん。彼の世尊所說の法を、願はくは我一たび聞きて、速かに證解するを得ん。又願はくは我、未來世中に於て大威德豪族の姓家に在り、王と爲りて治化し、更に彼の貧兒の內に在ること莫からん」と。復是の願を作す「生生世世に、惡道に墮せざらん」と』。

佛、諸比丘に告げて、是の如き言を作したまふ『汝諸比丘、若し心に彼の時に於ける、波羅㮈城の乞兒の王の、辟支佛に摩呼茶迦を施せるは、此はこれ誰ぞと疑ふ有らば、異見を作す莫かれ。婆提唎迦比丘これなり。時に乞兒王、辟支佛に摩呼茶食を施せる、彼の業果に因りて、今釋種大豪貴族に生れ、乃至、資財乏少する所無し。復彼の時に於て、是の如き願を作せり「願はくは我來世に大威德豪族の種姓に於て、王と爲りて敎化せん」と。彼の業報に因りて、今釋種に於て、王位を受くるを得たり。又時に乞願すらく「願はくは我當來の生生世世、惡道に墮せざらん」と。彼の業報に因りて、曾て惡道の中に生墮せずして、恒に人天に生れ、流轉往反して、多く快樂を受けたり。

又時に復是の如き願を乞ひて言はく、「願はくは我來世に恒に是の如き辟支世尊、或は此に勝れたる者に値ひ、彼の世尊所說の經法を、願はくは我聞き已りて速かに知り速かに解せん」と。彼の業報に因りて、今我に値ひ、出家するを得て具足戒を受け、羅漢果を得たり。我又授記すらく、「我が聲聞弟子の中に於て、豪姓出家の最第一なるは、婆提唎迦比丘これなり」と。汝諸比丘、婆提唎迦は、昔是の如き善根の因緣を造り、是の如き善根の因を造れるを以ての故に、今豪姓釋種の家に生れ、大富大貴、乃至、資財乏少する所無く、釋種の中に於て王位を紹ぐを得、其の王位を捨てて出家するを得、具足戒を受けて、羅漢果を得たり。故に我受記す、「我が聲聞弟子の中に於て、豪姓の出家は、婆提唎迦比丘第一なり」と』。

六 其の彼の長老婆提唎迦、乃至、已に阿羅漢果を得て、恒に蘭若に住し、乞食して活命し、糞掃衣を著け、常に坐して臥さず、宜しきに隨つて鋪設し、唯三衣を持つのみにして、更に蓄積無し。一時に至り、依住して彼の舍婆提城(Śrāvastī)の阿蘭若樹林の內に在り。時に彼の長老、諸草及び樹葉を求覓めて、了に得る能はず。卽ち時に乾ける白象の糞を求覓め、聚めて以て鋪と爲し、上に坐具を鋪きて、結加趺坐し、端身正直にして、卽ち正念を得て、一夜を過ぐ。爾の時、長老婆提唎迦、晨朝時に衣を著け鉢を持し、往きて彼の舍婆提城に入りて往來乞食せんと欲す。

彼の時、城內に多く乞食せる諸人有り、乞ひて食を得已りて、其の城より出で、城を去る遠からずして、各各別に得たる所の食を食せんと欲す。爾の時長老婆提唎迦、遙に是の如き諸乞食人の、城より乞食して、既に彼の食を得、城を去る遠からずして、別に坐して食せんと欲するを見、遂に彼の邊に往き、默然として住す。爾の時一切の諸乞人等、是の如き念を作す、『此の比丘は、必ず我等に於て、憐愍する有らんを欲するが故に、來りて食を乞ふならん』と。是の念を作し已りて、各各自ら食する所の內より、少分を減取して、彼の長老婆提唎迦に與ふ。

【六】波提唎迦、乞食より食を乞ひ、波斯那王より招請を受けて之を謝す。

爾の時、憍薩羅國(Kośalā)の其の王波斯那(Prasenajit)、一大白象——其の象を名けて一分陀利(Ekapuṇḍarika)といふ——に乘騎りて、其の彼の城舍婆提より出づ。一大臣と共なり。其の臣を名けて[七]尸利跋陀(Śribhadra)(〔譯〕に德賢と言ふ。)といふ。時に憍薩羅國の其の王波斯那、遙に婆提唎迦の彼の乞兒より食を乞ひて食するを見、卽ち大臣尸利跋陀に告げて、是の如き言を作す、『尸利跋陀、此は何の比丘ぞ。乃ち乞兒より食を乞ひて喫するか』。爾の時大臣、審に更に熟婆提唎迦を看て、是の虛ならざるを知り、王に白して言はく、『大王、當に知るべし、此はこれ釋王婆提唎迦なり』。其の王、卽ち彼の大臣に告げて言はく、『若し此の如くんば、汝、白象を驅りて、彼の婆提唎迦の邊に向へ』。尸利跋陀、王勅を聞き已りて、王に白して言はく、『王の敎勅の如くにし、敢て違せじ』。王勅を受け已り、此の白象を將つて、王を其の上に乘せ、長老婆提唎迦の邊に詣向す。

時に憍薩羅國の其の王波斯那、彼の婆提唎迦の住處より遠からずして其の象上より下り、長老婆提唎迦を禮し、彼の足を禮し已りて、却いて一面に住す。時に波斯那憍薩羅國王、長老婆提唎迦に啓白して、是の如き言を作す、『阿梨耶(ārya,聖者)今何の故に乃ち是の如き貧賤の意を發して、乃ち此の如き貧人等の邊より、乞食して食するか』。爾の時、長老婆提唎迦、波斯那憍薩羅王に告げて、是の如き言を作す、『大王、我、今貧なるを以ての故に、彼より乞ふにあらず。我、今自ら[八]七種の寶財有るも、但我意に樂んで、貧人より食を乞ふのみ、又彼の諸貧兒輩をして、貧窮を斷ぜしめんと欲するが故に、從つて乞ふのみ。大王當に知るべし。我已に眼有り、但彼の無明なる衆生の爲に、眼目を開かんと欲するが故に、來り從つて乞ふのみ。復次に大王、我今已に一切の繫縛を脫したり、但彼の貪欲・瞋恚の爲に縛せらるる衆生に、解脫を得しめんとするを以ての故に、從つて食を乞ふのみ。大王、我今已に彼岸に度れり。但煩惱淤泥に溺るる所の衆生を拔脫せんが爲めの故に、彼より乞ふのみ。復次に大王、我已に無病の處を獲得せり。但彼の煩惱に病む所の諸衆生を治せんと欲す

【七】尸利跋陀。巴利傳には Śirivaḍḍha とし、中阿含には尸利阿荼 (Śrivaḍḍha)とせり。

【八】七種財寶。七聖財(信、戒、聞、慚、愧、捨、慧)のことなるべし。

るが故に、彼より乞ふのみ』と。時に憍薩羅國の其の王波斯那、復婆提唎迦に白して、是の如き言を作す『阿梨耶、我も亦貧にして七種の財寶無く、我も亦幽冥にして黑闇に住し、我も亦煩惱淤泥に沈溺せられ、我も今亦貪欲の病有り。願はくは阿梨耶、我を憐愍するが故に、唯悕はくは數數我が家に來至せよ』。爾の時長老婆提唎迦、波斯那憍薩羅王に告げて、是の如き言を作す『大德大王、此の如くすべからず』。是の語を作し已りて、王を捨てて去る。

摩尼婁陀品第五十九の上〔一〕

〔二〕又時に世尊、諸比丘の爲めに、諸法を演說したまふ。時に長老摩尼婁陀(Aniruddha)、睡眠して覺めず。爾の時佛、摩尼婁陀に告げて、是の如き言を作したまふ『摩尼婁陀、汝何ぞ此の法義の內に於て、是の如く睡眠する。汝、此の事に於て甚だ善ならずと爲す。汝起きよ、睡る莫かれ』。此より已後摩尼婁陀、更に睡眠せず、正に多時、睡るを得ざるを以ての故に、其の肉眼を壞り、唯天眼を以て、世間の色を觀ず。爾の時世尊、比丘に告げて言はく『汝諸比丘、我が聲聞弟子の中に於て、清淨梵行の最も第一なるは、所謂摩尼婁陀これなり』。

又一時に於て、摩尼婁陀、數數諸の衣裳等の綻べるを縫ひ、又時に五指に總て五針を持つ。爾の時長老大目犍連、其の所に詣向し、之に語りて言はく『摩尼婁陀、汝今我と共に遊行去來せよ』。爾の時長老摩尼婁陀、目連に報へて言はく『且く住せよ。且く住せよ。我が衣の成るを待て』。爾の時目連、復長老摩尼婁陀に語るらく『汝、今若し神通を以て縫はば、願はくは速かに成就せんことを。若し以て今意に成さんと欲する所の者は、亦願はくは早く成ぜんことを』と。摩尼婁陀、此の衣を縫ふ時、其の針の縫脫す。爾の時長老摩尼婁陀、獨自ら唱へて言はく『世間に誰か樂んで功德を作さんと欲するもの、我が與めに針を穿て』。

【一】摩尼婁陀(Maniruddha)。第五十五卷に阿尼樓陀(Aniruddha)に作る。第五十八卷に摩尼婁陀と作し、舊に阿尼婁陀に作ると註す。或は阿莬樓陀・阿那律・阿奴律陀・阿尼盧豆等に作る。本品、二個の佛說本生と、一個の摩尼盧陀自說の本生並に遺偈を收む。全品、Mahāvastu に缺く。

【二】以下、增阿、第三八品、第五經に同傳あり。

爾の時世尊、獨房内に在まして攝心坐禪し、乃ち清淨の天耳を以て、此の摩尼婁陀の是の如き語を作せるを聞きたまひ、是の語を聞き已りて、譬へば壯士の臂を屈伸する如き頃に、卽ち本處に於て其の身を現ぜずして、往きて長老摩尼婁陀に至り、前に住し已るや、針を取つて貫きたまふ。爾の時長老摩尼婁陀、問ひて言はく『これ、誰か我が爲めに針を穿てる』。佛、之に告げて言はく、『摩尼婁陀、是我汝の爲めに針を貫穿せるのみ』と。

爾の時一切の諸比丘等、是の語を傳聞して云ひて道はく『世尊は彼の長老摩尼婁陀の爲めに、綖を以て針に穿ちたまへり』と。既に是の語を聞きて、各各思惟すらく『世尊だも猶尙ほ彼の清淨梵行の人の爲めに、辦ぜざるを佐助したまふ。況んや復我等、何の故に默然として、相助けざらん』。因りて爾より已後、諸比丘僧の所作有る者、各各相助けぬ。

時に諸比丘、此の因緣を以て、佛の所に往詣して白して言さく『世尊、其の彼の長老摩尼婁陀は、往昔の日に於て、何の善業をか植ゑて、今出家するを得て、具足戒を受け、羅漢果を得たるぞ。世尊、復記して言はく、「諸比丘、我が聲聞弟子の中に於て、淨天眼を得たる最第一の者は、所謂長老摩尼婁陀比丘これなり」と』。是の語を作し已るや、佛、一切の諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、我念ふに、往昔過去久遠無量阿僧祇劫を超えて、佛有りて出世したまふ。名けて然燈(Dīpaṃkara)如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊といひまつる。彼の佛世尊、諸比丘の爲めに說法の時、種種に天眼の事を讃嘆す。爾の時、一居士の子の、名けて大財(Mahādhana?)といふ有り、彼の會に來集し、衆内に坐して其の法を說くを聽く。彼の居士の子、既に法を聽き已りて、是の思惟を作す、「我、今復父母に捨家出家を諮らずと雖も、我、今但未來世に天眼を得んが爲めの故に、諸善根を造るべし」と。是の念を作し已り、脂油を備辦して、其の百酙を得、然燈佛無上正眞等正覺の所に於て、燈を然して供養し、心に是の願を起す、「願はくは我來

【三】 酙。俗の斗の字。

世に是の如き佛に値ひ、彼の佛の說法を、速かに證解するを得て、彼の世尊の聲聞弟子の有ゆる天眼に於て、願はくは我第一たらんを」と。又是の願を發す、「生生世世に、惡道に墮せざらんを」と。爾の時、然燈如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊、彼の居士の子の大財に告げて言はく、「未來世に佛有り、名けて釋迦牟尼（Śākyamuni）・多他伽多・阿羅訶・三藐三佛陀といひ、十號具足す。彼の世尊の聲聞弟子に於て、天眼を得るもの、汝は當に第一なるべし」と』。

爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝等比丘、或は心に疑ふ有らんも、彼の時の然燈佛の邊の大富居士の子の大財は、これ卽ち摩尼婁陀これなり』。爾の時佛、復諸比丘に告げて、是の如き言を作したまふ、『我念ふに、往昔久遠の時、一賊人有り、闇夜中に於て、行きて小徑に在り、竊盜を爲さんと欲するや、半路に至りて、其の鞋の綱斷す。爾の時彼處に、一辟支佛の舍利塔有り、其の塔の所に於て、時に一人有り、燈を然して福を求め、供養承事す。而して彼の燈の油、將に盡滅せんと欲す。其の賊、彼に至り、燈の盡きんとするを見て、彼の斷えたる鞋の綱を續けんと欲するが爲の故に、遂に其の脂を增益し、又箭の鏃を以て燈の炷を挑げ出す。爾の時彼の燈、還た明の熾なるを得ぬ。爾の時彼の賊、燈の明なるを見已り、邊を去る遠からずして、彼の鞋の綱を續け、彼の明に因るが故に、彼の塔を見るを得、彼の塔を見已りて、遂に心の淨を得、心の淨を得已りて、是の如き願を發す、「此の塔は、これ誰のぞ。願はくは我來世に當に此の塔の本體世尊、或は此に勝れたるに値ふべし。若しくは彼の世尊所說の法を、願はくは我聞き已りて、速かに知解するを得、彼の世尊の有らゆる聲聞弟子の中に於て、天眼を得るものの最も第一たらん。又願はくは當來生生世世に、惡道に墮せざらんを」と』。

巻の第六十

摩尼婁陀品第五十九の下

爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝諸比丘、彼の時の賊人、辟支佛塔の前に在りて、燈明を益せしは、其の人是れ誰ぞ。異見を作す莫かれ。摩尼婁陀比丘これなり。摩尼婁陀は、往昔大居士の子と作り、名けて大財といふ。後に復賊盜を行ふ人と作り、辟支佛舍利塔中の爲めに、燈油を添益し、淸淨心を以て、是の如き願を乞へり「願はくは我來世に惡道に生るる莫からんを」と。彼の業報に由りて、生世曾て惡道の中に墮せず。恒に天人に、往反して樂を受け、而して彼の時に於て、復此の願を乞へり「願はくは我來世に恒常に是の如き世尊に、或は此に勝れたるに値遇し、彼の說く所の法を、願はくは我速かに解せんを」と。彼の業報に由りて、今我——是の如き世尊——に値ふを得、復我が邊に於て、出家を獲得し、具足戒を受けたり。而して彼の時に於て、復是の願を乞へり「願はくは彼の世尊の有らゆる弟子の中に於て、天眼を得ん者、我第一たらんを」と。彼の業報に由りて、今我が法の聲聞弟子の天眼を得たる中に於て、其の第一なり。汝諸比丘、摩尼婁陀は、昔是の如き種殖せる善根有り、彼の業力に由りて、今出家するを得、具足戒を受け、羅漢果を得たり。汝諸比丘、我れ復記を授けて「我が聲聞弟子の[一]中に於て、摩尼婁陀を最も第一と爲す」と』。

[二]復一時有りて、世尊、波羅㮈城の舊仙居處の鹿野苑中に在ます。彼の時、天雨ふる。長老阿難、佛所に詣向し、佛足を頂禮し、却いて一面に住し、一面に住し已りて、白して言さく、『世尊、今日天雨ふりて、飮食有る無し。當に何の計を作してか、諸比丘をして一日夜を過さしむべき』と。佛、阿難に告げたまはく、『汝、愁ふる莫れ、摩尼婁陀比丘は、現在の福力甚だ强し、今日比丘は、爾當に一日一夜を過すを得べし』と。

【一】恐らくは「天眼を得たる」を脫せるならん。
【二】この傳說他に見えず。

爾の時長老摩尼婁陀、佛所に詣向し、到り已りて頂禮し、却いて一面に住し、佛に白して言さく、『世尊、今我が微供を受けたまへ。若し我が食を食せば、一切の諸比丘等をして一日夜を過さしむるに堪へん』。時に世尊、默然として受許したまふ。爾の時、長老摩尼婁陀、晨朝時に衣を著け鉢を持し、往至して彼の波羅捺城に入り、其の城に入り已るや、未だ曾て乞を告げず、亦更に親舊識知有る無し。爾の時に當りて、忽然として卽ち五百の釜食有り、來りて彼の前に至る。爾の時長老摩尼婁陀、譯時に彼の五百の釜食を送りて、鹿苑中に向ひ、卽ち諸座を敷き、敷設已に訖るや、往いて佛に白して言さく、『世尊時至り、飯食已に辦ず。唯願はくは就きて食したまはんを』。爾の時世尊、日の東方に在るや、衣を著け鉢を持し、諸比丘と共に食堂に來至したまひ、敷設せる所に次第して坐す。爾の時長老摩尼婁陀、佛及び僧の、次第して坐し已るを見、如上五百の釜食を奉持して、佛及び僧に施し、飽滿を恣にし已りて、然る後自ら飯食を食し、亦訖りて、諸比丘と共に講堂に詣向し、座を敷きて坐す。

三 爾の時長老摩尼婁陀、坐し已りて、卽ち諸比丘に告げて言はく、『諸の長老輩、稀有なり稀有なり、未だ曾て此の如き事、乃ち此の如き多大の果報・多大の功德・多大の威勢有るを見ず。所以は何に。諸長老輩、我念ふに往昔久遠の時、波羅捺城に一貧人有り、資財有ること無く、倉庫を立てざりき。彼の時、波羅捺城に辟支佛有り、依倚して住し、婆斯吒(Uparista)と名けぬ。

爾の時に當り、其の城、穀貴く、人民飢饉して、乏少する者多かりき。其の城の內外、多く人の死する有り、唯白骨の處處狼籍たるを見るのみ。彼の時に於て、諸の出家人、食を乞ふも得難く、飢に逼らるるを以て、道を修する能はざりき。爾の時に當りて、彼の辟支佛、晨朝時に於て日の東方に在るや、衣を著け鉢を持ちて、波羅捺に入り、次第して乞食し、彼の城を遍歷せるも、全く得る所無かりしかば、本の如く鉢を洗ひ、還た城を出でて去りぬ。我爾の時彼斯吒辟支佛尊を見、彼の

【三】 この阿尼盧陀自說の本生、中阿說本經、並に巴利長老偈註(偈九一〇―九一九)に見ゆるも、伏藏發見並に梵德王に關する項を缺く。又、辟支佛の名を、中阿は「無患」とし、長老偈は Uparittha とす。漢譯は他に之を「婆利吒」(Uparista)とせるあり(增阿三八・七)。又、古來世時經は「和里」とす。

邊に詣向し、到り已りて白して言はく、「善い哉、大仙、此處に食を乞ひて、頗し得たりや不や」。彼の尊、我に報じて、是の如き言を作せり、「仁者、我今食を乞ふも得ず」。我、爾の時復彼の尊に白して、是の如き言を作す、「尊者、若し然らば我が家に來至したまへ」と。時に家內に唯一升の稗子の熟飯有り。我卽ち彼の辟支佛尊を喚びて、舍內に入らしめ、彼の稗飯を將つて、以用つて奉施せり。時に、辟支佛、我が施を受け已りて、意に隨ひて去りぬ。

我、彼の時薪柴を採らんが爲めに、出でて城外に至り、尸陀林（Sita-vana）と相去る遠からずして、柴木を採取せるに、彼の林に一白骨の屍骸有り、忽然として起き來り、我が項を抱きて住せり。我、彼の時彼の屍を脫せんと欲し、慇懃に力を用ひたるも、脫するを得る能はざりき。我、彼の日に於て日落ちて西下し、將に沒せんとせる時、死屍を抱持して、來りて城內に入る。我、城に入る時、人我を見て、我に告げて言はく、「咄、人何の故に此の骨屍を將つて、城內に入る」。我、彼に報じて言はく、「是の諸人輩、我、今力を盡して、此の屍を脫せんと欲するも、了に得る能はず。汝等、若し能く脫するに堪ふるもの有らば、當に我が爲めに脫すべし」。時に彼の人輩、詳に共に此の骨屍を捉へ、牽挽盡力して脫せんと望むも、亦得る能はず。我、時に漸漸に家內に至り、彼の白骨の死屍を脫せんを望み欲するや、彼の白骨悉く變じて金と成り、自然に地に墮ちぬ。我、爾の時是の如き念を作せり、「我は此の金を以て、獨り用ふべからず」。

是の念を作し已りて、卽ち彼の梵德王（Brahmadatta）の邊に詣向して、白して言はく、「大王、當に知るべし。我、今地より伏藏を得たり。大王、受け取りて、用つて國寶と爲せ」。時に梵德王、諸の左右を喚び、之に勅して言はく、「汝等當に須らく此の人に隨ひて去り、其の人の指授するを、悉く皆受け取り、將來して此に至れ」。爾の時左右、王勅を聞き已り、卽事に我と共に來りて家內に至る。我、卽ち金を以て、彼の使人に示せり。爾の時使人、還死屍の白骨の故の如くなるを見、見已

りて我に謂ふ、「咄なる哉、癡人、汝、癲狂ならずや。何の故に、彼の死屍の白骨を持て、以て金と爲せるぞ』。而して彼の使者、還りて王の所に至りて、具に前事を説けり。

我、後時に復王の邊に至り、王に白して言はく、『大王、當に知るべし。我、伏藏を得たるは、事實にして虛ならず。惟、願はくは大王、早く納受を爲せ」。時に梵德王、遂に卽ち自ら其の家內に往至して、彼の金藏を見るに、還たこれ白骨なること、本の如くにて異らざれば、復我に告げて言ふ、「咄なる哉、癡人、汝、癲狂に著せり。何すれぞ此の白骨の死屍に於て、金想を作すか」。我、復彼の梵德王に白して言はく、「大王、當に知るべし。此は實に金なり。是は死屍に非ず」と。是の如く再三、是の語を作し已る。我、爾の時手に彼の金を執りて、是の誓言を作す、「若しこれ金寶ならば、我が爲めに來りて善業の報を作せるものなり。願はくは梵德王も、亦是の如く見んことを」。此の誓を作し已るや、時に梵德王、此の死屍を看るに、還た我の如く、金寶を見ること異らず、卽ち我に告げて言はく、「善い哉、仁者、汝、何等の善業の因緣を作し、曾て何神に事へ、何天を供養し、何仙を供養して、能く汝に是の如き願を與へたるか」。我、爾の時梵德王に白して、是の如き言を作せり、「大王、當に知るべし。一仙人有り。我、曾て此の仙人に食を供給せり。必ず應にこれ彼の神力の致す所、我をして今日是の果報を得しめたるなるべし」。時に、梵德王、我に告げて言はく、「汝、是の如き善業を造作せるを以ての故に、今日此の果報を得たり。汝の此の果報は、人能く奪ふ無し。今日より後、疑慮を須ひず、意に隨つて用ひよ」と。

諸長老輩、我、彼の時、正に彼の辟支佛に一食を布施せるの業を以て、現に爾の時卽ち果報を獲、須むる所の資財、意に隨つて卽ち辦ぜり。正に彼の一食を施せるを以ての故に、七反、三十三天に生れて其の福報を受け、乃ち彼處三十三天に於て帝釋王と作り、復人中に於て國王と爲り、幷に復轉輪聖王と作るを得て、四天下を治し、世界主と爲りて、世間を護持し、七寶具足し、乃至、降服

し、如法に治化せり。彼の一食を布施せる果報に因りて、命終して天に生れ、天より下生して、人間に在り、命盡きて、復天上に生るるを得、流轉是の如くして、更に雜生せず。我が所生の處、恒に最勝上妙の宮殿を得たり。

若し人間に生れては、豪貴の家に生れて資財豐足し、乃至、一切乏少する所無く、在天の身が多く快樂を受くるが如く、人間に下生するも、亦復是の如し。一食を施せるを以て、彼の果報に因りて、今釋種に生れ、我が生れし日、諸天下來して、五百の寶衣を將て、我が身上を覆ひ、地下に復五百の伏藏有りて、自然に現出せり。皆一食を布施せる果報を以てなり。我の父母、我が爲めに三種の宮殿を造作せり。一は夏坐に宜しく、二は冬坐に宜しく、三は春秋二時の居坐に宜し。彼の食を施せる果報因緣を以てなり。我、既に釋種の家に生る。我が家、爾の時遂に卽ち日別に漸漸增長せり。所謂、穀米、倉廩に盈溢し、眞珠・琉璃・珊瑚・虎珀・金・銀・玉等の無量の珍寶、二足四足、尠乏する所無かりき。又彼の時に食を施せる果報を以てなり。我、園苑に在るや、我が母爾の時我を試みんと欲するが故に、空の器を辦具し、衣を以て覆蓋し、送り來りて我に與ふるに、其の半路に至るや、卽ち諸天の種種の飮食ありて、悉く其の器に滿ち、彼の食香美にして大に氣力ありき。又食を施せる果報の力を以ての故なり。父と共に相隨ひて、田作を檢校す。爾の時に當りて身に飢渴を患へ、遂に往きて水に赴き、掬び取りて飮まんと欲するや、其水變じて天妙の甘露と成れり。又彼の一食を施せるを以ての故に、果報成熟せしなり。今、來りて此の波羅㮈城に入り、未だ曾て彼と委曲相識らざるに、自然に卽ち五百の釜食有りて我が前に來る。我、彼の食を受け、林中に遣送して、佛及び僧を請じて、此の食を供奉し、悉く佛・僧大衆をして充飽せしめたり。彼の業報に積りて、我四事に於て、乏短する所なし。我、彼の食を施せる果業因緣にて、世俗の樂に於ても、亦乏くる所無く、今出家するに、出家の樂に於ても、亦皆具足す。彼の食を施せる果報の熟せるを以

ての故なり。今、生死を斷じ、梵行の力を得、作す有る所の者、皆悉く已に辦じて、後有を受けず、無畏處に至り、前所に至りて、當に涅槃を得べく、涅槃を得已りて、樂無く苦無く、自然に證知せん。諸長老輩、我、彼の時に於て、乃ち是の辟支世尊を識らざりき。我若し決定して、辟支佛と知らば、我應に尋時更に勝果を求め、大威德を求むべく、應に無上廣大の果報を求むべし』と。

爾の時、長老摩尼婁陀、前語を說き已るや、重ねて偈を說きて言はく、

『[四]我自ら往昔の時を思惟するに　依住して波羅榛に在り　薪柴を負賣して以て業と爲し　尊者婆斯吒に値遇し　見已りて一飡食を布施せり』　故に豪貴の釋種姓に生れ　其の名を號して尼婁陀といふ　善く音聲を解し復能く舞ひ　拍手・歌詠・諷頌等　幷及に一切の諸技藝あり　我今已に自ら宿命　及以び昔世所生の處を知る』　三十三天上に往き　彼に七反往來して生じ　彼處に或は釋天王と作り　及以び自在天宮內に　一切我の造作する所に隨へり』　是の如く諸天を治化し　復七反を經て人主と作り　灌頂成就の刹利王として　自在の大力もて衆を降伏し　刀兵諸戈仗を行はず』　如法に治化せる大地中に　多く無量の諸珍寶有り　我が境界に於て悉く豐饒　所生の家中は大巨富にして　資財增長して數有る無く　諸人中に於て最も首たり』　世間の五欲悉く具備し　七寶諸珍闕少する無し　皆我が是の如き業を作せるに因り　曾て惡道中に生ぜず』　今釋種に於て出家するを得　三解脫甘露の處を得たり　我は何の爲めの故に出家を得て　家業を棄捨して此に來るとならば　正に我が彼の利益を獲たるを以て　故に來りて佛世尊の恩を報ずるなり』　世尊は我が機の熟せる時を知りて　我が爲めに無常の法を演說したまふ　[五]若し意所幻化の身あれば　神通もて自ら來りて我が所に至りたまひ』　若し我が心中に疑惑有れば　是の如く皆悉く我が爲めに解きたまふ　佛所說の法には分別無く　還た我が爲めに無別の法を說きたまふ』　我今彼の實語を聞くを得　如法に愛樂して奉行し　是の如くして卽

【四】巴利長老偈、八九二—九一九偈に相當す。

【五】（原文）若有意所幻化身、神通自來至我所。意所幻化身とは、空無常の世界に於ける現身は、意によつて現はれたる幻化のものといふ意なるべし。

三解脱を得て　即ちこれ仰いで諸佛の恩を報ず』　我今此の命の終るを樂まず　亦此の壽命を愛樂せず　但我が受くる所の業の至る時　正念思惟して當に壽を捨つべし』　我未來生死の處を知り　衆生往來の處をも亦知る　既に此處の命終を知り已り　亦彼處に往至して生ずるをも知る』　毘舍離の境なる竹林村　我彼の林に於て當に壽を捨つべく　彼の林中の蔚茂せる處に漏盡きて其の下に涅槃に入らん』

爾の時世尊、淨天耳の人耳に過ぎたるを以て、彼の長老摩尼婁陀の此の過去造業の因緣、[六]今是の如き果報を獲得せるを說き、復妙偈を以て之を陳說せるを聞きたまひ、是の事を聞き已りて、讚歎して欣然としたまふ。

[一]阿難因緣品第六十

[二]又一時長老阿難(Ānanda)、諸梵行大德人の輩に、彼をして世尊に奉侍せしめよと勸請せられ、爾より已來、心を盡し力を盡し、意行調適にして、如來の所說を悉く皆受持し、如來の口より聞く所の事、或は世間の事も、或は出世の事も、悉く能く受持して永く忘失せず。若し人有り、來りて疑ふ所を諮問すれば、亦悉く能く彼の心をして歡喜せしむ。是の因緣を以て、世尊、衆を集め、諸比丘に告げて、是の如き言を作したまふ、[三]『汝諸比丘、我が聲聞弟子の中に於て、多聞利智なるは、侍者の內、阿難比丘これ其の人なり』。時に諸比丘、佛に白して言さく、『世尊、長老阿難は、往昔の時、何の善根を造りてか、彼の善根に藉りて、今釋種大豪姓家に生れ、巨富饒財にして大に勢力有り、乃至、一切乏少する所無きぞ。復何の業を以てか、今出家を得て、具足戒を受け、諸の聖法を得、若し世間・出世間の事を聞くも永く忘失せず、若し諸人有り、來りて疑ふ所を問ふも、亦悉く能く彼の心をして歡喜せしめ、世尊、復記して諸比丘に「若し我が聲聞弟子の、多聞智慧・強記不忘

【六】今。麗本は今昔とし、宋元明三本は今者とす。今は後に從ふ。

【一】阿難の本生譚二個と逸事一個とを揭ぐ。梵文Mahāvastu に見えず。

【二】阿難が佛の侍者となりたるは、世尊の世壽五十五歲、成道第二十年目のこととす。中阿含侍者經、長老偈註(Th. 1018 註)等を參照。長阿含遊行經に自我得侍二十五年とあり。

【三】多聞第一の記は、A.N. 1.14; 增阿四・七等に見ゆ。

の最第一者を知らんとならば、これ卽ち阿難比丘これなり」と謂ひたまへるぞ』。

是の語を作し已るや、佛、諸比丘に告げたまはく、『我念ふに、往昔過去世中久遠の時、還此處波羅棕城に、王有りて治化せり。名けて梵德(Brahmadatta)といふ。彼の王、爾の時二子を生む。一を喜根(Nandindriya?)と名け、二を婆奴(Bhānu?)(〔隋〕に月といふ。)といふ。二子の內、喜根を大と爲す。其の大子は、本性調善し、賢直柔和にして、多く慈心有り、諸罪を畏懼し、愛有を厭離す。其の彼の王子、其の城內を見るに、諸王事に逼切せらるるが爲めに、懸官苦惱して、殺害窮まり無く、多く、繫閉有り——所謂、枷鎖・杻械・囹圄・地牢の固禁、手足を斬截し、其の耳鼻を劓き、其の眼目を抉る——既に此の事を見て、遂に此の念を作す、「我の父王の百年已往、我が身云何ぞ當に王位を治すべき。我、今知る、是の如き王位を用つて、何事をか作さんと欲する、及び我が身命、亦知る何の用ぞ。所以は何に。今、一切の諸衆生輩を見るに、種種の苦其の身を逼切するを以てなり。我の如きは、今捨家出家して修道するに如かず」と。

是の念を作し已りて、父母の邊に詣り、白して言はく、「父母、我捨家出家して修道せんと欲す」。爾の時父母、其の子に報じて言はく、「汝の身はこれ我が所愛の子にして、心意を離れず、瞻看して厭くこと無し。我等寧ろ死すとも、汝に別るる能はず。我等、但身命をして存在せしめ、終に相放たじ」。是の如く再過す。喜根童子、父母に白して言はく、『父母、當に知るべし。我今必定して捨家出家せん。唯願はくは父母、哀愍して我を許せ」。是の如く數數父母に諮請す。而して彼の父母、遂に卽ち捨家出家するを聽許し、之に告げて言はく、「汝はこれ我が子、汝が樂む所の如くにし、汝の意に隨はん」と。

爾の時、梵德喜根王子、其の父母の、出家するを得ることを許したるを以て、他日に至り、捨家し、剃髮して、次第に修道し、緣覺を悟りて、能く神通變化の事を作し、光を放ち水を放ち、天を

廻り、地を動かし、雲を興して雨を致す、是の如き等の事、皆悉く能く辦ず。彼の辟支佛、是の如き念を作す、「我、何の事をか爲して、出家するを得、是の如きの事を、我今已に辦じ、已に己が利を得、所作已に辦ぜるぞ。我、今本生の地に往く可し。父母諸眷屬を憐愍するが故に。及び餘の衆生に、福田を作らしめん」と。

爾の時、喜根辟支世尊、次第に遊行して、波羅㮈に至り、彼の國に至り已りて、彼の城の父王梵德の菴羅林內(āmra-vana)に依住す。爾の時梵德、他の喜根童子が、已に大仙と成りて此に還來し、我が境界に住すと說くを傳へ聞き、「我、今往きて喜根の邊に至り、彼に顯現して、問訊慰喩すべし」とて、時に梵德王、大勢力を以て、威風を嚴盛にし、神德を示現して城より出づ。四兵衆有りて、前後に圍繞す。

爾の時、喜根尊者辟支、遙に父の來るを見て、是の念を作す、「此の諸人輩、梵德王等は、大に威力有りて、我慢貢高なり。我若し宜しきに隨ひて彼の前に在らば、梵德王等、必ず我を敬せざらん」。是の念を作し已りて、虛空に飛騰して、諸の神變を現じ、坐臥し經行し、半身より烟を放ち、半身より火を出だし、身上に火を放ち、身下に水を出し、是の如き種種の神通を示現す。時に梵德王の諸臣百官、彼の尊者大聖辟支の、虛空に飛騰して諸の神變を現ずるを見、彼等見已りて、是の如き念を作す、「我の童子、王位を捨てたりと雖も、今出家するを得て、已に大仙を成じ、大威德有り、大神通有り」。其の心、爾の時、卽ち大に歡喜し、踊躍すること無量、其の體に遍滿して、自ら勝ふる能はず。彼の喜根辟支佛の所に詣らんとて、王既に漸く進むや、佛、復空より下る。王、其の所に到りて、歡喜敬仰す。時に辟支佛、下りて地上に住して、便卽ち敷ける所の座に坐す。爾の時梵德、辟支の邊に到りて、佛足を頂禮し、却いて一面に住す。一面に坐し已るや、時に辟支佛、少しく諸法を說き、王をして歡喜踊躍すること無量に、善事を顯現せしむ。爾の時大王、辟支佛よ

り法を聽聞し已り、歡喜踊躍して、辟支に白して言はく、「善い哉大仙、今我が請を受け、常に我が家に住せよ。我、尊者の爲めに、當に伽藍・經行・房窟を作り、四事の供養もて、心の樂む所、悉く皆辦與すべし。若し諸の衆生を哀愍せんと欲するが故に、村落城邑に行きて食を乞はんと欲せば、意の行く所に任せ、我障礙せず」と。辟支佛尊、默然として父王の所請を受く。時に彼の王、彼の尊者喜根緣覺の、默然として受請せるを見、即ち種種の諸供養の具を辦じ、經行・房窟・四事の供養を、悉く持ちて施與し、自餘の須むる者も、一切辦給す。

爾の時喜根辟支仙人、諸衆生を憐愍せんと欲するが爲めの故に、城に入りて乞食す。此の如き時、即ち城に入るを得るや、其の月(Bhānu)王子、日別に喜根仙人辟支佛の邊に至り、承事供養し、諸法中に於て、心に疑ふ所有れば、時時に往きて彼の辟支佛に問ふ。其の辟支佛、或は婆奴王子の所問を被むるも、默然として答へず。唯諸指に於て、其の光炎を出すのみ。爾の時婆奴、是の如き念を作す、「此の辟支佛は、大に神通有るも、才辯無し」と。爾の時、喜根尊者辟支、婆奴に告げて言はく、「婆奴王子、汝來りて出家せよ。汝、今若しそれ出家するを肯んぜずば、我、定めて汝が命終の後、必ず惡道に墮せんを知る。若しそれ出家せば、汝も亦復當に大仙を成就し、大神通有るべし」と。

爾の時婆奴、父母に詣向し、是の如き言を白す、「善い哉、父母、喜根仙人は、今已に出家す。我、今意に隨ひて出家せんと欲す。唯願はくは父母、哀愍して我を許せ」。而して彼の父母、遂に許可せず。婆奴王子、猶ほ故のごとく數數、彼の喜根仙人の所に至りて、承事供養す。其の辟支佛、復數數彼の婆奴王子に語る、「汝、當に出家すべし」。婆奴王子、復兄に報じて言はく、「父母は今日決して我が捨家出家を聽さず。事云何せん」。爾の時、王子婆奴の面上の色相、七日內に必ず當に命終すべきを出現す。爾の時喜根辟支仙人、婆奴に告げて言く、「汝來れ、婆奴。汝、必ず當に須らく捨家出家

すべし。何を以ての故に。汝が熟相、七日内に於て、必ず當に命終すべきを現ずればなり」。爾の時婆奴、父母の邊に至り、白して言はく、「父母、唯願はくは我を放ちて捨家出家せしめよ」。爾の時、喜根辟支世尊、亦卽ち自の父母の邊に詣向し、白して言はく、「父母、汝等當に婆奴を放ちて出家せしむべし。所以は何に。其の相に、七日の內に定めて當に命終すべきを出現し、此の因緣を以て、父母必ず當に彼と別離すべければなり。[四]是の定を以ての故に、寧ろ出家を放し、法內に在りて命終を取らしめよ。家に在りて命終を取らしむる莫かれ」。父母、報じて言はく、「婆奴王子が、七日の內に必ず命終を取りて、我と別るとならば、我今當に捨家出家するを許すべし」。婆奴王子、爾の時に當りて、卽ち鬚髮を剃り、袈裟衣を著け、其の出家し已るや、七日中供養恭敬して彼の喜根に事へぬ。

時に辟支佛、威儀を教授し。六日を過ぎ已りて其の七日に至り、定めて命終するを知り、彼を哀愍するが故に、坐より起ちて、虛空に飛騰し、經行し坐臥し、烟を放ち火を放ち、身を隱して現せず、種種に神通す。婆奴仙人、彼の喜根辟支佛尊の虛空中に於て、種種の神通變化を現ずるを見、見已りて心に歡喜踊躍を生じ、其の體に遍滿して自ら勝ふる能はず、十指掌を合し、彼の辟支佛尊に頂禮して向ひ、既に頂禮し已りて、是の如き願を發す、「願はくは我來世に恒に是の如き辟支聖人、或は此に勝れたるに值ひ、彼の所說の法を、願はくは我聞き已りて悉く通解せしめんを。又願はくは我が身彼の聖人に於て侍者と爲るを得、彼の聖を供養せんを。又願はくは來世に諸の神通を得、所有の威力、皆此の佛の如くならんを。若し來りて我に義を問ふ有らば、我悉く解を爲し、彼をして歡喜せしめんを。又願はくは生生世世の中、惡道に在らざらんを」と」。

爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、「汝等比丘、若しは心に疑ふ有らん。彼の時に於て、婆奴王子が、七日內に彼の辟支佛尊を供養し、教法を受けたるは、異見を作す莫かれ、此卽ち阿難比丘これ

【四】「以是定故」は、二本に「以是之故」に作る。斯く定まつて居るからと解する時は、定にても然るべし。

なり。彼の時、婆奴王子、歡喜心を以て喜根辟支佛を供養せるが故に、彼の業報を以て、今釋種の家に生るるを得たるなり。而して彼の邊に於て、是の如き願を乞へり、「願はくは我生生世世の中、惡道に墮せざらんを」と。彼の業報を以て、所生の處、曾て惡道の中に墮せず、唯、人天に生れ、流轉往反して大快樂を受けたり。而して彼の時、復是の願を作せり、「願はくは我來世に、是の如き教師聖人、或は此に勝れたるに値遇し、彼の所說の法を願はくは我一たび聞きて、卽ち知解するを得んを」と。是の業報を以て、今、我是の如き教師に値ふを得、又我が邊に於て出家するを得、具足戒を受け、諸の聖法を得たるなり。其れ、彼の時に於て是の如き願を乞へり、「願はくは我來世に、若し當に是の如き教師に値遇せば、我彼の邊に於て侍者と作るを得、彼の聖を供養すべし」と。彼の業報に藉りて、今我が邊に於て侍者と作るを得、我を供養するなり。其れ、彼の時又是の願を乞へり、「我、來世に大神通を得、大威力を得んを」と。彼の業報に藉りて、今是の如き大聖を成ずるを得、大威力を得たるなり。其れ、彼の時又是の願を乞ひぬ、「若し人有り、來りて疑ふ所を問はば、我悉く彼の爲めに分別解說して、心をして歡喜せしめんを』と。彼の業報に藉りて、今日阿難は、人有り、來りて心中に疑ふ所を問へば、皆悉く爲に解して、心をして歡喜せしむるなり』。

爾の時佛、復諸比丘に告げて、是の如き言を作したまふ『汝諸比丘、我念ふに、往昔久遠の時、波羅㮈城に、其の城に一大富長者有り。名けて僧薩陀那[五](Saṃsthāna?)(〔隋〕に王安と言ふ。)といふ。其の彼の長者、大富饒財にして、多く生業有り、猶ほ毘沙門天王の如くにして異る無し。家中に、日別に恒に五百の辟支佛有り、其の家に來り向ひて食す。

其の時、一辟支佛有り、所持の鉢は、下底尖小にて、牛の乳の形の如し。其の鉢の安ずる所、或は草上に在るも、或は籠箔上なるも、隨ひて卽ち傾倒して、安住するを得ず。

彼の時長者僧薩陀那に一女子有り、喜ぶべく端正にして、女相具足す。其の女、彼の辟支佛の鉢

【五】僧薩陀那。宋元明は僧薩他那とし、正安と譯せり。

の傾倒して住せざるを見、即ち自ら釧を脱して、辟支佛に奉じ、之に白して言はく、「唯願はくは大仙、此の釧を取り、用つて其の鉢下に安ぜよ」。爾の時彼の仙、憐愍の爲の故に、即ち此の釧を取り用つて其の鉢を安ず。而して彼の鉢盂、遂に傾動せず。時に彼の女、既に是の鉢の更に傾動せず、釧上に安住するを見、歡喜踊躍、其の體に遍滿して自ら勝ふる能はず。心に是の願を發す、「此の仙人の鉢の、釧上に安じて傾むかず倒れざるが如く、我來世に聞く所も是の如く、若しは世間事も、出世間事も、悉く憶持せしめんを」と』。

爾の時佛、諸比丘に告げて言はく、『汝等比丘、若しは心に疑ふ有らん。彼の時の長者の家の女を今誰と爲すとならば、異見を作す莫かれ、此即ち阿難比丘これなり。彼の時、歡喜心を以て自ら手釧を脱し、以て尊者辟支仙人に奉じて、鉢器を安置し、因りて是の願――「此の仙人の、鉢を以て釧に安じて、傾倒せさるが如く、[六]故に、願はくは我來世に若し所聞有らば、若しは世間事も、出世間事も、悉く皆憶持して、永く忘失せざらんを」――を發せるに由り、彼の業緣に由りて、今聞ける所の事、悉く遺忘せざるなり』。

[七]長老阿難比丘、又時に日の東方に在るや、衣を著け鉢を持し、往きて舍婆提城(Śrāvastī)に入りて乞食せんとし、彼の祇樹給孤獨園を去り、猶ほ未だ舍婆提城に至らさる、其の中間に於て一大樹有り、尸奢波(Siṃśapā)と名く。其の樹陰の下に、多く一切の諸婆羅門有りて止息す。其の下の諸婆羅門、遙に阿難の、來りて邊に至らんと欲するを見、各相告げて言はく、『汝輩、當に知るべし。此はこれ沙門瞿曇の弟子、諸の聰明、多聞の中に於て、最第一者なり』。是の語を作し已りて、阿難便ち至るや、白して言はく、『仁者、今請ふ、此の尸奢波樹を觀よ。合して幾葉有りや』。爾の時阿難、其の樹を觀已りて、彼に報じて言はく、『東枝には、合して若干百葉・若干千葉有り』。是の如く、南枝・西枝・北枝に、皆、合して若干百葉・若干千葉有りと言ひ、是の語を作し已りて、遂に即ち捨て

【六】故の字は竄入か。

【七】此の逸事、他に傳はらず。

去る。

爾の時彼諸婆羅門輩、阿難の去りて後、百數葉を取りて、一邊に隱藏し、阿難の廻り已るや、諸婆羅門、是に於て復問ふ、『仁者阿難、汝復來る。乞ふ更に此の尸奢波樹を觀よ。幾多の葉有りや』。爾の時阿難、仰いで樹を觀已りて、卽ち是の如く婆羅門等の、摘み藏せる所の葉の、若干百數なるを知り、便卽ち彼の婆羅門に告げて言はく、『東枝に合して若干百葉・若干千葉有り』。是の如く、南枝・西枝・北枝にも、亦合して若干百葉・若干千葉有りと言ひ、是の語を作し已りて、便卽ち過ぎ去る。爾の時彼等婆羅門輩、希有心・未曾有心を生じ、各相謂ひて言はく、『此の沙門は、甚大聰明にして、大智慧有り』と。諸の婆羅門、此の因緣を以て心に正信を得、正信を得已りて、其後、久しからずして、悉く各出家して、羅漢果を成じぬ。

八 爾の時、復、長老分那婆素(Punarvasu)(〔隋〕に井宿といふ。)、長老宮毘羅(Kimbila)(〔隋〕に蛟龍と言ふ。)、長老難提迦(Nandika)等、是の如き三人有り。唯其の出家せるを知り得るのみ。由緒知られず。所生の因緣の事も、亦知られず。彼、往昔の時、何の業を作せるかも知られず。

或問うて曰ふ、『當に何が此の經を名くべき』。答へて曰はく、『摩訶僧祇師(Mahāsaṅgika)は、名けて大事(Mahāvastu)と爲し、薩婆多師(Sarvāstivādin)は、此の經を名けて大莊嚴(Mahāvyūha?又は Lalitavistara?)と爲し、迦葉惟師(Kāśyapiya)は、名けて佛生因緣(Jātaka-nidāna?)と爲し、曇無德師(Dharmagupta)は、名けて釋迦牟尼佛本行(Śākyamunir-(pūrva)-carita?)と名け、尼沙塞師(Mahīśāsaka)は、名けて毘尼藏根本(Vinayapiṭaka-mūla?)と爲す』。

佛本行集經(終)

布薩 378
富伽羅 446
富樓那の出家因緣 160
福田 405
佛と淨飯王出家後最初の對面 378
佛と毒龍 217

—ヘ—

嫉妍 20
法眼淨 142
法雨林所住の五百老仙 263

—ホ—

梵天來問 224

—マ—

摩伽陀の諸人 267
摩竭 31
摩呼荼迦 484
摩尼婁陀 488
摩尼婁陀兄弟の生立 465
摩尼婁陀の提婆唎迦 471
魔王佛を誘惑せんとす 198
魔王波旬 15
曼荼羅華 24

—ム—

無爲 77
無遮會 27,46
無情 24

—モ—

目犍連の俗姓 319
目犍連の本事 333
門師婆羅門の天下周遊 283

—ヤ—

耶輸陀 139
耶輸陀の本生 154
夜摩天來問 223

—ヨ—

欲心 59

—ラ—

羅睺羅在胎六年にして生る 365
羅睺羅の本生 421
羅睺羅は佛の眞子なりや否や 424
羅睺羅佛に遺產を請ひて遂ふ 429
羅睺羅の出家年齡の五師の異說 434

—リ—

龍王 171

—ル—

流離 117

—ロ—

漏 60
六群比丘 448
六種震動 122
六十四種巧 22
六通 299

—本緣部三索引終—

舍利弗の愛女本事 332
舍利弗の俗姓 318
娑毘耶誕生 186
娑毘耶の出家因緣 183
娑毘耶の二十問 192
闍維 128
首陀 274
須護物心 200
須陀洹 207
須彌 69
受記論 160
受供養の制規 250
受食受顧法 200
樹神 132
習氣 407
修伽陀 101
修多、祇夜 398
襲 48
鍬鐝 131
十一切處行 298
十法門 275
十力 89
宿命 93
純陀私濱羅 108
諸國土朝庭 154
招提僧 276
燒火想 348
稱說 79
聲聞乘 207
淨飯王佛を迎ふ 370
淨飯王諸釋に出家をすすむ 422
淨飯王出家を請ふ 442
心 73
身業淨 257
眞の沙門、婆羅門の義 199
親舊 72
塵勞 89

—ス—

水中魚衣綠色生 258

—セ—

旌旆 28
刹利 274
說法者の資格とその選擇に關する制規 349
說法所の制規 350
說法に關する諸規定を集む 347
諸法の手段の制規 351
旃陀羅 274
旃陀羅村 108
船師を度す 205

—ソ—

酥 22
僧薩陀那 502

—タ—

他化自在天子の來問 224
多聞第一 497
多羅樹 34
大迦葉の父母 282
大迦葉の得果 297
大迦葉の常行せる十二頭陀 303
大迦葉の妻の出家 308
大迦葉の入滅 307
大水 171
第九神變 224
提頭賴吒天王 86
提婆達多 460
提婆々羅門の歸佛 208
提婆婆羅門の本事 212
醍醐 22
檀 102
檀度 23
檀那 50

—チ—

知人 254
地獄 97
竹林園奉獻の二說 278

—ツ—

塗摩 274
頭陀 301
頭髮 17

—テ—

剃髮師出家を欲す 474
天帝釋童形に化す 206
恬然 39
諂曲 97
纏蓋 54

—ト—

兜率天來問 223
獨自遊行の傳導訓 198
道跡 142

—ナ—

那羅陀童子 178
那羅陀の俗姓 163
那羅陀龍所に趣く 169
難陀の本生 456
難陀の出家 442
難陀の美衣化粧 444
難陀女欲の故に梵行精進す 453
七日七夜時不及 274

—ニ—

二調牛 83
尼乾陀論 160
尼沙塞師說 277
耳璫 69

—ネ—

佞人 41

—ハ—

婆伽婆 64,378
婆私師吒 70
婆提唎迦の本生 482
婆羅跌帝 266
婆羅門 274
八關齋戒 379
八解脫行、八勝處行 298
八齋戒 259
八勝所 348
八萬四千生 254
八萬四千生の輪廻期間 256
跋陀女の本事 311
般遮于瑟 50

—ヒ—

非時 441
非時の花果には光麗なし 372
非非想天 105
毘舍 274
毘舍門天天王 86
頻頭王中途進む能はず 267
毘留勒叉天王 86
貧富の差別を見ず 180
頻婆羅果 15
頻頭娑羅 111

—フ—

不空然 76
不用處 106
布施 118

索　引

（數字は通頁を表はす）

—ア—

阿育大王の父 265
阿修羅 102
阿那婆那(數息觀) 348
阿難と提婆達多 463
阿難の本生と逸事 497
阿難佛の侍者となりしこと 497
阿鼻 25
阿羅耶 100
阿羅邏伽羅摩 106
阿蘭若 24
愛結 67
愛別離苦 115
菴婆・多々 289

—イ—

伊迦分陀利園 452
伊羅鉢龍王 165,173
伊羅鉢龍王の本生 176
意所幻化の身 436
意受 257
一生補處 282

—ウ—

有 98
有識 24
優陀夷と車匿の出家 371
優婆伽摩 108
優婆塞 79
優婆低沙の出家 322
優鉢羅 23
優婆離波多 462
雲種姓の六十人を度す 203

—エ—

嬰兒・茅草 264
胭指 15

—オ—

怨憎會苦 119

—カ—

迦葉の出家 294
迦葉夫婦 292
迦蘭陀 278
迦羅頻伽鳥 16
呵々 34

我 125
界入 208
開遮 295
客作 18
客作の人 404
覺觀 297
覺生死窮 193
學・無學 20
甘露正眞道 118
含識 102

—キ—

記別 213
箕 117
歸依 30
麾纛 28
邪羅種 103
佉吒傍伽 34
竟願 24
敎團の成立に伴ふ諸作法傳導 197
行行 188
緊陀 21
緊陀羅女 16

—ク—

九種の不淨法 348
功德林 24
拘離多の出家 323
俱命鳥 478
愚癡人 254
空出家 257
空施佛 279

—ケ—

化樂天來問 223
夏 115,150
契頭 32
鷄尸馬王本事 335
賢劫 116
杴(すき) 131
麴(むぎわら) 42

—コ—

五戒 79
五種心 54
五十朋友 148
護世 25
黑分・白分 347
乞食法 199
金輪位 27
禁戒 429

—サ—

啝鞞婆論 160
祭會を見て厭離心を起す 320
三有 25
三迦葉 214
三歸 93
三歸依に依る受戒規定 197
三自歸依 79
三種韋陀 160
三聚 118
三十三天 81
三乘 118
三脫門 118
三轉十二種相 120
三白 142
三摩耶 118
山王 102
糙頭 72

—シ—

尸棄佛本生の地 361
尸婆馱 34
四威儀 453
四聖諦 117
四禪 297
四天王佛に來問す 222
四等 212
四無色定 298
四無量心 297
師子吼 97
指大地 47
事火婆羅門迦葉三兄弟 214
慈童女の本生 353
七覺支 399
七種財寶 487
七道分 68

昭和九年三月十五日印刷
昭和九年三月二十日發行

不許複製

國譯一切經 本緣部三

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者 渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園七號地十番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話 芝 二一一六番
三〇四〇番

製本所　兩角製本所

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03148 4579